第５次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物

The 5th Red Databook Birds: Threatened wildlife of Japan

鳥類



環境省 編

令和８（2026）年３月

特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

表紙の写真：チュウヒ（左上）、ヘラシギ（右上）、オガサワラヒメミズナギドリ（左下）、
カシラダカ（右下）

第５次レッドデータブック全体を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：環境省（編），2026．第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　鳥類．環境省，東京．911pp.

Citation: Ministry of the Environment, Japan (ed.). 2026. *The 5th Red Databook Birds: Threatened wildlife of Japan*. Ministry of the Environment, Japan, Tokyo. 911pp.

はじめに

私たちが生きる現代は「第６の大量絶滅時代」ともいわれ、過去５回発生した大絶滅より種の絶滅速度は速く、その主な原因は人間活動による影響と考えられています。2019 年に生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学-政策プラットフォーム（IPBES）により公表された「生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価報告書」によると、世界の陸地の約 75%は著しく改変され、海洋の 66%は複数の人為的な影響下にあり、1700 年以降湿地の 85%以上が消失するなど、人類史上かつてない速度で地球全体の自然が変化していると報告されています。また、過去 50 年間の地球上の種の絶滅は、過去 1,000 万年平均の少なくとも数十倍、あるいは数百倍の速度で進んでおり、適切な対策を講じなければ、今後更に加速すると指摘されています。

2019 年の国連総会においては、世界中の生態系の劣化を予防し、食い止め、反転させるための努力を支援し、拡大させるために、2030 年までに陸と海の 30%以上を保護・保全する「30by30 目標」が提唱されました。30by30 目標の達成に当たっては、自然保護を目的とした国立公園等の保護地域に加えて、それ以外の場所で生物多様性の保全に資する地域として OECM（Other Effective area-based Conservation Measures）の役割も重視されました。この OECM は、持続可能な生産活動の場を含め、より広範囲における生物多様性保全や生態系回復の動きを後押しできる可能性を有するものであり、我が国においても、民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている里地里山、企業緑地、社寺林などの区域を自然共生サイトとして認定する制度が始まりました。

また、2022 年 12 月に採択された新たな生物多様性に関する世界目標である「昆明・モントリオール生物多様性枠組」においては、「人間によって引き起こされる既知の絶滅危惧種の絶滅を阻止し、また絶滅リスクを大幅に減らすための種、特に絶滅危惧種を回復及び保全し、並びに適応能力の維持のために在来種、野生種及び家畜・栽培種の個体群内及び個体群間の遺伝的多様性を維持及び回復するために、生息域内及び生息域外保全や持続可能な管理の実践等を通じて緊急の管理行動を確保するとともに、共存に向けて人間と野生生物との軋轢を最小化するため、人間と野生生物の相互作用を効果的に管理する」ことが位置づけられました。これを受け、令和５年には、自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め、反転させる「2030 年ネイチャーポジティブ」を掲げ、その実現のためのロードマップとして「生物多様性国家戦略 2023-2030」を策定しました。

「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」については、自然とのふれあいや関わりを維持しつつ、積極的な生息地・生育地の保全活動等を推進するため、平成 29 年度に「特定第二種国内希少野生動植物種」制度を創設しました。本制度は、主に里地里山など二次的自然に生息する両生類、淡水魚類、昆虫類などの指定を想定しており、調査研究や環境教育等を目的とした捕獲等の行為については規制されないため、自然との関わりやふれあいを維持しつつ、各地域で積極的な生息・生育地の保全活動等が展開され、対象種の保全が進むことが期待されます。

本書は、平成 24 年に公表した「第４次レッドリスト」並びにその解説版である「レッドデータブック 2014」、平成 29 年に公表した「環境省版海洋生物レッドリスト」及び「第４次レッドリスト」の内容を一部見直して公表した環境省レッドリスト 2020 について、最新の知見を踏まえ改訂を行い、「第５次レッドリスト・レッドデータブック」として編纂したものです。「第５次レッドリスト」では、これまでと異

なり、個別の分類群の事情を超えて統一的な評価を行うために、「レッドリスト作成の手引」を作成し、絶滅のおそれに関する基準をより具体的に規定するとともに、定量的な情報に基づいて評価することを原則とすることで、生息地・生育地の現状をより正確に反映できるよう努めました。また、都道府県レッドリストの作成が充実してきたことに伴う「絶滅のおそれのある地域個体群」（LP）の評価基準の見直しやクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの表示等による利用のしやすさの改善など、さまざまな見直しを行っております。

レッドリスト・レッドデータブックは、捕獲規制等の直接的な法的効力を生むものではありませんが、社会への警鐘として広く社会に情報を提供することにより、さまざまな場面で多様な活用が図られるものです。環境省においても、環境影響評価法に基づく環境アセスメント等、さまざまな環境政策において基礎資料として活用され、近年、規制を伴う政策との関連がますます強化される傾向にあります。特に、「種の保存法」との関係では、レッドリスト掲載種の中で特に保護の優先度の高い種について、生息状況等に関する詳細な調査の実施等によりさらなる情報収集を行い、その結果や生息地・生育地の自然的・社会的状況等に応じて同法に基づく国内希少野生動植物種に指定する等、必要な保護措置を講じていくこととしています。一方で、今回の改訂では、個体数が回復したこと等により絶滅危惧カテゴリーから除外された国内希少野生動植物種もあり、こうした種については、次回の見直しに向けて引き続き生息状況等を注視し、今後の評価結果も踏まえて、必要に応じて指定の解除を検討することとしています。

なお、掲載種の中には、人為による捕獲・採取圧（密猟・盗掘を含む）が主な減少要因となっている種が少なくありませんが、レッドリスト・レッドデータブックに掲載されることにより、かえって商業目的や観賞目的等による乱獲・盗掘等の対象となるおそれが増大することが懸念される種もあります。今回のレッドリスト・レッドデータブックに掲載された種を将来にわたって存続させていくには、国民をはじめ多様な主体が、その種がレッドリスト・レッドデータブックに掲載された意味を真摯に考えることが重要です。環境省としては、こうした観点からの普及啓発・広報や保護措置の充実等の各種対策を一層推進していく考えです。

今回のレッドリスト・レッドデータブック編纂に当たっては、レッドリスト掲載種の選定・評価からレッドデータブックの執筆まで、絶滅のおそれのある野生生物の選定評価検討会及び同分科会の委員各位、その他多くの研究者や専門家の方々から多大なるご指導、ご協力、ご尽力を賜りました。また、種の選定から本書の編纂にわたる過程において、データの整理等は（一財）自然環境研究センターが担当しました。

本書の編纂にご協力いただいた関係各位に対し、ここに改めて厚く感謝申し上げるとともに、本書が今後、行政、事業者、関係団体等、様々な主体による取組に広く活用されることを祈念します。

環境省自然環境局野生生物課
希少種保全推進室

目　次

はじめに i

環境省レッドリスト・レッドデータブック作成の目的と経緯 iv

第５次レッドリスト作成の検討体制 vii

第５次レッドリスト（鳥類）の作成と評価結果 ix

第５次レッドリスト（鳥類） xiv

第５次レッドデータブック（鳥類）の掲載内容 xix

第５次レッドデータブック（鳥類）各種の解説 1

第５次レッドリスト（鳥類）においてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった種（亜種を含む）または地域個体群の解説 885

■学名索引 906

■和名索引 909

環境省レッドリスト・レッドデータブック作成の目的と経緯

レッドリスト・レッドデータブックとは

レッドリストとは、日本に生息又は生育する野生生物について、生物学的観点から個々の種の絶滅の危険度を評価した上で絶滅危惧種を選定し、リストにまとめたものであり、おおむね５年ごとに見直しを行っている。絶滅危惧種の保存施策は、生物学的知見に立脚しつつ、時機を失うことなく適切に実施される必要があり、種の保存法に基づく希少野生動植物種保存基本方針に基づいてレッドリストを作成し、施策の推進に必要な各種の調査研究を積極的に推進することとしている。また併せて、レッドリストに掲載された種について、その生息状況等を取りまとめ編纂したレッドデータブックを作成し、おおむね 10 年ごとに見直しを行っている。

これまでのレッドリストの改訂状況

・初版レッドデータブック（平成３年）

野生生物の保全のためには、絶滅のおそれのある種を的確に把握し、一般への理解を広める必要があることから、環境省では、昭和 61 年度より「緊急に保護を要する動植物の種の選定調査」を行った。その結果を踏まえ、動物については平成３年に環境庁（当時）版レッドデータブック「日本の絶滅のおそれのある野生生物－脊椎動物編」及び「日本の絶滅のおそれのある野生生物－無脊椎動物編」を取りまとめた。

なお、植物については、平成元年に、日本植物分類学会が中心となって維管束植物を対象として編集した「我が国における保護上重要な植物種の現状」が、我が国で最初のレッドデータブックである。

・第２次レッドリスト・レッドデータブック（平成９年～18 年）

平成７年度には、国際自然保護連合（IUCN）で採択された新しいカテゴリー（ランク）の考え方を踏まえ、動物についてはレッドリストの見直し、植物については新たに環境省版としてレッドリストの作成に着手した。動物では、①哺乳類 ②鳥類、③爬虫類、④両生類、⑤汽水･淡水魚類、⑥昆虫類、⑦陸・淡水産貝類、⑧その他無脊椎動物（クモ形類、甲殻類等）、植物では⑨植物I（維管束植物）、⑩植物II（蘚苔類、藻類、地衣類、菌類）の計 10 分類群ごとに、平成９～12 年度にかけて順次レッドリストを公表した。また、このレッドリストを元に、分類群ごとのレッドデータブックを平成 12～18 年度に発行した。

・第３次レッドリスト（平成 18 年・19 年）

平成 14 年度より２回目のレッドリストの見直し作業に着手し、平成 18 年 12 月に鳥類、爬虫類、両生類、その他無脊椎動物の４分類群、平成 19 年８月に残りの哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物I（維管束植物）、植物II（蘚苔類、藻類、地衣類、菌類）の６分類群のレッドリストを公表した（動物については３回目、植物については２回目の公表）。新たにレッドリストに掲載された種や、カテゴリーが変更された種については、現行レッドデータブックの付属説明資料を作成した。

・第４次レッドリスト及びレッドデータブック 2014（平成 24 年～27 年）

平成 20 年度より、上記の見直しに引き続き、３回目のレッドリスト見直し作業に着手した。前回見直し後の生息・生育状況や生息・生育環境の変化等の最新の知見を収集し検討を行ってきた。平成 24 年度に 10 分類群のレッドリストについて見直し作業が終了し、新たな第４次レッドリストを取りまとめ、公表した。

・第４次レッドリストの随時見直し（平成 27 年～令和２年）

第４次レッドリストについては、平成 27 年度から令和２年度まで、生息状況の悪化等によりカテゴリーの再検討が必要な種について、時期を定めず必要に応じて個別に見直しを行った。

平成 27 年に、哺乳類の一部の種及び絶滅のおそれのある地域個体群（ゼニガタアザラシ、カモシカの地域個体群）についてカテゴリー（ランク）を見直したレッドリスト 2015 を公表した。

平成 29 年に、13 分類群の 60 種についてカテゴリーを見直したレッドリスト 2017 を公表した。絶滅危惧種は 38 種増加し、合計 3,634 種となった。また、平成 29 年 10 月には、レッドリスト 2017 において新規に掲載された種（亜種、変種等を含む。）及びカテゴリーが変更された種（合計 60 種）を対象に、レッドデータブックに代わる解説資料として、それらの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2017 補遺資料」を公表した。

平成 30 年に、67 種についてカテゴリーを見直したレッドリスト 2018 を公表した。絶滅危惧種は 41 種増加（44 種追加、３種削除）し、合計 3,675 種となった。また、レッドデータブックに代わる解説資料として、上記 67 種について随時見直しの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2018 補遺資料」を公表した。

平成 31 年に、トキ及びトキウモウダニについてカテゴリーを見直したレッドリスト 2019 を公表した。絶滅危惧種は 1 種増加し、合計 3,676 種となった。また、レッドデータブックに代わる解説資料として、上記２種について随時見直しの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2019 補遺資料」を公表した。

令和２年に、75 種のカテゴリーを見直したレッドリスト 2020 を公表した。絶滅危惧種は 39 種増加し、合計 3,716 種となった。平成 29 年度に公表された海洋生物レッドリストに掲載された種数とあわせると、環境省が絶滅危惧種と評価した種は 3,772 種となった。また、レッドデータブックに代わる解説資料として、上記 75 種について、随時見直しの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2020 補遺資料」を公表した。

・海洋生物レッドリスト（平成 29 年）

平成 23 年に「海洋生物多様性保全戦略」が策定され「海洋生物の希少性等の評価」の推進が位置づけられるなど、海洋の生物に対する関心の高まりを受け、平成 24 年度より海洋生物レッドリスト作成の作業を開始した。魚類、サンゴ類、甲殻類、頭足類、その他無脊椎動物の５分類群のうち、これまで評価を行っていなかった種について、新たにレッドリストを取りまとめ海洋生物レッドリストとして公表した。海洋生物レッドリストでは絶滅危惧種として 56 種が掲載された。なお、水産庁が資源評価を実施している種や小型鯨類などの 94 種は、水産庁が評価した。

・第５次レッドリスト・レッドデータブック（令和７年～）

令和２年度より、従来のレッドリストと海洋生物レッドリストの検討体制を統合した。令和７年３月に、①維管束植物、②蘚苔類、③藻類、④地衣類、⑤菌類の５分類群について、令和８年３月に、⑥鳥類、⑦爬虫類・両生類について第５次レッドリスト・レッドデータブックを公表した。今後、他の分類群についても順次公表することとしている。

第５次レッドリスト作成の検討体制

環境省第５次レッドリストの作成に当たっては、専門家による「絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会」を設置し、その下に分類群毎に分科会を設置して検討を進めることとした。

● 第５次レッドリスト検討体制（敬称略。50 音順。所属は原則として令和７（2025）年度現在。）

［絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会委員］

座　長：	石井 実（～令和７年）	大阪府立大学　名誉教授
		地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所　理事長（故人）
	石井 信夫（令和８年～）	東京女子大学　名誉教授
委　員：	岩崎 敬二	奈良大学文学部地理学科　教授
	大高 明史	弘前大学　名誉教授
	尾崎 清明	山階鳥類研究所　副所長
	柏谷 博之	国立科学博物館　名誉研究員
	角野 康郎	神戸大学　名誉教授
	木村 清志	三重大学　名誉教授
	白山 義久	京都大学　名誉教授
	田中 次郎	東京海洋大学　名誉教授
	深見 裕伸	宮崎大学農学部海洋生物環境学科　教授
	逸見 泰久	熊本大学　名誉教授
	細谷 和海	近畿大学　名誉教授
	細矢 剛	国立科学博物館植物研究部　部長
	松井 正文	京都大学　名誉教授
	矢後 勝也	東京大学総合研究博物館　講師（令和８年～）
	山口 富美夫	広島大学　名誉教授

［分科会］

哺乳類分科会	座長：石井信夫	委員数：５名
鳥類分科会	座長：尾崎清明	委員数：７名
爬虫類・両生類分科会	座長：松井正文	委員数：５名
淡水魚類分科会	座長：細谷和海	委員数：10 名
海水魚類分科会	座長：木村清志	委員数：13 名
サンゴ類分科会	座長：深見裕伸	委員数：５名
昆虫類分科会	座長：石井　実（～令和７年）（故人） 矢後勝也（令和８年～）	委員数：12 名

（令和７年 12 月に逝去された石井実委員を含む）

甲殻類分科会	座長：逸見泰久	委員数：11 名 （令和６年まで 12 名）
軟体動物分科会	座長：岩崎敬二	委員数：10 名 （令和５年まで 11 名）
陸域その他無脊椎動物分科会	座長：大高明史	委員数：６名
海域その他無脊椎動物分科会	座長：白山義久	委員数：10 名
維管束植物分科会	座長：角野康郎	委員数：10 名
蘚苔類分科会	座長：山口富美夫	委員数：５名
藻類分科会	座長：田中次郎	委員数：６名
地衣類分科会	座長：柏谷博之	委員数：５名
菌類分科会	座長：細矢　剛	委員数：５名

第５次レッドリスト（鳥類）の作成と評価結果

第５次レッドリスト（鳥類）について

今回の改訂では、総掲載種が 170 種となり、前回（環境省レッドリスト 2020）より 16 種増加した。カテゴリー別に見ると、絶滅危惧Ⅰ類の CR が１種減り 23 種に、EN が８種増え 39 種に、絶滅危惧Ⅱ類（VU）が３種増え 46 種に、準絶滅危惧（NT）が８種増え 30 種となった。絶滅危惧や準絶滅危惧の種が増加した要因としては、前回の評価からカテゴリーが上がった種があることに加え、今回から新たにレッドリストに掲載された 30 種のうちの多くが、絶滅危惧または準絶滅危惧となっていることが挙げられる。迷鳥として扱うのが妥当などの理由で不掲載となった種は 14 種である。カテゴリーが下がった種もあるものの、全体的には、鳥類の絶滅の恐れは高まったと言わざるを得ない。特に、絶滅危惧Ⅰ類の日本固有種に関しては、日本が将来の種の存続に責任を持つべきで、有効な保護増殖対策に繋げることが重要である。

レッドリストの作成作業は、ちょうど日本鳥学会の「日本鳥類目録」改訂第８版の出版（2024 年）と改訂時期が重なったため、掲載対象とする種・亜種の再選定や学名・和名の更新の必要が生じた。編集の段階で一括して変更する方針としたが、変更漏れの確認など事務局の調整が重要となった。

今回のレッドリストでは、定量評価を本格的に取り入れたという点が第４次レッドリストと大きく異なった。そのための資料収集には担当者が苦労することとなった。全国的な定期定量調査が実施されている海鳥やシギ・チドリ類、その他特に注目されている種に関しては定量評価が可能となった場合もあるが、多くの対象種で評価をするための基礎資料は必ずしも十分とは言えない状況であった。そのような状況のなかで、「全国鳥類繁殖分布調査」（最新は 2016-2021 年）は約 20 年間隔かつ全国規模で実施されてきたもので、特に国内の広域に分布する種の繁殖分布や確認件数の動向を定量的に把握する上で役立った。次回のレッドリストの改訂には、これらの調査を継続するとともに、情報不足種を念頭に置いた積極的な調査や、情報の収集体制の構築が、大きな課題と考えられる。

令和８年３月

鳥類分科会座長 尾崎　清明

［鳥類分科会委員］

座　長：	尾崎　清明	山階鳥類研究所　副所長
委　員：	植田　睦之	バードリサーチ　嘱託研究員
	風間　健太郎	早稲田大学　人間科学学術院　准教授（令和４年度～）
	金井　裕	日本野鳥の会　参与
	玉田　克巳	北海道立総合研究機構　産業技術環境研究本部
		エネルギー・環境・地質研究所　自然環境部　生態系保全グループ　主任主査
	永田　尚志	新潟大学　佐渡自然共生科学センター　フェロー/名誉教授
	新妻　靖章	名城大学　農学部　教授（～令和３年度）
	西海　功	国立科学博物館　動物研究部　研究主幹

協力者一覧（敬称略）

第５次レッドリスト・レッドデータブックは、下記の方々のご協力によって作成されたものです。ご協力いただきました方々のお名前を掲載し、厚く御礼申し上げます。

青木大輔、赤松あかり、東 淳樹、磯 清志、市川 伸、市原晨太郎、井上剛彦、今井菜摘、植田 潤、牛山克巳、浦 達也、雲野 明、遠藤孝一、大迫義人、岡久雄二、奥山正樹、長 雄一、長船裕紀、小田谷嘉弥、笠原里恵、梶田 学、加藤 克、金杉尚紀、川上和人、河村和洋、川路則友、北沢宗大、黒田治男、神山和夫、小高信彦、小西 敢、小林 篤、今野 怜、才木道雄、齋藤武馬、坂梨仁彦、貞國利夫、澤田 明、茂田良光、島田明英、嶋田哲郎、庄子晶子、庄山 守、鈴木静治、関 伸一、先崎理之、髙木昌興、高野茂樹、高橋雅雄、竹中 健、嵩原建二、田尻浩伸、多田英行、田中 忠、出口翔大、手嶋洋子、渡久地豊、富川 徹、富田直樹、鳥飼久裕、内藤和明、中川 元、中田達哉、仲村 昇、中村浩志、中村 豊、中山文仁、西沢文吾、日本クロツラヘラサギネットワーク、長谷部真、花田行博、早矢仕有子、原 星一、原戸鉄二郎、原山法大、榛沢日菜子、伴野俊夫、平岡 考、平野敏明、廣田純平、藤巻裕蔵、益子美由希、松井 晋、松宮裕秋、水田 拓、水村春香、箕輪義隆、武藤幹太、森さやか、守屋年史、山﨑 亨、山本 裕、栁澤紀夫、柳田和美、吉村正則、米川 洋、和賀大地、和田 岳

（１）第５次レッドリスト（鳥類）作成の手順

第５次レッドリスト（鳥類）については、レッドリスト作成の手引の「第一　絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価における基本的事項」及び「第二　各分科会における基本的事項」に従って、評価対象となる種（亜種、変種等を含む、以下同じ）を選定したうえで１種ずつ各対象種の既知情報等を「第三 環境省レッドリストカテゴリーと判定基準」の各基準に当てはめてカテゴリー評価を実施した。その他、レッドリスト作成に係る詳細については、レッドリスト作成の手引を参照のこと。

参考：環境省レッドリストのカテゴリー

カテゴリー		定義と基本概念
絶滅 Extinct **(EX)**		我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅 Extinct in the Wild **(EW)**		飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種
絶滅危惧	**絶滅危惧 IA 類** Critically Endangered **(CR)**	深刻な絶滅の危機に瀕している種 （現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なものであって、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの）
	絶滅危惧 IB 類 Endangered **(EN)**	絶滅の危機に瀕している種 （現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なものであって、IA 類（CR）ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの）
	絶滅危惧 II 類 Vulnerable **(VU)**	絶滅の危険が増大している種 （現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、「絶滅危惧 IA 類（CR）」または「絶滅危惧 IB 類（EN）」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの）
準絶滅危惧 Near Threatened **(NT)**		存続基盤が脆弱な種 （現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリーに移行する要素を有するもの）

情報不足 Data Deficient **(DD)**	カテゴリーを判定するための情報が不足している種 （現時点での絶滅危険度は確定できないが、今後情報が得られれば「絶滅危惧」等になりうるもの）

付属資料

絶滅のおそれのある地域個体群 Threatened Local Population **(LP)**	孤立した地域個体群で、絶滅のおそれが高いもの

出典：環境省レッドリストカテゴリーと判定基準を抜粋して作成

（２）第５次レッドリスト（鳥類）掲載種数

今回の見直しの結果による第５次レッドリスト掲載種のカテゴリー内訳と、レッドリスト 2020 からの各カテゴリーにおける種数の変遷は、以下のとおりである。

表１ 第５次レッドリスト（鳥類）掲載種のカテゴリー内訳

EX	EW	CR	EN	VU	NT	DD	LP	合計
14	0	23	39	46	30	18	0	170

表２ 各カテゴリーにおける種数の変遷（レッドリスト 2020 と第５次レッドリストの比較）

		第５次レッドリストにおける評価									
		EX	EW	CR	EN	VU	NT	DD	LP	不掲載	合計
内訳		14	0	23	39	46	30	18	0	14	184
レッドリスト 2020	EX	14	0	0	0	0	0	0	0	1	15
	EW	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	CR	0	0	15	5	2	0	2	0	0	24
	EN	0	0	3	18	6	0	3	0	1	31
	VU	0	0	2	6	21	7	6	0	1	43
	NT	0	0	0	3	3	11	2	0	3	22
	DD	0	0	3	3	2	1	2	0	6	17
	LP	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
新規追加		0	0	0	4	12	11	3	0	0	30

（３）第５次レッドリスト（鳥類）から明らかになった点

第５次レッドリストには、ヤマセミ、カシラダカなど 30 種の鳥類が新たに掲載された。一般に普通種と考えられていたキンクロハジロ、ウミネコ、ゴイサギなども、近年の急激な減少にともない絶滅危惧Ⅱ類（VU）として掲載されている。前回の RL2020 と比較すると、絶滅危惧種（絶滅危惧Ⅰ類（CR,EN）および絶滅危惧Ⅱ類（VU））は、98 種から 108 種に増加した。レッドリスト 2020 で絶滅危惧と評価された種のうち、アマミヤマシギ、ハヤブサ、オオトラツグミなど 7 種が準絶滅危惧（NT）と評価され、キンバト、キンメフクロウ、ヤイロチョウなど 11 種が情報不足（DD）と評価された。一方で、前回 NT と評価された種のうち、ハマシギ、オオセグロカモメ、クロウミツバメ、オリイヤマガラなど 6 種が、また前回 DD と評価された種のうち、シロハラミズナギドリ、ダイトウウグイス、オオムシクイなど 8 種が、それぞれ絶滅危惧にカテゴリーが変更になった。

また、RL2020 で絶滅（EX）と評価された種のうち、ウスアカヒゲが最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でないという理由でレッドリスト不掲載となった。その他、マガン、ミサゴ、シラコバト、クロトキなど 11 種が、現時点での絶滅危険度は小さい、迷鳥あるいは移入種として取り扱うことが妥当と考えられるため評価対象としないという理由でレッドリスト不掲載となった。さらに、第５次レッドリストにおいて絶滅のおそれのある地域個体群（LP）の掲載基準が変更となったことにより、東北地方

以北のシノリガモ繁殖個体群と青森県のカンムリカイツブリ繁殖個体群が、LP の基準を満たさなくなり、レッドリスト不掲載となった。

第５次レッドリスト（鳥類）

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名*	学名
BI0001	絶滅（EX）	カンムリツクシガモ	*Tadorna cristata*
BI0002	絶滅（EX）	オガサワラカラスバト	*Columba versicolor*
BI0003	絶滅（EX）	リュウキュウカラスバト	*Columba jouyi*
BI0004	絶滅（EX）	マミジロクイナ	*Poliolimnas cinereus brevipes*
BI0005	絶滅（EX）	ハシブトゴイ	*Nycticorax caledonicus crassirostris*
BI0006	絶滅（EX）	ダイトウノスリ	*Buteo japonicus oshiroi*
BI0007	絶滅（EX）	ミヤコショウビン	*Todiramphus miyakoensis*
BI0008	絶滅（EX）	キタタキ	*Dryocopus javensis richardsi*
BI0009	絶滅（EX）	シマハヤブサ	*Falco peregrinus furuitii*
BI0010	絶滅（EX）	ダイトウヤマガラ	*Sittiparus varius orii*
BI0011	絶滅（EX）	ムコジマメグロ	*Apalopteron familiare familiare*
BI0012	絶滅（EX）	ダイトウミソサザイ	*Troglodytes troglodytes orii*
BI0013	絶滅（EX）	オガサワラガビチョウ	*Cichlopasser terrestris*
BI0014	絶滅（EX）	オガサワラマシコ	*Carpodacus ferreorostris*
BI0015	絶滅危惧IA 類（CR）	サカツラガン	*Anser cygnoid*
BI0016	絶滅危惧IA 類（CR）	アカハジロ	*Aythya baeri*
BI0017	絶滅危惧IA 類（CR）	アカガシラカラスバト	*Columba janthina nitens*
BI0018	絶滅危惧IA 類（CR）	ヤンバルクイナ	*Hypotaenidia okinawae*
BI0019	絶滅危惧IA 類（CR）	ヘラシギ	*Calidris pygmaea*
BI0020	絶滅危惧IA 類（CR）	アカアシシギ	*Tringa totanus ussuriensis*
BI0021	絶滅危惧IA 類（CR）	カラフトアオアシシギ	*Tringa guttifer*
BI0022	絶滅危惧IA 類（CR）	ウミガラス	*Uria aalge inornata*
BI0023	絶滅危惧IA 類（CR）	ウミスズメ	*Synthliboramphus antiquus antiquus*
BI0024	絶滅危惧IA 類（CR）	エトピリカ	*Fratercula cirrhata*
BI0025	絶滅危惧IA 類（CR）	クロコシジロウミツバメ	*Hydrobates castro*
BI0026	絶滅危惧IA 類（CR）	オガサワラヒメミズナギドリ	*Puffinus bryani*
BI0027	絶滅危惧IA 類（CR）	オガサワラミズナギドリ	*Puffinus bannermani*
BI0028	絶滅危惧IA 類（CR）	チシマウガラス	*Urile urile*
BI0029	絶滅危惧IA 類（CR）	サンカノゴイ	*Botaurus stellaris stellaris*
BI0030	絶滅危惧IA 類（CR）	オオヨシゴイ	*Ixobrychus eurhythmus*
BI0031	絶滅危惧IA 類（CR）	カンムリワシ	*Spilornis cheela perplexus*
BI0032	絶滅危惧IA 類（CR）	ダイトウコノハズク	*Otus elegans interpositus*
BI0033	絶滅危惧IA 類（CR）	ワシミミズク	*Bubo bubo borissowi*
BI0034	絶滅危惧IA 類（CR）	アカモズ	*Lanius cristatus superciliosus*

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名*	学名
BI0035	絶滅危惧IA 類（CR）	コトラツグミ	*Zoothera dauma iriomotensis*
BI0036	絶滅危惧IA 類（CR）	オガサワラカワラヒワ	*Chloris kittlitzi*
BI0037	絶滅危惧IA 類（CR）	シマアオジ	*Emberiza aureola ornata*
BI0038	絶滅危惧IB 類（EN）	カリガネ	*Anser erythropus*
BI0039	絶滅危惧IB 類（EN）	ライチョウ	*Lagopus muta japonica*
BI0040	絶滅危惧IB 類（EN）	ヨナグニカラスバト	*Columba janthina stejnegeri*
BI0041	絶滅危惧IB 類（EN）	シマクイナ	*Coturnicops exquisitus*
BI0042	絶滅危惧IB 類（EN）	オオクイナ	*Rallina eurizonoides sepiaria*
BI0043	絶滅危惧IB 類（EN）	コシャクシギ	*Numenius minutus*
BI0044	絶滅危惧IB 類（EN）	ツルシギ	*Tringa erythropus*
BI0045	絶滅危惧IB 類（EN）	オオセグロカモメ	*Larus schistisagus*
BI0046	絶滅危惧IB 類（EN）	オオアジサシ	*Thalasseus bergii cristatus*
BI0047	絶滅危惧IB 類（EN）	コアジサシ	*Sternula albifrons sinensis*
BI0048	絶滅危惧IB 類（EN）	ケイマフリ	*Cepphus carbo*
BI0049	絶滅危惧IB 類（EN）	コアホウドリ	*Phoebastria immutabilis*
BI0050	絶滅危惧IB 類（EN）	コシジロウミツバメ	*Hydrobates leucorhous leucorhous*
BI0051	絶滅危惧IB 類（EN）	オーストンウミツバメ	*Hydrobates tristrami*
BI0052	絶滅危惧IB 類（EN）	コウノトリ	*Ciconia boyciana*
BI0053	絶滅危惧IB 類（EN）	ヒメウ	*Urile pelagicus pelagicus*
BI0054	絶滅危惧IB 類（EN）	トキ	*Nipponia nippon*
BI0055	絶滅危惧IB 類（EN）	ヘラサギ	*Platalea leucorodia leucorodia*
BI0056	絶滅危惧IB 類（EN）	アマサギ	*Bubulcus ibis coromandus*
BI0057	絶滅危惧IB 類（EN）	クマタカ	*Nisaetus nipalensis orientalis*
BI0058	絶滅危惧IB 類（EN）	イヌワシ	*Aquila chrysaetos japonica*
BI0059	絶滅危惧IB 類（EN）	チュウヒ	*Circus spilonotus*
BI0060	絶滅危惧IB 類（EN）	オガサワラノスリ	*Buteo japonicus toyoshimai*
BI0061	絶滅危惧IB 類（EN）	シマフクロウ	*Ketupa blakistoni blakistoni*
BI0062	絶滅危惧IB 類（EN）	ブッポウソウ	*Eurystomus orientalis cyanocollis*
BI0063	絶滅危惧IB 類（EN）	オリイコゲラ	*Yungipicus kizuki orii*
BI0064	絶滅危惧IB 類（EN）	ノグチゲラ	*Dendrocopos noguchii*
BI0065	絶滅危惧IB 類（EN）	チゴモズ	*Lanius tigrinus*
BI0066	絶滅危惧IB 類（EN）	ナミエヤマガラ	*Sittiparus varius namiyei*
BI0067	絶滅危惧IB 類（EN）	オーストンヤマガラ	*Sittiparus varius owstoni*
BI0068	絶滅危惧IB 類（EN）	オリイヤマガラ	*Sittiparus olivaceus*
BI0069	絶滅危惧IB 類（EN）	ダイトウウグイス	*Horornis diphone restrictus*
BI0070	絶滅危惧IB 類（EN）	イイジマムシクイ	*Phylloscopus ijimae*

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名*	学名
BI0071	絶滅危惧IB 類（EN）	オオムシクイ	*Phylloscopus examinandus*
BI0072	絶滅危惧IB 類（EN）	オオセッカ	*Locustella pryeri pryeri*
BI0073	絶滅危惧IB 類（EN）	モスケミソサザイ	*Troglodytes troglodytes mosukei*
BI0074	絶滅危惧IB 類（EN）	アカコッコ	*Turdus celaenops*
BI0075	絶滅危惧IB 類（EN）	カシラダカ	*Emberiza rustica latifascia*
BI0076	絶滅危惧IB 類（EN）	コジュリン	*Emberiza yessoensis yessoensis*
BI0077	絶滅危惧II類（VU）	コクガン	*Branta bernicla nigricans*
BI0078	絶滅危惧II類（VU）	シジュウカラガン	*Branta hutchinsii leucopareia*
BI0079	絶滅危惧II類（VU）	ハクガン	*Anser caerulescens caerulescens*
BI0080	絶滅危惧II類（VU）	キンクロハジロ	*Aythya fuligula*
BI0081	絶滅危惧II類（VU）	ウズラ	*Coturnix japonica*
BI0082	絶滅危惧II類（VU）	ハリオアマツバメ	*Hirundapus caudacutus caudacutus*
BI0083	絶滅危惧II類（VU）	アマツバメ	*Apus pacificus kurodae*
BI0084	絶滅危惧II類（VU）	バン	*Gallinula chloropus chloropus*
BI0085	絶滅危惧II類（VU）	マナヅル	*Antigone vipio*
BI0086	絶滅危惧II類（VU）	ナベヅル	*Grus monacha*
BI0087	絶滅危惧II類（VU）	ムナグロ	*Pluvialis fulva*
BI0088	絶滅危惧II類（VU）	シロチドリ	*Charadrius alexandrinus nihonensis*
BI0089	絶滅危惧II類（VU）	ホウロクシギ	*Numenius madagascariensis*
BI0090	絶滅危惧II類（VU）	オオソリハシシギ	*Limosa lapponica baueri*
BI0091	絶滅危惧II類（VU）	ハマシギ	*Calidris alpina*
BI0092	絶滅危惧II類（VU）	タカブシギ	*Tringa glareola*
BI0093	絶滅危惧II類（VU）	ツバメチドリ	*Glareola maldivarum*
BI0094	絶滅危惧II類（VU）	ズグロカモメ	*Saundersilarus saundersi*
BI0095	絶滅危惧II類（VU）	ウミネコ	*Larus crassirostris*
BI0096	絶滅危惧II類（VU）	ベニアジサシ	*Sterna dougallii bangsi*
BI0097	絶滅危惧II類（VU）	エリグロアジサシ	*Sterna sumatrana sumatrana*
BI0098	絶滅危惧II類（VU）	カンムリウミスズメ	*Synthliboramphus wumizusume*
BI0099	絶滅危惧II類（VU）	アカオネッタイチョウ	*Phaethon rubricauda melanorhynchos*
BI0100	絶滅危惧II類（VU）	アホウドリ	*Phoebastria albatrus*
BI0101	絶滅危惧II類（VU）	ヒメクロウミツバメ	*Hydrobates monorhis*
BI0102	絶滅危惧II類（VU）	クロウミツバメ	*Hydrobates matsudairae*
BI0103	絶滅危惧II類（VU）	シロハラミズナギドリ	*Pterodroma hypoleuca*
BI0104	絶滅危惧II類（VU）	アオツラカツオドリ	*Sula dactylatra personata*
BI0105	絶滅危惧II類（VU）	アカアシカツオドリ	*Sula sula rubripes*
BI0106	絶滅危惧II類（VU）	クロツラヘラサギ	*Platalea minor*

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名*	学名
BI0107	絶滅危惧II類（VU）	ズグロミゾゴイ	*Gorsachius melanolophus melanolophus*
BI0108	絶滅危惧II類（VU）	ゴイサギ	*Nycticorax nycticorax nycticorax*
BI0109	絶滅危惧II類（VU）	ササゴイ	*Butorides striata amurensis*
BI0110	絶滅危惧II類（VU）	コサギ	*Egretta garzetta garzetta*
BI0111	絶滅危惧II類（VU）	オオワシ	*Haliaeetus pelagicus*
BI0112	絶滅危惧II類（VU）	オジロワシ	*Haliaeetus albicilla albicilla*
BI0113	絶滅危惧II類（VU）	サシバ	*Butastur indicus*
BI0114	絶滅危惧II類（VU）	ヤマセミ	*Megaceryle lugubris lugubris*
BI0115	絶滅危惧II類（VU）	オーストンオオアカゲラ	*Dendrocopos leucotos owstoni*
BI0116	絶滅危惧II類（VU）	ハシブトヒヨドリ	*Hypsipetes amaurotis magnirostris*
BI0117	絶滅危惧II類（VU）	ウチヤマセンニュウ	*Locustella pleskei*
BI0118	絶滅危惧II類（VU）	マキノセンニュウ	*Locustella lanceolata hendersonii*
BI0119	絶滅危惧II類（VU）	ハハジマメグロ	*Apalopteron familiare hahasima*
BI0120	絶滅危惧II類（VU）	タネコマドリ	*Larvivora akahige tanensis*
BI0121	絶滅危惧II類（VU）	ホントウアカヒゲ	*Larvivora namiyei*
BI0122	絶滅危惧II類（VU）	リュウキュウキビタキ	*Ficedula owstoni*
BI0123	準絶滅危惧（NT）	オオヒシクイ	*Anser fabalis middendorffii*
BI0124	準絶滅危惧（NT）	ヒシクイ	*Anser fabalis serrirostris*
BI0125	準絶滅危惧（NT）	ホシハジロ	*Aythya ferina*
BI0126	準絶滅危惧（NT）	スズガモ	*Aythya marila nearctica*
BI0127	準絶滅危惧（NT）	エゾライチョウ	*Tetrastes bonasia vicinitas*
BI0128	準絶滅危惧（NT）	アカヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii soemmerringii*
BI0129	準絶滅危惧（NT）	コシジロヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii ijimae*
BI0130	準絶滅危惧（NT）	ヨタカ	*Caprimulgus jotaka jotaka*
BI0131	準絶滅危惧（NT）	キタアマツバメ	*Apus pacificus pacificus*
BI0132	準絶滅危惧（NT）	カラスバト	*Columba janthina janthina*
BI0133	準絶滅危惧（NT）	ヒクイナ	*Zapornia fusca erythrothorax*
BI0134	準絶滅危惧（NT）	タンチョウ	*Grus japonensis*
BI0135	準絶滅危惧（NT）	キョウジョシギ	*Arenaria interpres interpres*
BI0136	準絶滅危惧（NT）	トウネン	*Calidris ruficollis*
BI0137	準絶滅危惧（NT）	アマミヤマシギ	*Scolopax mira*
BI0138	準絶滅危惧（NT）	オオジシギ	*Gallinago hardwickii*
BI0139	準絶滅危惧（NT）	クロアシアホウドリ	*Phoebastria nigripes*
BI0140	準絶滅危惧（NT）	ミゾゴイ	*Gorsachius goisagi*
BI0141	準絶滅危惧（NT）	チュウサギ	*Ardea intermedia intermedia*
BI0142	準絶滅危惧（NT）	ハイタカ	*Accipiter nisus nisosimilis*

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名*	学名
BI0143	準絶滅危惧(NT)	オオタカ	*Accipiter gentilis fujiyamae*
BI0144	準絶滅危惧(NT)	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*
BI0145	準絶滅危惧(NT)	ハヤブサ	*Falco peregrinus japonensis*
BI0146	準絶滅危惧(NT)	オナガ	*Cyanopica cyanus japonica*
BI0147	準絶滅危惧(NT)	ダイトウヒヨドリ	*Hypsipetes amaurotis borodinonis*
BI0148	準絶滅危惧(NT)	コヨシキリ	*Acrocephalus bistrigiceps*
BI0149	準絶滅危惧(NT)	ダイトウメジロ	*Zosterops japonicus daitoensis*
BI0150	準絶滅危惧(NT)	オオトラツグミ	*Zoothera dauma major*
BI0151	準絶滅危惧(NT)	ビンズイ	*Anthus hodgsoni hodgsoni*
BI0152	準絶滅危惧(NT)	ノジコ	*Emberiza sulphurata*
BI0153	情報不足(DD)	ツクシガモ	*Tadorna tadorna*
BI0154	情報不足(DD)	トモエガモ	*Sibirionetta formosa*
BI0155	情報不足(DD)	キンバト	*Chalcophaps indica yamashinai*
BI0156	情報不足(DD)	ヒメクイナ	*Zapornia pusilla pusilla*
BI0157	情報不足(DD)	ダイトウカイツブリ	*Tachybaptus ruficollis kunikyonis*
BI0158	情報不足(DD)	セイタカシギ	*Himantopus himantopus*
BI0159	情報不足(DD)	ケリ	*Vanellus cinereus*
BI0160	情報不足(DD)	タマシギ	*Rostratula benghalensis*
BI0161	情報不足(DD)	マダラウミスズメ	*Brachyramphus perdix*
BI0162	情報不足(DD)	ヨシゴイ	*Ixobrychus sinensis sinensis*
BI0163	情報不足(DD)	ハチクマ	*Pernis ptilorhynchus orientalis*
BI0164	情報不足(DD)	リュウキュウツミ	*Accipiter gularis iwasakii*
BI0165	情報不足(DD)	キンメフクロウ	*Aegolius funereus sibiricus*
BI0166	情報不足(DD)	リュウキュウオオコノハズク	*Otus semitorques pryeri*
BI0167	情報不足(DD)	ミユビゲラ	*Picoides tridactylus inouyei*
BI0168	情報不足(DD)	ヤイロチョウ	*Pitta nympha*
BI0169	情報不足(DD)	アカヒゲ	*Larvivora komadori*
BI0170	情報不足(DD)	ギンザンマシコ	*Pinicola enucleator sakhalinensis*

* 種または亜種を評価の単位としたが、分類学上亜種まで細分される場合は、原則として亜種を評価の単位とした。

第５次レッドデータブック（鳥類）の掲載内容

本書では、上記のレッドリストに掲載された種の概要を示すため、種ごとに以下の項目と内容を記載した。

（１）判定対象種情報

１）評価分科会名

判定対象種を評価した分科会名を記載した。

２）高次分類群名

目名、科名を記載した。

３）和名

標準和名を記載した。

４）学名等

学名、記載者名を記載した。

５）日本における固有性

日本にのみ生息すると考えられる場合、「日本固有」と記載した。

（２）カテゴリー判定結果

１）カテゴリー区分

カテゴリーの記号と、名称として、「EX（絶滅）」、「EW（野生絶滅）」、「CR（絶滅危惧IA 類）」、「EN（絶滅危惧IB 類）」、「VU（絶滅危惧II類）」、「NT（準絶滅危惧）」、「DD（情報不足）」の、いずれかの区分を記載した。

２）カテゴリー判定基準

「レッドリスト作成の手引き」で定められた環境省レッドリストにおけるカテゴリー判定基準に基づき、各掲載種が具体的にどの判定基準によって評価されたのかを明示するとともに、その判断理由を記載した。

（３）概要

種の基礎的情報、我が国における現在の生息状況、存在を脅かす要因、保護対策の現状等、特にその種が現在おかれている状況を要約して記載した。

（４）協力者

レッドデータブックの執筆に際して、情報提供等の協力者がいる場合は、氏名、所属等を記載した。

（５）基礎情報

１）形態

その種の大きさや色など、基本的事項を簡潔に記載した。近縁種がある場合はその識別点も含めた。

２）生活史

出現期や生息環境選択性、生息に必要な条件などについて判明している事項を記載した。

３）生息環境

対象種の一般的な生息環境について簡潔に記載した。ただし、生息環境の現状や悪化状況などに関しては、本項目ではなく「生息地の現況」に記載した。また別表１の「生息・生育環境区分」に該当するカテゴリー及び別表２の「国土地域区分」の該当するカテゴリーを記載した。

４）分布域

個体群が縮小する以前の健全と考えられる時代の分布域を、分かる範囲で記載した。近縁種がある場合は分布域の違いを記述した。

また、島嶼群の名称は原則として自然環境保全基礎調査報告書の分布図に示されている表記を使用し、南西諸島地域では、大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島、尖閣諸島、大東諸島、等とした。琉球列島は、奄美・沖縄・宮古・八重山の各諸島を含むものとした。

（６）掲載種の基礎情報

１）分布域の現況

基本的に国内の分布域について現在の状況を記載した。産地数、過去と比べた現在の分布域の縮小の変遷、具体的な面積や分布域の分断状況等、詳細が分かる場合は、その内容も記載した。なお、現況が分からない場合は不明とした。

２）生息地の現況

基本的に国内の生息地について現在の状況を記載した。産地数、過去と比べた現在の生息範囲の縮小の変遷等、詳細が分かる場合は、その内容も記載した。なお、現況が分からない場合は不明とした。

３）個体数の現況

基本的に国内の個体数について現在の状況が分かる場合に記載した。なお、現況が分からない場合は不明とした。

（７）存続を脅かす要因

対象種の存続を脅かしていると考えられる要因について記載した。また、別表３の「存続を脅かす要因のタイプ区分」から該当するタイプ区分を過去（2000 年以前）と現在（2000 年以降）で分けて該当するカテゴリーを記載した。

（８）絶滅に至った経緯とその要因

絶滅と判定された種については、対象種が最後まで分布していた地域、絶滅に至るまでの個体数や分布域の推移、絶滅に至った要因（原因）等をまとめて記載した。

絶滅の要因が分かっている場合は、別表３の「存続を脅かす要因のタイプ区分」から該当するカテゴリーを記載した。

（９）特記事項

特筆すべき学術的重要性や、保護の意義、必要性、具体策等について記載した。また、前回の見直し以降、あるいはレッドリスト公表後に、学名又は和名の変更等につながる分類群の変更（新たな分類体

系による科や属等の分類群間の移動、種・亜種の統合・分離等）があった種については、必要に応じて、この項目にその旨を記載した。

（10）旧レッドリストカテゴリーと掲載名

過去のレッドリストからのカテゴリー及び学名並びに和名の変更の経過を、公表年次とともに記載した。分類変更によって種の分割が行われた場合、分けられた種や亜種については、基本的にその経過を記載しなかった。

（11）都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況

2025 年 3 月時点における 47 都道府県のレッドリスト・レッドデータブックに掲載されているカテゴリーについて記載した。なお、公表時期の違い等によって各都道府県のレッドリストと第５次レッドリストの分類体系が異なる場合があるが、掲載されている種名が同じものについてはこの項目に記載した。一方、異なるものについては基本的に記載しなかった。

（12）保護に係る法令指定状況

2026 年 3 月時点における、種の保存法に基づく国内希少野生動植物への指定状況、保護増殖事業計画策定状況、国指定天然記念物への指定状況、鳥獣保護管理法における対象の有無、都道府県の希少野生生物の保護に関する条例の指定状況について記載した。各法令で対象種の分類体系が異なる場合があるため注意が必要。なお、都道府県や市町村の天然記念物指定など、他の法令によって保護されている場合もあるが、この項目には記載されていないことに注意が必要。

（13）参考文献

原則として、カテゴリー判定の根拠になった文献（最近の分布や生息地の状況、推移等がわかるもの）を中心に本書を活用する方に役立つと考えられる文献名を掲載した。また、分類について様々な意見のある種や未記載種であっても種・亜種レベルで評価されているものは、学名並びに和名表記の根拠、及び別種とされている根拠となる文献を挙げた。

（14）アセスメントサマリー

カテゴリー判定結果、存続を脅かす要因、生息環境区分及び保護に係る法令指定状況について定型の英文を記載した。

（15）解説執筆者

レッドデータブックの執筆者の氏名、所属等を記載した。

別表１　第５次レッドリスト生息・生育環境区分

大区分	中区分	小区分	細区分
陸域	山地・丘陵地	高標高地（約 2500m 以上；高山帯に相当※1）	裸地
			森林
			草地
			田地・畑地
			耕作放棄地
			農業用水路
		中標高地（約 500–2500m まで；亜高山帯・山地帯に相当※1）	湿地・湿原・細流
			砂地・風衝地
			岩壁・ガレ場（石灰岩地等）
			洞窟・地下浅層・地下水域
		低標高地（約 500m 以下；低地帯・丘陵帯に相当※1）	河川源流域
			河川上流域
			河川中流域
			ため池・池沼
			湖・ダム湖
		その他（自由記入）	その他（自由記入）
	台地・平野・盆地・海岸	平地部	裸地
			森林
			草地
			田地・畑地
			耕作放棄地
			湿地・湿原
			住宅地
			商業・工業施設
			市街緑地
			砂地・礫地
		海岸部	河川中流域
			河川下流域
			河口域
			ワンド
			農業用水路
			小河川
			ため池・池沼
			潟・湖・ダム湖
			地下水域
			井戸
		その他（自由記入）	洞窟・地下浅層

大区分	中区分	小区分	細区分
			砂浜・礫浜
			海崖・岩浜・岩礁(磯)
			汽水域
			塩沼地・塩性湿地・河口干潟 (マングローブ湿地を含む)
			潟・汽水湖
			陸封潮溜まり (アンキアライン池・洞窟)
			その他(自由記入)
海域	沿岸※2	潮間帯 表層 (低潮線から水深 200m まで) 中深層以深 (水深 200m 以深) その他 (自由記入)	海面
			漂泳界(水柱環境)
			岩礁(磯)
			藻場
			アマモ場
			サンゴ礁
			干潟
			砂底・礫底
			泥底
			洞窟
			その他(自由記入)
	外洋※3	表層 (水深 200m まで) 中深層以深 (水深 200m 以深) その他 (自由記入)	海面
			漂泳界(水柱環境)
			岩底
			砂底・礫底
			泥底
			洞窟
			熱水噴出孔
			冷水湧出帯
			その他(自由記入)

※１：高度帯の区分は、高地植物学（柴田,1985）における区分に基づく。

※２：ここでは海岸線から接続水域まで（0km～約 44km(24 海里)）

※３：ここでは接続水域から排他的経済水域（EEZ）まで（約 45km～約 370km（200 海里））

別表２　「国土の特性に応じたグランドデザイン」における 7 つの地域区分（生物多様性国家戦略 2012－2020 より抜粋）

①奥山自然地域……相対的に自然性の高い地域
②里地里山・田園地域（人工林が優占する地域を含む）
……①と③の間に位置する地域
③都市地域……人間活動が集中する地域
④河川・湿地地域……各地域を結びつける生態系ネットワークの基軸となる水系
⑤沿岸域……海岸線を挟む陸域及び海域
⑥海洋域……沿岸域を取り巻く広大な海域
⑦島嶼地域……沿岸域・海洋域にある島々

別表３　存続を脅かす要因のタイプ区分

	新No	第 5 次 RL	要因の適用範囲に係る説明
A 開発	A01	森林伐採	自然林や二次林を含む伐採による森林の減少や消失に起因する場合に適用する。 樹洞の減少等の森林面積の減少を伴わないような要因を広義に含む。
	A02	湖沼開発	湖沼、ため池等の開発行為に起因する場合に適用する。 水域の消失だけでなく護岸整備や取水施設の設置等の開発行為に係る要因を広義に含む。
	A03	河川開発	全ての河川種別（一級、二級、準用、普通）における開発行為に起因する場合に適用する。 護岸整備、河床の掘削や整備、河道の付け替え等を含む。ダムをはじめとした河川工作物の建設に起因する場合は「ダム・河川工作物建設」の区分に含める。
	A04	海岸開発	海岸や砂浜域の開発行為に起因する場合に適用する。 海岸の埋め立てや護岸整備、港湾整備等に関する要因も広義に含む。
	A05	海砂採取	沿岸域における砂礫の採取に起因する場合に適用する。 周辺での海砂採取に伴う砂浜域の後退等の直接的に確認される要因を広義に含む。
	A06	湿地開発	湿地の開発行為に起因する場合に適用する。 湿地の埋め立てや周辺の湿地を維持するための水源の開発等も広義に含む。
	A07	圃場整備	水田、畑地等の農地整備に起因する場合に適用する。 圃場整備に伴う田面の乾田化や水路、畦の消失及びコンクリート化等の整備による要因を含む。
	A08	草地開発	草地として維持されている環境の開発に起因する場合に適用する。 開発行為に関係するものを広義に含む。
	A09	石灰採掘	石灰の採掘に起因する場合に適用する。 石灰採掘に関わる人為的な影響に関するものを広義に含む。
	A10	洞窟の消失や環境悪化	人為的影響による洞窟の消失、もしくは環境悪化に起因する場合に適用する。 開発行為をはじめレジャー等による環境悪化も含む。
B 建設	B01	ゴルフ場	ゴルフ場の開発に起因する場合に適用する。
	B02	スキー場	スキー場の開発に起因する場合に適用する。
	B03	土地造成	場所を問わず特に土地造成の影響に起因する場合に適用する。 宅地化、リゾート開発等の土地の造成に伴うものを広義に含む。
	B04	交通インフラ建設	道路工事や鉄道工事等の交通インフラの建設の影響に起因するものを広義に含んで適用する。 側溝への転落や生息場所の分断化、交通インフラ建設に起因する弊害も含む。自動車や鉄道等による交通事故は含まない。
	B05	ダム・河川工作物建設	ダム建設をはじめ、砂防ダム、堰堤、樋門、頭取工等の河川工作物による影響に起因する場合に適用する。
	B06	発電施設建設	太陽光や風力等の発電施設の建設の影響に起因するものを広義に含んで適用する。 発電施設のみではなく、それらに関係する送電設備建設等の影響に起因するものも広義に含む。
C 環境汚染	C01	水質汚濁	河川、水路、ため池等の水域における水質汚濁に起因する場合に適用する。 状況や物質を問わず汚濁が原因と特定可能な全ての要因を含む。
	C02	水温変化	河川、水路、ため池等の水域における水温変化に起因する場合に適用する。 水温変化が原因と特定可能な場合のみ使用する。
	C03	農薬汚染/化学物質汚染	農地（水田、畑、果樹園等）及びその周辺域（水路、畦等）における農薬汚染に起因する場合に適用する。 水質汚濁の場合でも特に農薬汚染と特定できる場合はこちらを選択する。
	C04	感染症/病原菌	病原体に起因するもの。感染症に関わるものを広義に含む。
	C05	大気汚染	大気汚染に起因するもの。大気汚染が原因であると特定できる場合のみ適用する。
D 捕獲・採取	D01	捕獲・狩猟/園芸採取	人による捕獲・採取行為に起因する場合に適用する。 狩猟、ペット業者による商業的採集、園芸採取、研究者による採集等に関係する要因を広義に含む。
	D02	食用・薬用採取	食用や薬用採取に起因する場合に適用する。 食用や薬用を目的の採取に関わる要因を広義に含む。
	D03	違法採集	人による捕獲・採取行為に起因する場合のうち、違法性が疑われる場合に適用する。 D01, D02 を選択した場合で、違法なものを含む場合は、本項目もチェックする。
	D04	混獲・錯誤捕獲	他種の捕獲・採取に付随した非意図的な捕獲・採取に起因する場合に適用する。 その他、混獲・錯誤捕獲に関係する要因を広義に含む。

	新No	第 5 次 RL	要因の適用範囲に係る説明
E 生物間相互作用	E01a	シカ食害	シカによる食害に起因する場合に適用する。食害に起因して生じた間接的な影響についても広義に含む。
	E01b	その他動物食害	シカ以外の動物による食害に起因する場合に適用する。 食害に起因して生じた間接的な影響についても広義に含む。
	E02a	捕食（外来種による）	外来種による捕食に起因するものに適用する。 国内外来種を含めた、人為的な移動に起因して侵入した生物による捕食の影響に関するもの。
	E02b	捕食（在来種による）	在来種による捕食に起因するものに適用する。 環境の変化等に伴う生態系のバランスの変化等で、自然分布域において在来種による捕食の影響が増大した場合等が該当する。
	E03a	競争/競合（外来種による）	外来種との競争に起因するものに適用する。国内外来種を含めた、人為的な移動に起因して侵入した生物との競争による影響が該当する。
	E03b	競争/競合（在来種による）	在来種による競争に起因するものに適用する。環境の変化等に伴う生態系のバランスの変化等で、在来種との競争の影響が増大した場合等が該当する。
	E04a	交雑（外来種による）	外来種との交雑に起因するものに適用する。国内外来種を含めた、人為的な移動に起因して侵入した生物との交雑による影響に関するもの。
	E04b	交雑（在来種による）	在来種との交雑に起因するものに適用する。環境の変化等に伴う生態系のバランスの変化等で、在来種との交雑が生じるようになった場合等が該当する。
	E05	宿主の減少	寄生・共生性の生物において、宿主である生物の減少に起因している場合に適用する。 なお、宿主の存続を脅かす要因がわかる場合には、併せて宿主の要因も選択する。
F その他人為的要因	F01	人の踏みつけ	人による踏みつけ行為に起因するものに適用する。 場所や意図等は問わず、踏みつけに起因するものを広義に含む。
	F02	交通事故	自動車、鉄道等の轢死による直接的な事故のみに適用する。道路工事やトンネル建設等よる間接的な影響は、「交通インフラ建設」に含める。
	F03	人工構造物への衝突	風力発電施設の風車ブレード等への生物の衝突に起因する場合に適用する。 その他、送電線、鉄塔等の人工構造物への衝突に係るものを広義に含む。
	F04	光害	水銀灯等の照明器具の設置方法や配光によって、生物の行動パターン等に変化を与えていることに起因する場合に適用する。光害に関係する間接的な要因も広義に含む。
	F05	管理放棄	人為的な管理により維持されていた二次的自然の管理放棄に起因するもの。草地の遷移、ため池の湿地化、水田の放棄等に起因するものを広義に含む。
G 環境変化	G01	遷移進行・植生変化/自然遷移	河原、草地、森林、湿地等の場所は問わず、遷移進行、植生変化、自然遷移に起因する場合に適用する。
	G02	基質・基物の減少及び消失	対象生物の生息・生育に必要な基質・基物となる生物・無機物の減少や消失に起因する場合に適用する。 なお、基質・基物が生物であり、その生物種の存続を脅かす要因が分かる場合には、併せてその要因を選択する。
	G03	自然災害	集中豪雨による土砂崩れや洪水、地震、津波、火山噴火等のあらゆる自然災害に起因する場合に適用する。
	G04	気候変動	気温や水温の上昇、頻繁な異常気象等の気候変動が原因の可能性が高いと判断される自然現象に起因する場合に適用する。適用に際しては、存続を脅かす要因となる現象の長期的な動向を考慮した上で気候変動の影響か否かを判断する。
Z その他/不明	Z01	分布・産地局限	地史的に生息・生育地が局限しており、環境改変や自然災害等で容易に絶滅する危険を有する場合に適用する。
	Z02	近交弱勢	生息・生息地の局限や個体数の急減等による、近親交配、遺伝的多様性の低下に起因する場合に適用する。
	Z03	その他（自由記入）	上記のいずれにも当てはまらない場合に適用する項目。基本的には上記のいずれかの項目を広義に解釈して当てはめることが望ましい。選択する場合には、具体的な要因の名称を自由記入欄に記述する。なお、第 5 次レッドリストにおいて全分類群の結果を集計した際に、同じ名称の要因が複数確認された場合には、今後の追加を検討する予定である。
	Z04	不明	存続を脅かす要因が明確ではない場合に適用する。 原因が明確ではないもの、不明なものはこの項目を選択する。

第５次レッドデータブック（鳥類）各種の解説

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

カンムリツクシガモ

***Tadorna cristata* (Kuroda, 1917)**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③

基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種

具体的には、以下の事項を満たす。

③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。

【判断理由】

現存する標本は、1877 年にロシアのウラジオストックと 1916 年に釜山付近で採集されたメス 2 個体、および群山付近で 1913 年あるいは 1914 年に採集されたオス個体の 3 点のみである。1964 年 5 月 16 日にロシアのウラジオストック付近のリムスキーコルサコフ諸島で 3 羽を見たとの報告があるほか、1971 年には朝鮮半島北部の海上で観察された記録がある。日本国内では、北海道箱館付近の亀田村で文政 5 年（1822 年）10 月に雌雄 2 個体で捕獲され、将軍家に献ぜられた記録が最後である。日本国内では 200 年以上、海外でも 50 年以上確実な観察記録はない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

現存する標本は、1877 年にロシアのウラジオストックで採集されたメスと、1916 年に釜山付近で採集されたメス、群山付近で 1913 年あるいは 1914 年に採集されたオスの 3 点のみである。その他、ウラジオストックや朝鮮半島北部などで観察された記録がある。日本では、江戸時代に作成された写生図がいくつか知られている他、北海道箱館付近の亀田村で文政 5 年 10 月に雌雄で捕獲され、文政 6 年 9 月に将軍家に献ぜられた記載が残されている。レッドデータブック 2014 の発行以降、国内および海外で新たな記録はない。

基礎情報

【形態】

全長約 60 cm。全身灰褐色でオスは頭部と胸から背にかけて緑色。メスは頭部のみ緑色。嘴と脚は橙色。本種と同じ *Tandorna* 属には、アカツクシガモ（*Tadorna ferruginea*）やツクシガモ（*Tadorna tadorna*）がいるが、身体の羽色、頭部と胸から背にかけての緑色で区別は容易と思われる。

【生活史】

不明。

【生息環境】

不明であるが、1964 年にはウラジオストック付近、1971 年には朝鮮半島北部において、それぞれ海上で観察された記録がある。

生息環境区分：	【陸域_その他（不明）】その他（不明） 【海域（沿岸）_その他（不明）】その他（不明） 【海域（外洋）_その他（不明）】その他（不明）
国土地域区分：	（6）海洋域

【分布域】

アジア大陸北東部のロシア・ウスリー地方、中国東北部、朝鮮半島、日本（函館）で記録されている。おそらくロシア、中国が繁殖地であり、中国、朝鮮半島、日本などが越冬地であったと思われる。1964 年 5 月 16 日にロシアのウラジオストック付近のリムスキーコルサコフ諸島で 3 羽を見たとの報告があるほか、顔重威ほか（1996）には 1976～88 年に中国の 3 地方で見かけている、としているが詳細は不明である。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	－

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	カンムリツクシガモ	*Tadorna cristata*	EX
第４次 2019：	カンムリツクシガモ	*Tadorna cristata*	EX

第４次 2018：	カンムリツクシガモ	*Tadorna cristata*	EX
第４次 2017：	カンムリツクシガモ	*Tadorna cristata*	EX
第４次 2015：	カンムリツクシガモ	*Tadorna cristata*	EX
第４次：	カンムリツクシガモ	*Tadorna cristata*	EX
第３次：	カンムリツクシガモ	*Tadorna cristata*	EX
第２次：	カンムリツクシガモ	*Tadorna cristata*	EX
第１次：	カンムリツクシガモ	*Tadorna cristata*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅(Ex)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- 日本鳥類保護連盟，2002．鳥 630 図鑑．日本鳥類保護連盟，東京.
- 山階鳥類研究所，1975．この鳥を守ろう．285pp. 霞会館，東京.
- 顏重威・趙正階・鄭光美・許維樞・譚耀匡，1996．中國野鳥図鑑．pp. 36-37．翠鳥文化事業有限公司出版，台北.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tadorna cristata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tadorna cristata* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Other】Other 【Marine area (Coastal area)_Other】Other 【Marine area (Open sea)_Other】Other
Threat types:	―

Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	永田尚志（新潟大学）・柳澤紀夫（元公益財団法人日本鳥類保護連盟）
Author:	Hisashi Nagata and Norio Yanagisawa

公表年月：2026 年 3 月

ハト目 Columbiformes　ハト科 Columbidae　　日本固有

オガサワラカラスバト

***Columba versicolor* Kittlitz, 1832**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　①②③

基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
具体的には、以下の事項を満たす。
①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。
②信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。
③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。
【判断理由】
小笠原諸島の父島および媒島のみに分布していた記録がある。1827 年 6 月にイギリス船 Blossom 号の Beechey が 1 羽を採集、1828 年 5 月に Kittlitz が 2 羽を採集、1889 年 9 月 15 日に Holst が媒島にてオス成鳥 1 羽を採集したことが知られている。1890 年代以降、小笠原諸島での確認記録はない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

小笠原諸島固有種。大型のハト類で、1827 年 Beechey により 1 羽、1828 年 Kittlitz により 2 羽、1889 年 Holst により 1 羽が採集されたのみで、その後確実な記録はなく、絶滅したものと考えられている。絶滅の原因は不明。

基礎情報

【形態】

上面の地色が青みがかった暗灰色だが、頭部には緑色の金属光沢があり、背には金紫光沢がある。腰は緑色で上尾筒の羽縁は銅緑色光沢がある。翼の雨覆羽は淡色で金色光沢が強く、風切羽、尾羽は暗灰色。下面は灰色で全体に紫色を帯びる。嘴は緑がかった黄色、虹彩は暗青色、脚は暗赤色。以上、主として Seebohm（1890）の記述による。よく似た種としてアカガシラカラスバト（*Columba janthina nitens*）が同所的に生息するが、本種の方がやや体が大きいこと、全体に淡色であること、アカガシラカラスバトは、頭部に赤紫色みが強いことで区別できる。本種の測定値は以下のとおり。(1) 1889 年 9 月 15 日媒島にて Holst 採集の標本（大英博物館所蔵）Reg. No. 1892.11.23.3.オス成鳥。全長 430(457.2) mm、翼長 261(266.7) mm、尾長 186(190.5) mm、ふ蹠長 32.5(31.8) mm、露出嘴峰長 23.5 mm、嘴峰 35 mm（黒田 1928、括弧内は Salvadori 1893）。

(2) 1828 年 5 月 Kittlitz 採集の標本（ロシア科学アカデミー動物学博物館所蔵）No. 3018. 性別不明成鳥。
翼長 256.5 mm、尾長 180 mm、露出嘴峰長 19 mm、ふ蹠長 36 mm、爪を含む中趾 50 mm（Stejneger 1887）。

(3) 1828 年 5 月 Kittlitz 採集の標本（ゼンケンベルグ博物館所蔵）翼長 279 mm (Seebohm 1890b)(4)1827 年 6 月 Beechey 採集の標本（現在行方不明）全長 406 mm、翼長 254 mm、嘴峰長 32 mm、尾長 203 mm、ふ蹠長 32 mm（Stejneger 1887 に引用された Vigors 1839 の測定値）。

【生活史】

ほとんど何も知られていない。1889 年 9 月 15 日に Holst が採集した標本では、風切羽と尾羽が換羽中であったことが知られている（Seebohm 1890a）。巣卵の記録はまったくなく、繁殖は確認されていない。

【生息環境】

不明。

生息環境区分：	【陸域_その他（不明）】その他（不明）
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島の父島および媒島のみに分布していた記録がある。

1827 年 6 月にイギリス船 Blossom 号の Beechey が 1 羽を採集、1828 年 5 月に Kittlitz が 2 羽を採集、1889 年 9 月 15 日に Holst が媒島にてオス成鳥 1 羽を採集したことが知られている。1827 年の標本は現在行方不明であるが、1828 年の標本はロシア科学アカデミー動物学博物館（ロシア・セントペテルブルグ）に 1 点（タイプ標本）、ゼンケンベルグ博物館（ドイツ・フランクフルト）に 1 点が所蔵され、1889 年の標本は大英博物館（イギリス・ロンドン）にそれぞれ所蔵されている（Seebohm 1890a, b、Salvadori 1893）。1827 年、1828 年の標本はそれぞれ Bonin Islands、Bonin-sima と書かれているだけで正確な採集地が記さ

れていないが、Blossom 号は小笠原諸島の中では父島のみに上陸していること、Kittlitz が上陸したのは父島のみであることから（Lutke 1835、Greenway 1958、大熊 1985、田中 1997）これらの標本は父島で採集されたと考えられる。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	ー

特記事項

分布のきわめて狭い種として非常に貴重である。国外産のカラスバト類（*Columba* 属）および日本産のカラスバト（*Columba janthina janthina*）、リュウキュウカラスバト（*Columba jouyi*）などとの類縁関係も未解明であり今後の研究が待たれる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オガサワラカラスバト	*Columba versicolor*	EX
第４次 2019：	オガサワラカラスバト	*Columba versicolor*	EX
第４次 2018：	オガサワラカラスバト	*Columba versicolor*	EX
第４次 2017：	オガサワラカラスバト	*Columba versicolor*	EX
第４次 2015：	オガサワラカラスバト	*Columba versicolor*	EX
第４次：	オガサワラカラスバト	*Columba versicolor*	EX
第３次：	オガサワラカラスバト	*Columba versicolor*	EX
第２次：	オガサワラカラスバト	*Columba versicolor*	EX
第１次：	オガサワラカラスバト	*Columba versicolor*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Salvadori, T.,1893. Catalogue of the Columbae, or Pigeons, in the collection of the British Museum. The Trustees, London.
- Greenway, J. C. Jr., 1958. Extinct and Vanishing Birds of the World. American Committee for International Wild Life Protection, New York.
- Kittlitz, F. H., 1830. Uber die Vogel der Inselgruppe von Boninsima. Mem. Acad. Imp. St. Petersburg, 1: 231-248.
- 黒田長禮，1928．日本及台湾産鳥類数種の再調査．鳥，6(26): 1-12．
- Lutke, F., 1835. Voyage Autour du Monde, dans annees 1826, 1827, 1828 et 1829., tome second. 1826-1829, 2. pp. 150-166. Firmin Didot Freres, Paris.
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並びに硫黄列島産の鳥類に就いて．日本生物地理学会会報，1(3): 89-186．
- 大熊良一，1985．小笠原諸島異国船来航記．193pp. 近藤出版社，東京．
- Seebohm, H., 1890. On the Birds of the Bonin Islands. Ibis, 95-108.
- Seebohm, H., 1890b. The Birds of the Japanese Empire. 386pp. R. H. Porter, London.
- Stejneger, L., 1887. Review of Japanese Birds. VI -The Pigeons. Proc. United States Nat. Mus, pp. 416-429.
- 田中弘之，1997．幕末の小笠原．273pp. 中央公論社，東京．
- Vigors, N.A. 1839. Voy. Blossom, Orn., p. 25
- 山階芳麿，1930．聟島列島の鳥類．鳥，6(30): 323-340．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Columba versicolor has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Columba versicolor* is listed as EX under criteria ①②③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

①Reliable surveys and records have confirmed that this species is already extinct in the wild.

②Multiple reliable surveys could not confirm the existence of this species.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Other】Other
Threat types:	―
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	永田尚志（新潟大学）・梶田学
Author:	Hisashi Nagata and Manabu Kajita

公表年月：2026 年 3 月

ハト目 Columbiformes　ハト科 Columbidae　　日本固有

リュウキュウカラスバト

***Columba jouyi* (Stejneger, 1887)**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　①③

基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
具体的には、以下の事項を満たす。
①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。
③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。
【判断理由】
沖縄諸島では、1887 年に沖縄島北部国頭で 2 羽が捕獲された後、沖縄島および周辺の島では、1891 年 12 月首里にて 1 羽、1892 年に中頭にて♀1 羽、1891 年に那覇と瀬底島にて各 1 羽、1902 年に♀1 羽、1904 年に屋我地島にて 1 羽が採集されている。沖縄島周辺の離島では 1904 年にのみ採集記録が知られている（伊平屋島 1 羽、伊是名島数羽、座間味島 1 羽）。大東諸島では、1922 年に南大東島にて 12 羽（♂9、♀2、♀幼鳥 1）、北大東島にて 2 羽、1936 年に南大東島で♀1 羽が採集されている。国内では 1936 年以降、確認記録はない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

沖縄諸島（沖縄島および周辺の島）と大東諸島固有種。大型のハト類で、1887 年沖縄島で発見、採集された。その後沖縄諸島では 1928 年まで採集記録が知られている。大東諸島では 1922 年に南、北大東島で発見、採集され 1936 年まで採集記録が知られている。しかし、その後まったく記録がなく、絶滅したものと考えられている。絶滅の原因は不明。

基礎情報

【形態】

Stejneger（1887）による原記載の測定値は、翼長 253 mm、尾長 188 mm、露出嘴峰長 23 mm、ふ蹠長 35 mm、爪を含む中趾 51 mm（当時の東京教育博物館所蔵のタイプ標本の測定値。当該標本は、現在、山階鳥類研究所所蔵。標本番号 YIO-00048）。基本的には全体に灰黒色で頭頂に紫光沢、腰は緑銅光沢、胸は紫光沢が強い。後頸に緑光沢があり、三日月形の白帯がある（基部が黒色で、先端数 mm～数 cm が白色の羽毛の集まりで形成されている）。嘴はマリンブルーで先端は白っぽい。虹彩は暗褐色。脚は暗赤紫色。よく似た種としてはカラスバト（*Columba janthina janthina*）が同所的に生息しているが、後頸にある三日月形の白帯がカラスバトにはないこと、測定上本種の方が大型であることなどで識別が可能である。

【生活史】

まったく知られてないが、1892 年採集の標本のラベルには「ベーベーと鳴くゆえベーベーボートの方言名有り」と記入されている。本種の鳴き声についての情報はこれ以外には知られていない。ただし、これは当時も沖縄島に多数生息していたと思われるカラスバトについて記述したものである可能性が捨てきれない。巣卵の記録はまったくなく、繁殖は確認されていない。

【生息環境】

詳細は不明。しかし、1891 年当時には金武近くの森に多く見られたと記載（Fritze 1894）があり、留鳥としてカラスバトと類似した環境に生息していたと考えられる（清棲 1952）。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄諸島（沖縄島および伊平屋島、伊是名島、瀬底島、屋我地島、座間味島）と大東諸島（南大東島、北大東島）に分布していた記録がある。

沖縄諸島では、1887 年 2 月 3 日沖縄島北部の Kun-chan（国頭）で C. Tasaki によって 1 羽が採集された（Stejneger 1887：タイプ標本、当時東京教育博物館所蔵、現在山階鳥類研究所所蔵）。その後沖縄島および近接する周辺離島では、1891 年 12 月首里にて 1 羽（オス、西藤郎採集：山階鳥研所蔵）、同じく 1891 年に那覇と瀬底島にて各 1 羽（Fritze 1894）、1892 年 4 月中頭にて 1 羽（メス、西常央採集：山階鳥研所蔵）、1902 年 1 月に 1 羽（メス、採集地は「沖縄」とのみ記述、黒岩恒採集：山階鳥研所蔵）、1904 年 4 月に屋我地島にて 1 羽が採集されており（Ogawa 1905）、1891 年当時には金武近くの森に多く見られたとの記述から（Fritze 1894）、沖縄島全体と近接する周辺離島に広く分布していた可能性が高い。沖縄島からやや離れた周辺離島では 1904 年にのみ採集記録が知られている（伊平屋島 5 月 1 羽、伊是名島 4、5、7 月に数羽、座間味島 7 月 1 羽、長聖道、長田霊端採集：Ogawa 1905）。大東諸島では、1922 年に南大東島にて 12 羽（9 オス、2 メス、1 メス幼鳥、折居彪

二郎採集：黒田 1925)、北大東島にて 2 羽が採集され（折居彪二郎が採集したが標本は作製されていない：黒田 1925)、1936 年 11 月 16 日に南大東島で 1 羽（メス、折居彪次郎採集：山階鳥研所蔵）が採集されている。これら以外に、Pryer コレクションとして 1890 年以前に採集の少なくとも 2 標本が知られており（Seebohm 1887、1888、1890)、採集地は the central group of the Loo-Choo Islands とのみ記載されている。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	ー

特記事項

分布のきわめて狭い種として非常に貴重である。国外産のカラスバト類（*Columba* 属）および日本産のカラスバト、オガサワラカラスバト（*Columba versicolor*）などとの類縁関係も未解明であり今後の研究が待たれる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	リュウキュウカラスバト	*Columba jouyi*	EX
第４次 2019：	リュウキュウカラスバト	*Columba jouyi*	EX
第４次 2018：	リュウキュウカラスバト	*Columba jouyi*	EX
第４次 2017：	リュウキュウカラスバト	*Columba jouyi*	EX
第４次 2015：	リュウキュウカラスバト	*Columba jouyi*	EX
第４次：	リュウキュウカラスバト	*Columba jouyi*	EX
第３次：	リュウキュウカラスバト	*Columba jouyi*	EX
第２次：	リュウキュウカラスバト	*Columba jouyi*	EX
第１次：	リュウキュウカラスバト	*Columba jouyi*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Fritze, A., 1894. Die fauna der Liu-Kiu-Insel Okinawa. Zool. J. B. Syst., 7, Aves: 855-859.
- Hachisuka, M. and T. Udagawa, 1953. Contribution to the Ornithology of the Ryukyu Islands. Quarterly Journal of The Taiwan Museum, 6(3&4): 141-279.
- 清棲幸保，1952(1978)．日本鳥類大図鑑 II．リュウキュウカラスバト，II: 487-488．大日本雄弁会（講談社），東京．
- Kuroda, N., 1925. A Contribution to the Knowledge of the Avifauna of the Riu Kiu Islands and the Vicinity. 293pp. Published by the author, Tokyo.
- Ogawa, M., 1905. Notes on Mr. Alan Owston's collection of Birds from the Islands lying between Kiushu and Formosa. Annotations Zoologica Japonensis, 5(4): 175-232.
- Seebohm, H., 1887. Notes on the birds of the Loo-Choo Islands. Ibis, pp. 173-182.
- Seebohm, H., 1888. Further Notes on the birds of the Loo-choo Islands. Ibis, pp. 232-236.
- Seebohm, H., 1890. The birds of the Japanese Empire. 356pp. R. H. Porter, London.
- Stejneger, L., 1887. Description of a New Species of Fruit-Pigeon (*Janthoenas jouyi*) from the Liu Kiu Islands, Japan. American Naturalist, 21: 583-584.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Columba jouyi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Columba jouyi* is listed as EX under criteria ①③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

①Reliable surveys and records have confirmed that this species is already extinct in the wild.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	―
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	永田尚志（新潟大学）・梶田学
Author:	Hisashi Nagata and Manabu Kajita

公表年月：2026 年 3 月

ツル目 Gruiformes　クイナ科 Rallidae　　日本固有

マミジロクイナ

***Poliolimnas cinereus brevipes* (Ingram, 1911)**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。 【判断理由】 1889 年に硫黄島で Holst が発見、1 羽を採集した。また、1911 年同島にて Owston の採集人により 12 羽が採集された。その後、1924 年の観察（籾山 1930、ただし客観的な証拠はない）以降の記録はない。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

火山列島（硫黄島）固有亜種。小型のクイナ類で、1889 年に硫黄島で Holst が発見、1 羽を採集した。また、1911 年同島にて Owston の採集人により 12 羽が採集された。その後、1924 年の観察（籾山 1930、ただし客観的な証拠はない）以降の記録はなく、絶滅したものと考えられている。絶滅の原因は移入種のネコとの推定もある（籾山 1930）。

基礎情報

【形態】

頭部および頸は暗灰色、頬と頸側部は灰色、目先は黒く眉斑は白色、嘴基部から目の下縁から後方にいたる白色帯がある。上面、背の地色は黄色みがかった褐色、背下部、腰、上尾筒は灰褐色。下面（喉、腹）は白色、胸、脇は灰色。脇下部から下尾筒は淡褐色。翼は基本的に暗褐色で、黄褐色の外縁を有する。尾羽は、暗褐色で外縁は赤褐色。嘴は黄緑色で基部は狭く赤色。脚は淡緑色、虹彩は赤色。他亜種とは、本亜種の方が背と腰に赤みがあり、脇から下尾筒までがより濃色であること、および測定上嘴の基部が太いこと、ふ蹠が短いことによって区別される。以上、主に Ingram（1911）による。原記載での測定値はふ蹠長 32 mm、中趾 33 mm。

【生活史】

本亜種についてはほとんど何も知られていない。

【生息環境】

沼地付近にすみ、タマナやタコノキの林の中や畑地に生息したといわれるが、詳細は不明。

生息環境区分：	【陸域_平地部】森林，田地・畑地
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

本亜種は火山列島硫黄島と南硫黄島のみに分布していた記録がある（ただし、1911 年南硫黄島の標本ラベルは誤記とする見解もある）。他亜種は、広く南太平洋諸島に分布している（ミクロネシア、フィリピン、セレベス、マラヤ、スマトラ、ボルネオ、ジャワ、ニューギニア、オーストラリア北部、ビスマルク諸島、ニューヘブリデス、ニューカレドニア、フィジー、サモアなど計 7 亜種）。

絶滅に至った経緯とその要因

絶滅の原因は、移入種のネズミやネコによる捕食と推定されるが、詳細は不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	ー

特記事項

分布域がきわめて狭く、種の分布域の北限にあたる固有亜種として貴重である。他亜種との形態、生態の分化程度など詳しい研究はなされておらず、学術的にも残された課題は多い。記載されている 7 亜種ともその形態的差異はわずかで、亜種が疑問視されることもある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	マミジロクイナ	*Porzana cinerea brevipes*	EX
第４次 2019:	マミジロクイナ	*Porzana cinerea brevipes*	EX
第４次 2018:	マミジロクイナ	*Porzana cinerea brevipes*	EX
第４次 2017:	マミジロクイナ	*Porzana cinerea brevipes*	EX
第４次 2015:	マミジロクイナ	*Poliolimnas cinereus brevipes*	EX
第４次:	マミジロクイナ	*Poliolimnas cinereus brevipes*	EX
第３次:	マミジロクイナ	*Poliolimnas cinereus brevipes*	EX
第２次:	マミジロクイナ	*Poliolimnas cinereus brevipes*	EX
第１次:	マミジロクイナ	*Poliolimnas cinereus brevipes*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Ingram, C., 1911. Exhibited and described examples of a new subspecies of Rail belonging to the genus *Porzana*. Bull. B. O. C., xxix: 21-22.
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並びに硫黄列島産の鳥類に就いて．日本生物地理学会会報，1(3): 89-186.
- Seebohm, H., 1891. On the Birds of the Volcano Islands. Ibis, pp. 189-192.
- Taylor, B. and Perlo, B. 1998. Rails. Pica Press, East Sussex, 600pp.
- 内田清之助，1911．硫黄島産鳥類数種に就いて．動物学雑誌，23: 535-538.
- 山階鳥類研究所，1975．この鳥を守ろう．霞会館，東京．285pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Poliolimnas cinereus brevipes has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Poliolimnas cinereus brevipes* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is

anticipated to be met. ③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland
Threat types:	―
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	尾崎清明（公益財団法人山階鳥類研究所）・梶田学
Author:	Kiyoaki Ozaki and Manabu Kajita

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　サギ科 Ardeidae　　日本固有

ハシブトゴイ

***Nycticorax caledonicus crassirostris* Vigors, 1839**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生息したことが確認されており､飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。 【判断理由】 1827 年と 1828 年に父島で各 1 羽、1889 年に媒島で 1 羽が採集された記録があるのみ。その後まったく確認されていないため、絶滅したと判断した。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

小笠原諸島固有亜種で、1827 年と 1828 年に父島で各 1 羽、1889 年に媒島で 1 羽が採集された記録があるのみ。その後まったく確認されていないため、絶滅したものと考えられている。絶滅の原因は不明。

基礎情報

【形態】

上面（翼上面、背）がブドウ色がかった灰色（vinous grey）、下面は白い。頭部と冠羽は黒く、後頭部にある 2 本の細長い飾り羽は白色（1827 年の標本では飾り羽欠如）。眉斑と腋羽は白色。脚は明るい黄色で、緑黄色の鱗が前面を覆っている。嘴は黒色で基部は緑黄色。目の周囲の裸出部も緑黄色。虹彩は明るい黄色。以上、1889 年採集のメス成鳥の記載（Seebohm 1890、黒田 1928）。1827 年採集の性不明成鳥では、下嘴は大部分黄色で、上嘴と下嘴先端は黒色、上面は 1889 年の標本よりも暗色である。本亜種では、幼鳥の羽色は知られていないが、近似亜種の幼鳥には黄白斑がありゴイサギ（*Nycticorax nycticorax nycticorax*）に似る。他の亜種よりも鼻孔における嘴高が太く、全体の羽色とくに頸の脇の色彩が淡色である。体はおおよそゴイサギ大、各部の測定値は全長 533 mm、翼長 273 mm、尾長 127 mm、ふ蹠長 101.6 mm、嘴峰長 108 mm（1827 年採集の性不明成鳥の測定値、Stejneger 1887）。

【生活史】

本亜種についての生態の情報はないが、他亜種の生態はゴイサギ（*Nycticorax nycticorax*）に似ており、海岸岩場、湿地で魚類、甲殻類、両生類など水生生物を夜間採餌し、移動時に上空で発声する。繁殖コロニーを形成し、卵は淡青緑色で一腹産卵数は 2～3 卵（最大 5 卵）。雌雄の役割分担などについては不明である。

【生息環境】

本亜種については海岸の岩礁で観察されたこと、日中は海岸の溶岩の洞窟や海岸近くの密な茂みに隠れていたことなどが知られるのみである。繁殖の確認はされていない。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】草地，海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島父島、媒島に分布していた記録がある。母島にも生息していたらしい記録がある。国外には他亜種が広く分布している（ニューギニア、モルッカ、セレベス、フィリピン、オーストラリア、ビスマルク諸島、ソロモン諸島、ニューカレドニア、パラウ、カロリン諸島、ジャワなど）。小笠原諸島は本種の分布北限にあたる。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	－

特記事項

国内には本亜種の標本は存在しない。分布のきわめて狭い亜種として貴重である。他亜種との系統関係や分化の程度など不明な点も多く、学術的にも貴重である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ハシブトゴイ	*Nycticorax caledonicus crassirostris*	EX
第４次 2019:	ハシブトゴイ	*Nycticorax caledonicus crassirostris*	EX
第４次 2018:	ハシブトゴイ	*Nycticorax caledonicus crassirostris*	EX
第４次 2017:	ハシブトゴイ	*Nycticorax caledonicus crassirostris*	EX
第４次 2015:	ハシブトゴイ	*Nycticorax caledonicus crassirostris*	EX
第４次:	ハシブトゴイ	*Nycticorax caledonicus crassirostris*	EX
第３次:	ハシブトゴイ	*Nycticorax caledonicus crassirostris*	EX
第２次:	ハシブトゴイ	*Nycticorax caledonicus crassirostris*	EX
第１次:	ハシブトゴイ	*Nycticorax caledonicus crassirostris*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Greenway, J. C. Jr., 1958. Extinct and Vanishing Birds of the World. American Commitee for International Wild Life Protection, New York.
- Hancock, J. and J. Kushlan, 1984. The Herons Handbook. Harper & Row Publishers, New York. 288pp.
- 黒田長禮，1928．日本及び台湾産鳥類数種の再調査．鳥，6(26): 1-12.
- Lutke, F., 1835. Voyage Autour du Monde, dans annees 1826, 1827, 1828 et 1829., tome second. 1826-1829, 2. pp. 150-166. Firmin Didot Freres, Paris.
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並びに硫黄列島産の鳥類に就いて．日本生物地理学会会報，1(3): 89-186.
- 大熊良一，1981．小笠原諸島異国船来航記．近藤出版社，東京．193pp.
- Seebohm, H., 1890. Birds of the Bonin Islands. Ibis, pp. 95-108.

- Stejneger, L., 1887. Review of Japanese Birds. V-Ibises, Storks, and Herons. Proc. U. S. Nat. Mus. 10: 271-319.
- 田中弘之，1977．幕末の小笠原．中央公論社，東京．273pp.
- 山階鳥類研究所，1975．この鳥を守ろう．霞会館，東京．285pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Nycticorax caledonicus crassirostris has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Nycticorax caledonicus crassirostris* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Grassland, Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	―
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	西海功（国立科学博物館）・梶田学
Author:	Isao Nishiumi and Manabu Kajita

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae　　日本固有

ダイトウノスリ

***Buteo japonicus oshiroi* Kuroda, 1971**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　①

基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
具体的には、以下の事項を満たす。
①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。
【判断理由】
本亜種の生息地であった南大東島では、大阪市立大学もしくは北海道大学により鳥類に関する調査研究のための長期滞在が毎年行われているが、過去 22 年間にわたり本亜種と推定される個体は一度も記録されていない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

南大東島における固有亜種ダイトウノスリは絶滅した。1950 年代、移入樹種モクマオウの枝での営巣が確認されていたが、南大東島元来の生息環境は不明である。南大東島は狭い海洋島であるがゆえ、元来生息数は少なかったと推察される。絶滅の要因は明確ではないが、森林環境の収奪が少ない個体数をさらに減少させ、個体数が減少していた 1960 年代の農薬汚染も看過できない要因と推察される。その結果、絶滅の渦が作用した可能性が考えられる。

協力者:　澤田明(早稲田大学人間科学学術院), 金杉尚紀(北海道大学大学院理学院)

基礎情報

【形態】

全般に亜種ノスリの羽斑であるが亜種ノスリの標準的な羽色に比べ、頭から眉斑、耳羽、上胸（素嚢部）の地色は黄土色でノスリの一般型のバフ白色より著しく濃く、顎の暗色斑はかなり明らかである。背面は赤味に富み、羽縁の淡色部はバフ褐色で赤褐色味を帯びる。羽毛基部や中雨覆最長列の羽縁はバフ白色、大雨覆外弁は黒褐色、内弁には黒帯があり、外弁の端は赤褐色帯をなす。初列および次列風切や尾羽の羽弁の地色は錆褐色で赤味が濃く、規則的な黒帯がある（尾羽には 8 帯）。亜種ノスリの一般の型ではこれらの部分は灰褐色でとくに尾羽は横帯を欠く。脇羽はセピア褐色にバフ色の羽縁があり、胸中央から腿羽、腹、下尾筒は淡バフ色、胸や腿羽には小斑があり、これらの部分は亜種ノスリと同様といえる。翼下面は淡バフ色で外方初列風切の先端部は黒く、次で 2 列の弱い横帯がある。次列風切の下面はバフ赤褐色で外方のものに淡い暗色帯がある。蝋膜は淡緑黄色、口角黄色、嘴は黒色で基部は淡く青色を帯びる。紅彩は淡褐色である。趾蹠前方は中趾のつけ根まで羽毛がある。すなわち、全般的な特徴としては頭、頸、背面にかけ黄褐色に富み、翼、尾の地色が濃く、むしろ栗色で規則的な横帯をなすことである。

【生活史】

卵は白色で円形に近い鶏卵程度の大きさ。一腹卵は 3 卵。2 卵が順次孵化するのが観察され、残り 1 卵は約 3 時間後に孵化していた。一腹卵がすべて孵化するまでには、第 1 卵の殻が破られはじめてから約 6 時間を要した。3 雛孵化後、綿羽の乾くのを待ち、18 時にヒナを採取に行くと、最後に孵化した最小のヒナは巣内に見当たらず、巣の周囲や巣のある樹の下にも発見できなかった。（記載論文から）

【生息環境】

記載された雛が発見された巣は、湿原地の“池ノ沢”近くで 2 m 位の通称ドブカヤが密生した湿地でモクマオウの大木が林立している環境にあった。モクマオウの地上 5 m 位の枝上に同樹の径 1 cm の小枝でつくり、直径 50 cm、深さ 30 cm で人が座れた。モクマオウの青葉が毎日新たに重ねられた。記載された個体の発見当時、南大東島には少なくとも 3 つがいのダイトウノスリが生息していたようである。正確な年月日は定かではないが、1960 年代に現在 60～70 歳代の島民から湿地帯のモクマオウにつくられた巣から雛を捕獲し、飼育したという情報を得た。記載論文の記述と伝聞の一致からダイトウノスリの営巣場所は湿地帯のモクマオウであったと推察される。また、幕（はぐ）と呼ばれる帯状の樹林帯には多くモクマオウが植栽されており営巣場所となっていたと推察される。窪んだドリーネは風よけとなり樹木の生育が良く大径木が維持されていた。ドリーネの樹木も、潜在的な営巣場所となっていたと推察される。

生息環境区分：	【陸域_平地部】裸地，森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原
国土地域区分：	（7）島嶼地域

【分布域】

南大東島（沖縄県島尻郡南大東村）に分布していた記録がある。

絶滅に至った経緯とその要因

南大東島において 1998 年から始まった鳥類を対象にした長期滞在による生態学的調査研究により、南大東島における人為的な環境改変がノスリの生息に与えてきた影響が理解できるようになった。この期間にも農地改変に伴う整備で樹林地の幅が各所で狭められてきた。樹林地になったドリーネの多くが貯水池などに改変され、樹林地の減少は続いてきた。生息環境の収奪は個体数減少の大きな要因と思われる。聞き取り調査で 1960 年代までは湿地の移入樹モクマオウに営巣していた可能性は高い。その後、大規模に行なわれた強毒な農薬の使用が餌を汚染し、高次捕食者であるが故、直接的な死因、孵化率の低下を引き起こした可能性も高い。亜種ダイトウノスリは自然度が高かった南大東島の環境で形成されたことを考えると、開拓による個体数の減少と農薬の使用が個体数を減少させ、いわゆる絶滅の渦を引き起こした結果、絶滅にいたったと推察される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，圃場整備，土地造成，農薬汚染/化学物質汚染，分布・産地局限，近交弱勢
	（現在）	森林伐採，圃場整備，土地造成，農薬汚染/化学物質汚染，分布・産地局限，近交弱勢

特記事項

冬期に亜種ノスリと思われる個体が 2002 年から 2023 年に至るまでほぼ毎年確認されている。1998 年には亜種ノスリの 3 個体でのディスプレイフライトが記録された。今後、冬鳥として渡来した亜種ノスリが偶発的に繁殖期まで南大東島に滞在し続ける可能性があると思われる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ダイトウノスリ	*Buteo buteo oshiroi*	EX
第４次 2019：	ダイトウノスリ	*Buteo buteo oshiroi*	EX
第４次 2018：	ダイトウノスリ	*Buteo buteo oshiroi*	EX
第４次 2017：	ダイトウノスリ	*Buteo buteo oshiroi*	EX
第４次 2015：	ダイトウノスリ	*Buteo buteo oshiroi*	EX
第４次：	ダイトウノスリ	*Buteo buteo oshiroi*	EX
第３次：	ダイトウノスリ	*Buteo buteo oshiroi*	CR
第２次：	ダイトウノスリ	*Buteo buteo oshiroi*	CR
第１次：	ダイトウノスリ	*Buteo buteo oshiroi*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 姉崎悟・嵩原建二・松井晋・高木昌興，2003．大東諸島産鳥類目録．沖縄県立博物館紀要，29: 25-54.
- 黒田長禮，1935．大東列島の鳥類について．植物及び動物，3: 1369-1370.
- 松井晋・高木昌興，2009．第 4 章 鳥類「南大東島の鳥類の特徴と保全」．中井精一・東和明・ダニエル ロング（編著），南大東の人と自然，南方新社，鹿児島.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Buteo japonicus oshiroi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Buteo japonicus oshiroi* is listed as EX under criteria ①.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

①Reliable surveys and records have confirmed that this species is already extinct in the wild.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Bare area, Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation, Land development, Pesticide/Toxic chemical pollution, Limited distribution, Inbreeding depression
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	髙木昌興（北海道大学）
Author:	Masaoki Takagi

公表年月：2026 年 3 月

ブッポウソウ目 Coraciiformes　カワセミ科 Alcedinidae　　日本固有

ミヤコショウビン

***Todiramphus miyakoensis* (Kuroda, 1919)**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。 【判断理由】 1887 年に宮古島で採集された 1 標本のみが知られており、その後記録がないため。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

八重山諸島の宮古島固有種。1887 年に宮古島で採集された 1 標本のみが知られており、その後記録がないことから絶滅したと考えられている。絶滅の原因は不明。本種については、その存在を疑問視する意見もある。

基礎情報

【形態】

頭部と下面は橙褐色。背、翼、尾羽は暗青緑色、腰から上尾筒はコバルトブルー、背に続く暗青緑色の過眼帯がある。目の上部に小さな青白斑がある。翼下面は橙褐色。虹彩、嘴の色は不明。脚は暗赤色、趾の爪は暗褐色。測定値は翼長 105 mm、尾長 80.5 mm、ふ蹠長 17 mm、爪を含む中趾 22 mm、嘴峰長（外鞘を欠く）38 mm。以上、黒田（1919）の記述による。グアム島、ポナペ島、パラオ諸島に分布するズアカショウビン（*Halcyon cinnamomina*）に羽色が似ており、とくにグアム島産亜種（*Halcyon cinnamomina cinnamomina*）に酷似しているが、本種は脚が赤く、過眼線が頭を巻くように後頸でつながっていないこと、目の上に小白斑があることなどの点で異なっている。

【生活史】

不明。繁殖の記録もない。

【生息環境】

不明。

生息環境区分：	【陸域_その他（不明）】その他（不明）
国土地域区分：	（7）島嶼地域

【分布域】

八重山諸島の宮古島にのみ分布していた記録がある。1887 年 2 月 5 日に宮古島において 1 羽が植物学・民俗学者田代安定により採集された（タイプ標本：山階鳥研所蔵）。ただし、採集地と採集年については、以下のような経歴がある。この標本は当時東京大学動物学教室の所蔵品で、ラベルには「田代安定氏採集、二月五日、八重山産μm」とのみ記されていた。原記載者の黒田長禮が菊池米太郎を介して当時台湾に在住していた田代に採集年と採集地を問い合わせ、「1887 年宮古島」との返答を得て、本種の採集年および採集地が決定した。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	－

特記事項

きわめて分布域の狭い種として貴重である。タイプ標本の産地が元々曖昧であったことに加え、採集者の田代安定は 1889～90 年にハワイ、サモア、グアムなどを海軍練習船で巡航し、植物や人類学の標本を採集している。特に 1890 年には 2 月 5 日にグアム島を調

査しており、その際に入手、もしくは採集した可能性があり、グアム島産ズアカショウビンの変異個体ではないかとの疑いがあって、分類学上の問題が残されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ミヤコショウビン	*Todiramphus miyakoensis*	EX
第４次 2019：	ミヤコショウビン	*Todiramphus miyakoensis*	EX
第４次 2018：	ミヤコショウビン	*Todiramphus miyakoensis*	EX
第４次 2017：	ミヤコショウビン	*Todiramphus miyakoensis*	EX
第４次 2015：	ミヤコショウビン	*Halcyon miyakoensis*	EX
第４次：	ミヤコショウビン	*Halcyon miyakoensis*	EX
第３次：	ミヤコショウビン	*Halcyon miyakoensis*	EX
第２次：	ミヤコショウビン	*Halcyon miyakoensis*	EX
第１次：	ミヤコショウビン	*Halcyon miyakoensis*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- アニマ編集部，1985．ミヤコショウビン－魅惑の謎と歴史に包まれた絶滅鳥．アニマ，13(6): 85-89．
- 平岡考，2004．幻の絶滅鳥 ミヤコショウビンの謎．山階鳥類研究所編，鳥の雑学事典．日本実業出版社．pp. 162-164．
- Kuroda, N., 1925. A Contribution to the Knowledge of the Avifauna of the Riu Kiu Islands and the Vicinity. Published by the author, Tokyo. 293pp.
- 黒田長禮，1919．南日本産三新鳥の記載．動物学雑誌，31(370): 229-233．
- 森岡弘之，1974．琉球列島の鳥相とその起源．国立科学博物館専報，7: 203-211．
- 森岡弘之，1974．沖縄特有の鳥類．自然科学と博物館，41(3): 123-124．
- 森岡弘之，1989．ヤンバルクイナとミヤコショウビン－琉球の鳥 2 題－．日本の生物，3(1): 19-24．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Todiramphus miyakoensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Todiramphus miyakoensis* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Other】Other
Threat types:	―
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	西海功（国立科学博物館）・梶田学
Author:	Isao Nishiumi and Manabu Kajita

公表年月：2026 年 3 月

キツツキ目 Piciformes　キツツキ科 Picidae

キタタキ

***Dryocopus javensis richardsi* Tristram, 1879**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　①②③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。 ②信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。 【判断理由】 1890 年代には対馬の上県と下県に生息していた。1891 年に標本 7 点が採集された。対馬では 1920 年に雌雄 2 羽が採集されたのを最後に生息が確認されていず、絶滅したと考えられる。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

大型のキツツキで、広大な森林に生息する。対馬では 1920 年に採集されたのを最後に絶滅したとされている。

基礎情報

【形態】

大型のキツツキで、全長 48 cm、オスは頭上、冠羽、顎線が赤色で、腰、腹、下雨覆、初列風切羽先端は白く、それ以外は黒い。メスの頭部は黒い。嘴は黄白色。クマゲラは腰と腹も黒い点で識別できる。

【生活史】

留鳥で、森林につがいで生息し、昼行性。朝鮮半島では特定の地域に生息し、繁殖期は 4～6 月、大木の幹に巣穴を掘り、入口は直径 11～14 cm の楕円形で、巣穴の深さは 46～120 cm。一腹産卵数は 3～4、抱卵期間は 14～22 日、育雛期間は 24～26 日。行動圏の大きさは 3～12.5 km^2である。

【生息環境】

山地の渓谷沿いの常緑の針葉樹や広葉樹のうっ閉した広大な森林に生息していた。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

種キタタキ（*Dryocopus javensis*）はミャンマー、中国西南部からベトナム、マレー半島、大スンダ列島、ボルネオ、フィリピンにかけての東南アジアと東アジアの朝鮮半島に分布する。朝鮮半島と対馬に分布していた亜種 *Dryocopus javensis richardsi* は、対馬では絶滅した。

絶滅に至った経緯とその要因

1890 年代には対馬の上県と下県に生息していた(1891 年に計 7 点の標本が採集された)。1920 年 10 月に採集された雌雄が最後の標本で、これ以降の生息は確認されていない。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	ー

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	キタタキ	*Dryocopus javensis richardsi*	EX
第４次 2019：	キタタキ	*Dryocopus javensis richardsi*	EX
第４次 2018：	キタタキ	*Dryocopus javensis richardsi*	EX

第４次 2017：	キタタキ	*Dryocopus javensis richardsi*	EX
第４次 2015：	キタタキ	*Dryocopus javensis richardsi*	EX
第４次：	キタタキ	*Dryocopus javensis richardsi*	EX
第３次：	キタタキ	*Dryocopus javensis richardsi*	EX
第２次：	キタタキ	*Dryocopus javensis richardsi*	EX
第１次：	キタタキ	*Dryocopus javensis richardsi*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【長崎県】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 阿部幸六，1935．珍鳥キタタキを訪ねて：対馬の旅．鳥，8: 500-509.
- Chung, J. R., 1987. White-bellied Black Woodpecker, *Dryocopus javensis richardsi*. In: Wild Bird Society of Japan (ed.), Endangered Bird Species in the Korean Peninsula, pp. 1-21, Museum Korean Nature, Tokyo.
- Ham, K. H. and P. O. Won, 1982. Ecology and conservation of the Tistram's Woodpecker, *Dryocopus javensis richardsi* Tristram in Korea. J. Yamashina Inst. Ornithol., 14: 254-269.
- 樋口広芳・森岡弘之・山岸哲（編），1997．日本動物大百科，第 4 巻鳥類 II．182pp. 平凡社，東京.
- Iijima, I., 1891. Notes on a collection of birds from Tsushima. J. Coll. Sci. Imp. Univ. Japan, 5: 105-128.
- 黒田長禮，1925a．日本の天然記念物としての鳥類．鳥，4: 269-285.
- 黒田長禮，1925b．対馬の動物．天然記念物調査報告動物之部，1:19-39.
- 森岡弘之，1993．キタタキ．上野俊一（編），滅びゆく日本の動物 50 種．pp. 70-72．築地書館，東京.
- 日本鳥類目録編集委員会，2000．日本鳥類目録改定第 6 版．345pp. 日本鳥学会，帯広.
- 山口鉄男・鴨川誠，1971．対馬の鳥類．長崎大学教養部紀要，自然科学，12: 25-47.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Dryocopus javensis richardsi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Dryocopus javensis richardsi* is listed as EX under criteria ①②③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is

anticipated to be met.

①Reliable surveys and records have confirmed that this species is already extinct in the wild.

②Multiple reliable surveys could not confirm the existence of this species.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest
Threat types:	―
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	永田尚志（新潟大学）・藤巻裕蔵（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Hisashi Nagata and Yuzo Fujimaki

公表年月：2026 年 3 月

ハヤブサ目 Falconiformes　ハヤブサ科 Falconidae　　日本固有

シマハヤブサ

***Falco peregrinus furuitii* Momiyama, 1927**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　②③

基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
具体的には、以下の事項を満たす。
②信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。
③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。
【判断理由】
戦後に火山列島の各島で複数回実施されている調査において記録されていない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

シマハヤブサは火山列島のみに記録のあるハヤブサの固有亜種である。本亜種は北硫黄島、硫黄島、南硫黄島に生息していたが、1937 年の北硫黄島を最後に記録はなくすでに絶滅している。硫黄島では精糖業の発展に伴う人口増加による繁殖阻害があったと考えられる。また硫黄島と北硫黄島では入植や外来のネコ、ネズミの野生化により主な食物となる海鳥が激減したことも絶滅要因の一つと考えられる。南硫黄島では直接的な人為的影響はなかったものの、面積が狭いため火山列島全体のメタ個体群の一部として集団を維持していたと考えられることから、他島での絶滅がこの島での絶滅の引き金になった可能性がある。

基礎情報

【形態】

全長約 40 cm で、亜種ハヤブサに比べて体サイズが小型だが、尾が長い。羽色は褐色みが強く、下面の横斑は亜種ハヤブサに比べて太い。

【生活史】

火山列島には留鳥として生息していたが、繁殖に関する記録はない。硫黄島ではアナドリを捕食していたことが記録されており、海鳥を主食としていたと考えられている。

【生息環境】

硫黄島では島の中央部の岩地において頻繁に観察されていた。北硫黄島、南硫黄島での生息環境は記録されていない。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部 海岸部】森林，海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

火山列島の北硫黄島、硫黄島、南硫黄島で生息の記録がある。硫黄島では 1891 年に 4、5 つがいの生息が報告されている。北硫黄島では 1930 年代に多数の標本が採集されている。以前は南硫黄島の記録はないとされていたが、1935 年の調査にてハヤブサが記録されており、分布から本亜種と考えるのが合理的と判断した。

なお環境省レッドデータブック 2014 は、八丈島からも本亜種の標本が得られているとしていたが、黒沢隆氏が標本を再確認したところ本亜種とは認められなかった。また、伊豆諸島鳥島からも本亜種とされる標本が採集されているが、当該標本は不完全な状態で、正確に本亜種と同定することができなかったため、記録から除いた。

絶滅に至った経緯とその要因

硫黄島では戦前に精糖業が盛んになったため住民が増加したことで、繁殖が阻害されていたと考えられる。また、硫黄島、北硫黄島では人間の入植、ネコの野生化、外来ネズミ類の侵入などにより中小型海鳥の繁殖集団が局所絶滅している。シマハヤブサは海鳥を主な食物としていたと考えられることから、利用可能な食物量が激減した可能性がある。北硫黄島では 1930 年代に多数の標本が採集されていることから、採集圧も絶滅要因の一つとなっていた可能性は否めない。一方で南硫黄島では入植や外来哺乳類の侵入はなく、多数の海鳥が繁殖している。ただし南硫黄島は面積が約 3.5 km^2しかなく、硫黄島や北硫黄島に比べて非常に狭いため、シマハヤブサの集団がこの島だけで独立して維持されていたとは考えづらい。主な繁殖地となっていた硫黄島と北硫黄島の繁殖集団が消滅することで、メタ個体群の一部となっていた南硫黄島の集団も消失したものと考えられる。

要因の区分：	（過去）	捕獲・狩猟/園芸採取，分布・産地局限，その他（過去：人による繁殖撹乱・外来ネズミ類の侵入に起因する海鳥の局所絶滅による

		食物不足　現在：2000 年代には絶滅していたと考えられる。）
	（現在）	その他（過去：人による繁殖撹乱・外来ネズミ類の侵入に起因する海鳥の局所絶滅による食物不足　現在：2000 年代には絶滅していたと考えられる。）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シマハヤブサ	*Falco peregrinus furuitii*	EX
第４次 2019：	シマハヤブサ	*Falco peregrinus furuitii*	EX
第４次 2018：	シマハヤブサ	*Falco peregrinus furuitii*	EX
第４次 2017：	シマハヤブサ	*Falco peregrinus furuitii*	DD
第４次 2015：	シマハヤブサ	*Falco peregrinus furuitii*	DD
第４次：	シマハヤブサ	*Falco peregrinus furuitii*	DD
第３次：	シマハヤブサ	*Falco peregrinus furuitii*	CR
第２次：	シマハヤブサ	*Falco peregrinus furuitii*	EN
第１次：	シマハヤブサ	*Falco peregrinus fruitii*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（伊豆諸島）】情報不足(DD)，【東京都（小笠原諸島）】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 川上和人・鈴木創・千葉勇人・堀越和夫，2008．南硫黄島の鳥類相．小笠原研究，33: 111-127.
- 川上和人・鈴木創・堀越 宙，2021．2019 年における北硫黄島の鳥類相．小笠原研究，47: 185-200.
- 清棲幸保，1978．増補改訂版日本鳥類大図鑑 II．講談社，東京.
- 黒沢隆・金井裕，2014．シマハヤブサ．レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－2 鳥類，p. 236．ぎょうせい，東京.
- Minton, J. 1994. Measurements of 21 *Falco peregrinus furuitii* specimens. Strix, 13: 247-249.
- 籾山徳太郎，1927．日本産新鳥類(1)．東亜鳥学彙報，1: 1-80.

- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並びに硫黄列島産の鳥類に就いて．日本生物地理学会会報，1: 89-186.
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．日本鳥学会，三田．438pp.
- 岡部正義，1936．硫黄列島の概況と植物調査．東京営林局報，38: 47-94.
- Seebohm, H., 1891. On the birds of the Volcano Islands. Ibis 6th ser., 3: 189-192.
- 時田賢一・渡辺義昭，2001．硫黄島鳥類目録（1999 年 10 月－2000 年 8 月）．我孫子市鳥の博物館調査研究報告．9: 35-45.
- 塚本洋三，1983．南硫黄島の鳥類．環境庁自然保護局（編），pp. 249-285．日本野生生物研究センター，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Falco peregrinus furuitii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Falco peregrinus furuitii* is listed as EX under criteria ②③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

②Multiple reliable surveys could not confirm the existence of this species.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　シジュウカラ科 Paridae　　日本固有

ダイトウヤマガラ

***Sittiparus varius orii* Kuroda, 1923**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。 【判断理由】 1922 年に南大東島、北大東島で採集された後、記録がないため。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

大東諸島の固有亜種。南大東島にて 1922 年にオス 8 羽、メス 4 羽が発見、採集され、北大東島でも同年オス 2 羽が採集された。その後記録がないので絶滅したと考えられている。絶滅の原因は不明。

基礎情報

【形態】

頭は黒色淡色の縦斑が後頭部にある。頬および額はバフ色だがやや褐色みが強い。背、腰、尾羽と翼はオリーブ色みのある青灰色で、上背には栗褐色帯がある。下面は赤みのある褐色。虹彩は暗褐色（vandyke brown）、嘴は石板黒色。脚は青みがかった灰色（Kuroda 1923 および標本の観察による）。亜種ナミエヤマガラ（*Sittiparus varius namiyei*）に非常によく似ているが測定上やや小さい。測定値は以下のとおり。翼長 71～79.5 mm、尾長 47～56 mm、ふ蹠長 19～20 mm、露出嘴峰長 11.5～13.5 mm、全嘴峰長 14.5～15 mm。以上、Kuroda（1923）の記述による。

【生活史】

繁殖の記録はない。巣卵の標本は採集されたことがない。

【生息環境】

不明。

生息環境区分：	【陸域_その他（不明）】その他（不明）
国土地域区分：	（7）島嶼地域

【分布域】

大東諸島の南大東島および北大東島のみに分布していた記録がある。他亜種は、北海道から八重山諸島にかけてと伊豆諸島を含む日本、および朝鮮半島、台湾島に繁殖分布している。

南大東島で折居彪二郎によって、1922 年 9 月 27 日から 10 月 18 日までにオス 8 羽、メス 4 羽（タイプ標本オス：黒田長禮標本 No.7359 を含む Nos.7352～7363）、北大東島にて同年 10 月 27 日にオス 2 羽（黒田長禮標本 No.7364、7365）が採集されたのみ。これらの標本は南大東島産の No.7356、No.7358（これらは現在山階鳥研所蔵）を除いて 1945 年戦災によって焼失した。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	－

特記事項

分布域のきわめて狭い亜種として貴重である。分類学上不明な点も多く、学術上も興味深い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ダイトウヤマガラ	*Poecile varius orii*	EX
第４次 2019：	ダイトウヤマガラ	*Poecile varius orii*	EX
第４次 2018：	ダイトウヤマガラ	*Poecile varius orii*	EX
第４次 2017：	ダイトウヤマガラ	*Poecile varius orii*	EX
第４次 2015：	ダイトウヤマガラ	*Parus varius orii*	EX
第４次：	ダイトウヤマガラ	*Parus varius orii*	EX
第３次：	ダイトウヤマガラ	*Parus varius orii*	EX
第２次：	ダイトウヤマガラ	*Parus varius orii*	EX
第１次：	ダイトウヤマガラ	*Parus varius orii*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 池田善英，1986．北大東島で冬期に観察された鳥類．山階鳥類研究所報告，18: 68-70.
- Kuroda, N., 1923. Descriptions of apparently new forms of birds from the Borodino Islands, Riu Kiu group, Japan. Bull. B. O. C., 43: 120-123.
- Kuroda, N., 1925. A Contribution to the Knowledge of the Avifauna of the Riu Kiu Islands and the Vicinity. Published by the author, Tokyo. 293pp.
- 大沢啓子・大沢夕志，1990．南大東島で観察された鳥類．山階鳥類研究所報告，22: 133-137.
- 大沢啓子・大沢夕志，1995．オオコウモリの飛ぶ島．山と渓谷社，東京．229pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sittiparus varius orii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sittiparus varius orii* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately

the past 50 years.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Other】Other
Threat types:	―
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	西海功（国立科学博物館）・梶田学
Author:	Isao Nishiumi and Manabu Kajita

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　メジロ科 Zosteropidae　　日本固有

ムコジマメグロ

***Apalopteron familiare familiare* (Kittlitz, 1830)**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。 【判断理由】 1930 年の聟島での繁殖についての記録の後、確実な記録はない。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

父島列島・聟島列島固有亜種。1828 年 5 月 Kittlitz によって父島にて発見、採集され、その後聟島列島（聟島、媒島）でも生息が確認された。1930 年には聟島で本亜種の繁殖が初めて確認されたが、これを最後に本亜種の確実な記録はなく、絶滅したものと考えられている。

基礎情報

【形態】

上嘴の基部の両側に黄色斑があり、前額に T 状黒帯がある。この黒帯に続いて目の後方から頬にかけて三角形の黒斑がある。眼瞼には白色の小羽が密生する。頭頂は少し黄色みを帯びた暗オリーブ色、上面は灰色みを帯びた暗オリーブ色、尾羽は暗褐色で外縁はオリーブ色。翼の羽毛は基本的に暗褐色であるが各羽にオリーブ色の外縁がある。下面は淡黄色、脇は灰色みが強い。嘴は黒色、下嘴の基半部は青灰色、脚は青灰色、虹彩は褐色。ハハジマメグロ（*Apalopteron familiare hahasima*）と酷似するが、ハハジマメグロの方が本亜種よりも頭頂が濃いオリーブ色で、背面および下面の黄色が濃く、とくに喉が濃黄色であることおよび測定上（特に嘴峰長とふ蹠長が）わずかに大型であることで区別される（以上、主に山階 1930、1933）。山階（1933）による本亜種の測定値は、8 オス成鳥：翼長 63～67 mm、尾長 55～58 mm、露出嘴峰長 16.5～17 mm、ふ蹠長 23～25 mm。

【生活史】

山階（1930、1933）によると、聟島ではチョウやガの幼虫、カ、ガガンボなどの昆虫や樹木の果実を食べ、通常 10～20 羽位の群れを形成していた。常にヒーユ又はヒーヨと聞こえる声で鳴き合いながら枝上で昆虫や樹木の果実をさがしていた。ただし、警戒するときはキキキ……というメジロに似た声をだした。人を恐れることは少なく、数 m の所まで接近することが容易であった。産卵期は 5 月上旬～下旬。巣は地上 1～3 m にあり枝葉の込んだ中に作られる。巣の形は壁の厚い杯形であるが作り方は粗雑である。巣の本体はタコノキの繊維、ビロウの毛を主材とし、これに枯葉の繊維、ヤギの毛、陰花植物の綿毛、クロアシアホウドリの羽毛、樹皮等を混ぜたもので、産座にはビロウの毛やタコノキの枯葉の繊維が敷いてある。巣の大きさは外径 105～125 mm、内径 55 mm、深さ 40 mm。一腹産卵数は 2 卵。卵の地色は淡帯緑青色で、灰褐色および紫褐色の斑が点在する。6 卵の測定値は長径 19.5～20.5 mm、短径 15.0～15.8 mm。1930 年 5 月 15 日に得られた巣には孵化後間もない 2 羽の雛がいた。また、同年 5 月 12 日には巣立ち頃の幼鳥 1 羽が採集されている。

【生息環境】

山階（1930、1933）によると、聟島では海岸のシマボウの林や丘陵上のオガサワラタコノキの林などに生息しており、シマシャリンバイ、シロテツ、クロテツ、マルバヤブニッケイ、モクタチバナの混生する林内で、これらの各樹種の枝に営巣していた。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域,（7）島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島の聟島列島（聟島、媒島）および父島に分布していた記録がある。

父島では、1828 年 5 月 Kittlitz によって発見、標本が採集された。その後、1889 年 5～8 月にかけて Holst が小笠原諸島で鳥類の採集を行った際、父島では確認されなかった。1910

年 11 月に長與鼎（長與は標本商であり実際渡航して採集したのは高田昂であるという）によって父島で 1 羽が採集されているが（旧京都大学標本。現国立科学博物館標本）、この標本の採集地については、山階（1930）が疑問を呈している。これ以降父島では確実な記録がなく絶滅したと考えられている。聟島列島では、1889 年 Holst が聟島および媒島で発見し採集した。1930 年 1 月 23、24 日、山階芳麿は媒島に採集人を送り本亜種が絶滅していることを確認したが、聟島にはこの時点で依然として生息しており、同年 1 月 16 日に 16 羽を採集した。1930 年 5 月には聟島で 5 巣と幼鳥 1 羽を採集し本亜種の繁殖を初めて確認した。しかし、それを最後に本亜種の確実な記録はない。すでに 1941 年から 1942 年頃、聟島でメグロを見なくなったという記録がある。戦後、東京都立大学の調査隊が観察した記録があるが、写真もなく詳しいことはわかっていない。

絶滅に至った経緯とその要因

はっきりしないが、鳥マラリアなどの病原体が島に持ち込まれることによって絶滅した可能性がある。

要因の区分：	（過去）	感染症/病原菌
	（現在）	ー

特記事項

分布がきわめて狭く、種の分布域の北限の亜種として非常に貴重である。同種に属する亜種ハハジマメグロとの形態、生態の分化程度など詳しい研究はなされておらず、学術的にも残された課題は多い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	メグロ	*Apalopteron familiare familiare*	EX
第４次 2019：	メグロ	*Apalopteron familiare familiare*	EX
第４次 2018：	メグロ	*Apalopteron familiare familiare*	EX
第４次 2017：	メグロ	*Apalopteron familiare familiare*	EX
第４次 2015：	ムコジマメグロ	*Apalopteron familiare familiare*	EX
第４次：	ムコジマメグロ	*Apalopteron familiare familiare*	EX
第３次：	ムコジマメグロ	*Apalopteron familiare familiare*	EX
第２次：	ムコジマメグロ	*Apalopteron familiare familiare*	EX
第１次：	ムコジマメグロ	*Apalopteron familiare familiare*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国指定特別天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- Kittlitz, F. H., 1830. Uber die Vogel der Inselgruppe von Boninsima. Mem. Acad. Imp. St. Petersburg, 1: 231-248.
- Lutke, F., 1835. Voyage Autour du Monde, dans annees 1826, 1827, 1828 et 1829., tome second. 1826-1829, 2. pp. 150-166. Firmin Didot Freres, Paris.
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並びに硫黄列島産の鳥類に就いて．日本生物地理学会会報，1(3): 89-186.
- 大熊良一，1981．小笠原諸島異国船来航記．近藤出版社，東京．193pp.
- Seebohm, H., 1890. On the Birds of the Bonin Islands. Ibis, pp. 95-108.
- 田中弘之，1997．幕末の小笠原．中央公論社，東京．273pp.
- 東京都建設局公園緑地部，1969．小笠原諸島自然景観調査報告書．東京都建設局公園緑地部，東京．188pp.
- 山階鳥類研究所，1975．この鳥を守ろう．霞会館，東京．285pp.
- 山階芳麿，1930．聟島列島の鳥類．鳥，6(30): 323-340.
- 山階芳麿，1934．日本の鳥類と其の生態 第 1 巻．梓書房，東京．524pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Apalopteron familiare familiare has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Apalopteron familiare familiare* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest
Threat types:	―
Law designation status for conservation	Nationally Designated Special Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	西海功（国立科学博物館）・梶田学
Author:	Isao Nishiumi and Manabu Kajita

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ミソサザイ科 Troglodytidae　　日本固有

ダイトウミソサザイ

***Troglodytes troglodytes orii* Yamashina, 1939**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。 【判断理由】 1938 年にオス 1 羽が発見、採集された後、記録がない。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

大東諸島（南大東島）の固有亜種。南大東島にて 1938 年にオス 1 羽が発見、採集された。その後記録がないので絶滅したと考えられている。絶滅の原因は不明。

基礎情報

【形態】

基本的には上面暗褐色、腰や翼には黒色の斑や縞がある。尾羽にも黒色の縞がある。これらの黒斑や縞は本州産の亜種（*Troglodytes troglodytes fumigatus*）に比べ濃く太い。下面は上面よりもやや薄い褐色で黒斑はほとんどない。裸出部の色は不明。以上、Yamashina（1939）およびタイプ標本の観察による。伊豆諸島南部産の亜種モスケミソサザイ（*Troglodytes troglodytes mosukei*）に非常によく似ているが、本亜種の方がやや下面が淡い色をしている。測定値は以下のとおり（Yamashina 1939）。オス翼長 47 mm、尾長 32 mm、ふ蹠長 16.5 mm、露出嘴峰長 11 mm。

【生活史】

不明。繁殖の記録はない。

【生息環境】

不明。繁殖の記録はない。

生息環境区分：	【陸域_その他（不明）】その他（不明）
国土地域区分：	（7）島嶼地域

【分布域】

大東諸島の南大東島のみに分布していた記録がある。南大東島で 1938 年 1 月 21 日、Morimitsu Nagayama によってオス成鳥 1 羽（タイプ標本山階鳥研所蔵標本 No.25476）が採集されたのみ（Yamashina 1939）。他亜種は、ユーラシア大陸に広く分布しており、日本では北海道から屋久島にかけてと伊豆諸島に繁殖分布している。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	－

特記事項

分布域のきわめて狭い亜種として貴重である。他亜種との系統関係や分化程度など分類学上不明な点も多く学術上も重要である。ただし、1938 年の採集後にまったく記録がないこと（Kuroda 1925、池田 1986、大沢・大沢 1990、1995）、採集個体が 1 羽のみであること、採集が 1 月であることなどから冬期の迷行個体の可能性もある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ダイトウミソサザイ	*Troglodytes troglodytes orii*	EX
第４次 2019：	ダイトウミソサザイ	*Troglodytes troglodytes orii*	EX
第４次 2018：	ダイトウミソサザイ	*Troglodytes troglodytes orii*	EX
第４次 2017：	ダイトウミソサザイ	*Troglodytes troglodytes orii*	EX
第４次 2015：	ダイトウミソサザイ	*Troglodytes troglodytes orii*	EX
第４次：	ダイトウミソサザイ	*Troglodytes troglodytes orii*	EX
第３次：	ダイトウミソサザイ	*Troglodytes troglodytes orii*	EX
第２次：	ダイトウミソサザイ	*Troglodytes troglodytes orii*	EX
第１次：	ダイトウミソサザイ	*Troglodytes troglodytes orii*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 姉崎悟・嵩原健二，2001．南大東島産鳥類目録．沖縄県立博物館紀要，27: 51-75．
- 池田善英，1986．北大東島で冬期に観察された鳥類．山階鳥類研究所報告，18: 68-70．
- Kuroda, N., 1923. Descriptions of apparently new forms of birds from the Borodino Islands, Riu Kiu group, Japan. Bull. B. O. C., 43: 120-123.
- Kuroda, N., 1925. A Contribution to the Knowledge of the Avifauna of the Riu Kiu Islands and the Vicinity. Published by the author, Tokyo. 293pp.
- 日本鳥類目録編集委員会（編），2000．日本鳥類目録改訂第 6 版．日本鳥学会，帯広．345pp.
- 大沢啓子・大沢夕志，1990．南大東島で観察された鳥類．山階鳥類研究所報告，22: 133-137．
- 大沢啓子・大沢夕志，1995．オオコウモリの飛ぶ島．山と渓谷社，東京．229pp.
- Yamashina, Y., 1939. A New Subspecies of *Troglodytes troglodytes* from The Borodino Island. Tori, 10(48): 227-228.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Troglodytes troglodytes orii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Troglodytes troglodytes orii* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is

anticipated to be met. ③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Other】Other
Threat types:	―
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	西海功（国立科学博物館）・梶田学
Author:	Isao Nishiumi and Manabu Kajita

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ツグミ科 Turdidae　　日本固有

オガサワラガビチョウ

***Cichlopasser terrestris* (Kittlitz, 1830)**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　①②③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

過去に我が国に生息したことが確認されており､飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
具体的には、以下の事項を満たす。
①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。
②信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。
③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。
【判断理由】
小笠原諸島の固有種の中型ツグミ類で、1828 年 Kittlitz によって 4 羽が採集されたのみである。その後、確認記録はなく、絶滅したものと考えられている。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

小笠原諸島の固有種である。中型のツグミ類で、1828 年 Kittlitz によって 4 羽が採集されたのみである。その後確実な記録はなく、絶滅したものと考えられている。絶滅の原因は不明である。

基礎情報

【形態】

背面の地色はオリーブ褐色であるが、腰、上尾筒、尾羽は栗褐色を帯びている。頭部および背には黒色縦斑がある。翼の雨覆羽および三列風切羽は、内側が黒色で、幅広い褐色羽縁がある。下面は、中央が白色、体側は淡褐色。喉には暗褐色の縦斑がある。下尾筒は暗褐色で、各羽の先端に大きな白斑がある。翼下面には、暗白色帯がある。雌雄で羽色および測定値の差は認められない。嘴は黒く、脚は褐色みのある肉色。虹彩は暗褐色（以上の記述は主に Kittlitz 1830 と Seebohm 1890 によった）。独特な羽色で類似する種はいないが、比較的似ている種として国内産の鳥の中では、トラツグミ（*Zoothera dauma aurea*）およびマミジロ（*Turdus sibiricus davisoni*）のメスとの識別が問題になる。トラツグミには全身に黒色の三日月斑があることで、マミジロのメスには背中に黒色縦斑がないことで区別が可能である。Seebohm（1890）によるライデン自然史博物館所蔵標本の測定値は、翼長 96.5 mm、小翼羽の長さ 20.5 mm、尾長 66.0 mm、嘴峰長 22.0 mm、ふ蹠長 27.3 mm である。

【生活史】

少数の個体で生活し、群れを形成することはなく、常に地上で生活していて樹木にとまることはなかった。地上を素早く走り、地面すれすれに低く飛ぶのが観察された。アカゲラに似た声（ただし、アカゲラほど鋭くない）でチェク！チェク！（tscheck! tscheck!）とよく鳴いていたが、それ以外の声は 1 度も聞かれなかった。また、採集した個体の胃の中には、どの個体にも小型の昆虫が入っており、時に甲殻類の残骸が入っていた。以上、Kittlitz（1830）による。Kittlitz が小笠原諸島に上陸したのは 5 月であることから、これらの記述は本種の夏期の生態を示しているものと思われる。巣卵の記録はまったくなく、繁殖は確認されていない。

【生息環境】

海岸近くの平坦な場所の森林には、いたる所に本種が生息していた。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】森林
国土地域区分：	（7）島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島の父島にのみに分布していた記録がある。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	ー

特記事項

分布域のきわめて狭い種として非常に貴重である。他に類似の種がおらず、現在のところ正確な近縁種、系統関係も明らかになっていないなど学術的にも不明な点が多く、今後の研究が待たれる。

小宮（2010）によれば、1885 年 12 月に、東京上野動物園において藤田源造氏寄贈のオガサワラガビチョウの飼育が開始されたものの、1889 年 9 月に、当該個体がイヌに食われて死亡した記録が見つかったとのことだが、標本は残っておらず、写真等の裏付け資料も確認されていない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オガサワラガビチョウ	*Cichlopasser terrestris*	EX
第４次 2019：	オガサワラガビチョウ	*Cichlopasser terrestris*	EX
第４次 2018：	オガサワラガビチョウ	*Cichlopasser terrestris*	EX
第４次 2017：	オガサワラガビチョウ	*Cichlopasser terrestris*	EX
第４次 2015：	オガサワラガビチョウ	*Cichlopasser terrestris*	EX
第４次：	オガサワラガビチョウ	*Cichlopasser terrestris*	EX
第３次：	オガサワラガビチョウ	*Cichlopasser terrestris*	EX
第２次：	オガサワラガビチョウ	*Cichlopasser terrestris*	EX
第１次：	オガサワラガビチョウ	*Turdus terrestris*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Greenway, J. C. Jr., 1958. Extinct and Vanishing Birds of the World. American Committee for International Wild Life Protection, New York.
- Kittlitz, F. H., 1830. Uber die Vogel der Inselgruppe von Boninsima. Mem. Acad. Imp. St. Petersburg, 1: 231-248.
- 小宮輝之，2010．物語上野動物園の歴史．中央公論新社，東京．292pp.

- Lutke, F., 1835. Voyage Autour du Monde, dans annees 1826, 1827, 1828 et 1829., tome second. 1826-1829, 2. pp. 150-166. Firmin Didot Freres, Paris.
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並びに硫黄列島産の鳥類に就いて．日本生物地理学会会報，1(3): 89-186.
- 大熊良一，1985．小笠原諸島異国船来航記．193pp. 近藤出版社，東京.
- Seebohm, H., 1890. On the Birds of the Bonin Islands. Ibis, 95-108.
- 田中弘之，1997．幕末の小笠原．273pp. 中央公論社，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cichlopasser terrestris has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cichlopasser terrestris* is listed as EX under criteria ①②③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

①Reliable surveys and records have confirmed that this species is already extinct in the wild.

②Multiple reliable surveys could not confirm the existence of this species.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest
Threat types:	―
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	永田尚志（新潟大学）・梶田学
Author:	Hisashi Nagata and Manabu Kajita

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　アトリ科 Fringillidae　　日本固有

オガサワラマシコ

***Carpodacus ferreorostris* (Vigors, 1829)**

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　①②③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
具体的には、以下の事項を満たす。
①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。
②信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。
③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。
【判断理由】
小笠原諸島の父島にのみに分布していた記録がある。
1827 年 6 月に雌雄各 1 羽（オスはタイプ標本）が父島で採集され、本種が記載された。1828 年 5 月に Kittlitz が少なくとも 9 羽を採集した記録が残っている。その後の採集・観察記録はない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

小笠原諸島固有種。巨大な嘴を持つアトリ科の鳥で、1827 年 Beechey によりオス、メス各 1 羽、1828 年 Kittlitz により少なくとも 9 羽が採集されたのみで、その後確実な記録はなく、絶滅したものと考えられている。絶滅の原因は不明。

基礎情報

【形態】

雌雄ともに大型の嘴を持つ。オスは、上面（上尾筒を含み）は赤みを帯びた褐色で、背中には暗褐色の縦斑がある。前額、眉、頬および上胸は深紅色（若い個体では赤みが薄い）で、下胸は赤みが薄く、腹部は灰白色。翼は全体的に褐色で、雨覆羽は灰色みを帯びる。尾羽は汚茶色。メスは上面および翼は茶色で、背には暗褐色の縦斑がある。下面は薄茶色で脇には暗褐色の縦斑がある。前額は黄色。Sharpe（1888）の記述による大英博物館所蔵の 2 標本の測定値は以下のとおり。

Reg. No. 1855.12.19.39 オス成鳥（1827 年 6 月採集）：全長 178 mm、翼長 108 mm、尾長 71 mm、嘴峰長 24.5 mm、ふ蹠長 28 mm。（山階（1933）によれば、この標本は 1 歳鳥の可能性あり）

Reg. No. 1855.12.19.74 メス成鳥（1827 年 6 月採集）：全長 190 mm、翼長 106.5 mm、尾長 74 mm、嘴峰長 29 mm、ふ蹠長 28 mm。

よく似た種はいない。日本産ではアカマシコ（*Carpodacus erythrinus grebnitskii*）などに比較的似ているが、これらの中に本種のように大型の嘴を持つ種は皆無である。

【生活史】

本種の地鳴きは、非常に高く澄んだやわらかい音質の笛のような単音で、短く鳴くときもあれば、長くのばして鳴くこともある。また、ひと声鳴いて終わりの時もあれば、何度かくり返して鳴くこともある。採集した個体の筋胃とそ嚢の中には小さな果実と木の芽が入っていた。以上、Kittlitz（1830）、Greenway（1958）の記述による。巣卵の記録はなく、繁殖は確認されていない。

【生息環境】

本種は、海岸近くの森に単独もしくはつがいで生息し、木立に隠れて観察しにくいが、性質は非常に遅鈍で警戒心が少ないため、きわめて近い距離から銃で捕殺することができた。たいていは、地面を走っている時に観察され、めったに高い樹木にはとまらない。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】森林，草地
国土地域区分：	（7）島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島の父島にのみに分布していた記録がある。

1827 年 6 月にイギリス船 Blossom 号の Beechey がオス、メス各 1 羽（オスはタイプ標本）を採集、この標本は現在は現在大英博物館（イギリス・ロンドン）に所蔵されている。1828 年 5 月に Kittlitz が少なくとも 9 羽を採集し、この標本は現在以下の博物館に所蔵されている。ロシア科学アカデミー動物学博物館（ロシア・セントペテルブルグ）に 2 点（少なくともオス 1 点が含まれる）。ゼンケンベルグ博物館（ドイツ・フランクフルト）に 2 点。ベルリン博物館（ドイツ・ベルリン）にメス 1 点。ライデン博物館（オランダ・ライデン）にオス、メス各 1 点。パリ自然史博物館（フランス・パリ）に 1 または 2 点。アメ

リカ自然史博物館（アメリカ・ニューヨーク）にメス 1 点。1827 年、1828 年の標本はそれぞれ Bonin Islands、Bonin-sima と書かれているだけで正確な採集地が記されていないが、Blossom 号は小笠原諸島の中では父島のみに上陸していること、Kittlitz が上陸したのは父島のみであることから、これらの標本は父島で採集されたと考えられる。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	―

特記事項

分布域のきわめて狭い種として非常に貴重である。ネパールのベニマユマシコ（*Pinicola subhimachalus*）やギンザンマシコ（*Pinicola enucleator sakhalinensis*）、ハワイミツスイ類（Drepanididae）などとの類縁関係が示唆されているが、現在のところ正確な近縁種、系統関係は明らかになっていない。その他学術的にも不明な点が多く、今後の研究が待たれる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オガサワラマシコ	*Chaunoproctus ferreorostris*	EX
第４次 2019：	オガサワラマシコ	*Chaunoproctus ferreorostris*	EX
第４次 2018：	オガサワラマシコ	*Chaunoproctus ferreorostris*	EX
第４次 2017：	オガサワラマシコ	*Chaunoproctus ferreorostris*	EX
第４次 2015：	オガサワラマシコ	*Chaunoproctus ferreorostris*	EX
第４次：	オガサワラマシコ	*Chaunoproctus ferreorostris*	EX
第３次：	オガサワラマシコ	*Chaunoproctus ferreorostris*	EX
第２次：	オガサワラマシコ	*Chaunoproctus ferreorostris*	EX
第１次：	オガサワラマシコ	*Chaunoproctus ferreorostris*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 蜂須賀正氏，1922．オガサハラマシコに就いて．鳥，3(12，13): 59-60．
- 蜂須賀正氏，1930．再びオガサハラマシコを論ずる．鳥，6(29): 268-269．
- Kittlitz, F. H., 1830. Uber die Vogel der Inselgruppe von Boninsima. Mem. Acad. Imp. St. Petersburg, 1: 231-248.
- 黒田長禮，1928．日本及台湾産鳥類数種の再調査．鳥，6(26): 1-12．
- Lutke, F., 1835. Voyage Autour du Monde, dans annees 1826, 1827, 1828 et 1829., tome second. 1826-1829, 2. pp. 150-166. Firmin Didot Freres, Paris.
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並びに硫黄列島産の鳥類に就いて．日本生物地理学会会報，1(3): 89-186．
- Morioka, H., 1992. Relationship of the Ogasawara Islands Grosbeak *Chaunoproctus ferreorostris* (Aves, Fringilligae). Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. A, 18(1): 45-49.
- Seebohm, H., 1890. The Birds of the Japanese Empire. R. H. Porter, London. 386pp.
- Sharpe, R. B., 1888. Catalogue of the Birds in the British Museum, XII. The Trustees, London.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Carpodacus ferreorostris has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Carpodacus ferreorostris* is listed as EX under criteria ①②③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

①Reliable surveys and records have confirmed that this species is already extinct in the wild.

②Multiple reliable surveys could not confirm the existence of this species.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest, Grassland
Threat types:	―
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	永田尚志（新潟大学）・梶田学
Author:	Hisashi Nagata and Manabu Kajita

公表年月：2026 年 3 月

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

サカツラガン

***Anser cygnoid* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　D

基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　CR	基準 E:　―

D．成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。

【推定根拠】

モニタリングサイト 1000 の結果では、2004-2020 年の 17 年間で、数年おきに 1～4 羽の観察記録がある。日本鳥類目録改訂 7 版では迷鳥とされているが（日本鳥学会　2012）、戦前にはまとまった個体数が飛来していたようである。過去の飛来数については情報が少ないが、近年はモニタリングサイト 1000 を含めて、ガンカモ類の飛来数のモニタリング体制は比較的充実していて、近年の飛来情報は不足していない。戦前は日本が越冬地の一つであったことを考慮すると、もともと我が国に飛来していた鳥で、近年生息数が著しく少なくなった種と考えられ、情報不足（ＤＤ）とするよりは、絶滅危惧種として個体数の基準Ｄで評価するべきであると考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

東アジアに分布が限られている種。最近の調査で、主な群れはロシア、中国、モンゴル国境周辺のトランスバイカリア地方で、その他の一部はアムール川下流域で繁殖し、前者は主にポーヤン湖（中国）などへ渡り、後者は主に韓国を経由して中国へ渡ることが判明した。繁殖地域では、狩猟圧と乾燥化による湖沼消滅などの影響を受け危機的な状況にある。日本は越冬地のひとつであり、1920 年代まではほぼ全国から記録があり、定期的な渡来があったが、現在では年 1～数羽が記録される程度にまで減少した。他のガン類と同様に平野部の湿地や農地、牧草地などで植物質の食物を採食する。

協力者:　牛山克巳（宮島沼水鳥・湿地センター）

基礎情報

【形態】

全長 87 cm。大型のガン。全体に暗褐色で、顔の上半分、後頸などは暗灰褐色。喉から前頸、腹面は白色、頬はやや橙色を帯びている。嘴は黒色で、成鳥は額に細い白線がでる。脚は橙色。

【生活史】

東アジアに分布が限られている種。最近の調査で、主な群れはロシア、中国、モンゴル国境周辺のトランスバイカリア地方で、その他の一部はアムール川下流域で繁殖し、前者は主にポーヤン湖（中国）などへ渡り、後者は主に韓国を経由して中国へ渡ることが判明した。繁殖地域では、狩猟圧と乾燥化による湖沼消滅などの影響を受け危機的な状況にある。日本は越冬地であり、1920 年代まではほぼ全国から記録があり、定期的な渡来地（最後の渡来地は東京湾）もあったが、それも 1950 年までで、以降はごくまれな観察される程度である。1947 年に狩猟鳥から除外されたが間に合わず、この時期以降、日本では本種はほとんど見られなくなった。

【生息環境】

平野部の湿地や農地、牧草地などで植物質の食物を採食する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】田地・畑地，湿地・湿原，河川中流域，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域

【分布域】

過去には、日本が越冬地のひとつであり、茨城県、千葉県、東京都、福島県、岐阜県などから記録があり、関東地方の水田、湖沼地帯で多く見られたという記述がある（柳沢 1975）。具体的な観察情報としては、1923 年 12 月に埼玉県で約 40 羽の群れ、千葉県新浜では 1926 年に 86 羽、1927 年に 90 羽、1928 年に 100 羽以上見たとされ、秋 9 月下旬に渡来して、5 月に飛去するという記述がある（黒田 1939）。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1990 年以降では、北海道、宮城県、新潟県、鳥取県、島根県、山口県、福岡県、熊本県、沖縄県などで各 1～数羽が記録されているのみだが、2012～13 年の越冬期には 14 羽の群れが鳥取県で観察された。

【生息地の現況】

定期的な渡来地はない。

【個体数の現況】

年に 1～数羽渡来するかしないか、程度である。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

本種は、日本鳥類目録改訂第 8 版では Accidental Visitor および Irregular Visitor とされていることから、「鳥類分科会における基本的事項」に照らすと本来は評価対象とならないが、もともと我が国に飛来していた鳥で、近年生息数が著しく少なくなった種と考えられることから、鳥類分科会の議論の結果、評価対象に含めることとした。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	サカツラガン	*Anser cygnoides*	DD
第４次 2019：	サカツラガン	*Anser cygnoides*	DD
第４次 2018：	サカツラガン	*Anser cygnoides*	DD
第４次 2017：	サカツラガン	*Anser cygnoides*	DD
第４次 2015：	サカツラガン	*Anser cygnoides*	DD
第４次：	サカツラガン	*Anser cygnoides*	DD
第３次：	サカツラガン	*Anser cygnoides*	DD
第２次：	サカツラガン	*Anser cygnoides*	DD
第１次：	サカツラガン	*Anser cygnoides*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd)，【山形県】準絶滅危惧(NT)，【千葉県】消息不明・絶滅生物(X)，【新潟県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福井県】要注目，【兵庫県】要調査種，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境省自然環境局，2020．モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査 2004～2017 年度 とりまとめ報告書．環境省生物多様性センター，山梨．

- 呉地正行ほか，2004．ガン類の現状，私たちの自然，500: 10.
- 黒田長禮，1939．雁と鴨．修教社書院，東京.
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．日本鳥学会，三田.
- 嶋田哲郎．2021．知って楽しいカモ学講座（森本元監修）．緑書房，東京.
- 上村佐知子，1996，サカツラガン．私たちの自然，411: 18-21.
- 柳沢紀夫，1975．サカツラガン．山階鳥類研究所（編）「この鳥を守ろう」それが人の生命をまもる，pp. 92-94．学習研究社，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Anser cygnoid has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Anser cygnoid* is listed as CR under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Wetland, Middle river basin, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	嶋田哲郎（公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）
Author:	Tetsuo Shimada

公表年月：2026 年 3 月

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

アカハジロ

***Aythya baeri* (Radde, 1863)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　CR	基準 E:　－
D．成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 日本における毎年の飛来数は数羽程度である。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

湖沼等に生息する潜水ガモである。極東ロシア南部から中国の東北・河北・華中にかけて繁殖し、中国南部等で越冬する。世界的な希少種であり、日本では毎年 1～数羽が越冬する程度である。

基礎情報

【形態】

全長 46～47 cm。ホシハジロとほぼ同大。雄は頭部が緑光沢のある黒色で、胸と脇は褐色であるが、胸はより赤みをおびる。背から雨覆羽にかけては黒褐色で、腹部は白色。飛翔時は風切羽の白色が翼帯となって目立つ。嘴は灰色。メスはオスよりも胸の赤みが少なく、頭部も緑光沢は少ない。全体的に淡色。

【生活史】

極東ロシア南部から中国の東北・河北・華中にかけて繁殖し、中国南部などで越冬する。湖沼に生息し、潜水して水生植物や水生生物などを食べる。一腹卵数は 6-10 卵で飼育下の記録では 27 日で孵化することが知られている。

【生息環境】

湖沼に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	(4) 河川・湿地地域，(5) 沿岸域

【分布域】

シベリア南東部から中国北東部にかけて繁殖し、中国南部などで越冬する。日本には少数が渡来し越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

2000 年以降のガンカモ類の生息調査、モニタリングサイト 1000、渡り鳥飛来状況調査によると、主に関西より西の地方で記録されている。

【生息地の現況】

池、河川、ダム、湖など、さまざまな内水面に飛来している。

【個体数の現況】

上記の調査による記録は年に 1～数羽がほとんどで、全国でも、日本に飛来する個体数はそれと同程度と考えられる。

存続を脅かす要因

ホシハジロやメジロガモとの交雑と思われる個体が、しばしば観察されている。個体数が減った本種がつがい相手を見つけられずに、異種交雑が増えてしまうことは種の存続にとって危険だと考えられ、IUCN レッドリストでも CR と評価されている。

要因の区分：	(過去)	交雑（在来種による)，不明
	(現在)	交雑（在来種による)，不明

特記事項

本種は、日本鳥類目録改訂第 8 版では Accidental Visitor および Irregular Visitor とされていることから、「鳥類分科会における基本的事項」に照らすと本来は評価対象とならないが、IUCN のレッドリストでは CR とされ、世界的な絶滅危惧種であることや、毎年国内で確認されており、日本も越冬地の一つと考えられることから、鳥類分科会による議論の結果、評価対象に含めることとした。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	アカハジロ	*Aythya baeri*	DD
第４次 2019:	アカハジロ	*Aythya baeri*	DD
第４次 2018:	アカハジロ	*Aythya baeri*	DD
第４次 2017:	アカハジロ	*Aythya baeri*	DD
第４次 2015:	アカハジロ	*Aythya baeri*	DD
第４次:	アカハジロ	*Aythya baeri*	DD
第３次:	アカハジロ	*Aythya baeri*	DD
第２次:	アカハジロ	*Aythya baeri*	DD
第１次:	アカハジロ	*Aythya baeri*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd)，【山形県】評価対象外，【千葉県】最重要保護生物(A)，【兵庫県】要注目種，【岡山県】情報不足，【佐賀県】準絶滅危惧種，【熊本県】要注目種(AN)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境省自然環境局，モニタリングサイト 1000，2023/09/25，https://www.biodic.go.jp/moni1000/index.html
- 環境省自然環境局，ガンカモ類の生息調査，2023/09/25，https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html
- 環境省自然環境局，渡り鳥飛来状況調査，2023/09/25，https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/bird_flu/migratory/ap_wr_transit/index.html

- Wu Lan et al., 2022. Shifted to the South, Shifted to the North, but No Expansion: Potential Suitable Habitat Distribution Shift and Conservation Gap of the Critically Endangered Baer's Pochard. Remote Sensing, 14: 2171.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aythya baeri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aythya baeri* is listed as CR under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Hybridization (with native species), Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	神山和夫（バードリサーチ）
Author:	Kazuo Koyama

公表年月：2026 年 3 月

ハト目 Columbiformes　ハト科 Columbidae　　日本固有

アカガシラカラスバト

***Columba janthina nitens* (Stejneger, 1887)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B1ab

基準 A:　―	基準 B:　CR	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1．出現範囲が 100 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。
【地点数】1 地点
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
父島におけるカメラトラップの撮影頻度は、ネコ対策が本格化した 2010 年度に比べて 2013-2017 年度には上昇したが、その後、個体数の回復傾向は止まっている。現在父島ではノネコ対策が継続されているが、根絶には至っていない。また、母島では主に集落以南の地域でノネコの排除事業が行われており、北部では不十分である。現在個体数の減少が見られない要因はノネコ対策の実施によるところが大きく、仮にノネコ対策が縮小された場合は、ノネコの個体数が増加し、アカガシラカラスバトの個体数が減少することが予測される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

アカガシラカラスバトは、小笠原諸島にのみ分布するカラスバトの固有亜種である。ノネコの捕食圧や、ネズミ類との食物を巡る競争や巣の捕食、ノヤギによる森林の草原化など、外来哺乳類の影響により個体数が減少したと考えられる。特に捕食者の影響を強く受けていると考えられ、父島ではノネコの山域からの排除事業を行った結果、以前より多くの若鳥が観察されるようになったが、個体数はまだ限られており依然として絶滅リスクが高い状態にある。

基礎情報

【形態】

全長約 40 cm、翼長 22-24 cm、尾長 14-17 cm。全身黒色だが、頭から胸にかけて、紫色から緑色の金属光沢を持つ。亜種カラスバトにもよく似るが、本亜種は特に頭部がワインレッドを呈することから区別され、亜種名の由来となっている。脚は暗い紫色。若鳥は頭部から胸にかけての羽毛の赤色及び金属光沢が発達しない。

【生活史】

一夫一妻で繁殖し、1 回の繁殖で 1 卵を産む。タコヅルの下など、茂みの中の地上で営巣することが多い。これは、在来の捕食者であるオガサワラノスリの捕食圧に対する適応と考えられる。11 月-3 月が繁殖期の中心だが、1 年間に複数回の繁殖を行うこともあり、飼育下では年 4 回繁殖した例もある。基本的に種子または果実食で、アコウザンショウやオオバシロテツ、ガジュマル、シマホルトノキ、パッションフルーツなど、在来種、外来種を含めて様々な植物を採食する。陸産貝類やミミズなどの動物を採食することもある。

【生息環境】

繁殖期には比較的攪乱の少ない自然林に生息することが多いが、湿性高木林から乾性低木林まで様々な環境で繁殖すると考えられる。非繁殖期には森林内だけでなく、集落周辺の草地や農地、公園なども採食場所や休息場所に利用する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，農業用水路，小河川
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島の聟島列島、父島列島、母島列島、火山列島の有人島、無人島を含む広い範囲で記録されている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

20 世紀後半には父島、母島以外ではほとんど観察されていなかったが、最近は小笠原諸島の各列島の森林の発達した島では広く観察されるようになった。このうち少なくとも父島、兄島、弟島、母島などでは繁殖が確認されており、また北硫黄島や南硫黄島などでも繁殖していると考えられる。色脚環装着個体の観察から、聟島列島から火山列島まで、広く島間移動していることが知られている。

【生息地の現況】

小笠原諸島では、戦前に大規模な森林伐採が行われ、広大な面積が農耕地となっていたが、戦後農地が放置されたため、現在は二次林化が進んでいる。このため、アカガシラカラスバトにとっての繁殖地の環境は改善されてきていると考えられる。全ての無人島でノヤギの根絶が達成され森林の回復が期待されているが、モクマオウやギンネムなどの外来

樹種の繁茂により生息に適さない環境が拡大する可能性もある。父島の山域と母島の南部ではノネコ対策が継続されているが、ノネコの根絶には至っていない。

【個体数の現況】

1930 年頃にはすでに父島、母島、硫黄島ではほとんど観察されないほど個体数が減少していた。1990 年代には、総個体数 40 羽程度とされることもあったが、これは観察個体数からの推定であり、また火山列島における個体数を充分に考慮しておらず、過小評価となっていた可能性がある。以前は若鳥がほとんど見られていなかったが、父島における自然地域におけるノネコの排除の結果、2012 年ごろからは父島、母島を中心に若鳥が観察されるようになり、繁殖成功率が上昇したと考えられる。父島ではカメラトラップの撮影頻度が、ネコ対策が本格化した 2010 年度に比べて 2013-2017 年度には 4.5-13.1 倍に上昇しており、この間に個体数が増加したと考えられる。ただし、その後は個体数の増加傾向は止まっており、火山列島を含めても成熟個体数はまだ数百個体程度と考えられ、依然として絶滅リスクは高い状況にある。

存続を脅かす要因

個体群存続可能性分析から、成鳥の死亡率が個体群の縮小に最も大きな影響を与えると考えられている。警戒心が薄く、地上で営巣、採食を行うため、地上性捕食者に対して脆弱であり、特にノネコの捕食により個体数が減少したと考えられる。また、外来のネズミ類が種子を巡る競争者や巣の捕食者となっている可能性がある。父島では山域からのノネコ排除が進んだ結果個体数が以前より増えたが、一方で交通事故やガラス衝突による死亡が生じるようになった。島間移動を行うことから、ノネコが生息する硫黄島でもネコの管理を進める必要がある。過去には農地開墾やノヤギ食害による森林の荒廃も個体数減少の要因となったと考えられる。種子食であるため、気候変動による台風や干ばつなどの気象害の大型化で植物に大きなダメージがあれば食物が不足し、繁殖成功率や生存率に影響を及ぼす危険性がある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による），食用・薬用採取，分布・産地局限
	（現在）	交通事故，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による），人工構造物への衝突，気候変動，分布・産地局限

特記事項

DNA 分析の結果、亜種カラスバト及び亜種ヨナグニカラスバトと系統的に大きく異なることが明らかになっており、亜種としての保全価値が高いと考えられる。一方、遺伝的多様性が非常に低いことも明らかになっている。また、小笠原諸島の野生下において亜種カラスバトとの交雑個体が複数確認されており、低頻度で自然に亜種間の遺伝的交流が生じている可能性がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカガシラカラスバト	*Columba janthina nitens*	CR
第４次 2019：	アカガシラカラスバト	*Columba janthina nitens*	CR
第４次 2018：	アカガシラカラスバト	*Columba janthina nitens*	CR
第４次 2017：	アカガシラカラスバト	*Columba janthina nitens*	CR
第４次 2015：	アカガシラカラスバト	*Columba janthina nitens*	CR
第４次：	アカガシラカラスバト	*Columba janthina nitens*	CR
第３次：	アカガシラカラスバト	*Columba janthina nitens*	CR
第２次：	アカガシラカラスバト	*Columba janthina nitens*	EN
第１次：	アカガシラカラスバト	*Columba janthina nitens*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】絶滅危惧ⅠA類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- アカガシラカラスバト PHVA ワークショップ実行委員会，2009．アカガシラカラスバト保全計画づくり国際ワークショップ最終報告書．アカガシラカラスバト PHVA ワークショップ実行委員会，東京.
- Ando, H., S. Kaneko, H. Suzuki, K. Horikoshi, H. Takano, H. Ogawa and Y. Isagi, 2011. Genetic diversity of the Japanese wood pigeon, *Columba janthina*, an endemic to islands of East Asia, estimated by newly developed microsatellite markers. Zoological Science, 28: 891-896.
- Ando, H., H. Ogawa, S. Kaneko, H. Takano, S. Seki, H. Suzuki, K. Horikoshi and Y. Isagi, 2014. Genetic structure of isolated islands and captive population of the critically endangered Red-headed Wood Pigeon *Columba janthina nitens*: implication on the management of threatened island populations. Ibis, 156: 154-164.
- Ando, H., S. Suzuki, K. Horikoshi, H. Suzuki, S. Umehara, M. Yamasaki, G. Hanya, M. Inoue-Murayama and Y. Isagi, 2016. Seasonal and inter island variation in the foraging strategy of the endangered Red-headed Wood Pigeon (*Columba janthina nitens*) in disturbed island habitats derived from high-throughput sequencing. Ibis, 158: 291-304.
- Ando, H., T. Sasaki, K. Horikoshi, H. Suzuki, H. Chiba, M. Yamasaki and Y. Isagi, 2017. Wide-ranging movement and foraging strategy of the critically endangered Red-headed Wood Pigeon (*Columba janthina nitens*): findings from a remote uninhabited island. Pacific Sci, 71: 161-170.

- 堀越和夫・鈴木創・佐々木哲朗・川上和人，2020．小笠原諸島父島における外来ネコ対策後のアカガシラカラスバトの個体数増加．日本鳥学会誌，69: 3-18.
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並に硫黄列島産の鳥類に就て．日本生物地理学会会報，1(3): 89-186.
- 関伸一・高野肇，2005．ミトコンドリア DNA チトクローム b 領域の塩基配列によるカラスバト *Columba* janthina3 亜種間の系統関係．九州森林研究，58: 193-194.
- Seki, S., H. Takano, K. Kawakami, N. Kotaka, A. Endo and K. Takehara, 2007. Distribution and genetic structure of the Japanese wood pigeon (*Columba janthina*) endemic to the islands of East Asia. Conservation Genetics, 8(5): 1109-1121.
- 柴崎文子・星善男，2006．アカガシラカラスバトは種子散布者μm．Strix，24: 171-176.
- 鈴木創・柴崎文子・鈴木直子・堀越和夫・障子巳和子・障子幹・坂入祐子・高野肇，2006．小笠原諸島におけるアカガシラカラスバト *Columba janthina nitens* の島間移動．Strix，24: 99-107.
- 高野肇，2002．幻の鳥はいま―アカガシラカラスバトの現状とその保護―．遺伝，56(1): 92-96.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Columba janthina nitens has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Columba janthina nitens* is listed as CR under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 100 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Agricultural ditch, Small river
Threat types:	Vehicle collision, Predation (by alien species), Competition (with alien species), Collision with man-made structures, Climate change, Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

ツル目 Gruiformes　クイナ科 Rallidae　　日本固有

ヤンバルクイナ

***Hypotaenidia okinawae* (Yamashina & Mano, 1981)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　C2a(ii)

基準 A:　—	基準 B:　—	基準 C:　CR	基準 D:　—	基準 E:　—

C．個体群の成熟個体数が 250 未満であると推定される。

【推定根拠】

個体数調査をもとに算出されている各年度のヤンバルクイナの推定個体数のうち、成熟個体は、その 4 分の 1 程度と推定される。その理由としては、以下等が挙げられる。

・本種のオスは半数程度が 1 歳で繁殖開始すると考えられており、メスは大部分が 2 歳で繁殖開始すると考えられている。一夫一妻で繁殖し、雌雄が交代で抱卵する種であるため、概して 2 歳以上の個体が繁殖に参加すると考えられること。

・本種の推定個体数は、繁殖期後である秋から冬の現地調査の結果から得られたものであるため、推定個体数のうち、翌年には繁殖しない幼鳥の割合が比較的大きいと考えられること。また、次の繁殖期までに一定数の個体が死亡すると考えられること。

推定個体数に変動がみられることから、誤差も考慮し、予防原則の視点にたち、推定個体数（95%信頼区間）の下限から成熟個体の羽数を算出した。2020 年以降の推定個体数（95%信頼区間）の下限は 1,000 羽を下回る年も複数見られており、成熟個体はおよそ 250 羽未満と推定される。

加えて、以下の 2. かつ a (ii) に該当する事由がある。

2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測される。

【判断理由】

現在沖縄島北部で実施されている、本種の保護策として有効なマングース防除事業が仮に実施されなくなると、マングースによる捕食等によりヤンバルクイナの個体数や生息域が大幅に減少していくことが予測される。

a) 個体群構造が次に該当

ii) 1 つの下位個体群中に 90%以上の成熟個体が属している。

【判断理由】

本種はやんばる地域のみに生息するため、1 つの個体群に全ての成熟個体が属する。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

1981 年に発見された無飛力のクイナで、沖縄島北部のみに生息する。外来種のフイリマ

ングースやノネコ、ハシブトガラスなどによる捕食の影響を受けている。外来種の防除事業と本種の人工繁殖が進められている。

基礎情報

【形態】

全長は約 35 cm。雌雄同色であるがオスがやや大型。上面は暗オリーブ褐色で顔は黒色。目の後ろに白線がある。下面は黒色で白色の横縞模様がある。嘴、脚、虹彩は赤色。

【生活史】

留鳥として周年生息する。繁殖期は 4～7 月で、地上に営巣する。一腹産卵数は 3～5 卵。昆虫類、甲殻類、両生類などの小動物を主食とする。樹上をねぐらにする。

【生息環境】

常緑広葉樹林の林床や周辺の草原に生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

主に沖縄島の北部（国頭村、大宜味村、東村）の通称やんばる地域に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1985 年の分布域の面積は約 320 km^2で、南限は大宜味村塩屋湾の南側であったが、1990 年頃から南限付近での生息が見られなくなった。1997 年頃には南限はさらに謝名城～福地ダムのラインまで北上し、2000 年には大宜味村、2005 年には東村でほぼ見られなくなり、国頭村のみの分布となった。近年では、マングース防除事業の進捗に伴い、徐々に大宜味村や東村側へ分布域が拡大し、フイリマングース対策として設置された塩屋と福地ダムを結ぶ第 1 北上防止柵以北で主に確認されている。2023 年には、名護市で初めてヤンバルクイナが確認された。

【生息地の現況】

マングース北上防止柵以南ではフイリマングースが多数生息しており、沖縄島全体でのフイリマングース根絶の見込みは立っていない状況である。やんばる地域では、マングース北上防止柵付近でフイリマングースが捕獲されているほか、ノネコが生息している。また、沖縄島中部地域ではタイワンスジオ、タイワンハブといった外来ヘビ類が定着しており、マングース北上防止柵付近まで分布を拡大していることから、ヤンバルクイナへの影響が危惧される。交通事故によるヤンバルクイナの死亡事例も多数発生している。

【個体数の現況】

推定個体数は 1985 年には 1,500～2,100 羽とされていたが、その後次第に減少し 2005 年には 580～930 羽と約 60%の減少となった。2006 年以降はやや回復傾向が見られ、2010 年には 845～1,350 羽、2023 年には 1,345 羽と推定されている。これはフイリマングースの防除事業の効果によるものと考えられる。しかしながら、沖縄島におけるフイリマングース

根絶の見込みは立っていないほか、毎年 20 件以上の交通事故が確認されており、実際にはそれ以上の交通事故が発生していると考えられることから、リスクは軽減していない。

存続を脅かす要因

捕食者である外来種フイリマングースは、野生化したネコやイヌによる食害とともにもっとも直接的に本種の存続を脅かしている原因である。さらに、個体数の増加がみられるハシブトガラスや、沖縄中部に定着したタイワンスジオなど新たな外来種の存在にも注意が必要である。交通事故死、雛が側溝に転落することによる衰弱死なども存続を脅かす要因として挙げられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，交通事故，捕食（外来種による），捕食（在来種による）
	（現在）	ダム・河川工作物建設，交通事故，捕食（外来種による），捕食（在来種による）

特記事項

本種は日本で唯一の無飛力の鳥類であり、フイリマングース、ノネコ等の地上性の外来捕食者の影響を非常に強く受ける。そのため、評価にあたっては予防原則の視点にたち、成熟個体数について検討した。

また、国外に生息する近縁種のムナオビクイナ（*Hypotaenidia torquatus*）やカラヤンクイナ（*Aptenorallus calayanensis*）などとの分類、進化上の比較は、沖縄の鳥相の起源解明に重要である。また、無飛力のクイナとしては、最北に分布すると考えられている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヤンバルクイナ	*Gallirallus okinawae*	CR
第４次 2019：	ヤンバルクイナ	*Gallirallus okinawae*	CR
第４次 2018：	ヤンバルクイナ	*Gallirallus okinawae*	CR
第４次 2017：	ヤンバルクイナ	*Gallirallus okinawae*	CR
第４次 2015：	ヤンバルクイナ	*Gallirallus okinawae*	CR
第４次：	ヤンバルクイナ	*Gallirallus okinawae*	CR
第３次：	ヤンバルクイナ	*Gallirallus okinawae*	CR
第２次：	ヤンバルクイナ	*Gallirallus okinawae*	EN
第１次：	ヤンバルクイナ	*Rallus okinawae*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 花輪伸一・森下英美子，1986．ヤンバルクイナの分布域と個体数推定について．昭和 60 年度特殊鳥類調査，pp. 43-61．環境庁，東京．
- Harato, T. and K. Ozaki, 1993. Roosting behavior of the Okinawa Rail. J. Yamashina Inst. Ornithol., 25: 40-53.
- 環境省那覇自然環境事務所，2011．平成 22 年度ヤンバルクイナ生息状況把握調査業務報告書，那覇市．48pp.
- 環境省沖縄奄美自然環境事務所，2024．令和 5 年度ヤンバルクイナ生息状況把握調査報告書（令和 5 年度沖縄島北部地域マングース防除事業業務）．那覇市．77pp.
- 環境省やんばる野生生物保護センター，ロードキル情報．https://www.ufugi-yambaru.com/archives/category/roadkill
- 尾崎清明・馬場孝雄・米田重玄・金城道男・渡久地豊・原戸鉄二郎，2002．ヤンバルクイナの生息域の減少．山階鳥類研究所研究報告，34: 136-144．
- 尾崎清明，2005．ヤンバルクイナの分布域と個体数の減少．遺伝，59: 29-33．
- 尾崎清明，2009．「飛べない鳥」の絶滅を防ぐーヤンバルクイナー．山岸哲（編），日本の希少鳥類を守る，pp. 51-70．京都大学学術出版会．
- 尾崎清明，2010．ヤンバルクイナの保全生物学的研究．東邦大学大学院理学研究科博士学位論文，92pp.
- Yamashina, Y. and T. Mano, 1981. A new species of rail from Okinawa Island. J. Yamashina Inst. Ornithol., 13: 1-6.
- 山階鳥類研究所，1996．ヤンバルクイナシンポジウムー研究・保護の現状と将来の展望ー．山階鳥類研究所，我孫子．44pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hypotaenidia okinawae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hypotaenidia okinawae* is listed as CR under criteria C2a(ii).

C. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals and:

2. A continuing decline, observed, projected, or inferred, in numbers of mature individuals and:

a. Population structure in the form:

(ii) at least 90% of mature individuals in one subpopulation.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest

	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Dam/River structures construction, Vehicle collision, Predation (by alien species), Predation (by native species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	尾崎清明（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Kiyoaki Ozaki

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae

ヘラシギ

***Calidris pygmaea* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　CR	基準 E:　－

D．成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。

【推定根拠】

国内で複数個体が観察されることが希であり、また、秋期の幼鳥の観察報告が多い。各地の観察記録を総合すると、年間に国内に飛来する成熟個体は 5 羽前後と推測される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

日本では春秋の渡りの時期に砂浜干潟、河口部、砂浜海岸に飛来して、少し水につかる場所で嘴を水につけて左右に動かしたりし、昆虫、甲殻類、種子などを食べる。日本では春秋の渡りの時期に通過して行くのみであるが、観察数は極端に少ない。近年渡りの時期に利用できる砂浜干潟は減少傾向にあり、砂浜海岸もレジャーによる利用等で安全に利用できる場所は少なくなっている。これによって渡り途中のエネルギー補給に影響が出ていると思われる。

基礎情報

【形態】

全長 14～16 cm。シギの中でも小型の種で、トウネン（*Calidris ruficollis*）と同大。冬羽は頭部から背にかけて灰色であるが、幼鳥は褐色がかる。腹部は白色。夏羽では頭部から胸部にかけて橙色となり、背の羽毛や雨覆羽の縁も赤みをおびる。一番の特徴はヘラ状の嘴で、この点で他種とは区別は容易。

【生活史】

東アジア-オーストラリア地域にのみ生息し、日本では春秋の渡りの時期に砂浜干潟等で観察され、特に秋期の幼鳥の記録が多い。嘴を水中につけて左右に動かしたりし、昆虫、甲殻類、種子などを食べる。

【生息環境】

国内では春秋の渡りの時期に、少数だが全国の砂浜干潟、河口部、砂浜海岸など砂地・砂泥地で記録されることが多い。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】田地・畑地，湿地・湿原，河川下流域，河口域，砂浜・礫浜，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_表層】干潟
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

日本は主に春秋の渡りの時期に通過して行くのみであるが、全国で記録がある。沖縄島では越冬の記録もある。繁殖地はチュコト半島南部からカムチャツカ北部沿岸の限られた地域で、インド南東部・スリランカから中国南部、東南アジア地域で越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

全国で記録があるが、日本は春秋の渡りの時期に通過して行くのみであるため、分布域の変遷は不明である。本州や沖縄では越冬の記録もある。

【生息地の現況】

沿岸部の砂浜干潟や砂浜海岸などを利用しながら渡っていると思われるが、全国的にシギ・チドリ類が利用できる砂浜、干潟などは減少傾向にある。

【個体数の現況】

現在、IUCN のレッドリストでは、絶滅危惧種（CRITICALLY ENDANGERED）とされている。推定される全世界の総個体数は、360～620 個体、トレンドは減少中である。

日本では春秋の渡りの時期に通過して行くのみであるが、観察数は極端に少ない、複数個体が観察されることは稀になっている。

存続を脅かす要因

日本は春秋の渡りの時期に少数が通過するのみであるが、本種は世界的にも分布が限られる個体数の少ない種であり、沿岸開発や違法狩猟、誤捕獲、天敵による卵の捕食などの影響を受けて、存続が脅かされている。その世界的にも希少な種が、春秋の渡りの時期に日本を利用して移動しているため、移動中の休息場、採餌場は種の存続にとって重要な役割を担っていることになる。しかし、近年渡りの時期に利用できる砂浜干潟は減少傾向にあり、砂浜海岸もレジャーによる利用等で安全に利用できる場所は少なくなっている。これによって渡り途中のエネルギー補給に影響が出ていると考えられる。

要因の区分：	（過去）	河川開発，海岸開発，湿地開発，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	河川開発，海岸開発，湿地開発，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

日本に渡来するガンカモ類やシギ・チドリ類などの渡り性水鳥類が利用する主要な渡来地については、河川湖沼 84 ヶ所のうち 41.7%が保護区域未指定、干潟・湿地 152 ヶ所のうち 66.7%が保護区域未指定であり、干潟・湿地を利用する鳥が多数訪れる場所については保護指定が遅れている現状が指摘されている（三上ら 2012）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヘラシギ	*Eurynorhynchus pygmeus*	CR
第４次 2019：	ヘラシギ	*Eurynorhynchus pygmeus*	CR
第４次 2018：	ヘラシギ	*Eurynorhynchus pygmeus*	CR
第４次 2017：	ヘラシギ	*Eurynorhynchus pygmeus*	CR
第４次 2015：	ヘラシギ	*Eurynorhynchus pygmeus*	CR
第４次：	ヘラシギ	*Eurynorhynchus pygmeus*	CR
第３次：	ヘラシギ	*Eurynorhynchus pygmeus*	CR
第２次：	ヘラシギ	*Eurynorhynchus pygmeus*	EN
第１次：	ヘラシギ	*Eurynorhynchus pygmeus*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠA 類(Cr),【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【宮城県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【秋田県】情報不足(DD),【山形県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【新潟県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【静岡県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【愛知県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(通過),【三重県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【兵庫県】B ランク,【岡

山県】絶滅危惧Ⅰ類，【山口県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【徳島県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【福岡県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【佐賀県】絶滅危惧Ⅰ類種，【長崎県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【熊本県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【大分県】情報不足(DD)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類，【沖縄県】絶滅危惧ⅠA類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- IUCN 2023. The IUCN Red List of Threatened Species. Version 2022-2. <https://www.iucnredlist.org>
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田市．
- 三上かつら・高木憲太郎・神山和夫・守屋年史・植田睦之，2012．渡り性水鳥類の渡来地の保護区域指定の現状．日本鳥学会誌，61(1): 112-123．
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本鳥類生態図鑑（水鳥編）．保育社，大阪．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- Green, R. E., E. E. Syroechkovskiy, G. Q. A. Anderson, Qing Chang, S. U. Chowdhury, J. A. Clark, Mohammod Foysal, Yuri Gerasimov, Baz Hughes, Chris Kelly, Elena Lappo, Rebecca Lee, K. K. S. Leung, Jing Li, E. Y. Loktionov, D. S. Melville, James Phillip, P. S. Tomkovic, Ewan Weston, Jenny Weston, Nikolai Yakushev and N. A. Clark, 2021. New estimates of the size and trend of the world population of the Spoon-billed Sandpiper using three independent statistical models. Wader Study 128(1): 22-35.
- Van Gils, J., P. Wiersma, C. J. Sharpe and G. M. Kirwan, 2020. Spoon-billed Sandpiper (*Calidris pygmaea*), version 1. 0. In Birds of the World (J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie, and E. de Juana, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA. https://doi.org/10.2173/bow.spbsan1.01
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp. wetlands. org on Thu Sep 282023.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Calidris pygmaea has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Calidris pygmaea* is listed as CR under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Farmland, Wetland, Lower river basin, Estuary, Sandy beach/Pebble beach, Salt marsh/Intertidal mudflat (including

	mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Intertidal mudflat
Threat types:	River development, Coastal development, Wetland development, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae

アカアシシギ

***Tringa totanus ussuriensis* Buturlin, 1934**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　CR	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。
【地点数】1 地点
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
以前は道東部の湿地で繁殖していたが、現在は野付半島のみに分布が縮小したため。減少原因は明らかでないが、湿地環境の悪化や、繁殖分布の南限であるため、気候変動の影響などが考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

日本では北海道東部で少数が繁殖し、琉球列島では越冬する個体も観察されている。渡りの時期には全国で記録があるが、個体数は多くはない。近年シギ・チドリ類が利用できる干潟や水田は減少傾向にあり、本種の渡り途中や越冬地でのエネルギー補給に影響が出ていると思われる。

基礎情報

【形態】

全長 27-29 cm。嘴の基部側と脚は橙色か朱色。頭部から背にかけては灰色がかった褐色で胸には黒褐色の縦斑がある。飛翔時は背から腰にかけてと次列風切羽が白色。嘴と脚の色はツルシギ（*Tringa erythropus*）の冬羽に似るが、ツルシギの嘴はアカアシシギよりも細長く、下嘴が朱色であること、飛翔時はアカアシシギのように腰や次列風切羽が白くないことで区別できる。

【生活史】

繁殖期は 4-6 月で、草地の草の根元に皿状の巣を作り 3～4 個の卵を産む。雌雄で抱卵し、22-29 日で孵化。孵化した雛は早成性の離巣性であるため、直ぐに巣を離れる。巣外育雛期は 25-35 日で雛はその後独立する。繁殖地では複数のつがいが集まってルースコロニーを形成する。地上で行うディスプレイと、空中で行うディスプレイがある。春秋の渡りの時期には全国の砂泥干潟等で観察される。採餌は干潟の表面をついばんだり、浅瀬で嘴を水に入れたまま移動したりし、左右に振るなどして軟体動物や甲殻類、ガガンボの幼虫などを捕らえて食べる。

【生息環境】

北海道東部では、湿地、草原で繁殖する。春秋の渡りの時期には湿地や各干潟、河口、干拓地、水田などで観察され、琉球列島では干潟で越冬している。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，河口域，砂浜・礫浜，汽水域 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】干潟，砂底・礫底，泥底
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

国内では北海道東部で少数が繁殖し、春秋の渡りの時期には全国で記録がある。琉球列島では越冬する。国外ではヨーロッパまでのユーラシア大陸の中部で繁殖し、ユーラシア大陸南部及びアフリカ大陸、東南アジア等で越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

繁殖地である北海道東部の分布域は縮小傾向にある。

【生息地の現況】

繁殖地である北海道東部は大きな環境変化はないが、渡りの中継地や越冬地の一つである琉球列島では生息環境である干潟等は減少している。

【個体数の現況】

北海道東部の繁殖地は局地的であり、個体数も減少傾向にあると思われる。しかし、渡

りの際に全国で観察される個体数は、元々が多くはないが減少傾向は見られない。

存続を脅かす要因

繁殖地である北海道東部以外でも、春秋の渡りの時期には全国の海岸線を利用して移動しているため、移動中の休息場、採餌場は種の存続にとって重要な役割を担っている。また、琉球列島は越冬地にもなっている。しかし、近年シギ・チドリ類が利用できる干潟や水田は減少傾向にあり本種の渡り途中や越冬地でのエネルギー補給に影響が出ていると思われる。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，湿地開発，農薬汚染/化学物質汚染
	（現在）	海岸開発，湿地開発，農薬汚染/化学物質汚染

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカアシシギ	*Tringa totanus ussuriensis*	VU
第４次 2019：	アカアシシギ	*Tringa totanus ussuriensis*	VU
第４次 2018：	アカアシシギ	*Tringa totanus ussuriensis*	VU
第４次 2017：	アカアシシギ	*Tringa totanus ussuriensis*	VU
第４次 2015：	アカアシシギ	*Tringa totanus ussuriensis*	VU
第４次：	アカアシシギ	*Tringa totanus ussuriensis*	VU
第３次：	アカアシシギ	*Tringa totanus ussuriensis*	VU
第２次：	アカアシシギ	*Tringa totanus ussuriensis*	VU
第１次：	アカアシシギ	*Tringa totanus eurhinus*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu),【青森県】重要希少野生生物(B ランク),【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【千葉県】重要保護生物(B),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【神奈川県】準絶滅危惧(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(通過),【三重県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【大阪府】準絶滅危惧(NT),【兵庫県】B ランク,【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】準絶滅危惧(NT),【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種,【長崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【宮崎

県】準絶滅危惧(NT-r)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- del Hoyo, J., A. Elliott and J. Sargatal (eds.), 1996. Handbook of the Birds of the World. Vol. 3. Hoatzin to Auks. Lynx Edicions, Barcelona. 821pp.
- エトピリカ基金，2011．平成 22 年度 霧多布湿原学術研究助成事業．霧多布湿原におけるアカアシシギ *Tringa tetanus* の生息状況および河川沿いの鳥類相．
- エトピリカ基金，2012．平成 23 年度 霧多布湿原学術研究助成事業．霧多布湿原におけるアカアシシギ *Tringa tetanus* 繁殖後期の生息状況およびジュンサイ沼周辺の鳥類相．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2025．モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2022 年度とりまとめ報告書．環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田．
- Marchant, J., T. Prater and P. Hayman, 1986. Shorebirds: an identification guide to the waders of the world. Croom Helm Australia Pty Ltd, Australia.
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本鳥類生態図鑑（水鳥編）．保育社，大阪．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tringa totanus ussuriensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tringa totanus ussuriensis* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】 Farmland, Abandoned farmland,

	Wetland, Estuary, Sandy beach/Pebble beach, Brackish water 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Intertidal mudflat, Sandy bottom/Gravelly bottom, Muddy bottom
Threat types:	Coastal development, Wetland development, Pesticide/Toxic chemical pollution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	植田睦之（バードリサーチ）・守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Mutsuyuki Ueta and Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae

カラフトアオアシシギ

***Tringa guttifer* (Nordmann, 1835)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　D				
基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　CR	基準 E:　―
D. 成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 国内で複数個体が観察されることが希であり、各地の観察記録を総合すると、年間に国内に飛来する成熟個体は 10 羽前後と推測される。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

日本は春秋の渡りの時期に、河口部の泥浜・砂浜干潟等の浅瀬に飛来して、活発に歩き回り、小魚、甲殻類、軟体動物などを食べる。本種は世界的にも個体数の少ない希少な種であり、春秋の渡りの移動中の休息場、採餌場は重要な役割を担っている。しかし、近年シギ・チドリ類が渡りの時期に利用できる干潟や水田は減少傾向にあり、渡り途中のエネルギー補給に影響が出ていると思われる。

基礎情報

【形態】

全長 29～32 cm。頭部から背にかけては灰色をおびた褐色。腹部は白色で、胸部から脇には細かい黒斑が多数入る。嘴は頭部よりも若干長い。アオアシシギ（*Tringa nebularia*）に大きさ、色彩などは似ているが、アオアシシギよりも脚が短く、嘴は太い。脚は緑がかった黄色。

【生活史】

東アジア-オーストラリア地域にのみ生息し、日本では春秋の渡りの時期に河口部の泥浜・砂浜干潟等の浅瀬で、活発に歩き回り、小魚、甲殻類、軟体動物などを食べる。

【生息環境】

日本では春秋の渡りの時期に、全国の河口部の泥浜・砂浜干潟や海に近い池沼、水田等で記録がある。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】河口域，砂浜・礫浜，塩沼地・塩性湿地・河口干潟 【海域（沿岸）_表層】海面，干潟
国土地域区分：	(4) 河川・湿地地域，(5) 沿岸域

【分布域】

日本は春秋の渡りの時期に通過して行くのみであるが、全国で記録がある。繁殖地はサハリンとオホーツク海沿岸西部などで、インド北東部、バングラディシュ、ミャンマー、中国海南省、マレー半島などで越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

全国で記録があるが、日本は春秋の渡りの時期に通過して行くのみであるため、分布域の変遷は不明である。

【生息地の現況】

河口部の泥浜・砂浜干潟や海岸線、海沿いの池沼、水田などを利用しながら渡っていると思われるが、全国的にシギ・チドリ類が利用できる干潟や水田は減少傾向にある。

【個体数の現況】

現在、IUCN のレッドリストでは、絶滅危惧種（ENDANGERED）とされている。

推定される全世界の総個体数は、900～1200 個体、トレンドは不明である。

日本では春秋の渡りの時期に希に観察される。有明海の干潟では、定期的に観察されているが多くない。

存続を脅かす要因

日本は春秋の渡りの時期に通過するのみであるが、本種は世界的にも個体数の少ない希少な種であり、繁殖地では開発や違法狩猟、天敵による卵の捕食などの影響を受けて、存続が脅かされている。その世界的にも希少な種が、春秋の渡りの時期に日本を利用して移動しているため、移動中の休息場、採餌場は種の存続にとって重要な役割を担っていることになる。しかし、近年シギ・チドリ類が渡りの時期に利用できる干潟や水田は減少傾向にあり、渡り途中のエネルギー補給に影響が出ていると思われる。

要因の区分：	（過去）	河川開発，海岸開発，湿地開発，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	河川開発，海岸開発，湿地開発，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

本種は、日本鳥類目録改訂第 8 版では Accidental Visitor および Irregular Visitor とされていることから、「鳥類分科会における基本的事項」に照らすと本来は評価対象とならないが、世界的な絶滅危惧種であり、日本は渡りのルート上にあると考えられることから、鳥類分科会の議論の結果、評価対象に含めることとした。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	カラフトアオアシシギ	*Tringa guttifer*	CR
第４次 2019：	カラフトアオアシシギ	*Tringa guttifer*	CR
第４次 2018：	カラフトアオアシシギ	*Tringa guttifer*	CR
第４次 2017：	カラフトアオアシシギ	*Tringa guttifer*	CR
第４次 2015：	カラフトアオアシシギ	*Tringa guttifer*	CR
第４次：	カラフトアオアシシギ	*Tringa guttifer*	CR
第３次：	カラフトアオアシシギ	*Tringa guttifer*	CR
第２次：	カラフトアオアシシギ	*Tringa guttifer*	CR
第１次：	カラフトアオアシシギ	*Tringa guttifer*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠA 類(Cr),【千葉県】最重要保護生物(A),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【愛知県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(通過),【三重県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【山口県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【徳島県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【福岡県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【佐賀県】絶滅危惧Ⅰ類種,【熊本県】要注目種(AN),【大分県】情報不足(DD),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- BirdLife International, 2023. IUCN Red List for birds. Downloaded from http://www.birdlife.org on 19/02/2023.
- Maleko, P. N., V. V. Pronkevich and K. S. Maslovsky, 2021. Nordmann's Greenshank (*Tringa guttifer*), version 2. 0. In Birds of the World (S. M. Billerman, P. G. Rodewald, and B. K. Keeney, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本鳥類生態図鑑（水鳥編），304pp. 保育社，大阪．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp.wetlands.org on Mon Feb 202023.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tringa guttifer has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tringa guttifer* is listed as CR under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Estuary, Sandy beach/Pebble beach, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland) 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface, Intertidal mudflat
Threat types:	River development, Coastal development, Wetland development, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　ウミスズメ科 Alcidae

ウミガラス

***Uria aalge inornata* Salomonsen, 1932**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　D

基準 A: ―	基準 B: ―	基準 C: ―	基準 D: CR	基準 E: ―

D．成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。

【推定根拠】

現在国内での繁殖は天売島に限られる。天売島では、2010 年代以降個体数は増加し、2022 年には最大飛来数が 104 羽、繁殖つがい数は 28 であった。しかし、2023 年には繁殖つがい数は 7 に減少した。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

離島や海岸の断崖で集団繁殖し、潜水して魚を捕らえる。かつては松前小島、天売島、ユルリ島、モユルリ島、根室市落石岬にも繁殖コロニーがあったが、現在も繁殖確認されているのは天売島だけである。天売島での生息数は 1960 年代には 8,000 羽と推定されたが、現在は 120 羽程度である。天売島の繁殖地周辺でのハシブトガラスやオオセグロカモメの巣の除去やエアライフルによる捕獲を行ったところ、2012 年に雛 9 羽、2021 年に雛 25 羽の巣立ちを確認するなど、捕食者抑制効果がみられ、繁殖数の回復が期待できる。

基礎情報

【形態】

体重は、960～975 g、全長 44 cm、翼長 20.0～21.1 cm でオスがメスに比べてやや大きい。夏羽では頭部、頸、体の背面は褐色を帯びた黒色、次列風切羽の先は白く、胸と腹は白い。冬羽では頸から目の後ろ上方が白くなり、目から後方に 1 本の黒線がある。ハシブトウミガラス（*Uria lomvia arra*）は上嘴と下嘴のあわせ目が白く、冬羽では頸の白い部分が狭く、目からの黒線もない。

【生活史】

離島や海岸の断崖で集団繁殖する。5 月下旬～6 月に離島や海岸の断崖の岩棚や平坦な岩上に 105～112 g の卵を 1 つ産み、雌雄交替で 32～33 日間抱卵する。雛は孵化後 15～21 日で巣立ち、その後約 2 ヶ月で独立生活をする。繁殖期には営巣地周辺の海域、非繁殖期には沿岸域から外洋に生息し、潜水して魚類や動物プランクトンをとって食べる。

【生息環境】

離島や海岸の断崖で集団繁殖するが、沿岸や外洋で採食する。繁殖を終えると、繁殖地である陸地から離れ、沿岸や外洋に生息する。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（5）沿岸域，（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

種としては、北太平洋、北大西洋の亜寒帯を中心に分布する。本亜種は、東アジアでは、朝鮮半島北部の日本海側にある小島、ロシアのオホーツク海沿岸、カムチャツカ半島東岸、コマンドル諸島、ベーリング海沿岸、サハリンのチュレニー島、千島列島、北海道の離島で繁殖する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

繁殖の記録は、ユルリ島、モユルリ島、松前小島、天売島、根室市落石岬であったが、現在は天売島のみで繁殖確認されている。

【生息地の現況】

現在繁殖確認されている生息地は天売島だけであるが、かつての営巣地の物理的環境には大きな変化はない。

【個体数の現況】

天売島での生息数は、1960 年代では最高 8,000 羽と推定されたが、1960 年代後半に急減し、1970 年代には 500～1,000 羽、1980 年代には 130～600 羽となり、2000 年代以降は 20 羽程度になった。環境省ウミガラス保護増殖事業により、2000 年代に最大飛来数が 20～

50 羽程度、繁殖つがい数は 3～5、巣立ち雛数は 1～5 羽程度に推移した。2010 年代以降個体数は増加し、2022 年には最大飛来数が 104 羽、繁殖つがい数は 28 であった。巣立ち雛数は 2021 年に 25 を記録した。しかし、2023 年には繁殖つがい数は 7、巣立ち雛数は 3 に減少した。モユルリ島では、1965 年の 500 羽から 1983 年の 15 羽に減少し、1980 年代後半に繁殖地が消失したが、最近、周辺海域で繁殖期に飛来個体が観察されるようになった。2013 年には松前小島においても夏期に島の崖に上陸する成鳥 1 羽が観察されているが、繁殖は確認されていない。

存続を脅かす要因

生息数減少の原因は明らかではないが、さまざまの状況証拠から、沖合でのサケ・マス流網、あるいは沿岸での底刺網への羅網による可能性が高い。また、繁殖数が極めて少なくなった近年においては、ハシブトガラス（*Corvus macrorhynchos*）による卵や雛の捕食も本種の存続を脅かす主要な要因となっていると考えられる。

要因の区分：	（過去）	捕食（在来種による），混獲・錯誤捕獲
	（現在）	捕食（在来種による）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ウミガラス	*Uria aalge inornata*	CR
第４次 2019：	ウミガラス	*Uria aalge inornata*	CR
第４次 2018：	ウミガラス	*Uria aalge inornata*	CR
第４次 2017：	ウミガラス	*Uria aalge inornata*	CR
第４次 2015：	ウミガラス	*Uria aalge inornata*	CR
第４次：	ウミガラス	*Uria aalge inornata*	CR
第３次：	ウミガラス	*Uria aalge inornata*	CR
第２次：	ウミガラス	*Uria aalge inornata*	CR
第１次：	ウミガラス	*Uria aalge inornata*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠA 類(Cr)，【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類，【山形県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【福島県】情報不足(DD)，【茨城県】情報不足①注目種，【富山県】情報不足(DD)，【福井県】要注目

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，鳥獣保護管理法

参考文献

- 阿部学・松木勝彦，1968．根室市花咲港付近の鳥類．鳥，18: 227-246.
- Hasebe, M., M. Aotsuka, T. Terasawa, Y. Fukuda, Y. Niimura, Y. Watanabe, Y. Watanuki and H. Ogi, 2012. Status and conservation of the Common Murre *Uria aalge* breeding on Teuri Island, Hokkaido. Ornithological Science, 11: 29-38.
- 北海道，1997．平成 8 年度北海道希少海鳥類保護増殖事業報告書．128pp. 北海道環境生活部，札幌.
- 環境庁，1973．特殊鳥類等調査．226pp. 環境庁.
- 環境庁，1978．特殊鳥類等調査．pp. 88-102．環境庁.
- 環境省北海道地方環境事務所，2012．平成 23 年度ウミガラス保護増殖事業報告書．pp. 1-17.
- 環境省北海道地方環境事務所，2023．（お知らせ）天売島におけるウミガラスの繁殖結果について（2023 年 12 月 15 日）．報道発表資料（https://hokkaido.env.go.jp/press_00060.html）
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2021．モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査 2004-2018 年度とりまとめ報告書．p. 223．環境省.
- 近藤憲久，1995．ユルリ・モユルリ島と歯舞・色丹島における海鳥の生息状況．根室市博物館開設準備室紀要，(9): 49-59.
- 村田英二，1957．天売島の海鳥類とその保護について．野鳥，183: 136-140.
- Osa, Y. and Y. Watanuki, 2002. Status of seabirds breeding in Hokkaido. J Yamashina Inst. Ornithol. 33(2): 107-141.
- 寺沢孝毅，1995．ウミガラス．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（II），pp. 698-703．日本水産資源保護協会，東京.
- 寺沢孝毅・福田佳弘・斉藤暢，1995．天売島におけるウミガラスの生息状況．ウミガラス等海鳥群集生息実態調査報告書 1992 年～1994 年，pp. 3-15．北海道環境科学研究センター，札幌.
- 綿貫豊・青塚松寿・寺沢孝毅，1986．天売島における海鳥の繁殖状況．鳥，34: 146-150.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Uria aalge inornata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Uria aalge inornata* is listed as CR under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef

	【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by native species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	風間健太郎（早稲田大学）・松井晋（東海大学）
Author:	Kentaro Kazama and Shin Matsui

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　ウミスズメ科 Alcidae

ウミスズメ

***Synthliboramphus antiquus antiquus* (Gmelin, 1789)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab

基準 A:　－	基準 B:　CR	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。
【過度に分断】
現在確実な繁殖地は北海道天売島に限られる。
【地点数】1 地点
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
天売島では、2010 年代において継続的に、繁殖期に 200 羽程度の成鳥個体が確認されているものの、繁殖個体数は明らかでなく、個体数の増加・回復は予想されない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

ウミスズメ科の小型の海鳥で、離島の断崖にある崖穴などに営巣する。現在、日本で繁殖確認されているのは、北海道天売島のみであり、1956 年に 500 羽が繁殖、1987 年には約 200 羽が繁殖していたと推定されている。しかし、現在の繁殖数の正確な数は分からない。冬期になると全国の沿岸にも分布し、群れで見られる。繁殖地ではネズミ類やカラス類などによる捕食、海上では漁網や油汚染により、生息が脅かされている。

基礎情報

【形態】

小型の海鳥で、体重 146～251 g、翼長 130～141 mm で、メスの方がオスに比べやや大きい。夏羽では、頭部全体から喉まで広く黒色で、目の後ろから側頭部にかけて白色線が入る。上背には黒色で白色の細い斑が入り、背から肩羽と翼上面は暗灰色で、初列風切羽は黒色となる。冬羽では、目の後ろから側頭部にかけて白色線がなく、喉は白色となる。類似種はカンムリウミスズメ（*Synthliboramphus wumizusume*）であるが、夏羽では頭頂には黒色の冠羽がある。

【生活史】

離島の崖穴や岩の割れ目などに営巣し、やや密度は低いが集団営巣する。産卵は 3 月下旬から 6 月下旬まであり、繁殖地間で異なり、海水面温度の影響を受ける。7～8 日の間隔で 2 卵を産み、2 卵を産み終えてから抱卵が開始される。抱卵は雌雄交替で行われ、夜間に交代する。抱卵日数は 30 日程度であるが、1～4 日ぐらい抱卵されていない期間がある。孵化すると雛は 2 日以内で巣を離れ、その後は海上で親から餌を受ける。雛が成長するまでには 30 日程と考えられている。巣において給餌しないため採食物についてよく知られていないが、少なくともオキアミやイカナゴの幼魚などが知られている。

【生息環境】

離島や海岸の断崖で集団繁殖し、沿岸や外洋で採食する。繁殖を終えると、繁殖地である陸地から離れ、沿岸や外洋に生息する。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	(5) 沿岸域, (6) 海洋域, (7) 島嶼地域

【分布域】

ユーラシア東部の海岸と千島列島、アリューシャン列島、北アメリカ北西部で繁殖する。非繁殖期には、より南方に分布範囲を広げ、日本では本州の沿岸にも分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本では北海道天売島、ハボマイモシリ島、岩手県三貫島などでの繁殖が報告されているが、繁殖地の現状については不明な点が多い。山形県飛島でも繁殖の可能性が示唆されている。冬期は全国の海上に分布し、百羽を超える群れをつくることもある。九州以南では少ない。

【生息地の現況】

現在繁殖確認されている生息地は天売島であるが、かつての営巣地の物理的環境には大きな変化はない。北海道東部のモユルリ島、ハボマイモシリ島では、すでに繁殖地が消滅

したと考えられている。

【個体数の現況】

北海道天売島では、1956 年に 500 羽が繁殖、1987 年には約 200 羽が繁殖していたと推定されている。天売島の営巣地付近では、近年の調査において海上で約 150～300 羽が確認されている。最新の情報として、2018 年には 249 羽が確認された。2016 年に海上で捕獲した 30 個体のうち 57%が抱卵斑を有したことから、繁殖期に営巣地付近の海域に夜間集まる個体の約半数が繁殖個体と推察された。ただし繁殖数の正確な数は分かっていない。2016 年には岩手県大槌町の沿岸で本種の繁殖期に 600 羽以上の群れが確認されたが、繁殖は確認されていない。

存続を脅かす要因

ネズミやカラス類による捕食、漁業による混獲などがある。1997 年におきたナホトカ号重油流出事故では、漂着死体 1,311 体のうち 1/3 が本種であり、油汚染の脅威が大きい。

要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による），捕食（在来種による），混獲・錯誤捕獲，その他（油汚染）
	（現在）	捕食（外来種による），捕食（在来種による），その他（油汚染）

特記事項

人が近づくことの困難な断崖に営巣するため、国内での多くの繁殖地で現状が不明である。また、本種の太平洋西岸での繁殖分布域は国内の繁殖地の南限となる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ウミスズメ	*Synthliboramphus antiquus*	CR
第４次 2019：	ウミスズメ	*Synthliboramphus antiquus*	CR
第４次 2018：	ウミスズメ	*Synthliboramphus antiquus*	CR
第４次 2017：	ウミスズメ	*Synthliboramphus antiquus*	CR
第４次 2015：	ウミスズメ	*Synthliboramphus antiquus*	CR
第４次：	ウミスズメ	*Synthliboramphus antiquus*	CR
第３次：	ウミスズメ	*Synthliboramphus antiquus*	CR
第２次：	ウミスズメ	*Synthliboramphus antiquus*	CR
第１次：	ウミスズメ	*Synthliboramphus antiquus*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu)，【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類，【山形県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【福島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【千葉県】重要保護生物(B)，【東京都（伊豆諸島）】情報不

足(DD),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】情報不足(DD),【福井県】要注目,【三重県】情報不足(DD),【兵庫県】C ランク,【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【島根県】情報不足(DD),【山口県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【徳島県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【愛媛県】情報不足(DD),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種,【長崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【熊本県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【大分県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【鹿児島県】情報不足

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Gaston, A. J. and I. L. Jones, 1998. The Auk, 349pp. Oxford University Press, Oxford.
- Hasegawa, H., 1984. Status and conservation of seabirds in Japan, with special attention to the short-tailed albatross. In: J. P. Croxall, P. G. H. Evans and R. W. Schreiber (eds.), Status and conservation of the world's Seabirds, pp. 487-500. ICBP Technical Publication No2, Cambridge.
- 環境省北海道地方環境事務所，2012．平成 23 年度ウミガラス保護増殖事業報告書．p. 22．環境省．
- 環境省北海道地方環境事務所，2019．令和元年度国指定天売島鳥獣保護区におけるケイマフリ等海鳥調査報告書．
- 環境省自然環境局生物多様性センター．海鳥コロニーデータベース．(https://www.sizenken.biodic.go.jp/seabirds/)
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2021．モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査 2004-2018 年度とりまとめ報告書．p. 227．環境省．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2023．2022 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書．環境省．
- Matsui, S., D. Whitworth, N. Sugita and I. Nishiumi, 2020. Breeding status and sex ratio of Ancient Murrelets captured in the nocturnal at-sea congregation at Teuri Island, Japan. Ornithological Science, 19: 203-209.
- 小城春雄，1996．ウミスズメ．日本の希少な野生生物に関する基礎資料（III），pp. 525-530．日本水産資源保護協会，東京．
- 小野宏治，2002．ウミスズメ．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 －レッドデータブック－ 2 鳥類．環境省自然環境局野生生物課（編），pp. 68-69．自然環境研究センター，東京．
- Osa, Y. and Y. Watanuki, 2002. Status of seabirds breeding in Hokkaido. J Yamashina Inst. Ornithol.，33(2): 107-141.

- Sugita, N., S. Matsui, N. Yoshikawa and I. Nishiumi, 2021. Genetic characteristics of a small breeding population of ancient murrelets from Teuri Island, Japan, based on mitochondrial DNA sequences and newly-developed microsatellite markers. Ecological Research, 36: 637-647.
- 綿貫豊・近藤憲久・中川元，1988．北海道周辺における海鳥繁殖地の現状．日本鳥学会誌，37: 17-32．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Synthliboramphus antiquus antiquus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Synthliboramphus antiquus antiquus* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by alien species), Predation (by native species), Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者: 風間健太郎（早稲田大学）・松井晋（東海大学）

Author:	Kentaro Kazama and Shin Matsui

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　ウミスズメ科 Alcidae

エトピリカ

***Fratercula cirrhata* (Pallas, 1769)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　CR	基準 E:　－
D．成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 現在生息が確認されているユルリ・モユルリ両島周辺海域での最大同時観察数は 2010 年代には 7～22 羽、繁殖つがい数は、2020 年には 1、2021 年には 0 であった。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

エトピリカはウミスズメ科の中型の海鳥である。北太平洋の亜寒帯海域に分布し、日本では北海道東部に繁殖地がある。島や海岸の崖上部に巣穴を掘って集団で営巣し、潜水して魚類やイカ類、オキアミ類を主に食べる。北海道東部には数ヶ所の繁殖地があったが、長期的に生息数が減少している。現在はユルリ島、モユルリ島のみに 0～1 つがい程度が確認されているだけである。

基礎情報

【形態】

全長 39 cm、体重 678～913 g で、オスはメスに比べやや大きい。体は黒く、夏羽では額、顔側面部が白く、目上から黄白色の飾羽が出ている。嘴は縦に偏平で、赤色と黄緑色。脚は赤い。冬羽では飾羽がなく、顔側面の白色部は小さくなる。ツノメドリ（*Fratercula corniculata*）は顔の白色部が広く、目上の飾羽がなく、ウトウ（*Cerorhinca monocerata*）は嘴がやや細く、嘴の上部に突起があり、体の腹側は白っぽい。

【生活史】

5～6 月に巣穴に 1 卵を産み、雌雄交替で 42～46 日間抱卵する。雛は孵化後 44～47 日で巣立つ。潜水してイカナゴなどの魚類や小型イカ類、オキアミ類を食べる。

【生息環境】

離島や海岸の崖上部の土中に巣穴を掘り、集団で営巣する。繁殖期には繁殖地周辺の沿岸域に、非繁殖期には北海道や本州北部の沿岸域から外洋に広く生息する。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（5）沿岸域，（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

繁殖地は、オホーツク海沿岸とベーリング海沿岸、千島列島、北太平洋のカリフォルニア沿岸からアラスカ湾などの島嶼である。国内では、北海道東部沿岸に繁殖地がある。非繁殖期の採餌海域は、北部太平洋全域にわたる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1970 年代には北海道東部の友知島、ユルリ島、モユルリ島、湯沸岬、霧多布小島、大黒島などに繁殖地があったが、現在、毎年繁殖が確認されているのはユルリ島、モユルリ島だけである。

【生息地の現況】

現在確認されている繁殖地はすべて無人島であり、これらの島々のうち霧多布の小島を除く各島は自治体の天然記念物に指定されており、各市町教育委員会により上陸が制限されている（霧多布の小島でも立入禁止の看板を設置し、立入りは制限している）。しかし、海上からの接近に関しては、制限がなく、観光船等に対する注意が必要である。さらに、繁殖地近くで営巣するカモメ類・カラス類などによる雛捕食や餌略奪の危険がある。加えて、オジロワシによる捕食や攪乱も心配されている。ドブネズミによる卵や雛の捕食も懸念される。

【個体数の現況】

1960 年代にモユルリ島で約 250 羽、1970 年代にユルリ・モユルリ両島で約 100 羽が数えられたが、1980 年代には両島で 20 羽前後に減少した。ユルリ・モユルリ両島周辺海域での近年の最大同時観察数は 1997 年と 2002 年に観察された約 36 羽であったが、2010 年代には 7～22 羽であった。両島での繁殖つがい数は、2000 年から 2010 年代まで 2～11 と変動があった後、2020 年には 1、2021 年には 0 となっている。霧多布の小島では、1984 年に 3 つがいが営巣し、一時繁殖が途絶えた後 2008 年まで 1 つがいが繁殖したが、以降繁殖は確認されていない。

存続を脅かす要因

成鳥の死亡原因の一つに流網、底刺網等への羅網が考えられる。とくに越冬個体の沖合流網への混獲の影響が大きかったと考えられる。また、繁殖規模が小さくなったため、雛の捕食、餌の略奪等といったカモメ類の影響が無視できない。また、霧多布の小島以外では保護区等の指定がないため、行政と地域社会との合意形成のもと、本種の生息に配慮した観光船等の運行を行うことが望まれる。増加しているオジロワシによる捕食や攪乱も懸念されている。

要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による），捕食（在来種による），混獲・錯誤捕獲，その他（船舶等の接近）
	（現在）	捕食（在来種による），その他（船舶等の接近）

特記事項

1972 年には、大黒島全域が国指定鳥獣保護区（107 ha、全域特別保護地区）、1982 年には、ユルリ島及びモユルリ島の全域に国指定ユルリ・モユルリ鳥獣保護区（199 ha、うち特別保護地区 31 ha）が指定された。1997 年から環境省委託の「北海道希少海鳥類保護増殖事業」の一環として（現在は環境省直轄「エトピリカ保護増殖事業」に移行）、ユルリ島・モユルリ島・大黒島・霧多布の小島で繁殖つがい数をモニターしている。環境省、浜中町教育委員会及びＮＰＯ法人エトピリカ基金により、霧多布の小島に陸上設置型デコイ及び海上浮遊型デコイを設置した。浜中町漁業協同組合との協定により、エトピリカ繁殖期における一部漁具の設置を禁止し、環境省および漁業協同組合が合同で巡視活動を行っている。ユルリ島・モユルリ島においては、ドブネズミの駆除が実施され、生息数の復元が期待される。

北海道東部の繁殖個体群は、この種の繁殖分布域の中では太平洋西岸での南限にあたる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：　エトピリカ　*Fratercula cirrhata*　CR

第４次 2019：	エトピリカ	*Fratercula cirrhata*	CR
第４次 2018：	エトピリカ	*Fratercula cirrhata*	CR
第４次 2017：	エトピリカ	*Fratercula cirrhata*	CR
第４次 2015：	エトピリカ	*Lunda cirrhata*	CR
第４次：	エトピリカ	*Lunda cirrhata*	CR
第３次：	エトピリカ	*Lunda cirrhata*	CR
第２次：	エトピリカ	*Lunda cirrhata*	CR
第１次：	エトピリカ	*Lunda cirrhata*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠA 類(Cr)，【山形県】評価対象外

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，鳥獣保護管理法

参考文献

- 藤巻裕蔵，1961．モユルリ島の海鳥類．鳥，16: 387-398.
- 北海道，1997．平成 8 年度北海道希少海鳥類保護増殖事業報告書．北海道環境生活部，札幌. 128pp.
- 環境省釧路自然環境事務所，2021．令和 3 年度エトピリカ保護増殖検討会．公開資料（https://hokkaido.env.go.jp/kushiro/content/000230223.pdf）
- 片岡義廣・水野政巳，1999．北海道浜中町霧多布におけるエトピリカの生態と生息数変動. Strix，17: 1-14.
- 近藤憲久・橋本正雄・綿貫豊，1986．ユルリ・モユルリ両島における鳥類相の変化．根室市博物館開設準備室紀要，1: 33-46.
- 近藤憲久・樋口広芳・金井裕，1991．道東沿岸におけるエトピリカ *Lunda cirrhata* およびチシマウガラス *Phalacrocorax urile* の生息状況．平成 2 年度特殊鳥類等調査，pp. 1-12．日本野鳥の会，東京.
- 近藤憲久・金井裕・藤田剛，1991．ユルリ・モユルリ島におけるエトピリカ *Lunda cirrhata* およびチシマウガラス *Phalacrocorax urile* の生息状況．平成 2 年度特殊鳥類等調査，pp. 13-25．日本野鳥の会，東京.
- 近藤憲久，1995．ユルリ・モユルリ島と歯舞・色丹島における海鳥の生息状況．根室市博物館開設準備室紀要，(9): 49-59.
- 新妻靖章，1995．大黒島のコシジロウミツバメとオオセグロカモメの繁殖ペアー数について．釧路市立博物館紀要，19: 15-18.

- 小城春雄，1995．エトピリカ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（II），pp. 704-709．日本水産資源保護協会，東京．
- 綿貫豊・近藤憲久・中川元，1988．北海道周辺における海鳥繁殖地の現状．日本鳥学会誌，37: 17-32．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Fratercula cirrhata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Fratercula cirrhata* is listed as CR under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by native species), Other
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	風間健太郎（早稲田大学）
Author:	Kentaro Kazama

公表年月：2026 年 3 月

ミズナギドリ目 Procellariiformes　ウミツバメ科 Hydrobatidae

クロコシジロウミツバメ

***Hydrobates castro* (Harcourt, 1851)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　CR	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。
【地点数】1 地点
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
繁殖地において、東北地方太平洋沖地震に伴う津波と崖の崩落、オオミズナギドリ（*Calonectris leucomelas*）との競合や営巣場所の土壌流出があげられている。これらの脅威は本種の繁殖する 3 つの島全域に影響するので、生息地点数は 1 地点とみなした。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

黒褐色の小型の外洋性海鳥で、太平洋と大西洋の暖海域に分布し、日本では岩手県日出島、タブの大島、三貫島で繁殖する。日出島は、本種の繁殖地の中では太平洋西岸の北限になり、1960 年代半ばには 25,000 つがいが繁殖しているとされていたが、2010 年以降は推定で 100 つがい以下とされ、その繁殖数は大きく減少している。2022 年は三貫島での本種の営巣を確認できていない。

基礎情報

【形態】

小型のミズナギドリ目の海鳥で全長 20 cm、体重 31-67 g、翼開長 43 cm。全体が濃い黒褐色で、腰は白色である。尾羽は切れ込みの浅い凹形である。コシジロウミツバメ（*Hydrobates leucorhous*）は、全体が黒褐色で、腰は白色で中央に褐色縦斑が入るが、明瞭でない個体も多い。また、尾羽の切れ込みは深い凹形である。

【生活史】

岩手県日出島では 5 月頃に渡来し、地面に 1 m 程の巣穴を堀り、1 卵を産卵する。42 日の抱卵で孵化し、雛は 10 月頃に巣立つ。繁殖地では夜間に飛来し、夜明け前に飛去する。海表面にいる小魚やイカなどを主に食べる。

【生息環境】

繁殖は太平洋と大西洋の暖海域の離島で行い、繁殖期以外は外洋に生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】裸地，森林，草地 【陸域_平地部】裸地，森林，草地 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

太平洋と大西洋の暖海域に分布し、日本では岩手県日出島、タブの大島、三貫島で繁殖が知られている。国外では、ハワイ諸島やガラパゴス諸島、大西洋のアゾレス諸島、ベルレンガス諸島、マデイラ諸島、セルヴァージェンス諸島、カーボベルデ諸島、セントヘレナのアセンション島などで繁殖する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

国内では岩手県日出島、タブの大島、三貫島で繁殖する。岩手県日出島は太平洋西岸における本種繁殖地の北限となっている。

【生息地の現況】

繁殖地において、東北地方太平洋沖地震に伴う津波と崖の崩落、オオミズナギドリ（*Calonectris leucomelas*）との競合や営巣場所の土壌流出が見られる。新たな繁殖地が見つかる可能性もあるが、国内の繁殖数は減少している。

【個体数の現況】

岩手県日出島では 1960 年代半ばに 25,000 つがいが繁殖しているとされたが、1973 年は 8,000 つがい、1994 年は 1,261 つがい、2006 年は 148 つがい、2010 年から 2022 年は推定 100 つがい以下で推移している。個体数の減少が著しく、極めて危機的な状況にある。三貫島での繁殖数は少なく、2022 年は、少なくとも成鳥 2 羽の飛来が確認できたが、営巣は

確認できていない。タブの大島では 2011 年、2019 年、2022 年に営巣は確認できているが、個体数の現況は不明である。

存続を脅かす要因

東北地方太平洋沖地震に伴う津波と崖の崩落、オオミズナギドリ（*Calonectris leucomelas*）との競合や営巣場所の土壌流出があげられている。

要因の区分：	（過去）	競争/競合（在来種による）
	（現在）	自然災害，競争/競合（在来種による）

特記事項

太平洋と大西洋に広い範囲で繁殖地をもつが、国内の繁殖数は減少している。その一方で、繁殖特性については不明な点が多い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	クロコシジロウミツバメ	*Oceanodroma castro*	CR
第４次 2019：	クロコシジロウミツバメ	*Oceanodroma castro*	CR
第４次 2018：	クロコシジロウミツバメ	*Oceanodroma castro*	CR
第４次 2017：	クロコシジロウミツバメ	*Oceanodroma castro*	CR
第４次 2015：	クロコシジロウミツバメ	*Oceanodroma castro*	CR
第４次：	クロコシジロウミツバメ	*Oceanodroma castro*	CR
第３次：	クロコシジロウミツバメ	*Oceanodroma castro*	CR
第２次：	クロコシジロウミツバメ	*Oceanodroma castro*	VU
第１次：	クロコシジロウミツバメ	*Oceanodroma castro*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類，【宮城県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【山形県】評価対象外

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- Hasegawa, H., 1984. Status and conservation of seabirds in Japan, with special attention to the Short-tailed albatross. In: J. P. Croxall, P. G. H. Evans and R. W. Schreiber (eds.), Status and conservation of the world's Seabirds, pp. 487-500. ICBP Technical Publication, Cambridge.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2023．2022 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書.
- 熊谷三郎，1936．*Oceanodroma castro*（Harcourt）に就て．鳥，9: 142-154.
- 佐藤文男，1997．クロコシジロウミツバメ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（IV），pp. 562-567．日本水産資源保護協会，東京.
- 佐藤文男・鶴見みや古，2003．オオミズナギドリによるクロコシジロウミツバメの巣穴破壊を防ぐ、金網を用いた営巣地保全に向けての試み．山階鳥類研究所研究報告，34: 325-330.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hydrobates castro has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hydrobates castro* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Bare area, Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Bare area, Forest, Grassland 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Natural disasters, Competition (with native species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



©今野怜（公益財団法人山階鳥類研究所協力調査員）

執筆者:	富田直樹（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Naoki Tomita

公表年月：2026 年 3 月

ミズナギドリ目 Procellariiformes　ミズナギドリ科 Procellariidae

オガサワラヒメミズナギドリ

***Puffinus bryani* Pyle, Welch & Fleischer, 2011**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab

基準 A:　—	基準 B:　CR	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【地点数 1】

確実な繁殖地が父島列島の東島 1 ヶ所しか見つかっていない。

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

既知の唯一の繁殖地である東島では、外来ネズミ類は駆除されたものの、その後に外来植物のジュズサンゴやギンネム、パイオニア種のシロツブなどが分布を拡大しており、本種の好適な営巣環境の減少が予想されるため。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

オガサワラヒメミズナギドリは、2011 年に新種記載された小型のミズナギドリである。これまでミッドウェイ島で 2 例の記録がある以外は、小笠原諸島でのみ記録されている。小笠原諸島では、2015 年 2 月に無人島の東島で営巣が 1 例見つかっている。近代の人間の入植による撹乱が生じる以前には、本種は小笠原諸島の海鳥の優占種の一つだったと考えられるが、近年確認されている個体数は極めて少ない。ネズミ類の捕食やノヤギによる環境改変など外来種の影響が減少の主因と考えられる。繁殖地の環境は外来植物等の分布拡大による影響を受けている。

基礎情報

【形態】

全長約 27～30 cm、翼開長約 55～60 cm、翼長約 17～18 cm、尾長 7～8 cm、体重約 130 g。ミズナギドリ類としては小型で、体サイズに対して尾羽が長い。体の上面が黒く、下面が白く、下尾筒が黒い。翼下面の白色部が広く、初列風切羽内弁基部近くに白色部がある。頭部下面の白色部が眼の上側まで達している。嘴と足は青灰色。

【生活史】

小笠原諸島の東島では、2015 年 2 月 25 日にオガサワラススキ草地の地面に掘った穴の中で、抱卵中の巣が 1 箇所発見されている。また、小笠原諸島及びミッドウェイ諸島の陸地において記録された時期は、12 月から 5 月までの間である。一般にミズナギドリ類は、非繁殖期は海上で過ごし、繁殖期のみ陸上に飛来することから、陸上での記録が集中している冬期が本種の主な繁殖期だと考えられる。本種の繁殖生態、食性の詳細については不明である。

【生息環境】

2015 年 2 月 25 日に小笠原諸島の東島で行われた調査では、タコノキの低木林とオガサワラススキの草地で 4 個体が捕獲されている。また、この調査で見つかった巣はタコノキの低木林に隣接したオガサワラススキ草地で見つかっている。2006 年に東島において 3 羽の死体が発見された環境は、オガサワラススキ草地内の単木のアカテツの下、オガサワラススキ草地内のタコノキの下、ギンネム林の中であった。また、2011 年に別の無人島で 1 羽が発見された環境は、海岸近くの岩の隙間であった。以上のことから、本種は海岸に近い低標高地の低木林、草地、岩場がモザイク状に混在する環境において繁殖していると考えられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】裸地，森林，草地 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

国外での記録は、1963 年および 1990 年代前半にミッドウェイ諸島であるのみだが、この場所は繁殖地ではないと考えられている。国内では、確実な記録は小笠原諸島でのみ得られており、東島において、2015 年 2 月に抱卵中の巣が見つかっている。小笠原諸島南島の古代骨の分析から、本種は近代の人為的撹乱が生じる以前には小笠原群島の低標高地における優占種の一つであったと考えられている。本種の可能性のある個体の海上における観察は、ほぼ小笠原諸島近海に限定されていることから、本種は小笠原諸島の近海が生息域の中心となっている可能性がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

小笠原諸島では、母島（1 羽、1997 年 4 月 7 日）、父島（1 羽、2005 年 1 月 3 日）、父島列島の東島（3 羽、2006 年 12 月 16 日、10 羽、2015 年 2 月 26 日）、聟島列島の無人島（1 羽、2011 年 5 月 29 日）の 4 島で記録がある。母島及び父島は有人島であり、個体の発見場所は集落の周辺であるため、夜間に光に誘引されて飛来したものと考えられる。このうち繁殖が確認されているのは、東島のみである。ただし個体数が少ないこと、新種記載されて間がないことから、発見されていない繁殖地が他の島に存在する可能性がある。ハワイ諸島では 1990 年代前半の記録の後は確実な記録がない。

【生息地の現況】

本種の巣、生体、死体が発見された東島の主な環境は、タコノキ等の低木林、オガサワラススキ等の草地、露岩地帯、裸地である。この島では外来種のギンネムやジュズサンゴが繁茂しており、その群落内では海鳥の営巣密度が低い。過去に野生化していた外来種のノヤギは 1970 年頃に、クマネズミは 2008 年と 2010 年に駆除が実施され、その後は記録されていない。

【個体数の現況】

一般的にミズナギドリ類は高密度で集団繁殖するが、確認されている唯一の繁殖地である東島では、本種の繁殖期と考えられる 2 月に行われた調査で 10 個体程度しか確認されていないことから、現存個体数は非常に少ないと考えられる。

存続を脅かす要因

2006 年に東島で見つかった 3 羽は、外来哺乳類であるクマネズミに捕食された状態で発見された。小笠原諸島では小型海鳥のネズミ類による捕食が問題となっているが、本種は体サイズが小さいため、特にネズミ類に捕食されやすいと考えられる。また、小笠原諸島の無人島では、トクサバモクマオウ、ギンネム、ジュズサンゴなどの外来植物の繁茂により環境が大きく改変されており、本種の繁殖に影響を与えている可能性がある。有人島では光に誘引された個体が保護される事例がある。有人島での不時着個体は、ノネコによる捕食や交通事故、人工構造物への衝突が心配される。過去にはノヤギによる環境改変や繁殖撹乱が生じていたと考えられる。近年は、潜在的な繁殖地においてノヤギ等の外来種駆除が進んだ結果、より大型で広域分布するオナガミズナギドリの個体数が増加している。このような種が先に増加することで、巣穴をめぐる競争などを介して、小型で移動性の低いオガサワラヒメミズナギドリの個体数の回復が阻害される可能性がある。また、小笠原諸島ではノヤギやネズミなどの外来植食者の駆除により、在来のパイオニア植物であるシロツブが急激に増加し、海鳥にとって好適な繁殖環境を減少させていると考えられている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	交通事故，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，競争/競合（在来種による），人工構造物への衝突，光害，分布・産地局限

特記事項

近年は小笠原諸島周辺でのみ記録されており、世界的に貴重な種である。本種の分布や生態など保全に必要な情報は極めて不足しているため、基礎的な生物学的情報の収集が不可欠である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	オガサワラヒメミズナギドリ	*Puffinus bryani*	CR
第４次 2019:	オガサワラヒメミズナギドリ	*Puffinus bryani*	CR
第４次 2018:	オガサワラヒメミズナギドリ	*Puffinus bryani*	CR
第４次 2017:	オガサワラヒメミズナギドリ	*Puffinus bryani*	CR
第４次 2015:	オガサワラヒメミズナギドリ	*Puffinus bryani*	CR
第４次:	オガサワラヒメミズナギドリ	*Puffinus bryani*	CR
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- Chiba, H., K. Kawakami, H. Suzuki and K. Horikushi, 2007. The distribution of seabirds in the Bonin Islands, southern Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol, 39: 1-17.
- Kawakami, K., K. Horikoshi and H. Suzuki, 2010. Severe predation impacts by invasive black rats *Rattus rattus* on the Bulwer's petrel *Bulweria bulwerii* in the Bonin Islands, Japan. In: K. Kawakami and I. Okochi (eds.), Restoring oceanic island ecosystems., pp. 51-55. Springer, Tokyo.
- Kawakami, K., M. Eda, K. Horikoshi, H. Suzuki, H. Chiba and T. Hiraoka, 2012. Bryan's Shearwaters have survived on the Bonin Islands, Northwestern Pacific. Condor, 114: 507-512.

- Kawakami K and K. Horikoshi, 2022. Recovery or changeμm Differences between in seabird fauna in island ecosystems before alien mammal disturbance and after alien mammal eradication. Restoration Ecology, 30: e13579.
- Otani, C., 2011. Little-known Asian bird: Possible records of the newly described Bryan's Shearwater *Puffinus bryani* in Japan. BirdingASIA, 16: 86-88.
- Pyle, P., A. J. Welch and R. C. Fleischer, 2011. A new species of shearwater (*Puffinus*) recorded from Midway Atoll, Northwestern Hawaiian Islands. Condor, 113: 518-527.
- Pyle, P., R. David, B. D. Eilerts, A. B. Amerson, A. Borker and M. McKown, 2014. Second record of Bryan's Shearwater *Puffinus bryani* from Midway Atoll, with notes on habitat selection, vocalizations and at-sea distribution. Marine Ornithology, 42: 5-8.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Puffinus bryani has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Puffinus bryani* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Bare area, Forest, Grassland 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Vehicle collision, Predation (by alien species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Competition (with native species), Collision with man-made structures, Light pollution, Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

ミズナギドリ目 Procellariiformes　ミズナギドリ科 Procellariidae　　日本固有

オガサワラミズナギドリ

***Puffinus bannermani* Mathews & Iredale, 1915**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　CR	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。
【過度に分断】
東島には数百個体、南硫黄島には数千個体が繁殖すると考えられており、繁殖個体のほとんどが南硫黄島に分布している。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
東島では、外来哺乳類の駆除後に外来植物のギンネム、ジュズサンゴ、在来植物のシロツブが増加し、本種にとって好適な営巣環境が圧迫されている。また、南硫黄島の繁殖地は急傾斜地にあるため、土砂崩れ等の影響を常時受けており、繁殖環境が極めて不安定である。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

　オガサワラミズナギドリは、以前は広域分布するセグロミズナギドリの亜種とされていたが、DNA に基づく最近の研究から小笠原諸島のみで繁殖する独立種であることが明らかになった。現在の繁殖分布は非常に局地的で、父島列島の東島及び火山列島の南硫黄島のみで繁殖が見つかっている。過去には北硫黄島でも繁殖していたが、おそらく外来のネズミ類の捕食により繁殖集団が消失している。東島ではノヤギおよび外来ネズミ類の根絶が達成されており、北硫黄島など他の島でも同様の対策が期待される。ただし、この東島の繁殖地はギンネムやジュズサンゴなどの外来植物の繁茂による環境改変の影響を受けており、その管理が必要とされている。

基礎情報

【形態】

全長 31 cm、翼開長 65～75 cm。体の上面が黒く、下面が白い小型のミズナギドリ。翼の後方で、腹側の白色部が背側に食い込んで見える。鼻孔が上向きに開口している。

【生活史】

2～3 月頃に繁殖地に飛来し、9～10 月頃に巣立つ。東島では、タコノキの低木林や草地などの地上の穴の中で営巣する。集団繁殖し、繁殖地には夜間に飛来し、夜明け前に飛去する。一腹卵数は 1 である。

【生息環境】

父島列島の東島では低木林または草原の地面に掘った穴の中で繁殖している。南硫黄島では標高 300 m から山頂までの間の森林内の地面に掘った穴の中または崩落地の岩の隙間などで繁殖している。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

これまでに小笠原諸島の東島、北硫黄島、南硫黄島のみで繁殖が確認されている。非繁殖期は主に繁殖地周辺海域に生息していると考えられる。本州周辺での記録は少ないが、琉球諸島ではまれに観察されている。小笠原諸島南島の古代骨の分析から、本種は近代の人為的撹乱が生じる以前には小笠原群島の低標高地における優占種の一つであったと考えられている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

戦前は、北硫黄島のみで繁殖が確認されていたが、戦後は北硫黄島での繁殖は確認されておらず、局所絶滅したものと考えられている。2007 年には、父島列島属島の東島で繁殖が確認された。また、2007 年と 2017 年に南硫黄島で行われた調査から、この島では標高 300 m 以上の場所で繁殖していると考えられている。南硫黄島では、1982 年の調査で本種の可能性のある足跡が見つかっており、以前から繁殖していたと考えられる。

【生息地の現況】

東島の繁殖地の環境は、タコノキ等の低木林、オガサワラススキの草地、岩石地帯により構成されている。この島では、過去には外部から移入され野生化したノヤギとクマネズミにより植生の更新が妨げられていたと考えられるが、ノヤギとクマネズミはすでに島内から根絶されている。しかし、林内では外来植物ジュズサンゴが、開放地では外来植物のギンネムや在来植物のシロツブが分布を拡大し、生息地の環境が変化している。南硫黄島

の生息地は、コブガシやエダウチヘゴを中心とする森林や崩落地だが、地形が急峻なため土砂崩れによる撹乱が頻繁に生じていると考えられる。

【個体数の現況】

南硫黄島では、夜間に地上に降りている個体の観察頻度から、数千羽が繁殖していると考えられている。東島での繁殖個体数は不明だが、数百つがい程度と考えられる。

存続を脅かす要因

小笠原諸島では外来ネズミ類による小型海鳥の捕食が顕在化しており、その捕食圧が本種の局所絶滅の主因と考えられる。東島では、外来種であるノヤギとクマネズミの駆除後に外来種であるギンネムやジュズサンゴ、在来種であるシロツブなどの一部の植物が増加し、営巣環境が撹乱されていると考えられる。本種はしばしば有人島の人工光に誘引され不時着することがあり、それらの個体については、ネコによる捕食や交通事故、人工構造物への衝突などが生じている。南硫黄島では土壌の安定しない急斜面で繁殖しており、土砂崩れなどにより営巣環境が破壊される可能性がある。過去に繁殖地のあった北硫黄島では、近年も飛来が確認されているものの、繁殖集団の再定着は見られておらず、外来種であるクマネズミの捕食により営巣の再開が阻害されている可能性がある。聟島列島や南島では、ノヤギ駆除後により大型で移動性の高いオナガミズナギドリが急速に個体数を増やしており、種間競争などを介してオガサワラミズナギドリの集団の回復が阻害されている可能性がある。

要因の区分：	（過去）	交通事故，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，人工構造物への衝突，光害，分布・産地局限
	（現在）	交通事故，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，競争/競合（在来種による），人工構造物への衝突，光害，分布・産地局限

特記事項

以前は世界に広く分布するセグロミズナギドリの亜種の 1 つとされていたが、最近の DNA に基づく研究により小笠原のみで繁殖する独立種であることがわかった。これにともない、和名がセグロミズナギドリからオガサワラミズナギドリに変更されている。

種の保存法上は、指定された当時の学名及び和名であるセグロミズナギドリ *Puffinus lherminieri bannermani* として国内希少野生動植物種として指定されている。同様に、東京都のレッドリスト（小笠原諸島）でもセグロミズナギドリ *Puffinus lherminieri bannermani* として絶滅危惧ⅠB 類と評価されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020： セグロミズナギドリ *Puffinus lherminieri bannermani* EN

第４次 2019：	セグロミズナギドリ	*Puffinus lherminieri bannermani*	EN
第４次 2018：	セグロミズナギドリ	*Puffinus lherminieri bannermani*	EN
第４次 2017：	セグロミズナギドリ	*Puffinus lherminieri bannermani*	EN
第４次 2015：	セグロミズナギドリ	*Puffinus lherminieri bannermani*	EN
第４次：	セグロミズナギドリ	*Puffinus lherminieri bannermani*	EN
第３次：	セグロミズナギドリ	*Puffinus lherminieri bannermani*	DD
第２次：	セグロミズナギドリ	*Puffinus lherminieri bannermani*	DD
第１次：	セグロミズナギドリ	*Puffinus lherminieri bannermani*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- Chiba, H., K. Kawakami, H. Suzuki and K. Horikoshi, 2007. The distribution of seabirds in the Bonin Islands, southern Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol., 39: 1-17.
- Kawakami, K., K. Horikoshi and H. Suzuki, 2010. Severe predation impacts by invasive black rats *Rattus rattus* on the Bulwer's petrel *Bulweria bulwerii* in the Bonin Islands, Japan. In: K. Kawakami and I. Okochi (eds.), Restoring oceanic island ecosystems, pp. 51-55. Springer, Tokyo.
- Kawakami, K., M. Eda, H. Izumi, K. Horikoshi and H. Suzuki, 2018. Phylogenetic position of endangered *Puffinuslheminieri bannermani*. Ornithological Science, 17: 11-18.
- Kawakami, K., 2019. Minami-Iwo-To: The Last Vestige of Wilderness in the Ogasawara Islands. Global Environmental Research, 23: 77-81.
- Kawakami, K. and K. Horikoshi, 2022. Recovery or changeμm Differences between in seabird fauna in island ecosystems before alien mammal disturbance and after alien mammal eradication. Restoration Ecology, 30: e13579.
- 川上和人・江田真毅・泉洋江・堀越和夫・鈴木創，2019．日本鳥類目録におけるセグロミズナギドリ和名変更の提案．日本鳥学会誌，68: 95-98.
- 川上和人・鈴木創・堀越和夫・川口大朗，2018．2017 における南硫黄島の鳥類相．小笠原研究，44: 217-250.
- 川上和人･鈴木創・千葉勇人・堀越和夫，2008．南硫黄島の鳥類相．小笠原研究，33: 111-127.
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並に硫黄列島産の鳥類に就て．日本生物地理学会会報，1: 89-186.

- 塚本洋三，1983．南硫黄島の鳥類．環境庁自然保護局（編）「南硫黄島の自然」，pp. 249-285．日本野生生物研究センター，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Puffinus bannermani has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Puffinus bannermani* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Vehicle collision, Predation (by alien species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Competition (with native species), Collision with man-made structures, Light pollution, Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.


©池田昇平（湖北野鳥センター）


©川上和人

執筆者: 川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）

Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

カツオドリ目 Suliformes　ウ科 Phalacrocoracidae

チシマウガラス

***Urile urile* (Gmelin, 1789)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　CR	基準 E:　－
D．成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 国内での繁殖数について、2022 年にモユルリ島で 8 巣の営巣が確認されているのみである。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

現在では北海道東部のユルリ島、モユルリ島、番屋岩等で繁殖する。1972 年には 178 巣が確認されたが、1980 年代には 0 巣ないし最高でも 14 巣に減少し、1986 年、1987 年、1993 年には営巣が確認できなかった。2000 年には 28 巣の繁殖が確認されているが、2010 年に 5 巣を確認した後は、2011 年と 2012 年は巣の痕跡のみを確認している。人間の繁殖地への不用意な接近は、繁殖への悪影響があると考えられる。

基礎情報

【形態】

全長 76 cm、オスの体重は 1,922～2,267 g でメスの 1,550～2,050 g に比べてやや大きい。成鳥夏羽では身体全体が金属光沢のある黒色であるが、頸に紫色光沢、体上面に緑色と紫色の光沢がある。顔部分に赤色の皮膚が露出し目立つ。生殖羽では頭部と後頭部の 2 ヶ所に冠羽がある。ヒメウも顔部分が赤色であるが、上嘴基部は露出していない。成鳥冬羽は顔の赤色部分がなくなり、全身が金属光沢を帯びた黒色である。ヒメウも類似した冬羽を持つが、頸部および頭部が細く見える。

【生活史】

一腹産卵数は 1～4 卵で、雌雄交替で 31～32 日抱卵する。育雛期間は 54～56 日である。日本国内での巣立ち時期はだいたい 8 月中旬～下旬であるが、年により、あるいはつがいによって 3 週間程度のばらつきが見られる。

【生息環境】

離島や海岸の崖に集団で営巣する。繁殖期には繁殖地周辺の沿岸域に、非繁殖期には主に沿岸域に生息する。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_表層】海面，岩礁（磯） 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（5）沿岸域，（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

アメリカ・アラスカ州沿岸域からアリューシャン列島を経て千島列島北部、歯舞群島、北海道東部で繁殖する。非繁殖期には、北海道から本州北部の沿岸にも飛来する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

過去には落石岬など、根室市および浜中町の海岸で営巣が確認されていたが、現在確認されている繁殖地は、ユルリ島、モユルリ島、孤立岩である番屋岩等である。多くのつがいは毎年営巣場所を変えており、歯舞群島との交流があるものと考えられる。

【生息地の現況】

現在の繁殖地は無人島あるいは孤立岩が中心であるが、まれに人の接近が可能な場所にも営巣するので、人の接近による攪乱には、注意が必要である。

【個体数の現況】

日本では北海道ユルリ島、モユルリ島およびその周辺だけで少数が繁殖する。1972 年にユルリ島及びモユルリ島で 178 巣前後が繁殖していたが、1982 年には 4 巣の繁殖が確認された。1984 年には 13 巣が確認されたものの、1986・1987 年には営巣の確認はなかった。1990 年には 14 巣が確認されたが、1993 年には営巣の確認はなかった。1996 年には、カモ

島で 2 巣の営巣が確認された。その後育雛期に、1997 年 13 巣、1998 年 27 巣、1999 年 23 巣、2000 年 28 巣が確認され、2001 年においては抱卵期等でユルリ島及びモユルリ島、番屋岩にて約 53 巣を確認したが、巣立ち雛数は不明である。両島で 2004 年、2007 年、2010 年、2013 年に行ったモニタリングサイト 1000 海鳥調査では 5 巣から 18 巣の営巣が確認された。その後、2016、2019 年の調査では繁殖が確認されなかったが、2022 年にモユルリ島で 8 巣の営巣が確認された。

存続を脅かす要因

近藤ほか（1986）は、過去における減少要因としてコンブ育成のために行われた岩礁爆破による影響の可能性を指摘している。また、営巣地へ人間が接近することによって、親鳥が巣を離れ、その間に卵・雛をカラス類あるいはオオセグロカモメに捕食される危険性がある。さらに人間の接近により巣立ち前の雛が巣から落ちる場合がある。このため、カメラマン等の繁殖地への接近は、重大な営巣地の攪乱と成り得る。

要因の区分：	（過去）	海岸開発
	（現在）	その他（カメラマン等人間の接近）

特記事項

ユルリ島等の繁殖個体は歯舞群島をはじめとする北方四島との交流個体であると考えるのが妥当である。現在、北海道東部が本種の繁殖地の太平洋西岸での南限であるが、繁殖確認できない年があり、安定的ではない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	チシマウガラス	*Phalacrocorax urile*	CR
第４次 2019：	チシマウガラス	*Phalacrocorax urile*	CR
第４次 2018：	チシマウガラス	*Phalacrocorax urile*	CR
第４次 2017：	チシマウガラス	*Phalacrocorax urile*	CR
第４次 2015：	チシマウガラス	*Phalacrocorax urile*	CR
第４次：	チシマウガラス	*Phalacrocorax urile*	CR
第３次：	チシマウガラス	*Phalacrocorax urile*	CR
第２次：	チシマウガラス	*Phalacrocorax urile*	CR
第１次：	チシマウガラス	*Phalacrocorax urile*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠA 類(Cr),【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- 阿部學・松木勝彦，1968．根室市花咲港付近の鳥類．鳥，18: 227-246.
- 藤巻裕蔵，1961．モユルリ島の海鳥類．鳥，16: 387-398.
- 藤巻裕蔵・百武充・松岡茂，1976．ユルリ，モユルリ島の鳥類 1，ウ類，カモ類．山階鳥類研究所研究報告，8: 68-88.
- 芳賀良一，1973．ユルリ島・モユルリ島における鳥類調査（1972）．ユルリ島・モユルリ島総合調査報告，pp. 31-61．根室市教育委員会，根室.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2023．2022 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書．環境省，富士吉田.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，海鳥コロニーデータベース．(https://www.sizenken.biodic.go.jp/seabirds/)
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2021．モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査 2004-2018 年度とりまとめ報告書． pp. 196-199．環境省，富士吉田.
- 環境庁，1973．特殊鳥類等調査，pp. 1-120，環境庁.
- 近藤憲久・橋本正雄・綿貫豊，1986．ユルリ・モユルリ両島における鳥類相の変化．根室市博物館開設準備室紀要，1: 33-46.
- 近藤憲久・樋口広芳・金井裕，1991．道東沿岸におけるエトピリカ *Lunda cirrhata* およびチシマウガラス *Phalacrocorax urile* の生息状況．平成 2 年度特殊鳥類等調査，pp. 1-12．日本野鳥の会，東京.
- 近藤憲久，1995．ユルリ・モユルリ島と歯舞・色丹における海鳥類の生息状況．根室市博物館開設準備室紀要，9: 49-59.
- Osa, Y. and Y. Watanuki, 2002. Status of seabirds breeding in Hokkaido. J Yamashina Inst. Ornithol. 33, 107-141.
- 佐藤文男，1995．チシマウガラス．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（II），pp. 690-693．日本水産資源保護協会.
- 佐藤文男，2022．日本の海鳥の現状と保全の課題 ―環境省モニタリングサイト 1000 海鳥調査から―．山階鳥類学雑誌，54: 3-53.
- 綿貫豊・近藤憲久・中川元，1988．北海道周辺における海鳥繁殖地の現状．日本鳥学会誌，37: 17-32.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Urile urile has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Urile urile* is listed as CR under criteria D. D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface, Reef 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Other
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者: Author:	風間健太郎（早稲田大学）・長雄一（地方独立行政法人北海道立総合研究機構） Kentaro Kazama and Yuichi Osa

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　サギ科 Ardeidae

サンカノゴイ

***Botaurus stellaris stellaris* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　CR	基準 E:　－
D．成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 （公財）日本野鳥の会が 2020～2022 年に行った全国繁殖数調査の結果に基づく。北海道では現地調査を行い、その他の地域はアンケートにより繁殖数（鳴いているオスの数）を算出した。性比を 1:1 とし、調査で確認されたオスの数である 17 を 2 倍した羽数を成熟個体の推定値とした。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

サンカノゴイは、中型のサギで広いヨシ原、湖沼、河川などの湿地に分布する。国内の繁殖地は北海道、茨城県、千葉県などで局所的である。非繁殖期、国内各地から記録があるが、稀で、個体数は多くない。各地で本種の生息地である広大なヨシ原や湿地は消失している。（公財）日本野鳥の会が 2020～2022 年に行った全国繁殖数調査の結果、成熟個体数は 34 羽程度と推定された。

基礎情報

【形態】

全長約 70～80 cm で中型のサギの仲間である。羽色は雌雄で似ているが、通常オスよりメスはやや小さい。上面は黄褐色で濃い褐色の斑があり、下面は淡く大きな褐色の縦斑がある。頭頂は黒色で、メス・幼羽では淡い。生息域の水辺のヨシ原などの景観に類似した色彩であり、本種を生息域で確認することは簡単ではない。嘴と脚は、黄色味のある緑色で、目先の色は季節により変化する。ヨシゴイ（*Ixobrychus sinensis*）やゴイサギ（*Nycticorax nycticorax*）の幼鳥の色彩は似ているが、本種より小さい。

【生活史】

水辺では多様な魚類を主に捕食する。両生類や昆虫類、甲殻、クモ類、爬虫類、小型の哺乳類等の小動物を捕らえる。ウシガエル（*Rana catesbeiana*）の幼生なども捕食する。繁殖期、「ボーン・ボーン」「ボーッツ・ボーッツ」と大きな声でオスはよく鳴く。鳴き声は、3～5 km まで届くことがある。ウシガエルの声に似ているが、声の質と大きさが全く異なる。局地的に繁殖している利根川水系の湿地では、冬期にも鳴くことがある。繁殖期は、3～5 月で、一夫多妻であることがある。開放水面から遠くない水深 30 cm 程度の密生したヨシ原に営巣する。枯れたヨシの枝、葉などを集めただけの簡単な巣に、通常 4～5 卵を産む。メスのみが巣を造り、抱卵し、育雛する。抱卵日数は約 25～26 日で孵化後 50～55 日で巣立つとされる。ただし、国内での生活史については不明である。

【生息環境】

湖、池沼、ため池などの水帯・止水、沼沢、砂礫質の河川敷、その他の湿原などの湿地に生息する。塩沼地、泥質干潟の後背地や都市公園の造成された池などでも記録される。繁殖期は特徴ある鳴き声で生息を確認することができるが、非繁殖期は確認が極めて困難であるため、生息を確認することが難しい。

生息環境区分：	【陸域_平地部】湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖 【海域（沿岸）_潮間帯】干潟
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

2 亜種が知られ、そのうち 1 亜種（*Botaurus stellaris capensis*）はアフリカで繁殖する。日本に分布する亜種（*Botaurus stellaris stellaris*）はイギリス、スカンジナビアからシベリア、サハリン、日本など旧北区の広範囲にわたる地域で繁殖する。ユーラシア大陸北部で繁殖する個体は、アフリカ、南アジア、東南アジアに渡り越冬する。国内、各地から記録があるが、繁殖地は北海道、茨城県、千葉県、滋賀県など局所的である。利根川水系の生息地では、例年、数つがいが繁殖する。北海道では夏鳥とされ、本州以南では冬期にも生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

国内の繁殖地は局所的で限定されているが、周年を通じ各地で記録される。繁殖地は狭い範囲に限定されているが、安定した繁殖地では数つがいが営巣する。繁殖期以外は単独で確認されることが多く、稀である。穏やかで静かな広大なヨシ原や河川、水田、湖沼など、人間活動の影響が少ない湿地は、各地で減少している。

【生息地の現況】

ヨシ原、湖沼、河川の開発により生息地が減少している。鉄道が開通し湖沼が分断された後、繁殖期に確認されなくなった地域がある。各地で広大なヨシ原や湿地は消失しているが、具体的な現況は不明である。

【個体数の現況】

個体数は少ない。湿地の消失や減少のため、生息が確認されなくなった地域がある。(公財）日本野鳥の会が 2020～2022 年に行った全国繁殖数調査の結果、成熟個体数は 34 羽程度と推定された。

存続を脅かす要因

湿地湖沼・河川・草地の開発、道路工事により生息地が破壊、消失、減少している。農薬汚染も懸念される。繁殖地、およびその周辺の路上では、交通事故による轢死例もある。鉄道の開通後、繁殖期に記録されなくなった事例がある。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，草地開発，交通インフラ建設，交通事故，農薬汚染/化学物質汚染，不明
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，草地開発，交通インフラ建設，交通事故，農薬汚染/化学物質汚染，不明

特記事項

利根川水系では、道路や鉄道の開通後、繁殖期に記録されなくなった事例がある。本種が生息するためには、広大なヨシ原を中心とした湿地が重要である。穏やかで静かな環境が必要であり、広大なヨシ原を残すことが望ましい。なお、本亜種の分類は、日本鳥類目録改訂第 7 版（日本鳥学会 2012）においてペリカン目に変更されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	サンカノゴイ	*Botaurus stellaris stellaris*	EN
第４次 2019：	サンカノゴイ	*Botaurus stellaris stellaris*	EN
第４次 2018：	サンカノゴイ	*Botaurus stellaris stellaris*	EN
第４次 2017：	サンカノゴイ	*Botaurus stellaris stellaris*	EN
第４次 2015：	サンカノゴイ	*Botaurus stellaris stellaris*	EN

第４次:	サンカノゴイ	*Botaurus stellaris stellaris*	EN
第３次:	サンカノゴイ	*Botaurus stellaris stellaris*	EN
第２次:	サンカノゴイ	*Botaurus stellaris stellaris*	EN
第１次:	サンカノゴイ	*Botaurus stellaris stellaris*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠB 類(En),【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【秋田県】情報不足(DD),【山形県】評価対象外,【福島県】情報不足(DD),【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類,【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【神奈川県】情報不足(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【静岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(通過),【滋賀県】絶滅危惧種,【兵庫県】A ランク,【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【島根県】準絶滅危惧(NT),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【山口県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【徳島県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種,【長崎県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【熊本県】情報不足(DD),【大分県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類,【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【滋賀県】

参考文献

- 千葉県レッドデータブック改訂委員会（編），2011．千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編 2011 年改訂版．千葉県環境生活部自然保護課，千葉市．538pp.
- Cramp, S. and K. E. L. Simmons (eds.), 1983. The birds of the Western Palearctic. vol Ⅰ, Oxford. 714pp.
- del Hoyo, J., A. Elliott and J. Sargatal (eds.), 1992. Handbook of the Birds of the World. Vol. 1. Ostrich to Ducks Lynx Edicions, Barcelona. 696pp.
- Delany, S. and D. Scott, 2006. Waterbird population estimates - fourth edition. Wetland International, Wageningen. 239pp.
- 橋本洋一・桑原和之，1992．印旛沼におけるサギ科 Ardeidae 8 種の生息場所．我孫子市鳥の博物館研究報告書，1: 9-22.
- 箕輪義隆・桑原和之・三沢博志・鈴木明・奴賀俊光・米持千里・小林大光・田中忠義，2005．印旛沼鳥類目録．我孫子市鳥の博物館研究報告書，13: 1-48.

- （公財）日本野鳥の会，2024．プレスリリース：絶滅危惧ⅠB 類（鳥類）「サンカノゴイ」の全国のオスの繁殖個体数が明らかに 国内で確認できたのは 17 羽のみ！（https://www.wbsj.org/activity/press-releases/press-2024-01-15/）
- 岡田登美男・池地秀満・植田潤・大野達男・森田尚・堀尾正三郎・堀尾岳行，1986．滋賀県下物におけるサンカノゴイ *Botaurus stellaris* の繁殖記録．Strix，5: 53-59.
- 滋賀県琵琶湖環境部自然保護課，2000．滋賀県で大切にすべき野生生物（2000 年版）．大津．176pp.
- Voisin, C., 1991. The herons of Europe. T&AD Poyser, London. 364pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Botaurus stellaris stellaris has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Botaurus stellaris stellaris* is listed as CR under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Intertidal mudflat
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Grassland development, Transportation infrastructure construction, Vehicle collision, Pesticide/Toxic chemical pollution, Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Shiga】.


©楢崎陸（(公財)日本野鳥の会）


©雄賀多希英（(公財)日本野鳥の会）

執筆者:	浦達也（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Tatsuya Ura

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　サギ科 Ardeidae

オオヨシゴイ

***Ixobrychus eurhythmus* (Swinhoe, 1873)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　C2a(i) D

基準 A:　—	基準 B:　—	基準 C:　CR	基準 D:　CR	基準 E:　—

C. 個体群の成熟個体数が 250 未満であると推定される。
【推定根拠】
現在、継続的に渡来が確認されている生息地での確認個体数は数羽のみである。

加えて、以下の 2. かつ a (i) に該当する事由がある。

2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測される。
【判断理由】
かつて多数が生息していた茨城県霞ヶ浦の妙岐の鼻の草原と青森県仏沼では近年確認されていない。北海道小樽市銭函では 2015 年に 1 つがいの繁殖が確認されたが、その後は確認されておらず、釧路湿原では現在も数個体が確認されているものの、毎年確認されるわけではなくなっており、繁殖は確認されていない。本種の生息に適した湿草地は全国的に見てもほとんど残っておらず、また生息個体数もかつての水準と比較して著しく少なく、減少が続いていると推定され、近い将来に消失する恐れが高いと判断される。
a) 個体群構造が次に該当
i) 50 以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。
【判断理由】
現在の確実な生息地は 1 か所であり、確認個体数は数羽のみである。

D. 成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。
【推定根拠】
現在、継続的に渡来が確認されている生息地での確認個体数は数羽のみである。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

本州中北部と北海道の湿性の草原、ヨシ原に夏鳥として渡来し、繁殖する小型のサギ。個体数が激減していると判断され、近年、確実に渡来していることが知られているのは北海道の一か所のみであるが、同地でも繁殖は確認されていない。減少の原因としては、生息環境の破壊のほか、東南アジアの越冬地における捕獲や生息環境の破壊も関与している可能性がある。

基礎情報

【形態】

全長約 40 cm。上面が暗栗色をした小型のサギ。オス成鳥の上面は暗栗色で雨覆は淡灰色、風切と尾羽は黒褐色。下面は黄白色で前頸に 1 本の暗色縦斑がある。メス成鳥は背と雨覆が暗栗色の地に白色小斑を散布し、前頸に縦斑が数本ある。近縁のリュウキュウヨシゴイ（*Ixobrychus cinnamomeus*）はよく似ているが、上面が雨覆と風切も含めて赤褐色である点が本種と異なる。

【生活史】

日本では夏鳥。5～8 月頃、草原の地上に枯れた草本を集めて皿状の巣を作る。一腹産卵数は 3～5 卵。抱卵日数は 16～18 日。雌雄とも抱卵育雛する。小魚、甲殻類、等脚類、昆虫類、両生類等を食べる。亜種はない。

【生息環境】

低層湿原、すなわち、ヨシ原や湿性草原。ヨシゴイ（*Ixobrychus sinensis sinensis*）よりも乾燥した草原を好む。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，耕作放棄地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

繁殖分布はサハリン、千島列島南部、北海道、本州中北部、 佐渡、隠岐、東シベリア（南部）、ロシア極東（南部）、朝鮮半島、中国。越冬分布は、中国（南部および台湾）、インドシナ半島、マレー半島、インドネシア、フィリピン。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本州中北部と北海道。ヨシゴイに比し分布は北に偏り、局地的。直近 10 年の確実な繁殖記録は北海道小樽市銭函の 1 例のみである。ただし、北海道東部の釧路湿原では近年も少数が継続的に確認されている。かつて繁殖していた青森県仏沼や茨城県霞ヶ浦の妙岐の鼻では近年は繁殖していないとされる。

【生息地の現況】

湿性草原は各種の開発、河川改修などで消失しつつある。

【個体数の現況】

関東地方で有名な繁殖地だった茨城県霞ヶ浦の妙岐の鼻の草原では、近年個体数が激減し、1990 年代初めにはまれにしか観察されなくなり、現在は繁殖していない。青森県仏沼での生息状況は、宮（2010）によれば、「80 年代前半には普通に見られ（蛯名 2007）、小河原湖湖岸や仏沼周辺の水田でも生息していたが、近年の生息状況はラムサール登録地南

部及び北部の冠水したヨシ原及び中層ヨシ地帯で、繁殖期の 6～7 月に 1～2 羽の鳴き声が確認されるのみである。生息が確認できない年もあり、近年は繁殖しているかどうか不明である。」とされ、その後は繁殖確認されていない。北海道小樽市銭函で 2015 年に本種 1 つがいの繁殖が確認されたが（大倉 2017）、その後は確認されていない。釧路湿原では 2015～2020 年に行われた調査では 2019 年を除いて雌雄が確認されており、繁殖している可能性が高いとされるが、確認されている個体数は数羽に過ぎない（貞國ら 2021）。

存続を脅かす要因

生息地の破壊（湿地開発）による減少のほか、農薬汚染によって繁殖力が弱められた可能性がある。なお、上述の霞ヶ浦の例のように、生息地が一見保全されているように見えるのに生息がなくなった例があり、東南アジアの越冬地における捕獲や生息環境破壊が影響している疑いもある。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオヨシゴイ	*Ixobrychus eurhythmus*	CR
第４次 2019：	オオヨシゴイ	*Ixobrychus eurhythmus*	CR
第４次 2018：	オオヨシゴイ	*Ixobrychus eurhythmus*	CR
第４次 2017：	オオヨシゴイ	*Ixobrychus eurhythmus*	CR
第４次 2015：	オオヨシゴイ	*Ixobrychus eurhythmus*	CR
第４次：	オオヨシゴイ	*Ixobrychus eurhythmus*	CR
第３次：	オオヨシゴイ	*Ixobrychus eurhythmus*	EN
第２次：	オオヨシゴイ	*Ixobrychus eurhythmus*	EN
第１次：	オオヨシゴイ	*Ixobrychus eurhythmus*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd),【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類,【宮城県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【秋田県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【山形県】情報不足(DD),【福島県】絶滅(EX),【茨城県】絶滅危惧ⅠA 類,【群馬県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【埼玉県】絶滅(EX)(繁),【千葉県】消息不明・絶滅生物(X),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(非

繁殖期),【新潟県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【山梨県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【兵庫県】要調査種,【和歌山県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【山口県】準絶滅危惧(NT),【佐賀県】絶滅危惧Ⅰ類種,【長崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【鹿児島県】情報不足,【沖縄県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- Dementev, G. P. and N. A. Gladkov, 1969. Birds of the Soviet Union. vol. 2. Israel Program for Scientific Translations, Jerusalem.
- Hancock, J. and J. Kushlan, 1984. The Herons Handbook. Croom Helm, London.
- 宮彰男，2010．仏沼の絶滅危惧鳥類の生息状況について．おおせっからんど年報，2: 17-24．
- 大倉史雄，2017．北海道におけるオオヨシゴイの確実な初繁殖記録．日本鳥類標識協会誌，29: 47-51．
- 貞國利夫・黒澤信道・原田修・本藤泰朗・吉野智生，2021．釧路湿原における繁殖期のクイナ類・サギ類の生息状況．釧路市立博物館紀要，39: 29-33．
- 山階芳麿，1928．浮島沼に於けるヨシゴイ及びオホヨシゴイ．鳥，6(26): 27-29．
- 山階芳麿，1941．日本の鳥類と其の生態．第二巻．岩波書店，東京．1080pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ixobrychus eurhythmus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ixobrychus eurhythmus* is listed as CR under criteria C2a(i) D.

C. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals and:

2. A continuing decline, observed, projected, or inferred, in numbers of mature individuals and:

a. Population structure in the form:

(i) no subpopulation estimated to contain more than 50 mature individuals.

D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Abandoned farmland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Water pollution, Pesticide/Toxic chemical pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants

Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	先崎理之（北海道大学）
Author:	Masayuki Senzaki

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae　　日本固有

カンムリワシ

***Spilornis cheela perplexus* Swann, 1922**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　C2a(ii)

基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　CR	基準 D:　－	基準 E:　－

C．個体群の成熟個体数が 250 未満であると推定される。
【推定根拠】
生息確認調査では、総個体数でも最大数で約 120 個体である。成熟個体数は確認個体数の 7 割から 8 割程度。

加えて、以下の 2. かつ a (ii) に該当する事由がある。

2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測される。
【判断理由】
今後、観光・経済活動の進展にともなう交通量の増大が見込まれるため、車との衝突件数も増えると予測される。また、餌の捕食地となる湿地、水田、草地の減少も予想される。
a) 個体群構造が次に該当
ii) 1 つの下位個体群中に 90%以上の成熟個体が属している。
【判断理由】
石垣島と西表島間の距離は約 20 km のため、相互の移動は容易と思われるため、唯一の下位個体群にすべての成熟個体が含まれる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

八重山諸島に生息する大型の猛禽類で、水田など湿地帯や草地をともなう林縁部を主な生息環境とする。推定個体数は約 120 羽以上で、繁殖については断片的な情報しかない。主な採餌環境である森林に接した湿地や水田が畑や牧場などに変わり、生息環境が悪化しつつある。交通事故の事例が増加している。

基礎情報

【形態】

全長約 55 cm、翼長はオスが約 34 cm、メスが約 37 cm、額、頭上、後頭の羽が黒色で白斑があり、長い冠羽になっている。顔、背、翼の上面は褐色で、雨覆羽には白色の斑がある。喉と腹は褐色で、暗色の横縞と白色の横縞と斑がある。尾は褐色で、先端と中央に幅の広い黒褐色の帯がある。目の周囲、上嘴の付け根、脚は黄色である。色や斑の大きさは個体差が大きい。

【生活史】

営巣期は 1 月下旬の造巣を開始し、4 月初旬に産卵する。卵数は 1 卵、抱卵はメスのみが行い 5 月中旬から下旬に孵化する。抱卵期間から育雛初期はオスが食物を運ぶとされる。7 月下旬にヒナは巣立ち、枝移りを始める。10 月には若鳥が親と離れて独立する。食物はカエル、トカゲ、ヘビなどの両生類や爬虫類、カニなどの甲殻類、昆虫類で、湿地周辺の樹木や電柱に静止して獲物を待ち、飛び降りて捕獲する。

【生息環境】

森林に接した開けた場所で採餌し、森林をねぐらや休息地、営巣場所として利用する。西表島では、冬期には森林の周辺部にほとんどの個体が移動する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部 海岸部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，河川下流域，河口域，農業用水路，小河川，汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

種カンムリワシ（*Spilornis cheela*）は、インドから中国南部、インドシナ半島、マレー半島、スリランカ、ジャワ、中国（台湾）、八重山諸島などのアジア大陸南部とその周辺の島々に分布し、21 亜種に分けられる。本亜種は分布の北限にあたる八重山諸島に生息する日本固有の亜種である。

現在の生息状況

【分布域の現況】

八重山群島の石垣島、西表島に周年生息する。与那国島でも少数の目撃記録があるが、まれに飛来する程度である。石垣島と西表島では全域で記録があるが、山地帯の山麓部で森林と湿地や草地が混在する場所に生息し、山地帯中央での確認はほとんどない。

【生息地の現況】

生息が記録されている環境は、水田周辺、休耕田、放牧地など湿地や草地をともなう樹林地やマングローブ林で、まれに砂泥質の海岸でも見られる。西表島、石垣島ともに林縁

と湿地や水田、休耕田、草地での出現頻度が高く、主要な生息環境は隣接して湿地や草地を持つ森林と言える。森林内部では観察されることが少ない。

【個体数の現況】

環境庁（1982）では 56～85 羽（成鳥最大 65 羽、幼鳥 20 羽）、花輪ほか（1985）では西表島で 77 羽（成鳥 60 羽、幼鳥 13 羽、不明 4 羽）、石垣島では 10～16 羽（成鳥最大 12 羽、幼鳥最大 4 羽）としている。日本野鳥の会八重山支部（1998）は、1998 年 1～2 月の調査で、西表島で 104 羽（成鳥 76 羽、幼鳥 15 羽、不明 13 羽）、石垣島では 91 羽（成鳥 72 羽、幼鳥 10 羽、不明 9 羽）を記録した。2012 年以降、環境省により非繁殖期に低地林外に出現するカンムリワシを対象に生息状況等調査が実施され、石垣島で 24～62 個体、西表島で 38～66 個体の範囲で推移しており、生息数の増加及び減少のどちらの傾向も認められず、生息数は維持されていると判断されている。

存続を脅かす要因

生息地である湿地とその周囲の森林が農業用地に変わりつつある。水田や湿地は採食環境として重要であるが、近年は水田が放棄され減少している。近年では交通事故の確認件数は、交通量の多い石垣島では年平均で 7.4 件（2008 年から 2021 年）、西表島では平均 4.1 件（2012 年から 2021 年）である。これは、あくまで環境省等に連絡があったことで把握できた件数であり、実際にはより多くの交通事故が発生していると考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，草地開発，交通事故，管理放棄
	（現在）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，草地開発，ゴルフ場，交通事故，管理放棄

特記事項

種カンムリワシの中では北限に分布する亜種である。もっとも近くの台湾島に分布するものは本亜種より大型で、形態的な変化やその生息環境との関連性など生物地理学上の興味が持たれる。Mayr and Cottrell（1979）では同一の亜種とされている。なお、本種の保護対策として、森林と接した湿地や草地の保全と、交通事故対策として道路への看板設置などで運転者への注意の喚起が有効である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	カンムリワシ	*Spilornis cheela perplexus*	CR
第４次 2019：	カンムリワシ	*Spilornis cheela perplexus*	CR
第４次 2018：	カンムリワシ	*Spilornis cheela perplexus*	CR
第４次 2017：	カンムリワシ	*Spilornis cheela perplexus*	CR
第４次 2015：	カンムリワシ	*Spilornis cheela perplexus*	CR

第４次:	カンムリワシ	*Spilornis cheela perplexus*	CR
第３次:	カンムリワシ	*Spilornis cheela perplexus*	CR
第２次:	カンムリワシ	*Spilornis cheela perplexus*	CR
第１次:	カンムリワシ	*Spilornis cheela perplexus*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠA類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，国指定特別天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 花輪伸一・樋口行雄・高良武信，1985．八重山諸島におけるカンムリワシの生息状況．昭和 59 年度特殊鳥類調査，pp. 1-28．環境庁，東京．
- 原戸鉄二郎，1987．西表島におけるカンムリワシの食性と巣立ち雛の行動．沖縄島嶼研究，(5): 49-58．
- 環境庁，1982．カンムリワシ：八重山群島における生息状況．昭和 56 年度特殊鳥類調査，pp. 53-75．日本野鳥の会，東京．
- カンムリワシリサーチ，2012．平成 21 年度カンムリワシ生息状況等調査報告書．環境省沖縄奄美地区自然保護事務所．
- 前川聡，2010．石垣島カラ岳周辺における猛禽類の生息状況と新石垣空港の建設、供用開始に伴う影響について．WWF ジャパン，東京．
- Mayr, E. and G. W. Cottrell, 1979. Checklist of the Birds of the World, 1. Museum of Comparative Zoology, Cambridge, Massachusetts. 547pp.
- 日本野鳥の会八重山支部，1998．カンムリワシ生息実態調査検討報告書．日本野鳥の会八重山支部，石垣市．66pp.
- 日本野鳥の会八重山支部，2004．平成 15 年度カンムリワシ生息状況等調査報告書．環境省沖縄奄美地区自然保護事務所．
- 日本野鳥の会八重山支部，2005．平成 16 年度カンムリワシ生息状況等調査報告書．環境省沖縄奄美地区自然保護事務所．
- 沖縄奄美自然環境事務所・沖縄森林管理署・西表森林生態系保全センター・沖縄県・沖縄県教育委員会・石垣市・石垣市教育委員会・竹富町・竹富町教育委員会，2023．カンムリワシ保全方針．沖縄奄美自然環境事務所，那覇市．
- 庄山守，1983．カンムリワシに関する若干のメモ．八重山野鳥の会創立 10 周年記念誌，pp. 48-44．八重山野鳥の会，石垣市．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Spilornis cheela perplexus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Spilornis cheela perplexus* is listed as CR under criteria C2a(ii).

C. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals and:

2. A continuing decline, observed, projected, or inferred, in numbers of mature individuals and:

a. Population structure in the form:

(ii) at least 90% of mature individuals in one subpopulation.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Lower river basin, Estuary, Agricultural ditch, Small river, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Field preparation, Grassland development, Golf course development, Vehicle collision, Abandonment of management
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Nationally Designated Special Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	金井裕（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Yutaka Kanai

公表年月：2026 年 3 月

フクロウ目 Strigiformes　フクロウ科 Strigidae　　日本固有

ダイトウコノハズク

***Otus elegans interpositus* Kuroda, 1923**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B1ab+2ab

基準 A:　—	基準 B:　CR	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1+2．出現範囲が 100 km²未満かつ生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【地点数】1 地点

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

農業用の土地改良として島内の樹林地が減少してきた。既存の幕林の一部は大幅に伐採され、テリハボクの林への転換が試みられている。しかし、切り開かれた樹林地ではしばしば外来種のギンネムやタチアワユキセンダングサが侵入しそれらの草地または林へと変化している。ギンネム林においてダイトウコノハズクは営巣できず、採餌場所としても適していない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

南大東島の固有亜種ダイトウコノハズクは、開拓に伴う大規模な森林伐採により極端に個体数を減少させた。主な営巣樹は移入されたモクマオウであったが、近年の台風で倒木され潜在的に営巣可能な場所が減少している。個体群の保全には、暫定的な措置として巣箱の架設が有効である。

基礎情報

【形態】

全長約 20 cm、体重約 90 g。オスの体重は約 86 g、メスの体重は約 96 g で、オスがメスよりもやや小さい傾向はあるが個体差は大きい。茶褐色から赤茶褐色の羽色で白や黒、濃褐色の複雑な模様を持つ。虹彩の色は黄色。亜種間の羽色の違いは十分に検討されていないが、亜種ダイトウコノハズクは亜種リュウキュウコノハズクよりも小さい。一方、鳴き声の特徴は明瞭に異なり、亜種ダイトウコノハズクは単位時間当たりに鳴く回数が多い。

【生活史】

南大東島に留鳥として生息し、一夫一妻で繁殖する。3 月下旬から 4 月にかけて産卵する。一腹卵数は 1 から 4 卵である。メスだけが約 1 カ月抱卵し孵化する。孵化後、約 10 日間抱雛が行われる。雛への給餌は雌雄共に行う。6 から 7 月に巣立ち、巣立ち後も親から給餌を受け、順次分散を始める。10 月頃から定着し、翌年から繁殖する個体も少なくない。

【生息環境】

幕（はぐ）と呼ばれる帯状の樹林地が主な生息場所である。畑の間の細い防風林や神社の樹林地にも生息する。これらの林に一夫一妻のつがいで 1 年を通して縄張りをかまえ、縄張り内に巣をもつ。主に外来樹種モクマオウの樹洞に営巣する。在来種ダイトウビロウにおける営巣は、僅少である。それは営巣に適したダイトウビロウの枯死木は外来樹種モクマオウに比べて相対的に少ないためと考えられる。縄張り内の樹林地やその樹林地に隣接する畑や道路などの解放空間で採餌を行う。

生息環境区分：	【陸域_平地部】裸地，森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（7）島嶼地域

【分布域】

南大東島（沖縄県島尻郡南大東村）・北大東島（沖縄県島尻郡北大東村）に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

南大東島だけに生息している。かつては北大東島にも生息していたが、近年の観察記録はなく、北大東島の個体群は絶滅したと推定される。南北大東島間は海で隔絶されるが、最短直線距離は約 8 km であり、南大東島から北大東島へ分散が可能と思われる。しかし、北大東島での絶滅から 40 年以上が経過していると推定されるが、北大東島での確認記録はない。

【生息地の現況】

圃場整備に伴う樹林地の伐採で生息可能な樹林地が減少を続けている。現在の生息可能域は主に幅 50 m 程の帯状に島を囲む防風林だけである。2010 年 11 月の大型で猛烈な台風 12 号によりダイトウコノハズクに巣穴を提供する多くの樹木が倒れた。2011 年 9 月には台風 15 号が、2010 年の被害に追い打ちをかけるように大東島近海に長時間滞在した。2002

年から 2009 年までに確認されたダイトウコノハズクの 20 巣がモクマオウの樹洞に位置しており（全確認巣の約 9 割）、その三分の一が 2010 年の台風による倒木などで使用不可能となっている。2020 年 9 月の台風 10 号でも台風によるモクマオウの倒木は多数確認された。

【個体数の現況】

2005 年の個体数は 210 つがい（420 個体）と推定されている。2012 年から 2018 年にかけては期間の長期平均として約 570 個体と推定され、成鳥の性比はおよそ 1：1 である。ただし、これらの個体数推定手法は異なるため、2005 年と 2012 年の間で個体数が増加したという解釈は必ずしもできない。むしろ 2012 年から 2018 年にかけての個体群成長率（ある年の個体数に対する翌年の個体数の割合）は 98%と推定され、若干の個体数の減少傾向が認められる。これらの繁殖個体のほかに、縄張りを持つことができない放浪個体も生息している。

存続を脅かす要因

開墾に伴う大規模伐採が個体数減少の最大の要因である。帯状に残された防風林は近年加速された圃場整備で徐々に面積を減じ生息可能域が現在も減少し続けている。ダイトウコノハズクが営巣に利用する在来種ダイトウビロウも伐採されている。また野良猫もしくは飼い猫、およびイタチによる成鳥・雛・卵の捕食や繁殖妨害も記録されている。つがいは経年的に同じ樹洞を巣穴として使う傾向があるが、非繁殖期の秋から冬の間に外来種セイヨウミツバチがその樹洞に巣を作ることで、ダイトウコノハズクが営巣に使う巣穴が乗っ取られる事例も複数記録されている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，圃場整備，交通事故，農薬汚染/化学物質汚染，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，圃場整備，交通事故，農薬汚染/化学物質汚染，捕食（外来種による），人工構造物への衝突，気候変動，分布・産地局限

特記事項

ダイトウコノハズクが狭い大東諸島で生息し続けるためには、十分な営巣場所を擁する樹林地の確保が重要である。しかし、現在の南大東島には開墾後に形成された二次林の極狭い樹林地しか存在していない上に、台風や伐採の影響で樹林地の荒廃が進んでいる。大東諸島の潜在極相樹であるダイトウビロウは、台風の影響に対して頑健であるが成長が遅く、二次林においてダイトウコノハズクが営巣できるようなダイトウビロウの枯死木の供給は進まない。移入樹種のモクマオウは弱いが成長は早く、営巣できるような樹洞を多く形成する。皮肉的ではあるが、大東諸島への移入樹木モクマオウは、開墾後の土地で成熟したダイトウビロウの林が復活するまでの橋渡し役としてダイトウコノハズク個体群の維持に貢献してきた。ゆえに現状ではダイトウコノハズク個体群の維持においてモクマオウに依存している部分は少なくない。しかしモクマオウは植栽から 80 年程が経過し、樹

勢が衰え台風の影響を大きく受けているため、モクマオウに依存した個体群維持は長続きしないと予想される。ダイトウコノハズクとダイトウビロウという本来の在来種同士の関係で個体群が維持される状況に戻していくために、今あるダイトウビロウをこれ以上伐採しないことは重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ダイトウコノハズク	*Otus elegans interpositus*	VU
第４次 2019:	ダイトウコノハズク	*Otus elegans interpositus*	VU
第４次 2018:	ダイトウコノハズク	*Otus elegans interpositus*	VU
第４次 2017:	ダイトウコノハズク	*Otus elegans interpositus*	VU
第４次 2015:	ダイトウコノハズク	*Otus elegans interpositus*	VU
第４次:	ダイトウコノハズク	*Otus elegans interpositus*	VU
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Akatani, K., T. Matsuo and M. Takagi, 2011. Breeding ecology and habitat use of Daito Scops Owl (*Otus elegans interpositus*) on an oceanic island. Journal of Raptor Research, 45(4): 315-323.
- 赤谷加奈・堀江明香・村上茜・松尾太郎・高木昌興，2011．南大東島の環境保全のための啓蒙活動．プロ・ナトゥーラ・ファンド第 20 期助成成果報告書，pp. 167-169．日本自然保護協会，東京.
- Murakami, R., A. Sawada, H. Ono and M. Takagi, 2022. The Effect of Experience on Parental Role Division in Ryukyu Scops Owl *Otus elegans*. Ornithological Science, 21(1): 35-44.
- Sawada, A., T. Yamasaki, Y. Iwami and M. Takagi, 2018. Distinctive Features of the Skull of the Ryukyu Scops Owl from Minami-Daito Island, Revealed by Computed Tomography Scanning. Ornithological Science, 17(1): 45-54.

- Sawada, A., T. Iwasaki and M. Takagi, 2019. Fine‐scale spatial genetic structure in the Minami‐daito Island population of the Ryukyu scops owl *Otus elegans*. Journal of Zoology, 307(3): 159-166.
- Sawada, A., T. Iwasaki, C. Inoue, K. Nakaoka, T. Nakanishi, J. Sawada, N. Aso, S. Nagai, H. Ono and M. Takagi, 2021. Missing piece of top predator‐based conservation: Demographic analysis of an owl population on a remote subtropical island. Population Ecology, 63(3): 204-218.
- Sawada, A., T. Iwasaki, T. Matsuo, K. Akatani and M. Takagi, 2021. Reversed Sexual Size Dimorphism in the Ryukyu Scops Owl *Otus elegans* on Minami-Daito Island. Ornithological Science, 20(1): 15-26.
- Sawada, A., K. Akatani and M. Takagi, 2021. Growth Curves of Ryukyu Scops Owl Nestlings, an Owl Species with Asynchronous Hatching and Reversed Sexual Dimorphism. *Ardea*, 109(2): 1-13.
- Sawada, A., T. Iwasaki, K. Akatani and M. Takagi, 2022. Mate choice for body size leads to size assortative mating in the Ryukyu Scops Owl *Otus elegans*. Ecology and Evolution, 12(12), e9578.
- Takagi, M., K. Akatani, S. Matsui and A. Saito, 2007. Status of the Daito Scops Owl on Minami-daito Island, Japan. Journal of Raptor Research, 41(1): 52-56.
- Takagi, M., K. Akatani, A. Saito and S. Matsui, 2007. Drastic decline of territorial male Daito Scops Owls on Minami-daito Island in 2006. Ornithological Science, 6(1): 39-42.
- Takagi, M., 2013. Vicariance and dispersal in the differentiation of vocalization in the Ryukyu Scops Owl *Otus elegans*. Ibis, 153(4): 779-788.
- Takagi, M., 2013. A Typological Analysis of the Hoot of the Ryukyu Scops Owl Across Island Populations In the Ryukyu Archipelago and Two Oceanic Islands. The Wilson Journal of Ornithology, 125(2): 358-369.
- 高木昌興・赤谷加奈・松井晋，2008．南大東島に隔離分布するダイトウコノハズクの鳴き声を用いた個体識別となわばり個体の入れ替わり．プロ・ナトゥーラ・ファンド第 17 期助成成果報告書，pp. 161-169．日本自然保護協会，東京．
- 高木昌興，2009．第 4 章 鳥類「南大東島の鳥類の特徴と保全」．中井精一・東和明・ダニエル ロング（編），「南大東の人と自然」，pp. 168-181．南方新社，鹿児島．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Otus elegans interpositus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Otus elegans interpositus* is listed as CR under criteria B1ab+2ab.

B1+2. Extent of occurrence estimated to be less than 100 km² AND area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Bare area, Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation, Vehicle collision, Pesticide/Toxic chemical pollution, Predation (by alien species), Collision with man-made structures, Climate change, Limited distribution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	澤田明（早稲田大学）・髙木昌興（北海道大学）
Author:	Akira Sawada and Masaoki Takagi

公表年月：2026 年 3 月

フクロウ目 Strigiformes　フクロウ科 Strigidae

ワシミミズク

***Bubo bubo borissowi* Hesse, 1915**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　A2 D

基準 A: CR	基準 B: ―	基準 C: ―	基準 D: CR	基準 E: ―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。
【比較年】
10 年（世代時間不明）
【過去の状況】
北海道北部、中央高地、知床半島などで繁殖情報があるが、連続して繁殖する生息地は北海道北部の 1 カ所のみが明らかになっていた。
【近年の状況】
連続して繁殖する北海道北部の 1 カ所では、2006 年の繁殖を最後に確認されておらず、2011 年に成鳥 1 羽が確認された後、定着個体が確認されていない。

D．成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。
【推定根拠】
定着性の強い鳥類だが歴史的にも繁殖地がほとんど見つかっていない。連続して繁殖する北海道北部の 1 カ所では、2006 年の繁殖を最後に確認されておらず、2011 年に成鳥 1 羽が確認された後、定着個体が確認されていない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

ユーラシア大陸と北アフリカに分布する大型のフクロウで、日本では北海道に分布する。1994 年に北海道北部で繁殖地が特定され、それ以降繁殖が継続していたが、2006 年を最後に絶え、2011 年以降は個体も確認されていない。環境変化は大きくないため、個体群の安定には北方圏からの分散個体供給が鍵である。

協力者:　小西敢（浜頓別クッチャロ湖水鳥観察館）

基礎情報

【形態】

大型のフクロウで、全長 58～71 cm。翼開長 152～180 cm。メスはオスよりも大きく、体の大きさの地理的変異は大きい。体色は褐色で、黒斑があり、地理変異が大きい。虹彩が橙色で趾に羽毛がある点でシマフクロウ（*Ketupa blakistoni blakistoni*）と識別できる。

【生活史】

種としての食性は幅広く、おもにネズミ類、ウサギなどの哺乳類や海鳥などの鳥類を食べるほか、両生類や爬虫類も捕食する。大部分の生息域で年間を通して強い定着性とテリトリー性を維持する。一腹産卵数は 1～6 卵。国内での繁殖観察例は 1 巣とわずかであるが、1 月中旬から雌雄の鳴き交わしが始まり、2 月中旬から交尾、3 月下旬～4 月上旬に産卵し、5 月上旬に孵化。6 月下旬から 7 月中旬頃に巣立つ。毎年繁殖し、最大 2 羽の雛が生育するが、多くの年でそのうち 1 羽が巣立ち前に落鳥し、巣立ち後も死亡や衰弱で保護される個体がほとんどである。巣内のペリット調査では、ユキウサギ、キツネ幼獣、カイネコ、エゾヤチネズミなどの哺乳類、ノスリ、カラス、エゾライチョウ、ヒメウなどの鳥類が確認されている。分散は、道北の繁殖地で標識された幼鳥が 10 数年後に 220 km 離れた知床半島で感電死した 1 例のみ有る。

【生息環境】

おもに崖の岩棚で営巣するが、国外では倒木や地上、ワシ類の古巣を用いた事例もある。林縁、灌木草原や農耕地など開けた環境で採餌するので、崖があり、森林帯の周囲に開放地のあるような環境に生息する。国内での繁殖情報地は、海岸、内陸の丘陵地、高標高の中央高地など幅広いエリアの崖地である。国内分布の地理環境は国外大陸の環境に類似するが、最も大きな差異は、国内の生息地は湿潤で、森林の林床はササが繁茂し採餌が困難であること、また草地は開墾された牧草地であり、大陸のような自然植生の草地及び生態系ではないことが挙げられる。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（5）沿岸域

【分布域】

種ワシミミズク（*Bubo bubo*）は西はスカンディナビアから東はサハリンまでのユーラシア大陸、アフリカ北部に広く分布する。日本では亜種 *Bubo bubo borissowi* が北海道に分布。北海道北部、中央高地、知床半島などで繁殖情報があるが、連続して繁殖する生息地は北海道北部の 1 カ所のみが明らかになっていた。しかし、繁殖は 2006 年を最後に確認されておらず、2011 年に成鳥 1 羽が確認された後、定着個体が確認されていない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

既知の北海道北部 1 か所の繁殖地では 2006 年を最後に繁殖しなくなり、2011 年以降は

北海道においては定着個体の確認がない。

【生息地の現況】

営巣地点の岩棚に捕食者であるクロテン、アライグマの利用痕跡あり。

【個体数の現況】

2011 年まで確認されているのは 1 つがいであったが、直近 10 年間は定着個体の確認無し。

存続を脅かす要因

本種の存続を脅かす要因として次の要因が考えられる。①個体群が小さく、種レベルで世界分布域の端に位置し、海峡により大陸やサハリンなどから分散渡りによる新規個体の供給が少ないことや、温暖化によりオホーツク海の結氷が後退し北方からの分散移入の機会が減少している可能性があることにより個体群の更新が進まないこと。②クロテンやアライグマによる雛の捕食の可能性があること。③鳥類を多く捕食するため鳥インフルエンザによる影響の可能性があること。④北海道の 1980 年代までの開拓および強度森林伐採による攪乱環境の創出に伴う小型哺乳類の一時的隆盛が、1990 年代以降の農地造成や人工林成長に伴い衰退し、採餌環境が変化したこと。⑤ごみリサイクルの推進により、ごみ処分場のネズミ類が減少し、採餌環境が変化したこと。

要因の区分：	（過去）	感染症/病原菌，捕食（外来種による），捕食（在来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限，その他（北方からの分散移入の減少、餌資源の減少）
	（現在）	感染症/病原菌，捕食（外来種による），捕食（在来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限，その他（北方からの分散移入の減少、餌資源の減少）

特記事項

1994 年における繁殖確認を受け、1997 年 12 月に種の保存法に基づく国内希少野生動植物種に指定された。巣立ち率の悪さに対応し 2004 年から 2010 年にかけて廃鶏を利用した給餌事業を行ったが、鳥インフルエンザの懸念から 2010 年に中止。以後積極的な保護策は実施されていない。個体数が少ないため生息調査が効率的に行えず情報待ちの状態。

現在は生息数が非常に少なく、既知繁殖地もいったん消失したと考えられる。ただし広域の分布調査は行われていない。モニタリングの継続が重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ワシミミズク	*Bubo bubo*	CR
第４次 2019：	ワシミミズク	*Bubo bubo*	CR
第４次 2018：	ワシミミズク	*Bubo bubo*	CR

第４次 2017：	ワシミミズク	*Bubo bubo*	CR
第４次 2015：	ワシミミズク	*Bubo bubo*	CR
第４次：	ワシミミズク	*Bubo bubo*	CR
第３次：	ワシミミズク	*Bubo bubo*	CR
第２次：	ワシミミズク	*Bubo bubo*	CR
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠA類(Cr)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- 藤巻裕蔵・山本純郎・早矢仕有子・竹中健，1997．ロシア沿海地方にワシミミズクとシマフクロウを訪ねて．野生生物保護行政，(11): 10-15.
- 早矢仕有子，1997．極東地域におけるワシミミズク *Bubo bubo* 標本の由来および形態・形質．山階鳥類研究所研究報告，29: 73-79.
- 日本鳥類保護連盟，1995．平成 6 年度ワシミミズク生息実態調査報告書.
- 日本鳥類保護連盟，1996．平成 7 年度ワシミミズク生息実態調査報告書.
- 日本鳥類保護連盟，1997．平成 8 年度ワシミミズク生息実態調査報告書.
- 日本鳥類目録編集委員会，2000．日本鳥類目録改定第 6 版．日本鳥学会，帯広．345pp.
- 山階芳麿，1941．日本の鳥類と其の生態 第二巻．岩波書店，東京．1080pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Bubo bubo borissowi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Bubo bubo borissowi* is listed as CR under criteria A2 D.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥80% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest

Threat types:	Disease, Predation (by alien species), Predation (by native species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution, Other
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	竹中健（シマフクロウ環境研究会）
Author:	Takeshi Takenaka

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　モズ科 Laniidae

アカモズ

***Lanius cristatus superciliosus* Latham, 1801**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　A2 C1				
基準 A:　CR	基準 B:　―	基準 C:　CR	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。
【比較年】
10 年（世代時間不明）
【過去の状況】※1
2000 年代の繁殖期の生息地点数※2 は、Kitazawa et al. (2022)および私信から算出した。Kitazawa et al. (2022)では 2000 年代の記録として全国 22 地点を報告している。加えて本州中部以北から北海道までの 8 地点（このうち 2 地点は同一市町村内に位置するが、生息環境が大きく異なるため別の地点とした）で繁殖期に記録されており（私信）、これらを足し合わせた 30 地点を 2000 年代の生息地点数として扱う。
【近年の状況】※1
Kitazawa et al. (2022)では、2019 年時点の繁殖地点数として 5 地点（北海道 2 地点、本州 3 地点）を報告しており、さらにその後の補足調査で北海道 3 地点で繁殖が確認されている。このうち 4 地点は、2 地点ずつが異なる市町村にまたがる同一環境に生息するためそれぞれ 1 地点として扱う(4 地点を 2 地点とみなす)。これらをあわせて、6 地点を 2010 年代の生息地点数として扱う。

※1 2000 年代と 2010 年代の本種の全国の生息地点数を比較し、減少率を推定した。
※2 主に生息市町村数を生息地点数とした。

C．個体群の成熟個体数が 250 未満であると推定される。
【推定根拠】
2022 年度に既存の主要な繁殖地の全域で実施された個体数調査により、国内の成鳥個体数が 184 個体と推定された。

加えて、以下の 1. に該当する事由がある。

1. 3 年間もしくは 1 世代のどちらか長い期間に 25%以上の継続的な減少が推定される。
【比較年】
過去 3 年
【過去の状況】

2019 年度に実施された全国調査では 332 個体が確認された。
【近年の状況】
2022 年度に実施された全国調査では 184 個体が確認された。

評価分科会： 鳥類分科会

概要

亜種アカモズの繁殖分布域は過去 100 年間でおよそ 90.9%縮小した。また、全国的な個体数調査の結果、繁殖分布域は北海道 3 地域と本州 3 地域のあわせて 6 地域に限られ、成鳥の個体数は、2019 年時点では 332 個体のみであった。さらに 2022 年に実施された個体数調査では、184 個体まで減少しており、その高い減少率から絶滅が非常に危惧される状況にある。繁殖地における主要な脅威は、捕食者と環境改変、カメラマンの集結であるものの、中継地や越冬地の環境改変等も本亜種の減少に影響している可能性がある。

協力者: 先崎理之（北海道大学大学院 環境科学院）・青木大輔（森林総合研究所）・水村春香（東京大学大学院 農学生命科学研究科）・松宮裕秋（長野アカモズ保全研究グループ）・赤松あかり（長野アカモズ保全研究グループ）・原星一（長野アカモズ保全研究グループ）・市川伸（日本渡り鳥保全・研究グループ）

基礎情報

【形態】

全長 17～20 cm、体重オス 27～34 g、メス 28～37 g。頭から背、尾羽まで上面は橙色であり、喉から腹まで白い。嘴と脚は黒色。雌雄ともに黒色で眼の幅よりも少し太い過眼線がある。性的二型は顕著ではないが、オスはメスよりも上面の橙色が強く、過眼線は明瞭である。メスは脇腹に波状斑を持つものがある。北海道の個体群では、オスの額の白色帯はメスよりも明確に幅が広いが、本州の個体群では額の白色帯の性差は北海道の個体群ほど明瞭ではない。モズ、チゴモズのオスに見られるような初列風切基部の白斑は明瞭ではない。モズのオスとの識別は容易で、モズのオスの上面は主に灰色で翼に明瞭な白斑がある。モズのメスの上面は茶褐色でアカモズに類似するものの、くすんだ色彩で区別ができる。またアカモズは、ゲイゲイゲイと聞こえる声を頻繁に発するが、モズはこのような声を発しない。

【生活史】

5 月の中下旬に日本に渡来し繁殖する。北海道の個体群にジオロケータ―を装着した研究から、インドネシアのスンダ列島周辺が本亜種の越冬地である可能性が示唆されている。一夫一妻。一腹卵数は 4～6 卵。約 14 日間の抱卵、約 13 日間の育雛期を経て、巣立つ。様々な昆虫類、カエルなどを食べる。フライキャッチを行い、飛翔性昆虫を食べることも多い。カッコウの托卵を受けることがある。一年だけの結果であるが、本亜種は比較的帰還率が高い。北海道石狩地方で 1992 年と 1993 年に繁殖したオス 14 羽のうち 6 羽がほぼ同じ場所で繁殖した。帰還率は 43%である。メスはオスに比して低く、8 羽中 1 羽で帰還率は 13%である。同じ場所の同じ期間におけるモズのオスの帰還率は 18%、メスは帰還しなかった。

【生息環境】

アカモズは北海道では高標高域には生息しないが、本州中部では標高 1,400 m くらいまで生息する。造林後の低木が優占する環境や、林縁や防風林、原野、河川敷などの高木が疎らな草原、または果樹園や農耕牧草地を好み、低木や果樹に営巣する。 巣の地上からの高さは平均 160 cm で範囲は 50～620 cm と広い。縄張りの面積は、抱卵期は 0.5 ha ほどで、育雛期 1.83～2.12 ha と広くなる。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，田地・畑地，河川中流域 【陸域_平地部 海岸部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，河口域
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（3）都市地域

【分布域】

国内では、中国地方以北で繁殖する夏鳥である。1970 年代頃までは、東京都 23 区内や札幌市中心部、金沢市、鳥取市、函館市内の温泉街、長野市内の住宅地など国内の様々な地域で繁殖が確認されていた。過去の繁殖記録を整理した研究結果から、本亜種の繁殖分布域が 1910 年代から 2000 年代にかけて 90.9%縮小したことが確認されている。また、環

境省の自然環境保全基礎調査では 1970 年代から 1990 年代にかけて、その分布域が 79%減少したことが報告されている。ジオロケータ―を装着した研究から、北海道の一部の個体は中国南東部やマレー半島を中継地として経由して、スンダ列島周辺で越冬することが明らかになっている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

2010 年代に実施された全国鳥類繁殖分布調査では、11 メッシュ（20 km×20 km）で繁殖の可能性が報告されている。別の研究では、2010 年代における国内の繁殖地は、北海道 3 地域と本州 3 地域の、あわせて 6 地域に限られることを報告している。繁殖分布面積の総和は過大に見積もって 6,800 km^2であるものの、繁殖地は極度に分断化されており、本州の 2 地域を除いて地域間の個体の移動は報告されていない。

【生息地の現況】

現在の主要な繁殖地は果樹園や原野、海岸林である。どの繁殖地においても土地利用変化によって、繁殖に適した環境が減少している。また果樹園では、農法の変化による、繁殖に適した環境の劣化が危惧されている。中継地および越冬地の詳細な地点は判明しておらず、環境選好性および主要な脅威の解明が進んでいない。

【個体数の現況】

亜種アカモズは 1990 年代までに個体数が大きく減少した。北海道における 1973～74 年と 1990 年の調査で、全く確認されなくなった地域があり、札幌郊外では個体数が 87%減少した地域があった。長野県野辺山高原では、50～60 つがいが恒常的に繁殖していたが 1998 年に 20 羽となり、2005 年には繁殖が確認されなくなった。2010 年代に全国規模での個体数調査が実施され、2019 年時点において国内の成鳥個体数は 332 個体と推定された。また 2022 年には、本州 2 地域では既知の繁殖地全域、北海道では主要な繁殖地において個体数調査が実施され、成鳥個体数が 184 個体まで減少していることが明らかになった。この 3 年間の減少率は 45%であり、特に本州のある地域では、減少率が 57%に達した。

存続を脅かす要因

極度に個体数が少ないため、いわゆる「絶滅の渦」に入り、人口学的な変動などによって個体群の維持に影響しかねる状態となっている可能性がある。本州の一部地域では、成鳥の性比の極度な偏りによって、60～70%のオスがつがいを形成できていないことが報告されている。また本州の別の地域では、ネコやヘビ、カラス等の捕食によって、営巣成功率（巣立ちに至ったつがいの割合）が 30%を下回る場合があることが報告されている。繁殖地における土地利用変化も、存続を脅かす重要な要因と考えられている。主な繁殖環境として果樹園を利用する地域では、農法の変更が潜在的な脅威であると考えられている。繁殖地として原野や牧草地、および海岸林を利用する地域では、再生可能エネルギー施設（太陽光発電施設および風力発電施設）の建設、また砂利採取によって、繁殖地が喪失し

ている。実際に、風力発電施設の建設後に、アカモズの個体数が減少したことが報告されている。さらに、アカモズの撮影を目的として、カメラマンが繁殖地に恒常的に集結するようになり、カメラマンの過度な巣への接近によって、テリトリーを放棄した事例がある。また過去には、越冬地における環境変化や違法な濫獲がアカモズの個体数に影響した可能性が指摘されているが、現在ではそれらがどの程度負の影響を与えているかについてはわかっていない。		
要因の区分：	（過去）	河川開発，海岸開発，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，遷移進行・植生変化/自然遷移，違法採集
	（現在）	河川開発，海岸開発，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，捕食（外来種による），捕食（在来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，海砂採取，発電施設建設，分布・産地局限

特記事項

2010 年代に入り、複数の研究者や学生が本種の研究を開始したため、現状の把握が急速に進んだ。これまでは学生の自発的な活動により保全が行われてきたものの、絶滅の危険性が高いため、また効果的な保全策の実装のため、今後は組織的な活動が求められる。一部の自治体では、アカモズの保全に向けた行動計画が策定されている。本種の長期的な減少は、里山などの管理放棄や森林の成熟に起因していると考えられる。既存の繁殖地周辺でどのように開放的な環境を維持、拡大するかについても大きな課題である。さらに絶滅を回避するための緊急避難、あるいは個体群の増強を目的とした、生息域外保全の検討が進められており、飼育および繁殖技術の確立も課題である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカモズ	*Lanius cristatus superciliosus*	EN
第４次 2019：	アカモズ	*Lanius cristatus superciliosus*	EN
第４次 2018：	アカモズ	*Lanius cristatus superciliosus*	EN
第４次 2017：	アカモズ	*Lanius cristatus superciliosus*	EN
第４次 2015：	アカモズ	*Lanius cristatus superciliosus*	EN
第４次：	アカモズ	*Lanius cristatus superciliosus*	EN
第３次：	アカモズ	*Lanius cristatus superciliosus*	EN
第２次：	アカモズ	*Lanius cristatus superciliosus*	NT
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠB 類(En)，【青森県】最重要希少野生生物(A ランク)，【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類，【宮城県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【秋田県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【山形県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク)，

【群馬県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【埼玉県】絶滅危惧ⅠA類(CR)(繁)，【千葉県】消息不明・絶滅生物(X)，【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(繁殖期)，【新潟県】絶滅危惧Ⅰ類(EN)，【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類，【山梨県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【長野県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【岐阜県】絶滅危惧Ⅰ類，【静岡県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【愛知県】絶滅危惧ⅠA類(CR)(通過)，【兵庫県】C ランク，【島根県】情報不足(DD)，【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類，【山口県】情報不足(DD)，【徳島県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【福岡県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【長崎県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【大分県】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- Aoki, D., H. Sakamoto, M. Kitazawa, A. Kryukov and M. Takagi, 2021. Migration-tracking integrated phylogeography supports long-distance dispersal-driven divergence for a migratory bird species in the Japanese archipelago. Ecol Evol, 11: 6066-6079.
- Haas, C. A. and I. Ogawa, 1995. Population trends of Bull-headed and Brown Shrikes in Hokkaido, Japan. Proceedings Western Foundation Vertebrate Zoology, 6: 72-75.
- 羽田健三・高橋庸子，1968．アカモズの生活史に関する研究 : I. 繁殖期．日本生態学会誌，18(2):47-56．
- Imanishi, S., 2002. The drastic decline of breeding population on Brown Shrike *Lanius cristatus* supercilliosus at Nobeyama plateau in central Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol., 34: 228-231.
- 今西貞夫・茂田良光・吉野俊幸，2006．雄アカモズと雌チゴモズの種間つがいとその雑種．山階鳥類学雑誌，38: 90-96．
- 石城謙吉，1966．モズとアカモズのなわばり関係について．日本生態学会誌，16: 87-93．
- Kitazawa, M., M. Senzaki, H. Matsumiya, S. Hara and H. Mizumura, 2022. Drastic decline in the endemic brown shrike subspecies *Lanius cristatus superciliosus* in Japan. Bird Conserv Intl, 32: 78-86.
- Mizumura, H., K. Kubota and H. Higuchi, 2022. The endangered Brown Shrike subspecies *Lanius cristatus superciliosus* has a male-biased sex ratio and only early arriving males are paired. Bird Conserv Intl, 32: 87-94.
- 小川巖，1977．北海道におけるモズ類（Laniidae）の分布について．1.水平分布の概要．山階鳥類研究所研究報告，9: 44-55．
- Takagi, M., 1996. A sexual difference in plumage of Brown Shrikes, subspecies *Lanius cristatus* supercilious. J. Yamashina Inst. Ornithol., 28: 103-105.

- Takagi, M., 1996. Sexual size dimorphism and sex determination of a Brown Shrike subspecies, *Lanius cristatus superciliosus*. Jap. J. Ornithol., 45: 187-190.
- Takagi, M., 2002. Reproductive performance and nestling growth of the Brown Shrike subspecies *Lanius cristatus superciliosus* in Hokkaido. J. Yamashina Inst. Ornithol., 34: 30-38.
- Takagi, M., 2003. Philopatry and habitat selection in bull-headed and brown shrikes. Journal of Field Ornithology, 74: 45-52.
- 露崎史朗・先崎理之・和田直也・松島肇，2021．銭函海岸風力発電所建設が生態系に与えた影響の事後評価．保全生態学研究，26: 333-343．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．pp. 176．鳥類繁殖分布調査会，府中．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lanius cristatus superciliosus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lanius cristatus superciliosus* is listed as CR under criteria A2 C1.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥80% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

C. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals and:

1. An estimated continuing decline of at least 25% within three years or one generation, whichever is longer (up to a maximum of 100 years in the future).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Middle river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Estuary
Threat types:	River development, Coastal development, Wetland development, Field preparation, Grassland development, Land development, Predation (by alien species), Predation (by native species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Marine sand mining, Power plant construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	北沢宗大（北海道大学）・髙木昌興（北海道大学）
Author:	Munehiro Kitazawa and Masaoki Takagi

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ツグミ科 Turdidae　　日本固有

コトラツグミ

***Zoothera dauma iriomotensis* Nishiumi & Morioka, 2009**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　D

基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　CR	基準 E:　―

D．成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。

【推定根拠】

環境省レッドリスト作成のために実施された 2017 年および 2018 年の現地調査の結果、生息が確認されなかったことや、一般の観察記録がないこと、これまでに国内で採集された標本が 3 点のみであることから、極めて生息密度が低いことが推察される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

日本鳥類目録第 3 版（1942）に西表島で 2 例と台湾で 7 例の記録があるとされ（詳細な記載はなし）、目録第 6 版（2000）まではジャワ島や台湾の集団と同じ亜種 *Zoothera dauma horfieldi* として扱われてきた。Nishiumi and Morioka（2009）によって西表島においてのみ 3 体の標本記録がある *Zoothera dauma iriomotensis* として新亜種記載され、国立科学博物館のオス 1 点）がホロタイプ標本になり、我孫子市鳥の博物館のオス 1 点）と山階鳥類研究所のメス 1 点がパラタイプ標本となっている。それ以外の標本はなく、また確実な観察記録もない。台湾での記録は近年増えているが、*Zoothera dauma horfieldi* と考えられる。

国内の正確な個体数は不明であるものの、生息密度は極めて低いと考えられる。

基礎情報

【形態】

嘴峰 23.5-24.5 mm、翼長 133.5-145 mm、跗蹠 32.5-34 mm、尾長 87-101.5 mm。トラツグミ *Zoothera aurea* に酷似するが、体の上面のオリーブ黄褐色の地色がそれよりもやや暗色で、体はトラツグミよりも小型である。

【生活史】

日本鳥類目録改訂第 8 版では西表島の繁殖留鳥（RB）となっているが、西表における確実な繁殖記録はない。

【生息環境】

森林に生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では、先島諸島の西表島において記録がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年において大きな変化はないと考えられる。

【生息地の現況】

本種への影響については不明であるが、開発のための森林伐採、採水のための河川の開発などにより、生息に適した環境が減少している。

【個体数の現況】

環境省レッドリスト作成のために実施された 2017 年および 2018 年の現地調査の結果、生息が確認されなかったことや、一般の観察記録がないこと、国内で採集された標本が 3 点のみであることから、極めて生息密度が低いことが推察される。

存続を脅かす要因

詳細については不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	コトラツグミ	*Zoothera dauma iriomotensis*	DD
第４次 2019:	コトラツグミ	*Zoothera dauma iriomotensis*	DD
第４次 2018:	コトラツグミ	*Zoothera dauma iriomotensis*	DD
第４次 2017:	コトラツグミ	*Zoothera dauma iriomotensis*	DD
第４次 2015:	コトラツグミ	*Zoothera dauma horsfieldi*	DD
第４次:	コトラツグミ	*Zoothera dauma horsfieldi*	DD
第３次:	コトラツグミ	*Zoothera dauma horsfieldi*	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 清棲幸保，1978．増補改訂版 日本鳥類大図鑑Ⅰ．p. 206．講談社，東京．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．506pp. 日本鳥学会，東京．
- Nishiumi, I. and H. Morioka, 2009. A new subspecies of *Zoothera dauma* (Aves, Turdidae) from Iriomotejima, Southern Ryukyus, with comments on Z. d. toratugumi. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, 35(2): 113-124.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Zoothera dauma iriomotensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Zoothera dauma iriomotensis* is listed as CR under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest

Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	西海功（国立科学博物館）
Author:	Isao Nishiumi

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　アトリ科 Fringillidae　　日本固有

オガサワラカワラヒワ

***Chloris kittlitzi* (Seebohm, 1890)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab

基準 A:　－	基準 B:　CR	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。
【過度に分断】
母島属島集団と南硫黄島集団は 250 km 以上離れており、その間にある島では集団が絶滅している。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
母島属島では 2017 年から 2020 年の間にカメラトラップでの撮影頻度が 20-30%に低下している。また個体群シミュレーションにより、保全策が取られなければ減少傾向が続き 15 年程度で集団が消滅すると予測されている。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

オガサワラカワラヒワは小笠原諸島の典型的な森林である乾性低木林に適応して進化した鳥である。本種は過去には諸島全体に広く分布していたが、クマネズミが侵入した島では繁殖集団が絶滅し、最近は母島属島と南硫黄島でのみ繁殖が記録されている。繁殖個体数は母島属島と南硫黄島にそれぞれ約 100 個体と推定されており、母島属島では過去約 25 年で個体群密度が約 10%に減少している。母島属島にはドブネズミが侵入しており、その捕食が近年の減少の主因となっていると考えられる。このまま保全措置がとられなければ母島属島の集団は 15 年程度で絶滅すると予測され、2021 年には種の保存法に基づく保護増殖事業計画が策定されて、ネズミ駆除、ネコ対策、域外保全などが始まった。

基礎情報

【形態】

カワラヒワ *Chloris sinica minor* に似るが、カワラヒワより体重、翼長、尾長ともにやや小さく、嘴峰長はより長く、体の割に嘴全体が大きい。オスは頭部から背、胸にかけてオリーブグリーンで、背は茶色、下尾筒は黄色。メスはオスに比べ全身の褐色みが強い。雌雄ともに嘴がピンクで、翼に黄斑がある。若鳥は嘴が黒く、腹に縦斑がある。

【生活史】

主に 4 月-6 月ごろに繁殖する。最近になり秋にも繁殖することが明らかになってきたが、詳細はまだ不明である。巣は過去にはアカテツやムニンハツバキなどの在来植物の樹上でも見つかっていたが、近年はほぼ外来植物のトクサバモクマオウでしか見つかっていない。一腹卵数は 3-4 個でカワラヒワに比べて少なく、一方で卵サイズは大きい。繁殖期後は島間移動することが知られており、母島では 6 月下旬から 10 月頃に観察される。母島列島では観察される個体が冬季に激減するが、この時期にどこに移動しているかは不明である。ムニンアオガンピやウラジロエノキ、トクサバモクマオウ、ギンネム、スベリヒユ、キキョウランなど、多様な植物の種子を採食する。

【生息環境】

母島列島では属島の乾性低木林で繁殖する。母島本島では繁殖は確認されていないが、非繁殖期に島の南部の低標高地の農耕地、集落、草地、低木林などで見られており、集落よりも北ではほとんど見られない。南硫黄島では標高 300 m 以下のセンダンやアカテツが優占する低木林において観察されている。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】裸地，森林，草地，田地・畑地 【陸域_平地部 海岸部】裸地，森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，市街緑地，小河川
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（7）島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島の聟島列島、父島列島、母島列島、火山列島で広く記録がある。戦前には聟島で繁殖した個体が非繁殖期に父島列島や母島列島に移動していたとされる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

聟島列島では過去には多産したが、1931 年の記録を最後に絶滅している。父島列島では 1974 年に兄島で観察されて以後継続的な記録はないが、父島や東島で稀に少数個体が観察されることがある。これらは母島列島から移動している可能性がある。母島列島では属島の向島、平島、姉島、妹島、姪島で繁殖し、非繁殖期には母島にも飛来する。硫黄列島では南硫黄島のみで繁殖しているが、ごく稀に北硫黄島、硫黄島でも本種と考えられる個体が観察されることがある。

【生息地の現況】

母島列島の属島では、ムニンアオガンピやアカテツ、シマシャリンバイなどが優占する乾性低木林や外来種であるトクサバモクマオウ林に生息している。以前はアカテツやムニンハツバキなどの在来低木でも営巣が見られたが、近年は主にトクサバモクマオウの枝上でのみ営巣が見つかっている。母島では乾性低木林に加え、農地や草地をよく利用している。台風や干魃などの気象害が生じると植物の結実が影響を受け食物が不足するため、繁殖成功率が低下する傾向がある。

【個体数の現況】

19 世紀には本種が聟島列島から火山列島まで広く繁殖していたと考えると、現在の繁殖地の面積は当時の 10 分の 1 以下となっている。また、母島属島におけるラインセンサスの結果から 1996 年ごろに比べて 2020 年には個体群密度が約 10 分の 1 となっている。母島属島におけるカメラトラップによる撮影頻度は 2017 年から 2020 年にかけて 20-30%に低下している。近年の繁殖個体数は母島属島と南硫黄島にそれぞれ約 100 個体と推定されている。このまま保全措置がとられなければ、母島列島の集団は 15 年程度で絶滅すると予測されている。

存続を脅かす要因

オガサワラカワラヒワは、現在クマネズミが侵入していない島でのみ繁殖し、クマネズミが侵入している全ての島からは繁殖集団が消失していることから、樹上で雛や卵などを捕食するクマネズミが最大の脅威と考えられる。現在この鳥が繁殖している母島属島では、クマネズミはいないもののドブネズミが侵入している。ドブネズミも、クマネズミに比べ頻度は低いものの、樹上で巣内の雛や卵を捕食すると考えられ、近年の母島属島での減少の主な原因はこれにあると考えられている。同時にネズミ類は食物をめぐる競争者ともなる。また母島ではノネコによる捕食が問題となっている。過去には、ノヤギの食害により森林が失われたことも、分布縮小の一因となっていたと考えられる。近年は気候変動の影響で台風や旱魃などの気象害の激甚化が懸念されているが、これらの影響で年によって結実量が激減し、繁殖成功率が低下する場合がある。火山列島の集団はもともと北硫黄島、硫黄島を含めてメタ個体群を形成していたと考えられるが、現在は面積の狭い南硫黄島にしか生残していないため、人口学的確率性や遺伝的浮動による有害変異の固定による絶滅リスクの上昇が懸念される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，海岸開発，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，競争/競合（外来種による）
	（現在）	捕食（外来種による），競争/競合（外来種による），気候変動，分布・産地局限

特記事項

本種の危機的状況を受け、2021 年に種の保存法に基づく保護増殖事業計画が策定され、

母島属島におけるネズミ駆除や、母島南部におけるノネコ対策の強化、飼育下繁殖集団の確立と野生復帰による個体群の補強を目的とした域外保全などが実施されている。オガサワラカワラヒワは、以前はカワラヒワの亜種とされていたが、DNA 分析によりカワラヒワとは 100 万年以上前に分岐した集団であることが明らかになり、現在は独立種と認められている。本種は小笠原諸島の典型的な森林タイプである乾性低木林に適応して進化した唯一の脊椎動物である。近年本種は外来種のトクサバモクマオウでのみ営巣が見つかっているが、これはこの樹種の幹が通直でドブネズミが登りづらく、捕食圧が軽減されているためと考えられている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	オガサワラカワラヒワ	*Chloris sinica kittlitzi*	CR
第４次 2019:	オガサワラカワラヒワ	*Chloris sinica kittlitzi*	CR
第４次 2018:	オガサワラカワラヒワ	*Chloris sinica kittlitzi*	CR
第４次 2017:	オガサワラカワラヒワ	*Chloris sinica kittlitzi*	CR
第４次 2015:	オガサワラカワラヒワ	*Carduelis sinica kittlitzi*	CR
第４次:	オガサワラカワラヒワ	*Carduelis sinica kittlitzi*	CR
第３次:	オガサワラカワラヒワ	*Carduelis sinica kittlitzi*	EN
第２次:	オガサワラカワラヒワ	*Carduelis sinica kittlitzi*	EN
第１次:	オガサワラカワラヒワ	*Carduelis sinica kittlitzi*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島)】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，鳥獣保護管理法

参考文献

- Kawakami, K. and M. Fujita, 2004. Feral cat predation on seabirds on Hahajima, the Bonin Islands, Southern Japan. Ornith Sci, 3: 155-158.
- 川上和人・鈴木創・堀越和夫・川口大朗，2018．2017 年における南硫黄島の鳥類相．小笠原研究， 44: 217-250.
- 川上和人・川口大朗，2022．オガサワラカワラヒワの個体群存続に対する脅威．小笠原研究, 48:17-30.

- 川上和人・川口大朗，2022．オガサワラカワラヒワの生態と個体群の現状．小笠原研究，48:3-15．
- 川上和人，2019．小笠原諸島における撹乱の歴史と外来生物が鳥類に与える影響．日本鳥学会誌，68: 237-262．
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並に硫黄列島産の鳥類に就て．日本生物地理学会会報，1(3): 89-186．
- Nakamura, H., 1997. Ecological adaptaions of the Oriental Greenfinch *Carduelis sinica* on the Ogasawara Islands. Jpn. J. Ornithol., 46: 95-110.
- 南波興之，2022．オガサワラカワラヒワの存続可能性分析．小笠原研究，48:47-65．
- Saitoh, T., K. Kawakami, Y. A. Red'kin, I. Nishiumi, C. H. Kim and A.P. Kryukov, 2020. Cryptic speciation of the Oriental Greenfinch *Chloris sinica* on oceanic islands. Zoological Science, 37: 280-294.
- 鈴木惟司，1994．母島列島におけるオガサワラカワラヒワの生息状況．日本鳥学会誌，43: 134-135．
- 時田賢一・渡辺義昭，2001．硫黄島鳥類目録（1999 年 10 月－2000 年 8 月）．我孫子市鳥の博物館調査研究報告，9: 35-45．
- 東京府小笠原島庁，1914．小笠原島ノ概況及森林．東京府小笠原島庁．
- 塚本洋三，1982．南硫黄島の鳥類．南硫黄島原生自然環境保全地域調査報告書，pp. 249-285．環境庁自然保護局，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Chloris kittlitzi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Chloris kittlitzi* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Bare area, Forest, Grassland, Farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Bare area, Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Urban green area, Small river
Threat types:	Predation (by alien species), Competition (with alien species), Climate change,

	Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ホオジロ科 Emberizidae

シマアオジ

***Emberiza aureola ornata* Shulpin, 1928**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　A2 B2ab C1+2a(i) D				
基準 A:　CR	基準 B:　CR	基準 C:　CR	基準 D:　CR	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。
【比較年】
3 世代（21 年）
【過去の状況】
2017 年サロベツつがい数は 35 つがい。
1997-2002 年の鳥類繁殖分布調査では 15 地点の記録があった。
【近年の状況】
2022 年サロベツつがい数は 16 つがい。2024 年調査ではさらに減少し、2 つがい。
2016-2021 年の全国鳥類繁殖分布調査では 1 地点のみ記録された。

B2．生息地面積が 10 km^2未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。
【地点数】1 地点
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
年々分布範囲が減少している。

C．個体群の成熟個体数が 250 未満であると推定される。
【推定根拠】
近年シマアオジが生息しているのはサロベツ湿原のみである。サロベツ湿原では、2024 年に 2 つがいが確認され、雌雄を成熟個体数と考えると成熟個体数は 4 個体と計算できる。

加えて、以下の 1. および 2. かつ a (i) に該当する事由がある。

1. 3 年間もしくは 1 世代のどちらか長い期間に 25%以上の継続的な減少が推定される。
【比較年】
過去 1 世代（7 年前）
【過去の状況】
2017 年の調査では 35 つがいが確認された。

【近年の状況】
2024 年の調査で確認されたつがい数は 2 のみ。

2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測される。
【判断理由】
中継地における捕獲に歯止めがかかってない。
a) 個体群構造が次に該当
i) 50 以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。
【判断理由】
近年シマアオジが生息しているのはサロベツ湿原のみである。サロベツ湿原では、2024 年に 2 つがいが確認され、雌雄を成熟個体数と考えると成熟個体数は 4 個体と計算できる。

D. 成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。
【推定根拠】
サロベツでは、2024 年に 2 つがいが確認され、雌雄を成熟個体数と考えると成熟個体数は 4 個体と計算できる。

評価分科会： 鳥類分科会

概要

大きさはスズメ大の小鳥である。国内では北海道に夏鳥として飛来する。海岸や河畔の草原、湿地、牧草地などに生息する。ユーラシア大陸北部に広く繁殖分布し、越冬地は中国南部、インドシナ半島、ネパール中東部などの東南アジア地域である。北海道では 1990 年代に急減し、減少傾向は、なお進行している。減少した地域には偏りはなく、北海道全域で減少している。

基礎情報

【形態】

スズメ大の大きさで、オスの夏羽は頭上、背、翼、腰が茶褐色で翼には大きな白斑がある。額、顔、喉は黒色。下面は鮮やかな黄色で、脇に茶褐色の縦斑がある。メスの夏羽は、頭が茶褐色、頬、背、翼は褐色で、白色の眉斑と頭央線がある。下面は黄色であるがオスに比べて淡い。

【生活史】

北海道では夏鳥として 5 月下旬から 6 月上旬に渡来する。渡来後まもなく繁殖がはじまり 7 月ごろまでには巣立ちする。産卵数は 4～5 個で、抱卵日数は 11～13 日間、育雛期間は 13～15 日間である。一夫一妻で繁殖し、雌雄で抱卵、給餌する。昆虫や植物の種子を食べる。

【生息環境】

繁殖期は、ハンノキ、ノリウツギ、ヤチヤナギ、ハイイヌツゲの低木がまばらにある中間湿原を利用する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域

【分布域】

国内では北海道のみに夏鳥として繁殖分布する。青森県と秋田県で繁殖記録がある。北海道の亜種 *Emberiza aureola ornata* は、国外ではサハリン、中国東北部、ロシア極東南部などで繁殖分布する。基亜種 *Emberiza aureola aureola* は、カムチャツカ半島などから、フィンランド中央部などユーラシア大陸の温帯から亜寒帯に広く繁殖分布する。2 亜種の冬羽は区別がつかない。本種の越冬地は中国南部、インドシナ半島、ネパール中東部などの東南アジア地域である。

現在の生息状況

【分布域の現況】

第 6 回自然環境保全基礎調査種の多様性調査では、1974～78 年に 52 地点の生息情報があったものが、1998～2002 年には 15 地点に減少しており、著しく減少している。減少した地域には偏りはなく、北海道全域で減少している。1990 年代に急減したと思われる。2002 年ごろに生息情報があった地点において、現地調査や聞き取り調査を実施したところ 2008～12 年にかけて生息が確認できなかった地点が多数あり、減少の傾向は、なお進行している。2024 年ではサロベツ湿原のごく一部にわずかなつがいが残っているに過ぎない。

【生息地の現況】

サロベツ湿原では乾燥化によりシマアオジの繁殖環境である中間湿原のササ原化が進んでおり、繁殖環境が悪化している。

【個体数の現況】

2024 の個体数はサロベツで 2 つがいであり、過去 7 年につがい数は 93%減少した。

存続を脅かす要因

渡りの中継地で、かなりの個体数が捕獲されており、密猟の摘発事例が多数ある。本種の繁殖地はユーラシア大陸北部に広がっており、国内の個体群と捕獲されている中継地や越冬個体群を結びつける科学的な資料はないものの、個体数の減少には捕獲の影響が強く疑われている。

要因の区分：	（過去）	河川開発，草地開発，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	捕獲・狩猟/園芸採取，シカ食害，近交弱勢

特記事項

1998～2002 年に実施された第 6 回自然環境保全基礎調査種の多様性調査によって、1974～78 年の生息状況から著しく減少していることが明らかになった。また 2002～03 年に実施した、第 6 回自然環境保全基礎調査生物多様性調査-北海道夏鳥調査-においても、同様に減少していることが明らかになっている。2006 年以降 CR に指定されている。IUCN のレッドリストでは、2008 年 10 月に VU に選定されていたが、2013 年 11 月の改訂で EN、2017 年 10 月の改訂で CR となり、世界的にも生息状況は悪化している。国内的には生息状況に関する調査は不足していて、具体的な保護対策も行われていない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シマアオジ	*Emberiza aureola ornata*	CR
第４次 2019：	シマアオジ	*Emberiza aureola ornata*	CR
第４次 2018：	シマアオジ	*Emberiza aureola ornata*	CR
第４次 2017：	シマアオジ	*Emberiza aureola ornata*	CR
第４次 2015：	シマアオジ	*Emberiza aureola ornata*	CR
第４次：	シマアオジ	*Emberiza aureola ornata*	CR
第３次：	シマアオジ	*Emberiza aureola ornata*	CR
第２次：	シマアオジ	*Emberiza aureola ornata*	NT
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠA 類(Cr)，【青森県】要調査野生生物(D ランク)，【山形県】情報不足(DD)，【長崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- Bao et al., 2022. Subspecies Taxonomy and Inter-Population Divergences of the Critically Endangered Yellow-Breasted Bunting: Evidence from Song Variations, 12, MDPI.
- Byers, C., U. Olsson and J. Curson, 1995. Buntings and sparrows: a guide to the buntings and North American sparrows. Pica Press, Robertsbridge, U. K.
- Chan, S., 2004. Yellow-breasted Bunting *Emberiza aureola*. BirdingASIA, 1: 16-17.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2004．生態系多様性地域調査（湿原生態系調査）報告書．環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田．
- 環境省北海道地方環境事務所，2018．平成 29 年度サロベツ地域シマアオジ分布調査及び普及啓発業務報告書．
- 環境省北海道地方環境事務所，2023．令和 4 年度サロベツ地域シマアオジ分布調査及び普及啓発業務報告書．
- 川崎慎二・加藤和明・樋口広芳・高田令子，1997．北海道東部・春国岱の繁殖期の鳥類相の変化．Strix，15: 25-38．
- 三上直樹・杉山優子・扇谷照美・大八木昭，1977．下北半島でシマアオジが繁殖．野鳥，42(5): 266-268．
- 西出隆，1987．八郎潟干拓地の *Emberiza* 属について(1) 侵入経緯と分布の変遷．Strix，6: 86-95．
- Tamada, K., 2006. Population change of grassland birds over ten years in Nakashibetsu, eastern Hokkaido. Ornithological Science, 5: 127-131.
- 玉田克巳，2008．絶滅危惧種シマアオジをどう守るか（1）減少の実態．北海道野鳥だより，154: 6-7．
- 吉安京子・森本元・千田万里子・仲村昇，2020．鳥類標識調査より得られた種別の生存期間一覧（1961‐2017 年における上位 2 記録について）．山階鳥類学雑誌，52(1): 21-48．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Emberiza aureola ornata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Emberiza aureola ornata* is listed as CR under criteria A2 B2ab C1+2a(i) D.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥80% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

C. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals and:

1. An estimated continuing decline of at least 25% within three years or one generation, whichever is longer (up to a maximum of 100 years in the future) AND

2. A continuing decline, observed, projected, or inferred, in numbers of mature individuals and:

a. Population structure in the form:

(i) no subpopulation estimated to contain more than 50 mature individuals.

D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin
Threat types:	Hunting and collecting animals/Gathering plants, Deer feeding damage, Inbreeding depression
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	長谷部真（NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク）
Author:	Makoto Hasebe

公表年月：2026 年 3 月

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

カリガネ

***Anser erythropus* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　D

基準 A:　—	基準 B:　—	基準 C:　—	基準 D:　EN	基準 E:　—

D．成熟個体数が 250 未満であると推定される個体群である。

【推定根拠】

モニタリングサイト 1000 では、2010 年以降の各年の最大飛来数は 1-16 羽で、毎年観察記録がある（環境省自然環境局 2020）。渡りの際に通過する北海道北部のサロベツ原野では、2005-2007 年に毎年 20-50 羽程度の個体が確認され、2001-2004 年より増加している（Ikawa & Ikawa 2009）。宮城県では、2015-2016 年の越冬期以降、毎年 100-300 羽が確認（平均 190 羽）されており、2019-2020 年の越冬期には 307 羽が確認されていることから、近年増加傾向にあるが、中国や韓国を含む極東地域の個体群は減少傾向である（Ao et al 2020）。サロベツに飛来する個体群の幼鳥の割合は 40-60%であるが、中国の長江河口のカリガネ個体群の幼鳥の割合は平均 15%である。近年の宮城県の飛来数の平均 190 羽（最大 307 羽）は幼鳥も含む個体数で、中国の幼鳥率が 15%であることを考慮すると、宮城県に飛来する成熟個体は、平均 162 羽、最大値で 261 羽と試算できる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

カリガネは近縁種のマガンに酷似し、発見が困難なため情報が限られているが、江戸時代以降の記録が残され、1999 年以降は宮城県内と北海道（サロベツ）に最大 100 羽ほどが定期飛来することが明らかになった。国外では、日本へ渡るマガンの春の中継地（カムチャツカ・ハルチンスコエ湖）で 1,000 羽の群れが観察され、チュコト半島のマガン繁殖地近くで新たな繁殖地が発見された。これらの群れは日本の個体群と関わる可能性が高い。

協力者:　嶋田哲郎（宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）

基礎情報

【形態】

全長 53-66 cm、翼開長 120-135 cm、体重 1.3-2.3 kg ほどの小型のガン。マガンに酷似し、全身ほぼ暗褐色で上・下尾筒は白く、足は橙色、額は白く、腹に不規則な黒斑を持つ。マガン（全長 65-86 cm、翼開長 130-165 cm、体重 1.7-3 kg）に比べ、一回り小さく、嘴は短くて淡い紅色で、額の白色帯は基部と同じ幅で頭頂まで達す（成鳥）。成鳥、幼鳥ともに目の周囲に黄色の明瞭なリングがある。マガンよりも 25%足が短いことも特徴的で、マガンでは風切羽の先端が尾羽と同等か少し長い程度であるが、カリガネでは、風切羽先端が尾羽を大きく超えている。

【生活史】

日本に飛来するカリガネの繁殖地は不明であったが、国内からの渡り追跡調査が行われた結果、チャウン湾に近い森林ツンドラがそのひとつであることが判明した。ロシアの東部における繁殖地がチュコトやアナディル湾でも発見されており、おそらくそれらロシア東端の集団が伝統的に日本に飛来しているものと考えられる。繁殖環境は河川沿いの低木林やイネ科草本群落、岩場、泥炭地のくぼみに営巣する。中継地のサロベツ原野では、日中はマガンやオオヒシクイの群れと牧草地で採食。越冬地の宮城では、マガンの群れと特定地域の水田地帯で採食。マガンに比べ食物の選好性が高く（Habitat Specialist）、草丈の低い草本類を好んで採食する。主な食物は、牧草地のアルファルファやイタリアンライグラス、畦に生えているスズメノカタビラやシロツメクサなどである。夜間は、伊豆沼、蕪栗沼、長沼などにねぐらをとる。

【生息環境】

主に水辺（湖沼、河川）や農耕地（水田、畑、牧草地）に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，田地・畑地，湿地・湿原，河川下流域，ワンド，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

江戸時代の文献（徳川実記、享保・元文諸国産別帳）にもカリガネの記録があり、その当時から渡来していたと推定されるが、マガンに酷似するので正確な記録が乏しく、第 2 次レッドリスト（1998）までは、評価対象とならなかった。江戸時代には、中国、四国、北陸地方、山形で記録され（享保・元文諸国産物帳）、江戸周辺でも 8 羽が捕獲されている（徳川実紀）。1877 年に函館で標本 1 体が採取され（Seebohm 1879）、1874-1943 年には 16 例が国内で記録されている（Austin 1949）。その他の採集地としては、北海道（別海、女満別）、本州（小川原湖、常陸鹿島、上総、手賀沼、南行徳、東京、横浜、新潟県南蒲原郡などがあり、マガンと同様分布域は広かったが、生息地の消失に伴い分布が限定されるようになったと考えられる。1999 年以降、日本雁を保護する会の会員などによる調査で、宮城県北部と北海道サロベツ原野に、定期的に数十～100 羽程の群れが渡来していることは判

明し、その後島根県の宍道湖周辺でも 25 羽の群れが観察されている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域はスカンジナビア半島からロシア極東の森林ツンドラ地帯。フェノスカンジア個体群、西側主要個体群、東側主要個体群の 3 つの個体群があり、東側主要個体群はタイミール半島からチュコト半島にかけて繁殖し、中国や日本で越冬する。日本では、秋の渡り時期に北海道のサロベツ湿原を中継し、宮城県の伊豆沼周辺で越冬する。宮城県で越冬する個体は、伊豆沼を主なねぐらとしており、厳冬期は登米市の平筒沼にもねぐら入りする。また、島根県の斐伊川流域にも少数が越冬し、大潟村、朝日池、国仲平野、片野鴨池などでも記録されている。

【生息地の現況】

渡りの時期にサロベツに出現し、越冬期に宮城県北部に生息する群れが確認されているが、それ以外の情報は殆どない。定期渡来する群れの行動圏全体は明らかにされていない。生息地の保全のためにも、国内重要生息地における環境利用、他の国内生息地の発見、移動経路の解明が望まれる。

【個体数の現況】

全世界での個体数は、24,000-40,000 羽と推定されており、IUCN のレッドリストでは、危急種（Vulnerable）になった（BirdLife International 2020）。1980 年代後半から 1990 年代前半には、中国の安徽省、江西省、江蘇省などを中心に 6-7 万羽が生息していたと推定されていたが、2011 年には 14,000-19,000 羽、2020 年には 4,190 羽と急激に減少していることが報告されている（Jia et al. 2016, Ao et al. 2020）。国内に生息する個体数については、本種がマガンの群れの中に混生するため、その正確な数の把握が困難だが、宮城県における越冬数は 2000 年以降増加傾向にあるとされ、2019/2020 年のシーズンには、300 羽を超える個体が越冬した。中国の生息地劣化に伴い、越冬地を日本にシフトしている可能性が考えられる。北海道北部のサロベツでも、秋の渡りで飛来するカリガネが増加傾向にあり（Ikawa and Ikawa 2009）、宮城県での越冬数の増加と関連も考えられる。

存続を脅かす要因

フェノスカンジア個体群、西側主要個体群については、越冬地では狩猟、生息地の消失、人為的攪乱、繁殖地では生息地の消失と捕食があげられている。東側主要個体群については情報が少ないものの、同様の要因が指摘されている。特に越冬地においては、マガンとは異なり草本により依存するため草地環境の維持が重要とされており、人為的攪乱にも影響を受けやすいため、採食地の保全管理が十分に図られる必要がある。また、国内で越冬する個体は中国北東部を渡りの中継地とすることが判明したが、生息地の保全が十分に図られていないとの指摘があるほか、ロシアでの密猟の可能性も指摘されている。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，草地開発，捕獲・狩猟/園芸採取，混獲・錯

		誤捕獲
	（現在）	草地開発，その他（人為的攪乱、農法の変化）

特記事項

山階鳥類研究所の澤氏らによる追跡調査が進展している。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	カリガネ	*Anser erythropus*	EN
第４次 2019:	カリガネ	*Anser erythropus*	EN
第４次 2018:	カリガネ	*Anser erythropus*	EN
第４次 2017:	カリガネ	*Anser erythropus*	EN
第４次 2015:	カリガネ	*Anser erythropus*	EN
第４次:	カリガネ	*Anser erythropus*	EN
第３次:	カリガネ	*Anser erythropus*	NT
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt)，【岩手県】準絶滅危惧，【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【秋田県】情報不足(DD)，【山形県】評価対象外，【埼玉県】絶滅(EX)(越)，【千葉県】消息不明・絶滅生物(X)，【新潟県】準絶滅危惧(NT)，【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類，【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【熊本県】要注目種(AN)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Ao, P., et al., 2020. Migration routes, population status and key sites of the Eastern Palearctic Lesser White-fronted Goose *Anser erythropus*. Wildfowl, Special Issue No. 6: 206-243.
- Austin, O. L., 1949. Waterfowl of Japan. G. H. Q. supreme Commander for the Allied powers Natural resources section Report, Number118, 15.
- Ikawa, M. J., and H. Ikawa, 2009. Lesser White-fronted Goose *Anser erythropus* at Sarobetsu in northern Hokkaido, Japan: a preliminary report on numbers in autumn. Ornithological Science, 8: 131-138.

- 岩渕成記，1997．シリーズ「この鳥を守ろう」の現在 第 23 回 カリガネ－かつては日本にも群れで来ていたガン－．私たちの自然，(423): 18-21．
- 金山正好，1985．徳川将軍の狩猟記録 「徳川実紀」から．応用鳥類学，公益財団法人山階鳥類研究所，千葉．
- 環境庁，1988．過去における鳥獣分布調査について．環境庁．
- 環境省自然環境局，2020．モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査 2004～2017 年度 とりまとめ報告書．環境省生物多様性センター，山梨．
- 環境省自然環境局，2022．第 52 回ガンカモ類の生息調査報告書．環境省生物多様性センター，山梨．
- 黒田長道，1939．雁と鴨．修教社書院，東京．
- Tian, H., D. Solovyeva, G. Danilov, et al., 2021. Combining modern tracking data and historical records improves understanding of the summer habitats of the Eastern Lesser White-fronted Goose *Anser erythropus*. Ecology & Evolution, 11: 4126-4139.
- Wang, A., I. Damba, Q. Zhao, Y. Xie, X. Deng, R. Ga, G. Liu, Z. Xu, Y. Li, D. Gao, W. Xu, G. Chen and L. Lei Cao, 2021. Organising a juvenile ratio monitoring programme for 10 key waterbird species in the Yangtze River floodplain: analysis and proposals. Avian Research, 12: 1-13(Article number: 72).

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Anser erythropus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Anser erythropus* is listed as EN under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Wetland, Lower river basin, Inlet, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Grassland development, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	牛山克巳（宮島沼水鳥・湿地センター）
Author:	Katsumi Ushiyama

公表年月：2026 年 3 月

キジ目 Galliformes　キジ科 Phasianidae　　日本固有

ライチョウ

***Lagopus muta japonica* Clark, 1907**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A: ―	基準 B: EN	基準 C: ―	基準 D: ―	基準 E: ―

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
ライチョウが生息する環境は、森林限界以上の高山帯である。標高が 154 m 高くなると気温は 1℃低くなることから、温暖化により平均気温が 1℃高くなると森林限界が 154 m 程度上昇すると仮定すると、ライチョウが生息可能な環境の面積は継続的に縮小し、縄張り数も減少していくことが予測される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

日本のライチョウは、最終氷期に大陸から移り住み、現在本州中部の高山のみに生息する。繁殖数は、約 40 年前の調査で約 3,000 羽と推定されたが、その後多くの山で減少傾向にあり、2000 年代初頭には約 1,700 羽と推定された。特に減少が激しかったのは南アルプスである。減少の原因は、キツネ、テン、カラス等の本来低地に生息する捕食者の高山帯への侵入と増加、ニホンジカ等の大型草食動物の高山帯への侵入による高山環境の破壊、地球温暖化の影響が考えられる。近年においては、各山岳で大幅な個体数の減少は起きていない。また、絶滅した中央アルプスに 300 羽を超える集団が復活したことで、本亜種の現在の生息数は 2,000 羽ほどと推測される。

基礎情報

【形態】

ずんぐりした体形で、体重は 450～550 g ほど。雪の無い期間が長い日本の高山に適応した日本のライチョウは、年に 3 回換羽し、冬羽、繁殖羽、秋羽と季節により姿を変える保護色を進化させた。

【生活史】

越冬地から高山帯に戻る春先にオスがなわばりを確立し、一夫一妻のつがいを形成。5 月の末から 6 月に背の低いハイマツの下に巣をつくり産卵する。一腹卵数は、4～8 卵で、平均は 5.8 卵。全卵を産み終えてから抱卵を開始。卵は 22 日間で孵化。抱卵と抱雛はメスのみが行う。9 月には、オスと繁殖に失敗したメスが集まり秋群れを形成するが、10 月にはこれに親から独立した若鳥が加わった群れをつくる。積雪の多い山岳では、12 月下旬までに森林限界付近や亜高山帯まで降りて越冬するが、メスの方が低い場所で越冬する傾向がある。若鳥の分散は、親から独立後の 10 月から翌年の春に見られ、オスよりもメスの方がより遠くに分散する。1 歳より繁殖を開始し、確認された最長寿命は 11 歳。

【生息環境】

標高 2,200 m から 2,400 m 以上の高山帯で繁殖する。背の低いハイマツの中に営巣し、風衝地や雪田植生などでガンコウラン等の高山植物を主に採食。ハイマツ群落や岩場を隠れ場として利用。冬期に森林限界付近で越冬する個体は、主にダケカンバの冬芽を餌としている。

生息環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林，砂地・風衝地，その他（ハイマツ帯、雪田植生）
国土地域区分：	（1）奥山自然地域

【分布域】

種ライチョウ（*Lagopus muta*）は、北半球北部の北極を取り巻く地域に広く分布する。亜種ライチョウ（*Lagopus muta japonica*）は、その分布の最南端に隔離分布する亜種で、本州中部の高山帯に生息する。繁殖山岳は、火打山と焼山、北アルプス、乗鞍岳、御嶽山、南アルプスで、以前には、白山、八ヶ岳にも生息していた。また、中央アルプスでも一度ライチョウが絶滅したが、環境省による最近の保護増殖事業で、2025 年にはもとの乗鞍岳の集団（約 150 羽）を超える 300 羽までに復活した。今後 3 年間は、復活した集団がケージ保護や野生復帰といった人の手で増やすことを中止しても、集団維持が可能かモニタリングすることになった。

現在の生息状況

【分布域の現況】

最北の繁殖地の火打山では温暖化の影響を最も強く受けており、イネ科等の背の高い植物の繁茂により生息域が縮小している。また、最南端の繁殖地の南アルプス光岳では、シ

カの食害による環境悪化等で近年繁殖がとだえており、今後分布域の縮小が懸念される。

【生息地の現況】

南アルプスでは、現在ライチョウの生息するほぼ全域にニホンジカとニホンザルの群れが侵入し、各地で高山植生が食害にあっている。北アルプスでは、唐松岳以南一帯にニホンザルの群れが侵入している他、北アルプスと乗鞍岳、御嶽山の高山帯にはニホンジカとイノシシが分布を広げており、この地域でも高山植生の食害が今後懸念される。

【個体数の現況】

1960 年代から 1980 年代にかけて、20 年以上にわたりライチョウの生息する全山の縄張り数の調査が実施され、日本に生息するライチョウの生息数は、約 3,000 羽と推定された。それから 20 年が経過した 2000 年代に入って、同じ時期に同じ方法によって調査した結果、生息数は約 1,700 羽に減少していると推定された。減少が著しいのは南アルプスで、以前の 42.5%に減少し、特に白根三山の北部では 22.0%に減少。北アルプス全体では以前の 56.3%、御嶽山では 56.0%に減少していた。

その後、一斉調査は実施されていないが、前回の調査時に比べ、それぞれの山岳で大幅な数の減少は起きておらず、増加に転じた集団も見られている。また、絶滅した中央アルプスに 300 羽の集団が復活したことで、現在の本亜種の生息数は 2,000 羽ほどと推測される。

存続を脅かす要因

1. キツネ、テン、ハシブトガラス、チョウゲンボウ、ハヤブサ等の本来低山に生息する捕食者の最近の増加と高山帯への侵入。
2. 以前には生息しなかったニホンザル、ニホンジカ、イノシシといった大型草食動物の高山帯への侵入による高山植生の破壊。
3. 地球温暖化による高山環境の縮小。

要因の区分：	（過去）	捕食（在来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，その他（大型草食動物の高山帯への侵入による高山植生の破壊）
	（現在）	捕食（在来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，その他（大型草食動物の高山帯への侵入による高山植生の破壊）

特記事項

ミトコンドリア DNA とマイクロサテライト DNA の解析から、日本のライチョウは、2～3 万年前の最終氷期に日本列島に移りすみ、現在は北アルプスの集団と南アルプスの集団に大きく 2 つの遺伝集団に分かれることが分かった。さらに火打・焼山の集団は、南北両集団の中間に位置する特異な集団であることから、これを考慮すると日本のライチョウは 3 つの遺伝集団に分かれることがわかった。なお、北アルプスとその周辺の集団については、山岳毎の遺伝的な差異があることがわかっている。しかし、最北部の頚城山塊、南

部の独立峰である乗鞍岳と御嶽山の 3 つの山岳集団は、北アルプスの集団や近隣の山岳集団間との遺伝交流があることが示唆されているものの、それぞれの集団は、ほぼ独立の個体群を形成していると判断される。

日本に生息する亜種ライチョウを便宜的に「ニホンライチョウ」と呼称することがあるが、日本鳥類目録第 8 版では、種名および日本に生息する亜種名のいずれも「ライチョウ」としている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ライチョウ	*Lagopus muta japonica*	EN
第４次 2019:	ライチョウ	*Lagopus muta japonica*	EN
第４次 2018:	ライチョウ	*Lagopus muta japonica*	EN
第４次 2017:	ライチョウ	*Lagopus muta japonica*	EN
第４次 2015:	ライチョウ	*Lagopus mutus japonicus*	EN
第４次:	ライチョウ	*Lagopus mutus japonicus*	EN
第３次:	ライチョウ	*Lagopus mutus japonicus*	VU
第２次:	ライチョウ	*Lagopus mutus japonicus*	VU
第１次:	ライチョウ	*Lagopus mutus japonicus*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【福島県】絶滅(EX),【新潟県】絶滅危惧Ⅰ類(EN),【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【山梨県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【長野県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【岐阜県】絶滅危惧Ⅰ類,【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，国指定特別天然記念物，鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【山梨県・長野県】

参考文献

- 羽田健三・小岩井彰・田嶋一善，1984．ライチョウの生態とその個体数．pp. 856-879．大町市史 1 巻自然環境，大町市．
- Kobayashi, A. and H. Nakamura, 2013. Chick and juvenile survival of Japanese rock ptarmigan *Lagopus muta japonica*. Wildlife Biology, 19(4): 358-367.
- 小林篤・中村浩志，2014．ライチョウの群れ構成と標高移動の季節変化．日本鳥学会誌，67(1): 69-86.
- 楠田哲士（編），2020．神の鳥ライチョウの生態と保全－日本の宝を未来につなぐ．緑書房，東京.

- 中村浩志，2006．雷鳥が語りかけるもの．山と渓谷社，東京.
- 中村浩志，2007．ライチョウ *Lagopus mutus japonicus*．日本鳥学会誌，56(2): 93-114.
- 中村浩志，2013．二万年の奇跡を生きた鳥 ライチョウ．農文協，東京.
- 中村浩志，2025．甦れ！神の鳥ライチョウ．山と渓谷社，東京.
- 中村浩志・小林篤，2018．ライチョウを絶滅から守る！．しなのき書房，長野.
- 大町山岳博物館，1964．雷鳥の生活．第一法規，長野.
- 大町山岳博物館，1992．ライチョウ 生活と飼育への挑戦．信濃毎日新聞，長野.
- Suzuki, A., A. Kobayashi, H. Nakamura and F. Takasu, 2013. Population viability analysis of the Japanese rock ptarmigan *Lagopus muta japonica* in Japan. Wildlife Biology, 19(4): 339-346.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lagopus muta japonica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lagopus muta japonica* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area, Mid-altitude area】Forest, Sandy area/Wind-eroded area, Other
Threat types:	Predation (by native species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Other
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Nationally Designated Special Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Yamanashi・Nagano】.





執筆者: Author:	中村浩志（一般財団法人中村浩志国際鳥類研究所）・小林篤（長野県環境保全研究所） Hiroshi Nakamura and Atsushi Kobayashi

公表年月：2026 年 3 月

ハト目 Columbiformes　ハト科 Columbidae　　日本固有

ヨナグニカラスバト

***Columba janthina stejnegeri* (Kuroda, 1923)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　EN	基準 E:　－

D．成熟個体数が 250 未満であると推定される個体群である。

【推定根拠】

本種を最も容易に観察できる宮古島では、地元の観察者により島内の個体数は最大 100 羽程度と推測されている。与那国島では周年観察できる立神岩でも最大個体数が 10 羽を超えることは無い。西表島、石垣島では目視、鳴き声による確認とも極めて少数であり、どれほど多くとも宮古島の個体数よりは少ないと考えられる。そのため、国内の総個体数は 300 羽より少ないと考えられ、国内の成熟個体数は 250 羽未満と考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

日本列島西南部および朝鮮半島、東シナ海周辺の島嶼の限られた地域に分布する種カラスバト（*Columba janthina*）の 1 亜種。種カラスバトには 3 亜種があり、本亜種は沖縄県八重山諸島の与那国島、西表島、石垣島、および宮古諸島の宮古島に留鳥として分布する。与那国島や宮古諸島ではこれ以上森林伐採が進むと存続を脅かす要因になる。生活史や個体数についての資料はほとんどない。

基礎情報

【形態】

全身黒く見えるが頸から胸、背にかけて紫色や緑色の光沢がある全長 40 cm ほどの大型のハト。脚は赤い。基亜種のカラスバトに類似している。

【生活史】

与那国島の海崖の集団繁殖地での観察によると 4 月中、下旬から繁殖行動が始まるようだが、巣立ち時期等詳しいことは不明。6 月中、下旬から 7 月中旬にかけて収穫後の水田に落ち穂を食べに小群で飛来することがある。宮古島では早春からつがい形成の行動がみられるが、10 月にも巣材運びの行動が観察されている。秋から冬は分散し春から夏にかけて繁殖地に集合するようである。西表島と石垣島については断片的な目撃と鳴き声の確認があるだけで、詳しい生活史は不明である。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林内で見られることが多い。与那国島では海崖の岩場で繁殖していることが確認されている。宮古島ではリュウキュウマツの二次林で繁殖した例がある。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】森林，農業用水路，小河川，海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

沖縄県八重山諸島（与那国島、西表島、石垣島）、宮古諸島（宮古島と伊良部島）に留鳥として分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域の変化はないものと思われる。

【生息地の現況】

西表島は常緑広葉樹の自然林が広範囲に残されていて生息環境は良好といえる。石垣島においては陸上自衛隊基地建設、耕作地の拡大、などに伴い常緑広葉樹の自然林、二次林が伐採され生息域は確実に狭くなっている。与那国島においては大規模な森林破壊はないが、本亜種が夏季餌場として利用していた水田が無くなり生息状況は悪化していると思われる。宮古島では繁殖地にあった池が無くなり、生息環境は悪化している。島の内陸部にわずかに残された森林域が、本亜種の生息を可能にしている最後の砦というべき状況は変わらない。

【個体数の現況】

西表島と石垣島においては目撃回数がとても少なく、個体数の現況は不明である。繁殖期に鳴き声を聞くこともほとんど無い。与那国島では周年観察できる立神岩でも最大個体数が 10 羽を超えることは無い。宮古島では他の島に比べて比較的容易に見ることができ

るが、個体数は最大でも 100 羽程度ではないかと推測される。

存続を脅かす要因

森林伐採に伴う生息地の減少、分断化。圃場整備に伴う乾田化で採餌場の減少が懸念される。特に宮古島では現況以上に森林が減少すると、種の存続に重大な結果をもたらすことが容易に考えられる。また、宮古島ではリュウキュウハシブトガラスが本亜種の卵を捕食する事例があり懸念されている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，圃場整備
	（現在）	森林伐採，圃場整備

特記事項

2024 年 6 月 20 日、石垣市野底の道路上で複数のハシブトガラスに襲われている、ヨナグニカラスバトの巣立ち雛が保護された。これにより、本種が石垣島で繁殖していることが改めて証明された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヨナグニカラスバト	*Columba janthina stejnegeri*	EN
第４次 2019：	ヨナグニカラスバト	*Columba janthina stejnegeri*	EN
第４次 2018：	ヨナグニカラスバト	*Columba janthina stejnegeri*	EN
第４次 2017：	ヨナグニカラスバト	*Columba janthina stejnegeri*	EN
第４次 2015：	ヨナクニカラスバト	*Columba janthina stejnegeri*	EN
第４次：	ヨナクニカラスバト	*Columba janthina stejnegeri*	EN
第３次：	ヨナクニカラスバト	*Columba janthina stejnegeri*	EN
第２次：	ヨナクニカラスバト	*Columba janthina stejnegeri*	EN
第１次：	ヨナクニカラスバト	*Columba janthina stejnegeri*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸，2000．日本の鳥 550 山野の鳥．文一総合出版，東京．
- 金城道男，1998．シリーズ「この鳥を守ろう」の現在 第 37 回 カラスバト その 4 －ヨナクニカラスバト－．私たちの自然，(440): 6-9．
- 真木広造・大西敏一，2000．日本の野鳥 590．pp. 656．平凡社，東京．
- 関伸一・高野肇，2005．ミトコンドリア DNA チトクロームｂ領域の塩基配列によるカラスバト *Columba janthina* 3 亜種間の系統関係．九州森林研究，58: 193-194．
- 庄山守，2014．ヨナクニカラスバト．環境省（編），日本の絶滅のおそれのある野生生物 －レッドデータブック 2014－ 2 鳥類，pp. 108-109．環境省，東京．
- 宇山大樹，2003．与那国島・春の鳥類 II．(自費出版）

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Columba janthina stejnegeri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Columba janthina stejnegeri* is listed as EN under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Agricultural ditch, Small river, Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	庄山守（西表島野鳥研究会）
Author:	Mamoru Shoyama

公表年月：2026 年 3 月

ツル目 Gruiformes　クイナ科 Rallidae

シマクイナ

***Coturnicops exquisitus* (Swinhoe, 1873)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　D

基準 A:　—	基準 B:　—	基準 C:　—	基準 D:　EN	基準 E:　—

D．成熟個体数が 250 未満であると推定される個体群である。

【推定根拠】

貞國ら（2018）によれば、北海道において「比較的多数が確認できた生息地が少なくとも 3 か所ある」とのことであり、Senzaki et al.（2020）で確認された勇払原野における繁殖期の成鳥の個体数は最大で 9 個体であることから、国内の繁殖個体数は少ないものと考えられる。関東地方の越冬地でもまとまった個体数が確認されているが、国外の繁殖個体も渡来している可能性がある。高橋ら（2018）では各地点の確認個体数の和は 115 羽、福田ら（2019）では各地点の最大個体数の和は 46 羽と報告されている。これらの情報に加え、後述のとおり実際には未発見の繁殖地があることが示唆されていることを鑑み、50 羽以上 250 羽未満を選択した。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

シマクイナは小型のクイナ科鳥類で、東アジアにのみ分布する。ロシア南東部、中国北東部と北日本の一部（北海道・青森県）で繁殖し、中国南部、朝鮮半島、日本で越冬する。本州から南西諸島にかけては数少ない局所的な冬鳥として渡来し、沼地や休耕田などに生息する。情報不足で生息状況について不明な点はあるが、農地・宅地開発で湿地環境が失われることが本種の保全上の脅威である。

協力者:　貞國利夫・先崎理之・高橋雅雄

基礎情報

【形態】

全長は約 12 cm。雌雄同色。頭頂から背面は褐色で黒色縦斑と白色の細い横斑がある。顔、胸は褐色で白斑がある。次列風切羽は白く、飛翔時に良く目立つ。嘴は暗褐色、脚は黄褐色。虹彩は茶褐色。

【生活史】

渡り性で、繁殖地には 5 月から到着し、主要な繁殖期は 7−8 月と考えられる（Senzaki et al. 2020）。いつごろ繁殖地を離れるのかは不明。越冬地には 11 月から 4 月ごろまで滞在する（福田ら 2019）。寿命や生存率は不明。

【生息環境】

繁殖環境は湿った草原など。渡り時期や越冬期にはヨシ原、湿った草原、休耕田などを利用する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】湿地・湿原，ワンド，ため池・池沼
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

繁殖地はトランスバイカリア東南部と中国東北部および北日本の一部であるが、局地的。Senzaki et al.（2020）によって、2018 年の北海道勇払原野および 2006 年の青森県仏沼における繁殖記録が報告された。また、釧路湿原をはじめとする北海道の一部では定期的に囀り個体が複数確認されていることから、実際にはほかにも繁殖地があることが示唆されている（貞国ら 2018）。日本、朝鮮半島、中国南部で越冬し、国内では本州（高橋ら 2018; 福田ら 2019; 松宮・沼野 2022）、四国および九州（北沢・吉岡 2021; 高橋ら 2024）で越冬個体群が見つかっている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

国内の記録はいずれの地域でも少ないが、関東地方においては複数の定期的な越冬地が発見された。しかし、その環境は休耕田などの湿性の低茎草地に限られる。

【生息地の現況】

越冬地の生息環境であるヨシ原は、全国的に減少している。また、ソーラーパネルの敷設や農地の再開発・圃場整備などの開発圧にさらされている。

【個体数の現況】

個体数の変化に関する詳細な調査はないが、生息環境の減少により、個体数も減少していることが予想される。勇払原野の繁殖地では、繁殖期の成鳥の最大個体数は 9 羽であった（Senzaki et al. 2020）が、他の繁殖地については具体的な個体数のデータは公表されていない。高橋ら（2018）では各地点の確認個体数の和は 115 羽、福田ら（2019）では各地点の最大個体数の和は 46 羽と報告されている。

存続を脅かす要因

ヨシ原は河川開発や湿地開発などによって全国的に減少している。また水田は、圃場整備や農業機械化のため休耕田は少なくなり、農薬汚染で餌動物の減少も危惧される。これらは本種の生息に、少なからず影響しているであろう。

要因の区分：	（過去）	河川開発，湿地開発，圃場整備，農薬汚染/化学物質汚染
	（現在）	河川開発，湿地開発，圃場整備，農薬汚染/化学物質汚染

特記事項

2022 年時点では、アメリカシマクイナ *Coturnicops noveboracensis* の亜種とする分類を採用している主要なチェックリストはなく、シマクイナ *Coturnicops exquisitus* として扱うのが普通である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シマクイナ	*Coturnicops exquisitus*	EN
第４次 2019：	シマクイナ	*Coturnicops exquisitus*	EN
第４次 2018：	シマクイナ	*Coturnicops exquisitus*	EN
第４次 2017：	シマクイナ	*Coturnicops exquisitus*	EN
第４次 2015：	シマクイナ	*Coturnicops noveboracensis exquisitus*	EN
第４次：	シマクイナ	*Coturnicops noveboracensis exquisitus*	EN
第３次：	シマクイナ	*Coturnicops noveboracensis exquisitus*	EN
第２次：	シマクイナ	*Coturnicops noveboracensis exquisitus*	VU
第１次：	シマクイナ	*Porzana exquisita*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠB 類(En)，【青森県】最重要希少野生生物(A ランク)，【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類，【宮城県】情報不足(DD)，【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク)，【千葉県】最重要保護生物(A)，【和歌山県】情報不足(DD)，【佐賀県】情報不足種，【熊本県】要注目種(AN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- Brazil, M., 1991. The Birds of Japan. Christphar Helm, London. 466pp.
- 福田篤徳・小田谷嘉弥・白川浩一・白川浩子・小澤重雄・今井光雄・深川正夫・梅垣佑介・山口恭弘，2019．茨城県におけるシマクイナの生息状況．Bird Research，15: A1-A14．
- 北沢宗大・吉岡俊朗，2021．九州北部におけるシマクイナの越冬を示唆する記録．Bird Research, 17: S13-S18.
- 松宮裕秋・沼野正博，2022．中部地方および近畿地方の太平洋岸地域におけるシマクイナの越冬状況．Bird Research，18: A87-A97．
- 宮彰男・三戸貞夫・蛯名純一・関下斉，2005．観察記録 仏沼干拓地で繁殖期に観察されたシマクイナについて．日本鳥学会誌，54: 104-107．
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．日本鳥学会，三田．438pp.
- 貞國利夫・高橋雅雄・宮彰男・磯貝和秀・古山隆・松岡和樹・先崎理之・北沢宗大・原田修，2018．北海道におけるシマクイナの夏季の生息状況．日本鳥学会 2018 年度大会講演要旨集．日本鳥学会 2018 年度大会実行委員会，新潟．
- Senzaki, M., M. Kitazawa, T. Sadakuni and M. Takahashi, 2020. Breeding evidence of the vulnerable Swinhoe's Rail (*Coturnicops exquisitus*) in Japan. Wilson Journal of Ornithology, 132(3): 711-717.
- 高橋雅雄・蛯名純一・宮彰男・磯貝和秀・古山隆・高田哲良・堀越雅晴・大江千尋・叶内拓哉，2018．関東地方におけるシマクイナ *Coturnicops exquisitus* の冬季の生息状況．日本鳥学会誌，67: 109-116．
- 高橋雅雄・宮彰男・古山隆・三戸貞夫・磯貝和秀，2024．中国・四国・九州地方におけるシマクイナの越冬状況．Bird Research，20: S13-S18．
- Taylor, B. and B. Perlo, 1998. Rails. Pica Press, East Sussex. 600pp.
- 山階鳥類研究所，1999．平成 10 年度鳥類標識調査報告書（1998），山階鳥類研究所，我孫子．206pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Coturnicops exquisitus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Coturnicops exquisitus* is listed as EN under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Wetland, Inlet, Reservoir/Pond
Threat types:	River development, Wetland development, Field preparation, Pesticide/Toxic chemical pollution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	小田谷嘉弥（執筆時所属：我孫子市鳥の博物館、現所属：千葉県立中央博物館）
Author:	Yoshiya Odaya

公表年月：2026 年 3 月

ツル目 Gruiformes　クイナ科 Rallidae　　日本固有

オオクイナ

***Rallina eurizonoides sepiaria* (Stejneger, 1887)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本種の主要な生息地の一つである石垣市において、森林面積に減少傾向が見られる。本種は地上性の種であり、今後、観光・経済活動の進展にともなう交通量の増大が見込まれるため、車との衝突件数も増えることが予測される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

大型のクイナで、八重山諸島に留鳥として生息するが、近年宮古島や沖縄島北部でも確認されている。シロハラクイナ（*Amaurornis phoenicurus chinensis*）の分布域拡大や、野生化したイヌやネコの影響が懸念される。

基礎情報

【形態】

全長は約 25 cm。雌雄同色。頭部から胸は赤褐色、背面は暗赤褐色。喉は白色。下面は黒色で白い横縞がある。嘴は黒色、脚は暗灰色で、虹彩は赤色。幼鳥は全体に赤みが少なく、下面の横縞はない。喉の白色が目立ち、虹彩は暗褐色。

【生活史】

繁殖期は 5～8 月で、地上または樹上に営巣する。一腹産卵数は 4～8 卵。ミミズ、昆虫類、貝類などの小動物のほか、草の根や種子も食べる。

【生息環境】

常緑広葉樹林や周辺の草原に生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

種の分布は、インド、スリランカからマレー半島、フィリピン、スンダ諸島、スラウェシ、台湾島等である。本亜種は、八重山諸島に留鳥として生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

従来八重山諸島（石垣島、西表島、小浜島、黒島、竹富島、与那国島）に生息していたが、近年宮古島でも繁殖が見られるようになった。また沖縄島北部でも確認されているが、まれであり、繁殖の可能性は低い。

【生息地の現況】

主要な生息地のひとつである石垣市においては、森林面積に減少傾向が見られる。

【個体数の現況】

個体数に関する最近の情報はない。西表島では、1980 年代末にはとくに北部と東部ではほとんど見られなくなっており、それ以前よりも減少したとされる。

存続を脅かす要因

分布域が島嶼に限定され、生息地面積が少なく、また生息環境の森林は減少傾向にある。西表島ではシロハラクイナの分布拡大と、本亜種の減少の時期が重なっていることから、餌や営巣環境の競合の可能性が指摘されている。また捕食者となりうる野生化したネコやイヌの存在や、イリオモテヤマネコによる捕食も確認されている。西表島では交通事故死も見られるが、その数はシロハラクイナに比べると 1/6 以下である（西表野生生物保護センター資料）。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通事故，捕食（外来種による），捕食（在来種による），競争/競合（在来種による）
	（現在）	森林伐採，交通事故，捕食（外来種による），捕食（在来種による），競争/競合（在来種による）

特記事項

種オオクイナは 6 亜種に分類されるが、日本に生息する本亜種はもっとも北に分布し、最大である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオクイナ	*Rallina eurizonoides sepiaria*	EN
第４次 2019：	オオクイナ	*Rallina eurizonoides sepiaria*	EN
第４次 2018：	オオクイナ	*Rallina eurizonoides sepiaria*	EN
第４次 2017：	オオクイナ	*Rallina eurizonoides sepiaria*	EN
第４次 2015：	オオクイナ	*Rallina eurizonoides sepiaria*	EN
第４次：	オオクイナ	*Rallina eurizonoides sepiaria*	EN
第３次：	オオクイナ	*Rallina eurizonoides sepiaria*	EN
第２次：	オオクイナ	*Rallina eurizonoides sepiaria*	VU
第１次：	オオクイナ	*Rallina eurizonoides sepiaria*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Brazil, M., 1991. The Birds of Japan. Christphar Helm, London. 466pp.
- 沖縄県・石垣市，2022．石垣市森林整備計画変更計画．p. 1
- 沖縄県・石垣市，2023．石垣市森林整備計画．p. 1
- 嵩原建二，1986．国頭郡本部町伊豆味で「オオクイナ成鳥 1」．野鳥，473: 35．
- Taylor, B. and B. Perlo, 1998. Rails. Pica Press, East Sussex. 600pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Rallina eurizonoides sepiaria has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rallina eurizonoides sepiaria* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

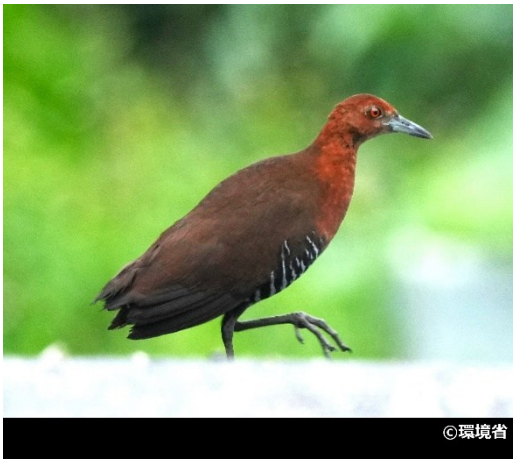
(ii) area of occupancy

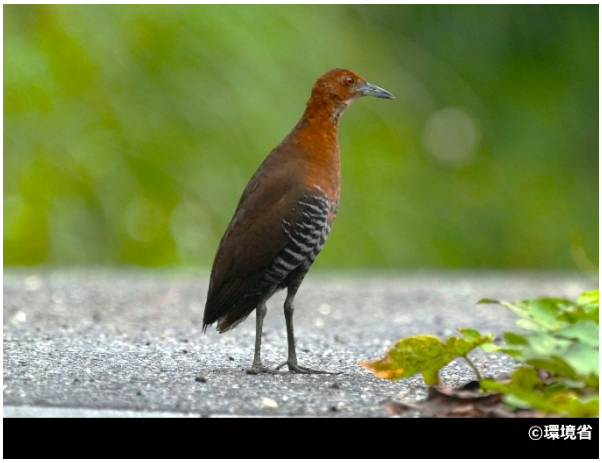
(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Vehicle collision, Predation (by alien species), Predation (by native species), Competition (with native species)
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	尾崎清明（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Kiyoaki Ozaki

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae

コシャクシギ

***Numenius minutus* Gould, 1841**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　A2

基準 A:　EN	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出し、2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で春期 2.38。

【近年の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出し、2000 年を基準値 1.00 とし、2017 年時点で春期 1.12。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

日本では春秋の渡りの時期に、海岸沿いの水田、背丈の低い草原、埋立地、畑などに飛来して、甲虫類、コオロギ類、アリ類、液果、種子などを食べる。春秋の渡りの移動中の休息場、採餌場は重要な役割を担っている。近年渡りの時期に利用できる沿岸部の水田や畑、草原等は減少傾向にあり、渡り途中のエネルギー補給に影響が出ていると思われる。

基礎情報

【形態】

全長 28～32 cm。全身バフ色で背は黒褐色。頭部は黒褐色の頭側線と過眼線がはっきりしている。チュウシャクシギ（*Numenius phaeopus*）の特に幼鳥は嘴も短く体型も似るが、本種のほうがより嘴が短く、嘴の湾曲具合はチュウシャクシギのほうが大きい。

【生活史】

日本では春秋の渡りの時期に通過し、比較的九州・沖縄地域でよく観察されるが、個体数は多くない。海岸沿いの水田、背丈の低い草原、埋立地、畑などで甲虫類、コオロギ類、アリ類、液果、種子などを食べる。

【生息環境】

日本では春秋の渡りの時期、全国の水田、背丈の低い草原、埋立地、畑などで記録がある。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】草地，田地・畑地，湿地・湿原
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

日本は春秋の渡りの時期に通過して行くのみであるが、全国で記録がある。繁殖地はロシア北部で、ニューギニアとオーストラリアで越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

全国で記録があるが、日本は春秋の渡りの時期に通過して行くのみであるため、分布域の変遷は不明である。

【生息地の現況】

本種は沿岸部に沿った水田や背丈の低い草原、埋立地などを利用しながら渡っていると思われるが、造成や宅地化等により、適した環境は減少傾向にある。

【個体数の現況】

現在、IUCN のレッドリストでは、低危険種とされ、世界的に絶滅の危機に瀕しているわけではない。2019 年にオーストラリアでは、短期的に減少傾向が見られるとの報告がある。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出し、2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で春期 2.38、2017 年時点で春期 1.12。増加傾向の後、直近の 10 年では、春期に減少傾向が見られた。

日本における観察数は例年 50 羽を超えることがなく、長期間滞在することも少ないため、減少傾向を把握しにくい種であることに注意が必要である。

存続を脅かす要因

日本は春秋の渡りの時期に通過するのみであるが、移動中の休息場、採餌場は種の存続にとって重要な役割を担っている。しかし、近年渡りの時期に利用できる沿岸部の水田や畑、草原等は減少傾向にあり、渡り途中のエネルギー補給に影響が出ていると思われる。

要因の区分：	（過去）	河川開発，湿地開発，圃場整備，草地開発
	（現在）	河川開発，湿地開発，圃場整備，草地開発

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	コシャクシギ	*Numenius minutus*	EN
第４次 2019：	コシャクシギ	*Numenius minutus*	EN
第４次 2018：	コシャクシギ	*Numenius minutus*	EN
第４次 2017：	コシャクシギ	*Numenius minutus*	EN
第４次 2015：	コシャクシギ	*Numenius minutus*	EN
第４次：	コシャクシギ	*Numenius minutus*	EN
第３次：	コシャクシギ	*Numenius minutus*	EN
第２次：	コシャクシギ	*Numenius minutus*	CR
第１次：	コシャクシギ	*Numenius minutus*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠB類(En),【山形県】評価対象外,【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(通過),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【山口県】絶滅危惧ⅠA類(CR),【徳島県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【長崎県】絶滅危惧ⅠA類(CR),【熊本県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【大分県】情報不足(DD),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類,【沖縄県】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: An example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservation, 143 (9): 2238-2247.
- Clemens, R., J. Driessen and G. Ehmke, 2019. 'Australian Bird Index Phase 2 Developing Waterbird Indices for National Reporting'. Report to the Department of the Environment and Energy, Canberra.
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本鳥類生態図鑑（水鳥編），304pp. 保育社，大阪．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- Van Gils, J., P. Wiersma and G. M. Kirwan, 2020. Little Curlew (*Numenius minutus*), version 1. 0. In Birds of the World (J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie, and E. de Juana, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA. https://doi.org/10.2173/bow.litcur.01
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp. wetlands. org on Mon Feb 202023.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Numenius minutus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Numenius minutus* is listed as EN under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥50% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Grassland, Farmland, Wetland
Threat types:	River development, Wetland development, Field preparation, Grassland development
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者: 守屋年史（バードリサーチ）

Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae

ツルシギ

***Tringa erythropus* (Pallas, 1764)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　A2				
基準 A:　EN	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―
A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 【比較年】 10 年（世代時間不明） 【過去の状況】 最大個体数指標を算出し、2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 2.73（春期 2.34、秋期 3.12）。 【近年の状況】 最大個体数指標を算出し、2000 年を基準値 1.00 とし、2017 年時点で、平均 0.92（春期 0.79、秋期 1.05）。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

嘴が細長く、脚が長い中型のシギ類。繁殖羽は全体的に黒色。非繁殖羽は腹部が白色、背面が灰褐色。下嘴が赤色。スカンジナビア半島北部からロシア極東北部の高緯度地域で繁殖する。国内では繁殖せず、全国的に渡り鳥として確認され、本州以南では一部越冬する。干潟や陸水域の減少などにより利用可能な生息地が減少している。

基礎情報

【形態】

全長約 30 cm。嘴が細長く、脚が長い中型のシギ類。繁殖羽では、嘴は黒く下嘴の基部は赤色。目には白いアイリングがある。頭部から腹部にかけて一様に黒色、背面も黒色地に白斑がある。脚は暗赤色。非繁殖羽は、眉斑があり、頭部、背面には灰褐色地に白色斑がある。頬から腹部にかけては白色。脚は赤色。幼鳥は非繁殖羽に似るが、全体的に黒色味が強い。頬は白色、喉から腹部にかけては、白色地に灰褐色の斑がある。飛翔時に上面の腰から背中にかけて白色が目立つ。雌雄同色。「ピュイ」と鳴く。アカアシシギ（*Tringa totanus*）は、やや小さく、より嘴・脚が太く、嘴の基部は上嘴も赤色。眉斑は後ろまで伸びない。飛翔時の次列風切羽が白い。

【生活史】

国内では繁殖せず、渡り鳥として春期、秋期に全国で観察されるが、個体数は春期のほうが多い。主に一夫一妻、または一妻多夫で繁殖を行う。5 月中旬～7 月下旬にツンドラ地帯の低木に隠れた草むらやコケ類の密生地に作られた巣に通常 4 個産卵する。メスは産卵後雛の孵化前に巣を去り、育雛はオスがほとんどを行う。非繁殖期には群れをつくる。水生昆虫、甲殻類、軟体動物、魚類、両生類などを餌として利用する。水深が浅いところではつつきながら採餌し、深いところでは首を振りながら採餌を行う傾向がある。

【生息環境】

干潟、湿原、河川や池沼などの水辺や水田、ハス田、休耕田に生息する。淡水または汽水の様々な湿地で生息しているが、塩水性の湿地はあまり好まない。

生息環境区分：	【陸域_平地部】田地・畑地，湿地・湿原，河川中流域，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，汽水域，潟・汽水湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

国外では、スカンジナビア半島北部からロシア極東北部の高緯度地域で繁殖し、地中海沿岸、アフリカ中央部から中近東、南アジア、東南アジアまでの主に沿岸地域で局地的に越冬する。国内では、全国的に渡り鳥として確認され、本州以南では一部越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現況でも全国的に確認されるが、湿原、水田、海岸などの水辺に限られるため、生息環境の消失は国内分布に影響を与えている可能性がある。

【生息地の現況】

干潟や湿原、水田、ハス田などの陸水域の減少、乾田化、放棄水田の草地化による環境変化などにより利用可能な生息地が減少している。主な生息環境である湿地は、明治・大正期から 1990 年代後半頃までの間に湿地面積の 61.1%に当たる 1,289.62 km²が消失してい

る（国土地理院 2000）。

【個体数の現況】

現在、IUCN のレッドリストでは低危険種（Least Concern）とされている。東アジアのフライウェイでは全体で約 25,000～10 万羽、そのうち約 20%が中国東部を通過すると推定される。

2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、ツルシギの春期の推定変化率は、-88.21%（30 年前比：有意）、 -72.52%（20 年前比：有意）、 -14.53%（10 年前比）、秋期の推定変化率は、 -23.29%（30 年前比）、 -6.41%（20 年前比）、118.90%（10 年前比）（Amano et al. 2010）であり、特に春期は著しい減少を示していた。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出し、2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 2.73（春期 2.34、秋期 3.12）、2017 年時点で、平均 0.92（春期 0.79、秋期 1.05）。2000 年から増加傾向の後、直近の 10 年（2007～2017 年）では、春期に減少傾向が見られている。

存続を脅かす要因

干潟・湿地の埋立てによる採餌場所、餌動物の減少。農耕地の乾田化、放棄水田の草地化、防鳥ネットによる事故死など農法や農業環境の変化による生息地の減少。越冬地での狩猟・捕獲による個体数減少も懸念されている。長距離の渡りを行う種に関しては、国内のみに減少の要因を求めることが困難な場合もあり、繁殖地、中継地、越冬地それぞれに脅威がある。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備

特記事項

日本に渡来するガンカモ類やシギ・チドリ類などの渡り性水鳥類が利用する主要な渡来地については、河川湖沼 84 ヶ所のうち 41.7%が保護区域未指定、干潟・湿地 152 ヶ所のうち 66.7%が保護区域未指定であり、干潟・湿地を利用する鳥が多数訪れる場所については保護地域としての指定が遅れている現状が指摘されている（三上ら 2012）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ツルシギ	*Tringa erythropus*	VU
第４次 2019：	ツルシギ	*Tringa erythropus*	VU
第４次 2018：	ツルシギ	*Tringa erythropus*	VU

第４次 2017：	ツルシギ	*Tringa erythropus*	VU
第４次 2015：	ツルシギ	*Tringa erythropus*	VU
第４次：	ツルシギ	*Tringa erythropus*	VU
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu)，【宮城県】準絶滅危惧(NT)，【秋田県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【茨城県】準絶滅危惧，【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク)，【千葉県】最重要保護生物(A)，【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【東京都（南多摩）】情報不足(DD)，【神奈川県】準絶滅危惧(非繁殖期)，【新潟県】準絶滅危惧(NT)，【富山県】情報不足(DD)，【石川県】準絶滅危惧(NT)，【福井県】県域準絶滅危惧，【静岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(通過)，【三重県】準絶滅危惧(NT)，【滋賀県】希少種，【京都府】絶滅危惧種，【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【兵庫県】B ランク，【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類，【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【高知県】準絶滅危惧(NT)，【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【佐賀県】準絶滅危惧種，【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: An example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservation, 143: 2238-2247.
- 天野一葉，2006．干潟を利用する渡り鳥の現状．地球環境，11 (2): 215-226.
- 国土地理院地理調査部環境地理課，2000．国土地理院の湖沼湿原調査:日本全国の湿地面積の変化.
- 三上かつら・高木憲太郎・神山和夫・守屋年史・植田睦之，2012．渡り性水鳥類の渡来地の保護区域指定の現状．日本鳥学会誌，61: 112-123.
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本野鳥生態図鑑〈水鳥編〉．保育社，大阪.
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.

- Sutherland, W. J., J. A. Alves T. Amano, C. H. Chang, N. C. Davidson, C. Max Finlayson, J. A. Gill, R. E. Gill P. M. Gonzalez, T. G. Gunnarsson, D. Kleijn, C. J. Spray, T. Székely and D. B. A. Thompson, 2012. A horizon scanning assessment of current and potential future threats to migratory shorebirds. Ibis, 154: 663-679.
- Van Gils, J., P. Wiersma, and G. M. Kirwan, 2020. Spotted Redshank (*Tringa erythropus*), version 1. 0. In Birds of the World (J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie, and E. de Juana, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA. https://doi.org/10.2173/bow.spored.01
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp.wetlands.org on Mon Feb 2020 23.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tringa erythropus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tringa erythropus* is listed as EN under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥50% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Wetland, Middle river basin, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Brackish water, Lagoon/Brackish lake
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Field preparation
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.


©三木敏史


©守屋年史（バードリサーチ）

執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　カモメ科 Laridae

オオセグロカモメ

***Larus schistisagus* Stejneger, 1884**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　A2

基準 A:　EN	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

モニタリングサイト 1000 調査の対象となっている大規模な営巣地および研究機関等により長期的な営巣数モニタリングが行われている営巣地合計 6 箇所のデータを集計した。利用可能な最新のデータから遡って約 10 年前（世代時間不明）の繁殖個体数はおよそ 5,600 と推定された。

営巣地および各地の調査時期：知床半島（2010 年）、大黒島（2012 年）、モユルリ島（2010 年）、ユルリ島（2010 年）、利尻島（2012 年）、天売島（2009 年）

【近年の状況】

上記の営巣地における利用可能な最新の繁殖個体数データを集計した。すべての営巣地において、1990 年代以降に繁殖個体数は急減しており、約 10 年前（世代時間不明）からの繁殖個体数減少率はそれぞれ 13～99%であり、6 箇所すべての営巣地を平均すると 67%であった。

営巣地および各地の調査時期：知床半島（2020 年）、大黒島（2021 年）、モユルリ島（2019 年）、ユルリ島（2019 年）、利尻島（2023 年）、天売島（2020 年）

評価分科会：　鳥類分科会

概要

かつては国内で普通に見られていた本種の、大規模な営巣地および長期的な営巣数モニタリングが行われている地点のほぼ全てにおいて、1990 年代以降に個体数の急減が生じており、2000 年代以降減少は加速している。これら主要な営巣地における 3 世代前からの繁殖個体数減少率は 65%以上と推定される。個体数減少原因とされる捕食者（ノネコ、ドブネズミ、キツネやオジロワシ）、餌資源（浮魚類）の減少、人為的撹乱は現在除去されていない、またはより深刻になっており、今後も継続的な個体数減少が予想される。

基礎情報

【形態】

大型のカモメ科で、全長 64 cm、翼長 44.2 cm、嘴峰長 56.0 mm、翼開長 1.35 m、体重 1265 g であり、オスの方がメスより大きく、体重はオス 1336 g メス 1123 g、嘴長はオス 58.4 mm メス 52.2 mm である。

【生活史】

雑食性。2～3 月に繁殖地に飛来し、4 月末から 5 月中旬に 2～3 卵を産み、25～30 日で孵化する。孵化してから 45 日以上で巣立つ。繁殖期にはイワシ類やイカナゴなどを自力で採餌するが、漁港で、又は漁船から投棄された底魚（ホッケ、メバル類、タラ類）、人間が投棄した大型魚類のアラ等もよく食べる。貝類やヒトデも食べるほか、人間の残飯も利用する。ウトウやウミネコなど他の種類の海鳥の卵やヒナも食べる。繁殖を終えると南下する個体が多い。

【生息環境】

ほとんどの個体が海岸から沿岸海上に周年生息する。人やキツネ等の捕食者が近づけない孤島、崖地、離岸防波堤、建物の屋上などで主に集団繁殖する。枯れ草など巣材を集めた巣を作る。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】田地・畑地，湿地・湿原，河川下流域，河口域，ため池・池沼，砂浜・礫浜，海崖・岩浜・岩礁（磯），汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖，陸封潮溜まり（アンキアライン池・洞窟） 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】海面，干潟 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域，（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

主たる繁殖分布域は、沿海州、オホーツク海、カムチャツカ半島、サハリン、千島列島、北海道、本州北部の沿岸域である。越冬期は繁殖地に留まる個体と南下する個体がおり、日本では北海道から関東地方で多数が、それ以南で少数が越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

主要な繁殖地（100 つがい以上が営巣した）としては、北海道では利尻島、礼文島トド島、天売島、知床半島、ユルリ・モユルリ島、大黒島、 網走港、紋別港、音標ゴメ島、浜中町霧多布周辺、釧路周辺、根室落石漁港、本州では青森県大間弁天島や陸奥弁天島がある。そのほか北海道沿岸や東北沿岸に繁殖地が散在するが、いずれも営巣規模は数巣～数十巣と多くはない。

【生息地の現況】

北海道における主要な営巣地の環境に大きな変化はない。近年、それまでに営巣が確認

されていなかった漁港の防波堤上や周辺の建物屋上などに営巣が見られるようになっている。

【個体数の現況】

北海道における主要な繁殖地の多くで、個体数が急減している。知床半島では 2000 年代に 1500 巣程度の繁殖があったが 2010 年代には半減し、2020 年には 325 巣にまで減少した。大黒島では 1997 年には 160 巣（調査区画内）の繁殖があったが 2000 年代に半減し、2021 年にはわずか 1 巣が確認されているのみである。モユルリ島では 1990 年代に最大 223 巣（調査区画内）が記録されたが 2000 年代以降激減し、2022 年にはわずか 22 巣になった。ユルリ島では 2007 年に 230 巣（調査区画内）を記録したが以降激減し、2022 年はわずか 9 巣になった。天売島では 1990 年代から 2000 年代にかけて 1000 巣程度の繁殖があったが、以降減少して 2010 年代には 150～500 巣程度に推移した。利尻島では 2000 年代に 300～550 程度の営巣があったが、2010 年代以降は 140～300 程度に減少した。釧路周辺では 1990 年代に 130 巣程度繁殖があったが 2016 年には 32 巣に減少した。一方、礼文島トド島では 2018 年に 428 巣、根室落石漁港で 2019 年に 279 巣、網走港では 2013 年に 493 巣、同年紋別港で 336 巣、霧多布周辺で 2010 年代に 330 巣程度の繁殖が確認されるなど、漁港などで比較的大規模な繁殖が新たに確認されている。

存続を脅かす要因

イエネコやドブネズミによる捕食と撹乱、カラスによる卵や雛の捕食、およびオジロワシによる捕食や撹乱が確認されている。オジロワシによる捕食の影響程度は不明であるが、本種の繁殖地にオジロワシが長時間滞在することで親鳥が営巣や繁殖を放棄した事例は確認されている。餌となりうるホッケやイワシ類、イカナゴ等の魚類、あるいは投棄魚の減少なども考えられる。地域によっては人間による巣や卵の採集や撤去がなされているほか、繁殖地への立ち入りによる営巣の妨害も生じている。

要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による），捕食（在来種による），その他（人間による巣や卵の撤去、営巣の妨害），不明
	（現在）	捕食（外来種による），捕食（在来種による），違法採集，その他（人間による巣や卵の撤去、営巣の妨害），不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオセグロカモメ	*Larus schistisagus*	NT
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—

第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt),【岩手県】留意,【愛知県】準絶滅危惧(NT)(越冬),【岡山県】準絶滅危惧,【長崎県】情報不足(DD),【熊本県】情報不足(DD),【大分県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 長谷部真，2015．北海道北西部の港におけるオオセグロカモメの人工物上での巣数．利尻研究，34: 33-35．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2015．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）海鳥調査 第 2 期とりまとめ 報告書．環境省，富士吉田．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2023．2022 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書．環境省，富士吉田．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，海鳥コロニーデータベース．http://www.sizenken.biodic.go.jp/seabirds/
- Olsen, K. M. and H. Larsson, 2004. Gulls of Europe, Asia and North America (Helm Identification Guides), pp. 349-362. Helm, London.
- 佐藤文男，2022．日本の海鳥の現状と保全の課題―環境省モニタリングサイト 1000 海鳥調査から―．山階鳥類学雑誌，54: 3-53．
- Senzaki, M., A. Terui, N. Tomita, F. Sato, Y. Fukuda, Y. Kataoka and Y. Watanuki, 2019. Long-term declines in common breeding seabirds in Japan. Bird Conservation International, doi:10.1017/S0959270919000352.
- 渡辺義昭，2020．北海道オホーツク海沿岸における 2013 年の海鳥営巣数と 2014 年から 2019 年までのオオセグロカモメの営巣数増加．利尻研究，39: 27-31．
- 矢萩樹，2016．釧路市の港におけるオオセグロカモメの営巣状況．釧路市立博物館紀要，36: 31-34．
- 矢萩樹・貞國利夫，2017．釧路海岸における海鳥の繁殖記録．釧路市立博物館紀要，37: 45-48．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Larus schistisagus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Larus schistisagus* is listed as EN under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥50% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Farmland, Wetland, Lower river basin, Estuary, Reservoir/Pond, Sandy beach/Pebble beach, Sea Cliff/Rocky beach/Reef, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake, Anchialine pool/Anchialine cave 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Sea surface, Intertidal mudflat 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by alien species), Predation (by native species), Illegal harvesting of biological resources, Other, Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	風間健太郎（早稲田大学）
Author:	Kentaro Kazama

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　カモメ科 Laridae

オオアジサシ

***Thalasseus bergii cristatus* (Stephens, 1826)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
西之島では、火山噴火の影響により過去の繁殖地が消失し、新たに繁殖を始めた場所では、噴気や高波の影響により繁殖成功率が極度に低下している可能性がある。火山の噴火は断続的に継続しており、今後も減少が予想される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

小笠原諸島西之島と尖閣諸島北小島で繁殖する。北小島では 1992 年には 370-380 つがいが記録されていた。最近の繁殖地の状況は不明だが、周辺での観察記録から安定して繁殖しているものと考えられる。西之島では 2004 年には 100-150 つがいが繁殖していたが、2013 年から始まった活発な火山活動により島が溶岩と火山灰に覆われ環境が大きく変化している。この島では噴火後も繁殖集団が確認されているものの、噴気の影響等により繁殖成功率が低下していると考えられる。火山活動は 2023 年 12 月の段階では終息しておらず、今後も繁殖集団が影響を受ける可能性がある。

基礎情報

【形態】

全長約 46 cm。雌雄同色。翼背上面から尾羽は灰色で下面は白色。頭頂から後頭は黒色で冠羽状となる。冬羽では額から前頭部が黒斑を伴う白色になる。尾羽は浅い燕尾型。嘴は黄色で脚は黒い。

【生活史】

繁殖地となっている尖閣諸島北小島では、4 月中下旬に渡来し、5 月上中旬に産卵、6 月上中旬に孵化し、8 月上旬以降に渡去を開始すると推定されている。小笠原諸島の西之島では、2013 年の噴火以前には同様の季節性を示していたが、2018 年には 6 月に放卵個体が、2019 年には 9 月にまだ飛べない雛が見つかっており、季節性は地域や年、環境により変動する可能性がある。八重山諸島では毎年 8、9 月に幼鳥を伴った成鳥が岩礁や砂州に飛来する。また、繁殖期後の 8 月ごろから本州の周辺にも飛来し、特に愛知県、三重県、兵庫県では数十から数百個体が観察されることがある。主に魚類、イカ、甲殻類などを採食する。

【生息環境】

島嶼で繁殖し、砂礫浜海岸やサンゴ礫海岸、あるいは海抜数十メートルの平坦な草地でも営巣する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】裸地，草地 【陸域_平地部 海岸部】草地，砂浜・礫浜 【海域（沿岸）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

本亜種は、インド洋と太平洋西部に広く分布する。日本では小笠原諸島と琉球列島に夏鳥として飛来し、小笠原諸島の西之島と尖閣諸島の北小島で繁殖する。過去には奄美群島徳之島のトンバラ岩と、大東諸島の南大東島、尖閣諸島の南小島でも繁殖していたが、近年の記録はない。徳之島では 1922 年に、南大東島では 1928 年に、南小島では 1907 年に繁殖の記録がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

小笠原諸島の西之島、琉球列島の徳之島トンバラ岩、南大東島、尖閣諸島の南小島、北小島で繁殖記録がある。このうち徳之島と南大東島、南小島では最近は繁殖が確認されていない。西之島では 1930 年に繁殖が報告され、その後に複数回の火山噴火の影響を受けながらも継続して繁殖が確認されている。北小島では 1953 年に生息が確認され、1979 年、1991 年に繁殖が確認された。また 2012 年の調査では周辺で幼鳥を含む群れが確認されている。この 2 島以外に最近の繁殖分布に関わる情報はない。

【生息地の現況】

西之島では 1973 年の火山活動により出現した砂礫の浜で営巣していたが、2013 年から始まった新たな噴火で島全体が溶岩と火山灰に覆われ、過去の繁殖地は消滅した。その後、2021 年には島の東部にできたガリー内で集団繁殖が確認されたが、おそらく活発な噴気活動の影響により巣のほとんどが放棄された。翌年は新たに形成された海浜において繁殖が確認された。西之島の噴火活動は 2025 年 5 月時点ではまだ終息したとは考えられておらず、繁殖地は今後も撹乱される可能性がある。また、営巣に利用している海浜は奥行きが狭いため、悪天候時には高波等の影響を受けやすい。北小島では、上部の平坦な草地でセグロアジサシのコロニーと隣接して営巣していたが、最近の状況は不明である。ただし、北小島では近年に大きな環境変化が生じている記録はない。

【個体数の現況】

尖閣諸島の北小島では、1979 年 6 月に 2 ヶ所にコロニーが形成され抱卵中の約 250 羽が観察されている。1991 年 5 月には約 370-380 つがいの営巣が観察されている。その後は営巣地に関する調査記録はないが、2012 年 9 月には北小島周辺の岩礁で幼鳥を含む集団が観察されていることから、繁殖は継続しているものと考えられる。この時には北小島および南小島の周辺の岩礁で休息する個体など、合計約 550 個体が観察されている。西之島では、2004 年に約 150 個体の雛と成鳥 200-300 個体が確認されている。2013 年からの断続的な噴火を経た後の 2021 年 7 月には 100 つがい以上の営巣が確認されたが、この年は巣のほとんどが噴気の影響で放棄された。これらのことから、北小島の集団はある程度安定して維持されている可能性があるが、西之島の集団は火山活動による直接的・間接的な影響により個体数が減少する可能性がある。愛知県では主に 6 月から 10 月に本種が観察されており、2002 年から西之島の噴火が始まるまでは毎年数十から 100 羽近くが認められていたが、噴火が始まった直後の 2014 年から 2015 年には多くとも 10 羽程度に減少した。ただしその後は噴火前と同程度の個体数が確認されるようになった。

存続を脅かす要因

尖閣諸島の北小島と南小島では、かつて卵の採取等が行われ存続を脅かす要因となっていたが、近年はこのような事象は生じていないと考えられる。このため、この集団については安定して維持されているものと考えられる。一方で西之島では 2013 年から始まった火山活動により過去の繁殖環境が消失した。その後はガリーの内部や海岸での営巣が確認されているが、これらの環境は噴気や濁流、高波の影響を受けやすい。このため年によっては繁殖成功率が非常に低いと考えられる。火山活動は断続的に続いており、今後も影響を受け続けるものと考えられる。

要因の区分：	（過去）	捕獲・狩猟/園芸採取，違法採集，分布・産地局限
	（現在）	自然災害，分布・産地局限

特記事項

西之島と尖閣諸島の集団は西部太平洋の北限域にある孤立した繁殖地となっている。愛知県では西之島で足環が装着されたと思われる個体が確認されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオアジサシ	*Sterna bergii cristata*	VU
第４次 2019：	オオアジサシ	*Sterna bergii cristata*	VU
第４次 2018：	オオアジサシ	*Sterna bergii cristata*	VU
第４次 2017：	オオアジサシ	*Sterna bergii cristata*	VU
第４次 2015：	オオアジサシ	*Thalasseus bergii cristatus*	VU
第４次：	オオアジサシ	*Thalasseus bergii cristatus*	VU
第３次：	オオアジサシ	*Thalasseus bergii cristatus*	VU
第２次：	オオアジサシ	*Thalasseus bergii cristatus*	VU
第１次：	オオアジサシ	*Sterna bergii cristata*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】準絶滅危惧(NT)，【愛知県】準絶滅危惧(NT)(通過)，【兵庫県】要注目種，【鹿児島県】情報不足，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 姉崎悟・嵩原建二・松井晋・高木昌興，2001．大東諸島産鳥類目録．沖縄県立博物館紀要，29: 25-54.
- Chiba, H., K. Kawakami, H. Suzuki and K. Horikoshi, 2007. The distribution of seabirds in the Bonin Islands, southern Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol., 39: 1-17.
- 池原貞夫・安部琢哉，1980．陸上動物調査（1）（主に陸上脊椎動物および大型土壌動物）．尖閣諸島調査報告書（学術調査編），pp. 1-45．沖縄開発庁.
- 川上和人・野口克也・森英章，2023．2021 年における西之島の陸上生物相．小笠原研究，49: 71-86.
- 川上和人・小山田佑輔，2020．2019 年における西之島の鳥類相．小笠原研究，46: 79-94.
- 川上和人・山本裕・堀越和夫，2005．小笠原諸島西之島の鳥類相．Strix，23: 159-166.
- 清棲幸保，1978．増補改訂版日本鳥類大図鑑 II．講談社.

- Kohno, H., N. Sakaguchi and H. Chiba, 1997. The breeding status of Crested terns in Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol., 29(2): 91-96.
- 沖縄県環境部自然保護課，2017．改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）-レッドデータおきなわ-．沖縄県環境部自然保護課.
- 高橋伸夫，2020．オオアジサシ．レッドデータブックあいち 2020，p. 157．愛知県.
- 高良鉄夫，1954．尖閣列島の動物相について．琉大農学部学術報告，1: 57-74.
- 高良鉄夫，1969．尖閣列島の海鳥について．琉大農学部学術報告，16: 1-13.
- 東京都，2012．東京都尖閣諸島現地調査 調査報告書．東京都.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Thalasseus bergii cristatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Thalasseus bergii cristatus* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Bare area, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Grassland, Sandy beach/Pebble beach 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　カモメ科 Laridae

コアジサシ

***Sternula albifrons sinensis* (Gmelin, 1789)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　A2

基準 A:　EN	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

全国鳥類繁殖分布調査（植田・植松 2021）において、1997-2002 年と 2016-2021 年にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録から、1997-2002 年に本種を確認した地点数は 59 であった。

【近年の状況】

全国鳥類繁殖分布調査（植田・植松 2021）において、1997-2002 年と 2016-2021 年にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録から、2016-2021 年に本種を確認した地点数は 15 であった。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

夏鳥として渡来する小型のアジサシ類。本州以南の海岸や河川敷に生息し、広い裸地で繁殖する。自然の河川敷や砂浜のほか、埋立地に一時的に造成された裸地を利用することが多い。繁殖地では、草地化による裸地の消失、卵や雛の捕食、造成工事やレジャーにより人為的攪乱を受ける事が多く、繁殖成功率は高くない。

基礎情報

【形態】

全長約 23 cm。体と翼の上面は淡灰色で、外側初列風切は暗灰色。額、腰、体下面、尾羽は白色。成鳥夏羽は頭頂～後頭部、目先にかけて黒色、嘴は黄色で先端に小さな黒色部がある。脚は橙黄色。冬羽は額～頭頂部まで白色、嘴と脚は黒色になる。アジサシ（*Sterna hirundo longipennis*）はより大型で、夏羽では額に白色部がなく、嘴と脚が黒色である。

【生活史】

日本には 4 月に渡来し、9 月頃まで見られる。河川や内湾、海岸に生息し、水中にダイビングして主に小型魚類を採食する。繁殖期は 5～8 月で、広い砂礫地に集団で繁殖する。地面を浅く掘った巣を造り、1～3 卵を産む。抱卵日数は約 20 日で、雛は親から給餌を受けて成長する。巣立ち後の 8 月頃には、東京湾岸に数千羽が集結することが知られる。

【生息環境】

主に内湾や沿岸域、河川（中・下流）などの水辺に生息する。砂浜海岸、埋立地、人工海浜、河川中洲等の裸地で繁殖する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】裸地，砂地・礫地，河川中流域，河川下流域，河口域，ワンド，農業用水路，小河川，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，砂浜・礫浜，汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】海面，藻場，アマモ場，サンゴ礁，干潟
国土地域区分：	（3）都市地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

種としてはユーラシア大陸からヨーロッパ、アフリカ、オーストラリアに広く分布する。本亜種はロシア南東部、中国、日本、東南アジア、フィリピン、ニューギニア、オーストラリアに分布する。国内では本州（秋田・宮城県以南、稀に青森県）、四国、九州、琉球列島に夏鳥として渡来し繁殖する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

春から夏にかけて全国で記録がある。太平洋側は宮城県、日本海側は秋田県以南の本州、四国、九州、琉球諸島で繁殖する。

【生息地の現況】

砂浜海岸、河川敷や中洲の砂礫地、埋立地の造成工事などで出現した裸地に営巣する。営巣地は全国的に減少傾向にある。東京湾や大阪湾、伊勢湾など内湾の造成地で大規模な営巣適地が出現する場合があるが、このような裸地環境が長期に渡り維持される事は稀である。千葉県千葉市の埋め立て地では、1990 年代に営巣地が平均 4.4 個所（2-7 個所）あったものが、2000 年代 3.8 個所（1-9 個所）、2010 年代 1.0 個所（0-2 個所）、2020 年代 0.75 個所（0-1 個所）に減少している。河川中洲や砂浜海岸でも環境改変や植生の変化等によ

り営巣地が消失する事がある。

【個体数の現況】

国内における繁殖個体数は 5,000～10,000 つがいとする推定もあるが、よくわかっていない。

存続を脅かす要因

埋立地では造成工事の進行、裸地の草地化により、繁殖に適した裸地が数年で失われることが多い。河川敷や中洲でも草地化の他、増水によりすべての卵や雛が流失することがある。捕食者としてカラス類（*Corvus* spp.）やチョウゲンボウ（*Falco tinnunculus*）、ノネコの影響が大きく、捕食により営巣地が全滅する事もある。また、人為的な影響としては、釣りやアウトドアレジャーなどを目的に営巣地に立ち入ったり、車両を乗り入れることで攪乱を受けるほか、巣内の卵が持ち去られた事例がある。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，土地造成，捕食（外来種による），捕食（在来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害，違法採集，基質・基物の減少及び消失，その他（レジャー等の人間活動）
	（現在）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，土地造成，捕食（外来種による），捕食（在来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害，違法採集，基質・基物の減少及び消失，その他（レジャー等の人間活動）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	コアジサシ	*Sterna albifrons sinensis*	VU
第４次 2019：	コアジサシ	*Sterna albifrons sinensis*	VU
第４次 2018：	コアジサシ	*Sterna albifrons sinensis*	VU
第４次 2017：	コアジサシ	*Sterna albifrons sinensis*	VU
第４次 2015：	コアジサシ	*Sterna albifrons sinensis*	VU
第４次：	コアジサシ	*Sterna albifrons sinensis*	VU
第３次：	コアジサシ	*Sterna albifrons sinensis*	VU
第２次：	コアジサシ	*Sterna albifrons sinensis*	VU
第１次：	コアジサシ	*Sterna albifrons sinensis*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【秋田県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【山形県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク),【群馬県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【埼玉県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部)】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（区部)】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（北多摩)】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩)】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（西多摩)】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【山梨県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長野県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【岐阜県】絶滅危惧Ⅱ類,【静岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁殖),絶滅危惧Ⅱ類(VU)(通過),【三重県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【滋賀県】絶滅危機増大種,【京都府】絶滅寸前種,【大阪府】絶滅危惧Ⅰ類(CR＋EN),【兵庫県】A ランク,【奈良県】絶滅危惧種,【和歌山県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【広島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種,【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【熊本県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【大分県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【宮崎県】絶滅危惧ⅠB 類(EN-g),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類,【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【福島県・石川県・京都府・鳥取県・福岡県・宮崎県】

参考文献

- 林宏・岡田徹，1992．わが国におけるコアジサシ *Sterna albifrons* の繁殖状況．Strix，11: 157-168.
- 環境省自然環境局，2012．平成 23 年度コアジサシ保全方策検討調査委託業務 報告書．環境省自然環境局，東京.
- 環境省自然環境局野生生物課，2014．コアジサシ繁殖地の保全・配慮指針．環境省自然環境局野生生物課，東京.
- 桑原和之・箕輪義隆・早川雅晴・木幡冬樹・嶋田哲郎，1997．湾岸都市千葉市の鳥類 3．コアジサシの生態、とくにその繁殖ステージについて．「湾岸都市の生態系と自然保護」収録，pp. 483-504．信山社サイテック，東京.
- 桑原和之・早川雅晴・石黒夏美・佐藤達夫・澤口晶子・笠井貞義・箕輪義隆・石毛久美子，2000．4-2．東京湾岸，とくに千葉市周辺におけるコアジサシの繁殖状況．「東京湾の鳥類-多摩川・三番瀬・小櫃川の鳥たち-」収録，pp. 470-526．たけしま出版，流山.

- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sternula albifrons sinensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sternula albifrons sinensis* is listed as EN under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥50% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Bare area, Sandy area/Gravelly area, Middle river basin, Lower river basin, Estuary, Inlet, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Sandy beach/Pebble beach, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Sea surface, Algae bed, Eelgrass bed, Coral reef, Intertidal mudflat
Threat types:	Lake development, River development, Coastal development, Land development, Predation (by alien species), Predation (by native species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters, Illegal harvesting of biological resources, Reduction or loss of substrate, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Fukushima・Ishikawa・Kyoto・Tottori・Fukuoka・Miyazaki】.





執筆者: 箕輪義隆（水鳥研究会）

Author: Yoshitaka Minowa

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　ウミスズメ科 Alcidae

ケイマフリ

***Cepphus carbo* Pallas, 1811**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　C2b				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　EN	基準 D:　－	基準 E:　－

C．個体群の成熟個体数が 2,500 未満であると推定される。

【推定根拠】

Senzaki et al.（2015）と環境省コロニーデータベースに掲載されている最新の個体数データに基づいて算出：トド島 7 羽、天売島 549 羽、松前小島 18 羽、恵山岬 11 羽、窓岩 22 羽（11 巣）、大黒島 3 羽、鯨浜 11 羽、涙岬 23 羽、琵琶瀬海岸 4 羽、霧多布島 6 羽、霧多布小島 7 羽、嶮暮帰島 3 羽、落石岬 5 羽、モユルリ島 74 羽、ユルリ島 134 羽、ハボマイモシリ島 200 羽、知床半島 164 羽、弁天島 99 羽。以上を合計すると 1340 羽。これらのコロニーでは 294 巣が確認されており、成熟個体数は少なくとも 588 羽を超える。

加えて、以下の 2. かつ b に該当する事由がある。

2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測される。

【判断理由】

本種の国内での生息個体数は 1980 年代以前に急激な減少を経験し、直近 10 年程度では個体数が増加している生息地もあるものの、国内での生息個体数は、長期的に見れば低水準で維持しており、今後も劇的に回復することを示す要因がないことから、低水準で推移すると推定される。

b) 成熟個体数の極度の変動が見られる。

【判断理由】

日本におけるケイマフリは、1980 年代以前に急激な個体数の減少を経験した。直近 10 年程度では個体数が増加している生息地があるものの、過去の水準には及ばない範囲で不安定に増減している。例えば、天売島では 1949 年に 7000 羽、1963 年に 3000 羽が生息していたとされるが、現在は 500～600 羽程度である。ユルリ・モユルリ島周辺では 1970 年代に約 600 羽だったが、1980 年代には 100 羽以下、1990 年代に 50 羽前後となり、1972 年から 1996 年までの年平均減少率は 14.4%と推定され、その後は増加し、現在は 200 羽程度が生息している。ハボマイモシリ島は 80～90 年代は 8～33 羽だったが 2010 年代は 100～250 羽で推移している。大黒島では 1951 年に 168 羽だったが、現在は数羽が生息するのみで繁殖は確認されていない。松前小島は 1973 年に 280 羽だったが現在は 20 羽程度である。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

ケイマフリは中型のウミスズメ科の海鳥で、日本海、オホーツク海を中心に分布し、太平洋沿岸では日本だけに繁殖地がある。繁殖期は 5～7 月上旬で、急な崖の岩の窪み、裂け目、岩と岩との隙間に営巣する。潜水して魚類や貝類を採食する。繁殖期以外に陸上に飛来することはなく、主な生息地は沿岸である。国内では北海道と本州北部に繁殖地があったが、本州の広い地域で繁殖地が消失した。2011～2014 年に行われた調査では、北海道と青森県の 18 カ所で合計 1169 羽、294 巣が確認された。

基礎情報

【形態】

全長 37 cm、体重は天売島で 680 g である。夏羽では全身黒色で、腹面はやや褐色を帯び、目の周りが白く、嘴基部に小さな白色斑がある。嘴は黒く、脚は赤い。非繁殖期では背面が黒褐色で、腹面は白く、胸と腹の側面に黒褐色の横斑がある。ウミバト（*Cepphus columba*）は、ケイマフリよりも一回り小さく、夏羽では黒色が強く、頭部に白色斑がない。また、翼上面に白色の斑が入る。

【生活史】

5～7 月上旬に急な崖の岩の窪み、裂け目、岩と岩との隙間に営巣する。卵の重さは 62.5～66.4 g を通常 2 卵の一腹卵数をもつ。まれに 1 卵のことがある。抱卵期間は 27 日で、雛は孵化後 43 日前後で巣立つ。餌は魚類および軟体動物が中心である。

【生息環境】

本種および本種が属するウミバト属は、沿岸を主な生息海域とする。陸上に飛来するのは繁殖期だけである。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】草地 【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

ロシア極東のオホーツク海沿岸、サハリン、朝鮮半島の東側、千島列島、北海道とその周辺、本州の東北地方沿岸に分布する。非繁殖期には、対馬海峡まで南下することがある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本国内での繁殖地またはその可能性のある場所は、1875～2010 年には 34 か所（繁殖地 28 か所と潜在的繁殖地 6 か所）であったが、2011～2014 年に行われた全国調査では新たに見つかった 4 カ所を含む 18 カ所（繁殖地 14 か所と潜在繁殖地 4 カ所）であり、2010 年までに少なくとも 19 か所の繁殖地またはその可能性のある場所が消失した。消失した生息地の多くは、分布の縁に位置する生息数が少なかった場所であった。2011～2014 年に確認された繁殖地あるいはその可能性がある場所は、北海道のトド島、天売島、松前小島、窓岩、恵山岬、大黒島、鯨浜、涙岬、琵琶瀬海岸、嶮暮帰島、霧多布小島、霧多布島、落石岬、ユルリ島、モユルリ島、ハボマイモシリ島、知床半島、青森県の尻屋弁天島である。1985 年に繁殖が確認されていた青森県アオベ岬ではその後調査が行われていない。

【生息地の現況】

天売島、松前小島、ユルリ島、モユルリ島、知床半島等の主要繁殖地は、天然記念物等への指定により陸上への立入りが制限されており、その他の繁殖地も無人島または立ち入

り困難な場所に位置している。一方で、海上活動に関わる法指定のない繁殖地では、釣りやカヌー、観光船等のアウトドアレジャーが活発化していくことにより、海上からの攪乱が懸念される。また、いくつかの繁殖地では、同所的に繁殖するウミウによる繁殖適地の占有、オジロワシによる捕食、在来のアカギツネの不定期な侵入、潜在的な捕食者である外来ネズミの侵入が確認されている。さらに、天売島に隣接する羽幌町沿岸では冬季に刺し網漁業による本種の混獲が確認されている。

【個体数の現況】

2011～2014 年には、北海道と青森県の 18 カ所で合計 1169 羽、294 巣が確認された。これらの 18 カ所のうち、12 カ所では、2011～2014 年とそれ以前とで生息数が減少した。例えば、天売島では 1949 年に 7000 羽だったのが、2014 年には 495 羽・165 巣だった。ユルリ・モユルリ島周辺では 1970 年代に約 600 羽だったが、1980 年代には 100 羽以下、1990 年代に 50 羽前後となり、1972 年から 1996 年までの年平均減少率は 14.4%と推定される。大黒島では 1951 年に 168 羽だったが、現在は数羽が生息するのみで繁殖は確認されていない。松前小島は 1973 年に 280 羽だったが、2011 年以降は最大 33 羽しか確認されていない。その後に行われた調査では、トド島や霧多布島では依然として繁殖が確認されない一方で、窓岩や涙岬では個体数が安定しており、いくつかの繁殖地では生息数が増加している。例えば、天売島では 2017 年には 682 羽、2019 年には 546 羽が確認されており、ハボマイモシリ島では 2019 年以降に約 200～250 羽が確認されている。

存続を脅かす要因

繁殖地の消失と生息数の減少に関する原因については不明である。漁網への羅網や繁殖地への人間の立入りによる影響がその原因としてあげられる。また、カモメ類による餌の略奪や雛の捕食や外来哺乳類による成鳥や雛の捕食もある。

要因の区分：	（過去）	捕食（在来種による），混獲・錯誤捕獲，その他（レジャー活動による攪乱）
	（現在）	捕食（在来種による），混獲・錯誤捕獲，その他（レジャー活動による攪乱）

特記事項

日本海、オホーツク海を主な生息地域とする種で、日本海・オホーツク海固有種とも言える。しかし、国際的に見ても生態学的研究はきわめて少なく、さらには繁殖特性や繁殖地の状況についての基本情報さえも乏しい。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ケイマフリ	*Cepphus carbo*	VU
第４次 2019：	ケイマフリ	*Cepphus carbo*	VU

第４次 2018：	ケイマフリ	*Cepphus carbo*	VU
第４次 2017：	ケイマフリ	*Cepphus carbo*	VU
第４次 2015：	ケイマフリ	*Cepphus carbo*	VU
第４次：	ケイマフリ	*Cepphus carbo*	VU
第３次：	ケイマフリ	*Cepphus carbo*	VU
第２次：	ケイマフリ	*Cepphus carbo*	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu)，【青森県】最重要希少野生生物(A ランク)，【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類，【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【山形県】情報不足(DD)，【茨城県】情報不足①注目種，【千葉県】最重要保護生物(A)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Gaston, A. J. and I. L. Jones, 1998. The auks. Oxford University Press, New York, New York.
- 北海道，1997．平成 8 年度北海道希少海鳥類保護増殖事業報告書．北海道環境生活部，札幌．128pp.
- 北海道環境科学研究センター，1995．ウミガラス等海鳥群集生息実態調査報告書 1992 - 1994 年．北海道環境科学研究センター，札幌．59pp.
- 環境省 自然環境局 生物多様性センター 海鳥コロニーデータベース
- 環境省北海道地方環境事務所，2012．平成 23 年度国指定天売鳥獣保護区におけるケイマフリ調査．pp. 1-7.
- 環境省釧路自然環境事務所，2012．平成 23 年度知床国立公園ウトロ海域における海鳥調査業務．pp. 28-36.
- 近藤憲久・樋口広芳・金井裕，1991．道東沿岸におけるエトピリカ *Lunda cirrhata* およびチシマウガラス *Phalacrocorax urile* の生息状況．平成 2 年度特殊鳥類等調査，pp. 1-12．日本野鳥の会，東京.
- 近藤憲久・金井裕・藤田剛，1991．ユルリ・モユルリ島におけるエトピリカ *Lunda cirrhata* およびチシマウガラス *Phalacrocorax urile* の生息状況．平成 2 年度特殊鳥類等調査，pp. 13-25．日本野鳥の会，東京.
- 近藤憲久，1995．ユルリ・モユルリ島と歯舞・色丹島における海鳥の生息状況．根室市博物館開設準備室紀要，(9): 49-59.

- Minami, H., K. Shiomi and H. Ogi, 1991. Morphological characteristics and functions of the Spectacled Guimmemot, *cepphus carbo*. Bulletin of the Faculty of Fisheries Hokkaido University, 42: 160-181.
- 岡奈理子・小城春雄，1996．ケイマフリ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（III），pp. 507-513．日本水産資源保護協会，東京．
- Senzaki, M., M. Hasebe, Y. Kataoka, Y. Fukuda, B. Nishizawa and Y. Watanuki, 2015. Status of the Spectacled Guillemot (*Cepphus carbo*) in Japan. Waterbirds, 38: 184-190.
- Senzaki, M., A. Terui, N. Tomita, F. Sato, Y. Fukuda, Y. Kataoka and Y. Watanuki, 2020. Long-term declines in common breeding seabirds in Japan. Bird Conservation International, 30: 434-446.
- 綿貫豊・近藤憲久・中川元，1988．天売島における海鳥の繁殖状況．日本鳥学会誌，37: 17-32．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cepphus carbo has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cepphus carbo* is listed as EN under criteria C2b.

C. Population size estimated to number fewer than 2,500 mature individuals and:

2. A continuing decline, observed, projected, or inferred, in numbers of mature individuals and:

b. Extreme fluctuations in number of mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by native species), Bycatch, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	先崎理之（北海道大学）
Author:	Masayuki Senzaki

公表年月：2026 年 3 月

ミズナギドリ目 Procellariiformes　アホウドリ科 Diomedeidae

コアホウドリ

***Phoebastria immutabilis* (Rothschild, 1893)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　EN	基準 E:　－
D．成熟個体数が 250 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 小笠原諸島聟島および聟島鳥島では 10～20 つがいが現在繁殖している。聟島および聟島鳥島において繁殖に参加していない若い個体や南鳥島で断続的に繁殖する個体を含めると、成熟個体数は、50 個体以上 250 個体未満と推定される。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

かつては北太平洋の中央部・西部の島嶼で広く繁殖していたが、乱獲などにより、1900 年前後に多くの繁殖地が消失した。現在は個体数の 99%以上がハワイ諸島で繁殖しており、その他にメキシコ西岸の島嶼や小笠原諸島聟島に繁殖地がある。海上での主な分布域は北緯 20～60 度の北太平洋、ベーリング海で、繁殖鳥はその中央部、非繁殖鳥はその西部に分布が比較的偏る。本種の最も大きな脅威は、海上における漁業活動中の混獲である。

基礎情報

【形態】

全長 79-81 cm、翼開長 195-203 cm、体重 2-3 kg。体色は、綿羽に覆われた雛の時期は暗褐色だが、正羽へ生え変わると、黒色の背中、翼上面、目のまわりと、ピンク色の嘴、脚を除いて全身白色となり、年齢による羽色の変化は無い。雌雄同色。

【生活史】

成鳥は 10 月下旬から繁殖地を訪れ始め、11 月に卵を 1 つだけ産む。抱卵期間は約 65 日間で、雛は 1 月中・下旬に孵化し、6 月下旬から 7 月にかけて巣立つ。繁殖地を離れた雛は海上のみでしばらく生活し、2～4 歳になると繁殖地を訪れるようになるが、多くは 8～9 歳から繁殖を始める。その後は、ほぼ毎年一度、同じ場所で同じ相手と繁殖を行う。

【生息環境】

1 年を通じて海上で生活し、繁殖活動のみ陸上で行う。海域としては、水深 2,000 m 以深の外洋域が比較的多く利用される。繁殖地は、大陸から遠く離れた島の裸地あるいは丈の低い草の生えた場所が選ばれる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】裸地，草地 【陸域_海岸部】裸地，草地 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

かつては、北太平洋の中央部および西部の島嶼で広く繁殖しており、南鳥島では 100 万羽が繁殖していたと推定されている。しかし、羽毛採取のための捕殺などにより、1900 年代前後に多くの繁殖地が消失した。その後、小笠原諸島聟島では 1970 年代から、米国ウェーク環礁では 1990 年代から再び繁殖が行われるようになったが、伊豆諸島鳥島、米国ジョンストン環礁では再繁殖は確認されていない。また、最近は、南東ハワイ諸島のニイハウ島、カウアイ島、オアフ島や、メキシコ西岸のグアダルーペ島、レビジャヒヘド諸島、アリホス岩でも新たに繁殖するようになった。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在、個体数の 99%以上がハワイ諸島で繁殖しており、その他にメキシコ西岸にあるグアダルーペ島・レビジャヒヘド諸島・アリホス岩、小笠原諸島聟島に繁殖地があり、南鳥島、米国ウェーク環礁でも断続的に繁殖する。海上における主な分布域は北緯 20-60 度に位置する北太平洋、ベーリング海で、繁殖鳥は同海域の中央部、非繁殖鳥は同海域の西部に分布が比較的偏る。

【生息地の現況】

古くから残る繁殖地は標高の低い隆起サンゴ礁の島に集中しており、波浪の影響を受け易かったが、近年はこのような影響を受けにくい高さの場所にも繁殖地が形成されるようになった。

【個体数の現況】

ハワイ諸島では 59 万つがい、メキシコ西岸では 500 つがい、小笠原諸島聟島および聟島鳥島では 10-20 つがいが現在繁殖しており、その数は安定している。個体群存続可能性分析の結果からも、世界的な状況を勘案すれば、種としての絶滅の危険性は低い。

存続を脅かす要因

最も大きな脅威は、海上における漁業活動中の混獲であり、流し網の操業が行われていた 1970-90 年代は年間で最大 3 万羽弱の死亡が推定されているが、この操業が中止された現在も、延縄などの漁業により年間 1 万羽弱の死亡が推定されている。一方、繁殖地における脅威として、標高の低い場所では地球温暖化にともなう海面上昇、南東ハワイ諸島やメキシコのグアダルーペ島ではイヌやネコなどの外来動物による捕食がある。

要因の区分：	（過去）	捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），自然災害，競争/競合（外来種による），交雑（在来種による），混獲・錯誤捕獲，気候変動
	（現在）	捕食（外来種による），自然災害，混獲・錯誤捕獲，気候変動

特記事項

日本国内の繁殖規模は、ハワイ諸島やメキシコ西岸と比べるとかなり小さく、遺伝構成は他の繁殖地と変わらない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	コアホウドリ	*Phoebastria immutabilis*	EN
第４次 2019：	コアホウドリ	*Phoebastria immutabilis*	EN
第４次 2018：	コアホウドリ	*Phoebastria immutabilis*	EN
第４次 2017：	コアホウドリ	*Phoebastria immutabilis*	EN
第４次 2015：	コアホウドリ	*Diomedea immutabilis*	EN
第４次：	コアホウドリ	*Diomedea immutabilis*	EN
第３次：	コアホウドリ	*Diomedea immutabilis*	EN
第２次：	コアホウドリ	*Diomedea immutabilis*	EN
第１次：	コアホウドリ	*Diomedea immutabilis*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類，【山形県】評価対象外，【福島県】情報不足(DD)，【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【東京都（小笠原諸島）】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Agreement on the Conservation of Albatrosses and Petrels (ACAP), 2010. The ACAP Species Assessments. Laysan Albatross, 22pp. Available from: https://www.acap.aq/acap-species/254-laysan-albatross/file
- Arata, J. A., P. R. Sievelt and M. B. Naughton, 2009. Status assessment of Laysana and Black-footed albatrosses, North Pacific Ocean, 1923-2005. U. S. Geological Survey Scientific Investigation Report 2009-5131, 80pp.
- 堀越和夫・鈴木創・千葉勇人，2015．聟島列島におけるコアホウドリ類の繁殖状況．小笠原研究年報，38: 51-64.
- 川上和人・鈴木啓容・原田幸典，2024．小笠原諸島南鳥島における海鳥相の変化．日本鳥学会誌，73: 195-206.
- 東京都小笠原支庁，2008．海鳥繁殖状況等調査報告書．東京.
- Young, L.C., 2010. Inferring colonization history and dispersal patterns of a long-lived seabird by combining genetic empirical data. Journal of Zoology, 281: 232-240.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Phoebastria immutabilis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Phoebastria immutabilis* is listed as EN under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Bare area, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Bare area, Grassland 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by alien species), Natural disasters, Bycatch, Climate change
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	富田直樹（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Naoki Tomita

公表年月：2026 年 3 月

ミズナギドリ目 Procellariiformes　ウミツバメ科 Hydrobatidae

コシジロウミツバメ

***Hydrobates leucorhous leucorhous* (Vieillot, 1818)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　A2				
基準 A:　EN	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

国内唯一の本種の大規模営巣地である北海道大黒島では、1982 年および 1997 年に 415,000 個体の営巣が記録されている。モニタリングサイト 1000 の調査によれば 2012 年に 443,237 巣の営巣（巣穴 550,605、利用率 80.5%）が、大門ら（2019）によれば 2014 年に 334,618 巣の営巣（巣穴 415,674、利用率 80.5%）が記録されている。

【近年の状況】

同営巣地では、モニタリングサイト 1000 の調査により 2018 年に 300,134 巣の営巣（巣穴 573,870、利用率 52.3%）が記録され、2021 年には 220,824 巣の営巣（巣穴 519,585、利用率 42.5%）が記録された。2012 年と 2021 年それぞれの巣穴利用率を加味した営巣数を比較すると、減少率は 50.2%となる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

中型のウミツバメ科鳥類で、繁殖地では夜行性である。国内唯一の大規模繁殖地である大黒島では 1970 年代に 200 万羽の生息があったとされる。当地においてその後個体数は減少している。2012 年の繁殖ペア数は 443,237（巣穴 550,605、利用率 80.5%）にまで減少し、2021 年にはさらに 220,824（巣穴 519,585、利用率 42.5%）に半減した。個体数減少の要因は不明であるが、繁殖地周辺の鳥類や哺乳類の捕食者及び陸上での人工灯による影響が指摘されている。

基礎情報

【形態】

中型のウミツバメ科鳥類で、全長 18-22 cm、 翼開長 45-48 cm、 体重 37-46 g。雌雄同色で、全身が黒褐色で、翼上面に淡色帯があり、上尾筒と下尾筒の側部が白く、尾の切れ込みが深い。上尾筒の白色部は V 字型で、中央部に黒い縦斑が入ることが多いが、明瞭でない個体も多い。幼鳥の巣立ち後は成鳥と同様の羽色になる。

【生活史】

大黒島では繁殖期は 4 月から 10 月。繁殖鳥は 4 月下旬に繁殖地を訪れ、6 月に 1 卵産卵し、雛は 7 月から 8 月に孵化する。抱卵日数は約 42 日。約 61 日の育雛期間を経て、雛は 9 月から 10 月に巣立つ。カモメ類など昼行性の捕食者を避けるために帰巣は夜間で繁殖地では夜行性となる。海面付近の魚類、オキアミ類、ヨコエビ類、イカ類を捕食する。

【生息環境】

離島で集団繁殖する。営巣地は植生のあるゆるやかな斜面に形成され、イネ科、タデ科、キク科植物が生育する場所に高密度で営巣する。繁殖期には繁殖地周辺の海域で採餌し、非繁殖期には北太平洋の外洋域を広く利用し、ベーリング海やカリフォルニア海流を利用する個体もいる。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	(5) 沿岸域, (6) 海洋域, (7) 島嶼地域

【分布域】

繁殖地は、北太平洋、北大西洋の温帯から寒帯域などの島嶼で、南アフリカでも少数が繁殖している。国内では、北海道の島嶼、および東北地方太平洋沿岸の島嶼で繁殖する。非繁殖期の採餌海域は、北部太平洋全域にわたる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在も北太平洋、北大西洋で繁殖している。北大西洋個体群では個体数の減少が報告されている。日本では主要な繁殖地が北海道大黒島に存在するほか、ハボマイモシリ島、ケンボッキ小島、厚岸小島、青森県尻屋弁天島、岩手県日出島、船越大島・三貫島でも繁殖が確認されている。

【生息地の現況】

現在確認されている繁殖地はすべて無人島である。国内最大の繁殖地である北海道厚岸町の大黒島は、天然記念物（天然保護区域）（文化庁）及び国指定鳥獣保護区（特別保護地区）（環境省）に指定されている。2021 年 3 月 30 日より厚岸霧多布昆布森国定公園に指定され、学術目的以外の島への立ち入りは制限されている。

【個体数の現況】

世界的に個体数は減少しており、IUCN は 2016 年に本種の評価カテゴリーを低懸念種から危急種に引き上げた。国内最大の繁殖地である大黒島では、1970 年代に 200 万羽の生息があったとされる。その後個体数は減少し、2006 年～2018 年に 55 万～70 万程度に推移し、2021 年には 52 万弱にまで減少した。巣穴利用率を加味した推定繁殖個体数は、2018 年には 30 万つがいであったが、2021 年には 22 万つがいに減少した。北海道ケンボッキ小島では 2000 年に約 2 万つがいの繁殖が確認されているほかは、各地の繁殖数は少数である。

存続を脅かす要因

大黒島における個体数減少の要因はよくわかっていないが、繁殖地周辺の鳥類や哺乳類の捕食者及び陸上での人工灯による影響が指摘されている。海上での影響についてはよくわかっていない。青森県尻屋弁天島には大型ネズミの生息が確認されている。

要因の区分：	（過去）	捕食（在来種による），不明
	（現在）	捕食（外来種による），捕食（在来種による），光害，不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【宮城県】要注目種,【東京都（伊豆諸島）】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Brooke, M., 2004. Albatrosses and petrels across the world. Oxford University Press.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2023．2022 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書．環境省，富士吉田．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，海鳥コロニーデータベース http://www.sizenken.biodic.go.jp/seabirds/
- Niizuma et al., 1998. Sexual Dimorphism in External Measurements of Adult Leach's Storm-Petrels Breeding at Daikoku Island. Journal of Yamashina Institute of Ornithology, 30: 36-39.
- Niizuma et al., 2001. Benefits of mass reduction for commuting flight with heavy food load in Leach's storm‐petrel, *Oceanodroma leucorhoa*. Ecological Research, 16: 197-203.
- Niizuma et al., 2008. Diet and Foraging Habitat of Leach's Storm-Petrels Breeding on Daikoku Island, Japan. Okada et al. (eds), Proc. International Symposium 'The Origin and Evolution of Natural Diversity', 153-159. Hokkaido Univ, Sapporo.
- 新妻靖章，1995．大黒島のコシジロウミツバメとオオセグロカモメの繁殖ペアー数について．釧路市立博物館紀要，19: 15-18．
- 大門純平・伊藤元裕・綿貫豊，2019．北海道大黒島における海鳥の現状．山階鳥学誌，51: 95-104．
- Pollet et al., 2014. Migratory movements and wintering areas of Leach's Storm‐Petrels tracked using geolocators. Journal of Field Ornithology, 85: 321-32.
- Pollet et al., 2014. Foraging movements of Leach's storm‐petrels *Oceanodroma leucorhoa* during incubation. Journal of Avian Biology, 45: 305-314.
- Polle t et al., 2019. Leach's Storm-Petrel (Oceanodroma*leucorhoa*), version 2.0. In The Birds of North America (P.G. Rodewald, Editor). Website: https://doi.org/10.2173/bna.lcspet.02, Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, New York.
- Pollet et al., 2021．Leach's Storm-Petrel (*Hydrobates leucorhous*), version 1. 1. In Birds of the World. Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- Pollet et al., 2023. Experts' opinions on threats to Leach's Storm-Petrels (*Hydrobates leucorhous*) across their global range. Avian Cnoservation & Ecology, 18:(1)11.
- 佐藤文男，2022．日本の海鳥の現状と保全の課題―環境省モニタリングサイト 1000 海鳥調査から―．山階鳥類学雑誌，54: 3-53．
- Takahashi et al., 1999. Regulation of food provisioning and parental body condition in Leach's storm‐petrels, *Oceanodroma leucorhoa*: Experimental manipulation of offspring food demand. Ecological Research, 14: 155-164.

- Taoka et al., 1989. Sexual dimorphism of chatter-calls and vocal sex recognition in Leach's Storm-Petrels (*Oceanodroma leucorhoa*). Auk, 106: 498-501.
- Watanuki, 1986. Moonlight avoidance behavior in Leach's Storm-Petrels as a defense against Slaty-backed Gulls. Auk, 103: 14-22.
- 綿貫豊，1985．大黒島におけるコシジロウミツバメの繁殖生態．山階鳥類研究所研究報告，17: 9-22.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hydrobates leucorhous leucorhous has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hydrobates leucorhous leucorhous* is listed as EN under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥50% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by alien species), Predation (by native species), Light pollution, Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.


©大島康平（筑波大学生物学学位プログラム）


©大島康平（筑波大学生物学学位プログラム）

執筆者:	庄子晶子（名古屋大学）・風間健太郎（早稲田大学）
Author:	Akiko Shoji and Kentaro Kazama

公表年月：2026 年 3 月

ミズナギドリ目 Procellariiformes　ウミツバメ科 Hydrobatidae

オーストンウミツバメ

***Hydrobates tristrami* (Salvin, 1896)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　A2 B2ab

基準 A:　EN	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。
【比較年】
10 年（世代時間不明）
【過去の状況】
本種の代表的な繁殖地である祇苗島におけるモニタリングサイト 1000 海鳥調査の 2014 年調査結果における平均巣穴数は 68,120。
【近年の状況】
本種の代表的な繁殖地である祇苗島におけるモニタリングサイト 1000 海鳥調査の 2023 年調査結果における平均巣穴数は 31,720。

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本種の代表的な繁殖地である祇苗島において、理由は不明であるものの、個体数の減少傾向がみられる。伊豆諸島鳥島は、2012 年の調査において成鳥・卵がクマネズミに食害されていることが確認されており、繁殖数が激減し、繁殖地消滅の危機にある。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

日本とハワイ諸島のみで繁殖する。伊豆諸島鳥島は 1930 年代には 10 万羽規模の繁殖地であったが、クマネズミの影響により現在は消滅の危機にある。代表的な繁殖地である祇苗島においては、理由は不明であるものの減少傾向がみられる。

基礎情報

【形態】

日本のウミツバメ科 7 種の中では大型で全長 240 mm、翼開長 560 mm。全身灰黒色で、初列風切基部と三列風切、大・中雨覆は淡褐色である。

【生活史】

繁殖地である伊豆諸島神津島のすぐ東にある祇苗島では、11 月に島に戻って巣を補修し、1 月上旬から中旬に 1 個の卵（長径 39.8 mm、短径 29.4 mm、重さ約 18 g）を産む。3 月に孵化し、ひなは両親に保育されて育ち、巣立ちは 5 月上旬から始まる。繁殖地では地中営巣し、夜間に帰島して夜明けに島を去る。昼間は、外洋で表層の小魚・甲殻類を採餌する。

【生息環境】

地面に穴を掘り営巣する。鳥島では固まった溶岩の隙間で営巣する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】裸地，草地 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

日本とハワイ諸島のみで繁殖する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

国内では伊豆諸島（祇苗島、八丈小島、鳥島）、小笠原諸島（北之島・聟島鳥島・巽島・鰹鳥島・小鰹鳥島･西之島）で繁殖する。

【生息地の現況】

伊豆諸島鳥島は 1930 年代には 10 万羽規模の繁殖地であった。その後クマネズミ等の影響により消滅したとされたが、2009 年に数百羽規模の繁殖地が再発見された。しかし、2012 年以降、成鳥・卵がクマネズミに食害されており、繁殖数が激減し、繁殖地消滅の危機にある。小笠原諸島の繁殖地はいずれも小規模である。このため、大型ネズミ類の侵入を受ければ短期間で消滅する危険が高く、継続的監視が重要である。

【個体数の現況】

国内の最大繁殖地とされる伊豆諸島祇苗島では、2008 年に 81,900 巣穴、2011 年に 94,900 巣穴、2014 年に 68,120 巣穴、2017 年に 49,660 巣穴、2020 年に 40,950 巣穴、2024 年に 31,720 巣穴と推定されており、徐々に減少傾向にある。しかし、減少の原因は不明である。

存続を脅かす要因

伊豆諸島鳥島では、クマネズミの食害により、本種の繁殖数が激減し、繁殖地消滅の危機にある。本種の代表的な繁殖地である祇苗島においても減少傾向が見られるものの、同島における減少理由は不明である。

要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による）
	（現在）	捕食（外来種による），不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オーストンウミツバメ	*Oceanodroma tristrami*	NT
第４次 2019：	オーストンウミツバメ	*Oceanodroma tristrami*	NT
第４次 2018：	オーストンウミツバメ	*Oceanodroma tristrami*	NT
第４次 2017：	オーストンウミツバメ	*Oceanodroma tristrami*	NT
第４次 2015：	オーストンウミツバメ	*Oceanodroma tristrami*	NT
第４次：	オーストンウミツバメ	*Oceanodroma tristrami*	NT
第３次：	オーストンウミツバメ	*Oceanodroma tristrami*	VU
第２次：	オーストンウミツバメ	*Oceanodroma tristrami*	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（伊豆諸島）】準絶滅危惧(NT)，【東京都（小笠原諸島）】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Chiba, Y. et al., 2007. The Distribution of seabirds in the Bonin Islands, southern Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol, 39: 1-17.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2021．モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査 2004-2018 年度とりまとめ報告書.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2024．2023 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書.

- 清棲幸保，1965．日本鳥類大図鑑．講談社，東京．
- McClelland et al., 2007. Breeding biology of Tristram's Strom-petrel *Oceanodroma Tristrami* at French Frigate Shoals and Laysan Island, Northwest Hawaiian Islands. Mar. Ornithol, 36: 175-181.
- Onley, D. and P. Scofield, 2007. Albatrosses, Petrels and Shearwater of the world(Princetion Field Guides). Princeton Univ Pr, UK.&EU.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hydrobates tristrami has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hydrobates tristrami* is listed as EN under criteria A2 B2ab.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥50% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Bare area, Grassland 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by alien species), Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	富田直樹（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Naoki Tomita

公表年月：2026 年 3 月

コウノトリ目 Ciconiiformes　コウノトリ科 Ciconiidae

コウノトリ

***Ciconia boyciana* Swinhoe, 1873**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　EN	基準 E:　－

D．成熟個体数が 250 未満であると推定される個体群である。

【推定根拠】

足環により個体識別されている生存個体を対象とする。

1）リリース個体のうち、その個体の野外生まれの子が 3 歳以上に到達したことがある個体。

2）野外生まれで 3 歳以上の個体。

1）と 2）の合計値を雌雄別々に計数し、雌雄の個体数の偏りを考慮して雌雄のうち少ない方の個体数を 2 倍した値を成熟個体数としたところ、126 羽であった。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

タンチョウ、アオサギと間違えられる大型の鳥である。日本の在来個体群は 1971 年に野生絶滅したが、現在でも大陸から少数個体が飛来・越冬している。2005 年から開始された再導入計画で、2023 年には日本の野外個体群は約 370 羽に増加している。世界的に絶滅のおそれのある本種の保全のためには、日本での存続可能な個体群の復活が鍵となり、そのためには、主な生息環境である里地・里山の自然環境の保全、再生、創出などが必要である。

協力者:　大迫義人（兵庫県立大学）

基礎情報

【形態】

全長約 110 cm、翼開長約 200 cm。体部は白色、風切り羽は白の混じる黒色、嘴は黒色、脚は朱色。長い嘴、頸と脚を持つ。近縁種のナベコウ（*Ciconia nigra*）は体部が黒褐色、近似種のタンチョウ（*Grus japonensis*）は脚が黒色、アオサギ（*Ardea cinerea*）は体部が灰色である。

【生活史】

雌雄とも多くは孵化後 4 年目で繁殖を始め、一夫一妻で繁殖し、造巣、抱卵、育雛を雌雄が共同で行う。卵は抱卵開始後 31～35 日で孵化し、雛は最初の孵化から 63～74 日間巣に留まる。大陸の繁殖地では、4 月中旬から下旬に産卵し、5 月下旬から 6 月上旬に孵化し、7 月下旬から 8 月上旬に巣立ちする。若鳥は集まって群れをつくり一緒に行動する。成鳥も含めて 9 月中旬から 10 月中旬に渡りを開始する。一方、越冬地では、10 月中旬から 12 月に飛来し、翌年の 3 月初旬まで滞在する。日本の在来個体群では、大陸の個体群よりも早く 2 月中旬に造巣を始め、3 月下旬から 4 月上旬に産卵し、4 月下旬から 5 月上旬に孵化し、6 月下旬から 7 月上旬に巣立ちしていた。また、はっきりした渡りは確認されていないが、冬季には個体数が少なくなる傾向があった。

【生息環境】

餌となる魚類、両生類、甲殻類などが生息し、営巣地となる立木のある湿地を主な生息環境とする。大陸では、湿原、池沼、河川などに生息し、日本では、里山に囲まれた水田・河川のある里地に生息していた。2005 年に再導入されて以降も水田・河川のある里地を主な生息環境としている。

生息環境区分：	【陸域_平地部】森林，田地・畑地，湿地・湿原，河川下流域
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

ロシアの極東南部と中国の東北部で繁殖し、中国の主に揚子江の中流域や韓国、台湾、日本などで越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

大陸では、2000 年ごろから中国の越冬地での繁殖が確認されるようになっている。日本では、ソビエト連邦（現ロシア）から導入された野生個体や中国の動物園から導入された個体などを始祖とする飼育個体群が形成された。この飼育個体群を用いて、2005 年から兵庫県で再導入が実施され、2015 年からは福井県や千葉県野田市でも行われた。2006 年に繁殖を始めた野外個体群は、2023 年には 12 府県で繁殖している。また、2017 年までに全ての都道府県で飛来が確認された。ごく少数ではあるが、日本に飛来する大陸産野生個体の中には、周年滞在するものも出現し、2009 年には、再導入個体と繁殖を始めた。

【生息地の現況】

大陸では、伐採・野火などによる営巣木の減少、干拓・排水・ダム建設・過大漁獲などによる餌生物の減少、農薬・原油・重金属などによる環境の汚染、道路建設、電線の設置、農業・漁業などの人間活動による攪乱などによって、本種の生息環境は減少・悪化している。日本では、湿原、湖沼、ため池などの干拓、排水や河川の護岸、直線化などによって水辺環境が減少・悪化し、また、谷津田や薪炭林の放棄などによって、本種の生息環境であった里地・里山が荒廃している。さらに、重要な採餌環境であった水田においても、圃場整備による乾田化、排水路との落差、水路のコンクリート三面張りや農薬の使用などによって、餌となる水生動物が絶滅・減少している。

【個体数の現況】

世界の個体数は約 3,000 羽と言われ、生息環境の減少・悪化や密猟などによって、減少傾向にあると推定された。その後新たに実施されたセンサスでは、10,300 羽とされている。兵庫県立コウノトリの郷公園によると、2023 年には国内の 12 府県で繁殖し約 370 羽に達している。

存続を脅かす要因

日本には、もともと在来の個体群が存在していたが、明治時代に、狩猟による乱獲で各地のコウノトリは次々と姿を消し、兵庫県の但馬地域と福井県の若狭地域にその分布は限られてしまった。その但馬地域では、非狩猟鳥や天然記念物に指定されて、一時、その個体数は回復したものの、生息環境の消失や悪化などにより再び減少し、それに伴う近親婚の増加と有機水銀を含む農薬の体内蓄積などによって、1971 年に、日本産コウノトリは野生下で絶滅した。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，近交弱勢，その他（乱獲、河川改修、農薬の使用、圃場整備）
	（現在）	森林伐採，湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，近交弱勢

特記事項

まず、主な生息環境である里地・里山の自然環境の保全、再生、創出などに取り組むことが望まれる。また、ロシア極東地方と中国東北部に主な繁殖地があり、そこから離れた朝鮮半島、日本列島でもかつて繁殖地が存在していたことと、現在、中国中南部の越冬地でも繁殖を始めるという習性から、本種は「局所個体群」が集まった「メタ個体群」という空間的・遺伝的構造をもつことで種を維持していたと考えられる。野生個体群の絶滅を防ぐためには、かつての繁殖個体群の復活、個体群の保全や個体の追加、生息適地への新たな個体群の創設などの取組みが重要になってくる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	コウノトリ	*Ciconia boyciana*	CR
第４次 2019:	コウノトリ	*Ciconia boyciana*	CR
第４次 2018:	コウノトリ	*Ciconia boyciana*	CR
第４次 2017:	コウノトリ	*Ciconia boyciana*	CR
第４次 2015:	コウノトリ	*Ciconia boyciana*	CR
第４次:	コウノトリ	*Ciconia boyciana*	CR
第３次:	コウノトリ	*Ciconia boyciana*	CR
第２次:	コウノトリ	*Ciconia boyciana*	CR
第１次:	コウノトリ	*Ciconia ciconia boyciana*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠA類(Cr)，【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類，【山形県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【埼玉県】絶滅(EX)(繁)，【千葉県】消息不明・絶滅生物(X)，【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類，【愛知県】準絶滅危惧(NT)(越冬)，【滋賀県】要注目種，【京都府】絶滅危惧種，【兵庫県】Aランク，【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【島根県】情報不足(DD)，【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類，【山口県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【愛媛県】情報不足(DD)，【高知県】注目種，【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【熊本県】要注目種(AN)，【大分県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【沖縄県】絶滅危惧ⅠA類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，国指定特別天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- BirdLife International, 2012. *Ciconia boyciana*. In: IUCN 2012．IUCN Red List of Threatened Species. Version 2012.2. <www.iucnredlist.org>
- Ezaki, Y. and Y. Ohsako, 2012. Breeding biology of the Oriental White Stork reintroduced in Central Japan-Effects of artificial feeding and nest-tower arrangement upon breeding season and nesting success. Reintroduction, 2: 43-50.
- 藤巻裕蔵，コウノトリ．環境省自然環境局野生生物課（編）改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 －レッドデータブック－ 2 鳥類，自然環境研究センター，東京.
- 池田啓，2000．コウノトリの野生復帰をめざして．科学，70: 569-578.
- Ji W-T, Wu J-D, 2004. The nests and nestlings of Oriental White Storks were found at Poyang Lake. China Crane News, 8(1): 24-25.
- コウノトリ野生復帰推進協議会（編），2003．コウノトリ野生復帰推進計画，兵庫県，神戸.

- 大迫義人，2010．3.7 コウノトリ目 コウノトリ．野生生物保護学会（編），野生動物保護の事典．朝倉書店，東京．
- 大迫義人・三橋陽子，2011．日本における野生コウノトリの飛来・滞在記録（2005～2009 年）．日本ツル・コウノトリネットワーク彙報 たづ，5: 1-4．
- リトビネンコ NM（編），2002．ロシアのコウノトリ．姫路工業大学自然・環境科学研究所／兵庫県立コウノトリの郷公園，豊岡．
- 阪本勝，1966．コウノトリ．神戸新聞社出版部，神戸．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ciconia boyciana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ciconia boyciana* is listed as EN under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Wetland, Lower river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Lake development, River development, Wetland development, Field preparation, Pesticide/Toxic chemical pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Inbreeding depression
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Nationally Designated Special Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	内藤和明（兵庫県立大学）
Author:	Kazuaki Naito

公表年月：2026 年 3 月

カツオドリ目 Suliformes　ウ科 Phalacrocoracidae

ヒメウ

***Urile pelagicus pelagicus* (Pallas, 1811)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　EN	基準 E:　－
D．成熟個体数が 250 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 繁殖期における成鳥個体数は各地で増加傾向にあるが、最新の確実な繁殖の記録は北海道天売島における 99 巣（2022 年時点）である。その他の繁殖地については、現況は不明である。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

チシマウガラスより一回り小さく、成鳥夏羽では身体全体が金属光沢のあるやや緑がかった黒色であるが、嘴は細く、生殖羽では頭部と後頭部の 2 ヶ所に冠羽がある。目の周辺部の裸出部は赤くなる。北太平洋の寒冷な沿岸を中心に分布し、北海道天売島などで繁殖する。2011 年には天売島で 49 つがいが確認されているが、その他の繁殖地の個体数は多くない。非繁殖期には日本各地の沿岸にふつうに見られる。

基礎情報

【形態】

全長 63～76 cm、体重 1,474～2,438 g でオスはメスに比べてやや大きい。大きさはウミウやチシマウガラスよりも小さい。成鳥夏羽では身体全体が金属光沢のあるやや緑がかった黒色であるが、頭部と上面に緑色光沢、頸に紫色光沢がある。目の周辺の裸出部は赤くなる。嘴は細く、生殖羽では頭部と後頭部の 2 ヶ所に冠羽がある。チシマウガラスも顔部分が赤色であるが、上嘴基部は露出している。チシマウガラスは大型で、嘴と頸が太い。成鳥冬羽は顔の赤色部分がなくなり、全身が金属光沢を帯びた黒色である。

【生活史】

離島や海岸の断崖で集団繁殖する。5 月初旬から離島や海岸の断崖の岩棚や平坦な岩上に 1～5 個の卵を産む。雌雄交替で約 31 日間抱卵する。雛は孵化後 3～4 週間で巣立つ。繁殖期には営巣地周辺の沿岸で魚類を食べる。

【生息環境】

離島や海岸の断崖で集団繁殖するが、沿岸で採食する。繁殖を終えると、繁殖地である陸地から離れ、沿岸や外洋に生息する。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】河口域，海崖・岩浜・岩礁（磯），汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_表層】海面，岩礁（磯） 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（5）沿岸域，（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

種としては、北太平洋の寒冷な沿岸を中心に、アメリカ・アラスカ州沿岸域からロシア極東のオホーツク海沿岸、サハリン、千島列島、北海道の周辺、本州の東北地方沿岸に分布する。非繁殖期には日本各地の沿岸に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

繁殖地は北海道を中心とするモユルリ島や天売島などの 5 ヶ所以下である。確実な繁殖の記録として、2022 年には天売島で 99 巣が確認されている。その他の繁殖地については、現況は不明である。

【生息地の現況】

現在の繁殖地は無人島あるいは孤立岩にあり、通常、人の接近はない場所である。

【個体数の現況】

近年個体数は増加傾向にある。天売島での繁殖数は、1980 年代には 9～14 つがい、1990 年代には 8～26 つがい、2000 年代には 8～49 つがい、2011 年では 49 つがい、2016 年では 44 つがいであったが、2022 年には 99 つがいが記録されている。モユルリ島では、繁殖数

は 1960 年代には数羽とされていた。2010 年には繁殖期に成鳥 11 羽が確認された。2022 年には、営巣は確認されなかったが、繁殖期に陸上及び海上において成鳥計 204 羽が確認された。ユルリ島では、2010 年には繁殖期に 57 羽の成鳥が確認されている。2022 年には、営巣は確認されなかったが、繁殖期に陸上及び海上において成鳥計 117 羽が確認された。その他の地域では、2019 年に北海道古宇郡神恵内村で 1 つがいの繁殖が確認されているが、各地域の生息状況はよくわかっていない。また、非繁殖期には日本周辺の沿岸で普通に見られる。

存続を脅かす要因

近年個体数は増加傾向にある。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

北海道の沿岸の繁殖地は、本亜種の繁殖分布域の中では太平洋西岸での南限にあたる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヒメウ	*Phalacrocorax pelagicus pelagicus*	EN
第４次 2019：	ヒメウ	*Phalacrocorax pelagicus pelagicus*	EN
第４次 2018：	ヒメウ	*Phalacrocorax pelagicus pelagicus*	EN
第４次 2017：	ヒメウ	*Phalacrocorax pelagicus pelagicus*	EN
第４次 2015：	ヒメウ	*Phalacrocorax pelagicus pelagicus*	EN
第４次：	ヒメウ	*Phalacrocorax pelagicus pelagicus*	EN
第３次：	ヒメウ	*Phalacrocorax pelagicus pelagicus*	EN
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠB 類(En),【青森県】要調査野生生物(D ランク),【岩手県】準絶滅危惧,【山形県】準絶滅危惧(NT),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【千葉県】重要保護生物(B),【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【神奈川県】準絶滅危惧(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【福井県】要注目,【愛知県】準絶滅危惧(NT)(越冬),【三重県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【京都府】準絶滅危惧種,【兵庫県】B ランク,【鳥取県】情報不足(DD),【山口県】準絶滅危惧(NT),【徳島県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【長崎県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【熊本県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),

【大分県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Hasegawa, H., 1984. Status and conservation of seabirds in Japan, with special attention to the Short-tailed albatross. pp. 487-500. ICBP Technical Publication, Cambridge.
- 環境省北海道地方環境事務所，2012．（3）ウミウ・ヒメウ・オオセグロカモメ・ウミネコ・ウトウ．平成 23 年度ウミガラス保護増殖事業報告，pp. 23-24．環境省，富士吉田．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，海鳥コロニーデータベース．(https://www.sizenken.biodic.go.jp/seabirds/)
- 環境省自然環境局生物多様性センター， 2021．モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査 2004-2018 年度とりまとめ報告書．pp. 196-199．環境省，富士吉田．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2023．2022 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書．pp. 128-129．環境省，富士吉田．
- Osa, Y. and Y. Watanuki, 2002. Status of seabirds breeding in Hokkaido. J. Yamashina Inst. Ornithol, 33: 107-141.
- Senzaki, M., A. Terui, N. Tomita, F. Sato, Y. Fukuda, Y. Kataoka and Y. Watanuki, 2019. Long-term declines in common breeding seabirds in Japan. Bird Conservation International, doi:10.1017/S0959270919000352.
- 綿貫豊・近藤憲久・中川元，1988．北海道周辺における海鳥繁殖地の現状．日本鳥学会誌，37: 17-32．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Urile pelagicus pelagicus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Urile pelagicus pelagicus* is listed as EN under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Estuary, Sea Cliff/Rocky beach/Reef, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface, Reef 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Unknown

Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	風間健太郎（早稲田大学）
Author:	Kentaro Kazama

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　トキ科 Threskiornithidae

トキ

***Nipponia nippon* (Temminck, 1835)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab+2ab C2a(ii)				
基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　EN	基準 D:　―	基準 E:　―

B1+2．出現範囲が 5000 km²未満かつ生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

トキの野生復帰事業により、2008 年以降、毎年 30 羽強が放鳥され、保全活動によって個体数は増加している。しかし、トキの主要な生息環境である水田作付面積は 6000 ha（2008 年）から 5000 ha（2020 年）以下に減少し、今後も佐渡市の人口減少・高齢化により中山間地の水田が耕作放棄されていくことが予想されている。これに伴って、トキの餌生物を増やす取り組みであるトキ認証米制度の作付水田も、2012 年の 1367 ha から 2020 年には 1044 ha へと減少を続けている。これによりトキの餌場環境は今後、継続的に劣化し環境収容力が減少すると予想され、対策の無い状況では将来の個体数減少が予期される。

C．個体群の成熟個体数が 2,500 未満であると推定される。

【推定根拠】

2024 年 12 月末時点で、成熟個体数は 336 羽と推定されている。

加えて、以下の 2. かつ a (ii) に該当する事由がある。

2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測される。

【判断理由】

環境省のトキ野生復帰事業による継続的な放鳥により、再導入個体群は順調に増加してきているが、繁殖成績は 2017 年をピークとして低下し続けており、将来的に個体群の増加が減少に転じると予測される。

a) 個体群構造が次に該当

ii) 1 つの下位個体群中に 95%以上の成熟個体が属している

【判断理由】

現在、本州への分散個体は記録されているが、佐渡島以外に繁殖個体群は存在しない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

かつては、ロシアのウスリー地方から中国南部、朝鮮半島、日本、台湾にかけて分布していた。江戸時代には日本国内でも全国に分布していたと考えられる。しかし、明治維新後の銃猟解禁により明治から大正にかけて激減し絶滅が心配され、昭和初期に能登半島、佐渡島、隠岐の島の 3 地域で個体群が存続するのみになり、1940 年には 100 羽程度が生息するだけであった。その後、トキの生息個体数は徐々に減少し佐渡島以外の個体群は絶滅した。1981 年に佐渡島に生き残っていた最後の 5 羽のトキを捕獲し、野生絶滅に至った。1999 年に中国から贈呈された 2 羽のトキとその後に来日した 5 羽をファウンダーとする飼育下繁殖が順調に進み、佐渡島で 2008 年から再導入が実施された。2012 年に最初に野外で生まれた個体が 2014 年に成熟年齢に達し、成熟個体が出現して 5 年を経過した 2019 年に野生絶滅の状態を脱したと評価された。2024 年 9 月までに延べ 521 個体が放鳥され、現在、佐渡の野生下には、放鳥個体 133 羽、野外生まれ個体 443 羽の計 576 個体が生息すると推定されている（2024 年 12 月末）。野生下の成熟個体数は、2014 年に 13 羽であったが、2022 年に推定数が 250 羽を越え、2024 年末には 336 羽と推定されている。

基礎情報

【形態】

全長 70-80 cm。オスはメスより大きいが、顕著な性的二型はない。嘴は黒色で長く下に湾曲し先端が赤い。顔には羽毛がなく、朱色の皮膚が露出し、幼鳥は赤味が少ない。脚は頭部より薄い朱色。非繁殖期の羽色は、薄いピンク色がかった白色。繁殖羽への羽色変化は換羽ではなく頭頸部の皮膚から剥離される黒色の脂質を水浴後の羽毛にこすりつけることにより着色し、首から背中にかけて雌雄とも濃い黒灰色になる。この羽色変化を化粧色という。抱卵が始まるとこすり付け行動をしなくなり、背中の灰色は薄くなっていく。換羽期には換羽が終わった羽が白くなるので斑状になっていき、換羽が終わる 9 月には鴇色が戻ってくる。繁殖羽に替わるのは 2 歳以上の個体で、1 年目の若鳥は繁殖期も白いままの個体が多い。

【生活史】

水田地帯に生息し、ドジョウ、カエル、貝類、ミミズ、節足動物等を食べる。一夫一妻で繁殖する。繁殖羽になる 2～3 月に求愛が始まり、3～5 月にかけて里山の樹上で造巣を開始する。つがい関係が固定するまで数年を要し、その間はつがい相手を頻繁に交代する。隔日で 2～5 個（中央値 3 個）を産卵し、卵は 28 日間の抱卵で孵化する。雌雄交代で 30～35 日間抱卵し、すべての雛が孵化するまで 1 週間程度を要する（非同時孵化）。巣内育雛期間は 35～40 日。巣立ち後、2～4 週間は親鳥から給餌される。成熟年齢は 2 歳。1 回繁殖。繁殖期はじめに繁殖失敗した場合は再営巣する。繁殖が終わると換羽が始まり、ねぐらで群れるようになる。繁殖期はペアもしくは単独行動をするが、非繁殖期には群れで行動する。飼育下の最長寿命は 35 歳を越えるが、野外での寿命は 19 歳以下である。

【生息環境】

繁殖期には、営巣林と水田を往復する。里山や屋敷林の高木（15～35 m）に営巣し、水田や畦、水田の近くの草地、水路で採餌をする。かつて佐渡島では、山間部の棚田や谷間の渓流でも採餌を行っていたといわれる。中国の洋県でも、再発見当時は山間部の谷戸地形の景観の水田で採餌をしていたが、個体数が増加するにつれて低地の人家周辺の高い庭木に営巣することもある。

生息環境区分：	【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，湿地・湿原
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

過去の文献から、江戸時代末期には、日本海側では島根県から北海道まで、太平洋側は愛知県以北に分布していたと考えられる。しかし、明治維新後の銃猟解禁により明治から大正にかけて激減し絶滅したのではと心配されたが、昭和初期に能登半島、佐渡島、隠岐の島の 3 地域で個体群が存続していることが確認された。1940 年代初期にこの 3 地域に 100 羽程度が生存していたと考えられている。かつては、ロシアのウスリー地方から中国南部、朝鮮半島、日本、台湾にかけて分布していた。

現在の生息状況

【分布域の現況】

2008 年から佐渡島で再導入が開始され、2025 年 6 月までに延べ 530 個体が放鳥された。現在、佐渡の野生下には、放鳥個体 133 羽、野外生まれ個体 443 羽の計 576 個体が生息すると推定されている（2024 年 12 月末）。さらに佐渡島で放鳥された個体（主に雌個体）が繁殖期に 1～2 羽本州へ飛来している。感染症のリスク分散のため、日本国内 6 か所（佐渡島 2 か所、東京、長岡、石川、島根）の飼育施設で、計 168 羽が分散飼育されている（2025 年 7 月時点）。中国では、陝西省洋県に野生個体群が分布し、陝西省楼観台・寧陝県、河南省、浙江省等でも再導入が実施されている。中国では、野生下に約 7000 羽が生息し、約 2000 羽が飼育されている（2024 年末時点）。韓国でも再導入が実施されている。

【生息地の現況】

トキ野生復帰事業によるトキの生息地環境整備により、佐渡島全域で農薬・化学肥料を 50%以上減らした稲作が実施されていて、水田の生物多様性が豊かになっている。また、トキの餌場のためのビオトープも整備されている。一方で、トキの野生復帰事業が開始された 2008 年当時 6000 ha あった耕作水田のうち、一部で中山間地の水田の放棄が進行していて、現在では耕作水田面積が 5000 ha を割り込んでいる。また、ひとつの営巣林にトキが集中するようになり、個体間干渉と捕食者の誘引により繁殖成績が低下してきている。

【個体数の現況】

個体数は、モニタリングで得られた繁殖・生存個体の情報から、ベイズ統計を使った個体群統合モデルによって推定されている。野生下には、放鳥個体 133 羽、野外生まれ個体 443 羽の計 576 個体が生息していると推定されている（2024 年 12 月末）。2012 年以降、毎年、野生下で巣立ちが確認され、2012 年生まれの個体が成熟した 2014 年に初めて野生下の成熟個体が出現した。野生下の成熟個体数の推定値（最小値）は、2014 年に 3 羽、2015 年に 9 羽、2016 年に 28 羽、2017 年に 48 羽、2018 年に 83 羽、2019 年に 143 羽、2020 年に 188 羽、2021 年に 240 羽、2022 年に 281 羽、2023 年に 298 羽、2024 年に 334 羽と増加している。成熟個体の 95%信頼限界の下限推定値が 250 羽を越えたのは 2022 年以降で、まだ、3 年しか経過していない。

存続を脅かす要因

耕作放棄地の増加による水田の減少、里山の竹林侵入、国内外来種であるテンによる捕食、鳥インフルエンザなどの感染症の脅威。

要因の区分：	（過去）	河川開発，湿地開発，圃場整備，農薬汚染/化学物質汚染，捕食（外来種による），管理放棄，分布・産地局限，近交弱勢
	（現在）	湿地開発，圃場整備，感染症/病原菌，捕食（外来種による），管理放棄，近交弱勢

特記事項

保全依存個体群である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	トキ	*Nipponia nippon*	CR
第４次 2019：	トキ	*Nipponia nippon*	CR
第４次 2018：	トキ	*Nipponia nippon*	EW
第４次 2017：	トキ	*Nipponia nippon*	EW
第４次 2015：	トキ	*Nipponia nippon*	EW
第４次：	トキ	*Nipponia nippon*	EW
第３次：	トキ	*Nipponia nippon*	EW
第２次：	トキ	*Nipponia nippon*	EW
第１次：	トキ	*Nipponia nippon*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅(Ex),【青森県】絶滅野生生物(EX),【岩手県】絶滅,【埼玉県】絶滅(EX)(繁),【千葉県】消息不明・絶滅生物(X),【神奈川県】不明種(繁殖期)、不明種(非繁殖期),【新潟県】野生絶滅(EW),【富山県】絶滅＋野生絶滅(EX+EW),【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福井県】県域絶滅,【長野県】野生絶滅(EW),【島根県】絶滅(EX),【山口県】絶滅(EX),【福岡県】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，国指定特別天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- Nagata, H. and S. Yamagishi, 2013. Re-introduction of crested ibis on Sado Island, Japan. In: Global Reintroduction perspectives: 2013. Further case-studies from around the globe: 58-62, Ed. P. S. Soorae, Gland, Switwerland, IUCN/SSC Re-introduction Specialist Group (RSG) and Abu Dhabi, UAE:Environment Agency-Abu Dhabi., pp. 58-62.
- 永田尚志，2012．トキの野生復帰の現状と展望．野生復帰，2: 11-16.
- 永田尚志，2019．野生復帰から 10 年でみえてきた放鳥トキの生態．國立公園，No.770: 8-11.
- Okahisa, Y. and H. Nagata, 2022. Evaluation of ongoing Crested Ibis (*Nippoinia nippon*) reintroduction using an integrated population model and Baysian population viability analysis. Ibis, 164: 1104-1122.

- 岡久雄二・永田尚志・尾崎清明，2017．標識再観察法によるトキ *Nipponia nippon* の個体数推定．山階鳥類学雑誌，48: 1-13．
- 山階芳麿・中西悟堂，1983．トキ 黄昏に消えた飛翔の詩．教育社，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Nipponia nippon has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Nipponia nippon* is listed as EN under criteria B1ab+2ab C2a(ii).

B1+2. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km² AND area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

C. Population size estimated to number fewer than 2,500 mature individuals and:

2. A continuing decline, observed, projected, or inferred, in numbers of mature individuals and:

a. Population structure in the form:

(ii) at least 95% of mature individuals in one subpopulation.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Wetland
Threat types:	Wetland development, Field preparation, Disease, Predation (by alien species), Abandonment of management, Inbreeding depression
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Nationally Designated Special Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	永田尚志（新潟大学）
Author:	Hisashi Nagata

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　トキ科 Threskiornithidae

ヘラサギ

***Platalea leucorodia leucorodia* Linnaeus, 1758**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　EN	基準 E:　－
D．成熟個体数が 250 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 世界一斉センサスの 2023 年の確認数は約 130 羽であったことから、成熟個体数は 50 羽以上 250 羽未満と推定される。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

全長は約 86 cm。雌雄同色。全身白色で、嘴はへら状で黒く、先端部は黄色。繁殖期は後頭部に橙黄色の冠羽、上胸に橙黄色の帯ができる。脚は黒色。干潟、河口、池など水辺に生息し、魚類や甲殻類、貝類、水生昆虫等を採餌する。まれな冬鳥であったが、近年は、福岡県、佐賀県、熊本県等で、少数が定期的に訪れ、越冬する。生息環境の悪化が進んでおり、釣り糸が嘴に絡んだり、人工構造物に衝突する事故等が報告されている。モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査報告書によると、越冬数は、2000 年代前半は 30 羽未満であったが、2020 年～2023 年は約 80 羽と、近年やや増加傾向にある。

協力者:　日本クロツラヘラサギネットワーク

基礎情報

【形態】

全長は約 86 cm。雌雄同色。全身白色で、嘴はへら状で黒く、先端部は黄色。繁殖期は、後頭部に橙黄色の冠羽があり、上胸に橙黄色の帯ができる。目先の裸出部は狭く、目と嘴は離れて見える。脚は黒色。

【生活史】

国内では繁殖していない。主に冬鳥として渡来する。一夫一妻で繁殖し、サギ類などとともに集団で繁殖する。草むらや樹上に巣を作り、3～5 卵を生む。雌雄交代で 24～25 日間抱卵し、雛はふ化後約 45～54 日で巣立つ。

【生息環境】

水辺に生息し、干潟、河口、池、用水路などの浅水域で、魚類や甲殻類、貝類、昆虫類等を採餌する。潮が満ちたときは河口近くのヨシ原や干潟、堤防、中州、畑地、調整池、埋立地、川辺の低木林際などで休息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，湿地・湿原，砂地・礫地，河川下流域，河口域，農業用水路，小河川，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，砂浜・礫浜，海崖・岩浜・岩礁（磯），汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯】海面，岩礁（磯），砂底・礫底，泥底
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

世界分布では、ヨーロッパ、アフリカ、インド、中国などに 3 亜種が分布する。国内では、日本では九州・沖縄を中心に、クロツラヘラサギ（*Platalea minor*）の群れに混じり、越冬している。鹿児島県出水市では 1950 年代には 15～20 羽が記録され、45 羽が飛来したこともある。その他の地域では琉球諸島、奄美諸島、対馬等で不定期な飛来が、北海道、本州、四国、佐渡、大東諸島等で偶発的な飛来が記録されている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本では従来まれな冬鳥であったが、近年は、福岡県、熊本県をはじめ、宮崎県、大分県、佐賀県、山口県などに定期的に渡来し、越冬している。

【生息地の現況】

日本での生息地では、多くの地域で河川改修、堤防工事、埋め立てなどによる生息環境の悪化、減少が進んでいる。嘴を水中で左右に振る採餌法のため、釣り糸が嘴に絡んだり、人工構造物に衝突し、怪我をする事故も発生している。また、餌生物からの有害化学物質の摂取も懸念される。

【個体数の現況】

モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査報告書によると、越冬数は、2000 年代前半は 9～26 羽、2010 年～2019 年は 21～62 羽、2020 年～2023 年は 73～95 羽と、近年やや増加傾向にある。世界一斉センサスの調査時の生息状況でも、2020 年～2023 年には 54～133 羽と近年の増加が報告されている。

存続を脅かす要因

河口のヨシ原や干潟など湿地開発による生息地の消失、採餌時の釣り糸への絡まりや、人工構造物への衝突による事故等が発生している。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，湿地開発，ダム・河川工作物建設，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，感染症/病原菌
	（現在）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，湿地開発，ダム・河川工作物建設，農薬汚染/化学物質汚染，感染症/病原菌

特記事項

なお 、日本鳥類目録改訂第 7 版（日本鳥学会 2012）において、本亜種の分類はペリカン目に、学名は *Platalea leucorodia leucorodia* に変更されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヘラサギ	*Platalea leucorodia leucorodia*	DD
第４次 2019：	ヘラサギ	*Platalea leucorodia leucorodia*	DD
第４次 2018：	ヘラサギ	*Platalea leucorodia leucorodia*	DD
第４次 2017：	ヘラサギ	*Platalea leucorodia leucorodia*	DD
第４次 2015：	ヘラサギ	*Platalea leucorodia* major	DD
第４次：	ヘラサギ	*Platalea leucorodia* major	DD
第３次：	ヘラサギ	*Platalea leucorodia* major	DD
第２次：	ヘラサギ	*Platalea leucorodia* major	DD
第１次：	ヘラサギ	*Platalea leucorodia leucorodia*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【山形県】評価対象外，【富山県】情報不足(DD)，【石川県】準絶滅危惧(NT)，【三重県】情報不足(DD)，【兵庫県】C ランク，【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【島根県】情報不足(DD)，【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【愛媛県】準絶滅危惧(NT)，【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【佐賀県】準絶滅危惧種，【長崎県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【熊本県】準絶滅危惧(NT)，【大分県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【宮崎県】情報不足(DD-2)，【鹿児島県】準絶滅危惧，【沖縄県】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境省自然環境局生物多様性センター，2009．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査第 1 期取りまとめ報告書．49pp. 環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田市.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2015．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査業務第 2 期とりまとめ報告書．214pp. 環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田市.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告書．79pp. 環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田市.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2023．2022 年度モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2021 年度 総括報告書．125pp. 環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田市.
- 環境省自然環境局生物多様性センター/NPO 法人バードリサーチ，2023．モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2022 年度冬期概要ニュースレター．環境省自然環境局生物多様性センターHP.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Platalea leucorodia leucorodia has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Platalea leucorodia leucorodia* is listed as EN under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Farmland, Wetland, Sandy area/Gravelly area, Lower river basin, Estuary, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Sandy beach/Pebble beach, Sea Cliff/Rocky beach/Reef, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Sea surface, Reef, Sandy bottom/Gravelly bottom, Muddy bottom
Threat types:	Lake development, River development, Coastal development, Wetland development, Dam/River structures construction, Pesticide/Toxic chemical pollution, Disease

Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者: Author:	山本裕（公益財団法人日本野鳥の会）・高野茂樹（日本クロツラヘラサギネットワーク） Yutaka Yamamoto and Shigeki Takano

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　サギ科 Ardeidae

アマサギ

***Bubulcus ibis coromandus* (Boddaert, 1783)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　A2

基準 A:　EN	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

全国鳥類繁殖分布調査における 1990 年代（1997-2002 年）の現地調査 1947 地点のうちの確認地点数は 117 地点であった。

【近年の状況】

全国鳥類繁殖分布調査における 2010 年代（2016-2021 年）の現地調査 1947 地点のうちの確認地点数は 38 地点であった。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

本州以南に夏鳥として渡来し、複数種から成るサギ類コロニーに最も遅く加わって繁殖する。水田やその周辺の畦畔、草地で、昆虫を中心にカエル、ザリガニ等の小動物を食べる。1990 年代頃まで各地で多くの個体数が認められたが、その後、確認地点数や個体数が顕著に減少している。要因はわかっていないが、アオサギが新規形成した混合コロニーにおいてアマサギが必ずしも構成種とならない例が見受けられるようになってきている。

基礎情報

【形態】

全長 46～56 cm、翼長 25 cm、翼開長 90 cm、体重 375 g。雌雄同色。非繁殖期はほぼ全身白色。繁殖期には雌雄とも頭部から首と背中にオレンジ色（亜麻色）の飾り羽が伸びるが、飾り羽の出ない個体でも繁殖する場合はある。嘴と目先の裸出部、虹彩は黄色で、求愛期には朱色。脚は暗緑色から黒色。幼鳥は成鳥の非繁殖期に似る。シラサギ類の中で最も小型で、嘴や首、脚が短い。

【生活史】

日本では主に夏鳥で、本州では 4 月～5 月頃に渡来。集団繁殖性で、複数種で構成されるコロニーで繁殖し、留鳥のサギ類（アオサギ、ダイサギ、コサギ、ゴイサギの全て又はいずれか）が形成したコロニーに夏鳥のチュウサギが参入したのち、最後に参入する。繁殖期は 4～9 月頃。一夫一妻で繁殖するが、つがい外交尾も知られる。雌雄とも抱卵・育雛する。巣は皿状で、小枝を組み合わせ、樹林や竹林の中ほどにかける。一腹卵数は 2～7 卵で、4 卵のことが多い。卵は淡青緑色で無斑、楕円形（長径約 45 mm、短径約 32 mm）。産卵は 1～2 日に 1 個のペースで、初卵から抱卵し、抱卵期間は約 24 日。ヒナは非同時孵化し、巣上での育雛期間は約 20 日で、巣立ち後もしばらくはコロニー内で親から給餌を受ける。巣立ち率を下げる要因として、餌を巡るヒナ間競争や兄弟殺しが知られる。繁殖後の分散は 8 月頃から始まり、10 月中旬頃まで各地で集団ねぐらをとって過ごした後、群れでフィリピンなど南方へ渡るが、国内でも西南日本など暖地を中心に越冬する。

【生息環境】

平野部の水田、草地、河原、湖沼等。水辺を中心に生息するが、他の集団繁殖性サギ類と比べると畦畔や草地など乾いた場所を好んで採食する。海岸や干潟、河川ではほとんど採食しない。繁殖期は平地の樹林や竹林に他の集団繁殖性サギ類と混合でコロニーを形成して繁殖し、夜間もコロニーでねぐらをとる場合が多い。非繁殖期には河川や湖沼の岸の樹上や杭上、湿地等で集団ねぐらをとる。山間部はほとんど利用しない。イナゴ、バッタ等の昆虫や、カエルをよく食べ、トカゲ等も食べる。素早く歩きながら採餌し、水田ではトラクターの後ろをついて回りながら飛び出してきた昆虫等を捕らえる。数羽から十数羽の小群でまとまって採餌することが多い。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，田地・畑地，耕作放棄地，市街緑地，河川下流域
国土地域区分：	(4) 河川・湿地地域

【分布域】

19～20 世紀に世界的に分布を拡大し、熱帯から温帯域に広く分布する世界で最も多いサギ。日本でみられるのは亜種 *Bubulcus ibis coromandus* で、日本から朝鮮半島南部、中国南部、東南アジア、インド、オーストラリアで繁殖する。越冬期もほぼ同じ範囲でみられるが、日本や朝鮮半島、中国南部の個体は南へ渡る。国内では主に本州以南の水田地帯のある平野部を中心に分布している。他に亜種 *Bubulcus ibis ibis* がヨーロッパの一部と、アフ

リカ及び南北アメリカに広く分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1970 年代と比べ、1990 年代には東北地方へ分布がやや拡大した。その後は国内での分布に大きな変化はない。

【生息地の現況】

住宅地付近に形成されたコロニーでの人との軋轢（鳴き声や糞による迷惑被害）や、河川敷に形成されたコロニー周辺での河川改修によって、営巣林が伐採される場合が見受けられる。越冬地での現況は不明である。

【個体数の現況】

1980 年の全国アンケート調査では、37 県・79 ヶ所のコロニーで確認された集団繁殖性サギ類のうちアマサギは 10%（約 4,800 個体）で、ゴイサギ、コサギに次いで 3 番目に個体数の多い種だった。1991～92 年の全国調査でも、現地調査が行われた国内主要 3 地域のコロニーにおいてアマサギは 22.1%を占めた。その後は全国規模の個体数調査は行われていないため、全国の個体数現況は明らかではないが、全国鳥類繁殖分布調査では 1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた全国 1,947 地点のうち、アマサギの記録は 117 地点から 38 地点に大きく減った。茨城県のサギ類コロニーにおけるアマサギの推定個体数は 2002～2012 年にかけて減少傾向で、約 4,000 個体から約 2,000 個体に半減した。

存続を脅かす要因

アマサギはバッタ等の昆虫や陸生のアマガエルをよく食べるため、水田の水生の小動物を主食とするチュウサギと比べて、水田の圃場整備による餌生物の減少の影響は受けなかったとされている。19～20 世紀の世界的な分布拡大からも、新たな生息地を見出し適応する能力に長けるとみられているが、国内で確認地点数や個体数が顕著に減少している原因はわかっていない。アマサギは集団繁殖性サギ類の中で最も集合性が強く、夏鳥で渡来が遅いためコロニー選択は他種が形成したコロニーに最後に参入するかたちであることから、アオサギの増加によるコロニー形成プロセスの変化等の影響を受けやすい可能性も考えられる。また、集団繁殖性サギ類に共通の要因としては、住宅地近隣に立地したコロニーでの人との軋轢による追払いや営巣林の伐採に伴う繁殖成功の低下の懸念がある。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	その他（人との軋轢（営巣林伐採や追払い）），不明

特記事項

集団繁殖性サギ類ではアオサギ、及びダイサギの個体数が全国的に増加している。それ

に伴う大きな変化として、繁殖開始が最も早く単独性が強いアオサギがコロニー形成を先導するようになり、アオサギの好むスギ等の高木のある樹林がコロニー場所として選ばれるケースが増えてきている。アマサギのコロニー選択は、留鳥の他のサギ類が形成したコロニーに後から参入するかたちであるため、アマサギの個体数変化には他種も関わっている可能性がある。例えば茨城県内では、2000 年代前半まではほとんどのコロニーで営巣林に竹を含んでおり、どのコロニーでも一定割合でアマサギが存在したが、アオサギの増加が顕著になってきた 2005 年頃から営巣林が樹木のみのコロニーが増え、アマサギを構成種にほとんど含まないコロニーもよく見られるようになった。コロニーにおけるサギ類の種間関係や、営巣木への選好性と繁殖成功との関係は十分に明らかになっていないが、コロニーの動態とあわせて、サギ類各種の個体数を注意深くモニタリングしていくことが望ましい。また、越冬地での環境変化等、国外での要因に関する情報収集も望まれる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】留意,【山形県】準絶滅危惧(NT),【福島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク),【群馬県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【埼玉県】絶滅の恐れがある地域個体群(LP)(繁),【東京都（伊豆諸島）】準絶滅危惧(NT),【神奈川県】減少種(繁殖期),【滋賀県】要注目種,【京都府】準絶滅危惧種,【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【広島県】情報不足(DD),【香川県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【大分県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Fujioka, M., 1985. Sibling competition and siblicide in asynchronously-hatching broods of the cattle egret *Bubulcus ibis*. Animal Behaviour, 33: 1228-1242.
- 環境庁自然保護局・(財) 日本野鳥の会，1994．第 4 回自然環境保全基礎調査 動植物調査報告書（鳥類の集団繁殖地及び集団ねぐら）．pp. 268．環境庁，東京．
- 清棲幸保，1978．日本鳥類大図鑑 III．講談社，東京．
- Kushlan, J. A. and J. A. Hancock, 2004. The Herons. Oxford University Press, New York.
- Lane, S. J. and M. Fujioka, 1998. The impact of changes in irrigation practices on the distribution of foraging egrets and herons (Ardeidae) in the rice fields of central Japan. Biological Conservation, 83: 221-230.
- Mashiko, M. and Y. Toquenaga, 2014. Grey heron (*Ardea cinerea*) expansion promotes the persistence of mixed-species heron colonies. Waterbirds, 37: 362-370.
- Mashiko, M. and Y. Toquenaga, 2013. Increasing variation in population size and species composition ratio in mixed-species heron colonies in Japan. Forktail, 29: 71-77.
- 中島拓・江崎保男・中上喜史・大迫義人，2006．水田と河川、コウノトリ野生復帰地での餌場の相対的価値-豊岡盆地に生息するサギ類を指標として-．保全生態学研究，11: 35-42．
- 日本野鳥の会研究部，1981．アンケート法によるサギ類のコロニーと塒に関する調査．財団法人日本野鳥の会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Bubulcus ibis coromandus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Bubulcus ibis coromandus* is listed as EN under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥50% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Urban green area, Lower river basin
Threat types:	Other, Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	益子美由希（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構）
Author:	Miyuki Mashiko

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae

クマタカ

***Nisaetus nipalensis orientalis* (Temminck & Schlegel, 1844)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　C2a(i)				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　EN	基準 D:　－	基準 E:　－

C．個体群の成熟個体数が 2,500 未満であると推定される。

【推定根拠】

2004 年に公表された希少猛禽類調査により確認された生息ペア数から、1,802 羽の生息は確実であり、生息確認メッシュ数（5 km×5 km、2,420 メッシュ）を考慮すると、さらに多いと推測される一方、その後の調査では全国の繁殖成功率の低下が顕著であるため。

加えて、以下の 2. かつ a (i) に該当する事由がある。

2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測される。

【判断理由】

鈴鹿山脈における 1983 年から 2022 年までの 40 年間の記録では、繁殖成功率等に顕著な減少は見られないものの、原因不明のまま産卵しない例や育雛中止の例が見られる。またペアの個体の組み合わせの交代を 2 箇所で追跡したところ、数多くの交代が確認された。2-6 年で交代した例が多く、わずか 7 ヶ月、9 ヶ月間の短期間で成鳥が交代した例も複数例見られた。中には 19 年間以上も同じ個体同士がペア形成していた例も見られたが、確認されているクマタカの野外寿命(30-34 歳以上)を考慮すると、これらからペア形成している成鳥の自然死亡率がかなり高いことが示唆される。また、一腹一卵の繁殖形態に加えて鳥インフルエンザに罹患した個体や中毒レベルの血中鉛濃度が検出された個体が見られることなどから、目に見える形での減少は報告されていないものの個体数が潜在的に継続して減少しているリスクを抱えていることが推察される。

a) 個体群構造が次に該当

i) 250 以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。

【判断理由】

クマタカの個体群については調査されていないため不明であるが、鈴鹿山脈において 35 年以上継続されている分散調査で、個体識別した個体のうち分散した 4 事例全てが同じ鈴鹿山脈内で定着繁殖しており、イヌワシのように広範囲に分散移動していないことが判明している。この事例からこの地域に生息する個体群を下位個体群とみなした場合、2016-2018 年の調査で標高 300 m 以上の鈴鹿山脈全域に 45 ペアが生息しており、個体群の個体数は 100 個体程度と考えられ、基準の 250 個体よりも少ない。また、他の山脈や地域ではまとまったデータがないために比較、評価ができないものの、全国で確認されている個体数 2,000 個体程度から考えると現時点では各地の山塊などまとまった生息地域においても成熟個体が 250 個体を超える地域は存在する可能性は低いと考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

森林性の大型猛禽類であるクマタカは日本の環境に適応して生息しており、分布域は広い。また近年は日本以外での生息繁殖の情報があり、正確な分布の確認が必要である。人間の生活圏に比較的近い場所に生息しているため、伐採による巣の消失や事故による死亡例がある。また、植生の変化による営巣環境の悪化が見られるとともに、繁殖成功率の低下が顕著な地域もあり、将来的に個体数の急激な減少が危惧される。

基礎情報

【形態】

クマタカは、成鳥で体長がオス(n=18)70-77 cm、メス(n=21)74-80 cm、体重はオス 1.5-2.7 kg、メス 2.5-3.9 kg ほどの大型猛禽類である。尾羽が長く、翼の幅が広い。性的二型性を示し、メスはオスよりも大型である。成鳥は背面が濃褐色、下面が白く、喉から胸に黒褐色の縦斑が見られる。顔は黒く、翼と尾の下面には黒帯模様が目立つ。ふ蹠部にも羽毛が密生し、後頭部には短い冠羽が認められる。虹彩色は幼鳥時の灰青色から若い個体時には灰色から黄色、成熟個体はオレンジから赤色へと加齢とともに変化する。

【生活史】

留鳥であり、通常は単独で行動している。繁殖前期の 12 月頃からペアでの飛翔などが見られ、1-2 月に入ると、ペア間での鳴き交わしやディスプレイ飛行、交尾や造巣行動などが活発化する。この頃、目立つ枝先に誇示するように長時間止まるディスプレイが見られることがある。産卵は地域により多少のずれがあるが、普通、3 月から 4 月に 1 卵を産卵する。4 月中旬から 5 月頃に孵化し、雛は 7-8 月に巣立つ。巣立ち後は 1 年半ほど親の縄張り内に留まることが知られている。この間の餌供給の多くはオスが担っていることが判ってきている。年間を通して狩りを含め、森林内で過ごす時間が長いため生態の不明な点がいまだに多い。

【生息環境】

九州以北、本州では標高 300-1,000 m くらいの発達した森林内に生息している。縄張り面積はおおよそ 13-25 km²で 20 km²前後が多い。イヌワシに比べて人間の生活圏に近い場所に生息しているため、生息地内に鉄塔や植林など人工物が見られる場合が多い。食餌は小型から中型の鳥や哺乳類をかなり幅広く利用しており、ヤマドリ、アオバト、カケス、イカルなどの鳥類、タヌキ、アナグマ、ニホンザルなどの幼獣、ムササビ、リス、モグラ類などの哺乳類やヘビ類が確認されている。巣は急斜面の大径木の枝や幹に架けることが多く、主にモミ、マツ、スギなどの針葉樹に枝を積み上げて作るが、広葉樹も利用する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林，湿地・湿原，ため池・池沼
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

クマタカ属で唯一、温帯地域にも分布しており、種として、インド、ネパール、インドシナ半島、台湾、中国東南部、ロシア極東南部および日本に分布するとされている。本亜種は日本と朝鮮半島に分布するとされているが、朝鮮半島における確実な記録は数例だけしか知られていない。種クマタカの中で最も北に分布する大型の亜種である。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1980 年代以降、分布が明らかになり、九州から北海道までの低山から亜高山地に至るまで、広く生息繁殖している。島嶼では五島列島や佐渡島で目視された記録がある。渡りは行わないが、若い個体が分散時に生息地以外で観察される場合がある。分散先は一部地域において判明されつつあり、大きな移動は行わない例が複数確認されている。2000 年代に入り、極東ロシア地域で生息繁殖していることが確認されたが、本亜種であるとの確認は未確定である。

【生息地の現況】

生息域が広いため、九州の常緑広葉樹二次林、本州の夏緑広葉樹林とスギヒノキ植林、東北のブナ自然林など様々なタイプの植生に対応して生息している。しかしながらヒトの生活圏に比較的近い場所にあるため人工物である高圧鉄塔や建物などが見られ生息圏内での環境が改変される例が多い。また近年では生息地内での風力発電設備の設置や計画が多く見られる。

【個体数の現況】

現地調査、既存資料調査およびアンケート調査により、全国で繁殖箇所が 901 ヶ所確認されており、1,802 羽の生息は確実で、生息確認メッシュ数（5 km×5 km、2,420 メッシュ）を考慮すると、さらに多いと推測される。しかし、その後の調査では全国の繁殖成功率の低下が見られる地域もあり、世代交代を考えると、将来的に個体数の急激な減少が危惧される。

存続を脅かす要因

いままでに営巣木の伐採による巣の消失や送電線による感電例、獣害対策用ネットや養殖池の防除網に絡まるなどの事故の報告が見られた。また、マツ枯れにより営巣可能な樹木が減少したことによる営巣環境の悪化が見られた地域もある。近年は鉛中毒が確認された例や原因不明であるが、産卵しないペアや産卵してもふ化しない事例が見られるようになり、さらに営巣中の餌動物の搬入が少なく育雛に悪影響がみられた例もある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，遷移進行・植生変化/自然遷移，混獲・錯誤捕獲，人工構造物への衝突，不明
	（現在）	森林伐採，農薬汚染/化学物質汚染，感染症/病原菌，遷移進行・植生変化/自然遷移，混獲・錯誤捕獲，その他（餌動物の減少），不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	クマタカ	*Nisaetus nipalensis orientalis*	EN
第４次 2019：	クマタカ	*Nisaetus nipalensis orientalis*	EN

第４次 2018：	クマタカ	*Nisaetus nipalensis orientalis*	EN
第４次 2017：	クマタカ	*Nisaetus nipalensis orientalis*	EN
第４次 2015：	クマタカ	*Spizaetus nipalensis orientalis*	EN
第４次：	クマタカ	*Spizaetus nipalensis orientalis*	EN
第３次：	クマタカ	*Spizaetus nipalensis orientalis*	EN
第２次：	クマタカ	*Spizaetus nipalensis orientalis*	EN
第１次：	クマタカ	*Spizaetus nipalensis orientalis*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠB 類(En),【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類,【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【秋田県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【山形県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類,【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク),【群馬県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【埼玉県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁・越),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(繁殖期)、絶滅危惧Ⅱ類(非繁殖期),【新潟県】絶滅危惧Ⅰ類(EN),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【山梨県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【長野県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【岐阜県】絶滅危惧Ⅱ類,【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁殖),絶滅危惧ⅠB 類(EN)(越冬),【三重県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【滋賀県】絶滅危惧種,【京都府】絶滅危惧種,【大阪府】絶滅危惧Ⅰ類(CR＋EN),【兵庫県】A ランク,【奈良県】絶滅危惧種,【和歌山県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山口県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【徳島県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【香川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【大分県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-g),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【長野県・鳥取県】

参考文献

- 樋口広芳（編），2013．日本のタカ学「生態と保全」．東京大学出版会，東京．354pp.
- 井上剛彦，2000．鈴鹿山脈に生息するクマタカの生態に関する知見．第 1 回東南アジア猛禽類シンポジウム大会記録集，滋賀．
- IOC World Bird List version 3. 2. International Ornithologists' Union Updated 16-Oct-2012.

- 石川正道・井上剛彦・私市知子・中川望（編），2000．クマタカ・その保護管理の考え方．クマタカ生態研究グループ，滋賀．62pp.
- 環境庁自然保護局野生生物課，1996．猛禽類保護の進め方－特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて－．環境庁，東京．87pp.
- 環境省自然環境局野生生物課，2012．猛禽類保護の進め方（改訂版）－特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて－．環境省，86pp.
- クマタカ生態研究グループ，2025．クマタカ生態モノグラフ．平凡社，東京．432pp.
- 森本栄，2006．広島県におけるクマタカの巣の変更と周辺環境．Strix，24: 89-97.
- Naito-Liederbach, A. M., 2024. Genetic diversity assessment and conservation implications for two raptor species（猛禽類 2 種の遺伝的多様性評価と保全上の意義），京都大学博士論文.
- Nechaev, V. A. and T. V. Gamova, 2009. 藤巻裕蔵（訳）．2012. ロシア極東鳥類目録 2. 極東鳥類研究会，美唄市．205pp.
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．日本鳥学会，三田．438pp.
- 財団法人日本鳥類保護連盟，2004．希少猛禽類調査報告書（クマタカ編）．財団法人日本鳥類保護連盟，東京．364pp.
- 齋藤慶輔，2014．野生の猛禽を診る．北海道新聞社，札幌．254pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Nisaetus nipalensis orientalis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Nisaetus nipalensis orientalis* is listed as EN under criteria C2a(i).

C. Population size estimated to number fewer than 2,500 mature individuals and:

2. A continuing decline, observed, projected, or inferred, in numbers of mature individuals and:

a. Population structure in the form:

(i) no subpopulation estimated to contain more than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Wetland, Reservoir/Pond
Threat types:	Logging and wood harvesting, Pesticide/Toxic chemical pollution, Disease, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Bycatch, Other, Unknown
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Nagano・Tottori】.





執筆者:	井上剛彦（クマタカ生態研究グループ）
Author:	Takehiko Inoue

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae

イヌワシ

***Aquila chrysaetos japonica* Severtsov, 1888**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　C2a(i)				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　EN	基準 D:　－	基準 E:　－

C．個体群の成熟個体数が 2,500 未満であると推定される。

【推定根拠】

日本イヌワシ研究会の 2022 年の報告によると、2020 年のつがい数は 193 程度、推定個体数は約 450 羽である。

加えて、以下の 2. かつ a (i) に該当する事由がある。

2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測される。

【判断理由】

有効つがい数は、1986 年時点で 340、2020 年時点で 193 と減少している。繁殖成功率は、1981～85 年は 47.2%であったが、1991 年から急激に低下し、現在までほとんど 20%前後の低い状態が続いている。これらの原因は戦後の大規模な落葉広葉樹林の伐採とスギ･ヒノキ植林によるハンティング場所の激減であると思われるが、茅刈・焼畑・炭焼き・放牧等の山間部での人為的に創出されてきた開放地の消失もハンティング場所減少の大きな要因であり、これは現在も継続している。

a) 個体群構造が次に該当する。

i) 250 以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。

【判断理由】

イヌワシの主な生息地は本州の中部以北であり、複数の地域で生息している。2020 年時点の全国のつがい数は 193 程度であるが、250 羽以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。さらに、つがい数の激減と繁殖成功率の低下により、分散個体は極めて少なく、個体群間の交流はほとんどなくなっている。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

全国に 193 ペア、450 羽程度の生息が推定されているが、生息場所は限定的で、九州・四国では定着しているつがいは確認されておらず、ほぼ絶滅状態にある。1981 年から 2020 年までにペアが消失した場所は 121 ヶ所にも及ぶ。繁殖成功率も 1981～85 年が 47.2%であったが、1991 年から急激に低下し、ほぼ 20%前後で推移している。絶滅の危機に至った主要因は 1950 年代からの拡大造林政策による人工林面積の急激な拡大と社会の変化によ

る森林利用の激減によるハンティング場所の消失と考えられる。

基礎情報

【形態】

日本の山岳地帯に生息･繁殖する最大の猛禽で、翼は板状に長く、クマタカのような丸みを帯びていない。全長はオス：73～86 cm、メス：81～95 cm、翼開長はオス：170～190 cm、メス：180～210 cm、体重は 3.2～5.5 kg。成鳥は全身が暗褐色で、年齢が進むと後頭部は黄金色を帯びる。幼鳥は全身が黒っぽく、両翼と尾羽の基部に白斑がある。脚は羽毛に覆われ、爪は長く鋭い。

【生活史】

山岳地帯の開放地、落葉広葉樹林等で主にノウサギ、ヤマドリ、ヘビを捕食していたが、近年はこれら獲物動物の減少に伴い、他の中小動物やシカ等の死体を食べることも多い。周年、ペア関係を維持し、繁殖活動は 10 月頃から始まる。営巣場所は急峻な崖地の岩棚が多いが、大木に営巣することもある。産卵時期は 1 月中旬から 2 月下旬。1 腹卵数は通常 2 卵（1～3 卵）。抱卵期間は 42 日前後で主にメスが抱卵する。2 番目に孵化した雛はほとんどが孵化後 10 日以内に死亡する。育雛期間は約 70～90 日で、5 月上旬～7 月上旬（主に 6 月上旬）に巣立ちする。巣立ち後 1 ヶ月位は営巣場所付近に滞在し、親からの給餌を受ける。その後、親についてハンティング場所に出かけるようになり、冬には独立する。繁殖年齢に達するのは概ね 4 歳と考えられている。

【生息環境】

生息環境は、落葉広葉樹林等の中小動物の多い森林が広がり、かつハンティング可能な自然裸地、草原、石灰岩の岩場、多雪地や高山風衝地の低木自然林等の比較的開けた環境が存在している山岳地帯である。イヌワシは森林内を飛行することができないため、スギ・ヒノキ人工林や常緑広葉樹の繁茂した森林地帯には生息できない。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，草地，岩壁・ガレ場（石灰岩地等）
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

種としては、北半球（ユーラシア大陸、アフリカ北部、北アメリカ大陸）の高緯度地域に広く分布する。本亜種は、日本および朝鮮半島に分布する。日本は分布域の南限に近い。国内では北海道から九州までの山岳地帯に留鳥として生息していたが、九州・四国では生息場所は限られていたものと思われる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道から九州までの山岳地帯に生息していたが、現在は九州・四国ではほぼ絶滅状態であり、主な生息地は本州の中部以北である。北海道では複数の地域で生息が確認されているものの、生息密度は極めて低く、どの程度のペアが生息しているのかは不明である。

【生息地の現況】

国内の生息環境は戦後の大規模な落葉広葉樹林の伐採とスギ･ヒノキの植林によって激変した。1986 年以降、生育して密生した人工林が増加し、かつ伐採地が減少したことに加え、燃料革命と社会生活の変化によって、人為的に創出されてきたハンティング場所が激減した。

【個体数の現況】

日本イヌワシ研究会の 2022 年の報告によると、2020 年のつがい数は 193 程度、推定個体数は約 450 羽である。1981 年から 2020 年までにペアが消失した場所は 121 ヵ所にも及ぶ。繁殖成功率は 1981～85 年は 47.2%であったが、1991 年から急激に低下し、現在までほとんど 20%前後の低い状態が続いている。

存続を脅かす要因

日本イヌワシ研究会の 2022 年の報告によると、繁殖失敗 155 例のうち、自然的要因は 60 例、複合的要因は 79 例、人為的要因は 16 例であった。主な原因は生息環境の変化による餌不足、後継個体の不足としている。1991 年以降のペア数の減少と繁殖成功率の急激な低下の主要因は戦後の大規模な落葉広葉樹林の伐採とスギ･ヒノキ植林によるハンティング場所の激減であると思われるが、茅刈・焼畑・炭焼き・放牧等の山間部での人為的に創出されてきた開放地の消失もハンティング場所減少の大きな要因である。

要因の区分：	（過去）	石灰採掘，スキー場，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採，石灰採掘，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移，発電施設建設

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	イヌワシ	*Aquila chrysaetos japonica*	EN
第４次 2019：	イヌワシ	*Aquila chrysaetos japonica*	EN
第４次 2018：	イヌワシ	*Aquila chrysaetos japonica*	EN
第４次 2017：	イヌワシ	*Aquila chrysaetos japonica*	EN
第４次 2015：	イヌワシ	*Aquila chrysaetos japonica*	EN
第４次：	イヌワシ	*Aquila chrysaetos japonica*	EN
第３次：	イヌワシ	*Aquila chrysaetos japonica*	EN
第２次：	イヌワシ	*Aquila chrysaetos japonica*	EN
第１次：	イヌワシ	*Aquila chrysaetos japonica*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd),【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類,【宮城県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【秋田県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【山形県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類,【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク),【群馬県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【埼玉県】情報不足(DD)(繁・越),【新潟県】絶滅危惧Ⅰ類(EN),【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【山梨県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【長野県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【岐阜県】絶滅危惧Ⅰ類,【静岡県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【三重県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【滋賀県】絶滅危惧種,【京都府】絶滅寸前種,【兵庫県】A ランク,【奈良県】絶滅寸前種,【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【島根県】情報不足(DD),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【広島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【徳島県】絶滅(EX),【熊本県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【大分県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【宮崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR-d)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【長野県・鳥取県】

参考文献

- 環境庁自然保護局野生生物課，1996．猛禽類保護の進め方－特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて－．環境省自然保護局，東京．87pp.
- 日本鳥類保護連盟，2004．希少猛禽類調査報告書（イヌワシ編）．日本鳥類保護連盟.
- 日本イヌワシ研究会，2001．全国イヌワシ生息数・繁殖成功率調査報告（1996-2000）．*Aquila chrysaetos*，No.17: 1-9.
- 日本イヌワシ研究会，2003．イヌワシにおける繁殖失敗の原因．*Aquila chrysaetos*，No.19: 1-13.
- 日本イヌワシ研究会，2007．全国イヌワシ生息数・繁殖成功率調査報告（2001-2005）．*Aquila chrysaetos*，No.21: 1-7.
- 日本イヌワシ研究会，2022．全国イヌワシ生息数・繁殖成功率調査報告（1981-2020）．*Aquila chrysaetos*，No.28: 1-20.
- Watson, J., 2010. THE GOLDEN EAGLE Second edition. pp. 41-43, 175-176. Yale Univ. Press, London.
- 山﨑亨，1996．タカ目イヌワシ．日本動物大百科 3 鳥類Ⅰ，pp. 164-165．平凡社，東京.
- 山﨑亨，2006．日本の事例．ニホンイヌワシ．ジェフ・ワトソン（著），山岸哲・浅井茂樹（訳），イヌワシの生態と保全，pp. 359-372．文一総合出版，東京.
- 山﨑亨，2010．イヌワシ．野生動物保護の事典（野生生物保護学会編），朝倉書店，pp. 479-482.
- 山﨑亨，2013．日本のタカ学（第 1 章イヌワシとクマタカの分布と生息場所利用）．東京大学出版会．pp. 15-36.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aquila chrysaetos japonica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aquila chrysaetos japonica* is listed as EN under criteria C2a(i).

C. Population size estimated to number fewer than 2,500 mature individuals and:

2. A continuing decline, observed, projected, or inferred, in numbers of mature individuals and:

a. Population structure in the form:

(i) no subpopulation estimated to contain more than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, Grassland, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Power plant construction
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Nagano・Tottori】.





執筆者:	山﨑亨（アジア猛禽類ネットワーク）
Author:	Toru Yamazaki

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae

チュウヒ

***Circus spilonotus* Kaup, 1847**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　EN	基準 E:　－
D．成熟個体数が 250 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 （公財）日本野鳥の会による繁殖分布調査及びヒアリングにより、2020 年時点のつがい数は 136 つがいと推定されており、2015 年の推定つがい数（168 つがい）と比較して減少傾向が見られる。実際に、繁殖地のヨシ原は、開発による消失や乾燥や地盤沈下による衰退が進んでおり、環境の悪化が見られる。これらを鑑み、現在は 136 つがいよりもさらに減少しており、250 個体未満と推定される。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

ヨシ原などの地上で営巣する中型のタカで、北海道、東北、中部地方を中心に繁殖しているが、繁殖個体数は少なく、約 136 つがいと推測する。冬期は本州中部以南のヨシ原等に広く生息している。餌は、小型哺乳類、鳥類などを食する。

基礎情報

【形態】

全長 オス 50～52 cm、メス 50～57 cm、翼開長 オス 124～130 cm、メス 130～138 cm、体重 オス 502～608 g、メス 700～948 g とメスの方が大きく、脚の長い中型のタカである。体色は褐色を基調とし、オス成鳥では初列雨覆羽、小翼羽、尾羽等の上面に灰色、腰に白帯が出る個体が多いが、出ない個体もいる。メス成鳥では、年を重ねるほどに暗色になる傾向が見られる。幼鳥では、頭部から胸、小雨覆羽等がクリーム色で淡色の強い個体にメスが多い傾向が見られるが、淡色タイプのオス成鳥やメス成鳥も少数見られることから、性別や年齢の判断には注意を要する。

【生活史】

主にヨシ原で繁殖し、地上にヨシ等を主材に台座を作り、イネ科の植物を産座とする。一腹卵数 3～7 卵で、2 卵目からメスのみで抱卵し、約 32 日で孵化する。巣内育雛 35～45 日、巣外育雛は約 30 日である。餌は、小型哺乳類、鳥類を中心に、両生類、爬虫類、魚類を食する。

【生息環境】

ヨシ原の広がる湖、河川（下流）、潟、埋立地等に生息するが、一部の地域ではササ原でも生息する。渡りの時期には河原や比較的狭い湿地にも現れる。冬期は全国各地のヨシ原などでみられるが、北日本では少ない。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

本亜種は、バイカル湖周辺、モンゴルから東、アムール川流域、中国東北部、日本にかけて繁殖し、日本から南、東南アジアにかけて越冬する。日本では北海道、本州や九州で局所的に少数が繁殖し、一部は留鳥である。国内では多くのものは冬鳥であり、主に本州以南に渡来する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道、青森、秋田、茨城、石川、福岡で局地的に繁殖している。新潟、富山、愛知、滋賀、三重、大阪、岡山、山口では近年繁殖の記録がない。越冬期、北海道や東北地方の生息数は減少するが、本州中部以南のヨシ原等に広く生息している。

【生息地の現況】

繁殖地のヨシ原は、開発による消失、乾燥や地盤沈下によるヨシ原の衰退で、繁殖環境の悪化が見られる。

【個体数の現況】

繁殖個体は、国内に 2020 年時点で約 136 つがいと推測されているが、2015 年時点での推定個体数から減少傾向や生息環境の悪化を考慮すると、2025 年時点では、136 つがいよりも少ない可能性が高い。冬期大陸からの越冬個体を含めて、300～450 羽生息すると推測する。

存続を脅かす要因

地盤沈下対策として実施される堤防の土盛りが招く更なる堤防周辺の地盤沈下、湿地の乾燥化によるセイタカアワダチソウ等の侵入等によって、繁殖場所であるヨシ原の衰退が見られる。営巣地があった河川敷が植生遷移により樹林化し、繁殖できなくなった場所がある。加えて、工場やゴルフ場、道路、橋、太陽光発電所、風力発電所、送電設備の建設等、湿地開発が進み、繁殖地が消失している。営巣地近傍の牧草地が圃場整備事業の対象となり、重機や工事作業員の出入りによる影響で繁殖を放棄した例もある。外傷のない個体が保護されたり、死体で回収されたりすることがあり、これらは殺鼠剤が原因と思われる。抱卵中や雛の小さい時期に、釣り人が巣近くに不用意に接近し、親鳥に大きなストレスを与え、繁殖を妨害している。また、カメラマンが巣に立ち入ったり、巣の前の植物を刈り取ったりすることで、親鳥が繁殖を放棄した事例もある。過去にはハンターによる密猟もあった。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，湿地開発，農薬汚染/化学物質汚染
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，草地開発，農薬汚染/化学物質汚染，遷移進行・植生変化/自然遷移，発電施設建設

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	チュウヒ	*Circus spilonotus spilonotus*	EN
第４次 2019：	チュウヒ	*Circus spilonotus spilonotus*	EN
第４次 2018：	チュウヒ	*Circus spilonotus spilonotus*	EN
第４次 2017：	チュウヒ	*Circus spilonotus spilonotus*	EN
第４次 2015：	チュウヒ	*Circus spilonotus spilonotus*	EN
第４次：	チュウヒ	*Circus spilonotus spilonotus*	EN
第３次：	チュウヒ	*Circus spilonotus spilonotus*	EN
第２次：	チュウヒ	*Circus spilonotus spilonotus*	VU
第１次：	チュウヒ	*Circus aeruginosus spilonotus*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠB類(En),【青森県】重要希少野生生物(Bランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【秋田県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【茨城県】絶滅危惧ⅠB類,【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(Bランク),【群馬県】情報不足(DD),【埼玉県】絶滅危惧ⅠB類(EN)(越),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB類(EN),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠB類(EN),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【山梨県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【静岡県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【愛知県】絶滅危惧ⅠA類(CR)(繁殖),絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越冬),【三重県】絶滅危惧ⅠA類(CR),【滋賀県】絶滅危機増大種,【京都府】絶滅寸前種,【大阪府】絶滅危惧Ⅰ類(CR＋EN),【兵庫県】Aランク,【和歌山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山口県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【徳島県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】絶滅危惧ⅠA類(CR),【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種,【長崎県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【熊本県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【大分県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【宮崎県】絶滅危惧ⅠB類(EN-r),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【石川県】

参考文献

- 土門優介，2022．建設事業における馴化を活用した希少猛禽類の保全技術，No.800（2022年1月），環境省.
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男，1995．図鑑日本のワシタカ類．文一総合出版，東京．631pp.
- （公財）日本野鳥の会，2020．北海道・サロベツ原野で繁殖するチュウヒの保護事例．2020年4月号，（公財）日本野鳥の会.
- （公財）日本野鳥の会，2020．プレスリリース：絶滅危惧鳥類「チュウヒ」の全国繁殖つがい数が明らかに ～全136つがいで、国内最少のタカ科鳥類であることが判明～（https://www.wbsj.org/activity/press-releases/press-2020-12-10/）
- （公財）日本野鳥の会，2021．サロベツ原野とチュウヒの保護．会誌「野鳥」2020年8月号，pp. 36-37.（公財）日本野鳥の会.
- （公財）日本野鳥の会，2021．チュウヒの国内繁殖つがい数を推定．会誌「野鳥」2021年1･2月号，p. 30.（公財）日本野鳥の会.

- （公財）日本野鳥の会，2021．行政機関と協力しサロベツ原野のチュウヒ繁殖地を保護．会誌「野鳥」2021 年 3･4 月号，（公財）日本野鳥の会．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Circus spilonotus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Circus spilonotus* is listed as EN under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Field preparation, Grassland development, Pesticide/Toxic chemical pollution, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Power plant construction
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species 【Ishikawa】.





執筆者:	浦達也（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Tatsuya Ura

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae　　日本固有

オガサワラノスリ

***Buteo japonicus toyoshimai* Momiyama, 1927**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　EN	基準 E:　－
D．成熟個体数が 250 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 縄張り面積と島の面積から推定した。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

オガサワラノスリは、小笠原群島にのみ分布するノスリの固有亜種である。現在は父島列島、母島列島のみに生息する。生息密度は高く、分布地の面積に対して縄張り数がほぼ飽和していると考えられるが、分布が狭いため成熟個体数は 150 羽程度と考えられる。食物資源をネズミやアノールトカゲなど外来動物に強く依存しており、生態系保全を目的とした外来ネズミの駆除により繁殖成功率や繁殖密度が低下することがある。個体数の顕著な増減は確認されていないが、世界遺産登録による観光客の増加にともなう自然地域の利用等により繁殖が影響を受けている可能性がある。

基礎情報

【形態】

全長約 50 cm、翼長 33-38 cm、尾長 18-22 cm。メスはオスに比べて大きい。他の亜種に比べ、体色が薄く、体サイズが小さく、翼に円みがあるとされている。ただし、個体差や齢差があるため、野外で亜種の識別をするのは難しい。

【生活史】

留鳥として小笠原諸島に生息している。列島内では島間での移動も確認されている。12 月頃から繁殖行動に入り、早ければ 1 月頃から営巣、4 月末に雛が巣立つが、繁殖の進行には 2 ヶ月程度の幅がある。一腹卵数は 1-3。父島における雛への給餌内容の観察では、クマネズミが全食物の約半数を占め、グリーンアノール、オオヒキガエルを合わせると約 9 割が外来動物であった。この他にトラツグミやムナグロ、アカガシラカラスバト、家禽の雛、海鳥、大型の陸生甲殻類等の採食が確認されている。海鳥繁殖地である南島では繁殖期および非繁殖期にオナガミズナギドリやアナドリといった中小型の海鳥をしばしば捕食している。

【生息環境】

湿性高木林、乾性低木林、農耕地、集落、草地など、様々な環境を利用している。営巣には基本的には岩棚を利用するが、父島では樹上営巣例も少数報告されている。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】裸地，森林，草地，田地・畑地，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部 海岸部】裸地，森林，草地，田地・畑地，海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（7）島嶼地域

【分布域】

小笠原群島の聟島列島、父島列島、母島列島において記録されている。Vaurie（1961）は、八丈島で採集された 1 羽の標本の計測値に基づいて、伊豆諸島を本亜種の分布域と考えている。この記録に基づき、日本鳥類目録改訂第 5 版、第 6 版では伊豆諸島を本亜種の分布地として扱っている。しかし、この論文に示された計測値は翼長のみであり、またその値は亜種ノスリとオガサワラノスリの間の値となっていることから、当該標本をオガサワラノスリと判定する充分な根拠はないと考えられる。このため、伊豆諸島におけるオガサワラノスリの記録は日本鳥類目録改訂第 7 版では削除されている。他には、小笠原諸島以外から本亜種の記録はない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

聟島列島では、昭和初期には本亜種と考えられるノスリが生息していた記録があるが、戦後には確実な分布記録はなく、現在は定住していないものと考えられる。最近では、父

島列島、母島列島の有人島、無人島において広く観察されている。

【生息地の現況】

小笠原諸島は、戦前は農地開発等による森林伐採により、広く開放地が広がっていたが、その後の放置により二次林化し、森林面積が増加している。すべての無人島において外来種ノヤギが根絶され、食害からの解放による森林の拡大が期待されている。ノヤギ駆除後には外来植物の分布が拡大し、一方でその駆除事業も行われており、生息地の環境は変化している。

【個体数の現況】

父島のつがい数から、縄張り面積は平均 0.87 km^2と考えられている。父島列島および母島列島の主要な島の合計面積とこの縄張り面積から、縄張りを持つ個体数は約 150 羽と推定されている。この他に、つがいの縄張りの狭間に一時的に定住する単独個体がいる。分布地での密度は高く、面積に対して飽和に近い状態になっていると考えられる。近年の個体数の大きな増減はないと考えられる。

存続を脅かす要因

小笠原諸島では在来生態系に対して悪影響を与えている外来ネズミ類の駆除事業が行われている。一方で、ネズミ類は本亜種の主要な食物となっているため、駆除地において繁殖成功率や生息密度が低下することがある。また、殺鼠剤で死んだネズミを食べることによる二次中毒リスクも心配されている。ただし、ネズミ類の駆除が進めばその捕食圧により減少していた海鳥の個体数が増加し、本亜種の利用可能な食物量が回復することが期待される。小笠原諸島は 2011 年に世界自然遺産に登録され、多数の保全事業が行われたり観光客が増加したりしているため、山域における人間の活動による繁殖攪乱も生じている可能性がある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，基質・基物の減少及び消失，分布・産地局限，その他（外来ネズミ駆除による食物不足。森林利用による繁殖撹乱）
	（現在）	分布・産地局限，その他（外来ネズミ駆除による食物不足。森林利用による繁殖撹乱）

特記事項

ミトコンドリア DNA の制限領域を用いた研究から、亜種ノスリとの間に遺伝的な差があることが確認されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オガサワラノスリ	*Buteo buteo toyoshimai*	EN
第４次 2019：	オガサワラノスリ	*Buteo buteo toyoshimai*	EN

第４次 2018：	オガサワラノスリ	*Buteo buteo toyoshimai*	EN
第４次 2017：	オガサワラノスリ	*Buteo buteo toyoshimai*	EN
第４次 2015：	オガサワラノスリ	*Buteo buteo toyoshimai*	EN
第４次：	オガサワラノスリ	*Buteo buteo toyoshimai*	EN
第３次：	オガサワラノスリ	*Buteo buteo toyoshimai*	EN
第２次：	オガサワラノスリ	*Buteo buteo toyoshimai*	EN
第１次：	オガサワラノスリ	*Buteo buteo toyoshimai*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- Chiba, Y. and T. Suzuki, 2011. Breeding biology of the Ogasawara buzzard endemic to the Ogasawara (Bonin) Islands. Ornithological Science, 10: 119-129.
- 千葉タ佳，2020．小笠原諸島南島におけるオガサワラノスリ *Buteo buteo toyoshimai* の海鳥捕食．日本鳥学会誌，69: 75-90．
- 千葉タ佳・千葉勇人，2014．殺鼠剤散布期間におけるオガサワラノスリによる小属島の利用．小笠原研究年報，37: 67-79．
- Kato, Y. and T. Suzuki, 2005. Introduced animals in the diets of the Ogasawara buzzard, an endemic insular *raptor* in the Pacific Ocean. Journal of Raptor Research, 39: 173-179.
- 加藤タ佳・鈴木惟司，1998．オガサワラノスリの樹上営巣．小笠原研究年報，22: 57-60．
- Kruckenhauser, L., E. Haring, W. Pinsker, M. J. Riesing, H. Winkler, M. Wink and A. Gamauf, 2004. Genetic versus morphological differentiation of old world buzzards (genus *Buteo*; Accipitridae). Zoologica Scripta, 33: 197-211.
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男，1995．図鑑日本のワシタカ類．pp. 162-165，503-507．文一総合出版社，東京．
- Nagai, K., F. Nakayama, K. I. Tokita and K. Kawakami, 2019. Genetic structure and diversity of two populations of the eastern buzzard (*Buteo japonicus japonicus* and *B. j. toyoshimai*) in Japan. Zoolog. Sci., 36: 471-478.
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．日本鳥学会，三田．438pp.
- 岡部正義，1931．手紙通信 昭和五年一二月一五日．鳥獣報告集，6(11): 264-273．
- Suzuki, T. and Y. Kato, 2000. Abundance of the Ogasawara Buzzard on Chichijima, the Pacific ocean. Journal of Raptor Research, 34: 241-243.

- Takagi, M. and M. Ueda, 1998. Tree nesting by Ogasawara Buzzards on Chichijima in the Bonin Islands. Jpn. J. Ornithol. 46(3): 175-176.
- Vaurie, C., 1961. Systematic notes on Palearctic birds. No. 47 Accipitridae: The Genus *Buteo*. American Museum Novitates, 2042: 1-14.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Buteo japonicus toyoshimai has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Buteo japonicus toyoshimai* is listed as EN under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Bare area, Forest, Grassland, Farmland, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Bare area, Forest, Grassland, Farmland, Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Limited distribution, Other
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.


©池田昇平（湖北野鳥センター）


©川上和人

執筆者: Author:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所） Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

フクロウ目 Strigiformes　フクロウ科 Strigidae

シマフクロウ

***Ketupa blakistoni blakistoni* (Seebohm, 1884)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　EN	基準 E:　－
D．成熟個体数が 250 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 北海道における定着つがい数が約 100 であることから。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

ロシア沿海地方を中心に生息する大陸亜種と、主に北海道と国後島に分布する島嶼亜種が存在する。かつては北海道広域に生息していたが、森林伐採・ダム建設・河川改修等を原因とする生息環境消失により絶滅の危機に瀕した。現在は東部を中心に約 100 つがいが生息する。魚類を主食とし、広葉樹大径木の樹洞に営巣する。1984 年から国の保護増殖事業により人為給餌・巣箱設置・個体識別のための足環装着が継続され、一部では生息地復元の試みが始まっている。飼育下繁殖も軌道に乗っている。

基礎情報

【形態】

世界最大級のフクロウで、全長 66～69 cm、体重 3,150～3,600 g（オス）、3,300～4,600 g（メス）。雌雄同色。全体に灰褐色で発声時には喉の白色が際立つ。全身はふ蹠まで柔らかい羽毛に覆われているが、趾（足指）には羽毛を欠く。鮮やかな虹彩は山吹色からレモン色の個体差がある。安静時は目立たないが、緊張時には耳羽が際立つ。近似するワシミミズクは、趾も羽毛に覆われていること、虹彩が橙色であることで本種と識別できる。

【生活史】

留鳥。一夫一妻の婚姻形態をもち、つがい関係は長期にわたる。ひとつがいが河川を中心に 10～14 km^2の行動圏を持つ。2 月上旬に交尾期を迎え、2 月末から 3 月中旬に 1～2 個の卵を産む。33～41 日間の抱卵を経て、3 月下旬から 4 月中旬に孵化する。抱卵および抱雛はすべてメスが行う。孵化から 47～61 日で巣立つ。満 1 歳あるいは 2 歳の春に出生地から分散するが、最長 5 歳まで親元への帰還を繰り返す個体もいる。3～4 歳で繁殖を開始し、30 歳を超えて繁殖を続ける個体も複数存在する。

【生息環境】

遡河性あるいは河川残留型のサケ科魚類が主要な餌資源であるため、生息には河川を中心とした水系が欠かせない。河川・湖沼、海岸線で狩りを行い、水際の落葉広葉樹林・針広混交林を昼間のねぐらおよび営巣地として利用する。サケ科魚類の他にも、ハナカジカやフクドジョウ等、多岐に渡る魚類を捕食し、海岸やタイドプールの魚類も餌とする。カエル等の両生類が魚類に次ぐ主な餌資源であり、エゾアカガエルの産卵地は、繁殖期の重要な採餌場所である。ほかにカモ類等の鳥類、野ネズミやトガリネズミ等の小型哺乳類も餌としている。繁殖には主に胸高直径 80 cm 以上の広葉樹の樹洞を利用するが、例外的に岩棚への営巣事例もある。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，湿地・湿原・細流，河川源流域，河川上流域，河川中流域，湖・ダム湖 【陸域_平地部 海岸部】森林，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，河口域，ワンド，小河川，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，海崖・岩浜・岩礁（磯），汽水域，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯】岩礁（磯），干潟
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

オホーツク海沿岸マガダンから日本海沿岸のロシア沿海地方およびサハリン南部、国後島と北海道に分布する。ただし、サハリンについては 1975 年以降の生息は報告されていない。色丹島では定着個体の存在は否定されてきたが、近年、複数個体の存在が示唆される調査結果が得られている。中国東北部や北朝鮮にも分布するとされるが、近年の生息情報は無い。大陸亜種と北海道を含む島嶼亜種に分けられる。

北海道においては、江戸時代から函館近郊の北海道南部における生息記録が存在し、明

治時代に札幌市および周辺市町村で採集された標本が現存する。アイヌの口頭伝承およびフクロウ送り（イオマンテ）の記録から、明治大正期には釧路地方、阿寒、白糠等の道東域、オホーツク海岸の斜里、日本海岸の石狩川や天塩川中～下流域、太平洋岸では十勝川筋、日高地方（浦河、三石、新冠）、胆振地方（鵡川、西別川、尻別川）、北海道南部では内浦湾岸、長万部、八雲での生息が確認できる。さらに現存する標本記録から、明治後期からの 20 世紀前半には、北海道北部の剣淵町、東部の釧路市、川上郡雪裡（現鶴居村）、十勝の大樹村（現大樹町）、大雪山系、千歳市支笏湖、恵庭村（現恵庭市）、新十津川での分布も確認できる。1950～1970 年代には、上川振興局美深町、北海道中央部の大雪山系、富良野市、日高振興局えりも町、千歳市、小樽市、常呂郡置戸町、北海道東部の帯広市、十勝幌加、釧北峠、弟子屈町、阿寒町、標津町、中標津町、羅臼町、根室市、清里町で標本あるいは文献資料による分布が確認できる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本の高度経済成長期以降の森林伐採による天然林消失と人工林植林および工作物建造による河川環境悪化に伴う魚類生息環境悪化により、シマフクロウの分布域は縮小を続け、北海道南部、南西部の胆振地方、札幌を中心とした石狩地方、北海道北部から姿を消し、現在の分布域は北海道東部の知床半島に全生息地の 3～4 割が分布するほか、根室および周辺の根釧台地、十勝川上流域と大雪山系山麓部、日高山脈山麓部が主な分布域である。近年、四十余年ぶりに北海道北部での生息が確認され、2012 年、繁殖に成功したが、2016 年を最後に再び生息は確認されなくなっている。道北・道央・道南での分布域復元が大きな課題である。

【生息地の現況】

国による保護増殖事業が 1984 年に開始されて以来、天然の魚類資源が不足する生息地での補助給餌と、天然樹洞の代わりとなる巣箱設置が継続されている。2025 年 3 月時点で、道内 10 箇所で冬季を中心に生きた魚の給餌が実施されている。巣箱については総設置個数が 420 を超え、そのうち 199 個が現存し、72 個に繁殖利用歴がある。

一方で、法制度に基づいた生息環境保全は不十分である。シマフクロウ生息地の中で、鳥獣の営巣に影響を及ぼす恐れのある観察や撮影行為に環境大臣の許可を必要とする鳥獣保護区の特別保護指定地域に指定されているのは、知床鳥獣保護区のごく一部にすぎない。ほかには林野庁が設けている特定動物生息地保護林（現名称は希少個体群保護林）制度により、生息地の天然林保全と復元に取り組んでいる。

生息地への人の立ち入りに対して法的に規制されていないことで、複数の生息地で、バードウオッチャーやカメラマンが、本種の営巣行為や採餌行為に対して、深刻な妨害を及ぼしている。

【個体数の現況】

個体数は微増しており、明らかになっている繁殖つがい数は、地域別に知床で 32、根釧で 30、大雪山系で 16、日高山系で 10 である。これに繁殖歴の明らかでないつがいを加え、

北海道全域で約 100 つがいが生息している。毎年の巣立雛数も増加しており、2025 年度にはこれまでで最も多い 61 羽が巣立齢まで育ったことが確認されている。環境省による鳥類標識事業の実施により、精度の高い生息数の把握とモニタリングが継続されている。

存続を脅かす要因

とくに 1950 年代以降に激化した天然林伐採による農地および居住地への土地利用開発、林業による大規模森林伐採と人工林の拡大造林により営巣環境が消失した。河川へのダム設置、河川改修、河口部での遡河性魚類の捕獲、湧水地へのサケ・マス孵化場や養魚場の設置により餌資源が激減した。現在の主要な死因は道路での交通事故と列車との衝突事故、送配電柱や電線での感電死、養魚場での防鳥ネットや漁網に絡まることによる溺死などであるが、知床半島ではエゾクロテンによる巣内雛の捕食も相次いだ。遺伝的多様性は低く近親交配も頻発している。近年、カメラマンやバードウオッチャー、エコツアーガイドによる生息地への侵入が採餌や繁殖行動を阻害している。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湖沼開発，河川開発，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，交通事故，捕食（在来種による），人工構造物への衝突，分布・産地局限，近交弱勢
	（現在）	森林伐採，湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，スキー場，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，交通事故，捕食（外来種による），捕食（在来種による），発電施設建設，シカ食害，人工構造物への衝突，気候変動，分布・産地局限，近交弱勢

特記事項

1984 年から国の事業による人為給餌・巣箱設置・標識調査・事故対策等が行われている。1993 年に種の保存法による国内希少野生動植物種に指定された後、同法に基づく保護増殖事業計画が策定され、事業が継続している。2025 年度 3 月時点で、道内 10 箇所で冬季を中心に活魚の給餌が実施されており、巣箱については 199 個が現存している。生息地の一部は、国指定知床鳥獣保護区特別保護指定区域に含まれているが、他地域では法的規制を伴う生息地保全は極めて不十分である。林野庁では特定動物生息地保護林（現名称は希少個体群保護林）を設定し、天然林の保全と復元にも取り組んでいる。シマフクロウの生息環境として重要な流域環境復元のために、根釧地域では魚類の移動を妨げる落差工の改良、魚道設置などの取組を継続している。世界自然遺産地域の河川では、治山ダムのスリット化により海と河川を往来する遡河性魚類の移動を可能にしている。

保護増殖事業の一環として域外保全の取組も継続している。釧路市動物園は 1995 年から飼育下での繁殖に成功し、その後、飼育施設も増加し、旭川市旭山動物園でも 2018 年に繁殖に成功、札幌市円山動物園でも 2021 年から繁殖に成功している。さらに本州の動物園でも 2019 年から飼育が再開され、現在は 3 県の動物園が飼育および繁殖に取り組んでいる。環境省釧路湿原野生生物保護センターでは、傷病個体の治療及び野生復帰に取り組んでいる。日本野鳥の会は土地購入等による保護区設置を 14 つがいの生息地で進め、

保護区内では広葉樹の森づくりにも取り組んでいる。

個体数および分布等の個体群に関する情報および国の保護対策は、以下のウエブサイトに公開されている。

・環境省北海道地方環境事務所「シマフクロウ保護増殖事業」
https://hokkaido.env.go.jp/post_9.html

また、シマフクロウを拡げる取り組みとして、HP の制作など普及啓発事業にも力を入れ始めた。

・環境省「シマフクロウと共に暮らす」
https://policies.env.go.jp/hokkaido/withfishowl/

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	シマフクロウ	*Ketupa blakistoni blakistoni*	CR
第４次 2019:	シマフクロウ	*Ketupa blakistoni blakistoni*	CR
第４次 2018:	シマフクロウ	*Ketupa blakistoni blakistoni*	CR
第４次 2017:	シマフクロウ	*Ketupa blakistoni blakistoni*	CR
第４次 2015:	シマフクロウ	*Ketupa blakistoni blakistoni*	CR
第４次:	シマフクロウ	*Ketupa blakistoni blakistoni*	CR
第３次:	シマフクロウ	*Ketupa blakistoni blakistoni*	CR
第２次:	シマフクロウ	*Ketupa blakistoni blakistoni*	CR
第１次:	シマフクロウ	*Ketupa blakistoni blakistoni*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠA 類(Cr)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- BirdLife International, 2001. Threatened birds of Asia: The BirdLife International Red Data Book. Cambridge, UK.
- 早矢仕有子，1999．北海道におけるシマフクロウの分布の変遷–主に資本資料からの推察–．山階鳥類研究所研究報告，31: 45-61.
- 早矢仕有子，2009．生息地保全が大切ではないかμm –シマフクロウ–．山岸哲（編），日本の希少鳥類を守る，pp. 75-98．京都大学学術出版会，京都.

- Hayashi, Y., 2009. Close inbreeding in Blakiston's Fish-owl (*Ketupa blakistoni*). Journal of Raptor Research, 43: 145-148.
- 早矢仕有子，2022．シマフクロウ 家族の物語．北海学園大学出版会，札幌.
- 早矢仕有子，2023．絶滅危惧種シマフクロウを対象とした写真撮影者の特性および観光利用における問題点．保全生態学研究，28(1): 5-23.
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京.
- Omote, K., C. Nishida, T. Takenaka and R. Masuda, 2012. Temporal changes of genetic population structure and diversity in the endangered Blakiston's Fish Owl (*Bubo blakistoni*) on Hokkaido island, Japan, revealed by microsatellite analysis. Zoological. Science, 29: 299-304.
- Slaght, J. C. and S. G. Surmach, 2008. Biology and conservation of Blakiston's Fish-owls (*Ketupa blakistoni*) in Russia: a review of the primary literature and an assessment of the secondary literature. Journal of Raptor Research, 42: 29-37.
- Slaght, J. C., T. Takenaka, S. G. Surmach, Y. Fujimaki, I. G. Utekhina and E. R. Potapov, 2018. Global distribution and population estimates of Blakiston's Fish-owls. In: Nakamura F. (ed) Biodiversity conservation using unbrella species Blakiston's Fish Owl and the Red-crowned Crane, pp. 9-18. Ecological Research Monographs.
- Takenaka, T., 2018. Ecology and conservation of Blakiston's Fish Owl in Japan. In: Nakamura F. (ed) Biodiversity conservation using umbrella species Blakiston's Fish Owl and the Red-crowned Crane, pp. 19-46. Ecological Research Monographs.
- 山本純郎，2025．シマフクロウのすべて．北海道新聞社，札幌.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ketupa blakistoni blakistoni has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ketupa blakistoni blakistoni* is listed as EN under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, Wetland/Marsh/Stream, River headwater, Upper river basin, Middle river basin, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Estuary, Inlet, Small river, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Sea Cliff/Rocky beach/Reef, Brackish water, Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Reef, Intertidal mudflat
Threat types:	Logging and wood harvesting, Lake development, River development, Wetland development, Field preparation, Ski resort development, Land development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction,

	Vehicle collision, Predation (by alien species), Predation (by native species), Power plant construction, Deer feeding damage, Collision with man-made structures, Climate change, Limited distribution, Inbreeding depression
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	早矢仕有子（北海学園大学）
Author:	Yuko Hayashi

公表年月：2026 年 3 月

ブッポウソウ目 Coraciiformes　ブッポウソウ科 Coraciidae

ブッポウソウ

***Eurystomus orientalis cyanocollis* Vieillot, 1819**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
巣箱かけが熱心に行われている地域以外の多くの地域において個体数が減少し、分布の孤立化が進んでいる。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
岡山県や広島県等では、ブッポウソウの繁殖のための巣箱を設置する活動が実施されており、実際にブッポウソウの繁殖に利用されている。ブッポウソウの巣箱の設置がされなくなると、ブッポウソウの繁殖成功数は減少することが予測される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

かつては、本州、四国、九州に広く分布していたが、個体数の減少により現在は限られた地域に局所的に分布するのみである。現在の繁殖つがい数は、約 550 つがいで、その約 9 割は人のより設置された巣箱で繁殖している。巣箱かけにより、中国地方と長野県では、最近繁殖数の回復が見られる。

基礎情報

【形態】

全長約 30 cm、翼長 18～20 cm。雌雄同色。頭部は黒褐色、体は濃い青緑色。嘴と脚は赤い。飛ぶと翼の白斑が目立つ。

【生活史】

5 月初めの連休の頃に夏鳥として日本に渡来する。一夫一妻のつがいを形成し、5 月下旬から 7 月上旬に樹洞や人工構造物の穴に 3～5 卵産み、雌雄交代で抱卵する。抱卵日数は 22～23 日間で、育雛日数は約 20 日間。9 月には南への渡りを開始する。

【生息環境】

里山環境など低山帯の林に隣接した開けた環境に生息。60 年から 70 年前には、神社仏閣の境内での繁殖が広く見られ、各地の繁殖場所が国・県・市町村の天然記念物に指定されたが、現在これらの環境での繁殖ではほとんど見られていない。岡山県や広島県などの中国山地では、人家周辺の木製電柱に開けられた穴に営巣していたが、現在ではコンクリート製などの電柱にかけられた巣箱で繁殖している。日本海沿岸の多雪地では、低山のブナ林の自然の樹洞や巣箱で現在も繁殖が少数見られる。長野県南部の他、四国、九州では川にかけられた橋や鉄橋などの人工構造物の穴でごく少数が繁殖している。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】市街緑地
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

ユーラシア大陸の東端及び東南アジアの島々を中心に、インドから日本、オーストラリアにかけて分布。日本には、夏鳥として本州、四国、九州に渡来する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

70 年以上前までは、本州、四国、九州に広く分布していたが、現在では東北から関東周辺で繁殖が見られる場所は皆無に近い状況である。また近畿地方においても、この鳥の繁殖地として有名であった奈良県などでは現在繁殖が見られない。山梨県では、身延町などに少数繁殖するのみである。現在、本州中部でまとまった数が繁殖しているのは、長野県南部の天竜川沿いと北部の千曲川沿いの栄村である。栄村に続く新潟県にも以前はまとまった数が繁殖していたが、現在ではごく少数が繁殖するのみである。

【生息地の現況】

巣箱かけが熱心に行われている中国山地や長野県では、確実に繁殖数の回復が見られているが、それ以外の多くの地域では数が減少し、分布の孤立化が進んでいる。

【個体数の現況】

現在、最も多くの個体が繁殖するのは、岡山県、広島県、鳥取県といった中国山地であ

る。この地域では、一時は絶滅寸前まで数が減少したが、その後電柱への巣箱かけによって、現在で約 400～500 つがいに回復している。九州と四国では、ごく限られた場所にわずか繁殖しているのみである。近畿、東海、関東、東北では、最近繁殖が見られなくなった。本州中部から東日本にかけて、現在最も多く繁殖しているのは長野県で、県の南部と北部合わせて 40 つがいが繁殖している。山梨県には、かつてはまとまった数が繁殖していたが、現在は身延町などに数つがいが繁殖するのみである。日本で繁殖するつがい数は、すべてあわせても 550 つがいほどである。

存続を脅かす要因

全国的には、餌となる昆虫が多く生息する広葉樹林や水辺環境の減少、社寺林周辺の宅地化等による里山環境の悪化、営巣に適した樹洞の減少が、個体数の主な減少要因と考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，洞窟の消失や環境悪化
	（現在）	森林伐採，洞窟の消失や環境悪化

特記事項

2010 年に広島県と鳥取県で捕獲した 10 羽に軽量記録装置（ジオロケータ）を装着して放鳥し、翌年このうちの 6 羽を再捕獲してデータ解析を行ったところ、広島県で繁殖した 1 羽がボルネオ島で越冬していることが確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ブッポウソウ	*Eurystomus orientalis calonyx*	EN
第４次 2019：	ブッポウソウ	*Eurystomus orientalis calonyx*	EN
第４次 2018：	ブッポウソウ	*Eurystomus orientalis calonyx*	EN
第４次 2017：	ブッポウソウ	*Eurystomus orientalis calonyx*	EN
第４次 2015：	ブッポウソウ	*Eurystomus orientalis calonyx*	EN
第４次：	ブッポウソウ	*Eurystomus orientalis calonyx*	EN
第３次：	ブッポウソウ	*Eurystomus orientalis calonyx*	EN
第２次：	ブッポウソウ	*Eurystomus orientalis calonyx*	VU
第１次：	ブッポウソウ	*Eurystomus orientalis calonyx*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】重要希少野生生物(B ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【秋田県】準絶滅危惧(NT),【山形県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク),【群馬県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【埼玉県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁),【東

京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(繁殖期)，【新潟県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類，【山梨県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【長野県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【岐阜県】絶滅危惧Ⅰ類，【静岡県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【愛知県】絶滅危惧ⅠA類(CR)(繁殖),絶滅危惧Ⅱ類(VU)(通過)，【三重県】情報不足(DD)，【滋賀県】絶滅危惧種，【京都府】絶滅寸前種，【兵庫県】Aランク，【奈良県】絶滅寸前種，【和歌山県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類，【広島県】準絶滅危惧(NT)，【山口県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【徳島県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【香川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福岡県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【佐賀県】情報不足種，【長崎県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【熊本県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【大分県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【宮崎県】絶滅危惧ⅠB類(EN-r)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【長野県・滋賀県・京都府・鳥取県・大分県】

参考文献

- 飯田智彦，2001．人工構造物への巣箱架設によるブッポウソウの保護増殖策．日本鳥学会誌，50(1): 43-45．
- Nakamura, H. and T. Tabata, 1988. Why does the Broad-billed Roller *Eurystomus orientalis* bring Strange Objects to the Nestμm Jpn. J. Ornithol, 36: 137-152.
- 中村浩志・田畑孝宏，1990．ブッポウソウの雛の食物．日本鳥学会誌，38(3): 131-139．
- 中村浩志，2004．甦れ、ブッポウソウ．山と渓谷社，東京．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Eurystomus orientalis cyanocollis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Eurystomus orientalis cyanocollis* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Urban green area
Threat types:	Logging and wood harvesting, Loss of caves and environmental deterioration
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Nagano・Shiga・Kyoto・Tottori・Oita】.



執筆者:	中村浩志（一般財団法人中村浩志国際鳥類研究所）
Author:	Hiroshi Nakamura

公表年月：2026 年 3 月

キツツキ目 Piciformes　キツツキ科 Picidae　　日本固有

オリイコゲラ

***Yungipicus kizuki orii* Kuroda, 1923**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
50 年前の調査と比較して、観察個体数について明らかに減少傾向がみられる。原因として、開発のための森林伐採、採水のための河川の開発などが考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

西表島の常緑広葉樹林等に生息する日本固有亜種である。亜種コゲラ（*Yungipicus kizuki nippon*）よりも小型である。50 年前の調査と比較すると、観察個体数について明らかに減少傾向がみられる。

基礎情報

【形態】

嘴峰約 13.5 mm、翼長 76.5－79 mm、跗蹠約 13.5 mm、尾長 44.5－46.5 mm。亜種コゲラ（*Yungipicus kizuki nippon*）に酷似するが、体は全体に濃色で、頭上は黒褐色であり、亜種コゲラよりも小型である。

【生活史】

雑食性であるが、主に昆虫類やクモ等の動物質の物を食べる。亜種コゲラ（*Yungipicus kizuki nippon*）と同様に、生きた木の枯れ枝や、立ち枯れ木に繁殖のための巣穴を作る。

【生息環境】

常緑広葉樹林に生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

西表島に留鳥として分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年において大きな変化はないと考えられる。

【生息地の現況】

開発のための森林伐採、採水のための河川の開発などにより、生息に適した環境が減少している。

【個体数の現況】

個体数の総数については不明であるが、30～40 年前の調査と比較して、観察個体数について明らかに減少傾向がみられる。

存続を脅かす要因

減少の要因として、開発のための森林伐採、採水のための河川の開発などが考えられる。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	森林伐採，河川開発

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 清棲幸保，1978．増補改訂版 日本鳥類大図鑑Ⅰ．pp. 652．講談社，東京．
- 森岡弘之，1974．琉球列島の鳥相とその起源．国立科学博物館専報，(7): 203-211．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．506pp. 日本鳥学会，東京．
- 沖縄県環境部自然保護課，2017．改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）．pp. 132-133．沖縄県環境部自然保護課，沖縄．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Yungipicus kizuki orii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Yungipicus kizuki orii* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	西海功（国立科学博物館）
Author:	Isao Nishiumi

公表年月：2026 年 3 月

キツツキ目 Piciformes　キツツキ科 Picidae　　日本固有

ノグチゲラ

***Dendrocopos noguchii* (Seebohm, 1887)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab+2ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1+2．出現範囲が 5000 km²未満かつ生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

Yagihashi et al 2021 により、ノグチゲラの繁殖個体群は、フイリマングースの重大な影響を受けることが定量的な解析により明らかとなった。現在行われているマングース防除事業（救済策）の成果で、近年分布域や確認個体数が増加傾向にあるが、救済策がとられなければ、マングースの分布域の再北上によって、ノグチゲラの減少が持続すると予測される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

地上生活に適応した沖縄島に固有の中型のキツツキ。第二次世界大戦以降の戦災や開発等による森林環境の悪化や侵略的外来種フイリマングースの影響によって分布域が大きく縮小した。現在は、沖縄島北部の（大宜味村塩屋湾から東村平良を結ぶ）ST ライン以北の常緑広葉樹林の老齢林とその周辺地域にのみが主要な生息地である。一夫一妻制で、11 年間継続したペアが確認され、野外での最高寿命は 14 歳以上である。沖縄島北部の西銘岳から玉辻山にかけての脊梁部に残された常緑広葉樹の老齢林は、やんばる国立公園の設置、世界自然遺産「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の登録により、連続的な保護区となった。近年、伐採面積の減少に伴う森林回復や、環境省・沖縄県のマングース防除事業の進展にともない、分布が回復し始めている。マングースの影響を強く受けることから、本種の絶滅リスクを低減するためには、マングースの根絶が必須であることが定量的な解析により示されている。

協力者:　渡久地豊

基礎情報

【形態】

全長約 30 cm、翼長 14-16 cm、体重 115-165 g。全体に茶褐色で翼には白斑があり、下腹部や下尾筒は赤色味を帯びる。オスの頭頂は赤色で、メスは黒褐色、幼鳥は雌雄共に赤色。

【生活史】

留鳥。産卵期は 3-5 月、4 月の産卵が最も多い。抱卵期間は 11 日前後、育雛期間は約 4 週間。造巣、抱卵、雛への給餌は雌雄共に行うが、夜間の抱卵や抱雛はオスが行う。一腹卵数は 2-7 卵で 4 卵が最も多い。巣立ち雛数は 2 羽が最も多く、最大 4 羽。雑食性で、巣内雛への給餌物に雌雄差が見られることが知られている。メスは木の中に潜むカミキリムシの幼虫など木をつついて捕まえたものを、オスではセミの幼虫やキムラグモなどの地中に潜む節足動物を土を掘って捕まえたものをそれぞれ主要な餌として雛に給餌する。一年を通じて植物質の餌を利用し、タブノキ、ヤマモモ、イチゴ類、イチジク類、アカメガシワ、ハゼノキなどの実、イタジイ（スダジイ）、マテバシイのドングリなどが記録されている。一夫一妻で年 1 回繁殖を行い、雌雄共に 1 歳から繁殖可能である。11 年間つがい関係を維持したと考えられるペアが観察されている。野外での最長寿命は少なくとも 14 歳以上であり、10 歳以上の繁殖個体が複数確認されている。

【生息環境】

主要な生息地は、イタジイの優占する常緑広葉樹の老齢林である。胸高直径約 20 cm 以上の心材腐朽した大径木や立枯れ木で営巣し、老齢林ではイタジイやニッケイ、タブノキが、二次林では成長の早いセンダンやリュウキュウマツ、ハンノキなどが営巣木として記録されている。第二次世界大戦後の皆伐を経験していない 2020 年時点で林齢 75 年以上の森林が主要な生息地となっている。

本種は地上生活に適応しているため、侵略的外来種フイリマングースの影響を強く受ける。環境省及び沖縄県のマングース防除事業の進展により、2007 年から 2016 年にかけて分布、確認個体数が回復傾向にあることが示されている。マングースの高密度地域ではノグチゲラの確認個体数は減少し、マングース対策が行われていない名護市以南の森林域に、安定した生息地は見られない。

2010 年に沖縄島で初めて確認されたタイワンハムシによる食害でハンノキの枯死木が大量に発生し、2013 年前後は、道路沿い、耕作放棄地、河川沿い等に生育していたハンノキの立枯れ木が、二次林におけるノグチゲラの主要な営巣木となっていた。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，耕作放棄地 【陸域_平地部】森林，耕作放棄地
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄島北部（やんばる地域）の常緑広葉樹林に 1 個体群のみが分布する。ノグチゲラが新種記載（1887 年）された明治時代以前には恩納村まで分布していたとされる。昭和時代は少なくとも名護市内で複数の標本が得られ、観察記録も多いことから、名護市内まで繁

殖分布していたと考えられる。1980 年代まで多野岳などの森林域に繁殖分布していた名護市内で 1990 年代に確認されなくなり、名護市内及び、大宜味村、東村の南部（大宜味村塩屋湾から東村平良を結ぶ ST ライン以南）から絶滅状態となった。本来は、沖縄島北部の ST ライン以北と同様にイタジイが優占する常緑広葉樹林が広がる沖縄市まで繁殖分布していたと考えられる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄島の最北部に位置する国頭村、大宜味村、東村の ST ライン以北の常緑広葉樹林が主要な分布域である。脊梁部に残された老齢林で営巣密度が高いが、人里近くのセンダンや、リュウキュウマツの混交する二次林や耕作放棄後に遷移したハンノキの優占する二次林でも、樹木病害で発生した立枯れ木での営巣が確認されている。近年、伐採面積の減少に伴う森林の蓄積の回復や、侵略的外来種フイリマングースの防除事業の進展に伴い分布が回復傾向にあり、大宜味村塩屋から東村の福地ダムにかけて設置されたマングース第一北上防止柵の北側（SF ライン以北）では、脊梁部の森林から人里近くの二次林まで広く営巣が確認されている。また、マングースの防除が進展している第一柵と第二柵（塩屋から東村平良を結ぶ ST ライン）の間の地域（第 1 バッファーと呼ばれる）では、農地の間に残された孤立林や人里近くの森林でも生息、営巣が確認されている。一方、マングース対策が近年開始された第二柵から第三柵（名護市の北部を東西に横断する県道 14 号にそって設置）の間の第 2 バッファーや名護市内では、老齢林が広がる脊梁部でも断続的な観察や営巣が記録されるが、安定した生息地にはなっていない。

【生息地の現況】

昭和時代に大規模な森林伐採が行われた。平成以降も、ダム建設や、木材生産のための森林伐採や林道建設が行われ、米軍基地内ではヘリパッド建設に伴う開発などが行われた。近年は伐採面積が減少し、森林の蓄積が回復しつつあり、2016 年のやんばる国立公園の新設、2021 年の世界自然遺産の登録に伴い、西銘岳から玉辻山にかけての脊梁部の主要な常緑広葉樹林は連続的に保護区となった。1990 年代以降、大宜味村と東村平良を結ぶ ST ライン以北にフイリマングースが侵入し、本種の分布や密度に影響を与えた。2007 年のマングース第一北上防止柵（SF ライン）の完成以降、SF ライン以北のマングースの減少がみられはじめ、プレイバック法による繁殖分布調査により、分布域及び確認個体数の増加、回復が確認され始めている。一方、過去の分布域である名護市内では、北部からの分散個体と思われる個体の確認や営巣の記録があるが、継続的な観察はなく、マングースの影響を強く受けていると考えられる。また、2024 年時点では、マングース対策が継続されているものの、SF ライン以北の捕獲努力量あたりのマングースの捕獲数が増加しており（環境省沖縄奄美自然環境事務所 2024）、マングースの個体数がふたたび増加していると考えられる。

【個体数の現況】

1980 年代までに急速に個体数が減少したと考えられている。1990 年前後に行われた調

査結果から、200 つがい未満の営巣数と、最大 500 羽程度の生息個体がいる可能性が示唆されていた。近年、マングース対策が進展しているマングース第一北上防止柵、第二柵の北側では、脊梁部の常緑広葉樹の老齢林だけでなく、人里近くの二次林にも営巣密度は低いものの、繁殖分布域が回復しつつある。2025 年発表の推定値では、マングース対策が進展しノグチゲラの安定した繁殖個体群があると考えられる大宜味村塩屋と東村平良を結ぶ ST ライン以北では、繁殖個体数約 882 羽（515 羽～1249 羽）とされている。近年、ST ラインから県道 14 号線までの地域でマングース防除が進み、ノグチゲラの確認が増えている。さらに、防除が行われていない名護市内でも、北部から分散した個体とみられるノグチゲラの確認が増えている。現在、名護市内で安定した繁殖地は確認されていないが、将来、マングースの排除に成功した場合、潜在的に約 357 羽（249 羽～465 羽）の繁殖個体が名護市内に生息できると推定された。マングースの根絶に成功し名護市内まで繁殖分布域が回復すれば、ノグチゲラの繁殖個体数は安定的に 1000 羽を超え、本種の絶滅リスクは大幅に低減すると期待される。

存続を脅かす要因

常緑広葉樹の老齢林を主要な生息地とするため、森林伐採、土地造成、交通インフラ建設、ダム・河川工作物建設が挙げられる。さらに、ハシブトガラスやアカマタ等の在来種に加え、フイリマングースやイエネコ等の外来種による捕食が挙げられる。特に、フイリマングースの侵入は大きな脅威となっている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による），捕食（在来種による）
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による），捕食（在来種による）

特記事項

ノグチゲラは、中琉球が海によって隔離された更新世後期頃に分化したと推定される沖縄島の固有種である。従来、食肉目哺乳類が生息しない環境で地上生活に適応した本種は、フイリマングースの侵入に伴う強い悪影響を受けることが、定量的な解析により明らかとなった。環境省及び沖縄県によるマングース防除事業の進展により、近年、分布域や確認個体数が回復傾向にある。本種は、マングース防除事業への保全依存種の状態にあるといえる。今後、沖縄島全域からのマングース根絶を実現するための保全対策について検討する必要がある。

イエネコによる捕食、ハシブトガラスやアカマタによる巣内ヒナの捕食が報告されている。

種の保存法に基づく国内希少野生動植物種および、国指定の特別天然記念物に指定されている。沖縄県の県鳥、東村の村鳥に指定されている。東村ではノグチゲラ保護条例が施行され、独自に保護区を設定している。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ノグチゲラ	*Sapheopipo noguchii*	CR
第４次 2019：	ノグチゲラ	*Sapheopipo noguchii*	CR
第４次 2018：	ノグチゲラ	*Sapheopipo noguchii*	CR
第４次 2017：	ノグチゲラ	*Sapheopipo noguchii*	CR
第４次 2015：	ノグチゲラ	*Sapheopipo noguchii*	CR
第４次：	ノグチゲラ	*Sapheopipo noguchii*	CR
第３次：	ノグチゲラ	*Sapheopipo noguchii*	CR
第２次：	ノグチゲラ	*Sapheopipo noguchii*	CR
第１次：	ノグチゲラ	*Sapheopipo noguchii*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，国指定特別天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 阿部愼太郎，1994．沖縄島の移入マングースの現状 －沖縄島・奄美大島の在来種保護のためのマングース防除策を考える－．チリモス，5: 34-43．
- 安座間安史・石田健，1997．ノグチゲラとやんばるの森．BIRDER，11(6): 32-36．
- 辺土名高校生物クラブ，1991．辺土名高校校区内（塩屋、平良以北）におけるノグチゲラの生息状況と個体数について．辺土名高校，沖縄．10pp.
- 北部ダム事務所，2010．大保ダムにおけるノグチゲラ保全のとりくみ～ノグチゲラ保全の 13 年間の記録．内閣府沖縄総合事務局，沖縄．35pp.
- 池原貞雄・高良鉄夫・安部琢哉・与那城義春・下謝名松栄・日越国昭・宮城進，1977．ノグチゲラ *Sapheopipo noguchii*（SEEBOHM）実態調査速報（3）．p. 22-44．沖縄県天然記念物調査シリーズ第 8 集．沖縄県教育委員会，沖縄．
- 城ヶ原貴通・小倉剛・佐々木健志・嵩原建二・川島由次，2003．沖縄島北部やんばる地域の林道と集落におけるネコ（*Felis catus*）の食性および在来種への影響．哺乳類科学，43(1): 29-37．
- 環境省那覇自然環境事務所，2013．平成 25 年度ノグチゲラ追跡調査等業務報告書．那覇自然環境事務所，沖縄．29pp.
- 環境省那覇自然環境事務所，2018．平成 29 年度　第 2 期ノグチゲラ生態調査総括報告書．環境省那覇自然環境事務所，那覇．82pp.

- 環境省沖縄奄美自然環境事務所，2023．令和 4 年度沖縄島北部地域マングース防除事業報告書．環境省沖縄奄美自然環境事務所，那覇．218pp.
- 環境省沖縄奄美自然環境事務所，2024．令和 5（2023）年度沖縄島北部地域におけるマングース防除事業の実施結果及び令和 6（2024）年度計画について （お知らせ）．https://kyushu.env.go.jp/okinawa/press_00109.html
- 小高信彦，2005．ノグチゲラの系統と進化について．特集「ノグチゲラとクマゲラ」，BIRDER，19(9): 18-21．
- 小高信彦・久高将和・嵩原建二・佐藤大樹，2009．沖縄島北部やんばる地域における森林性動物の地上利用パターンとジャワマングース *Herpestes javanicus* の侵入に対する脆弱性について．日本鳥学会誌，58(1): 28-45．
- 小高信彦，2014．ノグチゲラ．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），日本の絶滅のおそれのある野生生物 －レッドデータブック 2014－ 2 鳥類．pp. 64-65．株式会社ぎょうせい，東京．
- 小高信彦，2016．第 9 章 オーストンオオアカゲラとノグチゲラ・奄美群島と沖縄島における固有鳥類の分類と保全について．水田拓（編著），奄美群島の自然史学 亜熱帯島嶼の生物多様性，pp.156-173．東海大学出版，神奈川．
- 小高信彦，2021．世界自然遺産やんばるの森の固有鳥類を守るためには．九州の森と林業，138: 1-3．
- Kotaka, N., J. Preble, K. Saito, Y. Toguchi, M. Kudaka, T. Sakoda and T. Yagihashi, 2021. Recent nest tree use by the critically endangered Okinawa woodpecker in relation to forest age and two exotic forest pests. Journal of Forest Research, 26: 192-200.
- 小高信彦，2021．絶滅危惧種ノグチゲラ－夫婦円満の秘訣はオスの地つつきにあり．どうぶつと動物園，73(2): 22-28．
- 小高信彦・赤井慎太・東竜一郎・石原鈴也・川口秀美・木元侑菜・久高将洋・迫田拓・関伸一・渡久地豊・鳥飼久裕・永井弓子・平城達哉・寛山一郎・水田拓・八木橋勉・山室一樹，2022．沖縄島北部，奄美大島，徳之島における鳥類の繁殖分布と世界自然遺産のゾーニング．九州森林研究，75: 63-70．
- 小高信彦・渡久地豊・長井隆・中田勝士・新里和野・宮平良成・伊藤麻衣・有働竜也・椎野風香，2025．沖縄島固有種ノグチゲラの繁殖個体数の推定と保全の展望．沖縄生物学会第 62 回大会プログラム・講演要旨集．
- Pons, J. M., D. Campión, G. Chiozzi, A. Ettwein, J. L. Grangé, Ł. Kajtoch, T. D. Mazgajski and J. Fuchs, 2021. Phylogeography of a widespread Palaearctic forest bird species: The White‐backed Woodpecker (Aves, Picidae). Zoologica Scripta, 50(2): 155-172.
- Winkler, H., N. Kotaka, A. Gamauf, F. Nittinger and E. Haring, 2005. On the phylogenetic position of the Okinawa Woodpecker (*Sapheopipo noguchii*). Journal of Ornithology, 146: 110-116.

- Yagihashi, T., S. Seki, T. Nakaya, K. Nakata and N. Kotaka, 2021. Eradication of the mongoose is crucial for the conservation of three endemic bird species in Yambaru, Okinawa Island, Japan. Biological Invasions, 23: 2249-2260.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Dendrocopos noguchii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Dendrocopos noguchii* is listed as EN under criteria B1ab+2ab.

B1+2. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km² AND area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Abandoned farmland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Predation (by alien species), Predation (by native species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Nationally Designated Special Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	小高信彦（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Nobuhiko Kotaka

スズメ目 Passeriformes　モズ科 Laniidae

チゴモズ

***Lanius tigrinus* Drapiez, 1828**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab C2a(i)				
基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　EN	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
全国鳥類繁殖分布調査によると、1970 年代の調査の後、2 回の調査（1997～2002 年、2016～2021 年）では記録メッシュ数が大幅に減少している。渡り性のモズ類は一般に土地執着性が高いため、生息確認できなくなった場所に繁殖個体を復活させることは困難と思われるうえ、生息適地のクロマツ林においては、松枯れに伴う防除作業として人為的に伐採された空間がニセアカシア林等に遷移し、生息不適地となることも少なくない。そのため、継続的な減少が予測される。過去 10 年内に、工場用地の建築、高速道整備、砂採取によって大きな生息地改変が生じた場所もある。

C．個体群の成熟個体数が 2,500 未満であると推定される。
【推定根拠】
田悟ほか（2023）によると、推定つがい数は 160 つがいとされる。

加えて、以下の 2. かつ a (i) に該当する事由がある。

2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測される。
【判断理由】
全国鳥類繁殖分布調査によると、1970 年代の調査の後、2 回の調査（1997～2002 年、2016～2021 年）では記録メッシュ数が大幅に減少している。渡り性のモズ類は一般に土地執着性が高いため、生息確認できなくなった場所に繁殖個体を復活させることは困難と思われるうえ、生息適地のクロマツ林においては、松枯れに伴う防除作業として人為的に伐採された空間がニセアカシア林等に遷移し、生息不適地となることも少なくない。そのため、成熟個体数の継続的な減少が予測される。
a) 個体群構造が次に該当
i) 250 以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。
【判断理由】

推定つがい数は 160 羽（320 羽）であり、それらの個体が主要な生息地である秋田県、新潟県等に分散していることから、250 羽以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しないと考えられる。
評価分科会：　鳥類分科会

概要

中国南部やスマトラ、フィリピンで越冬し、日本には夏鳥として渡来する。モズやアカモズよりも樹林地を好み生息し、主として昆虫を採餌する。本州中部から東北地方にかけて局所的に分布するが、元来生息数は少なかったと推測される。都市化や松枯れなどによって生息域を失った例があるものの、かつて生息していた地域の大部分での減少、消失要因は不明である。

現在では主に日本海沿岸で繁殖が確認されているが、そのほとんどが秋田県から新潟県に限られる。その他の地域ではまとまった繁殖地を確認できず、国内での絶滅が危ぶまれる。

基礎情報

【形態】

全長約 18.5 cm、嘴峰長 15～16 mm、翼長 82～90 mm、蹠長 21～25 mm、尾長 69～80 mm。他のモズ類に比べ嘴は相対的に太い。オスは額、目先、過眼線は黒く、前頭、頭頂、後頭、後頸は青灰色。背、肩羽、腰、上尾筒は赤褐色で、黒くて細い横斑がある。下面全体は白色、嘴は黒く、脚は灰黒色。メスはオスに似ているが、目先は汚白色、頭上の灰色は少し褐色を帯び、黒褐色の細かい横斑がある。国内に生息するモズ、アカモズともに頭頂部分が褐色、もしくは橙色であり、チゴモズは青灰色であることから判別できる。さらに肩、および背に明瞭な波状模様を持つモズ類はチゴモズ以外にない。

【生活史】

繁殖期は 5 月から 7 月。ロシアと日本では 6 月が産卵期である。年 1 回繁殖、一夫一妻、縄張り性である。一腹産卵数は 3～6 卵で、ほとんどが 5 卵。卵は淡青緑色の地に、褐色、緑褐色、灰色の斑点のあるものと、淡赤褐色の地に、赤褐色、紫色の斑点があるものがある。抱卵期間は 15～16 日間、育雛期間は 14 日間、巣立った雛は 14 日間、親の縄張りにとどまる。アカモズとのつがい形成が確認され、雑種が生まれる。

【生息環境】

低地から低山の明るい広葉樹林や針広混交林にすみ、郊外の雑木林やゴルフ場のマツ林などでも繁殖する。繁殖つがいの大半を占める北東北の日本海沿岸域では、主にクロマツ林と畑地が連続する環境に生息する。モズよりは樹木の多い所を好むが、林内が薄暗くなるほど鬱閉した林相の環境は好まない。林縁付近に営巣することが多く、畑地や農道沿いなどの開けた空間に面したクロマツ林景観が生息に適している。営巣木はクロマツの記録が多いが、エノキ、ニセアカシア、放棄されクズに覆われた果樹（柿）などで繁殖が確認されている。巣材には枯枝、樹皮、細い根、イネ科植物の茎などが使われ、やや深い皿型の巣を作る。ビニールひもが使われることもある。

生息環境区分：	【陸域_平地部】森林，田地・畑地，耕作放棄地，市街緑地
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

ロシアのウスリー地方から中国東北部、朝鮮半島、日本にかけて繁殖する。日本には夏鳥として渡来し、中国南部、スマトラ、フィリピンなどで越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

九州から北海道にかけて局地的に分布するが、現在は後述する 3 県以外は極めてまれである。1978 年に実施された自然環境保全基礎調査で生息確認があった場所の大部分で、1998 年には記録できなくなるなど、全国的に生息確認地点が減少している。1997～2002 年に繁殖が確認されたメッシュは 2 つ、可能性があるものは 1 つであった。2016～2021 年の

調査では日本海側で記録メッシュ数が微増したが、1990 年代に記録のあった場所で確認されなくなった場所もある。全国的に減少した状態であることは変わらず、まとまった繁殖環境が残されているのは秋田県、山形県、新潟県の沿岸域に集中している。それ以外の地域では石川県や広島県などの一部で繁殖の報告があるが、極めて限定的である。国内で絶滅する可能性がある。

【生息地の現況】

1970 年代に東京都や埼玉県で生息が確認されていた場所は、住宅地となり生息環境が消失した。地域ごとの生息適地に関する情報が不透明なまま各地で姿を消してしまった。現在の生息が確認されている地域では、耕作地や農道等に面したクロマツ耕地防風林のほか、飛砂防備保安林として管理されているクロマツ林の林縁部やギャップである。松枯れに伴う防除作業として人為的に伐採された空間が疎林化することで、一時的に生息適地になることもあるが、その後、人工林の管理不足やニセアカシア林に遷移することで、生息不適地となった場所も少なくない。

【個体数の現況】

近年の研究から、秋田県から新潟県に至る範囲で確認されるつがい数が、現在の国内の大部分を占めると考えられており、推定つがい数は 160 つがいとされる。渡り性のモズ類は一般に土地執着性が高いため、局所的に生息確認できなくなるとその場所に繁殖個体を復活させることは困難と思われる。

存続を脅かす要因

宅地化、道路整備、砂採取、工場建設などの人為的開発によって、生息地が失われている。耕作放棄地の増加や、耕地防風林の減少、クロマツ林の松枯れによる生息環境の悪化なども影響している。松枯れ対策の薬剤散布で使用されるスパウター（大型の送風噴霧器機）の風圧により、卵の落下や巣の損傷など繁殖への直接的な影響も確認されている。90 年代にかけて全国的に減少した要因はよくわかっていない。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，基質・基物の減少及び消失
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移，基質・基物の減少及び消失，その他（砂利採取、マツ材線虫病防除（大型送風噴霧器機による風圧被害））

特記事項

世界的に情報が少ないモズ類の 1 種である。北陸地方の海岸林や東北地方の内陸部でも確認記録があるが、詳細な情報が不足している。一方で近年、秋田県、山形県、新潟県などの日本海沿岸の情報が多数報告されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	チゴモズ	*Lanius tigrinus*	CR
第４次 2019:	チゴモズ	*Lanius tigrinus*	CR
第４次 2018:	チゴモズ	*Lanius tigrinus*	CR
第４次 2017:	チゴモズ	*Lanius tigrinus*	CR
第４次 2015:	チゴモズ	*Lanius tigrinus*	CR
第４次:	チゴモズ	*Lanius tigrinus*	CR
第３次:	チゴモズ	*Lanius tigrinus*	CR
第２次:	チゴモズ	*Lanius tigrinus*	VU
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類,【宮城県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【秋田県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【山形県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク),【群馬県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【埼玉県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁),【千葉県】消息不明・絶滅生物(X),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（区部）】絶滅(EX),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(繁殖期),【新潟県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【山梨県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【長野県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【岐阜県】絶滅危惧Ⅰ類,【静岡県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【愛知県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(通過),【兵庫県】要調査種,【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【福岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【長崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【熊本県】要注目種(AN),【大分県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 今西貞夫・茂田良光・吉野俊幸，2006．雄アカモズと雌チゴモズの種間つがいとその雑種．山階鳥類学雑誌，38(2): 90-96.
- 環境庁生物多様性センター，1999．生物多様性調査鳥類調査中間報告書．生物多様性センター，富士吉田．342pp.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2004．第 6 回自然環境保全基礎調査 種の多様性調査 鳥類繁殖分布調査報告書．環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田．343pp.

- 小池重人・小野島学，1999．新潟県における繁殖期の鳥類相の変化．夏鳥の減少実態研究報告．東京大学渡り鳥研究グループ，東京．110pp.
- 日本野鳥の会，1980．第 2 回自然環境保全基礎調査報告書（鳥類）．環境庁，560pp.
- 日本野鳥の会，1998．鳥類繁殖状況調査．東京都環境保全局，東京．108pp.
- 新潟県野生鳥獣生態研究会，1982．新潟県鳥類目録．新潟県野生鳥獣生態研究会会報．
- 大畑孝二，1991．アカモズとチゴモズの異種間つがいによる巣づくりと求愛給餌．Strix，10: 280-281．
- 田悟和巳・横山陽子・谷口裕紀・柏原聡・樋口広芳，2023．日本海沿岸部におけるチゴモズ *Lanius tigrinus* の分布と個体数．日本鳥学会誌，72(1): 67-76．
- 手井修三，2014．同所的に繁殖するモズ・アカモズ・チゴモズの繁殖時期と繁殖環境．Strix，30: 1-14．
- 上野吉雄・保井浩・森口龍人・今村守・松田賢・佐久間智子・伊東進也，2023．広島県北広島町におけるチゴモズの繁殖生態と生息地の植生．高原の自然史，23: 3-12．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．鳥類繁殖分布調査会，東京．176pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lanius tigrinus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lanius tigrinus* is listed as EN under criteria B2ab C2a(i).

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

C. Population size estimated to number fewer than 2,500 mature individuals and:

2. A continuing decline, observed, projected, or inferred, in numbers of mature individuals and:

a. Population structure in the form:

(i) no subpopulation estimated to contain more than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Urban green area
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Abandonment of management, Successional

	progression/Vegetation change/Natural succession, Reduction or loss of substrate, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	長船裕紀（一般社団法人鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会）
Author:	Yuki Osafune

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　シジュウカラ科 Paridae　　日本固有

ナミエヤマガラ

***Sittiparus varius namiyei* (Kuroda, 1918)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
2 か所の生息地があるが、海により分断されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地である森林の減少、分断が人間活動によって継続的に生じている。また、伊豆諸島北部へのスダジイタマバエの侵入により、冬季の主要な餌であるスダジイが結実せず、冬季の死亡率の上昇による個体群の減少が懸念されている。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

伊豆諸島北部の新島、神津島にのみに留鳥として生息する固有亜種。亜種ヤマガラ（*Sittiparus varius varius*）に比べて体が大きく褐色みが強い。亜種ヤマガラと亜種オーストンヤマガラ（*Sittiparus varius owstoni*）との中間的な形質を持つが、羽色については個体変異が大きい。以前から生息密度は低く、個体数は少ないが、近年生息地として適した常緑広葉樹の自然林が減少しつつある。

基礎情報

【形態】

全長約 14 cm。オスの翼長は 77～82 mm。頭上から後頭にかけてと喉は黒く、後頭部、額から頬の一部はクリーム色。背と胸、腹は淡い橙褐色。翼と尾羽は青灰色。本亜種は、亜種ヤマガラ（*Sittiparus varius varius*）と亜種オーストンヤマガラ（*Sittiparus varius owstoni*）のほぼ中間的な大きさで、亜種ヤマガラに比べて褐色みが強いが、羽色には個体変異が多い。

【生活史】

主としてスダジイなどの木の実、昆虫類などを食べる。樹洞に営巣し、一腹卵数は亜種ヤマガラ（*Sittiparus varius varius*）に比べて少なく、亜種ヤマガラが平均 6.3 卵（最小 3 卵、最大 8 卵、N=85）であるのに対し、本亜種では、神津島での一腹産卵数は平均 5.4 卵（最小 4 卵、最大 8 卵、N=19）である。

【生息環境】

遷移の進んだ常緑広葉樹の自然林を好み、落葉広葉樹の自然林や二次林では少ない。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

伊豆諸島北部の新島、神津島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

利島、新島、神津島に分布するとされ、利島では、1957 年、1970～1972 年には確認されていたが、1996 年の情報を最後に、2003 年および 2009 年には確認されておらず、局所的な絶滅が起きたと考えられる。本亜種の繁殖地面積は、2002～2003 年の調査をもとに、約 20 km^2と推定されている。

【生息地の現況】

樹洞などがあり生息に適した常緑広葉樹の自然林が、新島、神津島の両方で減少している。

【個体数の現況】

新島、神津島の 2 島に、1,760～1,850 羽が生息するとされる（2002～2003 年推定）。

存続を脅かす要因

森林伐採、道路工事などにより、生息地の減少や分断が起きている。近年、スダジイタマバエが南西諸島から移入し、スダジイが結実しない状況が続いており、貯食ができず、

冬期の餌不足が生じている可能性がある。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，分布・産地局限，その他（スダジイタマバエの侵入による餌不足）

特記事項

伊豆諸島北部の 2 島にのみに分布する固有亜種。ダイトウヤマガラ（*Sittiparus varius orii*）とヤクシマヤマガラ（*Sittiparus varius yakushimensis*）を除く 7 亜種の遺伝子解析では、本亜種は、ヤマガラ（*Sittiparus varius varius*）、タネヤマガラ（*Sittiparus varius sunsunpi*）、アマミヤマガラ（*Sittiparus varius amamii*）、オリイヤマガラ（*Sittiparus varius olivaceus*）、オーストンヤマガラ（*Sittiparus varius owstoni*）の 5 亜種と遺伝的に近縁で、タイワンヤマガラ（*Sittiparus varius castaneoventris*）とは遺伝的に離れていることが明らかになっている。

近年、南西諸島よりスダジイタマバエが侵入し、餌となるスダジイが複数年にわたり、結実していない地域がある。そのため、冬期の餌不足が懸念される。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ナミエヤマガラ	*Poecile varius namiyei*	EN
第４次 2019：	ナミエヤマガラ	*Poecile varius namiyei*	EN
第４次 2018：	ナミエヤマガラ	*Poecile varius namiyei*	EN
第４次 2017：	ナミエヤマガラ	*Poecile varius namiyei*	EN
第４次 2015：	ナミエヤマガラ	*Parus varius namiyei*	EN
第４次：	ナミエヤマガラ	*Parus varius namiyei*	EN
第３次：	ナミエヤマガラ	*Parus varius namiyei*	EN
第２次：	ナミエヤマガラ	*Parus varius namiyei*	VU
第１次：	ナミエヤマガラ	*Parus varius namiyei*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 藤田薫・藤田剛・長谷川雅美・樋口広芳，2011．伊豆諸島に生息するヤマガラ 3 亜種の個体数と生息の安定性．Bird Research，7: A13-A31．
- Harrap, S. and D. Quinn, 1996. Tits, Nuthatches & Treecreepers. A & C Black Ltd. London.
- 樋口広芳，1973．伊豆諸島の鳥類（I）繁殖陸鳥の分布と生息環境．鳥，22: 14-24．
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．日本鳥学会，三田．
- 太田紀子・梶田学・柿澤亮三，1998．mtDNA の制限酵素切断パターン比較によるヤマガラの亜種間の類縁関係．1998 年度日本鳥学会大会講演要旨集，pp. 36．
- Tokuda, M. et al., 2022. Hundreds of billions of silent outbreaks: A historic outbreak record of the gall midge *Schizomyia castanopsisae* (Diotera: Cecidomyiidae) on the Izu Islands, Tokyo, Japan, and its potential mechanism. Entomological Science, 25: e12524.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sittiparus varius namiyei has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sittiparus varius namiyei* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Limited distribution, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	山本裕（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Yutaka Yamamoto

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　シジュウカラ科 Paridae　　日本固有

オーストンヤマガラ

***Sittiparus varius owstoni* (Ijima, 1893)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
3 か所の生息地があるが、海により分断されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地である森林の減少、分断が人間活動によって継続的に生じている。また、伊豆諸島南部へのスダジイタマバエの侵入により、冬季の主要な餌であるスダジイが結実しない時期が続いており、冬季の死亡率の上昇や個体群の減少が懸念される（標識調査での捕獲数が近年減少（山本未発表））。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

伊豆諸島南部の三宅島、御蔵島、八丈島に留鳥として生息する固有亜種。亜種ヤマガラ（*Sittiparus varius varius*）より体が大きく、茶褐色みが強い。樹洞等の多い、遷移の進んだ常緑広葉樹林を好むが、生息地の減少や分断が進み、以前に比べて個体数が減少している。

基礎情報

【形態】

頭上から後頭にかけてと喉は黒い。頬や胸部、腹部は赤褐色で、翼、尾羽、背面は暗青灰色。オスの翼長 80～82 mm、尾長 54～55 mm。タイワンヤマガラ（*Sittiparus varius castaneoventris*）を含むヤマガラの 9 亜種の中では最大で、他の亜種よりもひとまわり大きい。

【生活史】

一夫一妻。樹洞に営巣し、巣箱もよく利用する。本州の亜種ヤマガラ（*Sittiparus varius varius*）の一腹卵数は平均 6.3 卵（最小 3 卵、最大 8 卵、N=85）であるが、三宅島の本亜種では一腹卵数は平均 4.0 卵（最小 3 卵、最大 6 卵、N=77）と少ない。また、亜種ヤマガラに較べて、育雛期間が長く、雛が親鳥に餌をねだる際の行動が大げさであるなど生活史に違いがある。秋にスダジイの実を貯食し、冬に取りだして食べるが、繁殖期に雛に与えることもある。

【生息環境】

スダジイやタブノキなどからなる常緑広葉樹の自然林で生息密度が高く、二次林では低い。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

伊豆諸島南部の三宅島、御蔵島、八丈島に留鳥として生息する。なお、式根島では 2007 年から本亜種の繁殖が確認され、神津島でも同じく 2007 年に本亜種が観察されたことから、分布域の変化については今後注視していく必要がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

三宅島、御蔵島、八丈島に分布する。御蔵島では常緑広葉樹の自然林で普通に見られるが、八丈島での分布は局地的である。三宅島や八丈島では生息に適した常緑広葉樹の自然林が以前に比べて減少している。一方で、式根島や神津島では新たに本亜種が観察され、今後の推移が注視される。

【生息地の現況】

生息に適した、常緑広葉樹の自然林は、三宅島、八丈島で以前に比べてかなり減少した。御蔵島では一部で森林伐採や道路拡幅などにより生息環境が悪化しているものの、まだ良好である。三宅島では 2000 年に起きた火山活動により約 6 割の森林環境が減少したが、現在回復しつつある。一方で、近年、スダジイタマバエが南西諸島から生息地に移入し、冬期の主要な食物となるスダジイが複数年にわたり結実しない状況が続いているため、個

体群への影響が懸念される。

【個体数の現況】

三宅島では、2000 年に起きた火山活動により、生息環境が悪化し、個体数は噴火前の約 45%に減少したとされる。その後、生息環境は火山活動の低下とともに回復しつつある。御蔵島では生息環境は残されており、生息密度も高い。八丈島では、本亜種の分布は三原山側に偏っており、八丈富士側では少ない。三宅島以外の島で、噴火前後で個体数が変わっていないと仮定すると、噴火の影響による減少率は約 36%となる。2002～2003 年の本亜種の推定個体数は 4,420～5,290 羽。伊豆諸島南部では、南西諸島よりスダジイタマバエが侵入し、冬期の餌不足から、特に三宅島での個体数減少が著しいが、現況を把握する調査は未実施である。

存続を脅かす要因

森林伐採および道路工事など伴う生息地の減少、悪化があげられる。

この他に近年、スダジイタマバエが南西諸島から移入し、スダジイが結実しない状況が複数年続いている。貯食ができず冬期の餌不足が生じ、個体群への影響が懸念される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，自然災害，分布・産地局限，その他（スダジイタマバエの侵入による餌不足）

特記事項

ダイトウヤマガラ（*Sittiparus varius orii*）とヤクシマヤマガラ（*Sittiparus varius yakushimensis*）を除く 7 亜種の遺伝子解析では、本亜種は、ヤマガラ（*Sittiparus varius varius*）、タネヤマガラ（*Sittiparus varius sunsunpi*）、アマミヤマガラ（*Sittiparus varius amamii*）、オリイヤマガラ（*Sittiparus varius olivaceus*）、ナミエヤマガラ（*Sittiparus varius namiyei*）の 5 亜種と遺伝的に近縁で、タイワンヤマガラ（*Sittiparus varius castaneoventris*）とは遺伝的に離れていることが明らかになっている。本亜種は、2007 年に、式根島での繁殖やナミエヤマガラの分布域である神津島で観察された。

近年、南西諸島よりスダジイタマバエが侵入し、餌となるスダジイが複数年にわたり結実していない。伊豆諸島南部の三宅島、御蔵島、八丈島ではスダジイタマバエの密度が特に高く、冬期の餌不足が発生し、三宅島では個体数が減少している。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オーストンヤマガラ	*Poecile varius owstoni*	EN
第４次 2019：	オーストンヤマガラ	*Poecile varius owstoni*	EN
第４次 2018：	オーストンヤマガラ	*Poecile varius owstoni*	EN

第４次 2017：	オーストンヤマガラ	*Poecile varius owstoni*	EN
第４次 2015：	オーストンヤマガラ	*Parus varius owstoni*	EN
第４次：	オーストンヤマガラ	*Parus varius owstoni*	EN
第３次：	オーストンヤマガラ	*Parus varius owstoni*	VU
第２次：	オーストンヤマガラ	*Parus varius owstoni*	VU
第１次：	オーストンヤマガラ	*Parus varius owstoni*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 藤田薫・藤田剛・長谷川雅美・樋口広芳，2011．伊豆諸島に生息するヤマガラ 3 亜種の個体数と生息の安定性．Bird Research，7: A13-A31．
- Harrap, S. and D. Quinn, 1996. Tits, Nuthatches & Treecreepers. A & C Black Ltd., London.
- Higuchi, H., 1976. Comparative study on the breeding of mainland and island subspecies of the Varied tit, *Parus varius*. Tori, 25(99): 11-20.
- Higuchi, H. and H. Momose, 1981. Deferred independence and prolonged infantile behaviour in young varied tits, *Parus varius*, of an island population. Animal Behaviour, 29(2): 523-528.
- 樋口広芳，1973．伊豆諸島の鳥類（I）繁殖陸鳥の分布と生息環境．鳥，22(93-95): 14-24．
- 樋口広芳，1975．伊豆半島南部のヤマガラと伊豆諸島三宅島のヤマガラの採食習性に関する比較研究．鳥，24(97-98): 15-28．
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．438pp. 日本鳥学会，三田．
- 太田紀子・梶田学・柿澤亮三，1998．mtDNA の制限酵素切断パターン比較によるヤマガラの亜種間の類縁関係．1998 年度日本鳥学会大会講演要旨集，pp. 36．
- Tokuda, M. et al., 2022. Hundreds of billions of silent outbreaks: A historic outbreak record of the gall midge *Schizomyia castanopsisae* (Diotera: Cecidomyiidae) on the Izu Islands, Tokyo, Japan, and its potential mechanism. Entomological Science, 25(4): e12524.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sittiparus varius owstoni has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sittiparus varius owstoni* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Natural disasters, Limited distribution, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	山本裕（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Yutaka Yamamoto

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　シジュウカラ科 Paridae　　日本固有

オリイヤマガラ

***Sittiparus olivaceus* Kuroda, 1923**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
50～60 年前の調査と比較して、観察個体数について明らかに減少傾向がみられる。原因として、開発のための森林伐採、採水のための河川の開発などが考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

西表島、石垣島の森林等に生息する日本固有種。分布域が限られ、個体数もたいへん少ない種個体群として重要である。50～60 年前の調査と比較すると、観察個体数について明らかに減少傾向がみられる。

基礎情報

【形態】

全長 14 cm。雌雄同色で、頭、喉が黒色、額、頬、後頸が栗色、胸、腹部が赤褐色、体側はオリーブ色を帯び、背面が灰褐色である。ヤマガラに比較して淡色である。

【生活史】

西表島、石垣島の森林等において留鳥として生息する。

【生息環境】

常緑広葉樹林の自然林。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

西表島、石垣島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年において大きな変化はないと考えられる。

【生息地の現況】

西表島ではやや標高の高い御座岳、古見岳付近、浦内川、クイラ川及びアイラ川の上流域での観察記録が多く、平地の林縁部や集落付近でも非繁殖期に少数の記録がある。石垣島では於茂登岳登山道、真栄里ダム上流、名蔵川上流及び白水谷でのそれぞれ少数個体の観察記録がある。

【個体数の現況】

西表島、石垣島の両島において密度は低く、個体数はたいへん少ないと考えられる。

存続を脅かす要因

開発のための森林伐採、採水のための河川の開発などが考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成
	（現在）	森林伐採，河川開発

特記事項

分布域が限られ個体数もたいへん少ない種として重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オリイヤマガラ	*Poecile varius olivaceus*	NT
第４次 2019：	オリイヤマガラ	*Poecile varius olivaceus*	NT
第４次 2018：	オリイヤマガラ	*Poecile varius olivaceus*	NT
第４次 2017：	オリイヤマガラ	*Poecile varius olivaceus*	NT
第４次 2015：	オリイヤマガラ	*Parus varius olivaceus*	NT
第４次：	オリイヤマガラ	*Parus varius olivaceus*	NT
第３次：	オリイヤマガラ	*Parus varius olivaceus*	NT
第２次：	オリイヤマガラ	*Parus varius olivaceus*	VU
第１次：	オリイヤマガラ	*Parus varius olivaceus*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 近辻宏帰，1965．第二次西表島生物調査報告－1964 年度－[4]鳥類．早稲田生物，13: 27-34+1．早稲田大学生物同好会.
- Hachisuka, M. and T. Udagawa, 1953. Contribution to the Ornithology of the Ryukyu Islands, Quart. J. Taiwan Mus., 6(3/4): 141-279.
- 池原貞雄，1990，西表島崎山半島の夏季における鳥類の生息状況．平成元年度西表島崎山半島地域調査報告書，pp. 153-157．環境庁自然保護局.
- 清棲幸保，1965．オリイヤマガラ．増補新訂版日本鳥類大図鑑Ⅰ，p. 303．講談社.
- Kuroda, N., 1925. A contribution to the knowledge of avifauna of the Riu-Kiu Islands and the vicinity. Published by the author, Tokyo. 293pp.
- 森岡弘之，1974．琉球列島の鳥相とその起源．国立科学博物館専報，(7): 203-211.
- 沖縄県教育委員会，1985．西表島に生息する天然記念物指定動物の餌動物調査報告．西表島天然記念物緊急調査報告Ⅲ 動物，沖縄県天然記念物調査シリーズ第 25 集.
- 大谷力，2004．沖縄県石垣島におけるヤマガラの観察記録．日本鳥学会誌，53(2): 104-106.
- 折居彪二郎，2003．折居彪二郎資料「琉球及び大隅列島採集日誌（1921）」．沖縄大学地域研究所地域研究叢書，第 1 巻.
- 高橋修，1977．西表島の野鳥．野鳥，42: 36-40.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sittiparus olivaceus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sittiparus olivaceus* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	西海功（国立科学博物館）
Author:	Isao Nishiumi

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ウグイス科 Cettiidae　　日本固有

ダイトウウグイス

***Horornis diphone restrictus* Kuroda, 1923**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
全ての分布域が離島に限られているため、おのずと各生息地点は海域により分断されており、沖縄島を除けば、それぞれの島面積は狭く、生息環境もある程度限られているため、絶滅のリスクは常に比較的高い状態にあると考えられる。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息環境が藪地、低木混じりの草地などに限られることから、宅地開発や農耕地の造成などによって、生息地の減少が継続していると推測される。一方で、放棄された農地、樹林が伐採されて放置されている場所などは、新たな生息適地になりうることから、個体数の増減の実態を正確に把握するには、継続的な土地利用の実態調査を行わなければ難しい。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

藪地、低木混じりの草地などに生息する。南大東島では 1922 年に雌雄各 1 個体ずつが採集されたのみで、その後、確認されず、絶滅したと考えられている。現在生息が確認されているのは、喜界島、沖永良部島、与論島、沖縄島、久米島、渡嘉敷島、座間味島の 7 島である。

基礎情報

【形態】

上面（頭、背、腰、尾羽）と翼は赤みのあるオリーブ褐色で、淡色の眉斑があり、下面は汚白色、脇は灰色みが強い。虹彩は暗褐色、上嘴は暗褐色、下嘴は黄色（wax yellow）で先端のみ褐色、脚はセピア色（Kuroda 1923、1925）。Kuroda（1923）による標本（タイプ）の測定値は以下のとおり。オス（黒田標本 No. 7386）：翼長 65 mm、尾長 68.5 mm、ふ蹠長 24 mm、露出嘴峰長 15 mm、全嘴峰長 19 mm。メス（黒田標本 No.7387）：翼長 54.5 mm、尾長 57.5 mm、ふ蹠長 21 mm、露出嘴峰長 13.5 mm、全嘴峰長 17 mm。羽色は亜種ハシナガウグイス（*Horornis diphone diphone*）に似るが、本亜種の方が測定値が大きい。体形は亜種ウグイス（*Horornis diphone cantans*）に似ているが、本亜種の方が測定上、嘴が長く、翼が短い。上面もより褐色みが強い。

【生活史】

鹿児島県喜界島では、主にネピアグラス、時々ススキや低木に営巣する。2008 年に喜界島で行われた調査によると、1 回の産卵数は 3~5 個で、5 月に巣立ちが行われたとみられる事例や、5 月に産卵し、6 月初旬に卵または雛の捕食が起きたとみられる事例が確認された。亜種ウグイス（*Horornis diphone cantans*）と同様、オスが一夫多妻となる繁殖システムをもつと考えられる。

【生息環境】

薮地、低木混じりの草地などに生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，耕作放棄地 【陸域_平地部 海岸部】森林，草地，耕作放棄地，市街緑地
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（7）島嶼地域

【分布域】

南大東島では 1922 年に雌雄各 1 個体ずつが採集されたのみで、その後、確認されず、絶滅したと考えられている。近年の分布調査により、本亜種は喜界島、沖永良部島、与論島、沖縄島、久米島、渡嘉敷島、座間味島に分布することが明らかになった。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年の分布域の増大は、実際に分布域が拡大したものではなく、分布調査によって、本亜種の分布する島嶼が新たに判明したことによるものである。近年の実際の分布域の変化については確認されていない。

【生息地の現況】

生息環境が薮地、低木混じりの草地などに限られることから、宅地開発や農耕地の造成などによって、生息地の減少が継続していると推測される。一方で、放棄された農地、樹林が伐採されて放置されている場所などは、新たな生息適地になりうる。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

森林伐採、草地の開発、植生遷移の進行が挙げられる。さらに、同種内別亜種の越冬渡来、繁殖分布域の拡大により、本亜種の生息数の増大、過去の繁殖域への再度の繁殖分布拡大が阻害されている可能性があるが、確証は得られていない。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，草地開発，遷移進行・植生変化/自然遷移，その他（同種内別亜種の越冬渡来、繁殖分布域の拡大により、生息数の増大、過去の繁殖域への再度の繁殖分布拡大が阻害されている可能性があるが、確証は得られていない。）
	（現在）	森林伐採，草地開発，遷移進行・植生変化/自然遷移，その他（同種内別亜種の越冬渡来、繁殖分布域の拡大により、生息数の増大、過去の繁殖域への再度の繁殖分布拡大が阻害されている可能性があるが、確証は得られていない。）

特記事項

第 4 次レッドリストまでは、ダイトウウグイスは大東諸島の固有亜種として絶滅亜種とされていたほか、沖縄島、喜界島などで確認されていた「ウグイスの 1 亜種」が DD として評価されていた。その後、 日本鳥類目録改訂第 7 版（日本鳥学会 2012）において、ダイトウウグイスと「ウグイスの 1 亜種」が同じ亜種と判断されたことに基づき、レッドリスト 2017 以降は、これらを統合して「ダイトウウグイス」として評価している。

他に種ウグイスの生息が確認されているが、なお、亜種レベルでは未同定であるものの、種ウグイスの生息が確認されている島嶼が複数あり、仮にこれらが本亜種であるとすれば、それを踏まえた本亜種の絶滅危険度の正確な判定と保全計画立案が必要であるため、今後の調査研究が待たれるところである。現状で、本亜種の可能性がある種ウグイスの生息が確認されている島嶼は、伊平屋島、伊是名島、津堅島、水納島、慶留間島、阿嘉島、屋嘉比島の 7 島で、いずれも沖縄県内である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ダイトウウグイス	*Cettia diphone restricta*	DD
第４次 2019：	ダイトウウグイス	*Cettia diphone restricta*	DD
第４次 2018：	ダイトウウグイス	*Cettia diphone restricta*	DD
第４次 2017：	ダイトウウグイス	*Cettia diphone restricta*	DD
第４次 2015：	ダイトウウグイス／ウグイスの 1 亜種	*Cettia diphone restricta*／*Cettia diphone* ssp.	EX／DD
第４次：	ダイトウウグイス	*Cettia diphone restricta*	EX

第３次:	ダイトウウグイス	*Cettia diphone restricta*	EX
第２次:	ダイトウウグイス	*Cettia diphone restricta*	EX
第１次:	ダイトウウグイス	*Cettia diphone restrictus*	Ex

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 濱尾章二，2009．巣内に設置した温度データロガーによるダイトウウグイスの繁殖過程の推定．自然教育園報告，(40): 73-81．
- 濱尾章二，2010．南西諸島に生息するダイトウウグイス *Cettia diphone restricta* のなわばり性：電波発信機を用いた調査結果．自然教育園報告，(41): 35-47．
- 濱尾章二・鳥飼久裕，2011．奄美諸島喜界島の鳥類相．鹿児島県立博物館研究報告，(30): 59-64．
- 梶田学・真野徹・佐藤文男，2002．沖縄島に生息するウグイス *Cettia diphone* の二型について-多変量解析によるリュウキュウウグイスとダイトウウグイスの再評価-．山階鳥研報，32(2):148-167．
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．日本鳥学会，三田．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Horornis diphone restrictus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Horornis diphone restrictus* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Grassland, Abandoned farmland, Urban green area
Threat types:	Logging and wood harvesting, Grassland development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	梶田学
Author:	Manabu Kajita

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ムシクイ科 Phylloscopidae

イイジマムシクイ

***Phylloscopus ijimae* (Stejneger, 1892)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
伊豆諸島とトカラ列島の 2 地域に繁殖集団が分かれており、14 か所の生息地は海により分断されている。
また、ミトコンドリア DNA チトクローム b 領域の塩基配列から、伊豆諸島とトカラ列島の集団間の平均遺伝距離は塩基置換率で 6.4%と大きく、地理的隔離が進んでおり、両集団は独立して保全するのが適当と考えられている（関 2024）。生息地が分断されており、個体群の小さな島があること、また、生息に適した常緑広葉樹の自然林が限られていること等から、今後、生息環境の悪化により個体数の減少が懸念される。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
繁殖地及び越冬地において、生息地である森林の減少、分断が人間活動によって継続的に生じている。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

夏鳥として伊豆諸島とトカラ列島に渡来し、繁殖する。渡りの時期には、伊豆半島など本州南部、四国、九州、南西諸島等での記録がある。確実な越冬地は不明。以前は伊豆諸島南部の三宅島、御蔵島で個体数が多かったが、減少傾向にある。原因は繁殖地の環境悪化よりは、むしろ越冬地の環境悪化の可能性が考えられる。

基礎情報

【形態】

全長約 11.5 cm。翼長 6～7 cm。体重約 10 g。暗色の過眼線と白い眉斑がある。背面は淡いオリーブ緑色で、下面は淡い黄白色。センダイムシクイ（*Phylloscopus coronatus*）によく似ており、以前はセンダイムシクイの一亜種とされていたこともあるが、本種には淡色の頭央線がなく、背面はやや暗色である。

【生活史】

高木の上層や中層を活発に移動しながら、鱗翅目昆虫の幼虫やクモ類などを採餌する。ホバリングをしながら採餌することもある。一夫一妻で繁殖。繁殖期は 4～7 月で、広葉樹の枝上やアズマネザサなどに、ほぼ球形の巣を作り、白色無斑の卵を 3～4 個産む。ホトトギス（*Cuculus poliocephalus*）に托卵されることがあり、ホトトギスが巣に近づくと警戒し、防衛する。本種のさえずりは A タイプ、B タイプの 2 種類に分けられ、A タイプのさえずりは B タイプに比べて周波数が低く、テンポが遅い。A タイプのさえずりは、縄張りの中心付近に多く、比較的長い距離の情報伝達に、B タイプのさえずりは、縄張りの境界で多いことから、短い距離の情報伝達として使い分けているらしい。伊豆諸島・三宅島とトカラ列島・中之島の個体群間のさえずりの比較では、両個体群のさえずりは同種のさえずりとして機能しているが、中之島個体群のさえずりは、三宅島個体群よりも周波数が低く、テンポが遅いという特徴がある。

【生息環境】

スダジイやタブノキなどが生育する常緑広葉樹の自然林で生息密度が高い。高木層、亜高木層の被度が高く、樹冠の枝葉部分の多い森林を好む。落葉広葉樹の二次林にも低密度ながら生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（7）島嶼地域

【分布域】

伊豆諸島の大島から青ヶ島までとトカラ列島の中之島に夏鳥として渡来し、繁殖する。非繁殖期には沖縄島から、台湾、香港、フィリピンにかけての広い範囲から記録があり、12 月にフィリピンのルソン島での記録がある。伊豆諸島での越冬例もあるが、沖縄島以南の地域が非繁殖期の分布域にあたると考えられている。渡りの時期には静岡、和歌山、愛媛、大分、宮崎、鹿児島等での通過記録がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

伊豆諸島では、三宅島以南（鳥島を除く）、及び利島では生息密度が高く、個体数も多い。新島、神津島では個体数が少なく、分布も局地的。式根島、大島ではまれ。トカラ列

島では中之島で多く、口之島、諏訪之瀬島、悪石島、平島では少数である。

【生息地の現況】

森林伐採や道路工事などにより生息地の減少、分断が進みつつある。主要な繁殖地・三宅島では 2000 年に起きた火山活動により約 6 割の森林が影響を受けたが、現在は回復しつつある。

【個体数の現況】

全体の個体数については体系的な調査が実施されておらず不明。三宅島、御蔵島では以前は個体数が多かったが、ここ数十年の間に減少傾向にある。繁殖地の生息環境は以前より減少しているが、越冬地の環境変化がより原因となっている可能性がある。

存続を脅かす要因

森林伐採、道路工事などによる繁殖環境の減少、分断が進みつつある。三宅島では 2000 年に起きた火山活動により約 6 割の森林が影響を受けたが、現在は回復しつつある。この他に、伊豆諸島、トカラ列島とも人為的に導入されたホンドイタチの捕食による減少、トカラ列島ではノヤギの増加により下層植生が衰退し、生息地の劣化や減少が生じている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，捕食（外来種による），その他動物食害
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，捕食（外来種による），自然災害，その他動物食害

特記事項

伊豆諸島とトカラ列島に繁殖地が限定される。トカラ列島の個体群や越冬地、越冬環境については情報が不足している。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	イイジマムシクイ	*Phylloscopus ijimae*	VU
第４次 2019：	イイジマムシクイ	*Phylloscopus ijimae*	VU
第４次 2018：	イイジマムシクイ	*Phylloscopus ijimae*	VU
第４次 2017：	イイジマムシクイ	*Phylloscopus ijimae*	VU
第４次 2015：	イイジマムシクイ	*Phylloscopus ijimae*	VU
第４次：	イイジマムシクイ	*Phylloscopus ijimae*	VU
第３次：	イイジマムシクイ	*Phylloscopus ijimae*	VU
第２次：	イイジマムシクイ	*Phylloscopus ijimae*	VU
第１次：	イイジマムシクイ	*Phylloscopus ijimae*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 原田慈照・梅垣佑介・渡部良樹・大西敏一，2019．沖縄与那国島におけるイイジマムシクイ *Phylloscopus ijimae* の観察記録と沖縄以南の記録について．Strix，33: 1-20．
- Higuchi, H. and N. Kawaji, 1989. Ijima's willow warbler *Phylloscopus ijimae* of the Tokara Islands, a new breeding locality, in southwest Japan. Bull. Biogeogr. Soc. Japan, 44: 11-15.
- 樋口広芳，1973．伊豆諸島の鳥類（I）繁殖陸鳥の分布と生息環境．鳥，22: 14-24．
- 樋口広芳，1973．伊豆諸島の鳥類（II）イイジマムシクイの伊豆半島通過例と伊豆諸島における越冬例．鳥，22: 24-25．
- 石沢慈鳥，1966．イイジマムシクイの渡り．野鳥，238: 47．
- 百瀬浩・谷秀治・樋口広芳，1996．トカラ列島中之島および伊豆諸島三宅島のイイジマムシクイ *Phylloscopus ijimae* のさえずりの比較．1996 年度日本鳥学会大会講演要旨集，pp. 18．
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録 改訂第 7 版，438pp. 日本鳥学会，三田市．
- 迫静男，1991．トカラ列島の鳥相．トカラ列島学術調査報告書，pp. 118-166．
- 関伸一，2024．トカラ列島で繁殖するイイジマムシクイ隔離集団の分布、生態、形態および遺伝的特性．山階鳥学誌，56: 33-50．
- Tani, S., 1997. Song System of Ijima's Willow Warblers (*Phylloscopus ijimae*). 東京大学修士論文, pp. 21．
- 東京都労働経済局農林水産部林務課，1992．鳥類の生態と保護に関する調査報告書．pp. 64．東京都，東京都．
- 山階芳麿，1935．イヒジマメボソとウチヤマセンニフ．鳥，40: 431-439．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Phylloscopus ijimae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Phylloscopus ijimae* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Predation (by alien species), Natural disasters, Other animal feeding damage
Law designation status for conservation	Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	山本裕（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Yutaka Yamamoto

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ムシクイ科 Phylloscopidae

オオムシクイ

***Phylloscopus examinandus* Stresemann, 1913**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　D

基準 A:　—	基準 B:　—	基準 C:　—	基準 D:　EN	基準 E:　—

D．成熟個体数が 250 未満であると推定される個体群である。

【推定根拠】

国内における本種の繁殖環境は、北海道東部の標高 1000 m 以上のハイマツ・ダケカンバ帯に限られている。近年の調査では、日高山系のペテガリ岳、芽室岳、パンケヌーシ岳、北海道東部の藻琴山および知床半島基部の海別岳では本種を確認できず、本種を確認できたのは知床半島基部の斜里岳から知床半島にかけての高山帯域のうち、限られた山のみであった。調査では、雄の囀り地点をカウントしてきたので、一つの山につき確認出来た個体数は 10 個体ほどである。調査地のうち、本種が確認できたのは知床半島と斜里岳の 7 地点程度であることから、雄は 70 個体ほどと推定され、雌の数を加えると 2 倍の 140 個体と推定される。実際の成熟個体数は 140 個体よりは多いと思われるが、そもそも分布範囲が極めて限定的であるため、多くても 250 個体以下程度と推定される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

オオムシクイは、これまでメボソムシクイの 1 亜種であったが、2011 年の分類の再検討により、独立種となり、国内では北海道内のみで繁殖分布する渡り鳥である。1970 年代から 80 年代にかけて、知床半島および周辺地域、日高山系で複数の現地調査が行われた。それらによると、複数の調査事例から知床半島と斜里岳には、同種が繁殖期である 7 月以降に確認されたが、日高山系においては、ペテガリ岳において記録があるとされる調査例が一例あるのみで、それ以外の調査では同種が確認できておらず、分布調査の検討が必要であった。そこで調査者は、これでまで調査をされた地域において、同種が分布するか否かについて再調査を行った。その結果、知床半島の山々および斜里岳で繁殖期に繁殖個体を目視、録音、捕獲ができたが、日高山系の南北の 2 峰では、生息を確認できなかった。これらの結果から、オオムシクイは、日本国内においては知床半島の山々と斜里岳のみに繁殖分布するという結論を得た。

基礎情報

【形態】

体重 11 g ほどの小鳥。典型的なムシクイ科ムシクイ属の形態の鳥で、姿形や色は全体的に地味であまり特徴が無い。羽色については、頭部、背、腰等上面の色は、オリーブ緑色で、喉、腹、下尾筒等下面は黄味がかった汚白色。下面の黄色味の程度は、メボソムシクイとコムシクイの中間的な色味を持つ。雄の計測値は、北海道で繁殖する個体では、自然翼長: 63.5 mm (60.3-66.6) n=8、尾長: 47.7 mm (46.3-51.5) n=8、ふしょ長: 19.05 mm (18.5-19.9) n=7、P10-PC 長: 1.3 mm (0.0-3.0) n=6、体重: 10.3 g (9.0-12.0) n=6。P10-PC 長とは、初列風切羽最外羽（P10）と最長初列雨覆羽長（PC）との長さの差で、P10 と PC が同長か、僅かに P10 長が長い。北海道の個体群の体サイズは、カムチャツカ半島やサハリンの個体群の個体と比べて、体サイズが小さく、全個体群の中で一番小さい。また本種の繁殖分布域の中で、北海道の個体群は最南端の個体群である（齋藤ら 2014）。

【生活史】

日本では夏鳥。夏期は、北海道知床半島、千島列島、サハリン、カムチャツカ半島で繁殖し、冬期はインドネシアやタイ等東南アジア諸国まで渡って越冬する。本州付近では、春の渡りに関しては、5 月下旬～6 月上旬頃に北上個体を目撃または囀りを聞くことが多い。秋の渡りは、渡り時期にばらつきが多いが、新潟や福井県などの日本海側では、9 月下旬から 10 月下旬の間に南下する個体が確認できる。

【生息環境】

知床半島とその基部の斜里岳では、標高 1000 m 付近から上のダケカンバ、ハイマツ帯に生息する。つまり、森林限界付近から上の亜高山、高山帯を好む。また、雪渓が残る沢沿いの斜面でもよく確認される。

生息環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林，岩壁・ガレ場（石灰岩地等）
国土地域区分：	（1）奥山自然地域

【分布域】

オオムシクイは、2010 年以前は、種としては認識されていなかったため（亜種メボソムシクイまたは亜種コメボソムシクイと認識されていた）、過去の正確な分布域を論文等の記録から検証するのは難しいが、これまでに、森岡（1971）、中川・藤巻（1985）及び川辺（2014）が、いずれも北海道の 1000 m 以上の高標高地で本種と思われる記録を残している。そのうち中川・藤巻（1985）と川辺（2014）は、知床半島の遠音別岳、知西別岳、羅臼岳、半島基部に位置する斜里岳で、7 月に記録している。森岡（1971）は、日高山系ペテガリ岳で 7 月下旬に記録している。日高山系では、標高 1000 m 以上の調査地である、日勝峠、芽室岳、伏見岳、十勝幌尻岳、北戸蔦別岳、戸蔦別岳、カムイエクウチアウシ山、コイカクシュサツナイ岳、ヤオロマップ岳では、オオムシクイは確認されていない（藤巻ら 1979）。当時の記録は、囀りの録音データや捕獲した個体の DNA 解析などの直接的な証拠は残されていないため、それが本当に正しい記録か、再検証することは出来ないが、

もし、この記録が正しいとすれば、本種は日高山系と知床半島の両地域に分布していたということになる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年の調査により、現在は、北海道知床半島の山々及び半島基部に位置する斜里岳でのみ繁殖分布すると考えられる（藤巻 2021、齋藤 2024）。日高山系は過去および近年の調査結果から、繁殖分布には含まれないと考えられる。近年の調査では、知床半島及び斜里岳のいずれでも、巣や雛を直接観察していないので、確実な繁殖記録は得られていない。しかし、1984 年のペレケ平から遠音別岳の稜線でも餌（内容不明）を咥えて運ぶ成鳥の姿が確認されており（中川・藤巻 1985）、2020 年 7 月の知床沼の調査でも昆虫の幼虫を咥えて運ぶ成鳥が確認されているので（齋藤 2024）、育雛中の雛に給餌している可能性が高く、7 月以降の観察記録に関しては、繁殖記録とみなしてよいだろう。

【生息地の現況】

生息地は、標高 1000 m 以上のハイマツ・ダケカンバ帯であるが、調査者の印象では、過去 10 年ほどは、目立った環境変化や悪化は生じていないように思われる。しかし、今後、温暖化が加速すると、生息地面積の縮小や生息環境の悪化が懸念される。

【個体数の現況】

近年の調査結果を鑑みると、国内における本種の成熟個体数は多くても 250 個体以下程度と推定される。

存続を脅かす要因

温暖化により標高帯の植物相が変化した場合、森林限界付近から上に分布する本種は、現在よりも生息適地が縮小し、繁殖分布域が狭まることが懸念される。そうなると、当然、繁殖個体数は、今後減少していくこととなる。

要因の区分：	（過去）	気候変動，分布・産地局限
	（現在）	遷移進行・植生変化/自然遷移，気候変動，分布・産地局限

特記事項

北海道知床半島とその周辺に分布する本個体群は、種の分布域からするとその南限にあたり、系統地理学的に重要な個体群である。また、カムチャツカ半島から千島列島を経て連なる本個体群は、同地域の生物相を反映する 1 構成種として欠かすことはできず、保全生態学上においても重要な個体群であるといえる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオムシクイ	*Phylloscopus examinandus*	DD
第４次 2019：	オオムシクイ	*Phylloscopus examinandus*	DD
第４次 2018：	オオムシクイ	*Phylloscopus examinandus*	DD
第４次 2017：	オオムシクイ	*Phylloscopus examinandus*	DD
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅のおそれのある地域個体群(Lp)(道内繁殖個体群),【三重県】情報不足(DD),【岡山県】情報不足,【熊本県】要注目種(AN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Alström, P., T. Saitoh, D. Williams, I. Nishiumi, Y. Shigeta, K. Ueda, M. Irestedt, M. Björklund and U. Olsson, 2011. The Arctic Warbler *Phylloscopus borealis* -three anciently separated cryptic species revealed. Ibis, 153: 395-410.
- 藤巻裕蔵・芳賀良一・小野山敬一，1979．鳥類．日高山系自然生態系総合調査報告書（動物篇），北海道自然保護課，北海道．pp. 57-88.
- 藤巻裕蔵，2021．北海道におけるオオムシクイの繁殖期の分布．山階鳥類学雑誌，53: 85-92.
- 川辺百樹，2014．北海道の「メボソムシクイ」の正体．北方林業，66: 48-51.
- 森岡弘之，1971．北海道高山地帯の鳥相．国立科博専報，4: 43-54.
- 中川元・藤巻裕蔵，1985．遠音別岳原生自然環境保全地域における鳥類．遠音別岳原生自然環境保全地域調査報告書，pp. 79-404．環境庁自然保護局.
- Saitoh, T., P. Alström, I. Nishiumi, Y. Shigeta, D. Williams, U. Olsson and K. Ueda, 2010. Old divergences in a boreal bird supports long-term survival through the Ice Ages. BMC Evolutionary Biology, 10:35 doi:10.1186/1471-2148-10-35. [http://www.biomedcentral.com/1471-2148/10/35].
- 齋藤武馬・西海 功・茂田良光・上田恵介，2012．メボソムシクイ *Phylloscopus borealis*（Blasius）の分類の再検討：3 つの独立種を含むメボソムシクイ上種について．日本鳥学会誌，61(1): 46-59.
- 齋藤武馬・茂田良光・上田恵介，2014．メボソムシクイ上種 3 種の外部形質を用いた識別方法．日本鳥類標識協会誌，26: 45-61.

- 齋藤武馬，2024．北海道におけるオオムシクイ *Phylloscopus examinandus* の繁殖分布調査．山階鳥類学雑誌，56(2): 194-208.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Phylloscopus examinandus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Phylloscopus examinandus* is listed as EN under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area, Mid-altitude area】Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Climate change, Limited distribution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	齋藤武馬（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Takema Saitoh

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　センニュウ科 Locustellidae　　日本固有

オオセッカ

***Locustella pryeri pryeri* (Seebohm, 1884)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
利根川下流域、仏沼、岩木川下流域の 3 箇所に繁殖個体群が集中している。河川改修等による河川敷の高水敷化、放棄水田の乾燥化によって好適な生息地は失われやすい。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
利根川下流域では、放棄水田でも繁殖していたが、放棄水田の植生遷移による乾燥化のため放棄水田で繁殖する個体は減少している。また、河川敷の改修によって好適な低水敷が減少している。生息地の環境変化によって常に繁殖地（生息地点）は変化する。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

スズメ（*Passer montanus*）より小さい鳥で、千葉県から茨城県にかけての利根川下流域、青森県の仏沼湿原や岩木川河口付近など、きわめて限られた湿原で繁殖し、ヨシが疎らに生えるスゲ類やイネ科の草原で営巣する。東北南部以南の積雪の少ない地方のヨシ原で越冬していると考えられる。推定生息数は約 2,500 羽である。

基礎情報

【形態】

全長約 13 cm、嘴峰長 10-13 mm、翼長 51-58 mm、ふ蹠長 17.5-21.5 mm、尾長 51-61 mm。頭上、背、腰、上尾筒は黄茶褐色で、上尾筒を除いて黒い軸斑がある。尾羽は暗褐色で、黄褐色の羽縁がある。淡い不明瞭な眉斑があり、目の周辺も淡色。頬と耳羽は淡褐色。下面はだいたい白色で、胸側と脇は黄褐色。下尾筒はバフ色。翼は黒褐色で黄茶褐色の羽縁がある。嘴は褐色だが、成鳥オスは繁殖期に黒くなり、脚は淡褐色。

【生活史】

北日本では夏鳥であり、4 月中旬頃に繁殖地に戻り、5 月～8 月にかけて繁殖し、9 月末～10 月にかけて渡去する。東北地方で繁殖した個体は関東地方で越冬する。一方、利根川下流域では留鳥であるが、一部の個体は房総から東海地方にかけての太平洋沿岸で越冬している。オスはさえずり飛翔を行いながら、435-4,100 m²の大きさの縄張りを構え、一夫多妻の配偶システムを持つ。オスは、繁殖期には草丈の高い草にとまってさえずったり、短いさえずり飛翔をする。ヒライなどの草の地表近くに、枯草や枯茎を材料にして楕円形の巣を作る。出入口は上側にある。一腹産卵数は 5-6 卵、卵は純白無斑で、メスだけが抱卵する。主にメイガ、コオロギ、ササキリなどの昆虫やクモを捕食する。巣造りおよび抱卵はメスのみが行い、雛への給餌は雌雄で行う。

【生息環境】

海岸から遠くない湖沼周辺や河川沿いの、ヨシやススキなどのイネ科やイグサ科の生育する湿った草原で、主に草の中で生活をする。地上から 30 cm くらいまでの高さのイ・スゲ・ススキ・チガヤなどの禾本類の根元に巣を作るため、スゲ属（*Carex*）やイ属（*Juncus*）等の下層植生が発達しているヨシの疎らな植生を好む。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，河川下流域，ため池・池沼
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

種オオセッカ（*Lucustella pryeri*）はアジア東部の固有種であり、中国東北部からロシアの日本海沿岸にかけて分布するオナガオオセッカ（*Lucustella pryeri sinensis*）と、日本に局地的に生息するオオセッカ（*Lucustella pryeri pryeri*）が知られている。本亜種は日本の固有亜種とされる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

主要な繁殖地は岩木川河口付近、仏沼湿原、利根川下流域の 3 地域である。

【生息地の現況】

本亜種の生息地は、疎らにヨシの生育する草丈の低いスゲ類やイネ科草本の草地である。このような植生は、海岸や干拓地で土壌水分や放牧など土地利用形態と密接に結びつ

いた特異な環境条件の元に成立していると考えられている。八郎潟干拓地と仏沼湿原は、干拓によって成立した場所である。利根川下流域の生息地は、河川敷の水田や放牧地として利用されていた場所が放置されて生息地となった。

【個体数の現況】

2001 年に行われたセンサスでは、主要な繁殖地である岩木川流域に 300 羽、仏沼湿原に 900 羽、利根川下流域で 1,200 羽、その他の地域に 100 羽の合計 2,500 羽が生息すると推定された。仏沼では生息個体数の増加傾向が認められ、2009 年には 564 羽のオスが確認され、生息数は 1,100 羽を超えたと考えられる。利根川流域でも生息地の拡大がみられ、過去に絶滅した八郎潟でも数羽が再確認されている。

存続を脅かす要因

生息環境となる植生は、水位変化や土砂の堆積によって容易に変化する。八郎潟干拓地の生息地は、植生遷移により消失したと考えられる。分布域が狭いため、河川敷の開発等による生息地の破壊で絶滅する可能性も高い。

要因の区分：	（過去）	河川開発，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	河川開発，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオセッカ	*Locustella pryeri pryeri*	EN
第４次 2019：	オオセッカ	*Locustella pryeri pryeri*	EN
第４次 2018：	オオセッカ	*Locustella pryeri pryeri*	EN
第４次 2017：	オオセッカ	*Locustella pryeri pryeri*	EN
第４次 2015：	オオセッカ	*Locustella pryeri pryeri*	EN
第４次：	オオセッカ	*Locustella pryeri pryeri*	EN
第３次：	オオセッカ	*Locustella pryeri pryeri*	EN
第２次：	オオセッカ	*Locustella pryeri pryeri*	EN
第１次：	オオセッカ	*Megalurus pryeri pryeri*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】最重要希少野生生物(A ランク)，【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類，【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【秋田県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【山形県】情報不足(DD)，【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類，【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク)，【埼玉県】

情報不足(DD)(越),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA類(CR),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA類(CR),【静岡県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【愛知県】絶滅危惧ⅠB類(EN)(越冬),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【福岡県】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- Fujita, G. and H. Nagata, 1997. Breeding habitat characteristics of Japanese Marsh Warblers. *Megalurus pryeri* at Hotoke-numa reclaimed area, northern Honshu, Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol., 29: 43-49.
- 金井裕・植田睦之，1994．オオセッカの生息地の分布と現状．pp. 1-7．環境庁．
- 小林豊・小山信行，2003．青森県岩木川下流域におけるオオセッカの繁殖期の個体数．Strix，21: 29-33．
- 永田尚志，1997．オオセッカの現状と保全への提言．山階鳥類研究所研究報告，29: 27-42．
- 永田尚志・上田恵介・古南幸弘，2003．利根川下流域におけるオオセッカの生息状況．Strix，21: 15-28．
- 中道里絵・上田恵介，2003．仏沼湿原におけるオオセッカ個体群の現状と生息地選好．Strix，21: 5-14．
- 西出隆，1993．八郎潟干拓地におけるオオセッカの生態 3．個体数変動とその変動要因．Strix，12: 41-52．
- 高橋雅雄・宮彰男・津曲隆信・古川博，2010．仏沼における 2007 年から 2009 年のオオセッカの生息状況．おおせっからんど年報，2: 10-16．
- 高橋雅雄・宮彰男・古山隆・磯貝和秀・三戸貞夫，2022．九州地方におけるオオセッカ *Locustella pryeri* の越冬状況．日本鳥学会誌，71: 197-201．
- 高橋雅雄・宮彰男・古山隆・三戸貞夫・日比野政彦，2023．中国四国地方におけるオオセッカ *Locustella pryeri* の越冬状況．日本鳥学会誌，72: 235-239．
- 竹内健悟・東信行，2005．岩木川下流部におけるオオセッカの繁殖場所選択．野生生物保護，9: 59-68．
- 上田恵介，2003．日本にオオセッカは何羽いるのか．Strix，21: 1-3．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Locustella pryeri pryeri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Locustella pryeri pryeri* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.
b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
(i) extent of occurrence
(ii) area of occupancy
(iii) area, extent and/or quality of habitat
(iv) number of locations or subpopulations
(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Lower river basin, Reservoir/Pond
Threat types:	River development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	永田尚志（新潟大学）
Author:	Hisashi Nagata

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ミソサザイ科 Troglodytidae　　日本固有

モスケミソサザイ

***Troglodytes troglodytes mosukei* Momiyama, 1923**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
伊豆諸島に 6 か所の生息地があるが、海により分断されている。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地である森林の減少、分断が人間活動によって継続的に生じている。三宅島では道路の拡幅やルートの変更に伴い、本亜種の生息に適した常緑広葉樹林が減少している。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

本亜種は伊豆諸島の固有亜種で、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、八丈小島、青ヶ島に分布する。御蔵島では姿をよく見かけることができるが、三宅島、八丈島では限られる。神津島ではまれ。八丈小島、青ヶ島については情報不足。御蔵島を除いて、生息に適した常緑広葉樹林の減少や分断が進んでおり、個体数が減少しつつあると考えられる。

基礎情報

【形態】

全長約 10.5 cm。翼長 4～5 cm。体重約 10 g。全身茶褐色で、翼、腹部、尾に暗褐色の細い横縞と白色の小斑がある。羽色は、亜種ミソサザイ（*Troglodytes troglodytes fumigatus*）より濃く、黒みが強い。

【生活史】

年間を通じて単独で過ごす。林床や低木の間を移動しながら、昆虫類やクモなどを採餌する。繁殖期は 2 月から 7 月にかけてで、2 月中旬頃からさえずり始め、7 月中旬頃までさえずる。主にコケを使った球形の巣を、オーバーハングした崖や樹洞などに作る。亜種ミソサザイは一夫多妻になることが知られているが、本亜種の繁殖生態は不明である。

【生息環境】

遷移の進んだ常緑広葉樹の自然林に多く、倒木や苔むした岩などの多い場所を好む。落葉広葉樹林や二次林にも低密度ながら生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

伊豆諸島の神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、八丈小島、青ヶ島に留鳥として分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

既知の分布地として、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、八丈小島、青ヶ島がある。このうち御蔵島ではよく見かけることができる。三宅島では南部の自然林に多く、八丈島では自然林の多い三原山側に少数が生息している。八丈小島、青ヶ島は情報不足。神津島では近年繁殖期に確認例が少なく調査が必要である。以前に比べて、分布域は減少していると考えられる。

【生息地の現況】

生息に適した常緑広葉樹の自然林や二次林が森林伐採や道路工事などの開発により三宅島で減少している。

【個体数の現況】

個体数については資料がなく詳細不明。森林環境の減少、分断などにより個体数は減少傾向にあると思われる。

存続を脅かす要因

森林伐採、道路工事等による生息地の減少、分断が進みつつある。人為的に移入された

イタチ、ノネコによる捕食も懸念される。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，捕食（外来種による），自然災害，分布・産地局限

特記事項

本亜種は、伊豆諸島の固有亜種である。御蔵島を除くと分布が限られており、個体数は非常に少ない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	モスケミソサザイ	*Troglodytes troglodytes mosukei*	EN
第４次 2019：	モスケミソサザイ	*Troglodytes troglodytes mosukei*	EN
第４次 2018：	モスケミソサザイ	*Troglodytes troglodytes mosukei*	EN
第４次 2017：	モスケミソサザイ	*Troglodytes troglodytes mosukei*	EN
第４次 2015：	モスケミソサザイ	*Troglodytes troglodytes mosukei*	EN
第４次：	モスケミソサザイ	*Troglodytes troglodytes mosukei*	EN
第３次：	モスケミソサザイ	*Troglodytes troglodytes mosukei*	EN
第２次：	モスケミソサザイ	*Troglodytes troglodytes mosukei*	EN
第１次：	モスケミソサザイ	*Troglodytes troglodytes mosukei*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 浅井芝樹，2015．日本産鳥類の分類再構築に向けた分子系統学的研究．科学研究費助成事業 研究成果報告書.
- 樋口広芳，1973．伊豆諸島の鳥類（Ⅰ）繁殖陸鳥の分布と生息環境．鳥，22: 14-24.
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．438pp. 日本鳥学会，三田.
- 佐藤望ら，2019．東京島嶼における鳥類の繁殖分布調査．自然保護助成金報告書 25 周年特別記念号，113-122.
- 白井邦彦，1961．青ヶ島の鳥類相．鳥獣集報，18(1): 125-131.

- 白井邦彦，1961．八丈小島（伊豆七島）の鳥類相．鳥獣集報，18(1): 119-124.
- 矢根保，1998．青ヶ島の鳥．Birder，12(7): 46-55.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Troglodytes troglodytes mosukei has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Troglodytes troglodytes mosukei* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Predation (by alien species), Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	山本裕（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Yutaka Yamamoto

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ツグミ科 Turdidae　　日本固有

アカコッコ

***Turdus celaenops* Stejneger, 1887**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
2018 年から 2024 年にかけて、三宅島における 10 個体のアカコッコの 1 年間の移動状況を追跡した結果、9 個体の位置情報は年間を通じて三宅島内で記録され、1 個体のみ三宅島から 40 km 程度離れた神津島に 1-2 か月程度の短期間だけ滞在したこと、島間で色彩やさえずりに変異があることから、島毎に個体群が分断されている可能性がある。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
伊豆諸島の各島で繁殖記録があり、藤村（1948）によると、本種は伊豆七島のうち鳥島を除く各島に分布し繁殖するとされている。樋口（1973）による 1970 年から 1973 年にかけての調査では、調査地である伊豆大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、八丈小島、青ヶ島のうち、利島、三宅島、御蔵島、八丈島、青ヶ島で巣が確認された。2019 年に伊豆諸島の各島の鳥類観察者に対して行われたヒアリング調査（日本野鳥の会未発表）では、大島と神津島ではかつては繁殖していたが今は繁殖が確認できない、もしくは繁殖期以外の季節においても確認できる個体数が減少しているという回答が得られた。新島・式根島でも島内の鳥類観察者によって減少した可能性が指摘され、御蔵島でも減っているように感じるという回答があった。
また、2016 年から 2021 年にかけて実施された東京都鳥類繁殖分布調査の現地調査では繁殖が確認されたのは三宅島と八丈島のみで、繁殖可能性が指摘されたのは御蔵島のみであった。
これらの結果から、本種の繁殖地は継続して減少している可能性が高いと考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

本種は伊豆諸島とトカラ列島に留鳥として生息する日本固有種である。伊豆諸島南部の島で生息密度が高く、伊豆諸島北部やトカラ列島では生息密度は低い。常緑広葉樹の自然林で低木層がまばらな環境に多い。畑地のような地表面がひらけた環境も良く利用する。生息地となる森林の消失や分断化、耕作放棄地の増加が進み、生息環境は悪化しつつある。

主要な生息地であった三宅島ではネズミ駆除を目的に導入されたニホンイタチ（以下、イタチ）と 2000 年に起きた火山活動により、個体数が大きく減少した。

基礎情報

【形態】

全長約 23 cm。翼長 12～13 cm。体重約 80 g。オスは頭部が黒色で、胸部との境界は明瞭。メスはオスより淡色で、頭部と胸部の境界は不明瞭。胸部と腹部は赤褐色で、背面は赤みのあるオリーブ褐色。アカハラ（*Turdus chrysolaus*）によく似ているが、アカハラよりも羽色が濃い。トカラ列島の個体群は、伊豆諸島の個体群より濃色。

【生活史】

主に林床でミミズや昆虫類などを食べ、ハチジョウグワ、タブノキなどの実も食べる。4 月～7 月にかけてが繁殖期で、樹上に、木の細根やコケなどを用いて椀型の巣を作る。一腹卵数は 3～4 卵（最小 2 卵、最大 5 卵）が多い。繁殖期前半には日の出前や日没後の薄明薄暮の時間帯にさえずるが、繁殖期後半になると日中でもさえずるようになる。抱卵、雛への給餌とも雌雄で行う。雛への給餌内容はミミズが多く、そのほか昆虫類、ムカデ、果実なども与える。繁殖期以外には単独で生活する。

三宅島南部の大路池周辺で GPS ロガーをもちいて行なわれた調査では、オスの成鳥は繁殖期が終わると雄山中腹に移動して秋から初冬を過ごし、厳冬期から晩冬にふたたび大路池周辺に戻ったのち翌春まで滞在して繁殖しており、季節的な移動が見られたほか、繁殖期後に三宅島から神津島に移動した例が確認された。また、冬期に伊豆半島や房総半島に移動する個体もあり、1996 年に静岡県下田市で標識調査により確認された。

【生息環境】

常緑広葉樹、落葉広葉樹の自然林から二次林まで広く生息しているが、常緑広葉樹の自然林で、低木層がまばらな環境で生息密度が高い。また、採食には特に落葉が堆積した開けた林床や道端をよく利用し、アシタバ畑など地表面が露出した環境も利用する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，田地・畑地 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，農業用水路，小河川
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

伊豆諸島（鳥島を除く）とトカラ列島に分布する。静岡、千葉、東京、神奈川、埼玉、三重、鹿児島、男女群島、屋久島などでの観察記録もある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

伊豆諸島では大島から青ヶ島にかけ留鳥として生息する。トカラ列島では中之島、口之島、諏訪之瀬島、悪石島、平島、宝島に分布するが、生息密度は低い。

【生息地の現況】

主要な生息地である三宅島や八丈島、青ヶ島では常緑広葉樹、落葉広葉樹の自然林、二次林が道路工事などにより伐採や分断化され、生息環境は悪化しつつある。また、三宅島

では 2000 年に起きた火山活動により、約 6 割の森林植生が消失、あるいは影響を受けた。山頂火口から放出される火山ガス量が低下するにつれて、植生は回復してきているが、まだ以前のような森林には戻っていない。御蔵島では良好な生息環境が保たれているが、イエネコによる捕食事例が報告されている。

【個体数の現況】

三宅島、御蔵島、八丈島、青ヶ島など伊豆諸島南部の島では生息密度が高く、新島、神津島など伊豆諸島北部の島では生息密度が低い。主要な生息地であった三宅島では、農業被害を起こすネズミの駆除を目的に 1982 年頃にイタチが人為的に導入され、個体数が急減した。イタチ放獣前は、1 km×50 m あたり平均 28 羽が観察されていたが、放獣後は平均 9 羽と約 1/3 になり、繁殖成功率も放獣前の約 80%から約 7%へと下がった。三宅島では 2009 年以降、環境別のルートセンサス法をもちいた簡易的な個体数推定が実施されており、2009 年には約 4,400 羽、2016 年に約 7,800 羽、2019 年に約 7,600 羽、2020 年に 5,900 羽、2021 年と 2022 年にはそれぞれ推定 12,200 羽、推定 11,000 羽と 10,000 羽を超えたが、2023 年には約 8,500 羽、2024 年に 9,600 羽と推定されている。

存続を脅かす要因

三宅島では人為的に導入されたイタチにより個体数が急減した。その他の島では、青ヶ島では 1975 年に、過去には利島、八丈島でもイタチが放獣されており、個体群に影響を及ぼしたと考えられる。また、近年、森林伐採や道路工事にともなう生息地の消失、分断化が進みつつある。三宅島では 2000 年に起きた火山活動により約 6 割の森林が消失あるいは影響を受け、森林の回復がまだ十分ではない。さらに、離農に伴う畑地の藪化によって採食に適した開けた環境が減少している。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，捕食（外来種による），自然災害
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，捕食（外来種による），管理放棄，自然災害

特記事項

本種は、最近 DNA 分析により、アカハラにごく近縁であることが明らかになったが、生態的に不明な点が多い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカコッコ	*Turdus celaenops*	EN
第４次 2019：	アカコッコ	*Turdus celaenops*	EN
第４次 2018：	アカコッコ	*Turdus celaenops*	EN
第４次 2017：	アカコッコ	*Turdus celaenops*	EN

第４次 2015：	アカコッコ	*Turdus celaenops*	EN
第４次：	アカコッコ	*Turdus celaenops*	EN
第３次：	アカコッコ	*Turdus celaenops*	EN
第２次：	アカコッコ	*Turdus celaenops*	VU
第１次：	アカコッコ	*Turdus celaenops*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【千葉県】最重要保護生物(A)，【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【静岡県】情報不足(DD)，【長崎県】情報不足(DD)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 江崎逸郎・篠木秀紀・山本裕・浦達也，2010．三宅島におけるアカコッコの個体数の推定．Miyakensis，13: 15-22．
- 長谷川雅美，1986．三宅島へのイタチの放獣 その功罪．採集と飼育，46: 444-447．
- 樋口広芳，1973．伊豆諸島の鳥類（Ⅰ）繁殖陸鳥の分布と生息環境．鳥，22: 14-24．
- 鹿児島県，1987．鹿児島県の野鳥．鹿児島県保健環境部，鹿児島．99pp.
- Kawaji, N., H. Higuchi and H. Hori, 1989. A new breeding record of the Izu Island thrush *Turdus celaenops* from Tokara Islands, southwest Japan. Bull. B. O. C., 109(2): 93-95.
- 望月英夫，1993．伊豆大島でのアカコッコの繁殖．鳥，41(1): 22-23．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- 西海功，2012．DNA バーコーディングと日本の鳥の種分類．日本鳥学会誌，61(2): 223-237．
- 迫静男，1991．トカラ列島の鳥相．トカラ列島学術調査報告書，pp. 118-166．鹿児島県．
- 田尻浩伸・手嶋洋子・山本裕・鈴木敏祥・内藤明紀，2019．三宅島で繁殖するアカコッコの周年の移動経路．日本鳥学会 2019 年度大会講演要旨集，p.122.
- 高木昌興・樋口広芳，1992．伊豆諸島三宅島におけるアカコッコ *Turdus celaenops* の環境選好とイタチ放獣の影響．Strix，11: 47-57．
- 手嶋洋子・内藤明紀・大久保香苗・田尻浩伸，2017．三宅島のアカコッコの総個体数の推定 2016～三宅島のアカコッコは増えているのか減っているのか～．Miyakensis，20: 3-11．
- 手嶋洋子・内藤明紀・鈴木敏祥・田尻浩伸，2020．三宅島のアカコッコの総個体数の推定値＜2020 年度速報＞．Miyakensis，23: 161-168．
- 手嶋洋子・内藤明紀・田尻浩伸，2022．2022 年の調査に基づく三宅島のアカコッコの総個体数の推定値．Miyakensis，25: 35-44．

- 手嶋洋子・田尻浩伸・内藤明紀・小寺泰聖，2023．2023 年の調査に基づく三宅島のアカコッコの総個体数の推定値．Miyakensis，26: 3-11．
- 手嶋洋子・田尻浩伸・内藤明紀・小寺泰聖，2024．2024 年の調査に基づく三宅島のアカコッコの総個体数の推定値．Miyakensis，27: 3-10．
- 徳吉美国・岡奈理子・亘悠哉，2019．イエネコによるアカコッコ雛の捕食（データ番号: momo191005fs02b），動物行動の映像データベース（http://www.momo-p.com/index.phpμmmovieid=momo191005fs02b&embed=on），参照 2025-09-10．
- 植田睦之・佐藤望，2021．東京都鳥類繁殖分布調査報告 2016-2021．特定非営利法人 バードリサーチ，府中．177pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Turdus celaenops has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Turdus celaenops* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Agricultural ditch, Small river
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Predation (by alien species), Abandonment of management, Natural disasters
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	田尻浩伸（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Hironobu Tajiri

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ホオジロ科 Emberizidae

カシラダカ

***Emberiza rustica latifascia* Portenko, 1930**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　A2

基準 A:　EN	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

全国で鳥類標識調査を継続実施している、カシラダカが主に捕獲されているステーション（下北、福島潟、婦中、織田山の 4 か所）での捕獲数を比較した。その結果 2009-13 年の平均は 769 羽であった。

【近年の状況】

10 年後の 2019-23 年の平均は 361 羽となり、減少率は約 53%となった。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

日本には冬鳥として渡来し、疎林、伐開地、農耕地等に生息する。過去には国内の鳥類標識調査で最も多く捕獲される鳥類であったが、捕獲数が 1980 年代以降激減している。世界的にも生息数は減少傾向にある(Edenius et al. 2017)。減少の詳しい原因についてはわかっていない。

基礎情報

【形態】

オスは額、頭上、耳羽および眼先は藍黒色で、冬季は額、頭上の各羽に灰褐色の羽縁があり、眼先の各羽には灰褐色を帯びた白色の羽縁がある。後頭には白色の斑、目の上には白色の眉斑があり、冬季は灰褐色を帯びる。背、肩羽、腰および上尾筒はくり色で、肩羽や背の各羽には灰褐色の羽縁と黒褐色の軸斑があり、腰・上尾筒の各羽には灰色の羽縁がある。上胸にはくり色の帯があり、冬季は各羽縁は白色である。腹、脇および下尾筒は白色で、脇の各羽にはくり色の幅の広い軸班がある。尾は暗褐色で、各羽には灰褐色の羽縁がある。嘴色は、上嘴は暗褐色、下嘴は褐色、虹彩は暗褐色、脚色は淡褐色である。メスはオスの冬羽に類似する。

【生活史】

本州には冬鳥として渡来する。巣は湿地近くの雑木林中の地上や灌木林の地上から 1 m 以下の高さの枝上にあるが、概して地上にあるものが多い。産卵期は 5 月下旬から 7 月上旬までで、1 巣の卵数は 4－6 個である。主にメスが抱卵し、雛は抱卵後 12－13 日くらいで孵化し、その後 14 日ぐらいで巣立ちする。食性は植物質が主で植物の種子を食べるほか、鞘翅目や鱗翅目などの昆虫も採餌する。

【生息環境】

国内においては疎林、伐開地、農耕地等に生息する。夏季繁殖地では平地林や湿地または小川のほとりなどにある雑木林に生息し、山地ではまれである。

生息環境区分：	【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

バイカル湖から東はアナディル、カムチャッカ半島に至る地域で繁殖し、冬鳥として日本に飛来する。韓国および中国東部でも越冬している可能性がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域の大きな変化は確認されていない。

【生息地の現況】

詳細については不明である。

【個体数の現況】

鳥類標識調査における本種の全国の捕獲総数は、1980 年は約 19,000 羽であったのに対し、2015 年には約 5,000 羽に減少した。近年においても、鳥類標識調査の 1 級ステーションでは新放鳥数に大幅な減少傾向が見られる。

存続を脅かす要因

詳細については不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【群馬県】準絶滅危惧(NT)，【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【東京都（区部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【東京都（北多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【東京都（南多摩）】準絶滅危惧(NT)，【東京都（西多摩）】準絶滅危惧(NT)，【大阪府】準絶滅危惧(NT)，【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福岡県】準絶滅危惧(NT)，【長崎県】準絶滅危惧(NT)，【熊本県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 深井宣男，2025．標識調査「沼」のその先へ～渡良瀬遊水地～．Birder，39(10): 48-49.
- 環境省，2011．平成 22 年度環境省委託業務 鳥類標識調査報告書（鳥類観測ステーション運営）．101pp. 環境省.

- 環境省，2012．平成 23 年度環境省委託業務 2010 年鳥類標識調査報告書（鳥類観測ステーション運営）．91pp. 環境省．
- 環境省，2013．平成 24 年度環境省委託業務 2011 年鳥類標識調査報告書．94pp. 環境省．
- 環境省，2014．平成 25 年度環境省委託業務 2012 年鳥類標識調査報告書．93pp. 環境省．
- 環境省，2015．平成 26 年度環境省委託業務 2013 年鳥類標識調査報告書．98pp. 環境省．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2021．令和 2 年度環境省鳥類標識調査委託業務 2019 年鳥類標識調査報告書．80pp. 環境省自然環境局生物多様性センター．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2022．令和 3 年度環境省鳥類標識調査委託業務 2020 年鳥類標識調査報告書．91pp. 環境省自然環境局生物多様性センター．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2023．令和 4 年度環境省鳥類標識調査委託業務 2021 年鳥類標識調査報告書．82pp. 環境省自然環境局生物多様性センター．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2024．令和 5 年度環境省鳥類標識調査委託業務 2022 年鳥類標識調査報告書．77pp. 環境省自然環境局生物多様性センター．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2025．令和 6 年度環境省鳥類標識調査委託業務 2023 年鳥類標識調査報告書．77pp. 環境省自然環境局生物多様性センター．
- 清棲幸保，1979．日本鳥類大図鑑Ⅰ．講談社．pp. 25-27.
- 尾崎清明，2018．カシラダカが絶滅するμm．山階鳥類研究所，https://www.yamashina.or.jp/hp/ashiwa/news/201811kashiradaka.html
- 尾崎清明，2024．激減するカシラダカに何が起きているμm．山階鳥類研究所（著）．足環をつけた鳥が教えてくれること，山と渓谷社．pp. 100-103.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Emberiza rustica latifascia has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Emberiza rustica latifascia* is listed as EN under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥50% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	尾崎清明（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Kiyoaki Ozaki

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ホオジロ科 Emberizidae　　日本固有

コジュリン

***Emberiza yessoensis yessoensis* (Swinhoe, 1874)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
本亜種は繁殖を可能とする生息地の条件が非常に限られていて、東北地方の岩木川流域、仏沼周辺、八郎潟、最上川下流域、新潟県福島潟、利根川下流域に個体群が分断化されている。また、本亜種のうち、阿蘇の個体群は、体サイズが小さく遺伝的組成が異なるなど本州の個体群とは異なる形質を備えた隔離された下位個体群と推定される。それ以外の東日本の個体群についても、繁殖地の一部が消失もしくは縮小しており分断化が急速に進んでいる。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本亜種が好む草丈が低くて乾燥した明るい草原は、放牧・野焼き・採草など定期的な撹乱によって維持されているため、好適な草原は減少傾向にある。また、利根川下流域ではソーラー開発により草原が開発されている。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

小型の鳥で、本州北・中部、九州に生息する日本固有亜種である。留鳥で、湖沼周辺や河川敷の草地、休耕田など開けた環境に生息するが、最近一部の繁殖地が消失し、生息数は減少傾向にある。

基礎情報

【形態】

全長 15 cm。オスの夏羽では頭部と喉が黒色、後頭から胸横は赤茶色、胸と腹は淡灰褐色、背と腰は赤褐色で背にはさらに黒い縦斑がある。メスの背面はオスに似ているが、頭部は黒褐色で、眉斑と頬線は黄土色、喉は白くて黒い顎線があり、胸と脇は淡褐色で、腹は白い。オスの冬羽はメスに似ている。オオジュリン（*Emberiza schoeniclus*）のオスの夏羽では白い頬線があり、後頸が白い。オスの冬羽やメスでは腰が灰褐色で、脇に褐色の縦斑がある。シベリアジュリン（*Emberiza pallasi*）のオスの夏羽では白い頬線があり、オスの冬羽やメスは全体に体の色が淡く、腰が灰褐色である。

【生活史】

関東の個体群は留鳥であるが、北日本の個体群は南下し越冬する。繁殖期には昆虫など動物質の餌をとり雛に給餌するが、冬期は草地の地上で種子などをとる。5～8 月にオスのさえずり活動が活発となり、縄張りをもつ。高密度になると巣の周りのみを防衛し、周辺の水田に採餌に出かける。6 月上旬～7 月上旬に地上、草の株の上や低木の枝上に、枯草や小枝で椀型の巣を作り、3～5 卵を産む。一夫一妻で繁殖し、抱卵は雌雄交替で行い、抱卵期間は約 13 日、育雛期間は 11-12 日である。巣立ち後約 20 日で幼鳥は独立する。少数のつがいは 2 回目の繁殖をする。繁殖成功率は 1 回目 78.6%、2 回目 14.3%である。今のところ、血液内寄生虫の感染は知られていない。

【生息環境】

河川敷のスゲ類やカモノハシの茂る草原、干拓地の湿性草原、草丈の低い休耕田などに生息する。丈の高い草原は避けて、ヨシ丈が低く、単子葉植物の下層植生が発達している環境を好んで生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】草地 【陸域_平地部】草地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

北日本（青森県、秋田県、新潟県）の個体群は夏鳥として繁殖し、関東以南から西日本の地域で越冬している。利根川下流域に分布する個体群は留鳥である。かつて存在した長野県霧ヶ峰、富士山麓、佐渡島の繁殖個体群は消失した。北海道では確実な繁殖記録がない。

本州北・中部（RB:茨城，千葉．MB:青森，秋田，山形，新潟，山梨．CB: 富山，静岡．FB: 岩手，宮城，長野，栃木，群馬）・九州（阿蘇）

なお、種コジュリン Emberiza yessoensis は、函館で採集された標本をもとに記載され、中国東北地方、ウスリー地方、朝鮮半島、日本に分布が限定されている。大陸の亜種 Emberiza yessoensis continetalis は中国東北部からウスリー地方で繁殖し、韓国南部、黄河から揚子江にかけての沿岸地帯で越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本州北部（青森県、秋田県、新潟市福島潟周辺）に夏鳥として渡来し、利根川下流域（茨城県、千葉県）には留鳥個体群がある。冬期には関東から九州にかけての太平洋沿岸の温暖な地域のヨシ原で低密度で越冬している。 熊本県阿蘇のカルデラ草原に、本州産より小型な個体群が存在し、夏鳥として繁殖している。

【生息地の現況】

仏沼ではヨシ・枯れヨシ等の草丈が低く乾燥した明るい草地を好んで繁殖する。繁殖を可能とする条件が非常に限られており、植生の構成種やその草丈の変化でも、繁殖地を放棄することがあるので、繁殖に適した環境は失われやすい。また、利根川下流域では、放棄水田等の増加、ソーラーパネルの設置等によって生息地が縮小している。

【個体数の現況】

青森県、秋田県、茨城県、千葉県では生息環境が安定していて個体数の減少は認められないが、草原の放牧・野焼き等による管理された草原の縮小やソーラーパネル設置等による生息地の破壊により生息域が縮小傾向にある。北海道では越冬記録はあるが、確実な繁殖記録がない。また、かつての繁殖地のうち、霧ヶ峰、富士山、佐渡島などの個体群は消失した。特に、本州と異なった形質を持つと考えられる阿蘇個体群は 150 羽程度であり、牛の放牧地域の縮小によって草原が後退していて絶滅の危険性が高い。

存続を脅かす要因

河川敷などにおける撹乱の減少による丈の低い草原の減少。放牧・野焼きの中止、採草地の放棄等により草原から灌木林への植生遷移。また、メガソーラー建設による草地開発や耕作放棄により生息地が減少している。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，草地開発，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	草地開発，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

阿蘇個体群は 150 羽程度の本州個体群と遺伝的に異なる隔離個体群で、放牧・採草地の放棄等で草原が縮小しているので、このままでは絶滅の危険性が高い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	コジュリン	*Emberiza yessoensis yessoensis*	VU
第４次 2019：	コジュリン	*Emberiza yessoensis yessoensis*	VU

第４次 2018：	コジュリン	*Emberiza yessoensis yessoensis*	VU
第４次 2017：	コジュリン	*Emberiza yessoensis yessoensis*	VU
第４次 2015：	コジュリン	*Emberiza yessoensis yessoensis*	VU
第４次：	コジュリン	*Emberiza yessoensis yessoensis*	VU
第３次：	コジュリン	*Emberiza yessoensis yessoensis*	VU
第２次：	コジュリン	*Emberiza yessoensis yessoensis*	VU
第１次：	コジュリン	*Emberiza yessoensis yessoensis*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd),【青森県】重要希少野生生物(B ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【秋田県】準絶滅危惧(NT),【山形県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【栃木県】準絶滅危惧(C ランク),【群馬県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【埼玉県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】情報不足(DD),【東京都（区部）】情報不足(DD),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(非繁殖期),【新潟県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【富山県】情報不足(DD),【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【山梨県】情報不足(DD),【長野県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(越冬),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【熊本県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【大分県】情報不足(DD),【鹿児島県】情報不足

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 清棲幸保，1965．増補新訂版日本鳥類大図鑑 I．講談社，東京．
- 三上修，2012．仏沼干拓地における草原性鳥類 5 種の繁殖期における環境選択の比較．山階鳥類学雑誌，43: 169-175．
- 三上修・高橋雅雄，2013．湿性草原の環境変化に対する鳥類の応答：仏沼干拓地における 1998 年と 2010 年の比較．山階鳥類学雑誌，44: 67-78．
- 三上修，2012．仏沼干拓における草原性鳥類 5 種の繁殖期における環境選択の比較．山階鳥類学雑誌，43: 169-175．
- 中村登流，1970．コジュリンの高密度個体群のテリトリー構造．山階鳥類研究所研究報告，6: 82-102．
- 中村登流，1981．コジュリンの繁殖行動とテリトリー分散について．山階鳥類研究所研究報告，13: 79-119．

- 中村登流，1997．コジュリン．日高敏隆（監）・樋口広芳・森岡弘之・山岸哲（編），日本動物大百科 4．鳥類 II，pp. 138-139．p. 143．平凡社，東京．
- 西出隆，1994．八郎潟干拓地におけるオオセッカの生息状況．平成 5 年度希少野生動植物種生息状況調査報告書，pp. 36-47．環境庁．
- 先崎理之，2013．北海道における冬季のコジュリンの記録．日本鳥学会誌，62: 64-67．
- Sodhi, N. S., G. F. Bennett and H. Nagata, 1996. Absence of blood parasites in the Japanese reed bunting *Emberiza yessoensis*. Jap. J. Ornithol., 45: 115-117.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Emberiza yessoensis yessoensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Emberiza yessoensis yessoensis* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin
Threat types:	Grassland development, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	永田尚志（新潟大学）
Author:	Hisashi Nagata

公表年月：2026 年 3 月

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

コクガン

***Branta bernicla nigricans* (Lawrence, 1846)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
主要な越冬地である青森県、岩手県、宮城県において、藻場の衰退が認められている（水産庁 2021）。また、主要な越冬地の一つとなっている南三陸町では、コクガンの主要な餌資源であるアマモ場の面積が減少傾向にある（宮城県 2020）。
なお、東日本大震災で三陸沿岸の養殖筏が全て流出・消滅し、採食環境を失ったコクガンは、小群に分散し、沈下した漁港に生え始めた海藻などを新たな資源として利用するようになった。個体数減少は見られなかったが、幼鳥数は 2 年目に半減した。その要因の一つとして、越冬地での食物資源量不足が危惧される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

コクガンは冬鳥として主に北日本へ渡来、越冬し、少数が関東または新潟以南の沿岸域で分散越冬する。北海道東部の野付湾や風蓮湖はアマモ場がある汽水湖で、秋期に最大 8 千羽もの群れが渡来滞在する。その後、函館湾、むつ湾、三陸沿岸などへ移動し、越冬する。越冬数は秋期の 1/3 以下で、残りの 2/3 以上のコクガンの越冬状況については不明である。三陸沿岸の生息環境は 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の影響を強く受け壊滅的に喪失したため、コクガンは沈下した漁港など新たな環境を利用するようになった。

協力者:　嶋田哲郎（宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）

基礎情報

【形態】

全長 61 cm。ガン類中最も小型の種で、体長はマガモよりやや大きい程度。カモ類に比べ、頸が長く頭部が小さい。頭から頸、胸は黒色で、頸にレース柄のような白斑がある。背は黒褐色、尾羽は黒色で上下尾筒は白色。嘴と脚は黒色。幼鳥は大雨覆の羽縁が白く、渡来初期は頸の白斑を欠く。遠方では亜種シジュウカラガン（*Branta canadensis leucopareia*）に似るが、シジュウカラガンの白斑は頸ではなく顔の頬から顎にある。

【生活史】

繁殖期に、ツンドラの砂州などに集団営巣する。一夫一婦制で家族の絆は強く、家族群は翌年の春まで一緒に過ごす。沿岸水域に生息し、非繁殖期は群れで沿岸浅水域の海草と海藻を採食。特にアマモはコクガンの主要な食物で、その増減が個体数の増減や採食戦略に影響を与えてきた。日本へは 10 月中旬から 11 月初めに北海道東部の潟湖へ飛来。終日アマモ場に分散し、採食。水面が凍結すると主群は越冬地へ南下。越冬地では潮の干満に合わせアオサなどの海藻類や海草のアマモを採食し、早朝に小河川が流入する砂浜へ上陸し、真水を飲水することが多い。

【生息環境】

藻場、アマモ場、養殖筏のある内湾、沿岸域、潟湖の水面、平磯がある岩礁海岸などで採食し、小河川が注ぐ砂浜海岸、砂浜干潟などで飲水、羽繕い、休息。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】河口域，海崖・岩浜・岩礁（磯），潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯】岩礁（磯），藻場，アマモ場
国土地域区分：	（5）沿岸域，（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

かつての採集地としては、函館、千葉県、東京湾、筑前、長崎、鹿児島があげられる。海岸線の改変が行われる以前には国内の沿岸域に広域分布していたものと考えられる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北極海沿岸のツンドラ地帯で集団営巣し、冬期は太平洋・大西洋の温帯の沿岸域で越冬する。秋期に北海道東部の野付湾などで最大 8,000 羽が観察される。主要越冬地は、函館湾、浜中湾（北海道）、むつ湾（青森）、南三陸沿岸（宮城、岩手）などで、それ以外に小群が全国の沿岸域の比較的多くの地点で観察されているが、その確認数は秋期の 1/3 以下で、残りのコクガンの越冬状況は不明。繁殖地域と渡りの経路は未解明だったが、近年は追跡調査が進み、一部解明されるようになった。秋期にカムチャツカ半島東岸のマラムバヤ潟で 5 千～1 万羽、国後島の南端の潟湖にも群れが飛来する。主要中継地は北海道東部の野付湾や風蓮湖、主要越冬地は浜中湾、函館湾、むつ湾、三陸沿岸で、北日本に偏っているが、これ以外に本州から北九州の広範囲の沿岸域で越冬期にコクガンの小群が観察さ

れている。

【生息地の現況】

三陸沿岸の生息地は、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災により壊滅的被害を受けた。震災以前の主要採食環境だった海藻が繁茂する養殖筏と係留ロープは津波で全て消失した。一方地盤沈下で漁港の埠頭やスロープが浅く水没し海藻が生え、そこを新たな採食環境として利用し始めた。秋期に 5 千～1 万羽が集結するカムチャツカ東岸のマラムバヤ潟禁猟区の指定が解除され、日本の個体群への影響が危惧される。

【個体数の現況】

1 月中旬の全国ガンカモ類生息地調査では、1970～99 年は、観察個体総数が最小 60 羽（1984 年）、最大 638 羽（1983 年）で年変動が大きいが、2000 年以降は、観察地点数が増加し、観察個体数も安定して漸増傾向を示している。コクガンの生息地の多くが、2011 年 3 月の東日本大震災の地震、津波の影響を大きく受けたと考えられるが、同調査では、コクガンの観察個体総数をみると、震災前の 2009～11 年が、834～981 羽だったのが、震災後の 2012 年は 1,055 羽と増加した。また、陸前高田市の広田湾から石巻市の北上川河口での南三陸沿岸では、震災前の 3 年間（2009～11 年）は、211～316 羽を記録したが、震災後 3 回の調査では、291～403 羽を記録し、震災によって個体数が大きく減ずる傾向は認められなかったが、震災後 2 年目には幼鳥比が低下した（2011～12 年：0.19～0.21、2012～13 年：0.07～0.13）。

存続を脅かす要因

東日本大震災で三陸沿岸の養殖筏が全て流出・消滅し、採食環境を失ったコクガンは、小群に分散し、沈下した漁港に生え始めた海藻などを新たな資源として利用するようになった。個体数減少は見られなかったが、幼鳥数は 2 年目に半減した。その要因の一つとして、越冬地での食物資源量不足が危惧される。

要因の区分：	（過去）	遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害
	（現在）	遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害

特記事項

沿岸域に生息するため、渡来数や分布状況の把握が難しく、特に越冬期の状況は不明な点が多い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	コクガン	*Branta bernicla orientalis*	VU
第４次 2019：	コクガン	*Branta bernicla orientalis*	VU
第４次 2018：	コクガン	*Branta bernicla orientalis*	VU

第４次 2017：	コクガン	*Branta bernicla orientalis*	VU
第４次 2015：	コクガン	*Branta bernicla orientalis*	VU
第４次：	コクガン	*Branta bernicla orientalis*	VU
第３次：	コクガン	*Branta bernicla orientalis*	VU
第２次：	コクガン	*Branta bernicla orientalis*	VU
第１次：	コクガン	*Branta bernicla orientalis*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】留意(N)，【青森県】希少野生生物(C ランク)，【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類，【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【秋田県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【山形県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【福島県】準絶滅危惧(NT)，【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類，【千葉県】重要保護生物(B)，【新潟県】準絶滅危惧(NT)，【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類，【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(越冬)，【三重県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【兵庫県】要注目種，【島根県】情報不足(DD)，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境省自然環境局，2022．第 52 回ガンカモ類の生息調査報告書．環境省生物多様性センター，山梨．
- 河口真梨・後藤真美子・石川聖江・深津恵太・呉地正行・神山和夫・露木歩美・大木康子・石名坂豪・上月昭彦・長尾芳文・井芹靖彦・釜重宏子・伊藤徳朗・坪田栄司・石川隆一・藤井薫，2008．冬季における野付半島のコクガンの生息状況調査報告書．野付半島ネイチャーセンター．
- 黒田長道，1939．雁と鴨．修教社書院，東京．
- 呉地正行，2006．雁よ渡れ．どうぶつ舎，東京．
- Lane and Miyabayashi, 1997. Status and Distribution of Pacific Brent Geese Wintering in Japan. Wildfowl, 48: 108-117.
- 宮林泰彦編，1994．ガン類渡来地目録．第 1 版．雁を保護する会．若柳．
- モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査 2004～2017 年度 とりまとめ報告書．環境省生物多様性センター，山梨．
- 中田千佳夫，2006．コクガンが野付湾で越冬している．北海道野鳥だより，(145): 7-11．
- 日本野鳥の会函館支部，1990．特集コクガン．こくがん，(2): 169-246．
- Sawa et al., 2020. Evidence of Brent Geese moving between an autumn staging area in east Hokkaido and wintering sites in west Hokkaido and northern Honshu. Ornithological Science, 19: 211-216.

- Sawa et al., 2020. Migration routes and population status of the Brent Goose wintering in East Asia. Wildfowl, Special Issue, 6: 244-266.
- Shimada et al., 2017. Spring migration of Brent Geese wintering in Japan extends into Russian high arctic. Ornithological Science, 16: 159-162.
- 嶋田哲郎・呉地正行・鈴木康・宮林泰彦・樋口広芳，2013．東日本大震災がコクガンの越冬分布に与えた影響．日本鳥学会誌，62(1): 9-15.
- 山階鳥類研究所，1975．この鳥を守ろう．霞会館，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Branta bernicla nigricans has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Branta bernicla nigricans* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Estuary, Sea Cliff/Rocky beach/Reef, Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Reef, Algae bed, Eelgrass bed
Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters
Law designation status for conservation	Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	牛山克巳（宮島沼水鳥・湿地センター）
Author:	Katsumi Ushiyama

公表年月：2026 年 3 月

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

シジュウカラガン

***Branta hutchinsii leucopareia* (Brandt, 1836)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
越冬地周辺の水田の耕作放棄や、秋耕により主要食物の落ちモミを採食しにくくなった水田が増加しており、越冬地の質に継続的な減少が予測される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

千島列島で繁殖したシジュウカラガンの多くが日本へ渡っていたが、20 世紀初頭に繁殖地の島へ移入されたキツネ類に捕食され絶滅状態になった。この群れの復活のため、日口米共同で回復チームを作り、アメリカから導入された個体を増やし、かつての繁殖地・千島列島のエカルマ島で 1995～2010 年に 551 羽を放鳥した。2007/08 年の越冬期以降は幼鳥連れの家族群が日本へ飛来し、総数は 161 羽（2010/11 越冬期）、248 羽（2011/12 越冬期）、402 羽（2012/13 越冬期）と増加し 2013 年 12 月現在、600 羽を越えた。千島列島のオンネコタン島へ分散した群れも確認されている。2019～2020 年には 5000 羽を超えた。

協力者:　牛山克巳（宮島沼水鳥・湿地センター）

基礎情報

【形態】

小型のガン類で、カリガネ（*Anser erythropus*）とほぼ同大。背は黒褐色、頭部と頸部は黒色、頬から喉にかけて白斑があり、頸の基部に白輪を持つ。多くの個体は頬の白斑が喉の下で左右に分割され、頸部の白輪の幅は個体差が大きい。頭頂が扁平で、黒い小型の嘴と足を持つ。近縁亜種のヒメシジュウカラガン（*Branta hutchinsiiminima*）はやや小さく、頭部が丸く、胸が暗色で、多くの個体は頸部の白輪を欠く。かつては同一種に分類され、別種に分離されたカナダガン（*Branta canadensis*）は、外見は本種に類似するが、大型で、頸部は長く、基部に白輪を欠く。沿岸域に生息するコクガン（*Branta bernicla*）は、白斑が頬ではなく、頸の上部にあり、生息環境も異なる。

【生活史】

島嶼の高茎草本植生に覆われた地上に営巣。産卵数は 5～6 卵、メスが抱卵、28 日で孵化。家族群単位で行動し、越冬地へ渡る。越冬期はマガンなどと同様に、夜間は湖沼にねぐらをとり、日中は水田などで採食。家族のきずなは次年の繁殖期まで続く。

【生息環境】

主に水辺（湖沼、河川）や農耕地（水田、畑、牧草地）に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】田地・畑地，湿地・湿原，河川中流域，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

かつては、アリューシャン列島と千島列島で営巣。冬期はアリューシャンの群れは北アメリカ西海岸へ、千島列島の群れは日本へ渡っていた。江戸時代の観文禽譜（1831）には仙台藩領内で、ガンを獲ると、「10 羽の内、7､8 羽がシジュウカラガン」と記載され、1922 年には新浜（千葉県）で 101 羽（黒田 1939）、1935 年までは宮城県仙台市周辺に数百羽が飛来した（横田 1989）が、毛皮目的で繁殖地の島々へ放されたキツネ類のために姿を消し、1962 年まで絶滅したと思われていた。その後 1963 年にアリューシャンの小島に生き残った小群が発見され、米国はその群れを元に回復計画に取り組み、1999 年には 3 万羽まで回復した。国内では 1970 年以降毎年 1～3 羽が伊豆沼に飛来。1983 年からアジアのシジュウカラガン回復計画が始まり、分布域も拡大し、飛来数も 600 羽を超えるようになり、2019～2020 年には 5000 羽を超えた。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1970 年以降毎年 1～3 羽が伊豆沼に飛来。1983 年に回復計画が始まり、1995 年にエカルマ島での放鳥を開始後、飛来数が増加。秋冬期に北海道（十勝川下流域など）、秋田（八郎潟など）、新潟県（福島潟など）、宮城県（化女沼、蕪栗沼、伊豆沼など）に定期飛来し、

2012/13 越冬期に飛来数は 400 羽を超えた。またエカルマ島の北東約 70 km のオンネコタン島に分散したと思われる群れが夏期に観察されている。

【生息地の現況】

日本での生息地は、マガンなどと類似し、広く浅い沼沢地でねぐらを取り、その周辺の収穫後の水田などの農耕地で採食する。ガン類が採食地として利用出来る場所は、全国的に減少。特に、水田の耕作放棄や、秋耕による落ちモミが採食不能となった水田の増加が大きな問題となっている。

【個体数の現況】

エカルマ島で放鳥を始めるまで（1970/71 越冬期から 1994/95 越冬期）の飛来数は、1～5 羽だったが、放鳥開始後の、2007/08 越冬期以降、家族群が定期飛来し、総数は 161 羽（2010/11 越冬期）、248 羽（2011/12 越冬期）、402 羽（2012/13 越冬期）と増加した。2019～2020 年には 5000 羽を超えた。

存続を脅かす要因

移入種のキツネ類が除去され繁殖可能な島が限られていることが、繁殖分布拡大を阻害し、国外では、渡りの時期に狩猟鳥と誤認され銃獲される可能性がある。水田の耕作放棄や、秋耕により主要食物の落ちモミを採食しにくくなった水田が増加していることも、本種の存続を脅かす要因として挙げられる。

要因の区分：	（過去）	捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）
	（現在）	捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，その他（秋耕による餌資源の減少）

特記事項

日本雁を保護する会と仙台市八木山動物公園が米国魚類野生生物局のシジュウカラガン・リカバリーチームの協力と環境庁の支援で、アジアのシジュウカラガン回復計画を立ち上げた（1983 年）。その後、ロシア科学アカデミー（カムチャツカ）も加わり、日・ロ・米の共同事業となった。繁殖地放鳥を開始後しばらくしてから成果が現れ、現在は個体群復元への道を確実に歩んでいる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シジュウカラガン	*Branta hutchinsii leucopareia*	CR
第４次 2019：	シジュウカラガン	*Branta hutchinsii leucopareia*	CR
第４次 2018：	シジュウカラガン	*Branta hutchinsii leucopareia*	CR
第４次 2017：	シジュウカラガン	*Branta hutchinsii leucopareia*	CR
第４次 2015：	シジュウカラガン	*Branta canadensis leucopareia*	CR

第４次:	シジュウカラガン	*Branta canadensis leucopareia*	CR
第３次:	シジュウカラガン	*Branta canadensis leucopareia*	CR
第２次:	シジュウカラガン	*Branta canadensis leucopareia*	CR
第１次:	シジュウカラガン	*Branta canadensis leucopareia*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu)，【岩手県】準絶滅危惧，【宮城県】準絶滅危惧(NT)，【秋田県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【山形県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【埼玉県】絶滅(EX)(越)，【新潟県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福井県】要注目

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- 雁を保護する会，1989．シジュウカラガン特集号．雁のたより，(33): 20．
- 堀田正敦，1831．観文禽譜．
- 池内俊雄，2010．日本におけるシジュウカラガンの羽数回復計画のあゆみ．BirdLife in Asia．The Quarterly Newsletter，30: 10-11．
- 環境庁，1991．日本の絶滅のおそれのある野生生物（脊椎動物編）．自然環境研究センター，東京．331pp.
- 環境省自然環境局，2013．第 43 回ガンカモ類の生息調査報告書（平成 23 年度）．
- 呉地正行，2006．雁よ渡れ．どうぶつ社，東京．298pp.
- 呉地正行，2007．絶滅から復活へ ーシジュウカラガンの歩んできた道ー．Birder，21(9): 69-70．
- 呉地正行，2009．繁殖地放鳥と回復の軌跡 ーシジュウカラガンー．山岸哲（編），日本の希少鳥類を守る，pp. 103-127．京都大学学術出版会，京都．
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．日本鳥学会，三田．438pp.
- 農林省水産局編，1935．本邦養狐業ノ趨勢 昭和十年．農業と水産社，東京．138pp.
- 嶋田哲郎，2021．知って楽しいカモ学講座（森本元監修）．緑書房，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

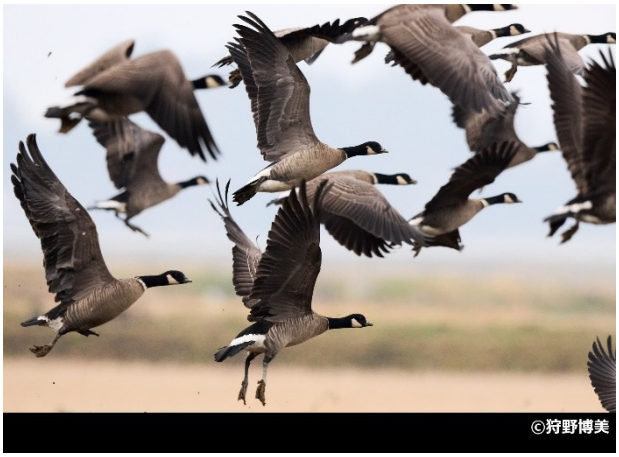
Branta hutchinsii leucopareia has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Branta hutchinsii leucopareia* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Wetland, Middle river basin, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Abandonment of management, Other
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	嶋田哲郎（公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）
Author:	Tetsuo Shimada

公表年月：2026 年 3 月

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

ハクガン

***Anser caerulescens caerulescens* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
越冬地周辺の水田の耕作放棄や、秋耕により主要食物の落ちモミを採食しにくくなった水田が増加しており、越冬地の質に継続的な減少が予測される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

大多数は新北区の鳥だが、ロシア極東の北極海沿岸で繁殖し、日本などアジアの温帯域で越冬する群れが存在し、1800 年代後半までは、東京湾に多数飛来する普通の冬鳥だったが、1940 年代までに群れとしての飛来は途絶えてしまった。しかし、1993 年に日本雁を保護する会などによる復元計画が実施された。現在、個体数は増加し、定期的に 40～50 羽の群れが飛来するようになり、2012/13 年の越冬期には初めて 100 羽程が観察され、2019～2020 年には 1500 羽を超えた。

協力者:　牛山克巳（宮島沼水鳥・湿地センター）

基礎情報

【形態】

全長 67 cm。中型のガンで、マガンとほぼ同大。白色型と暗色型（アオハクガン）の二つの型（phase）がある。白色型は、体全体が白色で、初列風切羽のみが黒色。翼をとじていても、体の後部に黒色部が認められ、他種のアルビノとの識別点になる。嘴は淡紅色、足は淡橙紅色。幼鳥は体全体が灰色で、嘴は灰黒色、足にも灰色味がある。暗色型は、頭部と顎上部だけが白色で他は殆どが暗青色だが、胸から腹にかけて白色の中間型もある。幼鳥は、上下尾筒を除いてほぼ全体が暗青色。日本に飛来するハクガンは白色型がほとんどだが、2006/07 越冬期に、暗色型 2 羽が国内で初めて観察され、その 1 羽は中間型だった（佐場野・上村・呉地 2012）。

【生活史】

日本に渡来する群れの繁殖地は不明だが、繁殖期は集団営巣することが知られている。一夫一妻で家族のきずなは次年の繁殖期まで続く。非繁殖期は、北海道東部、東北北部の中継地を経て新潟などの越冬地へ渡る。夜間は湖沼や河川の水辺に集団でねぐらをとり、日中、周辺の耕作地などで、落ち籾、畦畔雑草、牧草などを採食する。

【生息環境】

主に水辺（湖沼、河川）や農耕地（水田、畑、牧草地）に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】田地・畑地，湿地・湿原，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

大多数は北米大陸北部、グリーンランド西北部、ロシアのウランゲル島など北極海沿岸などで繁殖し、北米の温帯域で越冬する。アジアの個体群は、ロシア極東の北極海沿岸で繁殖し、日本など温帯域で越冬していたと思われる。1800 年代後半には、東京湾に「残雪のごとし」と言われるほど多数飛来したが、1940 年代までに日本への群れの渡来は途絶えてしまった。その原因は繁殖地と越冬地での捕獲圧（日本では 1947 年まで狩猟鳥）によるものと考えられる（呉地 1995、Takekawa et al. 1994）。現在は、秋期に、北海道十勝川下流域やサロベツ原野に、数羽から数十羽の群れで飛来し、その後南下し、主に、秋田県八郎潟・小友沼や新潟県朝日池など日本海側の湖沼で越冬し、時に宮城へも飛来する。2019～2020 年には 1500 羽を超えた。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本では、1940～80 年代までは、まれに 1～数羽が渡来する程度だったが、1990 年代半ば以降、定期渡来するようになり、近年は群れとして、主に秋田県、新潟県で越冬するほか、宮城県など東北地方各県でも少数がよく越冬する。

【生息地の現況】

日本での生息地は、マガンなどと重なる。ガン類の生息には、ねぐらとなる浅く広い湖沼とその周辺に採食地となる広い水田などの農耕地が不可欠。そのような環境は全国的に限られ、さらに水田の耕作放棄や、秋耕により主要食物の落ちモミが採食不能となった水田が増加し大きな問題となっている。

【個体数の現況】

1970 年以降の全国ガンカモ科鳥類の生息調査で、1997 年までの間でハクガンが記録された年はわずか 7 年で、各年 1～2 羽。1993 年に「東アジアにおけるハクガン復元計画」が実施された。現在、個体数は増加している。幼鳥を含み、群れの半数程度が幼鳥であることもある。2019～2020 年には 1500 羽を超えた。

存続を脅かす要因

本亜種は白くて目立ち、密集した群れを作る習性があることから、特に国外の中継地、繁殖地で他のガン類よりも強い違法狩猟圧を受ける可能性が高い。また繁殖地域はトナカイの放牧数が多く、群れで移動中のトナカイによる、集団営巣地の踏み付けや卵の摂食も繁殖に大きな影響を与える恐れがある。水田の耕作放棄や、秋耕により主要食物の落ちモミを採食しにくくなった水田が増加していることも存続を脅かす要因として挙げられる。

要因の区分：	（過去）	捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（在来種による）
	（現在）	捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（在来種による），管理放棄，その他（秋耕による餌資源の減少）

特記事項

約 100 年前に人為的要因で消滅した東アジアの個体群の復元をめざし、モニタリングが行われている。現在、アジアに残された繁殖地はウランゲル島のみ。一極集中の緩和と危険分散を計る東アジアのハクガン復元は、国際的自然保護の視点からもその意義は大きい。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ハクガン	*Anser caerulescens caerulescens*	CR
第４次 2019：	ハクガン	*Anser caerulescens caerulescens*	CR
第４次 2018：	ハクガン	*Anser caerulescens caerulescens*	CR
第４次 2017：	ハクガン	*Anser caerulescens caerulescens*	CR
第４次 2015：	ハクガン	*Anser caerulescens caerulescens*	CR
第４次：	ハクガン	*Anser caerulescens caerulescens*	CR
第３次：	ハクガン	*Anser caerulescens caerulescens*	DD

第２次:	ハクガン	*Anser caerulescens caerulescens*	DD
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】留意(N),【岩手県】準絶滅危惧,【宮城県】要注目種,【秋田県】絶滅危惧ⅠA類(CR),【山形県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【千葉県】消息不明・絶滅生物(X),【新潟県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福井県】要注目

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境庁，1991．日本の絶滅のおそれのある野生生物（脊椎動物編）．自然環境研究センター，東京．340pp.
- 環境省自然環境局，2013．第 43 回ガンカモ類の生息調査報告書．（平成 23 年度）．
- 呉地正行，1995．ハクガンをもう一度日本の空，アジアの空へ．どうぶつと動物園，47: 192-197.
- 呉地正行，2006．雁よ渡れ．どうぶつ社，東京．298pp.
- Sabano, Y., S. Uemura, S. Iwabuchi, M. Kurechi, A. V. Andreev, A. D. Kondratyev, E. V. Syroechikovsky, K. E. Litvin, V. V. Baranyuk, J. Y. Takekawa and D. L. Orthmeyer, 1996. Restoration of Lesser Snow Geese *Anser caerulescens caerulescens* to East Asia: An International Conservation Project, Gibier Faune Sauvage, Game wildlife. 13, Septembre: 1181-1190.
- 佐場野裕・岩淵成紀・呉地正行，1994．東アジアにおけるハクガンの復元計画．雁のたより，42: 13-17.
- 佐場野裕・上村左知子・呉地正行， 2012．アオハクガン *Anser caerulescens caerulescens*（blue morph）の日本初記録．山階鳥類学雑誌，43: 177-183.
- 嶋田哲郎．2021．知って楽しいカモ学講座（森本元監修）．緑書房，東京.
- Takekawa, J. Y., D. L. Orthmeyer, M. Kurechi, Y. Sabano, E. V. Syroechikovsky, K. E. Litvin, V. V. Baranyuk and A. V. Andreev, 1994. Restoration of Lesser Snow Geese to East Asia: A North Pacific Rim Conservation Project. Transactions of 59th North American Wildlife & Natural Resources Conference, 132-145.
- 山階鳥類研究所，1975．この鳥を守ろう．霞会館，東京．285pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Anser caerulescens caerulescens has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Anser caerulescens caerulescens* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

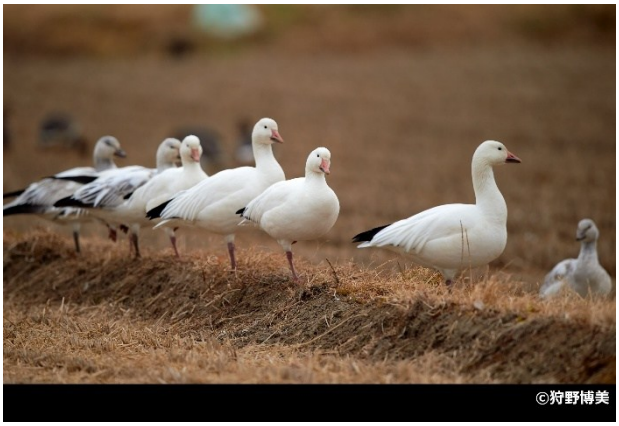
(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Wetland, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by native species), Abandonment of management, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	嶋田哲郎（公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）
Author:	Tetsuo Shimada

公表年月：2026 年 3 月

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

キンクロハジロ

***Aythya fuligula* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2				
基準 A:　VU	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

ガンカモ類の生息調査の全国合計数 2008-2012 年 1 月の平均値。

2008 年 1 月：114,951

2009 年 1 月：111,471

2010 年 1 月：113,534

2011 年 1 月：93,675

2012 年 1 月：85,902

【近年の状況】

ガンカモ類の生息調査の全国合計数 2018-2022 年 1 月の平均値。

2018 年 1 月：64,157

2019 年 1 月：70,748

2020 年 1 月：73,407

2021 年 1 月：60,864

2022 年 1 月：58,675

評価分科会：　鳥類分科会

概要

沿岸域と湖沼に生息する潜水ガモである。大きな生息地は本州の内湾や中海・宍道湖にあったが、2010 年代に個体数の急速な減少が起きた。同所的に生息するホシハジロやスズガモも減少していることから、生息地において環境の悪化が起きている可能性がある。

基礎情報

【形態】

全長 37.5-43.7 cm、翼長 18-20.5 cm、ふ蹠長 3.3-3.7 cm、嘴峰長 3.7-4.3 cm、体重 563.6-1018.5 g。オスは黒色、メスは茶褐色で、目が黄色く脇と腹が白い。どちらも後頭部に房のような冠羽がある。

【生活史】

極東ロシアからスカンジナビア半島までのユーラシア大陸北部で繁殖する。北海道でも繁殖記録がある。秋の飛来は 10 月上旬からはじまる。春は比較的遅くまで残っている個体がいて、5 月下旬まで全国で観察される。

【生息環境】

沿岸域、河川の河口域、大型湖沼に多いが、小さな池でも比較的よく見かける。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，汽水域，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_表層】海面
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

北海道から沖縄まで全国に分布している。ガンカモ類の生息調査によると、1990 年代後半には数千羽規模の生息地が、東京湾、浜名湖、三河湾、伊勢湾、琵琶湖、中海、宍道湖に存在した。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道から沖縄まで全国に分布している状況に変わりはないが、ガンカモ類の生息調査によると、2020 年ごろに数千羽規模の生息地があるのは東京湾、三河湾、伊勢湾、琵琶湖、宍道湖で、琵琶湖と宍道湖意外では個体数の減少が著しい。

【生息地の現況】

本州太平洋側の内湾と中海・宍道湖が主要な生息地である。沿岸域では餌場になる浅海域は埋め立てが進んでいることは減少の一因と思われるが、2000 年代に入ってからは以前に比べれば埋め立ては活発ではない。本種の食物である貝類や底生生物の現存量は不明だが、全国的にアサリやシジミの漁獲が減っていることから、本種の食物も減少している可能性が考えられる。

【個体数の現況】

ガンカモ類の生息調査によると、1990 年代後半には 6.5-9 万羽だったが、2010 年前後に 10-12 万羽になった。しかしその後は減少し、2020 年以降は 6 万羽ほどになっている。

存続を脅かす要因

アサリの減少は複合的な要因が指摘されているが、東京湾、伊勢湾・三河湾では、海底の無酸素状態の水が移動することで生じる貧酸素水塊によってアサリが窒息死することが指摘されている（松川 2008）。貧酸素水塊は広範な底生生物を死に至らしめることから、キンクロハジロの餌資源が減少していることが考えられる。同所的に生息するホシハジロやスズガモも減少していることから、生息地に問題が起きている可能性がある。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，水質汚濁
	（現在）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，水質汚濁

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 榎本佳樹，1941．野鳥便覧．日本野鳥の会大阪支部．

- 環境省，1996-2022．https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html ガンカモ類の生息調査（オンライン）
- 神山和夫・本山裕樹，2010．カモの季節移動に関する報告書 2008‐09 年／2009‐10 年，https://www.bird-research.jp/1_katsudo/kamo_analysis/index.html，バードリサーチ．
- 松川康夫・張成年・片山知史・神尾光一郎，2008．我が国のアサリの漁獲量激減の要因について．日本水産学会誌，74(2) : 137-143．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aythya fuligula has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aythya fuligula* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Brackish water, Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Lake development, River development, Coastal development, Water pollution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	神山和夫（バードリサーチ）
Author:	Kazuo Koyama

公表年月：2026 年 3 月

キジ目 Galliformes　キジ科 Phasianidae

ウズラ

***Coturnix japonica* Temminck & Schlegel, 1849**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D1

基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　VU	基準 E:　―

D1．個体群が極めて小さく、成熟個体数が 1,000 未満と推定される。

【推定根拠】

ウズラは渡り鳥で、国内ではおもに北海道でまとまった繁殖地が見られる。また本種は、北海道で繁殖した個体群が分散して本州に南下、越冬することが知られている。九州の越冬個体群は大陸からの渡来の可能性があるが、個体数は非常に少ない。したがって、繁殖個体群の生息数を算出することで、国内での成熟個体数全体を推定できる。また、直近 10 年間では、顕著な個体数回復傾向が見られないために、2009 年～2015 年にかけて環境省の委託を受け、自然環境研究センターが実施した繁殖域での生息数推定結果をもとに、生息密度に繁殖推定地域面積を乗じて推定個体数（オス）とした。その数を 2 倍して、成熟個体数としたところ、約 700 羽となった。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

小型で、草原に生息する。本州北部以北で繁殖し、本州中部以南で越冬する。繁殖期は 5-9 月で、地上に巣を造り、7-12 卵を産む。16-21 日で孵化し、しばらく後に巣立つ。個体数はやや回復傾向にあるものの、生息環境の減少、悪化が継続していることにより全国的に生息数が少ない状態がまだ続いている。

協力者:　磯清志・市原晨太郎・今井菜摘・植田睦之・奥山正樹・小田谷嘉弥・黒田治男・今野怜・坂梨仁彦・島田明英・田中忠・玉田克巳・富川徹・中田達哉・中村豊・中山文仁・花田行博・原山法大・榛沢日菜子・伴野俊夫・藤巻裕蔵・武藤幹太・柳田和美

基礎情報

【形態】

全長約 20 cm で、尾は短い。全身褐色、黄土色、茶色のまだら模様で、オスでは頬から喉にかけて赤茶色。コジュケイ（*Bambusicola thoracicus*）はもっと大きく、尾が長い。

【生活史】

本州北部以北では夏鳥、それ以南では冬鳥である。繁殖期はかなり長く、5 月に始まり、9 月頃まで続くこともある。地上の草むらに枯草を敷いて巣を造る。一腹産卵数は 7-12 卵。抱卵後 16-21 日で孵化し、その後しばらくして巣立つ。越冬期には群れでいることが多い。

【生息環境】

おもに低地の草原、農耕地、放棄農耕地に生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】草地，田地・畑地，耕作放棄地 【陸域_平地部】草地，田地・畑地，耕作放棄地
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

繁殖期にはモンゴル北部からロシア極東のアムール地方、ウスリー地方、中国東北地方、サハリン、日本に分布する。日本では本州北部以北で繁殖し、本州中部以南で越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道ではあらたな繁殖推定地がわずかに増加し、本州北部においても繁殖地が見られるようになっているが、まとまった繁殖地はまだ石狩川流域および十勝平野の一部に限られているなど、分布域の広がりには大きな変化は見られない。越冬が確認される地域も限局的である。

【生息地の現況】

主要な生息環境である草原の状況が悪化しており、河川敷の樹林化により生息地の草原が減少傾向にある。

【個体数の現況】

1980 年代後半から続いた顕著な個体数減少から、2000 年代以降北海道では繁殖推定個体数がやや回復傾向にあるが、1980 年代以前に比べるとまだかなり少ない。本州の越冬地では確認数も少ないうえに年変動があり、安定していない。九州での越冬数はまだ減少傾向にある。

存続を脅かす要因

草地開発、河川敷の樹林化やレクリエーション用地としての利用など、繁殖地や越冬地における生息環境の減少や悪化。

要因の区分：	（過去）	草地開発，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	草地開発，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ウズラ	*Coturnix japonica*	VU
第４次 2019：	ウズラ	*Coturnix japonica*	VU
第４次 2018：	ウズラ	*Coturnix japonica*	VU
第４次 2017：	ウズラ	*Coturnix japonica*	VU
第４次 2015：	ウズラ	*Coturnix japonica*	VU
第４次：	ウズラ	*Coturnix japonica*	VU
第３次：	ウズラ	*Coturnix japonica*	NT
第２次：	ウズラ	*Coturnix japonica*	DD
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt),【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【宮城県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【秋田県】情報不足(DD),【山形県】情報不足(DD),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク),【群馬県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【埼玉県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁・越),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】情報不足(DD),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【山梨県】準絶滅危惧(NT),【長野県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(越冬),【三重県】情報不足(DD),【京都府】絶滅寸前種,【大阪府】絶滅危惧Ⅰ類(CR＋EN),【兵庫県】A ランク,【奈良県】絶滅寸前種,【和歌山県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛媛県】情報不足(DD),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【熊本県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【大分県】情報不足(DD),【宮崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR-d),【鹿児島県】情報不足

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- EC (European Commission), 2009. European Union Management Plan 2009-2011: Common Quail, *Coturnix coturnix*.
- 藤巻裕蔵，2010．北海道中部・南東部におけるウズラの繁殖期の生息状況．日本鳥学会誌，59: 55-60.
- 樋口広芳・森岡弘之・山岸哲（編），1997．日本動物大百科 4． 鳥類 II．平凡社，東京．180pp.
- 環境庁，1979．第 2 回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書（鳥類）全国版．環境庁，東京．560pp.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2004．第 6 回自然環境保全基礎調査 種の多様性調査 鳥類繁殖分布調査報告書．環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田．343pp.
- 木村正雄，1991．野生ウズラのツキ網猟および日本における野生ウズラの捕獲羽数の推移に関する考察．日本家禽学会誌，28: 166-169.
- 木村正雄，1996．野生ウズラ．野生動物の持続的利用，畜産の研究，50: 198-202.
- 清棲幸保，1965．日本鳥類大図鑑 II．講談社，東京．898pp.
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- 奥山正樹，2004．狩猟鳥ウズラ *Coturnix japonica* の現状．山階鳥類学雑誌，35: 189-202.
- 奥山正樹，2005．北海道におけるウズラの現状を探る．北海道野鳥だより，(139): 4-7.
- 自然環境研究センター，2010．平成 21 年度狩猟鳥獣（カワウ、ウズラ等）のモニタリング手法等検討調査業務報告書.
- 自然環境研究センター，2011．平成 22 年度狩猟鳥獣（カワウ、ウズラ等）のモニタリング手法等検討調査業務報告書.
- 内田清之助・清棲幸保，1942．鳥類標識法ニ依ルうづらノ習性ニ関スル調査成績．鳥獣調査報告，10: 71-127.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．鳥類繁殖分布調査会，東京．176pp.
- 植田睦之・奴賀俊光・山﨑優佑，2023．全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年．特定非営利活動法人 バードリサーチ・公益財団法人 日本野鳥の会，東京．170pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Coturnix japonica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Coturnix japonica* is listed as VU under criteria D1.

D1. Population size estimated to number fewer than 1,000 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Grassland, Farmland,

	Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Abandoned farmland
Threat types:	Grassland development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	川路則友
Author:	Noritomo Kawaji

公表年月：2026 年 3 月

アマツバメ目 Apodiformes　アマツバメ科 Apodidae

ハリオアマツバメ

***Hirundapus caudacutus caudacutus* (Latham, 1801)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2				
基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

1997-2002 年に行なわれた全国鳥類繁殖分布調査では、現地調査で 46 調査地点で記録されている。

【近年の状況】

2016-2021 年に行なわれた全国鳥類繁殖分布調査の現地調査では、23 調査地点でしか記録されなかった。減少率は 50%だが、調査の間隔が 10 年よりやや長いため 30%以上 50%未満をあてはめた。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

中型の飛翔性昆虫食鳥類で、日中は広大な範囲を高速で飛びながら生活している。ニューギニア南部からオーストラリア東部で越冬し、本州中部以北に夏鳥として飛来する。主な繁殖地である北海道では低地から高標高地までで普通の鳥であったが、国内では 1970 年代から 2010 年代までに繁殖分布調査での記録地点と記録個体数の減少が顕著である。越冬地では環境改変が少ないにも関わらず、個体数が 1960 年代の 20%程度まで減少していると推定されており、繁殖地の営巣環境や渡り経路での環境要因の悪化に原因がある可能性が高い。また、食物となる飛翔性昆虫の減少が影響しているとも考えられる。

協力者:　米川洋（エデュエンス・フィールド・プロダクション）・和賀大地（エデュエンス・フィールド・プロダクション）

基礎情報

【形態】

全長約 20 cm、翼長約 200～210 mm、針を含めた尾長 50 mm 前後。性的二型はない。体部は紡錘形、翼は細長い鎌形で上腕が短く初列風切が長い。尾羽は短い角尾で固い羽軸の先端が羽弁より突き出て針状となる。頭部と背面は黒～灰褐色で、翼は青みのある金属光沢のある黒色だが、3 列風切に白斑がある。喉は白い。成鳥は額と下腹部が白い。幼鳥の額は灰褐色で下腹部には黒斑がある。

【生活史】

日本には本州中部以北に 4～10 月に夏鳥として飛来し、主に北海道で繁殖。単独営巣性で、大きな樹洞（底部約 40 cm 四方、深さ 1.5 m 以上）の底面で繁殖し、巣材を用いた造巣はしない（米川・川辺 1994）。卵は白色でおおむね 1 日おきに 1 卵産卵。一腹卵数は平均 6 卵、抱卵期間は約 20 日で雛は同時孵化。育雛期間は 40-50 日前後。雌雄とも抱卵、育雛を行う。繁殖個体の行動圏は数 10 km 以上の範囲に及ぶ。北海道東部の繁殖個体はオーストラリア東部で越冬し、渡り経路は秋と春で大きく異なることが確認された（Yamaguchi et al. 2020）。秋は韓国や中国を経由し、フィリピン海からニューギニアを通過してオーストラリア東海岸に到達する。春は、オーストラリア大陸内部を北西に進んで、スンダ列島やボルネオ島を通過し、南シナ海の洋上で北東に進路を変えて日本列島沿いに北海道まで戻る。

【生息環境】

海岸沿岸部、低標高地から高標高地までの市街地から森林地帯まで様々な環境で見られる。空中で飛翔性昆虫を採食し、通常は繁殖巣への帰巣を除いて日中は飛び続けていると考えられ、夜間は樹洞内や樹木にとまって寝ると考えられている。繁殖には大きな樹洞を持つ樹木が必要だが、営巣木の周囲は森林に限らず、開けていてもよい。波のない広い開放水面で、飛びながら飲水することもよく知られている。

生息環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地 低標高地】森林，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（7）島嶼地域

【分布域】

国内では夏鳥として本州中部以北に飛来し、主に北海道で繁殖。北海道では平地から高標高地で繁殖。国外では、北部ではシベリア中央部からサハリン島を含むロシア極東部、南部はモンゴル、中国北東部、朝鮮半島を含む地域で繁殖し、ニューギニア南部とオーストラリア東部で越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1974-1978 年に実施された第 2 回自然環境保全基礎調査の結果と、第 6 回自然環境保全

基礎調査・種の多様性調査として 1997-2002 年に実施された繁殖鳥類調査の結果を比較すると、出現地点が全国では 67%、主な繁殖地である北海道では 74%減少していた（玉田 2020）。さらに、後者の調査地点における 2016-2021 年の全国鳥類繁殖分布調査の結果では、記録地点数が半減しており減少が顕著である（植田・植村 2021）。特に関東以西の国内分布域の南側での減少が大きいと考えられる。

【生息地の現況】

大径木の大きな樹洞に営巣するため、営巣場所は不足や減少していると考えられる。本種は飛翔性昆虫食だが、飛翔性昆虫は世界的に減少していることが知られているため、食物資源量も減少している可能性が高い。

【個体数の現況】

越冬地オーストラリアでは、観察される群れ数に有意な減少傾向はないが、1 群れあたりの個体数が減少しており、1950 年から 2010 年代までに個体数が 80%減少したと推定されている（Tarbarton 2021）。本種の繁殖期の利用空域は広大かつ変化が激しいため（森ら 2024）、上述の繁殖鳥類調査の方法では、国内の減少率を詳細に把握することは困難と考えられるが、同調査の現地調査で観察された総個体数は 1997-2002 年が 46 地点 169 個体に対し、2016-2021 年には 23 地点 78 個体と減少していた（植田・植村 2021）。

存続を脅かす要因

大径木の大きな樹洞に営巣するため、営巣環境は元来希少かつ喪失しやすい。越冬地での個体数の激減の要因は、繁殖地での営巣環境の悪化、消失であると推定されている。風力発電用風車へのバードストライクの影響も懸念され、越冬地では実際に記録されている（Tarbarton 2021）。本種の食物となる飛翔性昆虫の減少も世界的に指摘されている（Hallmann et al. 2017）。繁殖地では外来種アライグマによる巣での成鳥、幼鳥、卵の捕食が発生しており、アライグマの個体数の増加とともにリスクが増大している。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，基質・基物の減少及び消失，その他（大型樹洞の消失）
	（現在）	森林伐採，捕食（外来種による），発電施設建設，人工構造物への衝突，基質・基物の減少及び消失，その他（大型樹洞の消失）

特記事項

越冬地オーストラリアでは 2019 年から危急種（Vulnerable）に選定されている（Australian Government Department of Agriculture, Water and the Environment 2019）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—

第４次 2018：	―	―	―
第４次 2017：	―	―	―
第４次 2015：	―	―	―
第４次：	―	―	―
第３次：	―	―	―
第２次：	―	―	―
第１次：	―	―	―

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】留意，【宮城県】準絶滅危惧(NT)，【山形県】準絶滅危惧(NT)，【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク)，【群馬県】準絶滅危惧(NT)，【埼玉県】情報不足(DD)(繁)，【石川県】情報不足(DD)，【福井県】要注目，【山梨県】情報不足(DD)，【長野県】準絶滅危惧(NT)，【岐阜県】情報不足，【三重県】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Australian Government Department of Agriculture, Water and the Environment, 2019. Species profile and threats database: *Hirundapus caudacutus* – White-throated Needletail. URL: http://www. marinereserves review. gov. au/cgi-bin/sprat/public/public species. plμmtaxon_id=66548
- Hallmann, C. A., M. Sorg, E. Jongejans, H. Siepel, N. Hofland, H. Schwan, W. Stenmans, A. Müller, H. Sumser, T. Hörren, D. Goulson and H. de Kroon, 2017. More than 75 percent decline over 27 years in total flying insect biomass in protected areas. PLOS ONE, 12: e0185809.
- 森さやか・米川洋・山内健生・千葉舞・今野怜・今野美和・和賀大地・樋口広芳・山口典之，2024．ハリオアマツバメは雛への給餌物としてメスの羽アリを選択的に利用する．日本鳥学会 2024 年度大会 講演要旨集，pp. 51-52．
- 玉田克巳，2020．鳥類繁殖分布調査報告書から分析した北海道の鳥類の分布の変化．Bird Research，16: A47-A58．
- Tarburton, M. K., 2021. Recent increase in knowledge about numbers and flight behaviour in the White-throated Needletail *Hirundapus caudacutus*. Australian Field Ornithology, 38: 124-130.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．鳥類繁殖分布調査会，東京．
- Yamaguchi, N. M., S. Mori, H. Yonekawa, D. Waga and H. Higuchi, 2021. Light-level geolocators reveal that White-throated Needletails (*Hirundapus caudacutus*) follow a figure-eight migration route between Japan and Australia. Pacific Science, 75: 75-84.

- 米川洋・川辺百樹，1994．十勝地方平野部におけるハリオアマツバメの繁殖生態．ひがし大雪博物館研究報告，16: 1-11．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hirundapus caudacutus caudacutus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hirundapus caudacutus caudacutus* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area, Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Predation (by alien species), Power plant construction, Collision with man-made structures, Reduction or loss of substrate, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	森さやか（酪農学園大学）
Author:	Sayaka Mori

公表年月：2026 年 3 月

アマツバメ目 Apodiformes　アマツバメ科 Apodidae

アマツバメ

***Apus pacificus kurodae* (Domaniewski, 1933)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2				
基準 A:　VU	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

全国鳥類繁殖分布調査の本州以南で 1997-2002 年にアマツバメが記録された現地調査コース数を使用。

【近年の状況】

全国鳥類繁殖分布調査の本州以南で 2016-2021 年にアマツバメが記録された現地調査コース数を使用。

99 コースから 53 コースに減少していた。これらのコースで記録された個体数は 1492 羽から 458 羽に減少しており、減少率はより大きかったが、アンケート情報を含むメッシュ数では逆に増加していた。アンケート情報を含んだ値は努力量や情報量で変化するので、現地調査をより重く扱い、また、調査の間隔が 10 年より長いことから、30%以上 50%未満とした。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

アマツバメは本州以南に分布するアマツバメの一亜種である。日本には夏鳥として渡来し、高山や海岸の崖に営巣する。個体数は減少傾向にあり、飛翔性昆虫を採食するほかの種も多くが減少していることから、採食環境が悪化している可能性が考えられる。

基礎情報

【形態】

全長 17.9-20.5 cm、翼長 170-195 mm、ふ蹠長 10-13 mm、体重 39-56 g。

雌雄同色で、全身黒く、腰と喉が白い。尾は長く、深い燕尾だが、閉じていることが多い。翼が鎌形になっているのが特徴である。

【生活史】

日本には、本州以南に夏鳥として渡来し、高山や海岸の崖に巣をつくる。希に橋などの人工物の隙間に営巣することがある。

【生息環境】

高山や海岸の崖に営巣し、広範囲を移動して、空中で飛翔性昆虫を採食する。

生息環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地 低標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等），洞窟・地下浅層・地下水域 【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

本州以南の全国に分布し、島嶼部にも生息する。崖に営巣するため、海岸や高山に生息し、その周辺で飛びながら採食するのが観察される。

現在の生息状況

【分布域の現況】

全国鳥類繁殖分布調査の結果によると、分布域に変化はなく、逆に広がっている傾向もあるが、現地調査によると、記録されるコース数が減少しており、また、記録された個体数も大きく減少していた。

【生息地の現況】

営巣環境については、アマツバメが営巣する崖は、海岸の崖や高山の崖などで、人為的な活動の影響を受けたりはしていないと考えられる。また、内陸の土の崖は、植生遷移などで崖を好む鳥にとっての営巣条件が悪くなっているが、アマツバメが利用する崖は岩の崖であるため、そのような影響も小さいと考えられる。

採食環境については、全国鳥類繁殖分布調査では、近縁種のハリオアマツバメ、ヒメアマツバメ、そして、同様に飛翔性昆虫を採食するツバメ類の減少が報告されており、原因等詳細は不明だが、採食環境は悪くなっているものと推測される。

【個体数の現況】

全国鳥類繁殖分布調査の現地調査で記録された個体数は 1990 年代の 1492 羽から 2010 年代は 458 羽に大きく減少していた。ただし、本調査は、各調査地で 1 回しか調査をしておらず、また、アマツバメは群れで記録される種のため、記録される羽数のばらつきは大きくなる。多地点で調査し、また、確認地点数でみても減少しており、減少していること

は確かだが、この個体数の減少率を議論する際には、以上の事情に留意する必要がある。

存続を脅かす要因

減少要因は明らかでないが、生息地の現況で述べたように、採食環境の影響が大きいのではないかと考えられる。

要因の区分：	（過去）	その他（食物となる昆虫の減少），不明
	（現在）	その他（食物となる昆虫の減少），不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【千葉県】最重要保護生物(A)，【東京都（本土部）】情報不足(DD)，【東京都（西多摩）】情報不足(DD)，【東京都（伊豆諸島）】準絶滅危惧(NT)，【石川県】情報不足(DD)，【和歌山県】学術的重要(SI)，【広島県】情報不足(DD)，【山口県】準絶滅危惧(NT)，【香川県】準絶滅危惧(NT)，【大分県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版，pp. 438．日本鳥学会，東京．

- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Apus pacificus kurodae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Apus pacificus kurodae* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area, Mid-altitude area, Low-altitude area】Cliff/Talus area (e.g. limestone area), Cave/Shallow underground/Subterranean water body 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Other, Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	植田睦之（バードリサーチ）
Author:	Mutsuyuki Ueta

公表年月：2026 年 3 月

ツル目 Gruiformes　クイナ科 Rallidae

バン

***Gallinula chloropus chloropus* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

1997-2002 年に実施された全国鳥類繁殖分布調査、1993-1997 年に実施された東京都鳥類繁殖分布調査がある。いずれも減少が示されている。

【近年の状況】

2016-2021 年に実施された全国鳥類繁殖分布調査および東京都繁殖分布調査がある。また 2008-2022 年の減少率を推定したモニタリングサイト 1000 里地調査でも-9.4%/年の減少が示されている。ここでは全国鳥類繁殖分布調査の現地調査コース数を示した。1990 年代調査のコース数は 87、2010 年代調査のコース数は 42 で、減少率は 52%であるが、記録メッシュ数や、里地の調査結果ではそこまで減少していないこと、調査の間隔が 10 年より長いため、30%以上を選択した。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

バンは全国の水辺に生息する種で、主に留鳥だが、北日本では夏鳥。1970 年代より継続的に減少しており、湿地の減少や水田の整備などによる生息環境の悪化が原因と考えられる。

基礎情報

【形態】

全長 296-350 mm、翼長 158-170 mm、ふ蹠長 45-50 mm、体重 198-405 g。

雌雄同色で、雄の方はやや大きい。全身黒から黒褐色、脇腹に白い縦線と下尾筒の両側に白い部分がある。くちばしから額（額板）にかけての赤が目立つ。くちばしの先端のみは黄色い。脚は大きく、緑がかった黄色。幼鳥は全身褐色で額板は発達していない。

【生活史】

全国で留鳥として繁殖し、北日本では夏鳥。水辺や水田の草むらで営巣する。巣の外径は 25-30 cm、5 月中旬から 8 月上旬に長径 35-46 mm、短径 25-32.2 mm ほどの卵を 5-10 卵産む。種内托卵することもある。雄雌ともに抱卵し、19-22 日で孵化する。植物の種子や葉、昆虫や水生生物などを食べる。

【生息環境】

湖沼、河川、蓮池、水田などの水辺に生息し、ヨシやマコモ、イなどの密生地に生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原・細流，河川中流域，ため池・池沼，湖・ダム湖 【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，ワンド，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

南西諸島などの島嶼部を含め全国に生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

繁殖期の分布域には大きな変化はないが、減少傾向にあり、全国鳥類繁殖分布調査で確認されたメッシュ数は 1970 年代の 211 メッシュから、1990 年代は 182 メッシュに、そして 2010 年代は 173 メッシュに減少している。現地調査で記録されたコース数の減少はさらに大きく、1990 年代の 87 コースから 2010 年代は 42 コースに半減している。これに対して、越冬期の分布は拡大しており、清棲（1978）は本州では夏鳥としているが、1984-1986 年には本州の太平洋側では越冬するようになっており、2016-2022 年には南東北まで越冬するようになっており、北海道の記録もあった。冬期の気候の緩和が影響しているものと考えられる。

【生息地の現況】

開発による湿地の減少、水田の整備などで生息環境は悪化しているものと考えられる。

【個体数の現況】

全国鳥類繁殖分布調査の現地調査では 1990 年代は 289 羽記録されていたのが、2010 年

代は 126 羽に減少していた。

存続を脅かす要因

開発による湿地の減少、湿地の乾燥化に伴う植生遷移で生息閑居が減少していること、水田の整備に伴う水生生物の減少などで食物が減少していることなどが減少要因として考えられる。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，農薬汚染/化学物質汚染，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，農薬汚染/化学物質汚染，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】希少野生生物(C ランク),【岩手県】留意,【山形県】準絶滅危惧(NT),【福島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【埼玉県】準絶滅危惧 2 型(NT2)(繁),【千葉県】重要保護生物(B),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（南多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（西多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【富山県】準絶滅危惧(NT),【石川県】準絶滅危惧(NT),【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(繁殖),準絶滅危惧(NT)(越冬),【三重県】情報不足(DD),【滋賀県】希少種,【和歌山県】準絶滅危惧(NT),【宮崎県】準絶滅危惧(NT-g)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境省自然環境局生物多様性センター，2024．重要生態系監視地域モニタリング推進事業 (モニタリングサイト 1000) 里地調査 2005-2022 年度とりまとめ報告書．環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田.
- 清棲幸保，1979．増補改訂版日本鳥類大図鑑Ⅱ．講談社，東京.
- 植田睦之・奴賀俊光・山﨑優佑，2023．全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年．144pp. 特定非営利活動法人 バードリサーチ・公益財団法人 日本野鳥の会，東京.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gallinula chloropus chloropus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gallinula chloropus chloropus* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Farmland, Abandoned farmland, Wetland/Marsh/Stream, Middle river basin, Reservoir/Pond, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Inlet, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Field preparation, Pesticide/Toxic chemical pollution, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	植田睦之（バードリサーチ）
Author:	Mutsuyuki Ueta

公表年月：2026 年 3 月

ツル目 Gruiformes　ツル科 Gruidae

マナヅル

***Antigone vipio* (Pallas, 1811)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本種の主要な越冬地である鹿児島県出水市では水田面積が減少傾向にあり、採餌に適した環境が減少している。
また、近年は、出水市において本亜種が高病原性鳥インフルエンザに感染し、死亡する事例が確認されている。特に 2022 年から 2023 年にかけて、出水市ではツル類の大量死が発生し、約 1400 羽のナベヅルが回収された。出水市で越冬するツル類のほとんどは荒崎地域もしくは東干拓地域のねぐらを利用しており、リスクが高い状態が継続していると考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

大型の鳥で、冬鳥として鹿児島県に渡来する。鹿児島県の渡来数は増加傾向にある。東アジアに局地的な分布をしていて、その約 4 割が鹿児島県出水地方に集中して越冬している。そのため感染症による大量死の危険性がある。2022 年から 2023 年にかけては、出水市でツル類の大量死が発生し、77 羽のマナヅルが回収された。

基礎情報

【形態】

全長は約 130 cm。雌雄同色。頭頂から後頸は白色で目の周りは赤い。背、下面は暗灰色。雨覆羽と三列風切羽は灰白色。その他の翼は黒色。嘴は黄緑色で脚は淡赤色。虹彩は橙色。幼鳥は頭部と頸が茶褐色で、雨覆羽も褐色を帯びる。ナベヅル（*Grus monacha*）は小型で、目の周りが赤くない。

【生活史】

日本には 10 月下旬以降に渡来し、2 月頃まで越冬する。穀物、植物の根、昆虫類、両生類などを採餌する。地上に営巣して 5 月に 2 卵を産む。繁殖開始年齢は、雌雄とも 2～3 歳である。

【生息環境】

越冬期は農耕地（水田、畑）や水辺（干潟、河口など）に生息する。繁殖期は開けた湿地に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】田地・畑地，湿地・湿原，河口域
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

東シベリア南部とロシア極東南部のハンカ湖とアムール川流域、中国東北部、モンゴル東北部で繁殖し、中国南東部の長江下流域、朝鮮半島中部、日本で越冬する。日本では鹿児島県で定期的に越冬するが、その他長崎県などでも越冬が確認されている。鹿児島県の越冬地ではナベヅルやクロヅル（*Grus grus lilfordi*）と混群をなす。

現在の生息状況

【分布域の現況】

かつては日本各地に冬鳥として渡来していたが、明治以降は鹿児島県に限られるようになった。その他長崎県などでも少数が越冬する。また、渡りの途中には少数が北海道から沖縄まで各地に短期間出現することがある。

【生息地の現況】

鹿児島県出水地方では、1996 年には従来からの荒崎のねぐらのほかに、高尾野町東干拓に人工的なねぐらが作られ、現在はこの 2 ヶ所が利用されている。採餌場所である水田は土地改良による乾田化が進んだり、ビニールハウスの設置によって環境が変化している。交通量の増加や道路建設による悪影響も予想される。なお、マナヅルはナベヅルに比べて、水分の多い湿地を好む傾向があり、水田の乾田化の影響はより大きいと思われる。

【個体数の現況】

鹿児島県出水地方の渡来数は、1927 年の 40 羽から次第に増加して、1939 年には 469 羽数となったが、1947 年には 25 羽に急減した。以来漸増し、1960 年に 60 羽、1970 年に 257 羽、1980 年に 1,318 羽、1990 年に 2,120 羽、2000 年に 2,655 羽、2010 年には 1,176 羽、

2020 年には 2,779 羽となった。マナヅルの越冬地は、このほか韓国中部の鉄原や板門店、中国東南部の江西省鄱陽湖、湖南省洞庭湖などが知られている。個体数は韓国と日本を含めて 6,200-6,500 羽、中国は全体で 3,000 羽と推定されていたが近年は減少との報告もあり、地域毎や年ごとの個体数は十分に把握されていない。

存続を脅かす要因

世界の総個体数の 5 割を占めるマナヅルが越冬する出水地方では、個体数の増加によるねぐらや採餌場所での過密状態が生じている。これは自然の餌不足を招いたり、感染症罹患の危険性を高めている。実際に、2022 年から 2023 年にかけては、出水市でツル類の大量死が発生し、77 羽のマナヅルが回収された。極めて高いリスクがあるといえる。また、農作物への食害が増加することによる地域住民との軋轢が増している。電線に衝突する事故も発生している。渡り途中の韓国では、農薬を用いた密猟によってナベヅルとマナヅルが死亡する事故も発生していた。

要因の区分：	（過去）	感染症/病原菌，混獲・錯誤捕獲，人工構造物への衝突
	（現在）	感染症/病原菌，人工構造物への衝突

特記事項

東アジアに局地的に分布する種で、学術的に貴重である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	マナヅル	*Grus vipio*	VU
第４次 2019：	マナヅル	*Grus vipio*	VU
第４次 2018：	マナヅル	*Grus vipio*	VU
第４次 2017：	マナヅル	*Grus vipio*	VU
第４次 2015：	マナヅル	*Grus vipio*	VU
第４次：	マナヅル	*Grus vipio*	VU
第３次：	マナヅル	*Grus vipio*	VU
第２次：	マナヅル	*Grus vipio*	VU
第１次：	マナヅル	*Grus vipio*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd)，【山形県】評価対象外，【千葉県】重要保護生物(B)，【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【島根県】情報不足(DD)，【岡山県】情報不足，【山口県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種，【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【熊本県】準絶滅危惧(NT)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類

(VU)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【佐賀県】

参考文献

- Chan, S., 1999. Atlas of Key Sites for Cranes in the North East Asian Flyway. Wetlands International Japan, Tokyo. 67pp.
- 原口優子・吉野智生・高瀬公三，2016．鹿児島県出水平野におけるツル類の死亡個体数の推移（2003～2013）と主な解剖所見．日本鳥学会誌，65(2): 153-160.
- Higuchi, H., K. Ozaki, G. Fujita, J. Mintom, M. Ueta, M. Soma and N. Mita, 1996. Satellite Tracking of White-naped Crane Migration and the Importance of the Korean Demilitarized Zone. Conservation Biology, 10: 806-812.
- 鹿児島県，2023．野鳥における鳥インフルエンザの発生状況について【令和 5 年 5 月 19 日現在】．https://www.pref.kagoshima.jp/ad04/documents/102075_20230616194808-1.pdf
- 国立科学博物館附属自然教育園，1990．国際保護鳥ナベヅル・マナヅルの保護・管理手法に関する基礎研究（資料集）．国立科学博物館，東京．229pp.
- Mirande, C. M. and J. T. Harris, editors. 2019. Crane Conservation Strategy. Baraboo, Wisconsin, USA: International Crane Foundation. 455pp.
- 農林水産省，作物統計調査　市町村別データ（2010 年・2020 年），https://www.e-stat.go.jp/dbview μmsid=0003293480
- Ozaki, K. and T. Baba, 1994. Recoveries and resightings of color banded Hooded *Grus monachal* and White-naped *G. vipio* cranes in northeast Asia, pp. 32-40. In: H. Higuchi and J. Minton (eds.) The Future of Cranes and Wetlands. Wild Bird Society of Japan. Tokyo.
- 尾崎清明，1997．ナベヅルとマナヅル．平成 8 年度鳥類標識調査報告書，pp. 140-144．山階鳥類研究所，我孫子．
- Rose, P. M. and D. A. Scott, 1994. Waterfowl Population Estimates. IWRB Publ. 29, Slimbridge. 102pp.
- 千羽晋示，1994．出水のツル．春苑堂書店，鹿児島．228pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Antigone vipio has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Antigone vipio* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.
b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
(i) extent of occurrence
(ii) area of occupancy
(iii) area, extent and/or quality of habitat
(iv) number of locations or subpopulations
(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Wetland, Estuary
Threat types:	Disease, Collision with man-made structures
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Saga】.



執筆者:	尾崎清明（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Kiyoaki Ozaki

公表年月：2026 年 3 月

ツル目 Gruiformes　ツル科 Gruidae

ナベヅル

***Grus monacha* Temminck, 1835**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　VU	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本種の主要な越冬地である鹿児島県出水市では水田面積が減少傾向にあり、採餌に適した環境が減少している。
また、近年は、出水市において本亜種が高病原性鳥インフルエンザに感染し、死亡する事例が確認されている。特に 2022 年から 2023 年にかけて、出水市ではツル類の大量死が発生し、約 1400 羽のナベヅルが回収された。出水市で越冬するツル類のほとんどは荒崎地域もしくは東干拓地域のねぐらを利用しており、リスクが高い状態が継続していると考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

大型の鳥で、冬鳥として鹿児島県、山口県などに渡来する。鹿児島県の渡来地では増加傾向にあるが、山口県の渡来地では減少している。世界的にも東アジアに局地的な分布をしていて、その大部分が鹿児島県出水地方に集中して越冬している。

基礎情報

【形態】

全長は約 100 cm。雌雄同色。頭と頸は白色で、その他全身灰黒色。頭頂の裸出部は赤い。嘴は黄褐色で脚は黒色。虹彩は赤色。幼鳥は頭と頸がクリーム色で、体は黒褐色。クロヅル（*Grus grus*）はやや大きく灰色で、喉は黒い。

【生活史】

日本には 10 月末に渡来し、3 月末まで越冬する。穀物、植物の根、昆虫類、両生類などを採餌する。地上に営巣して 5 月に 2 卵を産む。繁殖開始年齢は、メスで 3～4 歳、オスでは 4～5 歳である。

【生息環境】

越冬期は水田や畑、干潟、河口などに生息する。繁殖期は森林に囲まれた湿地に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】田地・畑地，湿地・湿原，河口域
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

東シベリア南部とロシア極東南部のアムール川、ウスリー川、レナ川流域で繁殖し、中国南東部の長江下流域と朝鮮半島南部、および日本で越冬する。日本では鹿児島県、山口県などで定期的に越冬する。鹿児島県の越冬地ではマナヅル（*Antigone vipio*）やクロヅルと混群をなす。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本ではかつて日本各地に冬鳥として渡来していたが、明治以降は鹿児島県、山口県などに限られるようになった。近年は高知県、長崎県などでも越冬が確認されている。また、渡りの途中には少数が北海道から沖縄まで各地に短期間出現することがあり、その頻度は増加傾向にある。

【生息地の現況】

鹿児島県出水地方では、阿久根にあったねぐら（300 羽以上の記録がある）が土地造成によって 1988 年に消失した。1996 年には従来からの荒崎のねぐらのほかに、高尾野町東干拓に人工的なねぐらが作られ、現在はこの 2 ヶ所が利用されている。採餌場所である水田は土地改良による乾田化が進んだり、ビニールハウスの設置によって環境が変化している。交通量の増加や道路建設による悪影響も予想される。山口県八代でも、水田の土地改良による環境変化が見られる。

【個体数の現況】

鹿児島県出水地方の渡来数は、1927 年の 400 羽（1927～28 年の越冬期間の最大数、以下同様）から次第に増加して、1939 年には 3,435 羽となるが、1947 年には 250 羽に急減す

る。以来再度増加を続けて、1970 年に 2,072 羽、1990 年に 7,833 羽、2010 年に 11,953 羽、2020 年に 15,909 羽となった。一方、山口県八代の渡来数は、1869 年の 10 羽からしだいに増加して、1945 年には最高数の 250 羽となる。その後減少して、1978 年までは 100 羽前後で推移する。以後は減少が続いて、1990 年に 48 羽、2010 年には 8 羽となった。2021 年には 28 羽となったが、2022 年に再び減少し、2023 年の渡来数は 7 羽だった。ナベヅルの越冬地は、このほか韓国南部の大邱と順天、中国東南部の江西省鄱陽湖などが知られている。個体数は 1985 年に発見された大邱で 200～300 羽いたが、1996 年以降は見られなくなり、順天では次第に増加しており、2018 年は 1,700 羽が記録されている。中国は全体で約 1,500 羽と推定されるが、地域毎や年毎の個体数は十分に把握されていない。

存続を脅かす要因

世界の総個体数の 8 割を占めるナベヅルが越冬する出水地方では、個体数の増加によるねぐらや採餌場所での過密状態が生じている。これは自然の餌不足を招いたり、感染症発生の危険性を高めている。2022 年から 2023 年にかけて、出水市ではツル類の大量死が発生し、約 1,400 羽のナベヅルが回収された。極めて高いリスクがあるといえる。また、農作物への食害が増加することによる地域住民との軋轢が増し、食害防除のために設置される防除網に掛かって負傷・死亡することがある。また、電線に衝突する事故もほぼ毎年起きている。渡り途中の韓国では、農薬を用いた密猟によってナベヅルとマナヅルが死亡する事故も発生していた。なお、クロヅルとの雑種も見られ、その雑種とナベヅルとの交雑も確認されている。

要因の区分：	（過去）	感染症/病原菌，交雑（在来種による），混獲・錯誤捕獲，人工構造物への衝突
	（現在）	感染症/病原菌，交雑（在来種による），人工構造物への衝突

特記事項

東アジアに局地的に分布する種で、学術的に貴重である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ナベヅル	*Grus monacha*	VU
第４次 2019：	ナベヅル	*Grus monacha*	VU
第４次 2018：	ナベヅル	*Grus monacha*	VU
第４次 2017：	ナベヅル	*Grus monacha*	VU
第４次 2015：	ナベヅル	*Grus monacha*	VU
第４次：	ナベヅル	*Grus monacha*	VU
第３次：	ナベヅル	*Grus monacha*	VU

第２次:	ナベヅル	*Grus monacha*	VU
第１次:	ナベヅル	*Grus monacha*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【千葉県】重要保護生物(B)，【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【三重県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【和歌山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【島根県】情報不足(DD)，【岡山県】情報不足，【山口県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【徳島県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種，【長崎県】準絶滅危惧(NT)，【熊本県】準絶滅危惧(NT)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【佐賀県】

参考文献

- Chan, S., 1999. Atlas of Key Sites for Cranes in the North East Asian Flyway. Wetlands International Japan, Tokyo. 67pp.
- 原口優子・吉野智生・高瀬公三，2016．鹿児島県出水平野におけるツル類の死亡個体数の推移（2003～2013）と主な解剖所見．日本鳥学会誌，65(2): 153-160.
- 鹿児島県，2023．野鳥における鳥インフルエンザの発生状況について【令和 5 年 5 月 19 日現在】．https://www.pref.kagoshima.jp/ad04/documents/102075_20230616194808-1.pdf
- 国立科学博物館附属自然教育園，1990．国際保護鳥ナベヅル・マナヅルの保護・管理手法に関する基礎研究（資料集）．国立科学博物館，東京．229pp.
- Mirande, C. M. and J. T. Harris, editors. 2019. Crane Conservation Strategy. Baraboo, Wisconsin, USA: International Crane Foundation. 455pp.
- 農林水産省，作物統計調査　市町村別データ（2010 年・2020 年），https://www.e-stat.go.jp/dbview μmsid=0003293480
- 尾崎清明，1997．ナベヅルとマナヅル．平成 8 年度鳥類標識調査報告書，pp. 140-144．山階鳥類研究所，我孫子.
- Rose, P. M. and D. A. Scott, 1994. Waterfowl Population Estimates. IWRB Publ. 29, Slimbridge. 102pp.
- 千羽晋示，1994．出水のツル．春苑堂書店，鹿児島．228pp.
- 周南市，2025．八代地区のナベヅル渡来数(R6/11/5 更新).
  https://www.city.shunan.lg.jp/uploaded/attachment/105287.pdf

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Grus monacha has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Grus monacha* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Wetland, Estuary
Threat types:	Disease, Hybridization (with native species), Collision with man-made structures
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Saga】.



執筆者:	尾崎清明（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Kiyoaki Ozaki

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　チドリ科 Charadriidae

ムナグロ

***Pluvialis fulva* (Gmelin, 1789)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2				
基準 A:　VU	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 0.87（春期 0.76、秋期 1.04、冬期 0.82）。

【近年の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2017 年時点で、平均 0.63（春期 0.66、秋期 0.58、冬期 0.66）。秋期の減少が著しい。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

大型のチドリ類。成鳥繁殖羽は、顔から腹部までが黒く、額から側脇まで白色、背面は黄色、白色、黒色のまだら模様。国内では主に旅鳥だが、南西諸島などでは越冬する。水田、畑、草地など、内陸の湿地に飛来することが多い。特に春期は水田をよく利用する。春期・秋期・冬期とも減少傾向が見られ、特に秋期の減少が著しい。主要な渡来環境が水田であるため、圃場整備の影響や稲作の農法の変化などの影響を受けると考えられる。

基礎情報

【形態】

全長 24 cm。大型のチドリ類。成鳥夏羽は、顔から腹部までが黒く、額から側脇まで白色、背面は黄色、白色、黒色の斑模様。オスは顔まで黒くなるが、メスの顔はやや黒がかる程度。冬羽は全体に淡褐色となり、背面には黄褐色斑がある。幼羽は背中の黒い羽毛に黄金色の虫食斑があり、前面に縦斑がある。

【生活史】

日本では主に旅鳥で、春と秋の渡り期に全国的にみられる。南西諸島や小笠原諸島では越冬する。

【生息環境】

主に水田、畑、草地に生息し、干潟にも渡来する。繁殖地に渡る前に集結する日本の水田の重要性が指摘されている。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，田地・畑地，耕作放棄地，河川中流域
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

繁殖期は極北ロシアのツンドラに分布。オビ湾以東、ユーラシア大陸の東端まで。一部アラスカ西部にも分布。ユーラシア大陸のより西には別種のヨーロッパムナグロが、北米大陸極北にはアメリカムナグロが分布している。越冬期はインド亜大陸の東岸から東南アジア、オーストラリア、太平洋上の島嶼に広く分布。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本では主に旅鳥で、春と秋の渡り期に全国的にみられる。南西諸島や小笠原諸島では越冬する。

【生息地の現況】

主要な渡来環境が水田であるため、圃場整備の影響や稲作の農法の変化などの影響を受けていると考えられる。

【個体数の現況】

現在、IUCN のレッドリストでは、低危険種とされている。

2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、ムナグロの春期の推定変化率は、-37.65%（30 年前比）、-15.49%（20 年前比）、-14.27%（10 年前比）、秋期の推定変化率は、-52.96%（30 年前比：有意）、-21.48%（20 年前比）、-4.63%（10 年前比）（Amano et al. 2010）であり、春期・秋期とも減少を示していた。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告

（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 0.87（春期 0.76、秋期 1.04、冬期 0.82）、2017 年時点で、平均 0.63（春期 0.66、秋期 0.58、冬期 0.66）。直近の 10 年（2007～2017 年）では、春期・秋期・冬期とも減少傾向が見られ、特に秋期の減少が著しい。

存続を脅かす要因

河川敷、水田や畑、草地などに生息するため生息環境の減少。圃場整備などによる乾燥化。農期や農法の変化。

要因の区分：	（過去）	河川開発，湿地開発，圃場整備，草地開発
	（現在）	河川開発，湿地開発，圃場整備，草地開発

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【千葉県】重要保護生物(B)，【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【東京都（区部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【東京都（北多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【東京都（南多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【神奈川県】減少種(非繁殖期)，【愛知県】準絶滅危惧(NT)(越冬)，【京都府】準絶滅危惧種，【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【徳島県】準絶滅危惧(NT)，【香川県】準絶滅危惧(NT)，【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【長崎県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: An example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservation, 143: 2238-2247.
- Johnson, O. W., P. G. Connors and P. Pyle, 2021. Pacific Golden-Plover (*Pluvialis fulva*), version 1. 1. In Birds of the World (P. G. Rodewald, B. K. Keeney, and S. M. Billerman, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田市．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- 渡辺朝一，2015．生態図鑑 ムナグロ．バードリサーチニュース，12(5)．
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp.wetlands.org on Mon Feb 2020 23.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pluvialis fulva has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pluvialis fulva* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Middle river basin
Threat types:	River development, Wetland development, Field preparation, Grassland development
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　チドリ科 Charadriidae

シロチドリ

***Charadrius alexandrinus nihonensis* Deignan, 1941**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。

2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 0.65（春期 0.65、秋期 0.6、冬期 0.7）。

【近年の状況】

モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。

2000 年を基準値 1.00 とし、2017 年時点で、平均 0.38（春期 0.34、秋期 0.36、冬期 0.45）。継続して減少が確認されている。

繁殖状況を現地調査した全国鳥類繁殖分布調査（2021）でも、1990 年代と 2010 年代に調査された調査コースを比較すると、22 地点から 9 地点へと減少している。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

嘴の短い小型のチドリ類。オスの繁殖羽は、黒い過眼線、前頭部に黒斑があり後頭部は茶色。背面は灰褐色。腹部は白色。非繁殖羽は、上面は灰色。頸部・腹部は白色。世界的に広く分布する。国内では、北海道から南西諸島まで留鳥として観察される。主に砂浜や干潟などの海岸域や河川に生息する。砂浜や河川の氾濫原の減少による生息地の減少により、各地の個体群の減少が著しい。

基礎情報

【形態】

全長約 17 cm。嘴の短い小型のチドリ類。オスの繁殖羽は、過眼線が黒く、眉斑は白色。前頭部に黒斑があり、後頭部は茶色。頸部は白色。肩から側胸にかけて黒い線があり、背中は灰褐色、腹部は白色となる。嘴、脚は黒色。飛翔時に翼には白い翼帯が見える。オスの非繁殖羽は、頭部、背、側胸は灰褐色。頸部・腹部は白色となる。メスはオスの非繁殖羽に似る。幼鳥の頭部、背は灰褐色、バフ色羽縁があり、脚の色は淡い紅色。「ピル、ピル」などと鳴く。コチドリ（*Charadrius dubius*）は、目の周りに黄色いアイリングがあり、やや小さい。イカルチドリ（*Charadrius placidus*）は、尾羽が長く、やや大きい。メダイチドリ（*Charadrius mongolus*）は、後頸部が白くなく、嘴は太く短く、やや大きい。

【生活史】

繁殖期は 3 月～7 月。一夫一妻で繁殖する。よく似た環境を利用するコチドリやイカルチドリに比べて、粒径の小さな基質（砂礫）を利用する傾向がある。巣は砂地の窪みに小石などを敷き産卵する。一腹卵数は通常 3 個。主にオスが夜間、メスが日中に抱卵を行う。ヒナは孵化後すぐに歩く（早成性）。雌雄ともに育雛も行い、ヒナはひと月ほどで独立する。営巣地やヒナの近くに捕食者が現れた場合に、親鳥は擬傷行動をとる。砂浜や干潟などを走り、ゴカイや甲殻類、昆虫類などをつまみ取り捕食する。繁殖期は縄張りを持つが、非繁殖期は集団で過ごす。

【生息環境】

主に砂浜や干潟などの海岸域や河川に生息する。砂浜海岸や砂質の河川河口・河川敷・中洲、造成中の埋立地などで繁殖する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】砂地・礫地，潟・湖・ダム湖，砂浜・礫浜，汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】岩礁（磯），干潟，砂底・礫底，泥底
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

世界的に広く分布する。アジア、ヨーロッパ、アフリカの温帯域で繁殖し、北部地域の個体は、温帯、熱帯域で越冬する。国内に生息する亜種シロチドリ（*Charadrius alexandrinus nihonensis*）は北海道から南西諸島まで留鳥として観察されるが、北海道では主に夏鳥。ヨーロッパから西アジアに生息する基亜種ハシボソシロチドリ（*Charadrius alexandrinus alexandrinus*）も過去に記録がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現況でも全国的に確認されるが、利用可能な生息環境の消失は国内分布に影響を与えている可能性がある。

【生息地の現況】

砂浜や河川の氾濫原の減少による繁殖地の減少。繁殖阻害要因として、飼い犬の散歩を含めた砂浜での人のレジャー活動や、犬やカラス類による卵や雛の捕食なども指摘されている（平井ら 2000）。埋立地・造成地などで一時的に大規模なコロニーが観察されるが、これらの場所も、開発圧やカラスなどの捕食圧の増加などにより、長期的・安定的な繁殖地となるわけではない。

【個体数の現況】

砂浜、河川などの自然環境で減少しているが、埋立地、造成地などで一時的な集団で営巣することがある。2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、春期の推定変化率は、-78.09%（30 年前比：有意）、-15.35%（20 年前比）、-30.77%（10 年前比：有意）、秋期の推定変化率は、-91.77%（30 年前比：有意）、-72.78%（20 年前比：有意）、-43.03%（10 年前比：有意）（Amano et al. 2010）と、個体数の減少が著しい。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出し、2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 0.65（春期 0.65、秋期 0.6、冬期 0.7）、2017 年時点で、平均 0.38（春期 0.34、秋期 0.36、冬期 0.45）。継続した減少が確認されている。

また、繁殖状況を現地調査した全国鳥類繁殖分布調査（2021）では、1990 年代と 2010 年代に確認された調査コースを比較すると、22 地点から 9 地点へと減少している。

存続を脅かす要因

海岸開発や土砂供給が減少したことにともなう砂浜の減少や河川流量の安定化のため氾濫原ができにくく、繁殖地が減少している。

要因の区分：	（過去）	河川開発，海岸開発，湿地開発，捕食（外来種による），その他（レジャー等の人間活動）
	（現在）	河川開発，海岸開発，湿地開発，捕食（外来種による），その他（レジャー等の人間活動）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シロチドリ	*Charadrius alexandrinus dealbatus*	VU
第４次 2019：	シロチドリ	*Charadrius alexandrinus dealbatus*	VU
第４次 2018：	シロチドリ	*Charadrius alexandrinus dealbatus*	VU
第４次 2017：	シロチドリ	*Charadrius alexandrinus dealbatus*	VU
第４次 2015：	シロチドリ	*Charadrius alexandrinus*	VU

第４次:	シロチドリ	*Charadrius alexandrinus*	VU
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【秋田県】準絶滅危惧(NT),【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク),【群馬県】準絶滅危惧(NT),【埼玉県】絶滅の恐れがある地域個体群(LP)(繁),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(繁殖期)、準絶滅危惧(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】準絶滅危惧(NT),【石川県】準絶滅危惧(NT),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【山梨県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岐阜県】準絶滅危惧,【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁殖),絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越冬),【三重県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁殖),絶滅危惧ⅠB 類(EN)(越冬),【滋賀県】希少種,【京都府】絶滅寸前種,【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【兵庫県】A ランク,【和歌山県】準絶滅危惧(NT),【島根県】準絶滅危惧(NT),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【広島県】地域個体群(LP),【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【香川県】準絶滅危惧(NT),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-g),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類,【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【三重県】

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: An example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservation, 143 (9): 2238-2247.
- 天野一葉，2006．干潟を利用する渡り鳥の現状．地球環境，11 (2): 215-226.
- del Hoyo, J., A. Elliott and J. Sargatal (eds.), 1996. Handbook of the Birds of the World. Vol. 3. Hoatzin to Auks. Lynx Edicions, Barcelona.
- Hayman, P., J. Marchant and T. Prater, 1986. Shorebirds, Croom Helm, London.

- 平井正志・橋本富三・西村泉・坂口守・大西幸枝・中村洋子・橋本祐子・秋田由美子，2000．三重県中部の自然海岸におけるシロチドリの繁殖．Strix，18: 45-53．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．第 6 回自然環境保全基礎調査 種の多様性調査 鳥類繁殖分布調査報告書．環境省，富士吉田市．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田市．
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本野鳥生態図鑑〈水鳥編〉．保育社，大阪．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- Yamagishi, S., H. Matsubara, S. Hiramatsu, T. Sumi and Y. Ezaki, 2009. Hydro-physics that enables coexistence of three different species of plovers in the Kizu River. Ecol. Civil Eng, 12(2): 79-85.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Charadrius alexandrinus nihonensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Charadrius alexandrinus nihonensis* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Sandy area/Gravelly area, Lagoon/Lake/Dam, Sandy beach/Pebble beach, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Reef, Intertidal mudflat, Sandy bottom/Gravelly bottom, Muddy bottom
Threat types:	River development, Coastal development, Wetland development, Predation (by alien species), Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Mie】.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae

ホウロクシギ

***Numenius madagascariensis* (Linnaeus, 1766)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 1.06（春期 1.23、秋期 0.88）。

【近年の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2017 年時点で、平均 0.71（春期 1.06、秋期 0.36）。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

日本では、少数が九州や琉球諸島で越冬するものの、主に春秋の渡りの時期に、干潟等に渡来する。河口や海岸の泥浜干潟等で、嘴を砂泥地に深く差し込み、ゴカイ類やカニ類を食べる。本種の個体数は、春期・秋期とも減少傾向が見られている。越冬地であるオーストラリアでも減少が懸念されている。近年シギ・チドリ類が渡りの時期に利用できる干潟や水田は減少傾向にあり、渡り途中のエネルギー補給に影響が出ていると思われる。

基礎情報

【形態】

全長 53～66 cm。全身がバフ色で、全身に細かい黒褐色の縦斑がある。嘴は顕著に長く、下に曲がる。嘴は下嘴の基部側がピンク色で、その他は黒色。脚は長い。ダイシャクシギ（*Numenius arquata*）に似るが、本種は下腹部や腰が褐色がかるのに対し、ダイシャクシギは下腹部や腰は白色で、褐色みがないという点で区別できる。

【生活史】

日本では主に春秋の渡りの時期、干潟等に渡来する。長い嘴を砂泥地に深く差し込み、ゴカイ類やカニ類を食べる。九州、琉球諸島では越冬する個体も記録されている。

【生息環境】

春秋の渡りの時期に海岸や河口の広い泥浜干潟等で記録があるほか、水田に入ることもある。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，湿地・湿原，河口域，砂浜・礫浜，汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟 【海域（沿岸）_潮間帯】干潟
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

日本では主に春秋の渡りの時期に渡来する。全国で記録があり、九州や琉球諸島では越冬する個体も記録されている。繁殖地は東シベリア中部からモンゴル、ウスリー地方、満州、カムチャツカにかけてで、冬は主にオーストラリアで越冬するが、台湾、インドネシア、ニューギニア、ニュージーランドでも越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

全国で記録があるが、日本は主に春秋の渡りの時期に通過して行くのみであるため、分布域の変遷は不明である。九州や琉球諸島では越冬する個体も記録されている。

【生息地の現況】

沿岸部の干潟や海岸などを利用しながら渡っていると考えられるが、全国的にシギ・チドリ類が利用できる干潟や水田は減少傾向にある。

【個体数の現況】

現在、IUCN のレッドリストでは、絶滅危惧種（ENDANGERED）とされている。オーストラリアでは、過去 30 年間で 80%程度減少したという報告があるため、絶滅寸前種（Critically Endangered）にリストアップされている。

2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、ホウロクシギの春期の推定変化率は、－52.00%（30 年前比：有意）、－5.03%（20 年前比）、－34.78%（10 年前

比)、秋期の推定変化率は、－20.78％（30 年前比)、－29.86％（20 年前比)、3.96％（10 年前比）（Amano et al. 2010）であり、春期・秋期とも減少を示していた。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 1.06（春期 1.23、秋期 0.88)、2017 年時点で、平均 0.71（春期 1.06、秋期 0.36)。直近の 10 年（2007～2017 年）では、春期・秋期とも減少傾向が見られた。

存続を脅かす要因

日本は少数が九州、琉球諸島で越冬するものの、主に春秋の渡りの時期に通過するのみである。春秋の渡りの時期に日本を利用して移動しているため、移動中の休息場、採餌場は種の存続にとって重要な役割を担っているが、近年シギ・チドリ類が渡りの時期に採食に利用できる干潟や水田は減少傾向にあり、渡り途中のエネルギー補給に影響が出ていると思われる。

要因の区分：	（過去）	河川開発，海岸開発，湿地開発，圃場整備，農薬汚染/化学物質汚染
	（現在）	河川開発，海岸開発，湿地開発，圃場整備

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ホウロクシギ	*Numenius madagascariensis*	VU
第４次 2019：	ホウロクシギ	*Numenius madagascariensis*	VU
第４次 2018：	ホウロクシギ	*Numenius madagascariensis*	VU
第４次 2017：	ホウロクシギ	*Numenius madagascariensis*	VU
第４次 2015：	ホウロクシギ	*Numenius madagascariensis*	VU
第４次：	ホウロクシギ	*Numenius madagascariensis*	VU
第３次：	ホウロクシギ	*Numenius madagascariensis*	VU
第２次：	ホウロクシギ	*Numenius madagascariensis*	VU
第１次：	ホウロクシギ	*Numenius madagascariensis*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu),【青森県】重要希少野生生物(B ランク),【宮城県】準絶滅危惧(NT),【秋田県】準絶滅危惧(NT),【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】情報不足(DD),【石川県】準絶滅危惧(NT),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(通過),【三重県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【滋賀県】希少種,【京都府】絶滅危惧種,【大阪府】準絶滅危惧(NT),【兵庫県】B ランク,【島根県】情報不足(DD),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛媛県】準絶滅危惧(NT),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種,【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【熊本県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-r),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類,【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: An example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservation, 143: 2238-2247.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田市.
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本野鳥生態図鑑〈水鳥編〉．保育社，大阪.
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- 植田睦之，2004．生態図鑑 ホウロクシギ．バードリサーチニュース，1(3).
- Van Gils, J., P. Wiersma, and G. M. Kirwan, 2020. Far Eastern Curlew (*Numenius madagascariensis*), version 1. 0. In Birds of the World (J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie, and E. de Juana, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp.wetlands.org on Mon Feb 2020 23.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Numenius madagascariensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th

edition. *Numenius madagascariensis* is listed as VU under criteria A2. A. Reduction in population size based on any of the following: 2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Farmland, Wetland, Estuary, Sandy beach/Pebble beach, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland) 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Intertidal mudflat
Threat types:	River development, Coastal development, Wetland development, Field preparation
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae

オオソリハシシギ

***Limosa lapponica baueri* Naumann, 1836**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2				
基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告(2020)では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 0.72（春期 0.59、秋期 0.85)。

【近年の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告(2020)では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2017 年時点で、平均 0.55（春期 0.33、秋期 0.77)。継続して春期・秋期とも減少傾向が見られている。特に春期の減少が著しい。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

長い脚と上に反った長い嘴の中型のシギ類。繁殖羽では、腹部は赤褐色、背面は黒褐色に白や赤褐色の斑がある。尾羽には黒い縞模様がある。非繁殖羽では、腹部は白色、背面が灰褐色になる。国内では、2 亜種が記録されている。極北部沿岸で繁殖し、国内では主に渡り鳥、沿岸部の干潟などの湿地に全国的に渡来する。干潟の減少などにより利用可能な生息地が減少している。また、中継地の環境悪化も懸念されている。個体数は近年春期に大幅に減少している。

基礎情報

【形態】

全長約 40 cm。長い脚と、上に反った長い嘴が特徴的な中型のシギ類。オスの繁殖羽では、頭部から腹部にかけて赤褐色。背は、黒褐色に白色、赤褐色の斑がある。尾羽は黒い縞模様がある。嘴は先端が黒く、基部はピンク色。脚は黒色。メスはオスに比べて赤色味が少なく、嘴はオスに比べて長い。非繁殖羽では、背面が灰褐色に白斑があり、腹部は白色。「ケッ ケッ ケッ」と鳴く。国内では、亜種オオソリハシシギ（*Limosa lapponica baueri*）のほか、きわめて少数が観察される亜種コシジロオオソリハシシギ（*Limosa lapponica menzbieri*）の 2 亜種が記録されている。コシジロオオソリハシシギは、翼下面、腰部がより白色。オグロシギ（*Limosa limosa*）は、嘴が真っ直ぐで、尾羽が黒い。

【生活史】

国内では繁殖せず、渡り鳥として春期、秋期に全国で観察される。渡りのルートの違いから春期の個体数は秋期に比べて多数観察される。繁殖地では、一夫一妻で繁殖を行う。オスはフライトディスプレイを行う。5 月下旬～7 月に産卵する。巣は低地のツンドラ地帯の乾燥した高い場所にあり、くぼみに植物の葉や地衣類を利用して作られる。一腹卵数は 2～5 個で、通常 4 個産卵する。雌雄が抱卵・育雛を同程度行う。嘴でつついたり、水中を探ったりするなどして貝類、環形動物、甲殻類、昆虫類、魚類、種子などを餌として利用する。非繁殖期には群れをつくリ採食する。嘴の長いメスのほうが水深が深いところで採食する傾向がある。

【生息環境】

主に干潟や砂浜などの海岸や河川などの湿地に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】河口域，砂浜・礫浜，汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】干潟
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

国外では、スカンジナビア、ロシア、アラスカの極北部沿岸で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカ西岸、中央、東南アジア、オセアニア沿岸で越冬する。日本は主に渡り時期の中継地として利用され、北海道から南西諸島まで全国的に渡来する。亜種オオソリハシシギ（*Limosa lapponica baueri*）は春期にニュージランド・オーストラリア南東部から、黄海付近を通過しアラスカで繁殖するが、秋期の渡りは春期と異なり主に太平洋を縦断するように南下する。そのため、日本では春期の個体数が多い。なお、亜種コシジロオオソリハシシギ（*Limosa lapponica menzbieri*）は、春期にオーストラリア北西部から黄海付近を通過しシベリア地域で繁殖し秋期に同ルートを通過し南下する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現況でも全国的に確認されるが、湿地、陸水域、海岸などの水辺に限られるため、水辺環境の消失は国内分布に影響を与えている可能性がある。

【生息地の現況】

干潟や湿原の減少により利用可能な生息地が減少している。1945 年以後の消失干潟の累計は 33,120 ha、1945 年から 2005 年の間の 60 年間の干潟の消滅率は 40%になる（花輪 2006）。

【個体数の現況】

現在、IUCN のレッドリストでは、オオソリハシシギ（*Limosa lapponica*）は準絶滅危惧とされているが、亜種オオソリハシシギ（*Limosa lapponica baueri*）と亜種コシジロオオソリハシシギ（*Limosa lapponica menzbieri*）は、絶滅危惧種の基準に適合するほど急速に減少している。

2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、オオソリハシシギの春期の推定変化率は、-39.63%（30 年前比）、-52.67%（20 年前比：有意）、-51.29%（10 年前比：有意）、秋期の推定変化率は、-78.49%（30 年前比：有意）、-62.38%（20 年前比：有意）、-63.54%（10 年前比：有意）（Amano et al. 2010）であり、春期・秋期とも著しい減少を示していた。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出し、2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 0.72（春期 0.59、秋期 0.85）、2017 年時点で、平均 0.55（春期 0.33、秋期 0.77）となり、継続して、春期・秋期とも減少傾向が見られた。特に春期の減少が著しい。

過去に大きく減少しており、個体数が回復しないまま、減少傾向が継続している。

存続を脅かす要因

干潟・湿地などの埋立や開発による生息環境の減少。長距離の渡りを行う種に関しては、国内のみに減少の要因を求めることが困難な場合もあり、繁殖地、中継地、越冬地それぞれに脅威がある。一例として、沿岸部の開発が著しい黄海を中継地として利用する種の減少傾向が指摘されている（Amano et al. 2010）。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，湿地開発
	（現在）	海岸開発，湿地開発

特記事項

日本に渡来するガンカモ類やシギ・チドリ類などの渡り性水鳥類が利用する主要な渡来地については、河川湖沼 84 ヶ所のうち 41.7%が保護区域未指定、干潟・湿地 152 ヶ所のうち 66.7%が保護区域未指定であり、干潟・湿地を利用する鳥が多数訪れる場所について

は保護指定が遅れている現状が指摘されている（三上ら 2012）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオソリハシシギ	*Limosa lapponica baueri*	VU
第４次 2019：	オオソリハシシギ	*Limosa lapponica baueri*	VU
第４次 2018：	オオソリハシシギ	*Limosa lapponica baueri*	VU
第４次 2017：	オオソリハシシギ	*Limosa lapponica baueri*	VU
第４次 2015：	オオソリハシシギ	*Limosa lapponica*	VU
第４次：	オオソリハシシギ	*Limosa lapponica*	VU
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd)，【宮城県】準絶滅危惧(NT)，【山形県】準絶滅危惧(NT)，【福島県】情報不足(DD)，【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類，【千葉県】要保護生物(C)，【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(非繁殖期)，【新潟県】準絶滅危惧(NT)，【富山県】情報不足(DD)，【福井県】県域準絶滅危惧，【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(通過)，【滋賀県】希少種，【京都府】絶滅危惧種，【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【兵庫県】B ランク，【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類，【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【長崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【宮崎県】準絶滅危惧(NT-r)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: An example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservation, 143: 2238-2247.
- BirdLife International. 2017. *Limosa lapponica* (amended version of 2016 assessment). *The IUCN Red List of Threatened Species* 2017: e.T22693158A111221714. https://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK.2017-1.RLTS.T22693158A111221714.en. Accessed on 15 October 2025.

- 天野一葉，2006．干潟を利用する渡り鳥の現状．地球環境，11 (2): 215-226.
- Battley, P. F., N. Warnock, T. L. Tibbitts, R. E. Gill, T. Piersma, C. J. Hassell, D. C. Douglas, D. M. Mulcahy, B. D. Gartrell, R. Schuckard, D. S. Melville and A. C. Riegen, 2012. Contrasting extreme long-distance migration patterns in bar-tailed godwits *Limosa lapponica*. Journal of Avian Biology, 43: 21-32.
- 花輪伸一，2006．日本の干潟の現状と未来．地球環境，11 (2): 235-244.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田市.
- McCaffery, B. J. and R. E. Gill, 2020. Bar-tailed Godwit (*Limosa lapponica*), version 1. 0. In Birds of the World (S. M. Billerman, Editor). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- 三上かつら・高木憲太郎・神山和夫・守屋年史・植田睦之，2012．渡り性水鳥類の渡来地の保護区域指定の現状．日本鳥学会誌，61: 112-123.
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- Studds, C. E. *et al*., Rapid population decline in migratory shorebirds relying on Yellow Sea tidal mudflats as stopover sites. *Nat*. *Commun.* 8, 14895 doi: 10.1038/ncomms14895 (2017)
- Wetlands International, 2023.“Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp.wetlands.org on Mon Feb 2020 23.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Limosa lapponica baueri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Limosa lapponica baueri* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Estuary, Sandy beach/Pebble beach, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Intertidal mudflat
Threat types:	Coastal development, Wetland development
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae

ハマシギ

***Calidris alpina* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告(2020)では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 1.18（春期 1.08、秋期 1.32、冬期 1.15)。

【近年の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告(2020)では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2017 年時点で、平均 0.60（春期 0.39、秋期 0.83、冬期 0.57)。継続して春期・秋期とも減少傾向が見られている。特に春期の減少が著しい。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

長く下にやや曲がった嘴をもつ小型のシギ類。繁殖羽では、頭頂、背部は赤褐色地の黒色の斑、胸は白色地に黒褐色の縦斑をもち、腹部に大きな黒斑をもつ。足は黒。非繁殖羽は頭頂部から背面が灰褐色、眉斑喉から腹部にかけて白色。国内で繁殖せず、主に旅鳥、冬鳥として飛来する。越冬期は最も個体数が多く観察される。沿岸の干潟、砂浜、潟湖や内陸の水田、河川などを採食地として利用する。個体数は減少傾向にある。サハリンで繁殖する亜種は個体数が少ない。

基礎情報

【形態】

全長約 20 cm。長く下にやや曲がった嘴をもつ小型のシギ類。オスの繁殖羽では、頭頂、背部は赤褐色地の黒色の斑、胸は白色地に黒褐色の縦斑があり、腹部に大きな黒色斑がある。足は黒い。非繁殖羽は頭頂部から背面が灰褐色、眉斑喉から腹部にかけて白色。飛翔時、白色の翼帯がみえ雌雄同色。幼鳥は、全体に褐色味があり、腹部は白色時に黒褐色の縦斑。ミユビシギの嘴はより短く、非繁殖羽は全体により白い。サルハマシギは、くちばしがより長くさらに湾曲する。世界では、9～10 亜種に分類されている。

【生活史】

国内では繁殖せず、渡り鳥、冬鳥として春期、秋期、冬期に全国で観察される。繁殖期は、5 月～7 月、一夫一妻で繁殖するが、同時的一夫二妻、継時的一妻多夫などの記録がある。草原ツンドラや泥炭草原ツンドラなどの湿性の草原に住み、小丘状の乾いた部分で営巣する。巣は、草や灌木の根元に浅い窪みをつくり、枯草や蘚苔を敷く。一腹卵数は 3～4 個で、通常 4 個産卵する。雌雄交代で抱卵し、雌雄で育雛を行う。水生昆虫の幼虫、ミミズ、ゴカイ、ヨコエビなどの甲殻類を食べる。非繁殖期には群れで生活する。

【生息環境】

渡り期や越冬期は、海岸の砂浜、干潟、水溜まり、潟湖、溜池、水を張った水田、内陸の湖沼や大きい河川の砂泥地に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，湿地・湿原，砂地・礫地，河川中流域，河川下流域，河口域，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，砂浜・礫浜，汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯】干潟，砂底・礫底，泥底
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

国外では、ユーラシア、北アメリカの極北沿岸で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカ北部、中東、中国の沿岸、北アメリカ東・西沿岸で越冬する。国内では、春・秋の渡り期に干潟を中心とした各地の湿地で観察され、越冬期には、本州以南の各地に優占する。

なお国内では、シベリア東部で繁殖する亜種ハマシギ（*Calidris alpina sakhalina*）、主に越冬していると考えられるアラスカで繁殖する亜種キタアラスカハマシギ（*Calidris alpina arcticola*）が確認されているが、亜種の分布については再検討の必要がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現況でも全国的に確認されるが、湿地、陸水域、海岸などの水辺に限られるため、生息環境の消失は国内分布に影響を与えている可能性がある。

【生息地の現況】

干潟や湿原の減少により利用可能な生息地が減少している。1945 年以後の消失干潟の累計は 33,120 ha、1945 年から 2005 年の間の 60 年間の干潟の消滅率は 40%になる（花輪 2006）。

【個体数の現況】

IUCN のレッドリストでは、低危険種（Least Concern）とされている。WaterbirdsPopulations Portal（Wetland International）では、東アジアのフライウェイで国内に渡来する可能性のある亜種は 4 亜種。

亜種 *Calidris alpina kistchinskii* は、約 10 万～100 万羽、傾向は不明、旅鳥。

亜種 *Calidris alpina arcticola* は、約 30.4 万～69.6 万羽、減少傾向、国内で主に越冬する亜種とされる。

亜種 *Calidris alpina sakhalina* は、約 10 万～100 万羽、傾向は不明、旅鳥。

亜種 *Calidris alpina actites* は、約 900 羽、旅鳥で傾向は不明だが、絶滅が危惧されている。

2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、ハマシギの春期の推定変化率は、-54.74%（30 年前比:有意）、-23.83%（20 年前比）、-6.75%（10 年前比）、秋期の推定変化率は、-81.79%（30 年前比：有意）、-47.90%（20 年前比：有意）、32.49%（10 年前比）（Amano et al. 2010）であり、春期・秋期とも著しい減少を示していた。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 1.18（春期 1.08、秋期 1.32、冬期 1.15）、2017 年時点で、平均 0.60（春期 0.39、秋期 0.83、冬期 0.57）。継続して春期・秋期とも減少傾向が見られている。

存続を脅かす要因

干潟・湿地の開発による採餌場所、餌動物の減少。農耕地の乾田化、放棄水田の草地化、農法や農業環境の変化による生息地の減少。越冬地での狩猟・捕獲による個体数減少も懸念されている。長距離の渡りを行う種に関しては、国内のみに減少の要因を求めることが困難な場合もあり、繁殖地、中継地、越冬地それぞれに脅威がある。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，湿地開発，圃場整備
	（現在）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，湿地開発，圃場整備

特記事項

日本に渡来するガンカモ類やシギ・チドリ類などの渡り性水鳥類が利用する主要な渡来地については、河川湖沼 84 ヶ所のうち 41.7%が保護区域未指定、干潟・湿地 152 ヶ所の

うち 66.7%が保護区域未指定であり、干潟・湿地を利用する鳥が多数訪れる場所については保護指定が遅れている現状が指摘されている（三上ら 2012）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ハマシギ	*Calidris alpina*	NT
第４次 2019:	ハマシギ	*Calidris alpina*	NT
第４次 2018:	ハマシギ	*Calidris alpina*	NT
第４次 2017:	ハマシギ	*Calidris alpina*	NT
第４次 2015:	ハマシギ	*Calidris alpina*	NT
第４次:	ハマシギ	*Calidris alpina*	NT
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt),【宮城県】準絶滅危惧(NT),【山形県】準絶滅危惧(NT),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】準絶滅危惧,【栃木県】準絶滅危惧(C ランク),【群馬県】情報不足(DD),【千葉県】重要保護生物(B),【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（区部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【福井県】要注目,【長野県】準絶滅危惧(NT),【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越冬),【三重県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【京都府】絶滅危惧種,【兵庫県】C ランク,【奈良県】希少種,【島根県】準絶滅危惧(NT),【岡山県】準絶滅危惧,【広島県】準絶滅危惧(NT),【高知県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【熊本県】準絶滅危惧(NT),【大分県】準絶滅危惧(NT),【宮崎県】準絶滅危惧(NT-g),【鹿児島県】準絶滅危惧,【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., Székely, T., Koyama, K., Amano, H. and Sutherland, W. J. 2010. A framework for monitoring the status of populations: an example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservatioin, 143: 2238-2247.

- 花輪伸一，2006．日本の干潟の現状と未来．地球環境，11 (2): 235-244．
- IUCN 2023. The IUCN Red List of Threatened Species. Version 2022-2. <https://www.iucnredlist.org>
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田市．
- Lagassé, B. J., R. B. Lanctot, S. Brown, A. G. Dondua, S. Kendall, C. J Latty, et al., 2022. Migratory network reveals unique spatial-temporal migration dynamics of Dunlin subspecies along the East Asian-Australasian Flyway. PLoS ONE 17(8): e0270957. https://doi.org/10.1371/journal.pone.0270957
- 三上かつら・高木憲太郎・神山和夫・守屋年史・植田睦之，2012．渡り性水鳥類の渡来地の保護区域指定の現状．日本鳥学会誌，61(1): 112-123．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- Warnock, N. D. and R. E. Gill, 2020. Dunlin (*Calidris alpina*), version 1. 0. In Birds of the World (S. M. Billerman, Editor). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA. https://doi.org/10.2173/bow.dunlin.01
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp. wetlands. org on Thu Sep 282023.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Calidris alpina has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Calidris alpina* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Farmland, Wetland, Sandy area/Gravelly area, Middle river basin, Lower river basin, Estuary, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Sandy beach/Pebble beach, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Intertidal mudflat, Sandy bottom/Gravelly bottom, Muddy bottom
Threat types:	Lake development, River development, Coastal development, Wetland development, Field preparation
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae

タカブシギ

***Tringa glareola* Linnaeus, 1758**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告(2020)では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 0.85（春期 0.83、秋期 0.87)。

【近年の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告(2020)では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2017 年時点で、平均 0.53（春期 0.64、秋期 0.41)。継続して春期・秋期とも減少傾向が見られている。特に春期の減少が著しい。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

長い嘴と、長い脚をもつ小型のシギ類。上面は黒褐色に白斑・黒斑があり、腹部は白色。繁殖羽は胸部に白色地に黒褐色の縦斑がある。非繁殖羽は淡色味がかかる。ユーラシア大陸北部高緯度地域で繁殖し、国内では繁殖しない、全国的に渡り鳥として確認され、関東以南の一部地域で越冬する。水田、ハス田など、主に陸水域を多く利用する。春期・秋期とも減少傾向が見られている。特に春期の減少が著しい。陸水域の減少などにより利用可能な生息地が減少している。

基礎情報

【形態】

全長約 20 cm。長い嘴と、長い脚をもつ小型のシギ類。繁殖羽では、嘴は黒く基部は薄緑色。眉斑は白色。頭部から背にかけて黒褐色に白斑・黒斑が見える。喉から胸にかけて白色地に黒褐色の縦斑があり、腹部は白色。脚はくすんだ黄色。非繁殖羽は上面が淡い黒褐色に白斑がある。下面は白く、胸部は濁白色。幼鳥は上面の羽縁に黄色味がある。飛翔時翼下は白っぽく見える。雌雄同色。「ピッピッピッ」と鳴く。クサシギ（*Tringa ochropus*）は、背面は白斑が小さくより暗色、眉斑は目の後ろに伸びない。飛翔時に翼下は黒褐色にみえる。

【生活史】

国内では繁殖せず、旅鳥として春期、秋期に全国の湿地などで観察される。また関東以南では一部冬鳥として越冬する。一夫一妻で繁殖を行う。5 月～7 月中旬に疎林内のコケ湿原の窪みに作られた巣に、通常 4 個産卵する。他種の樹上の古巣も利用することもある。雛は早成性で、孵化後すぐに巣を離れる。メスは一週間ほどで雛から去り、雛はひと月ほどで独立する。湿地を歩きながらついばんだり、つついたりしながら探餌を行う。軟体動物、クモ類、昆虫類、魚類、カエル、種子などを餌として利用する。繁殖期には縄張りを持つが、非繁殖期は集団で過ごす。

【生息環境】

湿地、湖、池沼、河川、水田、ハス田など、主に陸水域を多く利用する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，田地・畑地，湿地・湿原，砂地・礫地，河川中流域，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

国外では、ユーラシア大陸北部高緯度地域で繁殖し、アフリカ南部、インド、東南アジア、オセアニアで越冬する。国内では、北海道から南西諸島まで渡り鳥として確認され、関東以南の一部地域で越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現況でも全国的に確認されるが、湿地、陸水域、海岸などの水辺に限られるため、生息環境の消失は国内分布に影響を与えている可能性がある。

【生息地の現況】

湿地、ハス田、水田などの減少、乾田化、放棄水田の草地化による渡り期、越冬期の生息地の環境変化などにより生息地が減少している。

【個体数の現況】

IUCN のレッドリストでは、低危険種（Least Concern）とされている。WaterbirdsPopulations

Portal（Wetland International）では、東アジアのフライウェイでは全体で約 13 万羽、減少傾向と推定されている。

モニタリング調査の結果を用いた研究では、春期の推定変化率は、−89.62%（30 年前比：有意）、−71.52%（20 年前比：有意）、−40.09%（10 年前比）、秋期の推定変化率は、−84.01%（30 年前比：有意）、−33.86%（20 年前比）、−27.50%（10 年前比）（Amano. et al. 2010）と個体数は大幅に減少している。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 0.85（春期 0.83、秋期 0.87）、2017 年時点で、平均 0.53（春期 0.64、秋期 0.41）。継続して春期・秋期とも減少傾向が見られている。特に春期の減少が著しい。

存続を脅かす要因

干潟・湿地の埋立てによる採餌場所、餌動物の減少。農耕地の乾田化、放棄水田の草地化、防鳥ネットによる事故死など農法や農業環境の変化による生息地の減少。越冬地での狩猟・捕獲による個体数減少も懸念されている。長距離の渡りを行う種に関しては、国内のみに減少の要因を求めることが困難な場合もあり、繁殖地、中継地、越冬地それぞれに脅威がある。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，湿地開発，圃場整備，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	海岸開発，湿地開発，圃場整備，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

日本に渡来するガンカモ類やシギ・チドリ類などの渡り性水鳥類が利用する主要な渡来地については、河川湖沼 84 ヶ所のうち 41.7%が保護区域未指定、干潟・湿地 152 ヶ所のうち 66.7%が保護区域未指定であり、干潟・湿地を利用する鳥が多数訪れる場所については保護指定が遅れている現状が指摘されている（三上ら 2012）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	タカブシギ	*Tringa glareola*	VU
第４次 2019：	タカブシギ	*Tringa glareola*	VU
第４次 2018：	タカブシギ	*Tringa glareola*	VU
第４次 2017：	タカブシギ	*Tringa glareola*	VU
第４次 2015：	タカブシギ	*Tringa glareola*	VU

第４次:	タカブシギ	*Tringa glareola*	VU
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu),【山形県】準絶滅危惧(NT),【福島県】情報不足(DD),【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク),【千葉県】重要保護生物(B),【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（北多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（南多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（西多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【神奈川県】準絶滅危惧(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】情報不足(DD),【石川県】準絶滅危惧(NT),【福井県】要注目,【長野県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(通過),【三重県】準絶滅危惧(NT),【滋賀県】希少種,【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【兵庫県】B ランク,【奈良県】希少種,【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【高知県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【宮崎県】準絶滅危惧(NT-r),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類,【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: An example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservation, 143 (9): 2238-2247.
- 花輪伸一，2006．日本の干潟の現状と未来．地球環境，11 (2): 235-244.
- IUCN 2023. The IUCN Red List of Threatened Species. Version 2022-2. <https://www.iucnredlist.org>
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田市.
- 三上かつら・高木憲太郎・神山和夫・守屋年史・植田睦之，2012．渡り性水鳥類の渡来地の保護区域指定の現状．日本鳥学会誌，61(1): 112-123.
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本野鳥生態図鑑〈水鳥編〉．保育社，大阪.
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.

- Van Gils, J., P. Wiersma, and G. M. Kirwan, 2020. Wood Sandpiper (*Tringa glareola*), version 1. 0. In Birds of the World (J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie, and E. de Juana, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA. https://doi.org/10.2173/bow.woosan.01
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp. wetlands. org on Thu Sep 282023.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tringa glareola has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tringa glareola* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Wetland, Sandy area/Gravelly area, Middle river basin, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Coastal development, Wetland development, Field preparation, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　ツバメチドリ科 Glareolidae

ツバメチドリ

***Glareola maldivarum* Forster, 1795**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2				
基準 A:　VU	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告(2020)では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 1.49（春期 2.34、秋期 0.63)。

【近年の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ･チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告(2020)では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2017 年時点で、平均 0.90（春期 0.79、秋期 1.01)。継続して春期・秋期とも減少傾向が見られている。特に春期の減少が著しい。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

日本では、四国や九州以南など主に西日本で繁殖するが、本州関東以南でも一部繁殖の記録がある。春秋の渡りの時期には全国で記録がある。被植率の低い裸地的な環境を好み、空中を素早く飛翔しながら昆虫を食べる。春期・秋期とも減少傾向が見られている。特に春期の減少が著しい。繁殖できる環境の減少や、渡りの際にも利用される荒れ地状の草原や耕作地も全国的に減少傾向にあり、渡り途中のエネルギー補給にも影響が出ていると思われる。

基礎情報

【形態】

全長 23～24 cm。夏羽は全体がベージュ色で、腰及び腹部は白色。嘴は黒色で基部が赤く、眼から喉にかけて、喉を囲うような黒い線がある。喉はクリーム色のように黄色がかる。尾羽や初列風切羽は黒色であるが、翼下面の下雨覆羽は朱色。本種は翼が長く、尾羽は燕尾で、飛び方も燕のような速い飛び方をするため、他のシギ・チドリ類とは区別できる。冬羽は全身、黄色みは無くなり、嘴の赤色や顔の模様も無くなる。

【生活史】

被植率の低い裸地的な環境を好み、空中を素早く飛翔しながら昆虫を食べるが、他のチドリ類のように地上を走っての採餌も行う。巣は被植率の低い裸地的な環境において、地上に産卵する。抱卵期間は 17～18 日。雛は早成性の離巣性で、孵化後早い段階で巣を離れる。

【生息環境】

荒れ地状の草原、乾燥した畑、埋立地などの人工裸地、砂質や砂礫質の河川敷等、裸地的な環境を好む。営巣環境も同様で、被植率の低い環境で営巣する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】裸地，草地，田地・畑地，湿地・湿原，商業・工業施設，砂浜・礫浜 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】干潟
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

シベリア南部、モンゴル北東部、中国東北地方南部、インド、スリランカ、タイ、アジア南東部、パキスタン、フィリピン、ボルネオで繁殖し、インドからアジア南東部、インドネシア、そしてニューギニアからオーストラリアで越冬する。国内では、春秋の渡りの時期に全国で記録がある。四国や九州以南など西日本で繁殖する。沖縄では、少数が、農耕地や海岸近くの草がまばらな裸地などで小コロニーを作って繁殖する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本では、春秋の渡りの時期には全国で記録がある。

全国鳥類繁殖分布調査（2021）では、局地的に繁殖し、1970 年代および 1990 年代では本州での繁殖記録があったが、2010 年代では観察記録のみで、繁殖記録は南西諸島の記録のみとなっている。

【生息地の現況】

本種は被植率の低い環境で営巣するが、このような環境は自然環境では減少傾向にあり、造成地などの人工的な環境は開発が進むため安定しない。渡りの際に利用される荒れ地状の草原や耕作地も全国的に減少傾向にある。

【個体数の現況】

IUCN のレッドリストでは、準絶滅危惧種（Near Threatened）とされている。WaterbirdsPopulations Portal（Wetland International）では、東アジアのフライウェイで、個体数約 2880 万、エビデンスは弱いが安定傾向とされている。

2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、ツバメチドリの春期の推定変化率は、19.94%（30 年前比）、-15.19%（20 年前比）、-31.10%（10 年前比）、秋期の推定変化率は、-66.76%（30 年前比）、-69.15%（20 年前比）、-71.99%（10 年前比）（Amano et al. 2010）であり、秋期に著しい減少を示していた。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 1.49（春期 2.34、秋期 0.63）、2017 年時点で、平均 0.90（春期 0.79、秋期 1.01）。継続して春期・秋期とも減少傾向が見られている。特に春期の減少が著しい。

存続を脅かす要因

本種は河川敷や埋立地など、被植率の低い環境で営巣するが、ダム建設によって河川が氾濫しにくくなったため被植率の低い河川敷は減少している。また、河川敷はレジャー等による人の影響もある。そして埋立地などの人工的な環境は開発が進むため安定しない。渡りの際にも利用される荒れ地状の草原や耕作地も全国的に減少傾向にある。

要因の区分：	（過去）	河川開発，海岸開発，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，人の踏みつけ
	（現在）	河川開発，海岸開発，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，人の踏みつけ

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ツバメチドリ	*Glareola maldivarum*	VU
第４次 2019：	ツバメチドリ	*Glareola maldivarum*	VU
第４次 2018：	ツバメチドリ	*Glareola maldivarum*	VU
第４次 2017：	ツバメチドリ	*Glareola maldivarum*	VU
第４次 2015：	ツバメチドリ	*Glareola maldivarum*	VU
第４次：	ツバメチドリ	*Glareola maldivarum*	VU

第３次:	ツバメチドリ	*Glareola maldivarum*	VU
第２次:	ツバメチドリ	*Glareola maldivarum*	VU
第１次:	ツバメチドリ	*Glareola maldivarum*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd),【青森県】重要希少野生生物(B ランク),【山形県】評価対象外,【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【群馬県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【埼玉県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁),【千葉県】消息不明・絶滅生物(X),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【福井県】要注目,【愛知県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁殖),絶滅危惧ⅠB 類(EN)(通過),【滋賀県】希少種,【京都府】絶滅危惧種,【大阪府】絶滅危惧Ⅰ類(CR＋EN),【兵庫県】B ランク,【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種,【長崎県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-r),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類,【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: an example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservatioin, 143: 2238-2247.
- IUCN 2023. The IUCN Red List of Threatened Species. Version 2022-2. <https://www.iucnredlist.org>
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田市．
- Maclean, G. L. and G. M. Kirwan, 2020. Oriental Pratincole (*Glareola maldivarum*), version 1. 0. In Birds of the World (J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie and E. de Juana, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA. https://doi.org/10.2173/bow.oripra.01
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本野鳥生態図鑑〈水鳥編〉．保育社，大阪．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- 沖縄野鳥研究会，2010．改訂版 沖縄の野鳥．新星出版．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．鳥類繁殖分布調査会，東京．176pp．

- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp. wetlands. org on Thu Sep 282023.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Glareola maldivarum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Glareola maldivarum* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Bare area, Grassland, Farmland, Wetland, Commercial area/Industrial area, Sandy beach/Pebble beach 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Intertidal mudflat
Threat types:	River development, Coastal development, Wetland development, Field preparation, Grassland development, Land development, Human trampling
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　カモメ科 Laridae

ズグロカモメ

***Saundersilarus saundersi* (Swinhoe, 1871)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
越冬地である干潟の開発等により、越冬地の面積や質の減少が推定される。さらに、国外の繁殖状況の悪化により個体数の減少が見込まれる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

西日本の沿岸部を中心に越冬する。しかし世界的にも局地的な分布であり、個体数も限られている。繁殖地、越冬地ともに生息環境の悪化および減少が深刻である。

基礎情報

【形態】

全長約 30 cm。翼開長 88 cm。雌雄同色で、上面が淡青灰色、下面は白色。成鳥夏羽では頭部が黒色。目の周りが白い。脚は濃赤色。嘴は太短くて黒色。冬羽では頭部が白く、目の後方に黒色斑がある。ユリカモメ（*Chroicocephalus ridibundus*）は体がやや大きく、嘴が赤く細長い。

【生活史】

5 月中旬に通常 3 卵を産む。雌雄交代で約 22 日間抱卵し、雛は孵化後すぐに巣を離れる。飛翔まで約 1 ヶ月かかる。繁殖地の中国遼寧省で標識放鳥したものが、日本の九州各地、四国、本州西部および韓国南西部で発見されたことにより、これら繁殖個体群と越冬個体群との関係が明確になった。

【生息環境】

干潟に生息し、干出した泥干潟や浅瀬で主に甲殻類や多毛類を採餌する。干潟上部の塩生植物群落や干拓地などで繁殖。

生息環境区分：	【海域（沿岸）_潮間帯 表層】海面，干潟
国土地域区分：	（5）沿岸域，（6）海洋域

【分布域】

中国の渤海と黄海沿岸部で繁殖し、朝鮮半島南西部、日本、中国南東部（台湾、香港を含む）、ベトナムで越冬する。日本では九州・四国・南西諸島に主に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本では九州を中心に冬鳥として生息するが、近年は四国や本州の関東地方以南、南西諸島でも少数が越冬する。その他の地域では数羽が迷行することがある。

【生息地の現況】

日本での生息地は、多くの地域で埋め立てなどによる環境の変化が進んでいて、減少傾向にある。とくに過去最大の越冬地であった諫早湾では 200～300 羽が越冬していたが、潮受け堤防の完成によって干潟が消失し、現在はまったく生息していない。繁殖地でもさまざまな目的の干拓が進められ、そのために本来の繁殖地は減少している。ただし出来あがった干拓地が数年間好適な繁殖環境を提供し、一時的に繁殖数が増えることもある。

【個体数の現況】

世界全体の個体数は 14,400 羽で、近年やや増加の傾向がある。ただし、この個体数の増加はほぼ確実に調査努力量が増加したためと考えられる。国外の繁殖状況の悪化により個体数の減少が危惧されている。

モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査の 2023-2024 年の冬季調査で確認された本種の個体数は、6,007 羽であった。

存続を脅かす要因

生息地である干潟の減少と、それにともなう餌動物の減少が考えられる。繁殖地でも営巣地である高潮域の湿原や採餌地の干潟が、エビ養殖池の造成や埋め立てによって消失している。埋立地では一時期営巣が可能な環境が出現するが、こうしたところでは哺乳類による捕食、人為的営巣妨害、植生の遷移による営巣環境の消失が起こる。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，湿地開発，捕食（在来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	海岸開発，湿地開発，捕食（在来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

東アジアに局地的に分布する種で、学術的に貴重である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ズグロカモメ	*Larus saundersi*	VU
第４次 2019：	ズグロカモメ	*Larus saundersi*	VU
第４次 2018：	ズグロカモメ	*Larus saundersi*	VU
第４次 2017：	ズグロカモメ	*Larus saundersi*	VU
第４次 2015：	ズグロカモメ	*Larus saundersi*	VU
第４次：	ズグロカモメ	*Larus saundersi*	VU
第３次：	ズグロカモメ	*Larus saundersi*	VU
第２次：	ズグロカモメ	*Larus saundersi*	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【山形県】評価対象外，【千葉県】最重要保護生物(A)，【富山県】情報不足(DD)，【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越冬)，【三重県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【大阪府】準絶滅危惧(NT)，【兵庫県】Bランク，【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【島根県】情報不足(DD)，【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類，【広島県】準絶滅危惧(NT)，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【徳島県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種，【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【熊本県】準絶滅危惧(NT)，【大分県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Cao, L., M. A. Barter and X. Wang, 2008. Saunders's Gull: a new population estimate. Bird Conservation International, 18(4): 301-306.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2012．平成 24 年度環境省請負業務 モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査冬期速報．76pp.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2025．2024 年度モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2023 年度 総括報告書．111pp.
- 尾崎清明ほか，1997．ズグロカモメのカラーフラッグによる移動観察記録．日本鳥学会大会講演集，p. 62．
- 水産庁（編），1998．日本の希少な野生水生生物に関するデーターブック．日本水産資源保護協会，東京．437pp.
- 武下雅文・佐本一雄・林修，1993．福岡県曽根干潟におけるズグロカモメの越冬数の年変化と季節変化．Strix，12: 107-114．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Saundersilarus saundersi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Saundersilarus saundersi* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Sea surface, Intertidal mudflat
Threat types:	Coastal development, Wetland development, Predation (by native species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	尾崎清明（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Kiyoaki Ozaki

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　カモメ科 Laridae

ウミネコ

***Larus crassirostris* Vieillot, 1818**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

モニタリングサイト 1000 調査の対象となっている大規模な営巣地および研究機関等により長期的な営巣数モニタリングが行われている営巣地合計 8 箇所のデータを集計した。利用可能な最新のデータから遡って約 10 年前（世代時間不明）の繁殖個体数はおよそ 132,000 と推定された。

営巣地および各地の調査時期：利尻島（2006 年）、天売島（2011 年）、枝幸（2011 年）、知床半島（2010 年）、経島（2007 年）、飛島（2009 年）、ユルリ島（2004 年）、蕪島（2011 年）

【近年の状況】

上記の営巣地における利用可能な最新の繁殖個体数データを集計した。営巣地のすべてにおいて、1990 年代以降に繁殖個体数は急減しており、8 箇所の営巣地のうち 2 箇所は消滅した。残存する営巣地においても 10 年前からの繁殖個体数減少率は 16～53%であり、8 箇所すべての営巣地を平均すると 42%であった。

営巣地および各地の調査時期：利尻島（2016 年）、天売島（2020 年）、枝幸（2021 年）、知床半島（2020 年）、経島（2016 年）、飛島（2019 年）、ユルリ島（2013 年）、蕪島（2019 年）

評価分科会：　鳥類分科会

概要

かつては国内で普通に見られていた、本種の大規模な営巣地および長期的な営巣数モニタリングが行われているものほぼ全てにおいて、1990 年代以降に個体数の急減が生じており、2000 年代以降減少は加速している。これら主要な営巣地のいくつかは現在消滅し、10 年前からの繁殖個体数減少率は 50%に迫ると推定される。個体数減少原因とされる捕食者（ノネコ、ドブネズミ、キツネやオジロワシ）の増加、餌資源（浮魚類）の減少、人為的撹乱は現在除去されていないか、またはより深刻化しており、今後も継続的な個体数減少が予想される。

基礎情報

【形態】

全長 44～48 cm、翼開長は 120～128 cm、体重はオスが 462～640 g、メスが 436～615 g 程度の中型のカモメ類である。

【生活史】

雑食性。2～3 月に繁殖地に飛来し、4 月末から 5 月中旬に 1～3 卵を産み、25～30 日で孵化する。孵化してから 30～35 日以上で巣立つ。繁殖期にはオキアミ類、イカナゴやイワシ類、魚卵や頭足類などを自力で採餌するほか、漁港や漁船から投棄された魚類もよく食べる。陸上でセミやアブなどの昆虫類も食べる。繁殖を終えると南下する個体が多い。

【生息環境】

ほとんどの個体が海岸から沿岸海上に周年生息する。人やキツネ等の捕食者が近づけない孤島、崖地、離岸防波堤、建物の屋上などで主に集団繁殖する。枯れ草など巣材を集めた巣を作る。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】田地・畑地，湿地・湿原，河川下流域，河口域，砂浜・礫浜，海崖・岩浜・岩礁（磯），汽水域，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】海面，岩礁（磯） 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（3）都市地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域，（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

中国、韓国、ロシア、日本沿岸にのみ集団繁殖する分布域の狭い海鳥である。日本では北海道から九州の沿岸部の小島嶼、及び伊豆諸島、甑島列島、男女群島で繁殖する。冬期は全国各地でみられる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本種の集団繁殖地は国内に多数あり、繁殖規模は数十羽から数万羽である。佐藤（2022）に以下の記載がある。「モニ 1000 海鳥調査（2010～2017）では、最大数として天売島では 802 巣（2016 年）、知床半島では 0 巣（2015 年）、モユルリ島では 5,000 羽（2017 年）、松前小島では 2,310 羽（2016 年）、尻屋弁天島では 300 羽（2009 年）、蕪島では 15,550 巣（2016 年）、種差海岸では 837 巣（2007 年）、足島では 21,263 巣（2016 年）、飛島では 2,034 巣（2014 年）、祇苗島では 509 巣（2014 年）、沓島では 1,752 巣（2010 年）、経島では 242 巣（2014 年）とされている。モニ 1000 海鳥調査以外の繁殖地として、北海道焼尻島 2013 年では 67 巣、利尻島では 1990 年に 1,605 巣、目梨泊では 2008 年に 285 巣、青森県大間弁天島では 2012 年に 4,792 巣、岩手県椿島では 2 万～3 万羽、青松島、及び宮城県双子島では営巣数情報なし、秋田県男鹿市では 41 巣、新潟県粟島他営巣、石川県七ツ島では営巣

数不明、福井県南越前町で 1995 年に 200 羽、営巣は少数と推定、八丈小島では 2011 年に 200 羽、営巣数不明、和歌山県御坊市では 1,000 羽以上、島根県では県指定天然記念物沖蛇島のウミネコ繁殖地があるが、生息数に関する文献は確認されていない。山口県で少数が、大分県高島で数千羽、長崎県男女群島では 2010 年に 280 羽、鹿児島県甑島営巣数不明などが知られる。」そのほか、新潟県佐渡市では 2020 年に合計約 2,000 巣、村上市で 2018 年に 394 巣、粟島では 2019 年に 210 巣の繁殖が報告されている。

【生息地の現況】

主要な営巣地において生息地の環境に大きな変化はないものの、各地で在来・外来の捕食者が増加している。

【個体数の現況】

全国各地の大規模な営巣地において 1990 年代以降に個体数の急減が生じており、2000 年代以降減少は加速している。直近の 10 年ほどで北海道および本州の島嶼にある数百～数万巣の営巣地の大部分で営巣数は半減し、うち知床半島やユルリ島では数百巣の営巣地が消滅した。近年、北海道大黒島や新潟県において新たな営巣地が確認されているが、営巣数は最大でも 2,000 巣程度であり、大規模営巣地における減少数を補う規模ではない。

存続を脅かす要因

イエネコやドブネズミによる捕食と撹乱、カラスによる卵や雛の捕食、およびオジロワシによる捕食や撹乱が確認されている。オジロワシによる捕食の影響程度は不明であるが、本種の繁殖地にオジロワシが長時間滞在することで親鳥が営巣や繁殖を放棄した事例は確認されている。餌となりうるイカナゴ、ホッケ、イワシ類等の魚類、あるいは投棄魚の減少なども考えられる。地域によっては人間による巣や卵の採集や撤去がなされているほか、繁殖地への立ち入りによる営巣の妨害も生じている。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	捕食（外来種による），捕食（在来種による），その他（人間による巣や卵の撤去、営巣の妨害）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—

第４次 2015：	―	―	―
第４次：	―	―	―
第３次：	―	―	―
第２次：	―	―	―
第１次：	―	―	―

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt),【岩手県】留意,【山形県】絶滅のおそれのある地域個体群(LP)(飛島と周辺の島々の繁殖個体群),【東京都（本土部）】留意種,【東京都（区部）】留意種,【福井県】絶滅のおそれのある地域個体群,【京都府】要注目種,【和歌山県】学術的重要(SI),【山口県】準絶滅危惧(NT),【大分県】地域個体群(LP)(高島のウミネコ繁殖個体群),【鹿児島県】分布特性上重要

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境省自然環境局生物多様性センター，2015．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）海鳥調査 第 2 期とりまとめ 報告書．環境省，富士吉田.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2021．モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査 2004-2018 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2023．2022 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書．環境省，富士吉田.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，海鳥コロニーデータベース．http://www.sizenken.biodic.go.jp/seabirds/
- 大門純平・伊藤元裕・綿貫豊，2019．北海道大黒島における海鳥の現状．山階鳥学誌，51: 95-104.
- Olsen, K. M. and H. Larsson, 2004. Gulls of Europe, Asia and North America (Helm Identification Guides), pp. 33-39. Helm, London.
- 佐藤文男，2022．日本の海鳥の現状と保全の課題―環境省モニタリングサイト 1000 海鳥調査から―．山階鳥類学雑誌，54: 3-53.
- Senzaki, M., A. Terui, N. Tomita, F. Sato, Y. Fukuda, Y. Kataoka and Y. Watanuki, 2019. Long-term declines in common breeding seabirds in Japan. Bird Conservation International, doi:10.1017/S0959270919000352.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Larus crassirostris has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Larus crassirostris* is listed as VU under criteria A2. A. Reduction in population size based on any of the following: 2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Farmland, Wetland, Lower river basin, Estuary, Sandy beach/Pebble beach, Sea Cliff/Rocky beach/Reef, Brackish water, Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Sea surface, Reef 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by alien species), Predation (by native species), Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	風間健太郎（早稲田大学）
Author:	Kentaro Kazama

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　カモメ科 Laridae

ベニアジサシ

***Sterna dougallii bangsi* Mathews, 1912**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

平成 27（2015）年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査および 2024 年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査の両方で調査が実施された地点における、平成 27 年度調査の成鳥個体数は 5,400 羽であった。

【近年の状況】

平成 27（2015）年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査および 2024 年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査の両方で調査が実施された地点における、2024 年度調査の成鳥個体数は 3,608 羽であった。

上記のデータに基づくと、対象期間における減少率は、約 43%となる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

主に奄美以南の沿岸の岩礁や小島で繁殖するが、福岡県三池島(1994 年から)や、大阪湾（2007 年から）での小規模な繁殖が確認されている。近年の個体群規模は、国内最大繁殖地のチービシを含む各諸島で減少傾向にある一方で、八重山諸島では中規模ながら安定している。年により繁殖地を替えやすく、沖縄本島周辺では、島嶼間に移動や分散も見られている。繁殖を妨げる要因として、台風や熱帯低気圧に関連した繁殖失敗やカラスによる卵や雛の捕食のほか、海域利用者の繁殖地への接近や上陸による親鳥の抱卵・育雛の一斉放棄が挙げられる。

基礎情報

【形態】

全長約 31 cm。雌雄同色。額から後頭にかけて黒く、背、翼上面は淡青灰色だが、上尾筒と尾羽は白い。下面は白色で淡いピンク色を帯びる。尾は深い燕尾。脚は橙赤色。嘴は繁殖初期では黒色であるが、その後基部から徐々に赤色に変色する。近似種アジサシは、より大きく、翼上面がより濃い。また脚と嘴は黒色であることから区別できる。

【生活史】

八重山諸島では、5 月中旬ころに渡来し始め、6 月中旬ころから産卵が始まる。一腹卵数は 1～2 卵、まれに 3 卵であるが、年により異なり、平均 1.00～1.42 卵である。雌雄交代で抱卵し、抱卵日数は平均 22.7 日（21～26 日）である。雛は、平均 3.6 日齢で巣から離れ、平均 25.6 日齢で巣立ち（初飛翔）する。巣立ち幼鳥は、親鳥と共に渡去する。10 月上旬までには全ての成鳥と幼鳥が渡去する。八重山諸島で繁殖中の本種の食性は、主にトウゴロウイワシ・キビナゴ類だが、トビウオ類、サヨリ・ダツ類、ヒメジ類、イカ類なども採餌する。

【生息環境】

主に沿岸域のサンゴ礁や内湾の小島や岩礁で繁殖する。平均的に数百巣ほどのコロニーを形成し、希に 1～30 巣程度が、同所的に繁殖するエリグロアジサシのコロニーに混在することもある。潮間帯の近くから海抜 10 m 以内にある海岸性の草本の間隙や下で営巣する。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】海面
国土地域区分：	（5）沿岸域，（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

西部太平洋および大西洋の熱帯亜熱帯、インド洋に分布する。日本では夏鳥として渡来し、福岡県三池島を北限として、主に奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島で繁殖する。オーストラリアのグレートバリアリーフ南部のスウェインリーフまで渡って越冬することが報告されている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年において大きな分布域の変化は無い。

【生息地の現況】

繁殖地となる岩礁や小島およびその周辺の海岸、干潟やサンゴ礁では、潮干狩り、釣り、海水浴、ビーチキャンプ、カヤックなど、近年の海域利用の多様化が生じている。それらの利用度も 1 年を通じて高い。また、繁殖期中の採食海域は、主に繁殖地の数 km の範囲であるが、陸域からの赤土流出などによる水質悪化も懸念される。

【個体数の現況】

モニタリングサイト 1000 による一斉調査では、2024 年度は 10 地点において計 4,163 羽の成鳥個体数が確認され、2015 年度は 14 地点において 6,110 羽の成鳥個体が確認された。

存続を脅かす要因

台風や熱帯低気圧に伴う波浪や風雨で、卵や雛が流出したり、冷えて死亡することがあるほか、こうした気象条件が長期化すると雛が餓死することもある。また、カラスにより卵や雛が捕食されることもある。抱卵期や育雛初期では親鳥の一斉放棄が生じやすく、その背景に海域利用者の接近や上陸が起因することもある。また繁殖地を年により変える傾向が強いことの背景に、安定した繁殖地がほとんどないことが予想される。

要因の区分：	（過去）	捕食（在来種による），自然災害
	（現在）	捕食（在来種による），自然災害

特記事項

年により繁殖地を替える傾向があり、繁殖地を保護区域に指定する場合はそれら全体を網羅する必要がある。人為的な繁殖撹乱を最小限とするためには、地域社会と住民への理解と協力を啓発し続けることが有効である。北アメリカに生息するベニアジサシでは、繁殖地間の移動距離が 200～400 km におよぶ例も確認されている。国内での繁殖地間の長距離移動は、沖縄県名護市で生まれた個体が、16 年後に福岡県三池島で再捕獲されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ベニアジサシ	*Sterna dougallii bangsi*	VU
第４次 2019：	ベニアジサシ	*Sterna dougallii bangsi*	VU
第４次 2018：	ベニアジサシ	*Sterna dougallii bangsi*	VU
第４次 2017：	ベニアジサシ	*Sterna dougallii bangsi*	VU
第４次 2015：	ベニアジサシ	*Sterna dougallii bangsi*	VU
第４次：	ベニアジサシ	*Sterna dougallii bangsi*	VU
第３次：	ベニアジサシ	*Sterna dougallii bangsi*	VU
第２次：	ベニアジサシ	*Sterna dougallii bangsi*	NT
第１次：	ベニアジサシ	*Sterna dougallii bangsi*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【千葉県】重要保護生物(B)，【大阪府】準絶滅危惧(NT)，【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福岡県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境省自然環境局野生生物課，2002．鳥類標識調査によるベニアジサシの越冬地の確認について．環境省報道発表資料（平成 14 年 2 月 20 日）．
- 環境省自然環境局，2016．平成 27 年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書．環境省自然環境局，富士吉田．
- 環境省自然環境局，2025．2024 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書．環境省自然環境局，富士吉田．
- 河野裕美・水谷晃，2003．西表島網取湾におけるベニアジサシの繁殖段階の移行と繁殖期中の成鳥数の変化．日本鳥学会 2003 年度大会講演要旨集，p. 36．
- 河野裕美，2004．沖縄のベニアジサシ繁殖地に何が起きているのかμm．自然保護，481: 14-15．
- Mizutani, A. and H. Kohno, 2008. Breeding status of Black-naped and Roseate Terns in the Yaeyama Islands, Ryukyu Islands, Japan, in 2001. J. Yamashina Inst. Ornithol., 39: 101-111.
- 水谷晃・河野裕美，2009．エリグロアジサシとベニアジサシのモニタリング手法の提案 ―コロニー外からの観察による営巣数の計数と雛の齢査定に基づく産卵時期の推定―．山階鳥類学雑誌，40: 125-138．
- 水谷晃・河野裕美，2011．八重山諸島における海鳥類の現状．海洋と生物，194，33 (3): 225-232．
- 日本野鳥の会筑後支部・日本野鳥の会熊本県支部，2025．三池島鳥類調査報告書Ⅱ．pp.108，日本野鳥の会筑後支部・日本野鳥の会熊本県支部．
- O'Neill, P., C. Minton, K. Ozaki and R. White, 2005. Three populations of non-breeding Roseate Terns (*Sterna dougallii*) in the Swain Reefs, Southern Greate Barrier Reef, Australia. Emu, 105: 57-66.
- 尾崎清明・米田重玄，1992．沖縄島周辺におけるベニアジサシの繁殖状況とコロニー間の移動．日本鳥類学会誌，40(4): 133．
- 尾崎清明，2003．人と鳥、水際のせめぎあい―ベニアジサシに訪れた危機．Birder，17(7): 38-41．
- 尾崎清明，2011．海鳥の受難「コロニー消滅」という危機．野鳥，No.752:37-39．
- Spendelow, J. A., C. S. Mostello, I. C. T. Nisbet and C. S. Hall, 2010. Interregional breeding dispersal of adult Roseate Terns. Waterbirds, 33 (2): 242-245.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sterna dougallii bangsi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Sterna dougallii bangsi is listed as VU under criteria A2. A. Reduction in population size based on any of the following: 2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by native species), Natural disasters
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	尾崎清明（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Kiyoaki Ozaki

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　カモメ科 Laridae

エリグロアジサシ

***Sterna sumatrana sumatrana* Raffles, 1822**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

平成 27（2015）年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査および 2024 年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査の両方で調査が実施された地点における、平成 27 年度調査の成鳥個体数は 1,468 羽であった。

【近年の状況】

平成 27（2015）年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査および 2024 年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査の両方で調査が実施された地点における、2024 年度調査の成鳥個体数は 954 羽であった。

このデータから、当該期間内における減少率は約 35%となる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

奄美以南の沿岸の岩礁や小島などで小規模に繁殖する。八重山諸島では 63 繁殖地のうち一繁殖期で利用されるのは 40 繁殖地程度であり、また年により繁殖地を替える傾向もある。同諸島での近年のコロニー規模は減少傾向にある。雛生産性が低く、その要因として台風や熱帯低気圧に関連した繁殖失敗、カラスによる卵や雛の捕食、さらに海域利用者の繁殖地への接近や上陸による親鳥の抱卵・育雛の一斉放棄が挙げられる。

基礎情報

【形態】

全長約 30 cm。雌雄同色。全体に白色だが、背、翼上面、腰はごく淡い青灰色。後頭でつながる黒色の過眼線がある。尾は深い燕尾。最外初列風切羽外弁は黒い。嘴と脚は黒色。近似種で同所的にみられるベニアジサシは、より大きく、夏羽では頭上が黒く、嘴と脚が赤いことで区別できる。

【生活史】

八重山諸島では、5 月中旬頃に渡来しはじめ、6 月中旬頃から産卵がはじまる。一腹卵数は 1～2 卵、稀に 3 卵であるが、年により異なり平均 1.35～1.78 卵である。雌雄交代で抱卵し、抱卵日数は平均 23.9 日（21～27 日）である。雛はふ化後、平均 3.8 日齢で巣から離れ、平均 6.8 日齢で親鳥からの抱雛を日常的に受けなくなり、平均 26.1 日齢で巣立ち（初飛翔）する。巣立ち幼鳥は、繁殖地周辺に約 2 週間留まった後に親鳥と共に渡去する。遅くても 10 月上旬までには全ての成鳥と幼鳥が渡去する。繁殖期の餌生物の 90%以上はキビナゴ類やトウゴロウイワシ類で、その他にトビウオ類、サヨリ類、スズメダイ類などの幼魚も捕食する。ほとんどの繁殖地は 10 巣以内、多くても 30 巣程度で、まれに 100 巣を超えるが最大でも 200 巣以内である。

【生息環境】

沿岸域のサンゴ礁や内湾の小島・岩礁などに繁殖する。大型船舶の停泊用ブイや座礁船、防波堤などで営巣することもある。比較的視野の開けた開放的な場所を選択し、岩のわずかな窪みやサンゴ礫場に営巣する。同所的に繁殖するベニアジサシよりも水際に近い場所で営巣する傾向がある。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

熱帯を中心に西部太平洋とアジア海域の沿岸に広く分布する。日本には奄美・沖縄・宮古・八重山の各諸島に夏鳥として飛来し、繁殖する。越冬地はボルネオ島の東・南部、スラウェシ島、インドネシア（ジャワ島、小スンダ列島）であることが判明している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年において大きな分布域の変化は無い。

【生息地の現況】

繁殖地となる岩礁や小島およびその周辺の海岸、干潟やサンゴ礁は、潮干狩り・釣り・海水浴・ビーチキャンプ・カヤックなどにより、1 年を通して海域利用の多様化が生じている。また、繁殖期中の採食海域は、主に繁殖地の数 km 以内の範囲であるが、陸域から

の赤土流出などによる水質悪化も懸念される。八重山諸島には本種の繁殖可能な岩礁が約100 程度あり、これまでに 63 繁殖地が記録されている。しかし年により、このうちの 20～40 ヶ所程度が利用され、年差がある。

【個体数の現況】

モニタリングサイト 1000 による一斉調査では、2024 年度は 20 地点において計 1,165 羽の成鳥個体数が確認された。

存続を脅かす要因

台風や熱帯低気圧に伴う波浪や海面上昇、風雨により卵や雛の流出、冷えにより死亡する。こうした気象条件が長期化すると、雛は絶食に弱く餓死する。また、カラスによる卵や雛の捕食が頻繁に生じると、親鳥の抱卵・育雛の放棄が観察されている。八重山諸島の主要繁殖地での繁殖成功率は 2～50%であり、年差が大きい。人の接近や上陸が頻繁な繁殖地では、親子間の離別や親鳥の抱卵・育雛の一斉放棄が生じることも観察されており、雛生産に及ぼす人為的要因の大きい繁殖地も多いと考えられる。八重山諸島でのコロニー規模の減少の背景には、このような要因が複合して、雛生産の低い年が続いていることが関係していると考えられる。

要因の区分：	（過去）	捕食（在来種による），自然災害，その他（繁殖期における人為的攪乱）
	（現在）	捕食（在来種による），自然災害，その他（繁殖期における人為的攪乱）

特記事項

小規模で分散して繁殖し、年により繁殖地を替える傾向があり、繁殖地を保護区域に指定する場合はそれら全体を網羅する必要がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	エリグロアジサシ	*Sterna sumatrana*	VU
第４次 2019：	エリグロアジサシ	*Sterna sumatrana*	VU
第４次 2018：	エリグロアジサシ	*Sterna sumatrana*	VU
第４次 2017：	エリグロアジサシ	*Sterna sumatrana*	VU
第４次 2015：	エリグロアジサシ	*Sterna sumatrana*	VU
第４次：	エリグロアジサシ	*Sterna sumatrana*	VU
第３次：	エリグロアジサシ	*Sterna sumatrana*	NT
第２次：	エリグロアジサシ	*Sterna sumatrana*	NT
第１次：	エリグロアジサシ	*Sterna sumatrana sumatrana*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境省自然環境局，2016．平成 27 年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書．環境省自然環境局，富士吉田.
- 環境省自然環境局，2025．2024 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書．環境省自然環境局，富士吉田.
- 河野裕美，1996．水鳥 5 エリグロアジサシ *Sterna sumatrana* Raffles, 1822．平成 7 年度希少水生生物保存試験事業 日本の希少な野生生物に関する基礎資料（Ⅲ），pp. 501-506, 534-535．日本水産資源保護協会.
- 水谷晃・河野裕美，1999．西表島網取湾におけるエリグロアジサシの繁殖生態 1．繁殖段階の移行と成鳥数の変化．日本鳥学会 1999 年度大会講演要旨集，p. 32.
- 水谷晃・河野裕美，2000．西表島網取湾におけるエリグロアジサシの繁殖生態 2．巣立ち成功ならびに雛の成鳥と渡去過程．日本鳥学会 2000 年度大会講演要旨集，p. 44.
- 水谷晃・河野裕美，2006．西表島網取湾におけるエリグロアジサシの繁殖生態 4．食性と採食海域．日本鳥学会 2006 年度大会講演要旨集，p. 65.
- Mizutani, A. and H. Kohno, 2008. Breeding status of Black-naped and Roseate Terns in the Yaeyama Islands, Ryukyu Islands, Japan, in 2001. J. Yamashina Inst. Ornithol., 39: 101-111.
- 水谷晃・河野裕美，2009．エリグロアジサシとベニアジサシのモニタリング手法の提案 -コロニー外からの観察による営巣数の計数と雛の齢査定に基づく産卵時期の推定-．山階鳥類学雑誌，40: 125-138.
- 水谷晃・河野裕美，2011．八重山諸島における海鳥類の現状．海洋と生物，194，33 (3): 225-232.
- Thiebot, J.-B., N. Nakamura, Y. Toguchi, N. Tomita and K. Ozaki, 2020. Migration of black-naped terns in contracted cyclonic conditions. Marine Biology, 167: 83.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sterna sumatrana sumatrana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sterna sumatrana sumatrana* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following: 2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by native species), Natural disasters, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	尾崎清明（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Kiyoaki Ozaki

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　ウミスズメ科 Alcidae

カンムリウミスズメ

***Synthliboramphus wumizusume* (Temminck, 1836)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　C2a(ii)

基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　VU	基準 D:　－	基準 E:　－

C．個体群の成熟個体数が 10,000 未満であると推定される。

【推定根拠】

2000 年から 2017 年の期間に、Carter 氏、生物多様性センターや公益財団法人日本野鳥の会などが実施した調査結果をもとに各コロニーのペア数を合計すると約 2,800-4,100 ペアとなる報告されている。（Otsuki et al. 2017.）

加えて、以下の 2. かつ a (ii) に該当する事由がある。

2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測される。

【判断理由】

近年も繁殖地にカラス類やネズミ類が侵入し成熟個体が捕食された事例が報告されている（KONGSURAKAN al. 2023,私信）。

a) 個体群構造が次に該当

ii) 1 つの下位個体群中にすべての成熟個体が属している。

【判断理由】

近年、韓国南岸に数か所の繁殖地が発見されたが、ほとんどの繁殖地は日本に分布している。2000 年から 2017 年までに繁殖が確認された島嶼、岩礁は 23 か所に限られている。ジオロケータを用いた調査においても周年日本近海を利用していることが示されている。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

黒潮の流れる暖海域に繁殖する小型の海鳥で、繁殖北限は石川県七ツ島、南限は伊豆諸島鳥島、最大の繁殖地は宮崎県門川町枇榔島である。カラス類やネズミ類による卵・成鳥の捕食、磯釣りなどによる繁殖地への上陸、刺し網による混獲や油汚染等が減少要因としてあげられる。個体数は種全体で 5,000 から 10,000 羽程度とされているが、コロニーによっては減少後個体数が回復していない、あるいは繁殖個体や卵がカラス類に捕食され減少した場所もみられる。

基礎情報

【形態】

小型の海鳥で体重 164 g（繁殖期）、全長 239 mm、翼長（自然翼長）123 mm、翼開長 431 mm。ウミスズメ（*Synthliboramphus antiquus*）によく似るが、夏羽では頭部に 3～5 cm くらいの冠羽がある。また、喉の黒色部の幅がより狭いため、喉から肩にかかる黒色帯がウミスズメより直線的に見える。冬羽はウミスズメのものと酷似しているが、目の前後の羽が白い。

【生活史】

産卵期（3 月下旬～4 月上旬）の数ヶ月前より付近の海上で見られるようになる。繰り返し同じ島を利用する繁殖個体が確認されている。繁殖ため陸上に飛来するのは夜間に限られており、日中は巣内や繁殖地周辺の沿岸域あるいは外洋で過ごす。体重の 2 割ほどもある大きな卵を 1 週間程度の間隔を開けて 2 卵産み、何かの原因で卵が失われると、通常は産み足すことなく繁殖を放棄する。抱卵は雌雄ほぼ等しく分担し、日数は 30 日程度である。雛は 2 羽ともほぼ同時に孵化し、孵化後 1～2 日程度で親とともに巣を離れ、日本近海を移動しながら主に洋上を利用する。寿命については標識調査の記録から 23 年以上の生存例が報告されている。

【生息環境】

ウミスズメ類の中では唯一、暖海域で繁殖し、沿岸域の島嶼において、崖穴や岩の割れ目、石と石の間、草の間などに巣材を用いることなく営巣する。

非繁殖期は専ら洋上で生活し、繁殖後は瀬戸内海南西部での家族群確認（5 月）のほか、既知の繁殖地より北に位置する北海道十勝・霧多布沖（7～10 月）、羅臼沖（8 月）などで観察記録があり、北上して夏から秋を過ごした後、冬には再び繁殖地周辺及び繁殖地以南の海域に南下する。北海道霧多布沖の観察例では沿岸から 10 km 以上離れた外洋で多く見られる。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】裸地，草地，海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

本種の繁殖分布は黒潮及び対馬海流が流れる日本周辺に限られている。国内の繁殖地の北限は石川県七ツ島、南限は伊豆諸島鳥島である。国外では韓国で繁殖が報告されている。近縁のウミスズメは、ベーリング海を中心に亜寒帯海域に広範囲に分布し、国内では北海道天売島などで繁殖する。繁殖分布は重ならないが、洋上での分布域は重なる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

既知の繁殖地の北限は石川県七ツ島、南限は伊豆諸島鳥島である。主な繁殖地は宮崎県門川町枇榔島や伊豆諸島、三重県耳穴島、高知県幸島などである。国外では韓国全羅南道九屈諸島で繁殖が報告されている。

【生息地の現況】

現在、宮崎県門川町枇榔島は本種最大の繁殖地である。伊豆諸島には複数の繁殖地があり、合計で約 1,000 羽が生息すると推定される。2023 年に長崎県で新たな繁殖が確認されたが、既存の繁殖地では、伊豆諸島鳥島などネズミ類による捕食等で生息環境悪化が懸念される島嶼もあり、全体としては減少傾向もしくは現状維持の状態と思われる。

【個体数の現況】

宮崎県門川町枇榔島では、繁殖後期には 3,000 羽以上が周辺海域を含めて確認されている。伊豆諸島はかつて本種の主要な繁殖地であったと思われるが、現在は新島根浮岬、神津島祇苗島・恩馳島、八丈小島小池根、三宅島大野原島等で繁殖確認されている。しかし、複数の島で繁殖が確認できなくなった。他の繁殖地はいずれも規模が小さく、本種の個体数は全体で 5,000 から 10,000 羽程度と見られる。

存続を脅かす要因

分布が日本周辺に限られており、油汚染などにより一気に危機的な状況が増大する可能性がある。ネズミ類やカラス類による捕食の影響を大きく受けているほか、おそらく刺し網による混獲も各地で起きているものと思われる。繁殖地では、福岡県小屋島の繁殖個体数がドブネズミの捕食により激減し、ネズミの駆除後もなかなか個体群が回復していない。また、磯釣りなどレクリエーション活動により繁殖地に上陸することでの踏みつけやゴミの残置による影響も懸念される。人の移動や利用に伴う新たな捕食者の導入や誘致が捕食の増加を招いていると考えられる。

要因の区分：	（過去）	捕獲・狩猟/園芸採取，人の踏みつけ，捕食（外来種による），捕食（在来種による），混獲・錯誤捕獲，分布・産地局限，その他（人によるゴミの残置、人為的な繁殖のかく乱）
	（現在）	人の踏みつけ，捕食（外来種による），捕食（在来種による），混獲・錯誤捕獲，分布・産地局限，その他（人によるゴミの残置、人為的な繁殖のかく乱）

特記事項

分布が局所的で、ネズミ類の侵入等で人知れず絶滅する危険性もある。刺し網による混獲の防止は本種のみならず他の潜水性海鳥類にとっても重要な課題である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	カンムリウミスズメ	*Synthliboramphus wumizusume*	VU

第４次 2019：	カンムリウミスズメ	*Synthliboramphus wumizusume*	VU
第４次 2018：	カンムリウミスズメ	*Synthliboramphus wumizusume*	VU
第４次 2017：	カンムリウミスズメ	*Synthliboramphus wumizusume*	VU
第４次 2015：	カンムリウミスズメ	*Synthliboramphus wumizusume*	VU
第４次：	カンムリウミスズメ	*Synthliboramphus wumizusume*	VU
第３次：	カンムリウミスズメ	*Synthliboramphus wumizusume*	VU
第２次：	カンムリウミスズメ	*Synthliboramphus wumizusume*	VU
第１次：	カンムリウミスズメ	*Synthliboramphus wumizusume*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】準絶滅危惧,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【山形県】絶滅危惧ⅠA類(CR),【福島県】情報不足(DD),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【富山県】情報不足(DD),【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【静岡県】絶滅危惧ⅠA類(CR),【三重県】絶滅危惧ⅠA類(CR),【京都府】絶滅寸前種,【兵庫県】要注目種,【和歌山県】情報不足(DD),【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【広島県】準絶滅危惧(NT),【山口県】絶滅危惧ⅠA類(CR),【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福岡県】絶滅危惧ⅠA類(CR),【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【宮崎県】絶滅危惧ⅠB類(EN-r),【鹿児島県】情報不足

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国指定天然記念物，鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【三重県】

参考文献

- Carter, H. R., K. Ono, J. N. Fries, H. Hasegawa, M. Ueta, H. Higuchi, J. T. Moyer, L. K. O. Chan, L. N. de Forest, M. Hasegawa and G. B. van Vliet, 2002. Status and conservation of the Japanese Murrelet (*Synthliboramphus wumizusume*) in the Izu Islands, Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol., 33(2): 61-87.
- Hasegawa, H., 1984. Status and conservation of seabirds in Japan, with special attention to the Short-tailed albatross. In: J. P. Croxall, P. G. H. Evans and R. W. Schreiber (eds.), Status and conservation of the world's Seabirds, pp. 487-500. ICBP Technical Publication, Cambridge.
- 樋口行雄，1979．カンムリウミスズメの繁殖生態と分布．海洋と生物，3: 20-24.
- 飯田知彦，2010．瀬戸内海西部におけるカンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* の複数家族群の初確認．日本鳥学会誌，59(1): 73-75．宮本昌幸，2011．羅臼沖海上におけるカンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* の連続確認記録．知床博物館研究報告，32: 41-44.

- Kongsurakan, P., T. Nakahara and N. M. Yamaguchi, 2023. Impacts of depredation by Large-billed Crows *Corvus macrorhynchos* on the colony of Japanese Murrelets *Synthliboramphus wumizusume* at Eboshijima, Japan. Marine Ornithology, 51: 169-178.
- 日本野鳥の会，2010．カンムリウミスズメ保護プロジェクト 2009 年度事業報告書．48pp.
- 日本野鳥の会，2011．カンムリウミスズメ保護プロジェクト 2010 年度事業報告書．48pp.
- 小野宏治，1996．カンムリウミスズメ．日本の希少な野生生物に関する基礎資料（III），pp. 514-519．日本水産資源保護協会，東京.
- 小野宏治，2010．カンムリウミスズメ．野生生物保護学会（編），野生動物保護の事典．pp. 490-493．朝倉書店，東京.
- 小野宏治（編），1995．希少ウミスズメ類の現状と保護 I．日本ウミスズメ類研究会，千葉．180pp.
- Otsuki, K., H. R. Carter, Y. Yamamoto and C. Park, 2017. Summary of breeding status for the Japanese Crested Murrelet. Status and Monitoring of Rare and Threatened Japanese Crested Murrelet, Marine Bird Restoration Group 2017, pp. 15-32.
- Piatt, J. F. and P. J. Gould, 1994. Postbreeding dispersal and drift-net mortality of endangered Japanese Murrelets. Auk, 111 (4): 953-961.
- KONGSURAKAN, P., T. NAKAHARA and N. M. Yamaguchi, 2023. IMPACTS OF DEPREDATION BY LARGE-BILLED CROWS CORVUS MACRORHYNCHOS ON THE COLONY OF JAPANESE MURRELETS *SYNTHLIBORAMPHUS WUMIZUSUME* AT EBOSHIJIMA, JAPAN. Marine Ornithology, 51: 169-178.
- 武石全慈，1987．福岡県小屋島におけるカンムリウミスズメの大量斃死について．北九州自然史博物館研究報告，7: 121-131．
- Yamaguchi, N. M., T. Amano, T. Kimura, R. Mine, K. Otsuki, E. Yamaguchi, T. Nakahara, 2024. Discovery of a new breeding site for the endangered Japanese Murrelet *Synthliboramphus wumizusume* in Nagasaki, Japan. Marine Ornithology, 52: 23-26.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Synthliboramphus wumizusume has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Synthliboramphus wumizusume* is listed as VU under criteria C2a(ii).

C. Population size estimated to number fewer than 10,000 mature individuals and:

2. A continuing decline, observed, projected, or inferred, in numbers of mature individuals and:

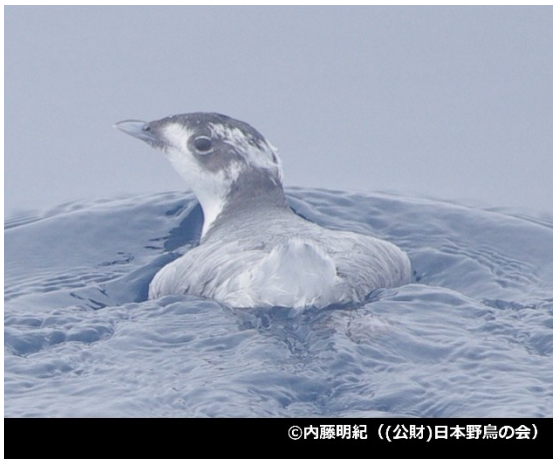
a. Population structure in the form:

(ii) all mature individuals in one subpopulation.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Bare area, Grassland, Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface

	【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Human trampling, Predation (by alien species), Predation (by native species), Bycatch, Limited distribution, Other
Law designation status for conservation	Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Mie】.





執筆者:	手嶋洋子（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Yoko Teshima

公表年月：2026 年 3 月

ネッタイチョウ目 Phaethontiformes　ネッタイチョウ科 Phaethontidae

アカオネッタイチョウ

***Phaethon rubricauda melanorhynchos* Gmelin, 1789**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D1				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D1．個体群が極めて小さく、成熟個体数が 1,000 未満と推定される。 【推定根拠】 南硫黄島では 300 個体以上が観察されている。北硫黄島は繁殖規模が南硫黄島よりも小さく、半数とすると 150 個体程度と考えられる。南鳥島は 10 個体程度が生息している。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

アカオネッタイチョウは小笠原諸島の南鳥島、北硫黄島と南硫黄島で繁殖している。小笠原諸島の西之島では営巣記録が 1 例だけあるが、これは偶発的なものと考えられる。南硫黄島では 50 つがい以上が、北硫黄島では数十つがいが、南鳥島では 3～4 つがいが繁殖しており、近年は繁殖集団サイズに大きな変動は認められていない。北硫黄島では外来植物による営巣環境の改変が、南鳥島では野生化したネコの捕食の影響が心配される。

基礎情報

【形態】

全身がほぼ白色で、長く伸びた 2 枚の赤い中央尾羽が特徴的である。眼の周囲と足が黒色、嘴は赤色で、雌雄同色。全長約 80 cm、翼開長約 110 cm。若鳥では嘴が黒色で、背と翼上面に黒斑があり、中央尾羽が長くない。

【生活史】

岩の隙間、岩や灌木の下の地面に直接 1 卵を産む。抱卵は約 45 日、育雛は約 80 日。トビウオ、イカなどの魚介類を採食する。繁殖は 1 年を通じて記録がある。小笠原諸島の西之島では 1 月に繁殖中の巣が、南鳥島では 7 月に雛の巣立ちが、南硫黄島では 3 月に雛が、7 月に巣内雛が確認されている。これらのことから、小笠原では少なくとも 1 月から 8 月までが繁殖期になっていると考えられる。

【生息環境】

熱帯から亜熱帯の島嶼に疎らなコロニーを形成して繁殖する。北硫黄島、南硫黄島、南鳥島では海岸近くの岩の隙間や下、クサトベラ等の低木の下や外来樹木トクサバモクマオウの下での営巣が確認されている。また北硫黄島、南硫黄島では標高 300 m 以下の崖上などの植生内に出入りする個体が観察され、営巣している可能性が示唆されている。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地 【陸域_海岸部】森林，草地，海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（5）沿岸域，（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

太平洋とインド洋の熱帯から亜熱帯に広く分布する。日本では小笠原諸島の南鳥島、北硫黄島、南硫黄島、西之島で営巣した記録がある。本州以南の各地に稀に飛来し、小笠原群島や八重山諸島ではしばしば観察される。

現在の生息状況

【分布域の現況】

小笠原諸島の南鳥島、北硫黄島、南硫黄島、西之島で繁殖の記録がある。北硫黄島、南硫黄島では戦前から現在まで繁殖が確認されている。南鳥島では戦前に繁殖していたものの、戦後に一時的に確認が途絶え、その後 1980 年代から再び確認されるようになった。西之島では 1981 年に 1 例のみ繁殖が記録されているものの、他には記録がないことから、偶発的な営巣と考えられる。また八重山諸島の仲ノ神島では、以前は毎年少数の飛来が確認されていたが、2000 年代は観察頻度が減少している。

【生息地の現況】

南硫黄島と北硫黄島では、海岸の崩壊地の下部に発達したクサトベラ群落を中心に標高

300 m 以下の範囲で営巣している。海岸部は台風などの影響で高波が生じた時に撹乱されやすいため、繁殖成功度が低下することがある。南鳥島では、滑走路付近のトクサバモクマオウの樹下などで繁殖している。

【個体数の現況】

南硫黄島では、1982 年には 53 つがいの繁殖が確認され、また 2007 年の調査では 50 つがい以上が繁殖していると考えられている。また、2017 年には 2007 年より多くの営巣が確認されている。1982 年には島の周囲で約 200 個体が観察され、また 2017 年には 300 個体以上が観察されている。北硫黄島では数十つがいが繁殖していると考えられている。南鳥島では 1980 年代には少なくとも 3 つがいが、2007 年には 4 つがいが、2022 年には 2 つがいが繁殖していた。これらのことから、アカオネッタイチョウの営巣数は年変動があるものの大きな増減は生じていないと考えられる。

存続を脅かす要因

最大規模の繁殖地である南硫黄島では、波浪による影響で海岸の巣の繁殖が撹乱されやすいと考えられる。北硫黄島の海岸部では近年外来植物シチヘンゲが分布を拡大しており、今後アカオネッタイチョウの営巣環境に影響を与える可能性がある。南鳥島には野生化したネコが生息しており、捕食される危険がある。

要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による），自然災害
	（現在）	捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害

特記事項

南鳥島では近年樹上営巣性の海鳥が個体数を増加させている一方で、地上営巣するアカオネッタイチョウでは少数の繁殖に止まり増加に至っていない。これは野生化したネコによる捕食圧によるものの可能性がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカオネッタイチョウ	*Phaethon rubricauda rothschildi*	EN
第４次 2019：	アカオネッタイチョウ	*Phaethon rubricauda rothschildi*	EN
第４次 2018：	アカオネッタイチョウ	*Phaethon rubricauda rothschildi*	EN
第４次 2017：	アカオネッタイチョウ	*Phaethon rubricauda rothschildi*	EN
第４次 2015：	アカオネッタイチョウ	*Phaethon rubricauda rothschildi*	EN
第４次：	アカオネッタイチョウ	*Phaethon rubricauda rothschildi*	EN
第３次：	アカオネッタイチョウ	*Phaethon rubricauda rothschildi*	EN
第２次：	アカオネッタイチョウ	*Phaethon rubricauda rothschildi*	EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Bryan, WA., 1903. A monograph of Marcus Island. Occasional Papers, Bishop Museum, 2: 77-126.
- Chiba, H., K. Kawakami, H. Suzuki and K. Horikoshi, 2007. The distribution of seabirds in the Bonin Islands, southern Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol., 39: 1-17.
- 堀越宙，2021．UAV を使用した外来植物の北硫黄島内分布記録．小笠原研究，47: 247-255．
- 川上和人，2017．小笠原諸島南鳥島の鳥類相．Strix，33: 131-143．
- 川上和人・鈴木創・堀越宙，2021．2019 年における北硫黄島の鳥類相．小笠原研究，47: 185-200．
- 川上和人・鈴木創・堀越和夫・川口大朗，2018．2017 年における南硫黄島の鳥類相．小笠原研究，44: 217-250．
- 川上和人・鈴木創・千葉勇人・堀越和夫，2008．南硫黄島の鳥類相．小笠原研究，33: 111-127．
- 川上和人・鈴木啓容・原田幸典，2024．小笠原諸島南鳥島における海鳥相の変化．日本鳥学会誌，73: 195-206．
- 小林さやか・加藤克，2022．明治期の南鳥島産鳥類標本の情報復元．山階鳥類学雑誌，54: 103-139．
- 河野裕美・安部直哉・真野徹，1986．仲の神島の海鳥類．山階鳥類研究所研究報告，18: 1-27．
- 河野裕美・水谷晃，2017．アカオネッタイチョウ．沖縄県環境部自然保護課（編）「改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第 3 版−動物編−」，pp. 125-126．沖縄県環境部自然保護課，沖縄県．
- 倉田洋二・金子博，1982．溶岩の島に見る創世記．アニマ，115: 6-12．
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並に硫黄列島産の鳥類に就て．日本生物地理学会会報，1: 89-186．
- 塚本洋三，1983．南硫黄島の鳥類．環境庁自然保護局（編）「南硫黄島の自然」，pp. 249-285．日本野生生物研究センター，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Phaethon rubricauda melanorhynchos has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List

5th edition. *Phaethon rubricauda melanorhynchos* is listed as VU under criteria D1. D1. Population size estimated to number fewer than 1,000 mature individuals.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest, Grassland, Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by alien species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

ミズナギドリ目 Procellariiformes　アホウドリ科 Diomedeidae

アホウドリ

***Phoebastria albatrus* (Pallas, 1769)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。 【判断理由】 国内で繁殖している島は 3 島のみであり、面積も極めて限定されている。 現在の主要な生息地である鳥島は活火山であり、噴火した場合に繁殖地が壊滅する可能性がある。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

かつては北太平洋西部の島嶼で数百万羽が繁殖していたと推定されるが、1900 年前後に起きた乱獲と営巣地破壊によって一時は絶滅と報じられた。その後の保護活動により、現在は伊豆鳥島、尖閣諸島、小笠原諸島聟島、ミッドウェイ環礁を繁殖地として 9,500 羽以上が生息する。近年、鳥島の繁殖集団と尖閣諸島の繁殖集団が別種であることが明らかとなり、それぞれの独自性を念頭に置いた保全策の実施が望まれる。

基礎情報

【形態】

全長 84-94 cm、翼開長 210-230 cm、体重 4-5 kg。体色は綿羽に覆われた頃だけでなく、正羽へ生え変わり巣立った後もしばらく、ピンク色の嘴と青灰色の脚を除いて全身黒褐色である。その後、2-4 歳頃から胸・腹部に、6-7 歳から背面に白い羽が現れ、10 歳になるとほぼ全身が白くなり、後頭部から頸部背側には黄色の羽が現れる。雌雄同色。

【生活史】

成鳥は 10 月中旬から繁殖地を訪れ始め、11 月に卵を 1 つだけ産む。抱卵期間は約 65 日間で、雛は 12 月末-1 月初旬に孵化する。両親は繁殖地を渡去する 5 月初旬まで雛に餌を与え続け、雛はその 2-3 週間後に海へと飛び立つ。繁殖地を離れた雛は海上でしばらく生活し、3 歳頃になると繁殖地を訪れるようになり、5-7 歳から繁殖を始める。その後は、ほぼ毎年一度、繁殖を行う。

【生息環境】

1 年を通じて海上で生活し、繁殖活動のみ陸上で行う。海上では大陸棚の斜面域（水深 200-1,000 m の海域）が比較的多く利用される。繁殖地は大陸から遠く離れた島の裸地あるいは丈の低い草の生えた場所が選ばれる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】裸地，草地 【陸域_平地部】裸地，草地 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

かつては伊豆諸島、小笠原諸島、大東諸島、尖閣諸島、台湾近くの澎佳嶼、綿花嶼、澎湖諸島などで繁殖していた。しかし、羽毛採取のための捕殺と、リン資源の採掘による営巣場所の破壊によって、1900 年前後に繁殖地は次々と失われた。そして、一時は絶滅とまで報じられたが、1951 年に伊豆鳥島の燕崎で、1971 年に尖閣諸島の南小島で少数の生息が再確認された。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在の繁殖地は伊豆鳥島、尖閣諸島、小笠原諸島聟島、米国ミッドウェイ環礁のみである。海上における主な分布域は北緯 30-60 度に位置する北太平洋、オホーツク海、ベーリング海で、本州・北海道の東岸、アリューシャン列島付近、北アメリカの西岸に観察例が多い。

【生息地の現況】

伊豆鳥島燕崎の従来繁殖地は、急斜面にあることから、土砂の流入出によって卵や雛の

被害が起こるため、土留め作業等による保全作業や、デコイと音声装置による地盤の安定した初寝崎への繁殖地誘致活動が行われてきた。また、伊豆鳥島は活火山を有するため、伊豆鳥島で生まれた雛を小笠原諸島聟島で人工飼育することによって、過去に失われた安全な繁殖地を復元させる取り組みが行われている。

【個体数の現況】

伊豆鳥島では繁殖個体数が増加しており、2024/25 年現在、ヒナ数 1,337 羽、総個体数約 9,500 羽である。一方、尖閣諸島は、2020/21 年の衛星画像を用いた調査で、109～162 つがい程度が繁殖していると推定され、過去の調査結果と比較して個体数が増加している可能性があるとされているが、上陸調査は行われていないため現況は不明である。聟島では 2024/25 年に 3 羽の雛が誕生した。また、ミッドウェイ環礁の繁殖つがい数は現在 1 組だけである。

存続を脅かす要因

伊豆鳥島は従来繁殖地への土砂の流入出と、噴火によって島の広範囲が破壊される危険性を抱えている。ベーリング海の米国領海内では、漁業活動による混獲死亡が 1995-2010 年に 7 羽確認されているが、日本国内の状況は不明。また、海上では浮遊プラスチックの混食や有害化学物質の体内蓄積が危惧されているが、生存率や繁殖成績への影響は不明。

要因の区分：	（過去）	捕獲・狩猟/園芸採取，自然災害
	（現在）	自然災害

特記事項

鳥島由来の集団と尖閣諸島由来の集団は、遺伝的・生態的・形態的に異なることから、アホウドリは 2 種の隠蔽種からなることが明らかとなった。鳥島の集団は「アホウドリ」、尖閣諸島の集団は「センカクアホウドリ」と呼ぶことが提案され、それぞれの独自性を保つことを念頭に置いた保全策の実施が必要となっている。これらの一連の研究成果を受けて 2024 年 9 月に日本鳥学会から発行された日本鳥類目録改訂第 8 版では、1 種として記載されたものの、「尖閣諸島で主に繁殖する種は *Phoebastria albatrus* センカクアホウドリだが、鳥島で主に繁殖する種 *Phoebastria* sp. アホウドリは学名が未確定である」と注記された。

環境省第 5 次レッドリストでは、評価単位を日本鳥類目録改訂第 8 版の整理に従った。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アホウドリ	*Phoebastria albatrus*	VU
第４次 2019：	アホウドリ	*Phoebastria albatrus*	VU
第４次 2018：	アホウドリ	*Phoebastria albatrus*	VU

第４次 2017：	アホウドリ	*Phoebastria albatrus*	VU
第４次 2015：	アホウドリ	*Diomedea albatrus*	VU
第４次：	アホウドリ	*Diomedea albatrus*	VU
第３次：	アホウドリ	*Diomedea albatrus*	VU
第２次：	アホウドリ	*Diomedea albatrus*	VU
第１次：	アホウドリ	*Diomedea albatrus*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類，【宮城県】準絶滅危惧(NT)，【山形県】評価対象外，【福島県】情報不足(DD)，【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【東京都（小笠原諸島）】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，国指定特別天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- Brothers et al., 2022. ALBATROSS POPULATION MONITORING USING SATELLITE IMAGERY, A CASE STUDY: SHORT-TAILED ALBATROSS PHOEBASTRIA ALBATRUS AT THE SENKAKU ISLANDS. Marine Ornithology, 50: 7–12.
- 出口智広，2009．絶海の孤島への再導入 アホウドリ： 日本の希少鳥類を守る．山岸哲（編），pp. 23-47．
- Deguchi et al., 2017. Translocation and hand-rearing result in short-tailed albatrosses returning to breed in the Ogasawara Islands 80 years after extirpation. Animal Conservation, 20: 341-349.
- Eda et al., 2020. Cryptic species in a vulnerable seabird: short-tailed albatross consists of two species. Endangered Species Research, 43: 375-386.
- Finkelstein, M. E., D. Wolf, M. Goldman, D. F. Doak, P. R. Sievert, G. Balogh and H. Hasegawa, 2010. The anatomy of a (potential) disaster: volcanos, behavior and population viability of the Short-tailed Albatross. Biological Conservation, 143: 321-331.
- 長谷川博，2007．大型海鳥アホウドリの保護．山岸哲（監），山階鳥類研究所（編），保全鳥類学，pp. 89-104．京都大学出版会，京都．
- 環境省，2021．令和 2 年度衛星画像を用いた鳥類の生息状況調査手法検討業務（最終報告）．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．
- Nunn, G. B., J. Cooper, P. Jouventin, C. J. R. Robertson and G. G. Robertson, 1996. Evolutionary relationships among extant albatrosses (Procellariformes: Diomedeidae) established from complete cytochrome-b gene sequences. Auk, 113: 784-801.

- 佐藤文男・今野怜・今野美和・富田直樹，2022．鳥島初寝崎のアホウドリ新営巣地の安定と個体群増加．山階鳥類学雑誌，54: 231-251.
- Suryan et al., 2006. Foraging destinations and marine habitat use of short-tailed albatrosses: A multi-scale approach using first-passage time analysis. Deep-Sea Research II, 53: 370-386.
- Tomita et al., 2024. Incomplete isolation in the nonbreeding areas of two genetically separated but sympatric short-tailed albatross populations. Endangered Species Research, 53: 213-225.
- U.S. Fish and Wildlife Service, 2008. Short-tailed albatross recovery plan, U. S. Fish and Wildlife Service, Anchorage. 72pp.
- Yamasaki et al., 2022. Neotype designation of the Short-tailed Albatross *Phoebastria albatrus* (Pallas, 1769) (Aves: Procellariiformes: Diomedeidae). Zootaxa, 5124: 081-087.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Phoebastria albatrus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Phoebastria albatrus* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Bare area, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Bare area, Grassland 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Natural disasters
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Nationally Designated Special Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	富田直樹（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Naoki Tomita

公表年月：2026 年 3 月

ミズナギドリ目 Procellariiformes　ウミツバメ科 Hydrobatidae

ヒメクロウミツバメ

***Hydrobates monorhis* (Swinhoe, 1867)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab D2				
基準 A:　―	基準 B:　VU	基準 C:　―	基準 D:　VU	基準 E:　―

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
福岡県小屋島ではドブネズミの侵入により本種の繁殖個体数が大幅に減少し、ドブネズミ駆除のための殺鼠剤散布が実施された。星神島でも 2021 年にドブネズミの侵入が確認されたため、殺鼠剤散布が継続的に行われている。ドブネズミの駆除が実施されない場合は、その地域の本種の個体数が激減することが予測される。なお、三貫島においては震災に伴う津波の影響による営巣地の崩壊がみられる。

D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている
【判断理由】
繁殖している各島（三貫島、沓島、星神島、小屋島、恩馳島）および繁殖地域（八丈小島小池根）の合計面積は約 0.5 km²であり、極めて限定されている。
以前、小屋島ではドブネズミの侵入により繁殖個体数が大幅に減少した。現在の主要な繁殖地である沓島についても、近接している冠島にドブネズミが侵入していることから、沓島にもドブネズミが侵入した場合、本種の個体数が激減する可能性がある。また、星神島において 2021 年にドブネズミの侵入が確認された。ヒメクロウミツバメへの被害の程度は不明だが、ドブネズミ駆除のため殺鼠剤散布が継続的に行われている。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

小型のミズナギドリ目の海鳥で、全体が黒褐色で、腰は白くない。日本近海の太平洋と日本海、および東シナ海の沿岸および外洋に分布する。日本からロシアのウラジオストク、韓国、中国（台湾を含む）の沿岸の島で繁殖する。非繁殖期はインド洋にも生息する。国内では岩手県三貫島、京都府沓島、隠岐諸島星神島、福岡県小屋島、伊豆諸島恩馳島、八丈小島小池根での繁殖が知られている。国内最大の繁殖地である沓島では、2008 年に 6,312 巣穴、2010 年以降は年により変動するが、2,376～6,136 巣穴と推定されている。伊豆諸島

恩馳島では 1,650 巣穴前後、八丈小島小池根では 166～294 巣穴が記録されている。

基礎情報

【形態】

小型のミズナギドリ目の海鳥で体重約 45 g、全長約 20 cm、翼開長約 45 cm である。全体が黒褐色で、翼の上面にやや不鮮明な淡色帯がある。腰は白くなく、翼はやや短い。嘴や脚は黒く、尾は浅い凹形である。クロコシジロウミツバメ（*Hydrobates castro*）やコシジロウミツバメ（*Hydrobates leucorhous*）は腰が白色である。全身が褐色のオーストンウミツバメ（*Hydrobates tristrami*）は全長が 25 cm と大きい。

【生活史】

繁殖地には夜間に飛来し、夜明け前に飛去する。岩手県三貫島の例では、5 月下旬に渡来して 10 月上旬に渡去する。5～6 月に地中に掘った巣穴に 1 卵を産卵する。抱卵期間は約 41 日である。

【生息環境】

繁殖は日本からロシアのウラジオストク、韓国、中国（台湾を含む）の沿岸の離島で行い、繁殖期以外は外洋に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】裸地，森林，草地 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

日本近海の太平洋と日本海、および東シナ海の沿岸および外洋に分布する。日本からロシアのウラジオストク、韓国、中国（台湾を含む）の沿岸の島で繁殖する。非繁殖期はインド洋にも生息する。北大西洋での分布も確認されている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

国内では岩手県三貫島、京都府沓島、隠岐諸島星神島、福岡県小屋島、伊豆諸島恩馳島、八丈小島小池根での繁殖が知られている。繁殖地として記載のある石川県七ツ島大島では近年の繁殖は確認されていない。

【生息地の現況】

現在の繁殖地は無人島で、通常、人の接近はない場所である。

【個体数の現況】

国内最大の繁殖地である沓島では、2008 年に 6,312 巣穴、2010 年以降は年により変動するが、2,376～6,136 巣穴と推定されている。伊豆諸島恩馳島では 1,650 巣穴前後、八丈小島小池根では 166～294 巣穴が記録されている。

存続を脅かす要因

福岡県小屋島では 1987 年と 2009 年にドブネズミが侵入しヒメクロウミツバメが捕食され、個体数が大幅に減少した。殺鼠剤散布によって現在のドブネズミの生息は確認されていない。2021 年に星神島でもドブネズミの侵入が確認され、殺鼠剤散布が継続的に行われている。三貫島においては震災に伴う津波の影響による営巣地の崩壊がみられる。

要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による）
	（現在）	捕食（外来種による），自然災害

特記事項

福岡県小屋島では 2009 年にドブネズミが侵入して以降、ヒメクロウミツバメの雛は確認されていなかったが、2020 年に再確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヒメクロウミツバメ	*Oceanodroma monorhis*	VU
第４次 2019：	ヒメクロウミツバメ	*Oceanodroma monorhis*	VU
第４次 2018：	ヒメクロウミツバメ	*Oceanodroma monorhis*	VU
第４次 2017：	ヒメクロウミツバメ	*Oceanodroma monorhis*	VU
第４次 2015：	ヒメクロウミツバメ	*Oceanodroma monorhis*	VU
第４次：	ヒメクロウミツバメ	*Oceanodroma monorhis*	VU
第３次：	ヒメクロウミツバメ	*Oceanodroma monorhis*	VU
第２次：	ヒメクロウミツバメ	*Oceanodroma monorhis*	VU
第１次：	ヒメクロウミツバメ	*Oceanodroma monorhis*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類，【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【山形県】評価対象外，【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【石川県】絶滅(EX)，【福井県】要注目，【京都府】絶滅危惧種，【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【山口県】情報不足(DD)，【福岡県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【長崎県】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【京都府】

参考文献

- Brook, M., 2004. Albatrossses and Petrels across the World, pp. 405-406. Oxford Univ. Press, Oxford.
- Hasegawa, H., 1984. Status and conservation of seabirds in Japan, with special attention to the Short-tailed albatross. In: J. P. Croxall, P. G. H. Evans and R. W. Schreiber (eds.), Status and conservation of the world's Seabirds, pp. 487-500. ICBP Technical Publication, Cambridge.
- 環境省中国四国地方環境事務所，2025．令和 6 年度マリンワーカー事業大山隠岐国立公園隠岐地域星神島ドブネズミ駆除業務報告書．53pp. 環境省中国四国地方環境事務所，岡山.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2023．2022 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2024．2023 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書.
- Kuroda, H., 1991. Distributional Patterns and Seasonal Movements of Procellariiformes in the North Pacific. J. Yamashina Inst. Ornithol., 23(2): 23-80.
- Nakahara, T. et al., 2025. Seasonal migration across the north-western Pacific and Indian Oceans in Swinhoe's Storm-petrel *Hydrobates monorhis*. Bird Conservation International, 35: e36, 1-8.
- 佐藤文男，1996．ヒメクロウミツバメ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（III），pp. 477-481．日本水産資源保護協会，東京.
- Sato, F. et al., 2010. Breeding of Swinhoe's storm-petrel *Oceanodroma monohis* in the Kutsujima Island, Kyoto, Japan. Marine Ornithology, 38: 133-136.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hydrobates monorhis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hydrobates monorhis* is listed as VU under criteria B2ab D2.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Bare area, Forest, Grassland

	【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Predation (by alien species), Natural disasters
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Kyoto】.



執筆者:	富田直樹（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Naoki Tomita

公表年月：2026 年 3 月

ミズナギドリ目 Procellariiformes　ウミツバメ科 Hydrobatidae

クロウミツバメ

***Hydrobates matsudairae* (Kuroda, 1922)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。 【判断理由】 本種の繁殖地は、南硫黄島の高標高地域しかない。島面積全体でも 3.5 km²しかなく、営巣適地面積は 1 km²以下と見積もられている。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

クロウミツバメは、南硫黄島の標高 500 m 以上の地域でのみ繁殖が確認されている地中営巣性の海鳥である。本種は過去には北硫黄島でも繁殖していたが、戦後はこの島での繁殖は確認されていない。これは外来ネズミ類の影響と考えられている。南硫黄島は地形が急峻なため土砂崩れが生じやすく、繁殖地は強い撹乱を受けていると考えられる。繁殖地が 1 箇所に限定されていることは、非常に大きなリスクと言えるため、北硫黄島の外来ネズミ類を根絶して繁殖集団を回復させることが望ましい。

基礎情報

【形態】

全長約 25 cm、翼開長約 55 cm、体重約 50 g の比較的大型のウミツバメ。全身黒色でオーストンウミツバメに似るが、初列風切羽の羽軸基部に白色斑が目立つ。

【生活史】

クロウミツバメは地中に掘られた穴の中で営巣する。戦前の北硫黄島の記録では、1 月中下旬に渡来し、3 月下旬から 4 月上旬に産卵、4 月中下旬に孵化し、6 月上中旬に巣立ちするとされている。1982 年 6 月中旬の調査では全身が綿羽に包まれた雛が見つかっている。2007 年 6 月の南硫黄島では、卵から巣立ち直前のヒナまで様々な段階の巣が見られている。これらのことから本種の繁殖期は比較的長期に及び、少なくとも 3 月から 9 月頃までは続くものと考えられる。非繁殖期には主に海上で生活しており、太平洋西部からインド洋のアフリカ沖まで広く利用していると考えられている。

【生息環境】

クロウミツバメは地中に掘られた穴の中で営巣するため、発達した土壌が維持されている場所を繁殖地としている。南硫黄島では 2007 年には標高 700 m から山頂のある標高 916 m のあいだの地域の低木林やところどころ地面が裸出した草地で多数の営巣が確認されていた。2017 年には、2007 年に多くの巣が見つかった草地では遷移して密生した薮となっており本種の営巣密度が低下していた一方で、繁殖地の標高の下限が 500 m まで下がっていた。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】裸地，森林，草地 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島のみで繁殖し、戦前は北硫黄島と南硫黄島で繁殖が確認されていた。

現在の生息状況

【分布域の現況】

過去の繁殖地である北硫黄島では、近年は繁殖が確認されていない。一方で南硫黄島では 2017 年にも繁殖地が維持されていることが確認されている。

【生息地の現況】

南硫黄島の地形は非常に急峻で傾斜が安息角に近く、クロウミツバメが繁殖する標高 500 m 以上の生息地の環境は非常に不安定な状況にある。本種の営巣には巣穴を掘ることのできる土壌が発達した場所が必要だが、南硫黄島では土砂崩れによる土壌の消失が頻繁に生じている。また、1982 年に森林だった場所が 2007 年には草地や裸地に、2017 年にはさらに密生した薮に変化するような植生の遷移が確認されている。密生した薮では営巣密

度が低くなるため、このような場所では植生遷移により営巣密度が低下していると考えられる。2007 年には本種の繁殖は標高 700 m 以上でのみ確認されていたが、2017 年には標高 500 m でも確認された。これは高標高地域の繁殖適地の減少に伴い営巣範囲を拡大したものと考えられる。以上のことから、本種の生息地は非常に不安定な状態にあると考えられる。

【個体数の現況】

2007 年の営巣密度の調査結果から、本種は島全体で数万つがいが繁殖していると考えられている。ただし、2007 年から 2017 年にかけて植生遷移にともなって繁殖適地面積が減少し、この期間に繁殖個体数が減少した可能性がある。

存続を脅かす要因

南硫黄島では、土砂崩れによる土壌の消失や植生遷移により、繁殖適地が消失することがあり、生息地が不安定である。また本種の繁殖地には、同じく地中営巣性でより体サイズが大きなシロハラミズナギドリが多数繁殖しており、巣穴をめぐる影響が生じている可能性がある。ウミツバメ類は夜間に光に誘引される性質があるため、有人島の夜間照明に誘引されて地上に着陸することがあり、これらの個体は、交通事故やネコの捕食に晒されることがある。北硫黄島では、外来ネズミ類の侵入により本種の繁殖集団が消滅したと考えられている。南硫黄島にはこれまでネズミ類は侵入していないが、同じ火山列島の硫黄島や北硫黄島では侵入していることから、警戒する必要がある。

要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害，競争/競合（在来種による），光害，分布・産地局限
	（現在）	捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害，競争/競合（在来種による），光害，分布・産地局限

特記事項

繁殖地の南硫黄島は原生自然環境保全地域として保全され、立ち入りが厳しく制限されているが、本種の繁殖環境は非常に不安定であるため、定期的なモニタリングが不可欠である。繁殖地が 1 カ所に限定されていることは本種の存続上の大きな課題であるため、北硫黄島の外来ネズミ類を根絶させ繁殖地の分散を促すことが望ましい。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	クロウミツバメ	*Oceanodroma matsudairae*	NT
第４次 2019：	クロウミツバメ	*Oceanodroma matsudairae*	NT
第４次 2018：	クロウミツバメ	*Oceanodroma matsudairae*	NT
第４次 2017：	クロウミツバメ	*Oceanodroma matsudairae*	NT
第４次 2015：	クロウミツバメ	*Oceanodroma matsudairae*	NT

第４次:	クロウミツバメ	*Oceanodroma matsudairae*	NT
第３次:	クロウミツバメ	*Oceanodroma matsudairae*	EN
第２次:	クロウミツバメ	*Oceanodroma matsudairae*	VU
第１次:	クロウミツバメ	*Oceanodroma matsudairae*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】絶滅危惧ⅠA類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Harrison, P., M. Perrow and H. Larsson, 2021. Seabirds. The new identification guide. Lynx Edicions, Barcelona.
- 川上和人・鈴木創・千葉勇人・堀越和夫，2008．南硫黄島の鳥類相．小笠原研究，33: 111-127.
- 川上和人・鈴木創・堀越和夫・川口大朗，2018．2017 年における南硫黄島の鳥類相．小笠原研究，44: 217-250.
- 川上和人・鈴木創・堀越宙，2021．2019 年における北硫黄島の鳥類相．小笠原研究，47: 185-200.
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並びに硫黄列島産の鳥類に就いて．日本生物地理学会会報，1: 89-186.
- 塚本洋三，1983．南硫黄島の鳥類．環境庁自然保護局（編）南硫黄島の自然，pp. 249-285．日本野生生物研究センター，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hydrobates matsudairae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hydrobates matsudairae* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Bare area, Forest, Grassland 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface

Threat types:	Predation (by alien species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters, Competition (with native species), Light pollution, Limited distribution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

ミズナギドリ目 Procellariiformes　ミズナギドリ科 Procellariidae

シロハラミズナギドリ

***Pterodroma hypoleuca* (Salvin, 1888)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。 【判断理由】 繁殖地は南硫黄島の標高 400 m 以上の地域及び北之島にしかない。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

シロハラミズナギドリは、小笠原諸島とハワイ諸島でのみ繁殖する小型海鳥である。小笠原諸島では過去には広い範囲で繁殖していたが、おそらくネズミによる捕食やノヤギよる環境改変の影響により各島で繁殖集団が局所絶滅したと考えられる。現在は外来のネズミが野生化していない南硫黄島と北之島のみで繁殖しており、特に前者に多くの個体が集中している。南硫黄島は地形が急峻で、繁殖地では頻繁に土砂崩れなどが生じて繁殖個体群は影響を受けていると考えられる。

基礎情報

【形態】

全長約 30 cm、翼開長 65～70 cm の小型ミズナギドリ。体の上面が灰褐色で、下面は白色。翼上面には黒い M 字斑が見られ、翼下面では翼角部分から内側に黒斑が目立つ。

【生活史】

戦前の記録では、繁殖地には 10 月頃から渡来しはじめ、3 月に産卵の最盛期を迎え、6 月中旬に巣立つとされている。北之島では 1978 年は 12 月に抱卵が、2011 年は 5 月に綿羽に包まれた雛が確認されている。南硫黄島では、1982 年 6 月、2007 年 6 月、2017 年 6 月に綿羽に覆われた雛が確認されている。本種は産卵から孵化までは約 50 日、孵化から巣立ちまでが約 80 日であることから、南硫黄島では 4 月上中旬に孵化し、7 月～8 月に巣立ちするものと考えられる。以上のことから本種の繁殖期は、島によってばらつきが大きいと考えられる。

【生息環境】

南硫黄島では標高 400 m から山頂までの樹林帯で、北之島ではオガサワラススキ群落内で、地中に営巣している。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

ハワイ諸島及び小笠原諸島のみで繁殖しており、日本国内では小笠原諸島のみで繁殖する。戦前は、小笠原諸島の聟島列島から硫黄列島の広い範囲で繁殖していたと考えられる。小笠原諸島南島の古代骨の分析から、本種は近代の人為的撹乱が生じる以前には小笠原群島の低標高地における優占種の一つであったと考えられている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在は、南硫黄島と北之島でのみ繁殖が確認されている。北之島で確認されている営巣数は非常に少なく、小笠原諸島の集団のほとんどは南硫黄島で繁殖していると考えられる。小笠原諸島の海上では普通に観察され、父島および母島では毎年多数の個体が保護されている。全国各地において稀に飛来が確認される。

【生息地の現況】

南硫黄島では、主に標高 400 m 以上の土壌の発達した樹林帯で繁殖している。この地域の森林は急傾斜地に成立しているため、土砂崩れなどにより森林が土壌と共に消失することがあると考えられる。山頂の周辺では、1982 年の調査では、本種は確認されなかったが、2007 年と 2017 年には確認されている。これは、1982 年当時に中腹にあった森林が土砂崩

れで消失したため、営巣に好適な環境の残る山頂周辺に分布を拡大したためかもしれない。北之島ではオガサワラススキ群落内で営巣が見つかっている。北之島には過去にヤギが野生化していたが、現在は生息していない。

【個体数の現況】

南硫黄島では、2007 年 6 月の調査に基づき、数万～数十万つがいが繁殖していると考えられている。北之島では 2011 年 5 月 19 日の調査でヒナが 1 羽確認されたのみであり、繁殖個体数は少ないと考えられる。

存続を脅かす要因

小笠原諸島では外来ネズミ類による小型海鳥の捕食が顕在化しており、その捕食圧が本種の局所絶滅の主因と考えられる。本種はしばしば有人島の人工光に誘引され不時着して保護されることがあり、これらの個体は、ネコによる捕食や交通事故、人工構造物への衝突などが生じている。南硫黄島では土壌の安定しない急斜面で繁殖しており、土砂崩れなどにより営巣環境が撹乱されていると考えられる。過去に繁殖地のあった北硫黄島では、飛来が確認されているものの、繁殖集団の再定着は見られておらず、外来種クマネズミの捕食により営巣の再開が阻害されている可能性がある。聟島列島や南島では、ノヤギ駆除後に、大型で移動性の高いオナガミズナギドリが急速に個体数を増やしており、種間競争などを介してシロハラミズナギドリの集団の回復が阻害されている可能性がある。

要因の区分：	（過去）	交通事故，捕食（外来種による），自然災害，人工構造物への衝突，光害
	（現在）	交通事故，捕食（外来種による），自然災害，競争/競合（在来種による），人工構造物への衝突，光害

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シロハラミズナギドリ	*Pterodroma hypoleuca*	DD
第４次 2019：	シロハラミズナギドリ	*Pterodroma hypoleuca*	DD
第４次 2018：	シロハラミズナギドリ	*Pterodroma hypoleuca*	DD
第４次 2017：	シロハラミズナギドリ	*Pterodroma hypoleuca*	DD
第４次 2015：	シロハラミズナギドリ	*Pterodroma hypoleuca*	DD
第４次：	シロハラミズナギドリ	*Pterodroma hypoleuca*	DD
第３次：	シロハラミズナギドリ	*Pterodroma hypoleuca*	DD
第２次：	シロハラミズナギドリ	*Pterodroma hypoleuca*	DD
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【山形県】評価対象外，【東京都（小笠原諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Chiba, H., K. Kawakami, H. Suzuki and K. Horikoshi, 2007. The distribution of seabirds in the Bonin Islands, southern Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol, 39: 1-17.
- 千葉勇人・堀越和夫・佐々木哲朗，2011．北之島におけるシロハラミズナギドリ *Pterodroma hypoluca* 繁殖の再確認．小笠原研究年報，35: 45-48．
- Kawakami, K. and K. Horikoshi, 2022. Recovery or changeμm Differences between in seabird fauna in island ecosystems before alien mammal disturbance and after alien mammal eradication. Restoration Ecology, 30: e13579.
- 川上和人・鈴木創・堀越和夫・川口大朗，2018．2017 年における南硫黄島の鳥類相．小笠原研究，44: 217-250．
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並に硫黄列島産の鳥類に就て．日本生物地理学会会報，1: 89-186．
- NHK，1978．NHK 自然のアルバム 日本の四季 2 潮騒の中に．
- 鈴木創・堀越和夫・佐々木哲朗・川上和人，2019．小笠原諸島聟島列島におけるノヤギ排除後の海鳥営巣数の急激な増加．日本鳥学会誌，68: 273-287．
- 塚本洋三，1983．環境庁自然保護局（編），南硫黄島の鳥類．南硫黄島の自然，pp. 249-285．日本野生生物研究センター，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pterodroma hypoleuca has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pterodroma hypoleuca* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland

	【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Vehicle collision, Predation (by alien species), Natural disasters, Competition (with native species), Collision with man-made structures, Light pollution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

カツオドリ目 Suliformes　カツオドリ科 Sulidae

アオツラカツオドリ

***Sula dactylatra personata* Gould, 1846**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D1

基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　VU	基準 E:　―

D1．個体群が極めて小さく、成熟個体数が 1,000 未満と推定される。

【推定根拠】

北小島で 50 つがいとすると、成鳥は 100 個体以上となる。南小島では最大で成鳥 107 個体、西之島では 62 個体が見つかっているが、観察されなかった個体が生息すると考えられるため、より多くの個体がいるはずである。以上のことから成熟個体数は合計で 400～500 個体程度は生息していると考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

アオツラカツオドリは 20 世紀後半に尖閣諸島の北小島と南小島、小笠原諸島の西之島で繁殖が確認された海鳥である。彼らの個体数はその後増加してきた。ただし尖閣諸島は国際的な領土問題のため近年の調査が行われておらず、個体群の現況は不明である。西之島では 2013 年からの噴火により大規模に環境が変化しており、彼らの繁殖集団は大きな影響を受けていると考えられる。ただし、大規模な噴火後の 2022 年にも彼らが西之島で繁殖していることが確認されている。

基礎情報

【形態】

全長約 90 cm、翼開長約 150 cm、体重約 2.3 kg。カツオドリよりやや大型で、風切羽と尾羽以外のほぼ全身が白色の羽衣を呈する。顔は濃藍色、嘴は黄色、足は青灰色である。若鳥では頭部と背面、翼上面が黒褐色を呈する。

【生活史】

一年を通して繁殖の記録があるが、国内での繁殖期のピークは冬季にあると考えられる。一腹卵数は 2 だが、しばしば兄弟殺しが生じるため 1 雛のみが巣立つことが多い。生後 2〜3 年で繁殖を開始する。トビウオなどの魚類を主な食物とし、繁殖期には繁殖地から数百キロ程度の範囲で採食をする。

【生息環境】

海岸や海に近い台地上、飛び立ちやすい崖の上や斜面などに営巣する。開放的な環境を好み、砂地や岩地、草地などに営巣する。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】裸地，草地，砂浜・礫浜，海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

太平洋、大西洋、インド洋の熱帯から亜熱帯の島嶼に広く分布する。国内での繁殖は沖縄県尖閣諸島の北小島および南小島、小笠原諸島の西之島のみで確認されている。いずれの集団も 20 世紀後半に定着したもので、それ以前に国内の繁殖記録はない。国内の本州以南の各地では稀に飛来することがある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本種は 1970 年代までは小笠原群島および八重山群島に時折飛来する稀な鳥だったが、尖閣諸島では 1970 年代から生息が確認され、1991 年 3 月、1992 年 4 月に雛と幼鳥が確認され、その後繁殖地が拡大していると考えられる。西之島では 1991 年に初めて 1 つがいの繁殖が確認され、その後繁殖集団が大きくなっている。最近は豆南諸島の須美寿島および孀婦岩において高頻度で観察されるようになっているが、これは国内に繁殖集団が形成され個体数が増加したためと考えられる。

【生息地の現況】

尖閣諸島の繁殖地は領有権をめぐる国際的な問題から近年調査がされておらず、現況は不明である。西之島は 2013 年から断続的に噴火し、特に 2019 年から 2020 年に生じた噴火では多量の溶岩の噴出と共に島の全域が 1〜5 m の火山灰に覆われるという大きな変化が生じた。噴火はまだ終息しておらず、今後も大規模な環境変化が生じる可能性がある。

【個体数の現況】

北小島では 2002 年 5 月に約 50 つがいが確認されている。南小島では 2001 年 3 月に成鳥 107 羽、2002 年 2 月に成鳥 87 羽と雛 22 羽が確認されている。その後尖閣諸島での繁殖状況は不明である。ただし、尖閣諸島に近い仲ノ神島では、2000 年ごろまでは毎年 10 羽以下の亜成鳥の飛来が確認されていたが、その後は毎年 20～30 羽の亜成鳥が飛来して休息する姿が見られている。これらのことから、現状は不明なものの尖閣諸島の繁殖集団は現在も維持されているものと考えられる。西之島では 2013 年から 2015 年の大規模な噴火により環境変化が生じたため、一時的に繁殖個体数が減少した可能性がある。その後 2019 年 9 月に 62 羽の成鳥と 6 羽の雛、放卵中の 5 巣が確認されている。この時期は主な繁殖期に入る前なのでより多くの個体が繁殖していた可能性がある。西之島は 2019 年から 2020 年にかけて大規模な噴火があったが、2021 年 7 月には 3 巣の繁殖と成鳥、幼鳥を含む 60 個体、9 月には 6 巣の繁殖と成鳥、幼鳥を含む 43 個体が確認されており、繁殖集団が維持されていることが確認されている。

存続を脅かす要因

尖閣諸島の繁殖地は領土問題の対象地域となっており、現況を把握することができないことが最大の問題となっている。西之島は火山活動を続けており、噴火による環境の変化や繁殖の撹乱の恐れがある。

要因の区分：	（過去）	その他（領土問題）
	（現在）	自然災害，その他（領土問題）

特記事項

アオツラカツオドリの繁殖集団は 20 世紀後半に定着したもので、本種の世界的な分布拡大のフロンティアにあたる部分と考えられる。今はまだ国内の分布域が狭いが、今後は拡大する可能性がある。西之島は噴火による立ち入りの制限から本種の営巣地での調査が難しい状況にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—

第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 千葉勇人，1991．小笠原諸島の海鳥．Birder，5(8): 18–27．
- 川上和人・山本裕・堀越和夫，2005．小笠原諸島西之島の鳥類相．Strix，23: 159-166．
- 川上和人・小山田佑輔，2020．2019 年における西之島の鳥類相．小笠原研究，46: 79-94．
- 川上和人・野口克也・森英章，2023．2021 年における西之島の陸上生物相．小笠原研究，49: 71-86．
- 川上和人・森英章，2025．豆南諸島における海鳥相の変化とアカアシカツオドリの全国的な分布拡大．日本鳥学会誌，74: 55-69．
- 河野裕美・安部直哉・真野徹，1986．仲の神島の海鳥類．山階鳥類研究所研究報告，18: 1-27．
- 河野裕美・水谷晃，2017．アオツラカツオドリ．沖縄県環境部自然保護課（編）「改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第 3 版−動物編−」，pp. 160-161．沖縄県環境部自然保護課，沖縄県．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sula dactylatra personata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sula dactylatra personata* is listed as VU under criteria D1.

D1. Population size estimated to number fewer than 1,000 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Bare area, Grassland, Sandy beach/Pebble beach, Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Natural disasters, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

カツオドリ目 Suliformes　カツオドリ科 Sulidae

アカアシカツオドリ

***Sula sula rubripes* Gould, 1838**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D1

基準 A: ―	基準 B: ―	基準 C: ―	基準 D: VU	基準 E: ―

D1．個体群が極めて小さく、成熟個体数が 1,000 未満と推定される。

【推定根拠】

南硫黄島、北硫黄島、仲ノ神島のそれぞれで繁殖に参加するつがい数が約 10、150、10 とすると、合計で 170 つがい、340 個体となる。実際には確認されていない個体もいると考えられることから、合計で 500 程度と推定した。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

アカアシカツオドリは熱帯から亜熱帯域を中心に生息する大型の海鳥である。本種は 1970 年代ごろまでは小笠原諸島や八重山諸島に稀に渡来する鳥類だった。しかし、2017 年に火山列島の南硫黄島で、2018 年に北硫黄島で、2019 年に八重山諸島の仲ノ神島で集団繁殖地が見つかった。また、近年は本州や北海道を含む日本各地での観察記録も増えている。本種は過去数十年の間に国内の分布を拡大しているが、これは国外の集団の生息状況が改善し個体数が増加しているためと考えられる。

基礎情報

【形態】

全長約 70 cm。本亜種の羽色には多型があり、初列と次列風切羽、下雨覆の黒色を除いて全身白色の白色型、全身が灰褐色の褐色型、褐色型に似るが尾が白色の白尾褐色型、白色型に似るが尾が黒褐色の黒尾白色型などがある。どの羽色型の成鳥も足は赤色、嘴は淡青色で基部はピンク色である。若鳥の羽色には多様な変異がある。幼鳥は成鳥褐色型と似るが、黒色の嘴と暗色の足で識別できる。

【生活史】

主に地上から 5-10 m 程度の樹上に枯れ枝を用いて営巣し 1 卵を産む。時には地上で営巣することもある。繁殖は一年中記録があり、抱卵期間は約 45 日間、育雛期間は約 100-140 日、巣外育雛期は時には 200 日以上に及ぶ。繁殖開始年齢は 2-3 年で、20 年以上生きることが知られている。トビウオ類やイカ類をよく採食し、夜間に採食することもある。

【生息環境】

主に低木林の発達した島嶼で繁殖する。繁殖に参加していない個体が繁殖地以外の島の樹上や岩上で集団で休息していることもある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_海岸部】森林，海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

種としては、世界の熱帯から亜熱帯海域に広く繁殖分布する。本亜種は太平洋中央部から西部、インド洋に広く分布する。国内では 1970 年代ごろまで小笠原諸島や八重山諸島に稀に渡来する種とされていたが、近年は本亜種が火山列島の南硫黄島、北硫黄島および八重山諸島の仲ノ神島で繁殖し、また主に小笠原諸島、伊豆諸島、琉球列島の各地に飛来している。近年は本州や北海道などでも観察される機会が増え、全国的に分布が拡大している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1975 年と 1977 年に、琉球列島の八重山諸島仲ノ神島で各々1 つがいがガジュマルの樹上で繁殖した 2 例の記録がある。小笠原諸島では、1997 年に母島沖の四本岩で 1 羽の営巣記録（台風で巣が崩れ繁殖失敗）がある。近年は、2017 年に火山列島の南硫黄島で、2018 年に同列島の北硫黄島で、2019 年に仲ノ神島で集団繁殖地が見つかっている。2022 年には南鳥島で約 130 個体の集団と巣材を運ぶ個体が観察されている。八重山諸島や小笠原諸島、伊豆諸島には毎年飛来している。豆南諸島では須美寿島および孀婦岩において休息す

る個体が恒常的に観察されており、最大で同時に 80 個体が記録されている。

【生息地の現況】

集団繁殖地が見つかった南硫黄島は原生自然環境保全地域に指定されており、過去から現在まで人間の影響がほとんどない。北硫黄島には第二次世界大戦後人は住んでおらず、近年は直接的な人為影響はほとんどない。これら 2 島の営巣場所は人の近づけない断崖上の森林にある。また、仲ノ神島は過去には乱獲や採卵により海鳥の繁殖集団が大きく影響を受けたが、その後に天然記念物や鳥獣保護区に指定され、現在は上陸が制限されている。このため、本亜種の生息環境はいずれの場所でも安定して維持されていると言える。

【個体数の現況】

南硫黄島では 2017 年 6 月に少なくとも 8 つがいが参加しているコロニーが見つかり、周辺では少なくとも 29 個体が確認されている。この島では 2004 年にも少なくとも 1 巣を含む集団が樹上で記録されており、また 2007 年にも 30-40 個体を含む集団が樹上にとまっている姿が観察されていることから、遅くとも 2000 年代初頭には繁殖していたと考えられる。北硫黄島では 2018 年 9 月に 153 巣を含むコロニーが見つかった。この島では 2000 年にもアカアシカツオドリが観察されており、また 2008 年にも約 40 個体が樹上にとまる姿が観察されており、2000 年代初頭から個体数が年々増加している。仲ノ神島では 1970 年代の記録以後は繁殖記録がなく、また 1990 年代以後飛来する個体数が減少傾向にあった。しかし、2017 年からはガジュマル群落にとまる集団が観察されるようになり、2019 年から営巣が確認されるようになった。ここでは 2021 年には 11 巣の集団営巣が確認され、周囲では 18 個体の成鳥が観察されている。

存続を脅かす要因

現状ではこれらの集団を脅かす特段の要因はない。

要因の区分：	（過去）	その他（現状では存続を脅かす要因はない。）
	（現在）	その他（現状では存続を脅かす要因はない。）

特記事項

アカアシカツオドリの繁殖集団は近年定着したもので、本種の世界的な分布拡大のフロンティアにあたる部分と考えられる。今はまだ国内の繁殖分布域は狭く個体数が少ないが、今後さらに分布が拡大し個体数が増加する可能性が高い。本種の分布が拡大している要因は、太平洋諸島において過去に本種の生息を脅かしていた乱獲が終息するとともに営巣環境が改善することで個体数が増加したことにあると考えられている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカアシカツオドリ	*Sula sula rubripes*	EN
第４次 2019：	アカアシカツオドリ	*Sula sula rubripes*	EN
第４次 2018：	アカアシカツオドリ	*Sula sula rubripes*	EN
第４次 2017：	アカアシカツオドリ	*Sula sula rubripes*	EN
第４次 2015：	アカアシカツオドリ	*Sula sula rubripes*	EN
第４次：	アカアシカツオドリ	*Sula sula rubripes*	EN
第３次：	アカアシカツオドリ	*Sula sula rubripes*	EN
第２次：	アカアシカツオドリ	*Sula sula rubripes*	EN
第１次：	アカアシカツオドリ	*Sula sula rubripes*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Chiba, H., K. Kawakami, H. Suzuki and K. Horikoshi, 2007. The distribution of seabirds in the Bonin Islands, southern Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol, 39: 1-17.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2022．2021 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書．環境省自然環境局生物多様性センター．
- 川上和人・鈴木創・千葉勇人・堀越和夫，2008．南硫黄島の鳥類相．小笠原研究，33: 111‐127.
- 川上和人・鈴木創・堀越和夫，2018．南硫黄島におけるアカアシカツオドリ *Sula sula* 集団営巣の国内初記録．日鳥学誌，67: 249-252.
- 川上和人・鈴木創・堀越和夫・川口大朗，2018．2017 年における南硫黄島の鳥類相．小笠原研究，44: 217-250.
- 川上和人・鈴木創・堀越宙，2021．2019 年における北硫黄島の鳥類相．小笠原研究，47: 185-200.
- 川上和人・鈴木啓容・原田幸典，2024．小笠原諸島南鳥島における海鳥相の変化．日本鳥学会誌，73: 195-206.
- 川上和人・森英章，2025．豆南諸島における海鳥相の変化とアカアシカツオドリの全国的な分布拡大．日本鳥学会誌，74: 55-69.
- 風間健太郎・佐藤雅彦，2008．北海道利尻島におけるアカアシカツオドリ *Sula sula* の飛来記録．日本鳥学会誌，57: 30-32.
- 河野裕美・安部直哉・真野徹，1986．仲の神島の海鳥類．山階鳥類研究所研究報告，18(1): 1-27.

- 水谷晃・村越未来・松崎茂・山田智子・長嶺隆・河野裕美，2012．アカアシカツオドリ若鳥の保護と長期飼育後の放鳥．Strix，28: 149-163．
- 日本鳥学会，1974．日本鳥類目録 改訂第 5 版．学習研究社．
- 富田直樹・成田章，2012．青森県蕪島におけるアカアシカツオドリ若鳥の観察記録．山階鳥類学雑誌，44: 18-22．
- 山階鳥類研究所，2005．平成 16 年度国指定鳥獣保護区指定に関する調査（火山列島北硫黄島・南硫黄島）報告書．山階鳥類研究所，p. 43．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sula sula rubripes has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sula sula rubripes* is listed as VU under criteria D1.

D1. Population size estimated to number fewer than 1,000 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest, Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　トキ科 Threskiornithidae

クロツラヘラサギ

***Platalea minor* Temminck & Schlegel, 1849**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D1				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D1．個体群が極めて小さく、成熟個体数が 1,000 未満と推定される。 【推定根拠】 2023 年 1 月の世界一斉センサスにおいて、国内では 640 羽が観察され、内訳は成鳥 80 羽、幼鳥・亜成鳥 92 羽が確認され、不明 468 羽である。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

クロツラヘラサギは、朝鮮半島西海岸などで繁殖し、中国大陸沿岸部、台湾、香港、日本などの東アジアに約 6,600 羽が生息する。水辺に生息し、干潟や河口などの浅水域で魚類、エビ等の甲殻類を採餌する。日本では以前は稀な冬鳥であったが、近年は九州、沖縄を中心に約 640 羽が越冬している。生息地では埋め立て、堤防の設置などが進み生息域が狭められつつある。世界的に局地的な分布をしており、生息環境の悪化、減少が続いている。

協力者:　日本クロツラヘラサギネットワーク

基礎情報

【形態】

全長は約 74～82 cm。雌雄同色。全身白色で、成鳥では嘴と目の周り、脚は黒色。嘴はへら状で幼鳥ではピンク色を帯びるが成長するにつれて黒くなり、横縞状に隆起する。繁殖期の成鳥は冠羽がのび、胸とともに黄色を帯びる。目先の皮膚も黄色くなる。

【生活史】

無人島の岩だなに営巣し、5 月下旬～6 月上旬に 3 卵を生む。雌雄交代で 26 日間抱卵し、雛はふ化後約 40 日で巣立つ。飼育下で確認された繁殖開始年齢は、メスで 3 歳、オスでは 5 歳である。日本では 4 月下旬から越冬地から繁殖地へと渡り始めるが、若鳥ではそのまま越夏する個体も見られる。

【生息環境】

水辺に生息し、干潟、河口、池、用水路などの浅水域で魚類や甲殻類、貝類、昆虫類等を採餌する。潮が満ちたときは河口近くのヨシ原や干潟、堤防、中州、畑地、調整池、埋立地、川辺の低木林際などで休息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，湿地・湿原，砂地・礫地，河川下流域，河口域，農業用水路，小河川，ため池・池沼，砂浜・礫浜，海崖・岩浜・岩礁（磯），汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】海面，岩礁（磯），砂底・礫底，泥底
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

朝鮮半島西海岸、中国遼寧省沿岸及びロシアのピョートル大帝湾周辺の無人島で繁殖し、朝鮮半島南西部の韓国済州島、中国大陸沿岸、台湾、香港、マカオ、ベトナム、カンボジア、日本で越冬する。国内では九州と沖縄が主要な越冬地である。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本では従来まれな冬鳥であったが、近年は、福岡県、佐賀県、熊本県、宮崎県、鹿児島県、長崎県、大分県、沖縄県、山口県で定期的に越冬する。越冬数が最も多いのは熊本県、次いで福岡県である。有明海、瀬戸内海西部での越冬が増加傾向で、その他、四国や東日本の一部などでも少数が観察される。モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査第 2 期とりまとめ報告書では、第 1 期の 2004 年から 2007 年にかけて 172～263 羽、第 2 期の 2008 年から 2012 年にかけて 309～328 羽、モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類 2004-2017 年度とりまとめ報告書では 2013 年から 2017 年にかけて 368～402 羽、2018 年から 2021 年には 425～540 羽と増加傾向であったが、2022 年には 425 羽となっている。香港バードウォッチングソサエティが呼びかけ、国内では日本クロツラヘラサギネットワークが中心になり毎年 1 月に実施している世界一斉センサスでも増加傾向で 2022 年に 683

羽であったが、2023 年にはやや減少し 640 羽である。

【生息地の現況】

世界分布では台湾台南市周辺、香港などで集中している傾向がある一方、日本では九州・沖縄が中心で、これらの地域の各地において小グループずつが分散して越冬している。日本での生息地は、多くの地域で埋め立てや道路建設、河川改修、堤防工事などによる環境の変化が進んでおり、生息環境は狭まってきている。海岸の開発による生息地減少やそれに伴う餌生物の減少が考えられ、餌生物からの有害化学物質の摂取も懸念される。また、嘴を水中で左右に振る採餌法のため、釣り糸が嘴に絡んだり、飛翔時に電線等に翼があたり骨折する事故も発生している。

【個体数の現況】

総生息確認数は近年増加傾向にあり、世界一斉センサスでは、1990 年代初期の約 300 羽から、1995 年には約 500 羽、2000 年には約 660 羽、2005 年には約 1,500 羽、2010 年には約 2,400 羽、2015 年には約 3,300 羽、2020 年には約 4,900 羽、そして、2023 年には 6,633 羽となっている。2023 年の内訳は、台湾 4,228 羽、中国本土 1,307 羽、日本 640 羽、后海湾（香港、深圳）299 羽、ベトナム 80 羽、韓国 54 羽である。国内で確認された 640 羽の内訳は、熊本県 181 羽、福岡県 126 羽、鹿児島県 83 羽、佐賀県 79 羽、沖縄県 61 羽、山口県 45 羽、宮崎県 40 羽等であった。

存続を脅かす要因

生息地周辺で、埋め立てや河川改修、堤防・鉄道橋りょう建設などにより環境の悪化が進んでいる。海岸の開発や後背地の整備などによる生息地の減少もあり、餌生物の減少が懸念される。生息地が住宅地に近い所では、釣り糸や防鳥ネットへの絡まり、電線への衝突などによる事故が発生している。この他に、集中越冬地でのボツリヌス菌、高病原性鳥インフルエンザウイルスへの感染が懸念される。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，湿地開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，感染症/病原菌，人工構造物への衝突
	（現在）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，湿地開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，農薬汚染/化学物質汚染，感染症/病原菌，人工構造物への衝突

特記事項

東アジアに局所的に分布する種で、学術的に貴重である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020： クロツラヘラサギ *Platalea minor* EN

第４次 2019：	クロツラヘラサギ	*Platalea minor*	EN
第４次 2018：	クロツラヘラサギ	*Platalea minor*	EN
第４次 2017：	クロツラヘラサギ	*Platalea minor*	EN
第４次 2015：	クロツラヘラサギ	*Platalea minor*	EN
第４次：	クロツラヘラサギ	*Platalea minor*	EN
第３次：	クロツラヘラサギ	*Platalea minor*	CR
第２次：	クロツラヘラサギ	*Platalea minor*	CR
第１次：	クロツラヘラサギ	*Platalea minor*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd)，【秋田県】情報不足(DD)，【山形県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類，【千葉県】最重要保護生物(A)，【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【富山県】情報不足(DD)，【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類，【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越冬)，【三重県】情報不足(DD)，【兵庫県】C ランク，【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【徳島県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【福岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【佐賀県】絶滅危惧Ⅰ類種，【長崎県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【大分県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【宮崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR-r)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類，【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- Chong, J. R., U. I. Pak, C. Y. Rim and T. S. Kim, 1996. Breedinig biology of Black-faced Spoonbill *Platalea minor*. Strix, 14: 1-10.
- 日本クロツラヘラサギネットワーク編，2020．2019～2020 クロツラヘラサギ調査報告書．pp. 43．日本クロツラヘラサギネットワーク，八代市．
- 日本クロツラヘラサギネットワーク編，2023．2022～2023 クロツラヘラサギ調査報告書．pp. 37．日本クロツラヘラサギネットワーク，八代市．
- Sung, Y. H., Ivan W. L. Tse and Y. T. Yu, 2018. Population trends of the Black-faced Spoonbill *Platalea minor*:analysis of data from international synchronised censuses. Bird Conservation International, 28: 157-167.
- Takano, S. and Y. Henmi, 2012. The influence of construction a Shinkansen bridge on Black-faced Spoonbills *Platalea minor* wintering in Kyushu, Japan. Ornitohlogical Sciense, 11: 21-28.

- Ueta, M. and R. Kurosawa (eds.), 2000. Conservation and research of Black-faced Spoonbills and their habitats. Proceedings of the international workshop in Tokyo, 1997, pp. 65. Wild Bird Society of Japan, Tokyo.
- Yu, Y. T. and S. Cornelis, 2004. Habitat use of the black-faced spoonbill. Waterbirds, 27: 129-134.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Platalea minor has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Platalea minor* is listed as VU under criteria D1.

D1. Population size estimated to number fewer than 1,000 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Farmland, Wetland, Sandy area/Gravelly area, Lower river basin, Estuary, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond, Sandy beach/Pebble beach, Sea Cliff/Rocky beach/Reef, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland) 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Sea surface, Reef, Sandy bottom/Gravelly bottom, Muddy bottom
Threat types:	Lake development, River development, Coastal development, Wetland development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Pesticide/Toxic chemical pollution, Disease, Collision with man-made structures
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	山本裕（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Yutaka Yamamoto

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　サギ科 Ardeidae

ズグロミゾゴイ

***Gorsachius melanolophus melanolophus* (Raffles, 1822)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
ズグロミゾゴイの繁殖がよく見られる牛舎の近くや河畔林ではハシブトガラスが多数生息しており、巣内の雛や卵の捕食が生じていると考えられる。また、石垣島では多数のノネコが生息しており、これも捕食者となっていると考えられる。さらに、石垣島、黒島、小浜島、宮古島などでは、外来種のインドクジャクやコウライキジが生息しており、本種と食物資源を巡る競争が生じている可能性がある。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

ズグロミゾゴイは、国内では先島諸島のみに留鳥として生息している。森林内で単独営巣し、主にミミズやサワガニ、陸産貝類、昆虫などの小動物を地上で採食する。低山域の常緑広葉樹林、河畔林などで繁殖し、草原や牧場などの開放地に出現することもある。最近は以前に比べて増加しているハシブトガラスが、巣の捕食者となっていると考えられる。また、外来種のインドクジャクやコウライキジが食物をめぐる競争者となっている可能性がある。

基礎情報

【形態】

全長約 50 cm、翼長約 27 cm。体の上面は赤褐色で、腹側はクリーム色に黒色の縦斑が入る。頭頂部が黒く、飾り羽がある。若鳥では、全体に白黒の小班が生じる。他のサギ類に比べて、嘴が短い。近縁のミゾゴイでは、頭部が黒くなく、飾り羽もない。またズグロミゾゴイには初列風切羽と小翼羽、大雨覆の先端に明瞭な白斑があるが、ミゾゴイでは白斑部が比較的小さくあまり目立たない。

【生活史】

基本的に留鳥で、集団営巣はせず、森林内で単独で営巣する。3 月頃から繁殖に入り、繁殖期の初期には、日没後と夜明け前の数時間に、樹上で頻繁に鳴く声が聞かれる。営巣から巣立ちまでは約 2 ヶ月間を要し、一腹卵数は 3-5 個である。台湾では 6 月中旬に雛を巣立たせたつがいが、その後すぐに 2 度目の繁殖に入った例がある。繁殖期の夜間によく鳴くため夜行性とされることもあるが、繁殖地での採食や雛への給餌は基本的に日中に行う。主に地上で採食し、ミミズやサワガニ、陸産貝類、地上性無脊椎動物、トカゲなど、土壌動物や地上徘徊性小動物を主要な食物とする。林内の沢沿い等で常緑広葉樹の横枝上に営巣することが多い。

【生息環境】

平地から低地の河畔林、常緑広葉樹林などで繁殖する。主に森林内で生活しているが、農耕地や草地なども採食地として利用しており、特に牛舎の周辺など、食物となるミミズ等が多く発生する場所では、開けた場所でも観察される。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，田地・畑地 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，市街緑地
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（3）都市地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

インド、スリランカなど南アジアから、中国南部、東南アジアまでの地域に生息する。国内では、沖縄県の先島諸島に留鳥として生息している。沖縄島、徳島県、利尻島、伊豆諸島御蔵島、トカラ列島宝島において、迷行個体が記録されている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

過去の文献では国内での本種の分布は、石垣島、西表島、黒島の三島とされていたことがあったが、これは本種が目立たないため記録が少なかったためと考えられ、最近では宮古島から与那国島の範囲の多くの島で生息が確認されている。宮古島では 2010 年に本種と考えられる営巣例が報告されている。また 2022 年には波照間島での営巣が確認されている。2003 年、2004 年の繁殖期には、この他に来間島、多良間島、竹富島、小浜島、与那

国島において本種の夜間の鳴き声が確認されており、繁殖している可能性がある。ただし、これらのうち多くの島では森林の面積が狭いため、繁殖個体数はごく少数と推定される。このため各島で独立して集団を維持しているとは考えづらく、他島からの移入が頻繁に生じている可能性がある。

【生息地の現況】

石垣島および西表島以外の八重山諸島の島では、島の面積が狭く、また牧場やサトウキビ畑などが広がっており、営巣に適した広葉樹林は少ない。石垣島では河川の周囲に残された河畔林においても繁殖している。国内の主要な生息地は、比較的森林面積が広い石垣島および西表島と考えられる。

【個体数の現況】

本種の個体数の推移はこれまでに調べられておらず、増減は不明である。鳴き声を利用した調査では、石垣島の森林ではつがい間距離が約 300 m、西表島では約 210 m とされている。ただし、これらは比較的高密度な地域におけるものと考えられる。他の島では農耕地や居住地が広がっており森林面積が限定されているため、生息個体数は多くないと考えられる。

存続を脅かす要因

八重山諸島では以前に比べてハシブトガラスが増えており、本種の卵が捕食されていると考えられる。先島諸島には多数のノネコが生息しており、これが成鳥や若鳥の捕食者となっていると考えられる。石垣島や黒島、小浜島、宮古島などでは、外来種のインドクジャクやコウライキジが生息しており、食物資源を巡る競争が生じている可能性がある。また、本種の生息地は居住地や農耕地と接しているため、交通事故も生じている。

要因の区分：	（過去）	交通事故，捕食（外来種による），捕食（在来種による），競争/競合（外来種による）
	（現在）	交通事故，捕食（外来種による），捕食（在来種による），競争/競合（外来種による）

特記事項

台湾では、成鳥羽になっていない若い個体が繁殖に参加している例が複数見られている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ズグロミゾゴイ	*Gorsachius melanolophus*	VU
第４次 2019：	ズグロミゾゴイ	*Gorsachius melanolophus*	VU
第４次 2018：	ズグロミゾゴイ	*Gorsachius melanolophus*	VU
第４次 2017：	ズグロミゾゴイ	*Gorsachius melanolophus*	VU

第４次 2015：	ズグロミゾゴイ	*Gorsachius melanolophus*	VU
第４次：	ズグロミゾゴイ	*Gorsachius melanolophus*	VU
第３次：	ズグロミゾゴイ	*Gorsachius melanolophus*	VU
第２次：	ズグロミゾゴイ	*Gorsachius melanolophus*	NT
第１次：	ズグロミゾゴイ	*Gorsachius melanolophus melanolophus*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 姉崎悟・本名百竹，2024．トカラ列島宝島に出現したズグロミゾゴイ *Gorsachius melanolophus*．日本鳥学会誌，73: 103-106.
- Brazil, M., 1991. The Birds of Japan. Christphar Helm, London. 466pp.
- Chang, C. C., 2000. Malayan Night Heron *Gorsachius melanolophus* breeding in immature plumage. Forktail, 16: 167-168.
- Hancock, J. and H. Elliott, 1978. The herons of the world. Harper and Row, London.
- Kawakami, K. and M. Fujita, 2005. The distribution of the Malayan Night Heron *Gorsachius melanolophus* in the Yaeyama and Miyako Islands, southern Japan. Ornithological Science, 4: 73-79.
- Kawakami, K., M. Fujita, M. Hasegawa and H. Makihara, 2011. Dietary characteristics of the Malayan Night Heron (*Gorsachius melanolophus*) in the Yaeyama Islands, southern Japan. Chinese Birds, 2: 87-93.
- 小海途銀次郎・水田拓，2011．宮古島におけるミゾゴイ属鳥類の初営巣記録．Bird Research，7: S5-S8.
- 小杉和樹・田牧和広・佐藤雅彦，2005．利尻島における鳥類の新分布および稀少種の記録(3)．利尻研究，(24): 5-9.
- 根本久史，2020．伊豆諸島御蔵島におけるズグロミゾゴイの関東地方初記録．Strix，36: 53-57.
- Sawada, A., 2023. A breeding record of Malayan Night Heron *Gorsachius melanolophus* on Hateruma Island. Ornithological Science, 22: 169-174.
- 嵩原建二・宮城国太郎・高良淳司・渡久地豊・村田尚史・奥間邑明・小高信彦・新垣裕治，2021．名護市内及び沖縄島における希少な鳥類の観察記録及び希少な繁殖記録等について-2019 年春季から 2020 年夏季まで-．名桜大学紀要，26: 89-101.
- 沈瑞琛・陳立楨，1996．冠麻鷺棲息分布及繁殖生物學之初探．台湾省立博物館年刊，39: 183-199.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gorsachius melanolophus melanolophus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gorsachius melanolophus melanolophus* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Urban green area
Threat types:	Vehicle collision, Predation (by alien species), Predation (by native species), Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　サギ科 Ardeidae

ゴイサギ

***Nycticorax nycticorax nycticorax* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2				
基準 A:　VU	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

全国鳥類繁殖分布調査における 1990 年代（1997-2002 年）の現地調査 1947 地点のうちの確認地点数は 236 地点であった。

【近年の状況】

全国鳥類繁殖分布調査における 2010 年代（2016-2021 年）の現地調査 1947 地点のうちの確認地点数は 93 地点であった。

ただし、アンケートによる情報を含む記録メッシュ数では 250 メッシュから 180 メッシュと減少率が低く、夜行性のゴイサギにおいては現地調査では記録できないことも多いと考えられることから、メッシュ数の変化をふまえて 50%以上ではなく、30%以上を選択した。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

留鳥。主に本州以南で、単独又は複数種から成るコロニーで繁殖する。河川、池、水田等の浅い水辺で魚類、ザリガニ、カエル等の小動物を食べ、コロニー内でネズミ等の小型哺乳類やサギ類のヒナを食べる場合もある。近年、目撃数の減少傾向が顕著となっている。要因はわかっていないが、アオサギが新規形成した混合コロニーにおいてゴイサギが必ずしも主要な構成種とならない例が見受けられている。主に夜行性で、ゴイサギ単独のコロニーは発見しにくいといった目撃しにくさが減少傾向の報告につながっている可能性も排除できず、集団繁殖性サギ類の中でも特に注意深く個体数をモニタリングしていく必要がある。

基礎情報

【形態】

全長約 57.5 cm、翼開長 110 cm、体重 400～800 g。雌雄同色。成鳥は頭頂から肩、背にかけて青緑色を帯びた深い紺色、翼上面と尾は灰色、顔から腹は白又は明るい灰色。後頭部に白い冠羽が 2 本前後伸びる。嘴は黒色で、非繁殖期には基部がやや黄色。目先の裸出部は灰黄緑色で、求愛期には紺色。虹彩は赤色。脚は黄色で、求愛期には赤みがかった濃い桃色。幼鳥は全体に褐色で、翼上面は褐色に汚白色の斑が、腹は汚白色に褐色の縦斑が入る。嘴は暗色で基部は黄色。目先の裸出部と脚は黄緑色。虹彩は黄色。2 年かけて成鳥羽になる。

【生活史】

日本では留鳥又は夏鳥。集団繁殖性で、ゴイサギのみ、又は他のサギ類やカワウと混合でコロニーを形成する。繁殖期は 4～7 月頃。一夫一妻で繁殖し、雌雄とも抱卵・育雛する。巣は皿状で、小枝を組み合わせ、樹林や竹林の中ほどの高さにかける。一腹卵数は 3～6 卵。卵は淡青緑色で無斑、楕円形（長径 43.5～55 mm、短径 32.8～37 mm）。産卵は 1～2 日に 1 個のペースで、初卵から抱卵し、抱卵期間は 21～27 日。ヒナは非同時孵化し、巣上での育雛期間は約 28 日で、巣立ち後もしばらくはコロニー内で親から給餌を受ける。繁殖後は分散し、集団ねぐらをとる。基本的に夜行性だが、繁殖期は日中も活動する。

【生息環境】

海岸から内陸の水辺。河川、湖沼、水田、干潟等の浅い水辺で、ドジョウやフナ等の魚類を中心に、カエル、ザリガニ、昆虫等を食べる。コロニー内でネズミ等の小型哺乳類や、同種又は他種のサギ類のヒナを食べる場合もある。流れの速い河川はあまり利用しないが、養魚池や公園、庭等の小さな池も利用する。じっと待ち構えたり、ゆっくり歩きながら採餌したりと、採食環境や餌内容への柔軟性は高い。繁殖期は平地の樹林や竹林にコロニーを形成して繁殖する。非繁殖期にはヨシ原や、水辺の茂った樹林や竹林の中で小群や大群で集団ねぐらをとる。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，市街緑地，河川中流域，河川下流域，河口域，ワンド，農業用水路，小河川，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯】干潟
国土地域区分：	（3）都市地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

日本でみられるのは基亜種 *Nycticorax nycticorax nycticorax* で、ヨーロッパ、アフリカ、中東、アジア、南北アメリカに広く分布する。日本では本州から九州に分布し、東北では主に夏鳥、それ以南では留鳥。海岸から内陸の河川や水田等の水辺に沿って分布している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1990 年代以降は北海道や南西諸島でも繁殖や越冬が確認され、国内の分布域を拡大したことがうかがえる。

【生息地の現況】

住宅地付近に形成されたコロニーでの人との軋轢（鳴き声や糞による迷惑被害）や、河川敷に形成されたコロニー周辺での河川改修によって、営巣林が伐採される場合が見受けられる。

【個体数の現況】

かつては各地のサギ類コロニーの優占種だったとみられ、1980 年の全国アンケート調査では、37 県・79 ヶ所のコロニーで確認された集団繁殖性サギ類のうちゴイサギは約 50%（約 23,800 個体）を占めて最も個体数が多かった。しかし 1991～92 年の全国調査では、現地調査が行われた国内主要 3 地域のコロニーにおいてゴイサギの占める割合は 24.5%だった。その後は全国規模の個体数調査は行われていないため、全国の個体数現況は明らかではない。ただし、狩猟捕獲数は 1925 年に 45,633 個体だったが、1990 年は狩猟登録者数が倍増したにもかかわらず 7,364 個体で、個体数が減少している可能性が指摘された。茨城県では、2002～2012 年のサギ類コロニーにおけるゴイサギの推定個体数は年による変動が大きく、2,000～7,000 個体で推移し増減の傾向は認められなかった。全国鳥類繁殖分布調査では 1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた全国 1,947 地点のうち、ゴイサギの記録は 236 地点から 93 地点に減少した。

存続を脅かす要因

ゴイサギの採食に適した浅瀬のある小河川等の水辺環境は、河川改修や湖沼の護岸化を受けて悪化している例もあるが、自然再生等で良好な状態に維持・創出されている例もある。ゴイサギは都市部や山間部の小さな水辺も利用し、ほかに水田や養魚池、干潟でも採食するため、比較的柔軟に採食場所を選んでいると思われる。その中で個体数が減少している要因は十分わかっていないが、小型魚類を食べる水鳥ではコサギ、コアジサシ、カイツブリ等でも減少傾向が知られ、小型魚類が大型の外来魚等の増加により減少している可能性が指摘されている。ほかに、集団繁殖性サギ類に共通の要因として、住宅地近隣に立地したコロニーでの人との軋轢による追払いや営巣林の伐採に伴う繁殖成功の低下が懸念される。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，その他（人との軋轢（営巣林伐採や追払い）），不明

特記事項

ゴイサギはゴイサギのみのコロニーを形成する場合も少なくなく、留鳥のシラサギ類

（ダイサギ、コサギ）よりも比較的単独性がありコロニー場所選択を先導する能力にも富むと考えられ、以前はサギ類混合コロニーの形成を先導する役割を多くの場合でゴイサギが担っていたと予想されている。近年、アオサギが全国的に増加して以降は、繁殖開始が最も早く単独性が強いアオサギがコロニー形成を先導するようになり、アオサギの好むスギ等の高木のある樹林がコロニー場所として選ばれるケースが増えてきている。茨城県内では、ゴイサギはアオサギが形成したコロニーに加わる場合も多い一方、ゴイサギのみの小規模コロニーを付近の竹林に別途形成した場合も確認されている。ゴイサギのみのコロニーは、シラサギ類やアオサギとの混合コロニーと比べて、隠蔽色で日中の出入りが少なく容易に目に付かない。アオサギを含むコロニーではゴイサギの構成比は必ずしも大きくなくなり、結果としてゴイサギが調査者に目撃されにくくなってきているという近年の変化も、全国鳥類繁殖分布調査でのゴイサギ記録地点数の顕著な減少の背景の一因となっている可能性が排除できない。サギ類各種の個体数はコロニーの動態とあわせて注意深くモニタリングしていくことが望ましいが、中でもゴイサギは他種よりも観察しにくく、個体数評価が難しいことを理解しておくことが重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】準絶滅危惧,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【群馬県】準絶滅危惧(NT),【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（区部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（北多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（南多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（西多摩）】準絶滅危惧(NT),【静岡県】要注目種(N-Ⅲ 部会注目種),【愛知県】準絶滅危惧(NT)(繁殖),準絶滅危惧(NT)(越冬),【三重県】情報不足(DD),【滋賀県】希少種,【奈良県】希少種,【鳥取県】準絶滅危惧(NT),【広島県】情報不足(DD),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長崎県】準絶滅危惧(NT),【宮崎県】準絶滅危惧(NT-g)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 林吉彦・田中正彦・津村英男・藤巻裕蔵，2010．北海道南部におけるゴイサギの繁殖．山階鳥類学雑誌，41(2): 204-206.
- 環境庁自然保護局・（財）日本野鳥の会，1994．第 4 回自然環境保全基礎調査 動植物調査報告書（鳥類の集団繁殖地及び集団ねぐら）．環境庁，東京.
- 清棲幸保，1978．日本鳥類大図鑑 III．講談社，東京.
- Kushlan, J. A. and J. A. Hancock, 2004. The Herons. Oxford University Press, New York.
- Mashiko, M. and Y. Toquenaga, 2013. Increasing variation in population size and species composition ratio in mixed-species heron colonies in Japan. Forktail, 29: 71-77.
- Mashiko, M. and Y. Toquenaga, 2014. Grey heron (*Ardea cinerea*) expansion promotes the persistence of mixed-species heron colonies. Waterbirds, 37: 362-370.
- 成末雅恵，1992．埼玉県におけるサギ類の集団繁殖地の変遷．Strix，11: 189-209.
- 日本野鳥の会研究部，1981．アンケート法によるサギ類のコロニーと塒に関する調査．財団法人日本野鳥の会，東京.
- 嶋崎太郎，2004．オホーツク地方におけるゴイサギの越冬初記録．Strix，22: 197-199.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Nycticorax nycticorax nycticorax has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Nycticorax nycticorax nycticorax* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Urban green area, Middle river basin, Lower river basin, Estuary, Inlet, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Intertidal mudflat
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Other, Unknown

Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	益子美由希（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構）
Author:	Miyuki Mashiko

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　サギ科 Ardeidae

ササゴイ

***Butorides striata amurensis* (Schrenck, 1860)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

過去から比較できる情報としては、全国鳥類繁殖分布調査のデータがあり、1997-2002 年に行なわれた調査の記録メッシュ数（88）、現地調査での記録コース数（45）、記録個体数（102）がある。そのうちここでは主に同一コースで実施されているために単純比較が可能で集団繁殖地等での多数個体の記録の有無などの影響も受けにくい、現地調査での記録コース数で評価した。

【近年の状況】

全国鳥類繁殖分布調査の 2016-2021 年に行なわれた調査では、記録メッシュ数（77）、現地調査での記録コース数（20）、記録個体数（35）のいずれも 1997-2002 年の結果より減少していた。記録コース数の減少率は 56%だったが、調査間隔は 10 年より長いこと、メッシュ数でみると、記録コース数と比較して減少率は低い（12.5%）こと、都市公園等で、新たに分布し、増加している場所もあることなどから、総合的に判断して、30%以上の減少とした。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

ササゴイは日本にはおもに夏鳥として渡来し、本州以南に分布する。河川などで小魚を捕食し、社寺林等の緑地で繁殖する。1970 年代以降継続した減少が認められている。

基礎情報

【形態】

全長 520 mm、翼長 194-214 mm、尾長 75-78.5 mm、嘴峰長 63-69 mm、ふ蹠長 50-56 mm、体重 135-300 g。

雌雄ほぼ同色。額から頭頂部、後頭は青みがかった濃い灰色で、冠羽が長く伸びる。興奮したときなどに冠羽を立てることがある。腹部全体は薄い灰色で、喉から下腹部にかけて縦縞がある。雨覆と風切の色は青みがかった濃い灰色だが、羽に白い縁があり、笹の葉のように見えることから「ササゴイ」の名があるとされる。虹彩は暗い黄色。嘴は黒色。足の色はオリーブ色または黄色だが、繁殖期の初期に、脚や、目先の皮膚が露出した部分が赤くなる個体がいる。幼鳥は全体的に黒っぽく、胸には縦斑がはいり、雨覆や風切の先端に白斑が入るなど、ゴイサギの幼鳥に似るが、ササゴイは体がより小さく、虹彩が黄色く、翼に出る白斑は羽縁全体に細くのび、笹模様に近い。

【生活史】

日本には主に夏鳥として渡来し、一部越冬するものもおり、薩南諸島以南では冬鳥。一夫一妻で単独で繁殖するものから、2～5 巣程度の小規模なコロニーをつくるもの、さらには 10 巣をこえるコロニーを形成するものまで様々である。西日本ではクスノキなどの常緑樹、東日本では落葉樹や針葉樹などさまざまな樹種に営巣する。営巣はほぼ樹上であるが、テレビアンテナを使用した例もある。小枝を組み合わせて雑な皿型の巣をつくる。一腹卵数は 3～6 個。綺麗な淡青色の長径 38～43 mm、短径 29～31 mm、重さは平均 20.13 g の卵である。抱卵期間は 21～23 日。抱卵は雌雄ともに行う。孵化後約 2 週間でヒナは枝移りをはじめる。およそ 20 日～30 日で親鳥と同程度の大きさにまで成長し、巣立ちする。繁殖失敗の主な原因は、ハシブトガラスなどによる卵やヒナの捕食等の撹乱であり、失敗後は直ちに繁殖をやり直す。主に小魚やアメリカザリガニなどの甲殻類を食べる。鳥の羽根や葉っぱ、木の実、小枝、パンくずなどを水面に浮かべ、その影を、餌だと勘違いしてやってきた魚をすばやく捕えるルアーフィッシングを行うのが有名である。

【生息環境】

河川で観察されることが多いが、公園の池や堀、水田、湖沼畔、アシ原などの流れのゆるいところや止水域でも見られる。営巣地は街路樹や公園緑地、社寺林、屋敷林、河畔林、海岸林など小～中規模の緑地や樹林で、河川や農業用水路など、安定した水場が近くにある場所が選ばれることが多い。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】森林，田地・畑地，市街緑地，河川中流域，河川下流域，小河川，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

おもに本州以南に夏鳥として渡来し、一部で越冬する。薩南諸島以南では冬鳥。北海道は道南で記録が増えてきている。国外はウラジオストク周辺などロシアの一部地域にも渡来する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域については大きな変化はないが、その中で個体数は減少傾向にあると考えられている。全国鳥類繁殖分布調査の結果では、記録メッシュ数が 1970 年代の 92 メッシュ、1990 年代の 88 メッシュ、2010 年代の 77 メッシュと徐々に減少しており、同じ場所で調査できた調査コースでも 1990 年代の 45 コースから 2010 年代の 20 コースに減少している。また全国鳥類越冬分布調査の結果でも、記録されたメッシュ数が 31 メッシュから 13 メッシュに減少していた。

【生息地の現況】

主な生息地である河川の中流部は河川改修等により変化している場所がある。営巣地である社寺林や街路樹は成長して良好な場所もあるが、剪定などで営巣できなくなっている場所もある。

【個体数の現況】

全国鳥類繁殖分布調査の比較可能な調査コースで記録された個体数は 1990 年代の 102 羽から 2010 年代の 35 羽に減少している。

存続を脅かす要因

ササゴイと同様の場所で採食するコサギやゴイサギなども減少しており、河川改修等による採食環境の悪化、大型のサギ類の増加に伴う競争、コクチバスなどの外来種による食物の減少が考えられる。営巣場所では、糞害などによる追い払い、街路樹の剪定などでの営巣場所の減少がある。またカラス類の増加による捕食圧の増加もある。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，土地造成，競争/競合（外来種による），競争/競合（在来種による）
	（現在）	湖沼開発，河川開発，土地造成，捕食（在来種による），競争/競合（外来種による），競争/競合（在来種による）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—

第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】留意,【秋田県】準絶滅危惧(NT),【山形県】準絶滅危惧(NT),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類,【群馬県】準絶滅危惧(NT),【埼玉県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁),【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（西多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】準絶滅危惧(NT),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【長野県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【静岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【三重県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【滋賀県】希少種,【京都府】絶滅危惧種,【兵庫県】C ランク,【奈良県】情報不足種,【和歌山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【島根県】情報不足(DD),【岡山県】準絶滅危惧,【広島県】準絶滅危惧(NT),【山口県】準絶滅危惧(NT),【徳島県】準絶滅危惧(NT),【香川県】準絶滅危惧(NT),【愛媛県】準絶滅危惧(NT),【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【佐賀県】絶滅危惧Ⅰ類種,【長崎県】準絶滅危惧(NT),【熊本県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【宮崎県】準絶滅危惧(NT-g)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 三上かつら，2014．生態図鑑 ササゴイ．バードリサーチニュース，11(7): 4-5.
- 植田睦之・奴賀俊光・山﨑優佑，2023．全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年．pp. 170．特定非営利活動法人 バードリサーチ・公益財団法人 日本野鳥の会，東京.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Butorides striata amurensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Butorides striata amurensis* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following: 2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Farmland, Urban green area, Middle river basin, Lower river basin, Small river, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Lake development, River development, Land development, Predation (by native species), Competition (with alien species), Competition (with native species)
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	植田睦之（バードリサーチ）
Author:	Mutsuyuki Ueta

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　サギ科 Ardeidae

コサギ

***Egretta garzetta garzetta* (Linnaeus, 1766)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2 ＋付加的事情				
基準 A:　EN	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。
【比較年】
10 年（世代時間不明）
【過去の状況】
全国鳥類繁殖分布調査における 1990 年代（1997-2002 年）の現地調査 1947 地点のうちの確認地点数は 239 地点であった。
【近年の状況】
全国鳥類繁殖分布調査における 2010 年代（2016-2021 年）の現地調査 1947 地点のうちの確認地点数は 93 地点であった。

以上のように基準を形式的に適用し、絶滅危惧ⅠB 類（EN）と判定されたが、次の付加的事情を考慮すると、形式的なカテゴリー判定結果は、本種の絶滅のおそれを過大評価していると考えられるため、カテゴリーを 1 段階引き下げる。
【考慮すべき付加的事情の種類】
4) その他
【具体的理由】
コサギは、全国鳥類繁殖分布調査における確認地点数が大きく減少したほか、長期データのある茨城県・埼玉県等で個体数の減少が報告されており、減少傾向は明らかと考えられる。一方で、現在も全国に広く分布し、一定の個体数は認められている。また、東京都では、全国鳥類繁殖分布調査の調査地ではなかった都心部での記録の増加が報告されており、小河川や公園の池等に少数の個体が散在して生息している状況が伺えるため、全国でも、同全国調査で把握されなかった小河川等で一定の個体数が生息している可能性が考えられる。そのため、カテゴリーを 1 つ調整した。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

留鳥。主に本州以南で、複数種から成るコロニーで繁殖する。河川、河口干潟、水田等の浅い水辺で小型魚類、ザリガニ等の小動物を食べる。1990 年代頃まで各地で多くの個体数が認められたが、その後減少しており、餌資源である小型魚類が大型の外来魚の増加に

より減少したことなどが要因と指摘されている。

基礎情報

【形態】

全長約 61 cm、翼長 23～30 cm、翼開長約 98 cm、体重 350～650 g。雌雄とも全身白色。繁殖期には雌雄とも胸や背にレース状の飾り羽が伸びて先端がややカールし、頭部には冠羽が伸びる。嘴は繁殖期・非繁殖期とも黒色。目先の裸出部は黄色で、求愛期には赤みがかった濃い桃色。虹彩は黒色。脚は黒色、指は黄色で求愛期には赤みがかった濃い桃色。足指の黄色の範囲は個体差が大きい。

【生活史】

日本では主に留鳥。集団繁殖性で、多くの場合は他のサギ類と混合でコロニーを形成する。繁殖期は 4～7 月頃。一夫一妻で繁殖し、雌雄とも抱卵・育雛する。巣は皿状で、小枝を組み合わせ、樹林や竹林の中ほどの高さにかける。一腹卵数は 3～7 卵。卵は淡青緑色で無斑、楕円形（長径 35.5～48.8 mm、短径 34.5～35.5 mm）。産卵は 1～2 日に 1 個のペースで、初卵から抱卵し、抱卵期間は 22～24 日。ヒナは非同時孵化し、巣上での育雛期間は約 28 日で、巣立ち後もしばらくはコロニー内で親から給餌を受ける。繁殖後は分散し、集団ねぐらをとる。

【生息環境】

海岸から内陸の水辺。河川、湖沼、水田、干潟等の浅い水辺で、ドジョウ等の魚類、カエル、ザリガニ、昆虫等を食べる。素早く、又はゆっくり歩きながら採餌する他に、じっと待ち構えたり、足を小刻みに動かして獲物を追い出して捕らえたりする。流れのある河川も利用する。繁殖期は平地の樹林や竹林に多くは他の集団繁殖性サギ類と混合でコロニーを形成して繁殖し、夜間もコロニーでねぐらをとる場合が多い。非繁殖期には河川や湖沼の岸の樹上や杭上、湿地等で集団ねぐらをとる。山間部の水辺でも見られる一方で、都市域の小河川や公園等の小さな池も利用する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，市街緑地，河川中流域，河川下流域，河口域，ワンド，農業用水路，小河川，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯】干潟
国土地域区分：	（3）都市地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

日本でみられるのは基亜種 *Egretta garzetta garzetta* で、ヨーロッパ、アフリカ、中東、アジアに分布する。日本では主に本州以南で留鳥として生息するが、年間を通じて同じ地域に留まる個体と、日本国内で地域的な移動をする個体やフィリピンなど南方へ渡って越冬する個体がいる。海岸から内陸の河川や水田等の水辺に沿って分布している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

国内では 1970 年代以降、山間部の盆地や北日本での個体数が増え、分布が拡大傾向であった。その後は国内の分布に大きな変化はない。ただし、全国各地で個体数が多かった以前の状態と比較すると、現在では個体数の比較的多い場所は偏在するようになってきている。同じ地域の中でも、東京都では大河川での記録が減少した一方、都心部の小河川や公園の池等では記録が増加し、小規模な水辺に少数の個体が散在して生息する分布傾向に変わってきている可能性が考えられる。

【生息地の現況】

住宅地付近に形成されたコロニーでの人との軋轢（鳴き声や糞による迷惑被害）や、河川敷に形成されたコロニー周辺での河川改修によって、営巣林が伐採される場合が見受けられる。

【個体数の現況】

かつてはシラサギ類の中で最も普通に見られる種で、個体数は 1970 年代以降に一時増加傾向にあったとされるが、1990～2000 年代からは減少傾向に転じている。茨城県のサギ類コロニーにおけるコサギの推定個体数は 2000 年代前半では 2,000 個体前後だったが、次第に減少し、2011 年には 1,000 個体を割った。埼玉県では、河川や水田での採餌個体数、コロニーでの個体数とも 1970～2015 年にかけて減少した。栃木県、宮城県でも採食環境での個体数の減少傾向が報告されている。全国鳥類繁殖分布調査では 1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた全国 1,947 地点のうち、コサギの記録は 239 地点から 93 地点に減り、全国での減少傾向が伺われる。

存続を脅かす要因

コサギの採食に適した浅瀬のある小河川等の水辺環境は、河川改修や湖沼の護岸化を受けて悪化している例もあるが、自然再生等で良好な状態に維持・創出されている例もある。コサギは都市部や山間部の小さな水辺も利用し、ほかに水田や干潟でも採食するため、比較的柔軟に採食場所を選んでいると思われる。その中で個体数が減少している要因としては、コサギの好む小型魚類が大型の外来魚等の増加により減少している可能性や、オオタカの個体数回復による捕食圧の増加が考えられている。ほかに、集団繁殖性サギ類に共通の要因として、住宅地近隣に立地したコロニーでの人との軋轢による追払いや営巣林の伐採に伴う繁殖成功の低下が懸念される。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，捕食（在来種による），その他（人との軋轢（営巣林伐採や追払い））

特記事項

集団繁殖性サギ類ではアオサギ、及びダイサギの個体数が全国的に増加している。それに伴う大きな変化として、繁殖開始が最も早く単独性が強いアオサギがコロニー形成を先

導するようになり、アオサギの好むスギ等の高木のある樹林がコロニー場所として選ばれるケースが増えてきている。コサギは多くの場合は他種との混合コロニーで繁殖しており、コサギの個体数変化には他種も関わっている可能性がある。例えば茨城県内では、2000年代前半まではほとんどのコロニーで営巣林に竹を含んでおり、どのコロニーでも一定割合でコサギが存在したが、アオサギの増加が顕著になってきた 2005 年頃から営巣林が樹木のみのコロニーが増え、コサギを構成種にほとんど含まないコロニーも散見されるようになった。コロニーにおけるサギ類の種間関係や、営巣木への選好性と繁殖成功との関係は十分に明らかになっていないが、コロニーの動態とあわせて、サギ類各種の個体数を注意深くモニタリングしていくことが望ましい。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】留意,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【福島県】準絶滅危惧(NT),【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク),【群馬県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【埼玉県】準絶滅危惧 2 型(NT2)(繁),【千葉県】重要保護生物(B),【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（区部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（北多摩）】準絶滅危惧(NT),【東京都（南多摩）】準絶滅危惧(NT),【東京都（西多摩）】準絶滅危惧(NT),【東京都（伊豆諸島）】準絶滅危惧(NT),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【長野県】準絶滅危惧(NT),【滋賀県】要注目種,【鳥取県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長崎県】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 井上良和，1996．コサギ．樋口広芳・森岡弘之・山岸哲（編），日本動物大百科 3 鳥類 I，pp. 45-47．平凡社，東京．
- 環境庁自然保護局・（財）日本野鳥の会，1994．第 4 回自然環境保全基礎調査 動植物調査報告書（鳥類の集団繁殖地及び集団ねぐら）．環境庁，東京．
- 河地辰彦，2004．栃木県におけるコサギとダイサギの生息状況の変化について．*Accipiter*，10: 27-36．
- 清棲幸保，1978．日本鳥類大図鑑 III．講談社，東京．
- Kushlan, J. A. and J. A. Hancock, 2004. The Herons. Oxford University Press, New York.
- Mashiko, M. and Y. Toquenaga, 2013. Increasing variation in population size and species composition ratio in mixed-species heron colonies in Japan. Forktail, 29: 71-77.
- Mashiko, M. and Y. Toquenaga, 2014. Grey heron (*Ardea cinerea*) expansion promotes the persistence of mixed-species heron colonies. Waterbirds, 37: 362-370.
- 成末雅恵，1992．埼玉県におけるサギ類の集団繁殖地の変遷．Strix，11: 189-209．
- 日本野鳥の会研究部，1981．アンケート法によるサギ類のコロニーと塒に関する調査．財団法人日本野鳥の会，東京．
- 嶋田哲郎・進東健太郎・高橋清孝・Aaron Bowman，2005．オオクチバス急増にともなう魚類群集の変化が水鳥群集に与える影響．Strix，23: 39-50．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京．
- 植田睦之・佐藤望，2021．東京都鳥類繁殖分布調査報告 2016-2021．pp. 34, 171．特定非営利法人バードリサーチ，東京．
- 内田博，2017．埼玉県東松山市周辺でのコサギ *Egretta garzetta* の減少．日本鳥学会誌，66: 111-122．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Egretta garzetta garzetta has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Egretta garzetta garzetta* was formally listed as EN under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥50% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

However, after taking additional factors into consideration, the risk of extinction for this species was considered to be overestimated. Therefore, the formal listing was revised to VU.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Urban green area, Middle river basin, Lower river basin, Estuary, Inlet, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Salt

	marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Intertidal mudflat
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Predation (by native species), Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	益子美由希（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構）
Author:	Miyuki Mashiko

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae

オオワシ

***Haliaeetus pelagicus* (Pallas, 1811)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D1				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D1．成熟個体数が 1,000 未満と推定される。 【推定根拠】 ここ数年の一斉調査では、多い年に 1,200-1,900 羽で推移している。このうち、成鳥は約 70%である。ここから成熟個体（成鳥）を算出すると 840-1,330 羽（中央値 1,085 羽）と推定される。誤差も考慮し、予防原則の視点にたつと、成熟個体の個体数は 1,000 羽未満である可能性もある。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

アジア極東部に分布する大型のワシ。日本には冬鳥として飛来する。ロシアのオホーツク海周辺地域で繁殖し、北海道本島と北方四島が主要な越冬地になっている。魚類や水禽類、海棲哺乳類を主な餌とするが、越冬地の餌不足により漁業活動から供給される魚等の人為的餌資源にも依存している。最近の我が国の越冬数は 1,200-1,900 羽で推移している。越冬地では鉛中毒や各種事故による死亡、繁殖地では繁殖成績の低下が危惧されている。

協力者:　中川元（知床自然アカデミー）

基礎情報

【形態】

大型のワシ類で全長 85～94 cm。翼開長 220～250 cm。体重 4,900～9,000 g。メスはオスよりも大きい。成鳥は体が黒褐色で尾羽と雨覆羽、腿、額が白い。嘴は大きく鮮黄色。脚と虹彩も黄色。雌雄同色。若鳥は全身褐色から黒褐色。尾羽はやや白く先端や外縁に褐色斑がある。尾羽の褐色斑は年齢が進むにしたがって減り、4 年目にはほぼ純白になる。嘴と脚は淡い黄色。

【生活史】

日本には冬鳥として飛来する。ロシア極東の繁殖地では、4～5 月上旬に産卵し、一腹産卵数は通常 2 卵（1～3 卵）である。ダケカンバやヤマナラシなどの大木に営巣するが、岩棚や独立岩の上にも巣を作る。雛が孵化するのはアムール川下流域では 5 月末～6 月で、8 月には幼鳥が巣立つ。マガダン州やアムール川下流域、サハリン北東部で夏を過ごした個体の多くが、10 月～11 月初旬に宗谷海峡を経て北海道へ渡る。初冬期は、北海道内のサケの遡上河川や北方四島で過ごす。1～3 月の厳冬期には知床半島海岸、宗谷海岸、風蓮湖や厚岸湖など北海道東北部の海岸や湖沼に集まるほか、北海道南西部の河川や、本州北部、中部、南西部、対馬にも飛来する。河川に遡上したサケの死体を餌とするほか、魚類や海鳥類、海棲哺乳類の漂着死体なども食べる。厳冬期には湖沼の氷下待網漁から供給される未利用魚を求めて集まるほか、漁港に落ちる魚、観光船の餌付けなど、人為的な餌資源にも依存している。道東の越冬地では海岸や湖沼周辺の針広混交林などをねぐらにする。3 月に繁殖地への渡りを始めるが、若鳥は 4 月下旬まで残るものがあり、知床半島ではまれに夏にも観察される。

【生息環境】

国内では、主に海岸や湖沼の周辺、河川の中・下流域のほか、海氷の分布する沿岸海域に飛来するが、エゾシカの死骸がある山林にも飛来する。主に水辺で採餌し、海岸の森林や湖沼周辺の森林を休み場やねぐらとして利用する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】河川中流域，ため池・池沼，湖・ダム湖 【陸域_平地部 海岸部】河川中流域，河川下流域，河口域，潟・湖・ダム湖，海崖・岩浜・岩礁（磯），潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯】砂底・礫底，泥底
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

わが国では、北海道本島、北方四島、本州北部、中部、南西部に冬鳥として飛来する。繁殖地はロシア極東のベーリング海沿岸部、カムチャツカ州、マガダン州海岸部、ハバロフスク地方の海岸部およびアムール川下流域、サハリン北東部で、冬期は日本のほかにロシア沿海地方、カムチャツカ半島南部、千島列島などでも越冬し、朝鮮半島に南下する個体もいる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

冬鳥として、主に北海道及び本州中部以北に分布する。また、国後島など北方四島で越冬する個体は渡り時に北海道本島を通過する。

【生息地の現況】

主な越冬地である河川流域や湖沼、海岸部では魚類、水禽類などの自然餌資源が不足しており、厳冬期には人為的餌資源を求めて、漁場周辺や観光利用のための餌付け、漁港や水産加工場周辺に集まっている。内陸部ではエゾシカの死体にも集まる。人の活動域周辺に分布する個体が多く、エゾシカの自動車事故や列車事故死体に集まり二次的に事故に遭遇する例も増えている。

【個体数の現況】

世界的に成熟個体は 3,600-4,670 羽と推定されている。北海道本島と本州に飛来する越冬数は 2000 年代初めには 2,000 羽を越えていたが以降漸減傾向にあり、2008 年以降は 1,500 羽前後（1,200-1,900 羽）と推定されている。ここ数年の国内の一斉調査では、1,200-1,900 羽で推移しており、このうち、成鳥は約 70%である。これらのことから推定すると、成熟個体は 840-1,330 個体と試算される。また、環境省のホームページには、「北海道東部を中心に約 1,400～1,700 羽が各地に分散して越冬」とされており、ここから成熟個体を試算すると、980-1,190 羽となる。

存続を脅かす要因

河川開発、海岸開発等による自然餌資源の不足と、人為的餌資源への依存。森林伐採によるねぐら林や休み場の減少。狩猟などによって放置されたエゾシカ死骸に由来する鉛中毒が発生している。エゾシカの轢死体に誘引されての車両や列車との衝突事故、感電事故、風力発電施設への衝突事故等が発生している。ロシアの繁殖地では森林伐採、海岸開発、ヒグマによる雛の捕食がある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，海岸開発，交通事故，捕食（在来種による），人工構造物への衝突，その他（鉛中毒）
	（現在）	森林伐採，河川開発，海岸開発，交通事故，捕食（在来種による），人工構造物への衝突，その他（鉛中毒）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオワシ	*Haliaeetus pelagicus*	VU
第４次 2019：	オオワシ	*Haliaeetus pelagicus*	VU
第４次 2018：	オオワシ	*Haliaeetus pelagicus*	VU
第４次 2017：	オオワシ	*Haliaeetus pelagicus*	VU
第４次 2015：	オオワシ	*Haliaeetus pelagicus pelagicus*	VU
第４次：	オオワシ	*Haliaeetus pelagicus pelagicus*	VU
第３次：	オオワシ	*Haliaeetus pelagicus pelagicus*	VU
第２次：	オオワシ	*Haliaeetus pelagicus pelagicus*	VU
第１次：	オオワシ	*Haliaeetus pelagicus pelagicus*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu)，【青森県】重要希少野生生物(B ランク)，【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類，【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【秋田県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類，【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク)，【群馬県】情報不足(DD)，【千葉県】重要保護生物(B)，【新潟県】絶滅危惧Ⅰ類(EN)，【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類，【山梨県】情報不足(DD)，【長野県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【静岡県】要注目種(N-Ⅱ分布上注目種等)，【滋賀県】絶滅危機増大種，【奈良県】注目種，【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【島根県】情報不足(DD)，【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- BirdLife International, 2001. Threatend Birds of Asia: The BirdLife International Red Data Book Part A. BirdLife International, Cambridge, 1516pp.
- Hoyo, J., A. Elliot and J. Sargatal (eds.), 1994. Handbook of the Birds of the World. Vol. 2. New World Vultures to Guineafowl. Lynx Editions, Barcelona.
- BirdLife International. 2021. *Haliaeetus pelagicus*. *The IUCN Red List of Threatened Species 2021*: e.T22695147A204871862. https://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK.2021-3.RLTS.T22695147A204871862.en. Accessed on 8 August 2025.
- 環境省，https://www.env.go.jp/nature/kisho/hogozoushoku/owashi.html，（2023 年 9 月 21 日確認）
- Lobkov, E. G. and I. A. Neifel'dt, 1986（藤巻裕蔵訳，1994）．オオワシの分布と生態．藤巻裕蔵（編），極東の鳥類-11，pp. 1-32．極東鳥類研究会，帯広．

- マステロフ，V.，2013．サハリン北部のオオワシ個体群の現状と開発地域における保全の展望．桜井泰憲・大島慶一郎・大泰司紀之（編著），オホーツクの生態系とその保全，pp. 299-308．北海道大学出版会，札幌．
- 中川元，2009．オオワシ．バードリサーチニュース，6 (2): 2-3．
- 中川元，2010．オオワシの現状と課題．斜里町立知床博物館（編），知床の自然保護，pp. 62-73．北海道新聞社，札幌．
- 中川元，2013．日露共同オオワシ・オジロワシ調査の成果と北海道の越冬状況．桜井泰憲・大島慶一郎・大泰司紀之（編著），オホーツクの生態系とその保全，pp. 281-289．北海道大学出版会，札幌．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．
- 齊藤慶輔，2013．北海道におけるオオワシへの脅威と保護の取り組み．桜井泰憲・大島慶一郎・大泰司紀之（編著），オホーツクの生態系とその保全，pp. 309-318．北海道大学出版会，札幌．
- Ueta, M., F. Sato, H. Nakagawa and N. Mita, 2000. Migration routes and differences of migration schedule between adult and young Steller's Sea Eagles *Haliaeetus pelagicus*. Ibis, 142: 35-39.
- ウテキナ, I.・E. ポタポフ・M. マクグレディ・D. リムリンガー，2013．オホーツク北部におけるオオワシの過去 20 年間のモニタリング結果．桜井泰憲・大島慶一郎・大泰司紀之（編著），オホーツクの生態系とその保全，pp. 291-298．北海道大学出版会，札幌．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Haliaeetus pelagicus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Haliaeetus pelagicus* is listed as VU under criteria D1.

D1. Population size estimated to number fewer than 1,000 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Middle river basin, Reservoir/Pond, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Middle river basin, Lower river basin, Estuary, Lagoon/Lake/Dam, Sea Cliff/Rocky beach/Reef, Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Sandy bottom/Gravelly bottom, Muddy bottom
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Coastal development, Vehicle collision, Predation (by native species), Collision with man-made structures, Other
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	玉田克巳（地方独立行政法人北海道立総合研究機構）
Author:	Katsumi Tamada

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae

オジロワシ

***Haliaeetus albicilla albicilla* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D1				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D1．成熟個体数が 1,000 未満と推定される。 【推定根拠】 国内の営巣数が約 170 か所とすると、繁殖している成熟個体数（営巣数×2 羽）は 340 羽と試算できる。また越冬数の 700-1,100 羽のうち、成鳥が約 70%とすると、成熟個体は 490-770 羽と計算される。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

国内では、北海道で繁殖する大型の海ワシである。青森県で繁殖した記録がある。おもに水域周辺の大径木上で営巣する。魚類や水鳥を主食とし、冬期は漁業で排出される未利用魚に多数が集まる。ロシア極東で繁殖する集団の一部が冬鳥として日本に渡来する。主要な越冬地は北海道である。北海道の営巣つがい数は増加している。本種の保護上の問題として生息環境の悪化のほか、風力発電施設への衝突事故、鉛中毒、交通事故などによる死亡などが挙げられる。

協力者:　中川元（知床自然アカデミー）

基礎情報

【形態】

体長は、オスで 76～90 cm、メスで 86～98 cm、翼開長は、オスで 199～225 cm、メスで 202～228 cm で、メスがオスよりやや大きい。成鳥は全身が灰褐色で頭部から胸にかけてクリーム褐色。尾羽は緩やかな楔形で白い。嘴、脚、虹彩は黄色。雌雄同色。幼鳥は全身暗褐色で尾羽は白地に褐色の斑や縁どりがある。嘴や光彩は黒っぽい。

【生活史】

繁殖地は日本のほかに、ユーラシア大陸の北部や東部、イギリス、アイスランド、グリーンランドなどに広がっており、日本やロシア極東地域、中国東部、ペルシャ湾などで越冬する。北海道では繁殖つがいの多くが周年営巣地周辺に留まると考えられている。ミズナラ、ダケカンバ、シラカンバ、ヤチダモなどの落葉広葉樹とトドマツ、アカエゾマツなどの常緑針葉樹に営巣する。巣は樹高 16～25 m の高木への営巣例が多く、巣は、地上から 15～16 m の高さに営巣する例が多い。巣の大きさ（長径）は 110 cm、厚さは 90 cm を超えるものが多い。樹上に造られた巣は条件が良ければ補修されながら何年も使われる。抱卵開始時期は 3 月上旬から 5 月上旬で、3 月下旬からがもっとも多い。孵化は 4 月上旬から 6 月中旬、巣立ちは 6 月下旬から 8 月下旬である。産卵数、雛数は 1～2 個（羽）が多く、育雛は雌雄で行う。巣に搬入される餌動物は魚類や鳥類が多く、ウグイ類、コイ、ヤツメウナギ類、ニジマス、シロザケなど、カモ類、カモメ類のほかにアオサギやカラス類も観察されている。幼鳥は巣立ち後も 2 ヶ月ちかく、親鳥のテリトリー内で給餌を受ける。性成熟には 5～6 年かかり、平均寿命はヨーロッパでは 20 年以上とされている。

【生息環境】

繁殖つがいは、営巣木となる大径木のある森林と、餌場となる水域がセットになった環境に生息する。営巣地は、ほとんどが標高 100 m 以下の平野部である。営巣地の林相は、ほとんどが落葉広葉樹林や針広混交林である。非繁殖期は、秋～初冬にはサケマスの遡上する河川周辺に飛来し、厳冬期は開氷面のある河川や湖沼などを利用するほか、未利用魚が得られる漁港周辺や氷下待網漁がおこなわれる結氷湖、エゾシカの死骸のある山林、海生哺乳類の漂着死骸のある海岸線に飛来する。廃棄物処理場で見られることもある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】河川中流域，ため池・池沼，湖・ダム湖 【陸域_平地部 海岸部】河川中流域，河川下流域，河口域，潟・湖・ダム湖，海崖・岩浜・岩礁（磯），潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯】砂底・礫底，泥底
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

繁殖地は旧北区北部とグリーンランド南西部に局所的に分布する。冬期にはアフリカ北部やインド北西部などに南下するものもいる。極東ではロシアのカムチャツカ、サハリン、沿海地方、千島列島、日本の北海道などで繁殖する。越冬期にはロシアで越夏したと考えられる多数の個体が北海道に渡来するほか、本州北部や中部、対馬などにも飛来する。稀

に九州や琉球列島などに飛来することがある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道における繁殖は 1954 年に網走地域で初確認され、それ以前の営巣状況は不明である。現在では北海道のほぼ全域に繁殖地があるが、南部地域では少ない。

【生息地の現況】

近年では、道路や人間の活動域に隣接する場所で営巣するつがいが増加しているほか、高圧鉄塔で営巣する個体も確認されるようになってきている。本種の好適な営巣環境に道路や人工建造物が建設されていることによるほか、人間に対する警戒心の薄れも考えられる。また、自然環境下の採餌場や餌生物が減少する一方で、とくに越冬期には、多くの個体が漁業活動から排出される未利用魚を餌としているほか、観光船による餌付けもある。

【個体数の現況】

北海道の繁殖確認数は 1998 年では 56 つがい、2008 年では約 150 つがいである。確認数のため正確な増加率は推定できないが、少なくとも 1990 年以降では増加傾向にあり、2016 年には青森県東部で繁殖し、雛 2 羽の巣立ちが確認された。近年、北海道では繁殖成功率に低下傾向がみられ、今後の動向を注視する必要がある。越冬個体数については北日本一円における 2 月の一斉調査により、1985 年以降、緩い増加傾向が示されている。 環境省のホームページなどによると、国内の越冬数（北海道と本州北部）は 700-1,100 羽、営巣地は約 170 か所が確認されているとされている。しかし、営巣数はこれより多いという未確認情報もある。精度の高い繁殖期の生息数や営巣数の調査が必要である。

存続を脅かす要因

森林伐採による営巣林や塒林の減少。道路建設や土地造成による営巣環境の悪化。湖沼開発、河川開発、海岸開発による営巣環境、狩り場、餌資源の減少。エゾシカの轢死体に誘引されての車両や列車との衝突事故。営巣地周辺における各種工事やカメラマンなどの巣への接近による繁殖撹乱。狩猟などによって放置されたエゾシカ死骸に由来する鉛中毒。感電事故。風力発電用施設への衝突事故の急増。人為的な餌への依存と過度の集中。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湖沼開発，河川開発，海岸開発，土地造成，交通インフラ建設，交通事故，その他（鉛中毒、カメラマンなどの巣への接近による繁殖撹乱、人為的な餌への依存、過度の集中）
	（現在）	森林伐採，湖沼開発，河川開発，海岸開発，土地造成，交通インフラ建設，交通事故，人工構造物への衝突，その他（鉛中毒、カメラマンなどの巣への接近による繁殖撹乱、人為的な餌への依存、過度の集中）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オジロワシ	*Haliaeetus albicilla albicilla*	VU
第４次 2019：	オジロワシ	*Haliaeetus albicilla albicilla*	VU
第４次 2018：	オジロワシ	*Haliaeetus albicilla albicilla*	VU
第４次 2017：	オジロワシ	*Haliaeetus albicilla albicilla*	VU
第４次 2015：	オジロワシ	*Haliaeetus albicilla albicilla*	VU
第４次：	オジロワシ	*Haliaeetus albicilla albicilla*	VU
第３次：	オジロワシ	*Haliaeetus albicilla albicilla*	EN
第２次：	オジロワシ	*Haliaeetus albicilla albicilla*	EN
第１次：	オジロワシ	*Haliaeetus albicilla*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu)，【青森県】最重要希少野生生物(A ランク)，【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類，【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【秋田県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【茨城県】絶滅危惧ⅠA 類，【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク)，【群馬県】情報不足(DD)，【千葉県】重要保護生物(B)，【新潟県】絶滅危惧Ⅰ類(EN)，【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類，【山梨県】情報不足(DD)，【長野県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【静岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【滋賀県】絶滅危機増大種，【京都府】絶滅危惧種，【兵庫県】B ランク，【奈良県】注目種，【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【岡山県】情報不足，【長崎県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 芳賀良一，1955．北海道網走におけるオジロワシの蕃殖の一例．鳥，13: 39-43．
- 環境省，https://www.env.go.jp/nature/kisho/hogozoushoku/ojirowashi.html
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男，1998．図鑑日本のワシタカ類（第二版）．文一総合出版，東京．632pp.
- 中川元，2013．日露共同オオワシ・オジロワシ調査の成果と北海道の越冬状況．桜井泰憲ほか（編），オホーツクの生態系とその保全，pp. 281-289．北海道大学出版会，札幌．

- 応用生態工学会札幌北海道猛禽類研究会，2021．北海道の猛禽類 2020 年版．応用生態工学会札幌北海道猛禽類研究会，札幌．
- Shiraki, S., 2002. Post-fledging movements and foraging habitats of immature White-tailed Sea Eagles in the Nemuro Region, Hokkaido, Japan. Journal of Raptor Research, 36: 220-224.
- 白木彩子，1999．オジロワシ．斜里町立知床博物館（編），知床の鳥類，pp. 126-177．北海道新聞社，札幌．
- 白木彩子，2010．オジロワシ，オオワシ．野生動物保護の事典編集委員会（編著），野生動物保護の事典，pp. 446-471．朝倉書店，東京．
- 白木彩子，2012．北海道におけるオジロワシ *Haliaeetus albicilla* の風力発電用風車への衝突事故の現状．保全生態学研究，17: 85-96．
- 白木彩子，2013．16 章 風力発電用風車への衝突事故とその回避．樋口広芳（編），日本のタカ学 生態と保全，pp. 300-323．東京大学出版，東京．
- 白木彩子，2013．風力発電施設による鳥類への影響評価 北海道におけるオジロワシの風車衝突事故の現状をふまえて．北海道自然保護協会会誌 北海道の自然，51: 19-30．北海道自然保護協会，札幌．
- 白木彩子，2013．北海道におけるオジロワシの繁殖の現状と保全上の課題．桜井泰憲ほか（編），オホーツクの生態系とその保全，pp. 319-324．北海道大学出版会，札幌．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Haliaeetus albicilla albicilla has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Haliaeetus albicilla albicilla* is listed as VU under criteria D1.

D1. Population size estimated to number fewer than 1,000 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Middle river basin, Reservoir/Pond, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Middle river basin, Lower river basin, Estuary, Lagoon/Lake/Dam, Sea Cliff/Rocky beach/Reef, Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Sandy bottom/Gravelly bottom, Muddy bottom
Threat types:	Logging and wood harvesting, Lake development, River development, Coastal development, Land development, Transportation infrastructure construction, Vehicle collision, Collision with man-made structures, Other
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	玉田克巳（地方独立行政法人北海道立総合研究機構）
Author:	Katsumi Tamada

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae

サシバ

***Butastur indicus* (Gmelin, 1788)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

沖縄県宮古島市は、日本本土で繁殖したサシバのかなりの割合が通過すると一般に考えられており、その中でも伊良部島はその飛来数割合が高いとされている（久貝 1997）。この島での飛来数調査の結果は、日本本土に生息するサシバの個体数を間接的に知る手掛かりとなる。伊良部島で毎年実施されているサシバの秋の渡りの飛来数カウント調査において、2010 年から 2014 年の各年のサシバの飛来数の平均は 14422 羽だった。

【近年の状況】

伊良部島で実施されているサシバの秋の渡りの飛来数カウント調査において、2020 年から 2024 年の各年のサシバの飛来数の平均は 9455.2 羽だった。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

日本、朝鮮半島、中国東部で繁殖し、南西諸島、中国南部、東南アジアで越冬する。日本では東北地方南部から近畿地方にかけてが主要な生息域である。生息数はまだ少なくないが、関東南部では生息数が激減し、自然環境保全基礎調査の鳥類繁殖分布調査の比較でも生息確認メッシュ数に減少傾向があり、渡り中継地での記録数に継続的な減少傾向が見られる。主要な生息環境である里地環境に悪化傾向があり、今後も改善が難しいと考えられる。

基礎情報

【形態】

全長約 50 cm、翼開長は 102 cm から 115 cm で、ハシボソガラス大の中型の猛禽類。頬は灰色で、薄い眉班があり、喉は白く中央に黒い縦線がある。背、翼の上面は褐色で、下面は胸は濃褐色で腹は白く、褐色の横斑がある。尾には褐色の横班がある。

【生活史】

日本では九州以北から青森県にかけて繁殖し、3 月中旬から 4 月上旬にかけて、繁殖地に飛来し、造巣を開始する。4 月中旬から 5 月上旬に 2 から 4 卵（多くが 3 卵）を産卵し、抱卵期間は約 1 月、巣内の雛は 2 から 3 羽、育雛期間は約 5 週間で 6 月下旬から 7 月上旬に巣立つ。9 月中旬から 10 月下旬が国内での渡り期間で、ピークは本州から九州が 10 月上旬、南西諸島では 10 月中旬である。日本では奄美大島以南の南西諸島、海外では台湾、フィリピン、インドネシア等で越冬する。ヘビやトカゲなどの爬虫類やカエルなどの両生類、バッタやセミ、蛾の幼虫などの昆虫類を主な食物とするが、ネズミ類など小哺乳類や小型鳥類も捕食する。

【生息環境】

平地から山地の森林と草地が混在する環境に生息する。特に、水田と森林が混在する谷津田では生息密度が高い。水田や草地に隣接した樹林に営巣し、草地や湿地、樹冠の葉面のカエルやトカゲなどの両生・爬虫類や、ネズミなどの小哺乳類、バッタなどの昆虫類を捕食する。森林地域に生息する個体は、林内においても捕食を行う。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，ため池・池沼
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

日本、朝鮮半島、中国東部やロシアのウスリー地域で繁殖し、南西諸島、中国南部、東南アジアで越冬する。日本では東北から九州にかけて繁殖し、奄美諸島や沖縄、八重山諸島で越冬するものがいる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本州・四国・九州の広い範囲で、平地から山地まで繁殖するが、生息数の多い地域は近畿・東海・中部・関東・東北の丘陵地である。関東地域は、北関東の茨城県や栃木県では生息密度の高い地域もあるが、埼玉県や千葉県では生息数の減少が続き、東京都や神奈川県ではほとんど営巣確認ができないほど生息数が少ない。第 2 回、第 5 回、第 6 回自然環境保全基礎調査の鳥類繁殖分布調査（1997–2002）と全国鳥類繁殖分布調査報告（2016–2021）の比較でも生息確認メッシュ数に減少傾向がある。

【生息地の現況】

生息数の多い丘陵地では、土地改良事業による乾田化、減反や後継者不足、米価の下落による水田の耕作放棄、宅地造成や道路開発等、近年では太陽光発電敷設による水田や樹林の消失が起こっている。また、道路脇や水田の畔の除草剤使用により、繁殖期間中の草地環境の消失も起こっている。これらは、採食場所の消失や食物資源となる両生・爬虫類や昆虫類の減少を引き起こしている可能性が高い。特に、大都市圏に近い関東南部や近畿地域では、この傾向が大きい。そのほかには、シカやイノシシからの農作物の食害を防ぐために設置される電気柵がサシバの狩り行動に悪影響を与えている報告がある。

【個体数の現況】

関東南部では各地で生息数が激減し、他の広い範囲でも減少傾向にあるとされる。総生息数を把握する調査はないが、沖縄県宮古島で宮古野鳥の会が中心となって 1973 年から実施している秋の飛来数調査が、日本国内に生息するサシバの生息数の指標となりうる。それによると、1980 年代前半までは約 3 万 8 千羽が確認されていたが、1980 年代後半から減少し、2000 年代には 2 万羽以下の確認となることが多い。また、1977 年～1980 年に大阪府河内長野市近郊で小島幸彦氏によって行われたサシバの生息調査を受けて行われた「サシバプロジェクト in 大阪」の 2000 年から 2015 年までの調査で、36 ペアが確認されているが、小島氏のデータと比較しても激減していることが明らかとなっている。

存続を脅かす要因

開発や農業形態の変化による主要な生息環境である水田と森林が複合する里地里山環境の悪化や減少、水田の圃場整備、農薬使用による食物となる両生・爬虫類の減少。メガソーラー開発による繁殖地の減少、渡り中継地における風力発電用風車タービンによる事故（バードストライク）。越冬地である南西諸島及び東南アジアの環境悪化。温暖化に伴う昆虫類の減少。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，圃場整備，草地開発，ゴルフ場，土地造成，交通インフラ建設，農薬汚染/化学物質汚染，捕食（在来種による），管理放棄，競争/競合（在来種による）
	（現在）	森林伐採，圃場整備，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，農薬汚染/化学物質汚染，捕食（在来種による），管理放棄，競争/競合（在来種による），発電施設建設，人工構造物への衝突，気候変動

特記事項

越冬地の東南アジアでの生息状況についても、現状の把握が必要である。東北地方では、生息数の大きな減少は見られない地域が多いが、今後の水田の耕作放棄などの影響が考えられる。また、ネイチャーポジティブ、里山イニシアティブなど里地環境の保全に関する取組の推進は、サシバの保護・保全にも有効と考えられる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	サシバ	*Butastur indicus*	VU
第４次 2019:	サシバ	*Butastur indicus*	VU
第４次 2018:	サシバ	*Butastur indicus*	VU
第４次 2017:	サシバ	*Butastur indicus*	VU
第４次 2015:	サシバ	*Butastur indicus*	VU
第４次:	サシバ	*Butastur indicus*	VU
第３次:	サシバ	*Butastur indicus*	VU
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】重要希少野生生物(B ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【秋田県】準絶滅危惧(NT),【山形県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク),【群馬県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【埼玉県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】準絶滅危惧(NT),【福井県】県域準絶滅危惧,【山梨県】準絶滅危惧(NT),【長野県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【岐阜県】準絶滅危惧,【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁殖),準絶滅危惧(NT)(通過),地域個体群(LP)(通過)(サシバの渡り群),【三重県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【滋賀県】希少種,【京都府】絶滅危惧種,【大阪府】絶滅危惧Ⅰ類(CR＋EN),【兵庫県】B ランク,【奈良県】絶滅危惧種,【和歌山県】準絶滅危惧(NT),【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種,【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【熊本県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【宮崎県】準絶滅危惧(NT-g),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類,【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【三重県】

参考文献

- 東淳樹，2004．サシバとその生息地保全に関する地域生態学的研究．我孫子市鳥の博物館調査研究報告，12: 1-119.
- 東淳樹，2016．日本のサシバの生息状況と生息地の環境条件．地域自然史と保全，38(2): 83-88.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2004．第 6 回自然環境保全基礎調査 種の多様性調査 鳥類繁殖分布調査報告書．環境省自然環境局生物多様性センター，343pp.
- 環境省自然環境局野生生物課，2012．猛禽類保護の進め方（改訂版）－特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて－．環境省自然環境局，東京，86pp.
- 環境省自然環境局野生生物課，2013．サシバの保護の進め方．環境省自然環境局，東京.
- 久貝勝盛，1997．伊良部の鳥．平良市総合博物館紀要，4: 35-56.
- 松江正彦ほか，2004．希少猛禽類の効率的な調査手法に関する研究．国土技術政策総合研究資料 国土技術政策総合研究所，つくば市，207: 155pp.
- 沖縄県，2024．令和 6 年度サシバ飛来数調査結果.
  https://www.pref.okinawa.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/004/861/2024sashibakekka.pdf
  （2025 年 7 月 9 日確認）
- 大西敏一，2020．大阪のサシバの現状．ネイチャーおおさかスタディファイル，No.6: 1-6.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Butastur indicus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Butastur indicus* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Reservoir/Pond
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation, Grassland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Pesticide/Toxic chemical pollution, Predation (by native species), Abandonment of management, Competition (with native species), Power plant construction, Collision with man-made structures, Climate change
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Mie】.





執筆者:	東淳樹（岩手大学）
Author:	Atsuki Azuma

公表年月：2026 年 3 月

ブッポウソウ目 Coraciiformes　カワセミ科 Alcedinidae　　日本固有

ヤマセミ

***Megaceryle lugubris lugubris* (Temminck, 1834)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。
【比較年】
10 年（世代時間不明）
【過去の状況】
全国鳥類繁殖分布調査の調査結果から、
1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた調査地点のうち、1990 年代にヤマセミを記録できた調査コースの数（北海道以外）は 72 コースだった。
【近年の状況】
全国鳥類繁殖分布調査の調査結果から、
1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた調査地点のうち、2010 年代にヤマセミを記録できた調査コースの数（北海道以外）は 39 コースだった。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

ヤマセミ（亜種ヤマセミ）は日本で繁殖するカワセミ科の中では最も大きく、本州から九州に生息する。おもに河川の源流域から中流域、山地の湖沼に生息するが、地域によっては海岸地帯にも生息している。主要な食物は体長 20 cm くらいまでの魚類。営巣に適した土崖や食物となる魚類の減少などにより、1970 年代以降、分布が縮小し続けており、繁殖や採食に関わる環境への改善策が求められる。

基礎情報

【形態】

全長 410-430 mm、全嘴峰長 63-70 mm、最大翼長 179-196 mm、ふ蹠長 12-15 mm、尾長 106-124.5 mm。体重 240-305 g。雌雄ともに頭、また体と翼の上面は白色と黒～灰色のまだら模様。目先には白いスポットが、目の下には狭い三日月状に白い部分がある。額と冠羽は長く直立しており、冠羽のまだら模様の羽の中には、真っ白な短い羽が部分的に混ざる。顎と腹は白い。尾羽は黒地に白い横線が 6～8 本入る。雌雄ともに顎線と胸部に黒い斑点を持ち、オスはこの部分に黄褐色または赤褐色を帯びるが、メスは帯びない。また、オスの下雨覆い（翼の内側）は白いが、メスの下雨覆いは黄褐色または赤褐色である。幼鳥は、換羽や嘴がやや短く、首の横や胸、脇腹、尾の下などに淡い赤褐色がみられる。

【生活史】

年間を通してつがいごとになわばりをもって生活し、非繁殖期の雌雄は、なわばりの中で別々に行動しているとされる。なわばりの中には複数のとまり場があり、採食や休息など、行動によって使い分けられている。繁殖期は 3－8 月。繁殖期には、土質の崖に横穴を掘って営巣する。巣穴の大きさは縦 10-22 cm、横 9-21 cm 程度。河川に面した崖だけではなく、河川から 1 km 以上離れた崖も利用し、高さが 2 m もしくは 3 m 以上で、 70～80 度傾斜した土崖を好む傾向がある。巣穴の入口から産室までは約 60～180 cm で、産室の大きさは、幅が 30～40 cm、高さ 14～20 cm という記録がある。一腹産卵数は 4-7 卵。卵の大きさは約 4.0×3.2 cm 程度で、色は白く無斑。抱卵期間は約 20～24 日、育雛期間は 32～36 日。抱卵、抱雛ともに雌雄で行う。 幼鳥は巣立ち後約 1 か月で親の行動圏から分散する。魚食性で、約 20 cm までの、アユ、ウグイ、オイカワ、イワナ、ヤマメ、カジカ、アカザなど様々な魚類を利用する。

【生息環境】

主に山地の渓流や湖沼に生息するが、河川中流域や海岸部にも生息する。本種の生息には、好適な採食場所となる環境、すなわち河川ではある程度の深さや流れのある、連続した淵や瀬、また採食時に止まり場となる河畔林などが必要であり、営巣可能では露出した広範囲の土崖が重要な条件となる。市街地での繁殖事例もあるが、基本的に警戒心が強く、人の接近を好まない。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】湿地・湿原・細流，河川源流域，河川上流域，河川中流域，ため池・池沼，湖・ダム湖 【陸域_平地部 海岸部】河川中流域，河川下流域，河口域，ワンド，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，海崖・岩浜・岩礁（磯），汽水域，潟・汽水湖
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

本州から九州まで、留鳥もしくは漂鳥として生息する。北海道に分布するヤマセミは亜種が異なる（亜種エゾヤマセミ）。なお、種ヤマセミは日本のほかにカシミール、ビルマ、インドシナ半島、中国南部、朝鮮半島等にも生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道に分布する亜種エゾヤマセミを除けば、ヤマセミは本州から九州まで分布するが、1970 年代以降、その減少が著しい。2025 年時点で、39 都道府県で、準絶滅危惧以上のカテゴリに分類されている。

【生息地の現況】

分布が減少していることから好適な生息地も減少していると考えられる。

【個体数の現況】

全国を対象にした繁殖鳥類分布調査から、1990 年代と 2010 年代でほぼ同じ調査地点を調査した際の出現地点数は北海移動を除いて 72 地点から 39 地点に減少したことが明らかとなっている。出現分布域が縮小していることから、個体数も減少している可能性は高い。島根県では、1990 年代後半と、2000 年代初期に同じ地域で巣穴の個数を比較し、数年の間にも減少したことが報告されている。また、長野県でも 2000 年代初期と 2010 年代後半で繁殖数が減少したことが報告されているほか、静岡県、愛知県、福井県、和歌山県など、各都道府県のレッドデータブックで繁殖数の激減が指摘されている。

存続を脅かす要因

河川改修や山間地の崖の崩落防止工事などによる営巣に適した崖の消失や、河畔林等の伐採によるとまり場の減少、釣り人による攪乱、またカワウやサギ類などの大型魚食性鳥類の分布の拡大による食物資源の競争や外来魚による在来魚の捕食等での食物資源の減少が示唆されている。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，海岸開発
	（現在）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，遷移進行・植生変化/自然遷移，その他（食物の減少（外来魚の増加による適した食物となる魚類の減少））

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—

第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】希少野生生物(C ランク),【岩手県】留意,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【秋田県】準絶滅危惧(NT),【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類,【栃木県】準絶滅危惧(C ランク),【群馬県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【埼玉県】準絶滅危惧 2 型(NT2)(繁),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【神奈川県】希少種(繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【山梨県】準絶滅危惧(NT),【長野県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岐阜県】準絶滅危惧,【静岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【愛知県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁殖),絶滅危惧ⅠA 類(CR)(越冬),【三重県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【滋賀県】絶滅危惧種,【京都府】絶滅危惧種,【大阪府】準絶滅危惧(NT),【兵庫県】A ランク,【奈良県】希少種,【和歌山県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【香川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【愛媛県】準絶滅危惧(NT),【高知県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【佐賀県】絶滅危惧Ⅰ類種,【長崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【大分県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【滋賀県】

参考文献

- 愛知県，2020．レッドデータブックあいち 2020 動物編．愛知県，810pp.
- 福井県，2016．福井県の絶滅のおそれのある野生動植物．福井県.
- 石部久，1997，ヤマセミ.（編）樋口広芳・森岡弘之・山岸哲，日本動物大百科〈第 4 巻〉鳥類 2，pp. 48-50,56．平凡社，東京.
- 神保賢一路，1997．ヤマセミの暮らし．文一総合出版，東京.

- 笠原里恵・加藤和弘，2007．ヤマセミ *Ceryle lugubris* の育雛に釣り人の存在が与える影響．日本鳥学会誌，56: 51-57．
- Kasahara, S. and K. Katoh, 2008. Food-niche differentiation in sympatric species of kingfishers, the Common Kingfisher *Alcedo atthis* and the Greater Pied Kingfisher *Ceryle lugubris*. Ornithological Science, 7 (2): 123-134.
- 笠原里恵，2023．知って楽しいカワセミの暮らし．緑書房，東京．
- 森茂晃・佐藤仁志，2003．斐伊川・神戸川水系におけるヤマセミの営巣状況．ホシザキグリーン財団研究報告，6: 51-58．
- 森茂晃・佐藤仁志，2005．ヤマセミの造巣場所選択について．ホシザキグリーン財団研究報告，8: 247-253．
- 西村昌彦，1979．カワセミとヤマセミの造巣場所選択について．山階鳥類所研究報告，11 (1): 39-48．
- 静岡県，2020．まもりたい静岡県の野生生物 2019 静岡県レッドデータブック＜動物編＞．静岡県．539pp.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．鳥類繁殖分布調査会，府中．176pp.
- 和歌山県，2022．保全上重要なわかやまの自然－和歌山県レッドデータブック－．和歌山県．783pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Megaceryle lugubris lugubris has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Megaceryle lugubris lugubris* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream, River headwater, Upper river basin, Middle river basin, Reservoir/Pond, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】 Middle river basin, Lower river basin, Estuary, Inlet, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Sea Cliff/Rocky beach/Reef, Brackish water, Lagoon/Brackish lake
Threat types:	Lake development, River development, Coastal development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Shiga】.



執筆者:	笠原里恵（信州大学）
Author:	Satoe Kasahara

公表年月：2026 年 3 月

キツツキ目 Piciformes　キツツキ科 Picidae　　日本固有

オーストンオオアカゲラ

***Dendrocopos leucotos owstoni* (Ogawa, 1905)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A3

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A3．今後 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長期間を通じて、30%以上の減少があると予測される。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【近年の状況】

2019 年のオーストンオオアカゲラの繁殖分布情報は、小高ら（2022）により、出現範囲は 860 km²、陸域面積は 659 km²、森林面積は 583 km²であった。このうち、常緑広葉樹林は 401 km²、リュウキュウマツ林は 134 km²、その他森林は 49 km²であった。繁殖分布調査が行われた 2019 年前後は、松枯れ被害による枯死木が大量に発生しており、リュウキュウマツ林は好適な生息地となり、島の森林全域に生息できる状況となったと考えられる。リュウキュウマツ林に限らず、道路沿いや伐採地周辺のリュウキュウマツも枯死し利用可能な状態だったことから、この時期の有効な生息地面積は島の全森林域の 583 km²程度と考えられる。

【今後の状況予測】

リュウキュウマツ林や若齢の二次林においてマツが枯死した後は、短期的に立枯れ木や倒木が増える様子が観察されている。しかし、これらはオーストンオオアカゲラにとって一時的に利用可能な資源と考えられ、今後本種にとって営巣や採餌可能な枯死木は大幅に減ると考えられる。2019 年の時点で奄美大島の全域に繁殖分布域が広がっていた、リュウキュウマツ林や人里近くの松の枯れ木の採餌や営巣利用は、松枯れ被害による一時的なものと考えられる。リュウキュウマツ枯死木の腐朽速度は明らかではないが、枯死後 10 年程度で採餌や営巣に利用できなくなるものと仮定すると、2019 年に有効な生息地とした全森林面積 583 km²のうち、リュウキュウマツ林 134 km²やその他森林 49 km²が不適な生息地になり、約 10 年後の有効な生息地面積は常緑広葉樹林 401 km²の一部になると考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

奄美大島のみに繁殖分布するオオアカゲラの固有亜種で、他の亜種と比較して体が大きく、著しく暗色である。IUCN（国際自然保護連合）のレッドリストでは独立種 *Dendrocopos owstoni* と分類されている。老齢の常緑広葉樹林を主要な生息地とするが、近年、松枯れ被害を受けたリュウキュウマツ林での採餌や営巣が観察されるようになり、人里、海岸付近

での観察事例も多い。松枯れ被害の収束後、分布域や個体数が一時的に減少する可能性がある。繁殖分布域の継続的なモニタリングが必要である。

協力者:　鳥飼久裕

基礎情報

【形態】

全長約 28 cm、翼長 152.5±2.9 mm（n=22）。オオアカゲラの他の亜種と比較して体サイズが大きく、体色が著しく暗色である。メスの頭頂部は黒色で、雄や幼鳥の頭頂部は赤色である。

【生活史】

留鳥。4 月から産卵期に入り、5 月に巣立つ個体が多い。丈夫な嘴で、倒木や立枯れ木、生立木の枯死部などをつつき、中にいるカミキリムシの幼虫などを捕食することが多い。幹や葉の表面にいる節足動物を捕食することもあり、タブノキの実などの植物質の餌を食べることもある。スダジイをはじめとする大径木の幹に自ら巣穴を掘り営巣することが多い。リュウキュウマツの立枯れ木を利用した営巣も観察される。雌雄ともに子育てに参加し、ヒナへの給餌、抱卵を行う。夜間の抱卵は、ほかのキツツキと同様に雄が行う。つがい関係や寿命に関する調査は行われていない。

【生息環境】

奄美大島の内陸部に残された、採餌や営巣に適した枯死木や大径木の多い老齢の常緑広葉樹林が主要な生息地である。主な営巣木はスダジイの大径木であるが、人里近くや海岸沿いの森林では、ウラジロエノキやセンダン、リュウキュウマツの立ち枯れ木などを利用した営巣が観察されている。連続した老齢の広葉樹林を保全することが本種の保全上重要と考えられるが、農耕地に隣接した森林で営巣する個体は、防風林など、孤立した森林も採餌場所として利用することが明らかとなっている。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（7）島嶼地域

【分布域】

奄美大島の全域で観察されるが、内陸部の常緑広葉樹林が主要な生息地であり、2000 年前後までは北東部の笠利半島での観察は少なかった。加計呂麻島での観察事例があるが、継続的な観察や繁殖の記録はない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

奄美大島の全域で観察される。加計呂麻島では、観察記録や食痕の記録はあるが、継続的な観察や繁殖の記録はない。近年、奄美大島内では、海岸付近や観察事例の少なかった笠利半島での観察例が増えている。

【生息地の現況】

奄美大島の老齢の常緑広葉樹林が主要な生息地で、若齢林やリュウキュウマツ林は好適な生息地ではないと考えられる。本土復帰以降の 1960 年代から昭和時代に渡って、大径

木のある老齢の常緑広葉樹林の大面積皆伐が行われた。1990 年代になって伐採面積が減少し、森林の蓄積は回復しつつある。2000 年代に加計呂麻島から奄美大島に広がったとされる松材線虫病（マツノザイセンチュウによる樹木病害）による松枯れ被害が広がり、リュウキュウマツの枯死木が大量に発生した。これらのリュウキュウマツの倒木や立枯れ木が、採餌場所や営巣場所として利用されるようになり、観察の少なかった海岸付近や笠利半島での観察例が増えている。奄美大島全域において、松枯れ被害により、一時的に好適な生息環境が増加した可能性がある。大量に枯死したリュウキュウマツの腐朽が進み、利用可能な枯死木量が減少すると、生息適地が減少し、一時的に分布域が縮小する可能性がある。

【個体数の現況】

海岸付近や笠利半島での観察事例が増え、近年個体数が増加傾向にある可能性がある。個体数増加の要因として伐採面積の減少による森林の蓄積の回復と、2000 年代に広がった松枯れ被害により、リュウキュウマツの枯死木が大量に発生したことで、オーストンオオアカゲラの利用可能な枯死木量が増加したことが考えられる。奄美大島における松枯れ被害は収束傾向にあり、今後、利用可能な枯死木が減少することで、個体数が一時的に減少することが予測される。

存続を脅かす要因

奄美大島のみに繁殖分布し、主要な生息地は奄美大島の老齢の常緑広葉樹林であるため、森林伐採や分布の局限が要因として挙げられる。さらに、ノネコ等の外来種およびハシブトガラス等在来種による捕食も要因として挙げられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（在来種による），分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，捕食（外来種による），捕食（在来種による），分布・産地局限

特記事項

オーストンオオアカゲラは、他のオオアカゲラと明瞭に区別できる形態を持つ日本固有の亜種（独立種とする見解もある）であり、奄美大島のみに唯一の繁殖個体群が分布する。ミトコンドリア DNA を対象とした分子系統解析では他のオオアカゲラ亜種との置換率が低く、中琉球が海により隔離された更新世後期よりも最近の、最終氷期の頃に分化したと推定される。

これまで本種の奄美大島全域における系統だった分布調査は実施されてこなかったが、2019 年に、地域住民の参加による繁殖分布調査が実施された。2000 年代に奄美大島で広がった松枯れ被害により、現在、本種の個体数及び分布域は一時的に増加している可能性がある。奄美群島国立公園の指定、世界自然遺産「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の登録により、奄美大島（712 km^2）では、脊梁部の森林（約 116 km^2）が保護区（遺

産登録地）となった。しかし、奄美大島の世界自然遺産地域の緩衝地帯や周辺管理地域（合計約 596 km²）では、今後も開発が行われ生息環境が悪化する可能性がある。また、松枯れ被害の収束後、個体数や分布域が減少する可能性も指摘されている。島嶼固有の鳥類個体群は絶滅しやすいことから、本種の繁殖分布について慎重にモニタリングする必要がある。

在来種ハシブトガラスによる捕食やイエネコによる捕食の影響について指摘されている。ハシブトガラスによる捕食は、森林の分断化により増加する可能性が指摘されており、イエネコは人による餌付けにより、野生動物への捕食被害が増えるとされている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オーストンオオアカゲラ	*Dendrocopos leucotos owstoni*	VU
第４次 2019：	オーストンオオアカゲラ	*Dendrocopos leucotos owstoni*	VU
第４次 2018：	オーストンオオアカゲラ	*Dendrocopos leucotos owstoni*	VU
第４次 2017：	オーストンオオアカゲラ	*Dendrocopos leucotos owstoni*	VU
第４次 2015：	オーストンオオアカゲラ	*Dendrocopos leucotos owstoni*	VU
第４次：	オーストンオオアカゲラ	*Dendrocopos leucotos owstoni*	VU
第３次：	オーストンオオアカゲラ	*Dendrocopos leucotos owstoni*	VU
第２次：	オーストンオオアカゲラ	*Dendrocopos leucotos owstoni*	EN
第１次：	オーストンオオアカゲラ	*Dendrocopos leucotos owstoni*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 奄美野鳥の会，2009．奄美の野鳥図鑑．奄美野鳥の会，pp. 336．文一総合出版，東京．
- 藤井幹・鳥飼久裕・松永聡美・藤浦芳江・小高信彦，2023．奄美大島に固有のオーストンオオアカゲラの行動圏に関する事例．日本鳥学会 2023 年度大会講演要旨集．
- 石田健・樋口広芳，1989．オーストンオオアカゲラ *Dendrocopos leucotos owstoni* の分類および形態上の特徴．昭和 63 年度環境庁特殊鳥類調査，pp. 125-140．環境庁，東京．
- 石田健・金城道男・村井英紀，1989．オーストンオオアカゲラ *Dendrocopos leucotos owstoni* の分布、生態および保護．昭和 63 年度環境庁特殊鳥類調査，pp. 89-124．環境庁，東京．

- 石田健・植田睦之・金井裕，1994．オーストンオオアカゲラのドラミングに基づく生息密度の推定．平成 5 年度希少野生動植物種等生息状況調査報告書，pp. 69-74．環境庁，東京．
- 石田健・植田睦之，1995．奄美大島におけるオーストンオオアカゲラの生息状況．平成 6 年度希少野生動植物種生息状況調査 奄美大島希少鳥類生息状況調査報告書，pp. 25-40．環境庁，東京．
- 石田健，2014．オーストンオオアカゲラ．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），2014．日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック 2014- 2 鳥類，株式会社ぎょうせい，東京．pp. 208-209．
- 鹿児島県環境林務部自然保護課，2016．改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 -鹿児島県レッドデータブック 2016-．渕上印刷株式会社，鹿児島．401pp.
- 小高信彦・赤井慎太・東竜一郎・石原鈴也・川口秀美・木元侑菜・久高将洋・迫田拓・関伸一・渡久地豊・鳥飼久裕・永井弓子・平城達哉・寛山一郎・水田拓・八木橋勉・山室一樹，2022．沖縄島北部，奄美大島，徳之島における鳥類の繁殖分布と世界自然遺産のゾーニング．九州森林研究，75: 63-70．
- 小高信彦，2015．南の島の希少なキツツキと外来の樹木病虫害－森林の多面的機能に配慮した枯死木管理に向けて－．九州の森と林業，114: 1-3．
- 小高信彦，2016．第 9 章 オーストンオオアカゲラとノグチゲラ・奄美群島と沖縄島における固有鳥類の分類と保全について．水田拓（編著），奄美群島の自然史学 亜熱帯島嶼の生物多様性，pp. 156-173．東海大学出版，神奈川．
- 小高信彦，2019．笠利半島におけるオーストンオオアカゲラの営巣記録．あまみやましぎ，119: 9-14．
- Ogawa, M., 1905. Notes on Mr. Alan Owston's collection of birds from the islands lying between Kiushu and Formosa. Annot. Zool. Jpn. 5: 175-232.
- Pons, J. M., D. Campión, G. Chiozzi, A. Ettwein, J. L. Grangé, Ł. Kajtoch, T. D. Mazgajski and J. Fuchs, 2021. Phylogeography of a widespread Palaearctic forest bird species: The White‐backed Woodpecker (Aves, Picidae). Zoologica Scripta, 50(2): 155-172.
- Sugimura, K., 1988. The role of government subsidies in the population decline of some unique wildlife species on Amami Oshima, Japan. Environmental Conservation, 15: 49-87.
- 植田睦之・山口恭弘，1997．ルリカケス・オーストンオオアカゲラ・カラスバトの環境選好性．Strix，15: 69-74．
- 谷津信一・谷津靖代，2009．加計呂麻島におけるオーストンオオアカゲラ発見顛末．あまみやましぎ，pp. 14-16．奄美野鳥の会．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Dendrocopos leucotos owstoni has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Dendrocopos leucotos owstoni* is listed as VU under criteria A3.

A. Reduction in population size based on any of the following:

3. A population size reduction of ≥30%, projected or suspected to be met within the next 10 years or three generations, whichever is the longer (up to a maximum of 100 years).	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Predation (by alien species), Predation (by native species), Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	小高信彦（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Nobuhiko Kotaka

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ヒヨドリ科 Pycnonotidae　　日本固有

ハシブトヒヨドリ

***Hypsipetes amaurotis magnirostris* Hartert, 1905**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。 【判断理由】 火山列島の 3 島にのみ生息している。硫黄島、北硫黄島、南硫黄島の面積の合計は約 40 km² だが、そのうち北硫黄島の高標高地および硫黄島の裸地や基地など生息不適地を除くと約 20 km²程度と考えられる。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

ハシブトヒヨドリは小笠原諸島の火山列島のみに生息するヒヨドリの固有亜種である。本亜種は北硫黄島、硫黄島、南硫黄島の森林を中心に生息している。北硫黄島では標高 500 m 以下でのみ記録されているが、南硫黄島では海岸部から標高 916 m の山頂付近まで広く分布している。北硫黄島には巣の捕食者となるクマネズミが、硫黄島ではクマネズミに加えてノネコが生息しており、脅威となっている。また硫黄島では過去の開発等により生息に適した森林の面積が減少しており、また活発な火山活動による生息環境の悪化が心配される。南硫黄島は人間による影響はほとんどないものの、地形の急峻さゆえに土砂崩れが頻繁に生じており、生息環境が撹乱されている。

基礎情報

【形態】

全長約 28 cm、翼長 115-135 mm、尾長 110-125 mm、体重 55-75 g。頭から背中が濃灰色で、翼と尾羽は濃褐色、体の下面は白色で褐色の斑が入る。亜種ヒヨドリに比べて羽色の褐色みが強く、くちばしが太い。

【生活史】

生活史に関する情報はほとんどないが、基本的な性質は亜種ヒヨドリと同じと考えられる。一腹卵数は 2 とされているが、記録の蓄積は十分ではない。留鳥で渡りは行わない。雑食性で昆虫やクモなどの節足動物、ウラジロエノキ、センダン、外来種のガジュマルなどの果実等を採食する。

【生息環境】

北硫黄島、南硫黄島では、センダンやアカテツ、コブガシ、チギなどが優占する低木林や亜高木林を中心に生息する。南硫黄島では海岸から山頂部まで島の全域に生息するが、北硫黄島では標高 500 m 以下の低標高地に分布している。硫黄島ではシマグワやガジュマルが優占する二次林を中心に生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島火山列島の北硫黄島、硫黄島、南硫黄島にのみ分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

自然分布地の中での分布の変化は特に生じていない。ただし、北硫黄島では標高 500 m 以下でしか生息が確認されていない。

【生息地の現況】

北硫黄島には戦前は住民がいたものの、戦後は無人化している。この島では、本来、地表面を撹乱する役割を担っていたミズナギドリ科およびウミツバメ科の海鳥の繁殖集団が、外来のクマネズミの影響等で局地絶滅しており、結果として森林の下層植生が発達し、元々あった森林構造が変化している。硫黄島では戦前からの開拓や戦時中の基地の建設等により自然林の大部分が失われ、その後にギンネムやシマグワなどの二次林が拡大している。また硫黄島内では各地から活発に噴気が出ており、島全体が年々隆起して面積が拡大しており、地形が変化し続けている。最近では翁浜南沖で活発な噴火があり、2023 年 10 月末には新島が確認された。島内には捕食者となるノネコが多数生息しており、また巣を捕食するおそれのあるドブネズミやクマネズミも生息している。南硫黄島は原生状態の自然が維持されているものの、地形が急峻なため土砂崩れが起こりやすく、島の各地で小規

模な森林の消失とその後の遷移が頻繁に生じている。

【個体数の現況】

南硫黄島ではセンサスの結果から個体数は島全体で数百個体と考えられている。1982 年に比べて 2007 年には個体群密度が減少し、2017 年には再び回復していたが、これは土砂崩れによる森林の減少とその後の遷移の影響の可能性がある。北硫黄島では標高 500 m 以下の森林に生息しており、標高が低いほど個体群密度が高かった。北硫黄島の低標高地での個体群密度は南硫黄島に比べて低く、面積を考えると、この島でも個体数は数百個体程度の可能性がある。硫黄島では個体数に関する情報はないが、島の全域に広く生息しており、個体数は少なくはないと考えられる。

存続を脅かす要因

北硫黄島および硫黄島においては、樹上利用が発達し潜在的な巣の捕食者となるクマネズミが生息している。硫黄島にはノネコが多数生息しており、捕食者となっていると考えられる。硫黄島では火山活動が活発で島の各地で噴気が出ており、また最近では島の南側沖直近で爆発的な噴火が生じている。このような自然災害により生息地が撹乱されるおそれがある。硫黄島は、自衛隊の施設整備や厚生労働省による遺骨収集にともなって、生息地の環境が撹乱されるおそれがある。南硫黄島は地形が急峻なため土砂崩れによる局地的な森林の消失が頻繁に生じており、生息地の環境が極めて不安定な状況にある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害，分布・産地局限

特記事項

DNA 分析により、ハシブトヒヨドリは小笠原群島の亜種オガサワラヒヨドリとは起源が異なることがわかった。前者は本州等の北方の集団に、後者は八重山諸島の集団に由来しており、両集団の間では遺伝的な交流はないと考えられる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—

第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島)】留意種

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 川上和人・鈴木創・千葉勇人・堀越和夫，2008．南硫黄島の鳥類相．小笠原研究，33: 111-127.
- 川上和人・鈴木創・堀越和夫・川口大朗，2018．2017 年における南硫黄島の鳥類相．小笠原研究，44: 217-250.
- 川上和人・鈴木創・堀越宙，2021．2019 年における北硫黄島の鳥類相．小笠原研究，47: 185-200.
- 清棲幸保，1978．増補改訂版日本鳥類大図鑑 I．講談社.
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並びに硫黄列島産の鳥類に就いて．日本生物地理学会会報，1: 89-186.
- Ohashi, H., H. Kato, M. Murao et al., 2024. Historic deforestation and non-native plant invasions determine vegetation trajectories across an oceanic archipelago. Applied Vegetation Science, 27: e12767.
- Sugita, N., K. Kawakami and I. Nishiumi, 2016. Origin of Japanese White-eyes and Brown-eared Bulbuls on the Volcano Islands. Zool. Science, 33(2): 146-153.
- 時田賢一・渡辺義昭，2001．硫黄島鳥類目録（1999 年 10 月－2000 年 8 月）．我孫子市鳥の博物館調査研究報告，9: 35-45.
- 山階鳥類研究所，2005．平成 16 年度国指定鳥獣保護区指定に関する調査（火山列島北硫黄島・南硫黄島）報告書．山階鳥類研究所，p. 43.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hypsipetes amaurotis magnirostris has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hypsipetes amaurotis magnirostris* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Predation (by alien species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　センニュウ科 Locustellidae

ウチヤマセンニュウ

***Locustella pleskei* Taczanowski, 1890**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D1				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－

D1．個体群が極めて小さく、成熟個体数が 1,000 未満と推定される。

【推定根拠】

三宅島では、噴火前の推定 565 羽から 305 羽へと個体数が減少した。その他、玄界灘 200 羽（Nagata, 1993; 永田，未発表）、日向灘 30 羽（中村，私信）、熊野灘 100 羽（永田ほか，未発表）と推定されている。2000 年代になって、鹿児島湾沖小島・新島（200 羽）、甑島野島（30 羽）、和歌山県鹿島（10 羽）、三重県志摩町和具大島（50 羽）、愛媛県小安居島（60 羽）、九十九島（2 羽）、徳島県立島（2 羽）と新しい繁殖地が発見されている。その他の伊豆諸島の島嶼部にも少数が生息するため、生息個体数は 1000 羽を超える可能性があるが、成熟個体数は 1000 羽に満たないと考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

九州近海、瀬戸内海および紀伊半島周辺の小島と伊豆諸島の三宅島など、十数ヶ所の島嶼で繁殖する。繁殖地は不連続に分布している。伊豆諸島では竹林や二次林に、九州では丈の低い海岸性照葉樹林に高密度で生息している。分布が狭いため生息環境破壊や捕食者の侵入で下位個体群は絶滅しやすく、伊豆諸島では個体数が著しく減少しているが、新しい繁殖地も発見されている。

基礎情報

【形態】

スズメくらいの大きさで尾羽が長く、全長 16.5 cm。体の上面はオリーブ茶褐色、下面は灰白色。尾羽は円尾で、不明瞭な横斑があり先端に白斑あり。嘴は太くて長く全嘴峰長が 18 mm を超え、第 6 初列風切羽が第 9 風切羽より長い。近縁種のシマセンニュウ（*Locustella ochotensis*）は、上面の赤みが強く、下面がクリーム色、尾長/翼長比が 85%以下で、ひとまわり小さく、第 9 初列風切羽が第 6 初列風切羽より長いことで区別可能。

【生活史】

夏鳥として、伊豆諸島、紀伊半島、四国、九州周辺の小島に 4 月末～5 月に渡来し、中国南部からインドシナ半島北部で越冬する。基本的には、一夫一妻制の配偶システムをもつが、ごく一部（3.4%）のオスが一夫多妻となる。メスとつがいになったオスはメスのガードを行うためさえずり頻度が減るが、造巣と抱卵はメスのみが行うので抱卵期に入ると活発にさえずるようになる。雛が孵ると雌雄で分担して給餌を行い、巣立ち後も給餌する。多くのメスは 1 シーズンに 1 回しか繁殖しないが、繁殖期前半に雛を巣立たせた一部（4%）のメスは、2 腹目を産むことがある。7 月になり繁殖が終わると雌雄とも全身換羽を開始する。繁殖期の終わりの 7 月下旬になるとオスは給餌を分担せずに渡去を開始する。巣立ち雛も 8 月末までには繁殖地から渡去する。

【生息環境】

三宅島ではササ藪やススキ原であるが、九州や紀伊半島では丈の低い海岸性照葉樹林に生息している。数百羽が生息している三宅島と筑前沖の島を除くと、島の面積が狭いのでひとつの島には数羽から数十羽が生息しているに過ぎない。生息密度は、東シナ海側では 1 ha あたりに換算すると 10-25 つがいと高密度で生息しているが、日向灘から和歌山県にかけての生息地では密度は低い。博多湾では高密度で生息し、オスは 400 m^2程度の小さい縄張りを持ち、一夫一妻で繁殖。一腹卵数 2-5 卵（平均 3.5 卵）。年 1 回繁殖。昆虫食。5 月上旬～6 月中旬にかけて繁殖地に渡来し、6 月中旬～8 月上旬にかけて巣立ちが観察され、縄張り間で繁殖の進行が同調しない。繁殖を終了したつがいから全身換羽に入り、9 月上旬にはすべての個体が渡去。世代期間 1.96 年。年生存率 57%。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】森林，草地
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（7）島嶼地域

【分布域】

伊豆諸島、熊野灘、瀬戸内海、九州周辺の小島に繁殖個体群があり、朝鮮半島沿岸のいくつかの小島でも繁殖し、中国南部からインドシナ半島北部で越冬。近縁種のシマセンニュウ（*Locustella ochotensis*）は、北海道東部および北部に夏鳥として分布し、スラウェシ、ボルネオで越冬。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布が島嶼に限られ、きわめて狭く局所的であるため、生息地の破壊や捕食者の侵入で下位個体群が絶滅する可能性が常にある。北九州市津村島では、海岸線の干拓による陸地化で繁殖地が消失。三宅島では、2000 年の噴火により山頂付近の生息地が消失。

【生息地の現況】

かつて伊豆諸島では、御蔵島、三宅島、八丈島、青ヶ島、利島の 5 島で繁殖していたが、2000 年以降、三宅島以外では未確認。紀伊水道の鹿島、立島、熊野灘の孔島、耳穴島、大島、和具大島、瀬戸内海の小安居島、玄海灘の大机島、小机島、柱島、沖津島、筑前沖ノ島、天草灘の片島、甑島の野島、鹿児島湾の沖小島、新島、日向灘の枇榔島、細島で繁殖している。

【個体数の現況】

分布がきわめて局所的であるため総個体数は少なく、国内の成熟個体数は 1000 羽未満と考えられる。博多湾では、1990 年に 160-200 羽であったが、ドブネズミの侵入により 100 羽以下に減少している。かつて繁殖していた北九州市津村島、新島、利島、青ヶ島、八丈島などで繁殖地が消失した。三宅島では、噴火前の推定 565 羽から 305 羽へと個体数が 54%に減少したと推定されているほか、玄界灘 200 羽（Nagata, 1993; 永田，未発表）、日向灘 30 羽（中村，私信）、紀伊水道・熊野灘 100 羽（永田ほか，未発表）と推定されている。2000 年代になって、鹿児島湾沖小島（100 羽）、新島（100 羽）、甑島野島（30 羽）、和歌山県鹿島（10 羽）、三重県志摩町和具大島（50 羽）、愛媛県小安居島（60 羽）、九十九島（2 羽）、徳島県立島（2 羽）と新しい繁殖地が発見されている。

存続を脅かす要因

小さい島嶼に少数で生息しているため、埋め立てにより陸地とつながったり、ドブネズミなどの捕食者の侵入により、局所個体群が絶滅しやすい。三宅島では、火山噴火により生息地の一部が消失した。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，ゴルフ場，捕食（外来種による），自然災害，分布・産地局限
	（現在）	海岸開発，捕食（外来種による），自然災害，分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ウチヤマセンニュウ	*Locustella pleskei*	EN
第４次 2019：	ウチヤマセンニュウ	*Locustella pleskei*	EN

第４次 2018：	ウチヤマセンニュウ	*Locustella pleskei*	EN
第４次 2017：	ウチヤマセンニュウ	*Locustella pleskei*	EN
第４次 2015：	ウチヤマセンニュウ	*Locustella pleskei*	EN
第４次：	ウチヤマセンニュウ	*Locustella pleskei*	EN
第３次：	ウチヤマセンニュウ	*Locustella pleskei*	EN
第２次：	ウチヤマセンニュウ	*Locustella pleskei*	VU
第１次：	ウチヤマシマセンニュウ	*Locustella ochotensis pleskei*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【三重県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【和歌山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【徳島県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福岡県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【長崎県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【熊本県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【宮崎県】絶滅危惧ⅠB類(EN-r)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【三重県】

参考文献

- 藤田薫・藤田剛・富岡辰先・山本裕・樋口広芳，2005．希少鳥種オーストンアカゲラとウチヤマセンニュウの 2000 年三宅島噴火前後の個体数変化．Strix，3: 105-114．
- 樋口広芳，1973．伊豆諸島の鳥類（Ⅰ）繁殖陸鳥の分布と生息環境．鳥，22: 14-24．
- Nagata, H., 1986. Female choice in Middendorff's grasshopper-warbler. Auk, 103: 694-700.
- Nagata, H., 1988. An example of facultative polygyny in Middendorff's Grasshopper Warbler. Ecological Research, 3: 57-60.
- Nagata, H., 1991. The breeding ecology and mating system in Styan's Grasshopper Warbler, *Locustella pleskei*. 九州大学理博甲第 498 号, p. 91.
- Nagata, H., 1993. The structure of a local population and dispersal pattern in the Styan's grasshopper warbler, *Locustella pleskei*. Ecological Research, 8: 1-9.
- 中村豊・児玉純一・井上伸之・岩切久，1999．宮崎県におけるウチヤマセンニュウ *Locustella pleskei* の繁殖初確認．日本鳥学会誌，47: 61-63．
- 西尾喜量，2023．愛媛県今治市宮窪町九十九島におけるウチヤマセンニュウ *Locustella pleskei* の観察記録．愛媛県総合科学博物館研究報告，28: 39-44．
- 小川次郎，2011．ウチヤマセンニュウの生息地を発見．コマドリ，204: 2-3．
- 山口恭弘・菊池博・亀谷辰朗・山口香子・上野信一郎，2003．宮崎県日向市細島におけるウチヤマセンニュウの捕獲記録．日本鳥学会誌，52: 119-121．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Locustella pleskei has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Locustella pleskei* is listed as VU under criteria D1.

D1. Population size estimated to number fewer than 1,000 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest, Grassland
Threat types:	Coastal development, Predation (by alien species), Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Mie】.





執筆者:	永田尚志（新潟大学）
Author:	Hisashi Nagata

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　センニュウ科 Locustellidae

マキノセンニュウ

***Locustella lanceolata hendersonii* (Cassin, 1858)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
主要な繁殖地である北海道では生息数が 1990 年代に減り始め、2000 年代になってさらに減少した。減少の原因は明らかではなく、現状で保護対策はとられていない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

全長は約 12 cm。雌雄同色。体はオリーブ茶褐色で、背側、胸、脇に黒縞がある。日本では夏鳥としておもに北海道に生息し、秋には南に渡る。湖沼周辺や河川敷の草原に生息し、おもに昆虫を食べる。6～7 月に草本類の根元や草の上に巣を造り、繁殖する。主要な繁殖地である北海道では生息数が 1990 年代に減り始め、2000 年代になってさらに減少した。減少の原因は明らかではない。

基礎情報

【形態】

全長は約 12 cm。雌雄同色。体はオリーブ茶褐色で、背側、胸、脇に黒縞がある。

【生活史】

日本では夏鳥として 6 月上旬に渡来し、繁殖期にはおもに北海道に生息し、秋には南に渡る。6～7 月に草本類の根元や草の上に巣を造り、繁殖する。おもに昆虫を食べる。繁殖期には草の上ででさえずるが、普段は草むらに潜み、姿を現すことは少ない。

【生息環境】

おもな生息環境は、湖沼周辺や河川敷の草原であるが、このほか、生息数が減少していない時期には牧草地のような環境にも生息していた。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，耕作放棄地，湿地・湿原
国土地域区分：	(4) 河川・湿地地域

【分布域】

南西部を除く北海道全域の海岸沿い、石狩川、十勝川、天塩川などのような大きな河川沿いの平野部。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道の胆振地方中南部（勇払平野南部）、石狩地方南部（石狩平野南部）、十勝地方南部（十勝平野南部）、釧路地方南部（釧路平野、大黒島）、根室地方東南部（根室半島とその基部周辺）、網走地方中北部、宗谷地方北部（浜頓別、サロベツ原野、利尻島、礼文）に分布する。

【生息地の現況】

生息地は「分布域」に述べた地域で、最近この地域の現況には大きな変化はない。

【個体数の現況】

北海道全域については不明。さえずるオスの生息密度は、苫小牧の放棄農耕地で 1985 年に 50 羽/100 ha、帯広の放棄農耕地で 1976 年に 36 羽/100 ha。

存続を脅かす要因

不明であるが、近年の生息数減少の一因として、河川、湿地、草地の開発が考えられる。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	河川開発，湿地開発，草地開発，不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	マキノセンニュウ	*Locustella lanceolata*	NT
第４次 2019:	マキノセンニュウ	*Locustella lanceolata*	NT
第４次 2018:	マキノセンニュウ	*Locustella lanceolata*	NT
第４次 2017:	マキノセンニュウ	*Locustella lanceolata*	NT
第４次 2015:	マキノセンニュウ	*Locustella lanceolata*	NT
第４次:	マキノセンニュウ	*Locustella lanceolata*	NT
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt)，【山形県】情報不足(DD)，【群馬県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【新潟県】準絶滅危惧(NT)，【福井県】要注目，【兵庫県】要調査種

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 藤巻裕蔵，2011．北海道におけるマキノセンニュウの分布と出現率の変化．日本鳥学会誌，60(2): 233-237.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2004．生物多様性調査・生態系多様性地域調査（湿原生態系調査）報告書・北海道夏鳥調査．環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Locustella lanceolata hendersonii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Locustella lanceolata hendersonii* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence
(ii) area of occupancy
(iii) area, extent and/or quality of habitat
(iv) number of locations or subpopulations
(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Abandoned farmland, Wetland
Threat types:	River development, Wetland development, Grassland development, Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	藤巻裕蔵（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Yuzo Fujimaki

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　メジロ科 Zosteropidae　　日本固有

ハハジマメグロ

***Apalopteron familiare hahasima* Yamashina, 1930**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。 【判断理由】 3 島にしか現存しない。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

ハハジマメグロは、母島列島の母島、向島、妹島、姪島に分布していた記録があるが、姪島では既に絶滅している。森林を主な生息地とし、湿性高木林で生息密度が高いが、農地や集落までの広い範囲に生息している。島間での移動がほとんど無いと考えられ、特に属島の小さな個体群の局所絶滅が心配される。ノネコによる捕食が確認されており、また外来のネズミ類に巣が捕食されている可能性がある。近年は個体数の大きな変化は認められていない。

基礎情報

【形態】

全長約 14 cm、翼長 62-68 mm、尾長 55-60 mm、体重 12-15 g。体の上面が灰緑色で、腹側は明るい黄色、眼の周りに黒い逆三角形の模様がある。同所的に生息するメジロに比べると、尾と脚が長い。若鳥では、腹側が灰色がかっている。

【生活史】

一夫一妻で繁殖し、雌雄共に抱卵、育雛に参加する。巣は地上から 1-15 m の高さの木の枝の叉の上にかけるが、樹洞営巣の記録も 1 例だけ報告されている。3 月-7 月に繁殖し、一度に 2-4 卵を産み、1 年に 2 回繁殖を行うこともある。親鳥は巣立ち雛に対して長期間世話をし、巣立ち後 1 ヶ月ほど給餌することもある。繁殖個体は通年繁殖地周辺の狭い範囲で生活するが、若鳥は大きな群を作り比較的広い範囲を移動する。メジロと混群を作ることも多い。縄張り性が強く、繁殖期に縄張りに侵入した個体に対しては、強く威嚇する。動物質を主要な食物とする雑食性で、昆虫の幼虫や成虫、ガジュマルやイヌホオズキなどの果実などを採食する。

【生息環境】

山地の湿性高木林や乾性低木林、低標高地の海岸林、農耕地や集落内の樹林帯まで、広い範囲で繁殖している。特に発達した森林を好み、生息密度は湿性高木林で高く開放的な環境では低い。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林，住宅地，市街緑地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島の母島列島のみに分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在は、有人島の母島、属島で無人の向島及び妹島の 3 島にのみ生息している。姪島では、1930 年頃には多数が生息していたという記録があるが、戦後は記録がなく絶滅したものと考えられる。姉島及び平島では、それぞれ 1 例の記録の他に生息記録はなく、継続的に分布していた証拠はない。

【生息地の現況】

母島では、戦前に大規模な森林伐採が行われて広大な面積が農耕地となっていたが、戦後農地が放置されたため現在は二次林化が進んでいる。このため、森林を好むメグロにとっての生息地は 20 世紀後半に増加してきたと考えられる。一方で、母島では低標高地で住宅地や農耕地のための森林開発も行われており、局所的には生息環境が減少している。

【個体数の現況】

個体識別による生息密度調査及び環境による生息密度の違いに基づく推定により、母島では成熟個体数が 10000-15000 羽程度、向島と妹島ではそれぞれ 400-500 羽程度いると考えられている。近年は特に個体数の大きな変化は認められていない。

存続を脅かす要因

母島ではノネコによる捕食が問題となっているが、近年は島の南部を中心にノネコの排除が行われており、地域によっては影響が緩和されつつある。属島の小さな個体群では、わずかな繁殖成功率の低下が絶滅確率を大きく上げる可能性がある。向島及び妹島にはドブネズミが生息しており、巣への捕食圧が生じている可能性がある。ドブネズミはクマネズミより樹上利用が活発ではないものの、母島属島ではドブネズミの樹上活動が確認されている。姪島での絶滅原因は不明だが、ネズミによる捕食圧が影響した可能性がある。外来種であるメジロとの競争が心配されることもあるが、現状では同所的に共存しており、個体群密度への影響は生じていないと考えられている。移動性が低く島間移動をほとんど行わないため、一度局所絶滅すると、自然には集団が回復しないと考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による）
	（現在）	捕食（外来種による）

特記事項

母島と向島、妹島の間は、4-6 km 程度しか離れていないが、島間の遺伝的交流がほとんど無いことが分かっている。これは、島で進化した鳥類が移動性を低下させる顕著な例として貴重である。外来植物の種子散布者となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ハハジマメグロ	*Apalopteron familiare hahasima*	EN
第４次 2019：	ハハジマメグロ	*Apalopteron familiare hahasima*	EN
第４次 2018：	ハハジマメグロ	*Apalopteron familiare hahasima*	EN
第４次 2017：	ハハジマメグロ	*Apalopteron familiare hahasima*	EN
第４次 2015：	ハハジマメグロ	*Apalopteron familiare hahasima*	EN
第４次：	ハハジマメグロ	*Apalopteron familiare hahasima*	EN
第３次：	ハハジマメグロ	*Apalopteron familiare hahasima*	EN
第２次：	ハハジマメグロ	*Apalopteron familiare hahasima*	VU
第１次：	ハハジマメグロ	*Apalopteron familiare hahasima*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，国指定特別天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- Higuchi, H., M. Nakane and T. Maru, 1993. Home range and pair duration of the Bonin Islands Honeyeater *Apalopteron familiare*. Strix, 12: 23-33.
- Kawakami, K. and H. Higuchi, 2002. Predation by domestic cats on birds of Hahajima Island of the Bonin Islands, southern Japan. Ornithological Science, 1: 143-144.
- Kawakami, K. and H. Higuchi, 2002. The first record of cavity nesting in the Ogasawara Islands Honeyeater *Apalopteron familiare* on Hahajima, Bonin Islands, Japan. Ornithological Science, 1: 151-152.
- Kawakami, K. and H. Higuchi, 2003. Interspecific relationships between the native and introduced white-eyes in the Bonin Islands. Ibis, 145: 583-592.
- Kawakami, K., 2008. Threats to indigenous biota from introduced species on the Bonin Islands, southern Japan. J. Disaster Res., 3: 174-186.
- Kawakami, K., S. Harada, T. Suzuki and H. Higuchi, 2008. Genetic and morphological differences between populations of the Bonin Islands White-eye in the Bonin Islands, southern Japan. Zoological Science, 25: 882-887.
- Kawakami, K. and H. Higuchi, 2013. Estimation of the population size and viability of the Bonin White-eye *Apalopteron familiare* in the Bonin Islands, Japan. Ornithological Science, 12: 51-56.
- 籾山徳太郎，1930．小笠原諸島並に硫黄列島産の鳥類に就て．日本生物地理学会会報，1(3): 89-186.
- Morioka, H. and T. Sakane, 1978. Observations of the ecology and behavior of *Apalopteron familiare* (Aves, Meliphagidae). Mem. Natl. Sci. Mus. Tokyo, 11: 169-188.
- Springer, M. S., H. Higuchi, K. Ueda, J. Minton and C. G. Sibley, 1995. Molecular evidence that the Bonin Islands Honeyeater is a White-eye. J. Yamashina Inst. Ornithol., 27: 66-77.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Apalopteron familiare hahasima has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Apalopteron familiare hahasima* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming

Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Residential area, Urban green area
Threat types:	Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Nationally Designated Special Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ヒタキ科 Muscicapidae　　日本固有

タネコマドリ

***Larvivora akahige tanensis* (Kuroda, 1923)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
1980 年代に三宅島、青ヶ島、八丈島、利島に島外から導入されたイタチにより、地上採食性の本種の生息密度が激減したと考えられている。島外から導入されたイタチがいる限り、生息個体減少傾向は改善されず、絶滅する危険性は依然として増大している。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

伊豆諸島の三宅島、御蔵島、利島、八丈島、八丈小島、青ヶ島に留鳥として生息している。神津島では、過去に繁殖記録があるが、現在では本種に適した生息環境はほとんど残っていない。照葉樹の繁った暗い森林の沢筋や谷筋に多く生息し、林床で昆虫を採餌する。生息個体数は不明だが、近年、イタチの侵入により激減した。

基礎情報

【形態】

全長 14 cm。オスでは、頭部から上胸および尾羽がオレンジ色で背と翼は暗橙褐色、下胸部が黒く胸側と脇はダークグレーで腹は白い。メスは全体に色が鈍い。本州で繁殖する基亜種であるコマドリ（*Larvivora akahige akahige*）のオスは、上胸部と下胸部の境に黒い細い帯があり、尾羽がやや長いことで識別可能。

【生活史】

昆虫食。地上から 1.5 m くらいの崖または 1～4 m の樹枝上巣をかけて営巣し、4～6 月に 3～4 卵を産む。枯れ葉や草の茎を主材としたカップ型の巣を造り、産座として細根やシュロの毛などを敷く。樹枝上の巣では基部に大量の苔類を積み重ねることが多い。雛には、ゾウムシやコメツキムシなどの鞘翅目幼虫、アリなどの膜翅目、クビキリなどの直翅目、ヤスデ、ミミズなどを給餌する。

【生息環境】

伊豆諸島では発達した照葉樹林やヤシャブシ林に留鳥として周年生息する。島の渓流畔に多く、ときには乾燥した草地にも生息する。三宅島や御蔵島ではスダジイの薄暗い常緑広葉樹林や林中の渓流、沢などに多い。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（7）島嶼地域

【分布域】

三宅島以南の伊豆諸島に留鳥として分布しており、具体的には、三宅島、御蔵島、利島、八丈島、八丈小島、青ヶ島、神津島で記録がある。神津島では、現在繁殖は確認されていない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

伊豆諸島では、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、八丈小島、青ヶ島、利島に生息している。1972 年には、三宅島、御蔵島では高密度に分布し、利島では山頂付近、八丈島では東山で、青ヶ島では外輪の外側の谷筋に分布していた。御蔵島以外の生息地では著しく減少している。冬期には神津島で越冬する個体があり、伊豆半島で確認されることもある。

【生息地の現況】

神津島では生息環境はほとんど残っていない。御蔵島、三宅島、八丈島では生息環境は残っている。利島、青ヶ島の状況は不明。

【個体数の現況】

生息個体数は不明であるが、近年、三宅島をはじめとして著しく減少していると考えられる。八丈島でも少ない。生息密度は伊豆諸島で 3～15 つがい/km センサスライン（1973

年)。2009 年のモニタリングサイト 1000 において三宅島の一般サイトで 1 ヶ所記録があるのみで、最近のデータはない。ただし、三宅島の 2000 年噴火の後、2001 年から 2009 年にかけて実施された鳥類調査でも、本種は大路池周辺で記録されており、三宅島の個体群は噴火後も維持されていることが確認されている。

存続を脅かす要因

森林伐採、土地造成等の生息環境の破壊で神津島では下位個体群がほぼ消失。イタチの導入により三宅島では個体数が減少したと推定される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，土地造成，捕食（外来種による）

特記事項

非繁殖期に種子島で採集された標本をもとに本亜種（*Larvivora akahige tanensis*）が記載された（Kuroda 1923)。以前は、種子島・屋久島に分布する個体群も本亜種とされていたが、現在では、同個体群は基亜種（*Larvivora akahige akahige*）と考えられており、日本鳥類目録改訂第 8 版（日本鳥学会 2024）においても、種子島・屋久島の個体群は本亜種に含まれていない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	タネコマドリ	*Luscinia akahige tanensis*	VU
第４次 2019：	タネコマドリ	*Luscinia akahige tanensis*	VU
第４次 2018：	タネコマドリ	*Luscinia akahige tanensis*	VU
第４次 2017：	タネコマドリ	*Luscinia akahige tanensis*	VU
第４次 2015：	タネコマドリ	*Erithacus akahige tanensis*	VU
第４次：	タネコマドリ	*Erithacus akahige tanensis*	VU
第３次：	タネコマドリ	*Erithacus akahige tanensis*	VU
第２次：	タネコマドリ	*Erithacus akahige tanensis*	VU
第１次：	タネコマドリ	*Erithacus akahige tanensis*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（伊豆諸島)】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 藤井幹・丸岡禮治，2008．神奈川県大山山麓におけるタネコマドリ *Erithacus akahige tanensis* の記録．日本鳥類標識協会誌，20: 39-42．
- 樋口広芳，1973．伊豆諸島の鳥類（Ⅰ）繁殖陸鳥の分布と生息環境．鳥，22: 14-24．
- 加藤和弘・樋口広芳，2016．噴火が鳥類群集に及ぼす影響：伊豆諸島三宅島の事例を中心に．地球環境，21: 33-42．
- 山本裕，2001．「この鳥を守ろう」 の現在（50）伊豆諸島の鳥たち－モスケミソササイ、タネコマドリ、アカコッコ、ウチヤマセンニュウ、イイジマムシクイ－．私たちの自然，42: 22-25．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Larvivora akahige tanensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Larvivora akahige tanensis* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	永田尚志（新潟大学）
Author:	Hisashi Nagata

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ヒタキ科 Muscicapidae　　日本固有

ホントウアカヒゲ

***Larvivora namiyei* (Stejneger, 1887)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2

基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　VU	基準 E:　―

D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。

【判断理由】

本種は沖縄島北部の森林のみに生息する（Seki 2023）。2000 年代には外来捕食者の分布拡大にともない本種の分布域の縮小と生息環境悪化が進んでいたが、フイリマングースの駆除が行われた地域では分布が回復しつつある（Yagihashi et al. 2021）。ノイヌとノネコの本種に対する影響については十分には把握されていない。個体数の変化については調べられていない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

沖縄島北部の森林にのみ生息する。2000 年代には外来捕食者のフイリマングースの分布拡大にともない本種の分布域の縮小と生息環境悪化が進んでいた。フイリマングースの駆除が行われた地域では本種の分布が回復しつつあるが（Yagihashi et al. 2021）、個体数の変化については調べられていない。

基礎情報

【形態】

ヒタキ科の小鳥で、大きさはスズメ大。背面は橙褐色、腹部は灰色で、オスでは顔から胸にかけて黒い。本種は、近縁種アカヒゲ *Larvivora komadori* にくらべて背面・腹面とも暗色で、オスでは嘴上部の黒色部の幅が細めである点が異なる。また、翼端の形状がアカヒゲに比べて丸みを帯びている。体重はオス 26.0±1.4 g、メス 26.0±1.4 g、自然翼長は オス 70.2±2.4 mm、メス 67.2±1.8 mm（オス N=38 メス N=22 の平均±SD；関伸一 未発表）。

【生活史】

樹洞、ヘゴなどの枯れ木、木の根元や倒木の陰などに、枯れ葉を用いて椀型の巣を作る。巣箱や人家など人工構造物にも営巣する。一腹卵数は 2-4 卵が多い（宮城・樋口 1990）。周年同じ場所に生息する個体がいる一方で、生息密度の季節変化からは繁殖期・非繁殖期で地域内移動をする個体もいると推測される。

【生息環境】

常緑広葉樹林で、シダなどの下層植生の茂った場所や谷地形の場所に多い。二次林にも生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林，農業用水路，小河川
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄島北部の森林にのみ生息する。確実に本種と同定される個体が沖縄島以外で記録されたことはなく、留鳥と考えられる。沖縄島の南西に位置する慶良間諸島でもアカヒゲ種群の記録が 2 例あるが種不明であり（与那城 1978）、本種と推測できる根拠はない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄島のみに生息する。

【生息地の現況】

外来捕食者のフイリマングースの分布拡大にともなって、本種の主な分布域である沖縄島北部地域の森林で繁殖分布域が縮小傾向にあった（沖縄県文化環境部自然保護課 2003、小高ら 2009）。その後、フイリマングースの駆除が行われ本種の分布が回復している地域もある（Yagihashi et al. 2021）。ノイヌとノネコの本種に対する影響については十分には把握されていない。

【個体数の現況】

沖縄島北部地域の一部では高密度に生息しているが、その他の地域の生息密度は高くない。1980 年には、さえずり個体密度と生息地面積から個体数推定が試みられ、沖縄島北部で約 25,900-36,000 羽、中部で約 2,000-3,450 羽と報告されているが、過大評価であった可

能性も指摘されている（環境庁 1981）。その後の個体数の変化については調べられていない。

存続を脅かす要因

本種の現在の生息地は沖縄島北部の常緑広葉樹林に限定される。その唯一の生息地で外来捕食者のフイリマングース、ノネコ、ノイヌが確認されており、フイリマングース及びノネコまたはノイヌの消化管内容物や糞から本種が検出されている（日本野鳥の会やんばる支部 1997、小高ら 2009）。その結果、2000 年代には主にフイリマングースの分布拡大にともなって本種の繁殖分布が縮小する傾向にあった（沖縄県文化環境部自然保護課 2003、小高ほか 2009、Yagihashi et al. 2021）。現在ではフイリマングースの駆除が行われた地域で本種の確認頻度が回復しつつあるが（Yagihashi et al. 2021）、個体数の変化については十分な情報がない。分布域における常緑広葉樹林の伐採や開発の拡大は、生息地面積の減少につながる可能性がある。古来より飼い鳥として捕獲されてきたが、現在でも違法飼育の影響があるのかは不明である。

要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による），分布・産地局限
	（現在）	捕食（外来種による），分布・産地局限

特記事項

本種とアカヒゲとは分布域の近接した姉妹種ではあるが遺伝的分化の程度が大きく（Seki et al. 2007, Seki 2023）、日本鳥類目録改訂第 8 版においてはそれぞれ独立種とされ、本種の学名は *Larvivora namiyei* に変更された（日本鳥学会 2024）。今回のカテゴリー変更は本種の現状の変化というよりは、種分類の変更と評価方法の変更（評価基準の整理と定性評価の廃止）によるところが大きい。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ホントウアカヒゲ	*Luscinia komadori namiyei*	EN
第４次 2019：	ホントウアカヒゲ	*Luscinia komadori namiyei*	EN
第４次 2018：	ホントウアカヒゲ	*Luscinia komadori namiyei*	EN
第４次 2017：	ホントウアカヒゲ	*Luscinia komadori namiyei*	EN
第４次 2015：	ホントウアカヒゲ	*Erithacus komadori namiyei*	EN
第４次：	ホントウアカヒゲ	*Erithacus komadori namiyei*	EN
第３次：	ホントウアカヒゲ	*Erithacus komadori namiyei*	EN
第２次：	ホントウアカヒゲ	*Erithacus komadori namiyei*	VU
第１次：	ホントウアカヒゲ	*Erithacus komadori namiyei*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境庁，1981．昭和 55 年度特殊鳥類調査報告書．環境庁，東京．131pp.
- 小高信彦・久高将和・嵩原建二・佐藤大樹，2009．沖縄島北部やんばる地域における森林性動物の地上利用パターンとジャワマングース *Herpestes javanicus* の侵入に対する脆弱性について．日本鳥学会誌，58: 28-45．
- 宮城邦治・樋口広芳，1990．沖縄県北部地域におけるアカヒゲの繁殖生態．平成元年度特殊鳥類調査，pp. 1-23．環境庁，東京．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録第改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．
- 日本野鳥の会やんばる支部，1997．沖縄島北部における貴重動物と移入動物の生息状況及び移入動物による貴重動物への影響報告書．日本野鳥の会やんばる支部，国頭村．86pp.
- 沖縄県文化環境部自然保護課，2003．平成 14 年度特殊鳥類等生息環境調査（ホントウアカヒゲ生息実態調査）報告書．沖縄県文化環境部自然保護課，12pp.
- Seki, S. I., M. Sakanashi, N. Kawaji and N. Kotaka, 2007. Phylogeography of the Ryukyu Robin (*Erithacus komadori*): population subdivision in land-bridge islands in relation to the shift in migratory habit. Mol. Ecol., 16: 101-113.
- Seki, S. I., 2023. Fine-scale nuclear genetic structuring within the Ryukyu Robin, a species complex endemic to the Ryukyu Archipelago. Ornithological Science 22: 137-150.
- Yagihashi, T., S. I. Seki, T. Nakaya, K. Nakata and N. Kotaka, 2021. Eradication of the mongoose is crucial for the conservation of three endemic bird species in Yambaru, Okinawa Island, Japan. Biological Invasions 23: 2249-2260.
- 与那城義春，1978．阿嘉，慶留間，屋嘉比島の鳥類．ケラマジカ実態調査報告 III，pp. 151-156．沖縄県教育委員会，那覇．

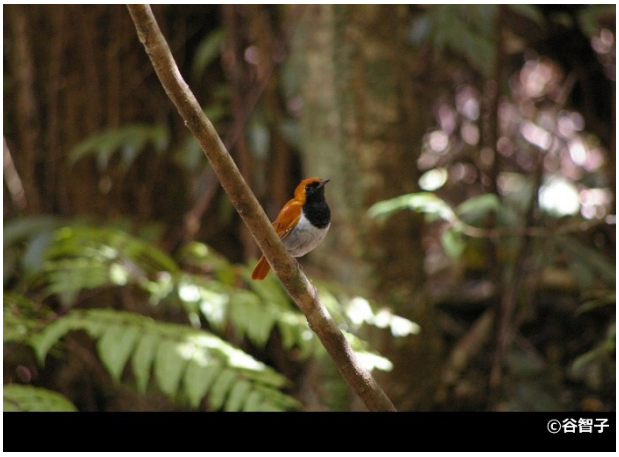
アセスメントサマリー（Assessment summary）

Larvivora namiyei has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Larvivora namiyei* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of

locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Agricultural ditch, Small river
Threat types:	Predation (by alien species), Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	関伸一（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Shin-ichi Seki

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ヒタキ科 Muscicapidae　　日本固有

リュウキュウキビタキ

***Ficedula owstoni* (Bangs, 1901)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本種は森林伐採や人間活動により、生息地の減少や分断が起きていることが指摘されている（Dong et al. 2015）。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

南西諸島の広葉樹林帯、照葉樹林やマングローブ林に生息する。個体数に関する情報は多くないが、沖縄島北部では、鳥類調査でも観察されないことがほとんどであり（環境庁 1981, 環境庁 1982, 花輪ほか 1983, 樋口ほか 1987, 環境庁 1988, 安座間ほか 1991, 比嘉ほか 1991）、分布が極めて限られていることから、個体数も極めて少ないと考えられる（沖縄野鳥研究会 1986, 安座間ほか 1988, 嵩原 1993）。

基礎情報

【形態】

雌雄ともにキビタキに似ている。雄の成鳥は頭から背にかけて緑色味のある黒色で、眉斑や喉は黄色く、キビタキのようなオレンジ色にはならない。嘴峰長は 10-12 mm、翼長は雄が 66-70 mm、雌が 63-67 mm、跗蹠長は 15-16 mm、尾長は雄が 48-49 mm、雌が 46-49 mm（清棲 1978）。

【生活史】

詳しい生活史は不明。

沖縄島や西表島では 8 月にはメジロ、ヒヨドリ、シジュウカラなどの留鳥と混群を形成し、森林内の中層からマングローブの根元近くを採食に利用する（安座間 1988, 石毛ほか 2002）。基本的に混群には単独で入るようである（石毛ほか 2002）。

【生息環境】

リュウキュウキビタキは広葉樹林帯、照葉樹林やマングローブ林にも生息する（日本野鳥の会 1998）。

屋久島では主に海抜 200 m～350 m に多いと述べられていたが（白井 1956）、近年は 1,700 m 以下の平地から山地の林で観察され（環境庁自然保護局 1984, 尾上 2008）、特に 300～1500 m に多い（江口ら 1989）。ヤクスギ林と照葉樹林の両方で繁殖期の優占種であり、特に照葉樹林で密度が高い（江口ら 1989）。

奄美大島ではかつて、集落の傍の森林や竹林にも生息していたが（Hachisuka, M. & Udagawa 1953, 御厨 1968）、現在はイタジイを中心とした照葉樹林や常緑広葉樹林からなり、よく茂った深い林で観察される（環境庁 1974, 樋口・花輪 1985, 樋口ほか 1986, 環境庁 1989, 奄美野鳥の会 2009）。このほかに、二次林やリュウキュウマツ林でも観察されることがある（樋口ほか 1986）。標高は 150～200 m に生息する（御厨 1968）。

沖縄島北部では、イタジイ林などで観察され、まとまった森林帯にのみ生息することから、森林への依存度が高いと考えられている（沖縄県 2005）。

西表島や石垣島では山地の常緑樹の暗い林を好み、木がある程度大きく、樹幹の下に空間がある森林に生息する（日本野鳥の会 1998）。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

南西諸島（種子島、屋久島、中之島、奄美大島、徳之島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島）に生息する（高木 2009, 日本鳥学会 2000, 2012, 2024）。沖永良部島や与論島、久米島、与那国島には生息せず、樹林の少ない島には分布しない傾向にある（高木 2009）。少なくとも屋久島、種子島やトカラ列島の個体は夏鳥だと考えられており（関 2011, 日本鳥学会 2000, 2012, 2024）、越冬地は不明である。ただし、屋久島において冬季に観察されることがあるため、屋久島の個体群を留鳥としている文献もある（例えば環境省 2009）。

奄美諸島や琉球諸島の個体群は留鳥だと考えられているが（日本鳥学会 2000, 2012, 2024）、すべての個体が留まっているのかなどの詳細は不明である。

本種は分類の混乱と形態に基づく識別の困難を理由として、未だ分布や移動についての情報が不足している。例えば、南西諸島以外への迷行として島根県、高知県、福岡県、長崎県や韓国、中国、台湾などで本種が観察されたとされる（石本 2005, Wang & Cui 2007, Brazil 2009, 日本鳥学会 2012, 2024, Bakewell et al. 2021）。ただ、キビタキのなかにリュウキュウキビタキに類似する羽色を持つ個体があり、特に若鳥では翼式が一致する個体があるため（三島 1957）、これらの記録が実際にリュウキュウキビタキであるかは慎重に検討される必要がある。例えば、高知県で 1935 年 5 月に回収されたリュウキュウキビタキ（三島 1957）の記録を認めるかは、資料によって異なる（日本鳥学会 2000, 2012, 2024）。また、伊豆諸島に生息するものはリュウキュウキビタキと報告されたことがあるが（籾山 1924, 山階 1941）、誤同定だったと訂正されている（山階 1942, 三島 1957）。同様に 1929 年に東京都で捕獲されたリュウキュウキビタキの記録（籾山 1932）も現在は認められていない。このほかに、1999 年 5 月に島根県で観察された個体（初野 2003, 石本 2005）をリュウキュウキビタキとするかは、資料によって異なる（日本鳥学会 2012, 2024）。

さらに、現在確認されている分布域周辺での生息状況として、折居（1936）は南大東島で 11 月に観察された小群をリュウキュウキビタキと記している。また、1973 年 5 月に屋久島の東方沖でリュウキュウキビタキが記録されている（田中 1974）。このほか Brazil（2009）は鹿児島県三島村黒島に夏鳥として生息することを記述している。ただし、これらは分布域として認めないことが普通である（日本鳥学会 2012, 2024）。このように、本種の分布域や記録には混乱がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年の分布域の変化については明らかになっていない。

【生息地の現況】

森林伐採や人間活動により、生息地の減少や分断が指摘されている（Dong et al. 2015）。

【個体数の現況】

リュウキュウキビタキの観察記録は散在するが（たとえば折居 1936, 日本野鳥の会 1980, 安座間ほか 1988, 鈴木ほか 2011）、その繁殖分布の詳細は報告がなく、個体群ごとの推定個体数や生息状況は不明である。

屋久島では、ヤクスギ林と照葉樹林の両方で繁殖期の優占種であり、特に照葉樹林で密度が高い（江口ほか 1989）。

沖縄島北部では、鳥類調査でも観察されないことがほとんどであり（環境庁 1981, 環境庁 1982, 花輪ほか 1983, 樋口ほか 1987, 環境庁 1988, 安座間ほか 1991, 比嘉ほか 1991）、1990 年代に生息が知られていたのはわずか 17 箇所である（比嘉 1993）。分布が極めて限られていることから、個体数も極めて少ないと考えられる（沖縄野鳥研究会 1986, 安座間ほか 1988, 嵩原 1993）。近年の生息状況は報告が無いため、詳細な調査が求められ

ている。

存続を脅かす要因

商業伐採による生息地の消失が脅威だと指摘されている（Dong et al. 2015）。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，不明
	（現在）	森林伐採，不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	リュウキュウキビタキ	*Ficedula narcissina owstoni*	DD
第４次 2019：	リュウキュウキビタキ	*Ficedula narcissina owstoni*	DD
第４次 2018：	リュウキュウキビタキ	*Ficedula narcissina owstoni*	DD
第４次 2017：	リュウキュウキビタキ	*Ficedula narcissina owstoni*	DD
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】準絶滅危惧，【沖縄県】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 奄美野鳥の会（編），2009．奄美の野鳥図鑑．文一総合出版，東京．
- 安座間安史・嵩原健二・島袋徳正，1988．特殊鳥類等生息調査及びノグチゲラの営巣木調査．特殊鳥類等生息環境調査Ⅱ，pp. 99-122．沖縄県環境保健部自然保護課，那覇．

- 安座間安史・島袋徳正・嵩原健二，1991．沖縄島北部大宜味村脊梁山地部におけるノグチゲラ生息環境調査．特殊鳥類等生息環境調査 IV 中間報告書，pp. 68-82．沖縄県環境保険部自然保護課，那覇．
- Bakewell, D. N., P. D. Round, A. Jearwattanakanok, J. A. Eaton, J.-G. Park and Y. Shigeta, 2021. Identification of the Narcissus Flycatcher−Yellow-rumped Flycatcher complex in subadult and female plumages. BirdingASIA, 36: 22-30.
- Brazil, M., 2009. Birds of East Asia: China, Taiwan, Korea, Japan, and Russia. Princeton University Press, Princeton.
- Dong, L., M. Wei, P. Alström, X. Huang, U. Olsson, Y. Shigeta, Y. Zhang, and G. Zheng, 2015. Taxonomy of the Narcissus Flycatcher *Ficedula narcissina* complex: an integrative approach using morphological, bioacoustic and multilocus DNA data. Ibis, 15(2): 312–325.
- 江口和洋・武石全慈・永田尚志・逸見泰久・川路則友，1989．屋久島における森林棲鳥類の垂直分布：I. 繁殖期．日本生態学会誌，39: 53-65.
- Gill, F. and D. Donsker (Eds), 2016. IOC World Bird List (v 6. 3) http://www. worldbirdnames. org/ioc-lists/master-list-2/(Accessed 07 sertember 2016)
- Hachisuka, M. and T. Udagawa, 1953. Contribution to the ornithology of the Ryukyu Islands. Quarterly Journal of the Taiwan Museum, 6(3・4).
- 花輪伸一・塚本洋三・武田宗也，1983．ヤンバルクイナの分布域と生息状況に関する調査報告．昭和 57 年度環境庁委託調査 特殊鳥類調査，pp. 1-30．環境庁，東京．
- 初野謙，2003．バードウォッチャー鳥見帳．BIRDER，17(10): 58-59.
- 比嘉邦昭・池間幸男・大城亀信・儀間朝治・慶田城健仁・仲宗根励，1991．井湯岳および玉辻山周辺における鳥獣分布調査．特殊鳥類等生息環境調査 IV 中間報告書，pp. 83-110．沖縄県環境保険部自然保護課，那覇．
- 樋口行雄・花輪伸一，1985．奄美大島におけるオオトラツグミの生息状況．昭和 59 年度環境庁委託調査 特殊鳥類調査 カンムリワシ，ヨナクニカラスバト，オオトラツグミ，pp. 35-53．環境庁，東京．
- 樋口行雄・花輪伸一・森下英美子，1986．奄美大島におけるルリカケスの生息状況．環境庁昭和 60 年環境庁委託調査 特殊鳥類調査，pp. 63-87．環境庁，東京．
- 樋口行雄・花輪伸一・森下英美子，1987．ノグチゲラの営巣状況と行動圏等に関する調査．環境庁昭和 61 年環境庁委託調査 特殊鳥類調査，pp. 7-28．環境庁，東京．
- 石毛久美子・伊津雅子・上田恵介，2002．亜熱帯マングローブ林でのメジロを核にした混群形成．Strix，20: 153-158.
- 石本賢治，2005．1998 年から 2003 年までに観察した島根県で初記録と思われる鳥．ホシザキグリーン財団研究報告，(8): 303-306.
- 環境庁，1974．環境庁委託調査 特殊鳥類調査．環境庁昭和 49 年 3 月．環境庁，東京．
- 環境庁，1981．昭和 55 年度環境庁委託調査 特殊鳥類調査．環境庁昭和 56 年 2 月．環境庁，東京．

- 環境庁，1982．昭和 56 年度環境庁委託調査 特殊鳥類調査．環境庁昭和 57 年 3 月．環境庁，東京．
- 環境庁，1988．環境庁昭和 63 年環境庁委託調査 特殊鳥類調査．環境庁平成元年．環境庁，東京．
- 環境庁自然保護局，1984．屋久島原生自然環境保全地域調査報告書．環境庁，東京．
- 清棲幸保，1978．日本鳥類大図鑑Ⅰ．p. 158．講談社，東京．
- 御厨正治，1968．奄美諸島の鳥類について．鳥，18(85): 314-327．
- 三島冬嗣，1957a．琉球諸島産キビタキの亜種に就いて．鳥，14: 1-2．
- 三島冬嗣，1957b．新たに記録される迷鳥 3 種．鳥，14: 3-5．
- 籾山徳太郎，1924．伊豆八丈島採集鳥類目録．鳥，4: 100-109．
- 籾山徳太郎，1932．日本産鳥類の新産地報告一束．鳥，7: 301-328．
- 日本鳥学会（編），2000．日本鳥類目録 改訂第 6 版．日本鳥学会，帯広．
- 日本鳥学会（編），2012．日本鳥類目録 改訂第 7 版．日本鳥学会，三田．
- 日本鳥学会（編），2024．日本鳥類目録 改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．
- 日本野鳥の会，1980．第二回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書（鳥類）全国版 鳥類繁殖地図調査 1978．環境庁，東京．
- 日本野鳥の会，1998．バンナ公園野鳥観察施設調査委託業務報告書．沖縄県八重山支庁土木建築課，石垣．
- 沖縄県，2005．改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 レッドデータおきなわ．沖縄県環境保健部自然保護課，那覇．
- 沖縄野鳥研究会（編），1986．沖縄県の野鳥．沖縄野鳥研究会，那覇．
- 尾上和久，2008．フィールドガイド屋久島の野鳥．南方新社，鹿児島．
- 折居彪二郎資料，1936．琉球列島採集日誌．沖縄大学地域研究所叢書，沖縄．
- Ornithological Society of Japan 2012. Checklist of Japanese Birds, 7th revised edition. Sanda: The Ornithological Society of Japan.
- Saitoh T. et al., 2015. DNA barcoding reveals 24 distinct lineages as cryptic bird species candidates in and around the Japanese Archipelago. Molecular Ecology Resources, 15(1): 177-186.
- 関伸一，2001．トカラ列島における夏鳥の生息密度－中之島のクロマツ林での事例．日林九支研論文集，54: 133-134．
- 白井邦彦，1956．屋久島の野生鳥獣相および屋久犬．鳥獣集報，15(1)．
- 田中茂雄，1974．海洋に拾う．野鳥，39(8): 24-27．
- 高木昌興，2009．島間距離から解く南西諸島の鳥類相．日本鳥学会誌，58(1): 1-17．
- 嵩原健二，1993．沖縄島北部地域（国頭村・大宜味村・東村）の鳥類について．特殊鳥類等生息環境調査，pp. 59-92．沖縄県環境保健部自然保護課，那覇．
- Wang, Y. Y. and R. F. Cui, 2007. A new avian subspecies record in mainland China, *Ficedula narcissina owstoni* (Passeriformes, Muscicapidae). Acta Zootaxonomica Sinica, 32: 492-494.
- 山階芳麿，1941．日本産鳥類の食性調査 1. 伊豆七島産鳥類の食性．鳥，11: 51-52．

- 山階芳麿，1942．伊豆七島の鳥類（並びに其の生物地理学的意義）．鳥，11: 53-54.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ficedula owstoni has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ficedula owstoni* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	岡久雄二（人間環境大学）
Author:	Yuji Okahisa

公表年月：2026 年 3 月

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

オオヒシクイ

***Anser fabalis middendorffii* Severtsov, 1873**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　—	基準 B:　—	基準 C:　—	基準 D:　VU 未満	基準 E:　—

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
本亜種の越冬地のひとつである九頭竜川下流域では 1980 年頃には約 2,000 羽が観察されていたが、2010 年代前半には数十羽から 200 羽程度しか記録されなくなり、餌になっていたマコモが減少したことがその要因のひとつと考えられる。生息地の多くは鳥獣保護区等で保護が図られているものの、全体的に本亜種が好むマコモ・ヒシ等が繁茂する湿地環境の減少または劣化が見られる。
なお、カムチャツカ半島の一部の繁殖地は開発圧にさらされており、地域繁殖集団への影響が懸念されているほか、カムチャツカ半島の重要な生息地において狩猟が解禁となり、交通アクセスもよくなったことから狩猟圧の増加が懸念されている。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

カムチャツカ半島で繁殖し、国内では新潟県、石川県、福井県、滋賀県など主に日本海側で越冬する大型のガン。越冬環境としてはヒシやマコモが生育する湖沼や河川に依存し、分布は限られている。渡りの中継地としては、北海道のサロベツ原野や十勝川下流域、秋田県の八郎潟があるが、近年では八郎潟で越冬する個体も確認されるようになっている。1970 年代には個体数を減らし、絶滅の危機にあった。近年では 1 万羽程度に回復したが、繁殖地の開発と狩猟、渡りの中継地や越冬地の環境改変などのリスクにさらされている。

協力者:　嶋田哲郎（宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）

基礎情報

【形態】

ガン類では最大級で、全長は 89-98 cm、体重はオスで 5.1 kg、メスで 4.6 kg ほど。全身ほぼ暗褐色。嘴は黒色で、先端近くに橙色の帯がある。脚は橙色。亜種ヒシクイ（*Anser fabalis serrirostris*）に比べ本亜種は嘴が長くて薄く、首も長く、湿地での採食に適した形態を持つ。

【生活史】

カムチャツカ半島のタイガ地帯で繁殖。繁殖期は 5 月上旬からで、産卵数は 4～7 卵、6 月中旬に孵化する。8 月下旬には北海道の中継地で見られるようになり、10 月下旬までには本州の越冬地に到着する。

【生息環境】

主に水辺（湖沼、河川）に生息し、亜種ヒシクイに比べて農耕地の利用は少ない。抽水域にマコモが生育するような浅い湖沼を好み、マコモの根やヒシの実を採食するが、河川も好んで利用する。農地では、デントコーン畑や水田を利用する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】田地・畑地，湿地・湿原，河川下流域，ワンド，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

繁殖地はレナ川、ヤナ川下流よりチュクチ半島およびカムチャツカ半島まで。越冬地は中国、朝鮮半島、日本。国内では北海道および本州の茨城県鹿島郡鳥栖（現鉾田町鳥栖地区）、軽野村（現神栖市）、千葉県手賀沼、岐阜県縣下池など（黒田 1939）。明治、大正期などガン類が全国的に激減する以前の分布の詳細は不明だが、1980 年代に入って野外におけるヒシクイの亜種識別法が確立され、オオヒシクイは日本海側の新潟、石川、滋賀で越冬することが明らかになった。

現在の生息状況

【分布域の現況】

繁殖地はバイカル湖からカムチャツカ半島まで、南はモンゴル北部、アルタイ地方南部までのタイガ。かつてはサヤン山脈からカムチャツカにかけて連続的に分布していたとされるが、現在では繁殖地が分断化されている。越冬地は中国、韓国、日本。分布域の最も東のカムチャツカ半島で繁殖する集団は日本で、マガダンとヤクーツクで繁殖する集団は韓国と中国東部で、サヤン山脈からアルタイ地方で繁殖する集団は中国西部でそれぞれ主に越冬すると考えられている。日本では、サロベツ原野や十勝川流域を中継し、本州で越冬する。日本海側に主に越冬分布し、福島潟、鳥屋野潟、佐潟、朝日池（以上新潟県）、片野鴨池（石川県）、九頭竜川下流域・周辺水田（福井県）、琵琶湖、西池（滋賀県）などで越冬し、一部が太平洋側の蕪栗沼、伊豆沼など（宮城県）、少数が霞ヶ浦・稲波干拓地（茨

城県）で越冬する。また、ヤクーツクで繁殖する集団の一部は西日本（出雲平野）でも越冬する。八郎潟はかつて渡りの中継地だったが、近年は越冬個体が増加している。

【生息地の現況】

生息地の多くは鳥獣保護区等で保護が図られているが、全体的に本亜種が好むマコモ・ヒシ等が繁茂する湿地環境の減少または劣化が見られる。また、亜種ヒシクイと比較して河川の利用も多く、河川管理が本亜種の生息地利用に影響を与えることがある。例えば、九頭竜川下流域では 1980 年頃には約 2,000 羽が観察されていたが、2010 年代前半には数十羽から 200 羽程度しか記録されなくなり、餌になっていたマコモが減少したことがその要因のひとつと考えられる。

【個体数の現況】

1971 年に狩猟鳥から除外され、国の天然記念物に指定され、日本の個体群は絶滅を免れた。1990 年代半ばには、日本 6,000 羽、韓国 6,000 羽、北朝鮮 700 羽、中国 5 万羽、全体で 5 万羽から 7 万羽と推定されているが（Miyabayashi & Mundkur 1999）、近年では日本 9,400 羽、韓国 7,700 羽、中国 24,100 羽と推定されている（Li et al 2020）。生息地別にみると、朝日池、鵜ノ池、片野鴨池などで増加傾向が見られるが、九頭竜川河口周辺や琵琶湖などでは減少している。ただし国内全体としては、漸増していた個体数が、近年はより安定していると考えられる。

存続を脅かす要因

湖沼や河川における抽水域環境の劣化や消失、河川管理による環境改変に加え、鉛中毒や高病原性鳥インフルエンザなどの危機にさらされていると考えられる。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備

特記事項

本亜種を含む、種ヒシクイの都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和 6 年度末時点）は以下のとおり。

【岩手県】準絶滅危惧,【福島県】準絶滅危惧(NT),【群馬県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【埼玉県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(越),【千葉県】消息不明・絶滅生物(X),【東京都（本土部）】絶滅(EX),【東京都（区部）】絶滅(EX),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【滋賀県】絶滅危機増大種,【兵庫県】B ランク,【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオヒシクイ	*Anser fabalis middendorffii*	NT

第４次 2019：	オオヒシクイ	*Anser fabalis middendorffii*	NT
第４次 2018：	オオヒシクイ	*Anser fabalis middendorffii*	NT
第４次 2017：	オオヒシクイ	*Anser fabalis middendorffii*	NT
第４次 2015：	オオヒシクイ	*Anser fabalis middendorffii*	NT
第４次：	オオヒシクイ	*Anser fabalis middendorffii*	NT
第３次：	オオヒシクイ	*Anser fabalis middendorffii*	NT
第２次：	オオヒシクイ	*Anser fabalis middendorffii*	NT
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】留意(N)，【青森県】希少野生生物(C ランク)，【宮城県】準絶滅危惧(NT)，【山形県】準絶滅危惧(NT)，【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類，【新潟県】準絶滅危惧(NT)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類，【岡山県】準絶滅危惧，【熊本県】要注目種(AN)，【大分県】準絶滅危惧(NT)，【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 池内俊雄，2017．ヒシクイ・オオヒシクイ Q＆A50．雁の里親友の会，宮城．
- 環境省自然環境局，2020．モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査 2004～2017 年度 とりまとめ報告書．環境省生物多様性センター，山梨．
- 環境省自然環境局，2022．第 52 回ガンカモ類の生息調査報告書．環境省生物多様性センター，山梨．
- Kurechi, M., 1991. Report on East Asian races of Bean Geese in Japan and Kamchatka. IWRB Threatened Waterfowl Research Group Newslettter, 1: 11-12.
- 呉地正行・横田義雄・大津真理子，1983．ヒシクイ *Anser fabalis serrirostris* とオオヒシクイ *A. f. middendorfi* の野外識別についての考察．鳥，32: 95-108．
- 黒田長道，1939．雁と鴨．修教社書院，東京．
- Li et al., 2020. Population trends and migration routed of the East Asian Bean goose. Wildfowl, special issue, 6: 124-156.
- 宮林泰彦（編），1994．ガン類渡来地目録．第 1 版．雁を保護する会，若柳．
- Miyabayashi, Y. and T. Mundkur, 1999. Atlas of Key Sites for Anatidae in the East Asian Flyway, pp. 31-34. Wetlands International.
- 嶋田哲郎，1996．シリーズ「この鳥を守ろう」の現在 第 17 回 ヒシクイとオオヒシクイ－亜種間で異なるその生態－．私たちの自然，(417): 18-21．

- 嶋田哲郎，2010．気象条件にともなうヒシクイの短期的移動．Bird Research，Vol. 6，pp. S7-S11．

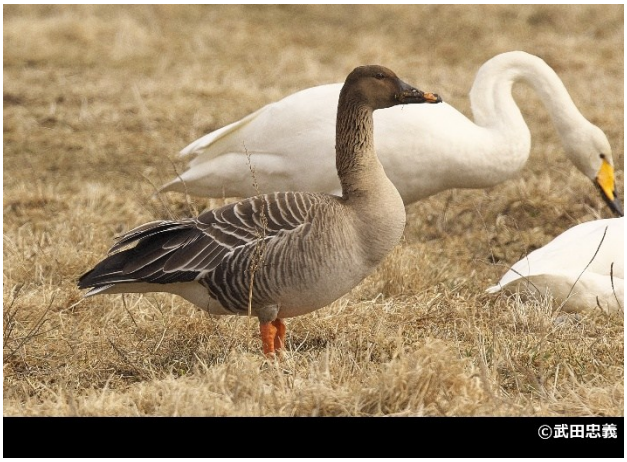
アセスメントサマリー（Assessment summary）

Anser fabalis middendorffii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Anser fabalis middendorffii* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Wetland, Lower river basin, Inlet, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Field preparation
Law designation status for conservation	Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	牛山克巳（宮島沼水鳥・湿地センター）
Author:	Katsumi Ushiyama

公表年月：2026 年 3 月

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

ヒシクイ

***Anser fabalis serrirostris* Gould, 1852**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU 未満	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
主要な越冬地である化女沼などでの釣り人、カメラマン、通行人などによる就塒妨害が確認されている。また、ねぐらとなる湖沼等の消失や環境変化に加え、採食地である農地の農法の変化等に伴う環境収容力の低下も課題となっている。
個体数が増加したマガンとの競合のほか、繁殖地のカムチャツカでの禁猟区解除による狩猟圧の影響も危惧される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

ロシアのツンドラ地帯で繁殖する亜種ヒシクイの内、カムチャツカ半島南部の群れが日本へ渡る。国内では北海道東部、道央、青森、秋田などを経て、主に宮城の化女沼まで渡り越冬する。かつては全国的に飛来し、関東圏にも越冬地が多かったが、生息地の消失等に伴い、現在では主に東北地方で越冬し、その生息地は 20 ヶ所以下に限られている。個体数は 1970 年代までに激減したと考えられるが、その後漸増し、近年はやや安定していると考えられる。ねぐらとなる主要な湖沼は保護区等に指定されているが、人為的攪乱等の悪影響が見られる。採食地となる農地は保護されておらず、農法の変化等に伴う環境収容力の低下が問題となっている。また、カムチャツカでは、日本へ渡るヒシクイの重要生息地が禁猟区として設定されていたが、2000 年代に解除され、狩猟圧の影響が危惧される。

協力者:　嶋田哲郎（宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）

基礎情報

【形態】

全長 80～90 cm の大型のガン。全身ほぼ暗褐色で、上尾筒、下尾筒は白色。黒色で先端付近が橙黄色で頑健な嘴を持つ。特に下嘴中央部が太く見える。脚は橙色。類似する亜種オオヒシクイは本亜種より大きく（全長 100 cm 前後）、長い首と長くて薄い嘴を持ち、ハクチョウ類に似た体型。

【生活史】

夏期は、ロシア極東のツンドラ地帯に生息。繁殖個体は、河川、湖沼に隣接した草地に分散営巣。雛孵化後は家族単位でスゲ類の葉やベリー類の漿果などを採食。非繁殖個体は、安全な湖沼で集団換羽。秋・冬期は越冬地へ渡るが、カムチャツカ南部の群れは日本へ渡る。国内では、北海道のオホーツク海沿岸域（風蓮湖、濤沸湖など）を経由し、主群は宮城県へ渡り越冬する。越冬期は、夜間は湖沼（化女沼など）で過ごし、早朝にねぐらから飛び立ち、周辺水田などで採食する。亜種関係にあるオオヒシクイは、水生植物のマコモの根茎や、ヒシの種子を好むが、亜種ヒシクイは、陸上でイネ科植物の葉や収穫後の稲モミを好み、夜間に水田に留まることも珍しくない。越冬期も家族で生活し、その絆は翌年の繁殖期まで続く。

【生息環境】

主に水辺（湖沼、河川）や農耕地（水田、畑、牧草地）に生息する。採食地としては、越冬地では水田を主に利用するが、中継地では牧草地や収穫後の畑（デントコーンやジャガイモ畑）を利用する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，田地・畑地，湿地・湿原，河川下流域，河口域，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

エニセイ川河口より、レナ川、ヤナ川、インディギルカ川、コリマ川の各河口、チュクチ半島で繁殖し、日本、朝鮮半島、中国で越冬する。国内ではマガン同様普通種で、北海道、本州、八丈島、佐渡、四国などで見られた。埼玉県江戸川筋御猟場にも多く飛来していたが、1939 年時点では激減している。千葉県手賀沼、和田沼、茨城県軽野村（現神栖市）にも群れで飛来していた（黒田 1939）。その後分布域は縮小し、太平洋岸の宮城県の内陸湿地に越冬分布するようになり、1986 年までは伊豆沼や鳴瀬川河口を主なねぐらとしていたが、化女沼へねぐらを移し、現在は平筒沼や相野沼なども利用する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

夏期にロシア極東のハタンガ川からアナディール川流域、チュコト半島のツンドラ地帯、及びカムチャツカ半島西岸の低湿地帯で繁殖し、冬期に中国、朝鮮半島、日本などへ

渡り越冬する。現在の主な渡りの中継地は、北海道東部（能取湖、濤沸湖、野付湾、風蓮湖など）、サロベツ原野、秋田（八郎潟干拓地、小友沼）。主な越冬地は、宮城県の化女沼、平筒沼で、伊豆沼、長沼、相野沼、蕪栗沼も不定期に利用される。近年は宮城県における個体数が減少している半面、気候変動による暖冬化の影響で、中継地の秋田県八郎潟干拓地や小友沼が越冬地化し、冬期間にも滞在する群れが見られるようになっている。また、日本海側の亜種オオヒシクイの越冬地では、多数の亜種オオヒシクイの中に少数の亜種ヒシクイが混じっていることがある。サロベツ原野を通過する亜種ヒシクイは、同時期にオホーツク海沿岸で観察されるより小型であることなどから、国内では複数の繁殖集団が越冬している可能性が考えられる。

【生息地の現況】

亜種ヒシクイの生息地は、全国で 20 ヶ所程度に限られている。このうち、ねぐらとなる湖沼は、鳥獣保護区などで保護されているところが多いが、早朝に釣り人などによる就塒個体への妨害もある。周辺の耕地（採食地）は殆ど保護区化されておらず、農業事情で、耕作放棄や収穫後の水田を耕す「秋耕」で落ちモミが採食不能となる水田が増加した結果、環境収容力が低下し問題となっている。さらに、増加しているマガンによる競争排除も生じている可能性もある。国際的には、日本へ渡来する亜種ヒシクイの繁殖地・カムチャツカ半島の禁猟区解除により、日本の個体群への重大な影響が危惧されている。

【個体数の現況】

種ヒシクイ全体としては、1970 年までに激減したが、その後漸増し、2000 年から 3 年間は減少する傾向が見られた。近年、亜種ヒシクイは漸減傾向とされていたが、北海道におけるガン類合同調査（2017-2022）の結果からは、概ね 1 万羽前後が飛来しており、ここ数年における目立った増減傾向はなく、安定している。主要な越冬地である宮城県における個体数は減少傾向を示している。

存続を脅かす要因

主要越冬地・化女沼などでの釣り人、カメラマン、通行人などによる就塒妨害が確認されている。また、ねぐらとなる湖沼等の消失や環境変化に加え、採食地である農地の環境変化も課題となっている。このほか、個体数が増加したマガンとの競合、繁殖地のカムチャツカでの禁猟区解除による狩猟圧の影響が危惧される。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，湿地開発，捕獲・狩猟/園芸採取，その他（農地・農法の変化、人による就塒妨害）
	（現在）	圃場整備，捕獲・狩猟/園芸採取，競争/競合（在来種による），その他（農地・農法の変化、人による就塒妨害）

特記事項

日本雁を保護する会とロシア科学アカデミーとの共同標識調査で、カムチャツカ半島南部の個体群が日本へ渡ることが明らかになった。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヒシクイ	*Anser fabalis serrirostris*	VU
第４次 2019：	ヒシクイ	*Anser fabalis serrirostris*	VU
第４次 2018：	ヒシクイ	*Anser fabalis serrirostris*	VU
第４次 2017：	ヒシクイ	*Anser fabalis serrirostris*	VU
第４次 2015：	ヒシクイ	*Anser fabalis serrirostris*	VU
第４次：	ヒシクイ	*Anser fabalis serrirostris*	VU
第３次：	ヒシクイ	*Anser fabalis serrirostris*	VU
第２次：	ヒシクイ	*Anser fabalis serrirostris*	VU
第１次：	ヒシクイ	*Anser fabalis serrerostris*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】留意(N)，【青森県】希少野生生物(C ランク)，【岩手県】準絶滅危惧，【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【秋田県】準絶滅危惧(NT)，【山形県】情報不足(DD)，【福島県】準絶滅危惧(NT)，【群馬県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【埼玉県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(越)，【千葉県】消息不明・絶滅生物(X)，【東京都（本土部）】絶滅(EX)，【東京都（区部）】絶滅(EX)，【新潟県】準絶滅危惧(NT)，【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福井県】要注目，【滋賀県】絶滅危機増大種，【兵庫県】B ランク，【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【長崎県】情報不足(DD)，【熊本県】要注目種(AN)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 池内俊雄，2017．ヒシクイ・オオヒシクイ Q＆A50．雁の里親友の会，宮城．
- 環境庁，1991．日本の絶滅のおそれのある野生生物（脊椎動物編）．自然環境研究センター，東京．
- 環境省自然環境局，2020．モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査 2004～2017 年度 とりまとめ報告書．環境省生物多様性センター，山梨．
- 環境省自然環境局，2022．第 52 回ガンカモ類の生息調査報告書．環境省生物多様性センター，山梨．

- 呉地正行・横田義雄・大津真理子，1983．ヒシクイ *Anser fabalis serrirostris* とオオヒシクイ *A. f. middendorfi* の野外識別についての考察．鳥，32: 95-108．
- 呉地正行，1983．日本にはオオヒシクイのほうが多かった ヒシクイの亜種調査行．アニマ，(129): 18-22．
- 呉地正行，1997．シリーズ「この鳥を守ろう」の現在 第 25 回 ヒメヒシクイ－ロシアヒシクイの最も東の個体群μm－．私たちの自然，(425): 18-21．
- 呉地正行，2006．雁よ渡れ．どうぶつ舎，東京．
- 黒田長道，1939．雁と鴨．修教社書院，東京．
- Li et al., 2020. Population trends and migration routed of the East Asian Bean goose. Wildfowl, special issue 6: 124-156.
- 宮林泰彦編，1994．ガン類渡来地目録．第 1 版．雁を保護する会，若柳．
- Miyabayashi, Y. and T. Mundkur, 1999. Atlas of Key Sites for Anatidae in the East Asian Flyway, pp. 31-34. Wetlands International.
- 嶋田哲郎，1996．シリーズ「この鳥を守ろう」の現在 第 17 回 ヒシクイとオオヒシクイ－亜種間で異なるその生態－．私たちの自然，(417): 18-21．
- 嶋田哲郎，2010．気象条件にともなうヒシクイの短期的移動．Bird Research，Vol. 6，pp. S7-S11．
- 山階鳥類研究所，1975．この鳥を守ろう．霞会館，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Anser fabalis serrirostris has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Anser fabalis serrirostris* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Wetland, Lower river basin, Estuary, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Field preparation, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Competition (with native species), Other
Law designation status for conservation	Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	牛山克巳（宮島沼水鳥・湿地センター）
Author:	Katsumi Ushiyama

公表年月：2026 年 3 月

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

ホシハジロ

***Aythya ferina* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
ガンカモ類の生息調査の記録では、1990 年代後半の 20 万羽から 2020 年前後には 10 万羽まで減少している。直近 10 年の減少率は絶滅危惧種の基準に届かないが、前述の期間に一貫して減少傾向が続いているので注意が必用である。越冬期に内湾や大湖沼に数千から数万羽の群を形成するが、東京湾、浜名湖、三河湾、伊勢湾、琵琶湖、児島湾、中海・宍道湖で万単位から千単位への減少が起きている。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
本種の食物である底生生物の量的な評価は行われていないが、生息地において、アサリやシジミの漁獲量が著しい減少傾向にある。原因として、海底の無酸素状態の水が動くことによって起きる貧酸素状態（青潮）が東京湾、伊勢湾・三河湾、児島湾が指摘されており、本種が食物にしている底生生物に広範な影響が出ていると考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

沿岸域と湖沼に生息する潜水ガモである。大きな生息地は本州の内湾や中海・宍道湖にあったが、2010 年代に個体数の急速な減少が起きた。同所的に生息するキンクロハジロやスズガモも減少していることから、生息地において環境の悪化が起きている可能性がある。

基礎情報

【形態】

全長 43-48 cm、翼長 195-214 mm、ふ蹠長 36-41 mm、嘴峰長 44-52 mm、体重 938.6-678 g。オスは頭と首が赤茶色で、目の前方がわずかに黒い。目の虹彩は赤。くちばしは根元が黒く、中央部は青灰色、先端が黒。胸は黒く、背中と脇腹は灰色。上尾筒と下尾筒は黒く、尾羽は灰色。メスは頭、首、胸が茶色。喉、くちばしの付け根、目の周囲と目の後ろ部分は茶色が薄くて白っぽく見える。虹彩はこげ茶色。くちばしは根元から中央より少し先まで黒く、続いてオスより細い青灰色の帯があり、先端は黒い。背中と脇腹はオスと似た灰色と茶色がかった色とが入り交じる。

【生活史】

10 月に入ると全国的に飛来が始まる。3 月になると数が減少しはじめ、4 月末までにほとんど見られなくなる。緯度によって異なるが、繁殖地には 3 月上旬から 5 月上旬に到着する。浅い水域で採食を行い、環境によって貝類、無脊椎動物、水生植物などを採食する。長野県で採集されたホシハジロの胃内容物では水生植物が主な食物になっており、特に栄養価の高い越冬芽が多く見つかっている。動物質の食物ではユスリカなどの水生昆虫が見つかっているが、貝類を食べていた個体はいなかった（羽田 1962）。一方、中海・宍道湖のホシハジロは二枚貝を食物としていた（岡 1988）。

【生息環境】

沿岸域、河川の河口域、大型湖沼に多い。平野部の池や山地のダム湖でも見られる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】ため池・池沼，湖・ダム湖 【陸域_平地部 海岸部】河川下流域，河口域，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，汽水域，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_表層】海面
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

北海道から沖縄まで全国に分布する。ガンカモ類の生息調査によると、2000 年前後には約 1 万羽を超える生息地が、東京湾、浜名湖、三河湾、伊勢湾、琵琶湖、大阪湾、児島湾、中海・宍道湖に存在した。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道から沖縄まで全国に分布する。ガンカモ類の生息調査によると、2020 年前後に約 1 万羽を超える生息地は大阪湾と佐賀県沿岸だけである。

【生息地の現況】

本種は内陸湖沼にも生息するが、大きな群が見られるのは沿岸域や大湖沼である。沿岸域では餌場になる浅海域は埋め立てが進んでいることは一因と思われるが、2000 年代に入

ってからは以前に比べれば埋め立ては活発ではない。本種の食物である貝類や底生生物の現存量は不明だが、全国的にアサリの漁獲が減っていることから、本種の食物も減少している可能性が考えられる。

【個体数の現況】

ガンカモ類の生息調査によると、1990 年代後半には 16-20 万羽だったが、その後一貫して減少が続いており、2010 年ごろは 13 万羽、2020 年以降は 8.5-10 万羽になっている。

存続を脅かす要因

アサリの減少は複合的な要因が指摘されているが、東京湾、伊勢湾・三河湾、児島湾では、海底の無酸素状態の水が移動することで生じる貧酸素水塊によってアサリやベントスが窒息死することが指摘されている（松川 2008, 高木 2015）。貧酸素水塊は広範な底生生物を死に至らしめることから、キンクロハジロの餌資源が減少していることが考えられる。同所的に生息するキンクロハジロやスズガモも減少していることから、生息地に問題が起きている可能性がある。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，水質汚濁
	（現在）	湖沼開発，河川開発，海岸開発，水質汚濁

特記事項

ヨーロッパでもホシハジロが減少しており（Fox et al. 2016）、1989-90 年と 2016 年の調査を比較すると近年はオスの比率が高まっていることから、繁殖期に捕食されて命を落とすメスが増えている可能性が指摘されている（Brides et al. 2017）。日本のホシハジロのオス比率もカモ類の中で最もオスに偏っており（神山 2019）、約 69%がオスである。このことから、繁殖地においても減少する要因があるのかもしれない。

国内の個体数は記録がある 1990 年代後半から一貫した減少傾向にあり、2020 年代までに半減している。いくつもあった 1 万羽を超える大きな生息地も、いまでは大阪湾と有明海北部だけになってしまった。今後も継続して注意すべき種である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—

第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（本土部)】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（区部)】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（北多摩)】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（南多摩)】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- バードリサーチ，2019．ハジロ類の潜水ガモの減少．バードリサーチニュース，2019 年 10 月: 2.
- 環境省，1996-2022．https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html ガンカモ類の生息調査（オンライン）
- 松川康夫・張成年・片山知史・神尾光一郎，2008．我が国のアサリの漁獲量激減の要因について．日本水産学会誌，74(2): 137-143.
- 岡奈理子，1988．浅水域の prey-predator システム．月刊海洋，30: 289-295.
- 高木秀蔵・石黒貴裕・弘奥正憲・加藤聡・片山貴之，2015．閉鎖性湾の児島湾における水位変動に伴う間欠的な貧酸素．日本水産学会誌，81(2): 293-295.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aythya ferina has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aythya ferina* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Reservoir/Pond, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Lower river basin, Estuary, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Brackish water, Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Lake development, River development, Coastal development, Water pollution

Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	神山和夫（バードリサーチ）
Author:	Kazuo Koyama

公表年月：2026 年 3 月

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

スズガモ

***Aythya marila nearctica* Stejneger, 1885**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
ガンカモ類の生息調査の記録では、1990 年代後半の 10-20 万羽から 2000 年代中盤に 27 万羽まで増加したが、その後は減少して 2020 年前後には 14 万羽になっている。越冬期に内湾や大湖沼に数千から数万羽の群を形成するが、東京湾、伊勢湾、三河湾、浜名湖、中海・宍道湖、博多湾で著しい減少が起きており、いくつかの地域では、観察される個体数が万単位から千単位に減っている。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
本種の食物である底生生物の量的な評価は行われていないが、生息地においてアサリやシジミの漁獲量は著しい減少傾向にある。原因として、海底の無酸素状態の水が動くことによって起きる貧酸素状態（青潮）が東京湾、伊勢湾・三河湾が指摘されており、本種が食物にしている底生生物に広範な影響が出ていると考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

沿岸域に生息する潜水ガモで、大きな生息地は本州と九州の内湾や中海・宍道湖にあったが、2010 年代に個体数の急速な減少が起きた。同所的に生息するホシハジロやキンクロハジロも減少していることから、生息地において環境の悪化が起きている可能性がある。

基礎情報

【形態】

全長 40-46.5 cm、翼長 51-61 cm、ふ蹠長 3.7-4.1 cm、嘴峰長 4-4.7 cm、体重 690-1372 g。オスの頭部から頸、胸は黒色で頬に緑色の光沢がある。背と肩羽は白地に黒色の虫食い斑が入る。脇から腹は白色。翼上面は暗褐色で白色の翼帯が目立つ。翼下面は淡灰色。上尾筒と下尾筒、尾は黒色。メスは全体に褐色味が強い。頭部から頸、胸は茶褐色で嘴基部に円形の白色斑、頬に淡褐色の不明瞭な斑がある。肩羽から翼上面は暗褐色で白色の翼帯が目立つ。翼下面は淡灰色。腹は白色で脇から下尾筒、尾にかけて褐色。雌雄とも嘴は青灰色で、嘴爪付近が黒色。虹彩は黄色。脚は灰色。

【生活史】

繁殖期は亜北極圏のツンドラや開けた針葉樹林にある小さな浅い池などで、よく茂った草地や低木林の地上に営巣する。一腹卵数は通常 8～11 個。抱卵はメスだけで行い、26～28 日で孵化する。育雛期間は 40～45 日。春期、越冬地からの渡りは 2 月下旬から始まり、3 月中旬頃から本格化する。4 月中旬まで越冬地に留まる個体も見られる。秋期の渡りは 8 月中旬～9 月初旬から始まり、9 月中下旬に本格化する。越冬地には 10 月中下旬から渡来する。

【生息環境】

主に海岸に生息し、水深の浅い内湾や河口、沿岸部のほか、内陸の大きな湖沼でも見られる。水深 0.5～3.5 m、稀に 7 m までの潜水を行い採食する。雑食性で、主に貝類を採食するほか、昆虫、甲殻類、環形動物、魚類、植物の根、種子、水草などを食べる。千葉県市川市・船橋市沖の三番瀬では、主にアサリとホトトギスガイを採食していることが胃内容物調査により確認されている。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】河口域，汽水域，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_表層】海面
国土地域区分：	(5) 沿岸域

【分布域】

北海道から沖縄まで全国に分布する。ガンカモ類の生息調査によると、2000 年前後には 1 万羽を超える生息地が、東京湾、伊勢湾、三河湾、浜名湖、中海・宍道湖、博多湾、諫早湾に存在した。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道から沖縄まで全国に分布する。ガンカモ類の生息調査によると、2020 年前後に 1 万羽を超える生息地は、涸沼、東京湾、諫早湾である。

【生息地の現況】

本州と九州の内湾や瀬戸内海が主要な生息地である。沿岸域では餌場になる浅海域の埋

め立てが進んでいることが生息地の環境悪化の一因と思われるが、2000 年代に入ってからは、以前ほど埋め立ては活発ではない。本種の食物である貝類や底生生物の現存量は不明だが、全国的にアサリの漁獲が減っていることから、本種の食物も減少している可能性が考えられる。

【個体数の現況】

ガンカモ類の生息調査によると、2000 年前後には 10-20 万羽で、2005 年ごろに 24-27 万羽になったが、その後、減少して 2020 年以降は 14 万羽ほどになっている。

存続を脅かす要因

アサリの減少は複合的な要因が指摘されているが、東京湾、伊勢湾・三河湾では海底の無酸素状態の水が移動することで生じる貧酸素水塊（青潮）によってアサリが窒息死することが指摘されている（松川 2008）。貧酸素水塊は広範な底生生物を死に至らしめることから、スズガモの餌資源が減少していることが考えられる。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，水質汚濁
	（現在）	海岸開発，水質汚濁

特記事項

2010 年代に入ってから一貫した減少傾向にあり、いくつもあった 1 万羽を超える大きな生息地も、いまでは数カ所に減ってしまった。今後も継続して注意すべき種である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【千葉県】一般保護生物(D)，【東京都（本土部）】留意種，【東京都（区部）】留意種

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境省，1996-2022．https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html ガンカモ類の生息調査（オンライン）
- 松川康夫・張成年・片山知史・神尾光一郎，2008．我が国のアサリの漁獲量激減の要因について．日本水産学会誌，74(2): 137-143．
- 箕輪義隆，2013．バードリサーチ生態図鑑 スズガモ．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aythya marila nearctica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aythya marila nearctica* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Estuary, Brackish water, Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Coastal development, Water pollution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	神山和夫（バードリサーチ）
Author:	Kazuo Koyama

公表年月：2026 年 3 月

キジ目 Galliformes　キジ科 Phasianidae　　日本固有

エゾライチョウ

***Tetrastes bonasia vicinitas* Riley, 1915**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
近年、森林の大規模伐採、大規模の人工林化は見られず、生息環境には大きな変化はないが、ハンター1 人当りのエゾライチョウ捕獲数とキツネの有害駆除数とは反比例の関係にあり、エゾライチョウの捕獲数には減少傾向が見られ、キツネの有害駆除数には増加傾向が見られる。過去にエゾライチョウの減少がはじまった時期とキツネの増加がはじまった時期は一致していることから、キツネの増加はエゾライチョウの生息環境条件の悪化の一因になっていると考えられる。
なお、エゾライチョウの冬の主要な食物は落葉広葉樹の冬芽や尾状花序なので、エゾシカの食害により落葉広葉樹の枯死が激しくなると、エゾライチョウの生息環境の悪化の一因となる可能性がある。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

全長 36 cm。全身褐色、黒色、茶色のまだら模様で、オスの喉は黒い。森林性で、種エゾライチョウ（*Tetrastes bonasia*）はヨーロッパから東はオホーツク海沿岸部、サハリン、北海道の森林帯に広く分布する。日本では北海道に亜種（*Tetrastes bonasia vicinitas*）が分布する。森林に生息し、おもに木本類や草本類の新葉、漿果、落葉広葉樹の冬芽や尾状花序を食べる。5 月下旬～6 月上旬に地上に巣を作り、平均 7 卵を産み、雌だけが抱卵し、23 日で孵化する。最近狩猟での捕獲数が急減しており、数ヶ所におけるモニタリング調査でも生息数は 1980 年代後半から減少している。生息数減少の主な要因は古くはカラマツ人工林の拡大、最近ではキツネによる捕食と考えられている。

基礎情報

【形態】

全長 36 cm。全身褐色、黒色、茶色のまだら模様で、オスでは背後部と腰が灰色を帯び、喉が黒い。メスはオスとほぼ同じ色であるが、オスと異なり背後部と腰に灰色の色調がなく、喉は褐色、茶色、白色のまだらである。趾には羽毛がなく、横方向に櫛状の突起があり、冬にはこの突起が長くなり、「かんじき」の役割をする。

【生活史】

一夫一妻で、3 月末～4 月につがいを形成し、メスは 5 月下旬～6 月上旬に地上に巣を作り、平均 7 卵を産み、雌だけが抱卵し、23 日で雛が孵化する。抱卵が始まると、オスは独立生活をするようになる。雛が孵化すると、メスと幼鳥の家族群で行動するが、家族群は 8 月末ごろまでに解消する。その後秋と冬には、単独または数羽の群れで生活する。おもな食物は春～夏には木本の葉や草本、秋にはヤマブドウやサルナシなどの漿果、冬にはカンバ類やハンノキ類などの冬芽や尾状花序である。

【生息環境】

森林性で、常緑針葉樹林、針広混交林、落葉広葉樹林に生息し、カラマツ人工林にはほとんど生息しない。晩夏から秋にかけて森林限界に隣接するハイマツ林にまれに飛来することがある。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

離島を除く北海道全域

現在の生息状況

【分布域の現況】

離島を除く北海道全域。森林における出現率（調査地数に対するエゾライチョウが記録された調査地の割合）は 1970～1990 年代は 34～45%、2000 年代は 24%、2010 年代は 13%と減少している。

【生息地の現況】

近年、森林の大規模伐採、大規模の人工林化は見られず、生息環境には大きな変化はないが、ハンター1 人当りのエゾライチョウ捕獲数とキツネの有害駆除数とは反比例の関係にあり、キツネの増加は生息環境条件の悪化の一因と考えられる。エゾライチョウの冬の主要な食物は落葉広葉樹の冬芽や尾状花序なので、エゾシカの食害により落葉広葉樹の枯死が激しくなると、エゾライチョウの生息環境の悪化の一因となる可能性がある。

【個体数の現況】

不明（北海道全域で生息数の指標になるデータは狩猟統計だけ）

存続を脅かす要因

天敵となるキツネの生息数の増加。可能性としてエゾシカの食害による落葉広葉樹の枯死。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	捕食（在来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，シカ食害

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	エゾライチョウ	*Tetrastes bonasia vicinitas*	DD
第４次 2019：	エゾライチョウ	*Tetrastes bonasia vicinitas*	DD
第４次 2018：	エゾライチョウ	*Tetrastes bonasia vicinitas*	DD
第４次 2017：	エゾライチョウ	*Tetrastes bonasia vicinitas*	DD
第４次 2015：	エゾライチョウ	*Tetrastes bonasia vicinitas*	DD
第４次：	エゾライチョウ	*Tetrastes bonasia vicinitas*	DD
第３次：	エゾライチョウ	*Tetrastes bonasia vicinitas*	DD
第２次：	エゾライチョウ	*Tetrastes bonasia vicinitas*	DD
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Fujimaki, Y., 1995. Status of the hazel grouse in Hokkaido, Japan in 1923-93. Proceedings of International Grouse Symposium, pp. 168-169.
- 藤巻裕蔵，1998．エゾライチョウ．帯広畜産大学野生動物管理学研究室，帯広，109pp.

- Fujimaki, Y., 2000. Recent hazel grouse *Bonada bonasia* decline in Hokkaido, Japan. 日本鳥学会誌, 48(4): 281-284.
- Fujimaki, Y., 2021. Distribution of hazel grouse in Hokkaido, Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol., 53: 25-32.
- 藤巻裕蔵，2002．エゾライチョウの生物学．日本鳥学会誌，51(1): 74-86.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tetrastes bonasia vicinitas has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tetrastes bonasia vicinitas* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Predation (by native species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Deer feeding damage
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	藤巻裕蔵（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Yuzo Fujimaki

公表年月：2026 年 3 月

キジ目 Galliformes　キジ科 Phasianidae　　日本固有

アカヤマドリ

***Syrmaticus soemmerringii soemmerringii* (Temminck, 1830)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　―	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
熊本県球磨郡市房山（コシジロヤマドリとの中間型が生息）や八代市泉村では、シカ食害により林床植生がほとんどない状態になり、見つけやすくなっているにもかかわらず、近年本種は確認されていない。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
熊本県中部以北の八代市泉町や五木村、山都町などでは、近年、本種が生息する森林の林床植生が、シカ食害により壊滅的な破壊を受け貧弱になり、本種の生息環境が急速に悪化している。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

九州北部の福岡県、佐賀県、長崎県、大分県及び熊本県北部、宮崎県北部に分布する。標高 1,200 m 程度までの林床植生の豊富な自然林や人工林に留鳥として生息し、種子や草本類の葉、シダ類、昆虫類などを食餌としている。

熊本県中部と宮崎県中部のコシジロヤマドリとの分布境界付近には、腰羽に大小さまざまな変異のある白色斑をもつ個体がおり、腰が斑に白く見える中間型が生息する。この白色班は基本的に北部に行くほど小さく、南に行くほど大きく、クラインを成していると考えられる。

ニホンジカやニホンイノシシの増加に伴い、林床植生が脆弱になり、個体数が激減している生息地がある。

基礎情報

【形態】

全長はオスが約 125 cm、雌が約 55 cm。雄は全体的に赤銅色で、特に上背から頸にかけては紫がかった金属光沢がある。肩や翼の羽縁は白くならずに、雄の尾は 90 cm 以上になる個体もおり、節と呼ばれる黒色帯が、最大 13 節程度ある。

雌は全体的に黄褐色で、尾は短く 20 cm 程度でキジの雌より短い。コシジロヤマドリの雌よりもより淡色で下面の羽縁が汚白色である。

【生活史】

留鳥として、年間を通して一定の縄張りを保持して生活している。飼育個体では、雄が 12 歳程度、雌が 10 歳程度であるので、野生下での寿命は 10 歳以下と推察される。また、かつては一夫多妻と考えられてきたが、近年、一夫一妻の可能性を示唆する研究結果もある。

【生息環境】

熊本県及び宮崎県のおよそ北緯 32 度 30 分以北の九州各地に分布する。海岸沿いの照葉樹林から標高 1200～1300 m あたりの針広混交林の上部まで生息する。下草の豊富な広葉樹林に多いが、スギやヒノキの植林地でも見かけることがある。

コシジロヤマドリとの分布境界一帯には、中間型、つまり雄の腰の白色班が面的に白くならず、斑模様の個体を多く見かける。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

おおよそ北緯 32 度 30 分以北の熊本県・宮崎県及び大分県、福岡県、佐賀県、長崎県に生息する。しかし、熊本県と宮崎県におけるコシジロヤマドリとの分布の境界は不明確で、コシジロヤマドリとの中間型、つまり、腰の白色部が面的に白くならずに、まだら模様に見える中間型と考えられる個体が境界線の南北に広く分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

過去の分布域との変化はなく、おおよそ北緯 32 度 30 分以北の九州各県に生息する。しかし、コシジロヤマドリとの分布境界は不明確で、コシジロヤマドリとの中間型と考えられる個体が境界線の南北に広く生息する。

【生息地の現況】

一部の地域では、シカ食害による分布域の林床植生の壊滅的な破壊が進行しており、生息域が狭まっている可能性がある。

【個体数の現況】

一部地域では、生息環境の悪化に伴い、個体数の減少が起こっている。

存続を脅かす要因

シカ食害による林床植生の破壊が進行していることが、生息環境の劣化・悪化を招いている。また、風力発電建設による森林の分断で生息環境が悪化したり、大規模なソーラー発電施設が建設されたりしたことに伴い、生息地そのものが失われている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	森林伐採，捕獲・狩猟/園芸採取，発電施設建設，シカ食害

特記事項

イノシシやタヌキが増加している地域においては、これらの哺乳類による卵の捕食の可能性についての指摘や、営巣する環境そのものが消滅しつつあるという指摘もある。

令和 6 年度末時点において、大分県のレッドデータブックでは本亜種を含む種ヤマドリが準絶滅危惧（NT）とされている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii soemmerringii*	NT
第４次 2019：	アカヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii soemmerringii*	NT
第４次 2018：	アカヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii soemmerringii*	NT
第４次 2017：	アカヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii soemmerringii*	NT
第４次 2015：	アカヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii soemmerringii*	NT
第４次：	アカヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii soemmerringii*	NT
第３次：	アカヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii soemmerringii*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【福岡県】準絶滅危惧(NT)，【長崎県】準絶滅危惧(NT)，【熊本県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【宮崎県】準絶滅危惧(NT-g)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Kawaji, N., T. Hayashi and T. Matsuura, 2016. Home Range and Habitat Use of a Male Copper Pheasant *Syrmaticus soemmerringii* in a Suburb in Tokyo, Japan. 山階鳥類学雑誌, 48: 29-35.
- 高橋松人，2011．ヤマドリの繁殖スケジュールと配偶システム．山階鳥類学雑誌，43(1): 33-46.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Syrmaticus soemmerringii soemmerringii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Syrmaticus soemmerringii soemmerringii* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Power plant construction, Deer feeding damage
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	坂梨仁彦
Author:	Masahiko Sakanashi

公表年月：2026 年 3 月

キジ目 Galliformes　キジ科 Phasianidae　　日本固有

コシジロヤマドリ

***Syrmaticus soemmerringii ijimae* (Dresser, 1902)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
熊本県球磨郡水上村市房山や葦北郡大関山や熊本県水俣市では、シカ食害により、林床植生が貧弱になり、本種が少なくなっている。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
近年、本種が生息する森林の林床植生が、シカ食害により壊滅的な破壊を受けて貧弱になり、生息環境が急速に悪化している。この林床植生は、急速に回復するものとは考えづらい。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

九州南部の鹿児島県及び熊本県南部、宮崎県南部に分布する。標高 1,200 m 程度までの林床植生の豊富な自然林や人工林に留鳥として生息し、種子や草本類の葉、シダ類、昆虫類などを食餌としている。

熊本県中部と宮崎県中部のアカヤマドリとの分布境界付近には、腰羽にある白色斑に大小さまざまな変異があり、腰が斑に見える中間型の個体が生息する。この白色班は基本的に北部に行くほど小さく、南に行くほど大きく、クラインを成していると考えられる。

ニホンジカやニホンイノシシの増加に伴い、林床植生が脆弱になり、個体数が激減している生息地がある。

基礎情報

【形態】

全長はオスが約 125 cm、雌が約 55 cm。雄は全体的に濃赤銅色で、特に上背から頸にかけては紫がかった金属光沢がある。亜種アカヤマドリより全体的に濃色で、腰の各羽縁に大きな白色班があり、腰全体が白く見える。雄の尾は 90 cm 以上になる個体もおり、節と呼ばれる黒色帯が、最大 13 節程度ある。

雌は全体的に黄褐色で、尾は短く 20 cm 程度でキジの雌より短い。アカヤマドリの雌よりもより濃色である。

【生活史】

留鳥として、年間を通して一定の縄張りを保持して生活している。飼育個体では、雄が 12 歳程度、雌が 10 歳程度であるので、野生下での寿命は 10 歳以下と推察される。また、かつては一夫多妻と考えられてきたが、近年、一夫一妻の可能性を示唆する研究結果もある。

本種の秋～冬にかけてのおもな食物として、シダ類、ササなどの葉部、ヤドリギ、ジャノヒゲの実などの漿果類、コナラのドングリなどの堅果類などが知られている。

【生息環境】

熊本県及び宮崎県の南部から鹿児島県にかけて、海岸沿いの照葉樹林から標高 1200～1300 m あたりの針広混交林の上部まで分布する。下草の豊富な広葉樹林などに生息するが、スギやヒノキの植林地でも見かけることがある。

熊本県と宮崎県の北緯 32 度 30 分付近のアカヤマドリとの分布境界付近では、腰の白が面的にならず斑に見える中間型を多く見かける。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

おおよそ北緯 32 度 30 分以南の熊本県・宮崎県及び鹿児島県全域に生息する。しかし、アカヤマドリとの分布の境界は不明確で、腰の白色が斑に見える中間型と考えられる個体が境界線の南北に広く分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域の変化は認められないが、熊本県内では生息環境の悪化のため、生息個体数が減少傾向にあり、観察頻度が下がっている。宮崎県では微増、鹿児島県では変わらない。

【生息地の現況】

熊本県南部の生息地は、シカ食害により林床植生が貧弱になり、良好な生息環境は減少している。宮崎県南部や鹿児島県北部においてもシカ食害は進行しており、生息環境は悪

化しているものと考えられる。

【個体数の現況】

熊本県の南部では、観察頻度は下がっている。宮崎県と鹿児島県においては、個体数の顕著な減少は進んでいないと推定される。

存続を脅かす要因

シカ食害による林床植生の破壊が進行していることが、生息環境の劣化・悪化を招いている。また、風力発電建設による森林の分断で生息環境が悪化したり、大規模なソーラー発電施設が建設されたりしたことに伴い、生息地そのものが失われている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採
	（現在）	森林伐採，捕食（在来種による），発電施設建設，シカ食害，その他動物食害

特記事項

イノシシやタヌキが増加している地域においては、これらの哺乳類により卵が捕食されているのでは、との指摘をする声や、営巣する環境そのものがなくなりつつあるという声もある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	コシジロヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii ijimae*	NT
第４次 2019：	コシジロヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii ijimae*	NT
第４次 2018：	コシジロヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii ijimae*	NT
第４次 2017：	コシジロヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii ijimae*	NT
第４次 2015：	コシジロヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii ijimae*	NT
第４次：	コシジロヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii ijimae*	NT
第３次：	コシジロヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii ijimae*	NT
第２次：	コシジロヤマドリ	*Syrmaticus soemmerringii ijimae*	NT
第１次：	コシジロヤマドリ	*Phasianus soemmerringii ijimae*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【熊本県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【宮崎県】準絶滅危惧(NT-g)，【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Kawaji, N., T. Hayashi and T. Matsuura, 2016. Home Range and Habitat Use of a Male Copper Pheasant *Syrmaticus soemmerringii* in a Suburb in Tokyo, Japan. 山階鳥類学雑誌, 48: 29-35.
- 高橋松人，2011．ヤマドリの繁殖スケジュールと配偶システム．山階鳥類学雑誌，43 (1): 33-46.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Syrmaticus soemmerringii ijimae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Syrmaticus soemmerringii ijimae* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Predation (by native species), Power plant construction, Deer feeding damage, Other animal feeding damage
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	坂梨仁彦
Author:	Masahiko Sakanashi

公表年月：2026 年 3 月

ヨタカ目 Caprimulgiformes　ヨタカ科 Caprimulgidae

ヨタカ

***Caprimulgus jotaka jotaka* Temminck & Schlegel, 1844**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
東京都では 1970 年代には 10 メッシュ(1 km×1 km)で繁殖の記録があったが、1990 年代には 0 メッシュ、2010 年代には 2 メッシュと減少したまま推移している。茨城県では 2005～2006 年に 7 メッシュ(5 km×5 km)だったが 2016～2021 年には 8 メッシュで繁殖が確認され、増減はほとんどない。また、静岡県での調査によると 1996～97 年は 35 メッシュで記録があったが、2017～2020 年には 21 メッシュと減少している。八ヶ岳南麓では、2000 年代以降ほとんど記録がない。香川県中部でも、近年伐採地が減り、以前営巣していた場所で確認できなくなっているため減少していると考えられる。後述のとおり、全国的には増加している可能性が高いが、一方で減少傾向が継続している地域が複数存在する。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
山梨県では、県内に広く分布しているが伐採地の減少、草原の荒廃等により生息・繁殖環境が悪化し個体数も減少している。静岡県では住宅地や工場用地などの拡大、といった開発行為によりとくに平野部での生息域の縮小が指摘されている。岡山県内では営巣地周辺でのイノシシの地表の掘り返しが目立っており、イノシシやシカの増加による営巣への悪影響が今後懸念される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

全国的な調査の結果、ヨタカの繁殖分布域は 1990 年代には 127 メッシュだったのが、2010 年代には 208 メッシュと増加傾向にある。その一方で東京都など関東や四国地方の一部地域では個体数の減少傾向が続いており、現在も生息環境の悪化が続いている地域がある。繁殖地における主要な脅威は、伐採地の減少、住宅地や工場用地などの拡大などの開発行為であるが、イノシシやシカの増加による営巣への悪影響も懸念される。中継地や越冬地の環境改変等も本種の個体数に影響していると考えられるが、どこで、どのような影

響が及んでいるのかは不明である。

協力者: 多田英行（日本野鳥の会岡山県支部）・河村和洋（森林総合研究所　野生動物研究領域）・才木道雄（東京大学秩父演習林）・吉村正則

基礎情報

【形態】

全長 29 cm、体重 73～113 g。全体に黒褐色～灰色の地に黄褐色や茶褐色の斑が散在する羽色をしており、複雑な模様となっている。オスは喉の左右、初列風切の外側 4 枚、尾羽の左右外側 4 枚に白斑がある。まれに中央尾羽にも小さな白斑がある。メスは喉の白斑や初列風切の白斑はごく小さいか、茶褐色で、尾羽の白斑はほとんどない。ふしょは非常に短い。

【生活史】

4～5 月頃に日本へ渡来して繁殖する渡り鳥で、九州、四国、本州、佐渡、北海道に渡来する。夜行性であり、オスは繁殖期の夜間に「キョキョキョキョ」と良く響く鳴き声でなわばりを主張する。一腹卵数は 2 卵だが、1 卵の事例もある。約 19 日間の抱卵は、主にメスが行う。ヒナは孵化後数日で産卵場所から数 m ほど離れた場所に移動し、15 日齢頃には飛べるようになる。採食と給餌は夜間に行ない、主にガ、コガネムシなどの飛翔性昆虫を飛びながら大きな口で捕食する。また、林道などに降りて地上にいる昆虫を食べることもある。繁殖地への帰還率や雌雄での土地執着性の差は不明であるが、越冬地はインドシナ半島やマレーシア半島、ボルネオなどとされる。

【生息環境】

自然林、二次林、植林地などの森林環境を中心に農地、草地、河川敷、湖沼、市街地でも観察される。特に、下層植生の乏しい若齢植林地や、明るいマツ混交林、落葉広葉樹林といった開けた環境を伴う森林を好んで利用する。低標高域から高標高域まで広く分布し、富士山麓では標高 2,000 m 以上でも生息している。巣はつくらず、直近に植物がない裸地の地上に産卵する。営巣環境は樹冠に覆われず、周囲に藪や林がある水はけの良い場所が知られており、アカマツ二次林や植林伐採跡地の尾根付近や草原で営巣が確認されている。秋にかけては渡りの通過個体が河川敷や湖沼、市街地でも観察される。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】裸地，森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原・細流，砂地・風衝地，岩壁・ガレ場（石灰岩地等），河川源流域，河川上流域，河川中流域，ため池・池沼 【陸域_平地部】裸地，森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，市街緑地，砂地・礫地，河川中流域，河川下流域，河口域，ため池・池沼
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（3）都市地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

国内では、九州以北で繁殖する夏鳥である。全国鳥類繁殖分布調査から、本種の分布域は 1970 年代に 290 メッシュ、1990 年代には 127 メッシュと大きく縮小したことが確認されている。越冬地はインドシナ半島やマレーシア半島など東南アジアとされ、渡りの経路は不明である。日本の個体群は東シナ海よりも日本海を横断している可能性が指摘されて

いる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

2010 年代に実施された全国鳥類繁殖分布調査では 208 メッシュ（20 km×20 km）で繁殖の可能性が報告されている。この結果より、1990 年代の 127 メッシュから記録メッシュ数が大きく増加し、回復傾向にあることが示された。その一方で、1970 年代の記録メッシュ数は 290 であり、その水準にまで回復しているわけではない点に留意する必要がある。2010 年代の繁殖分布面積の総和は過大に見積もって 83,200 km^2であるものの、夜行性のため調査時間を夜明け前に設定できたかどうかが影響するため、評価には注意が必要である。

【生息地の現況】

これまでに確認されている繁殖地は伐採地や二次林、植林地といった森林、採石場、二次草原である。とくに里山の二次林や原野は開発や管理放棄により生息地の減少が進んでいる一方、山地の森林では自然攪乱や近年増加している伐採活動によって生息地が提供されている可能性がある。中継地および越冬地については、詳細な地点が判明しておらず、どのような環境を選好するか、および主要な脅威の解明が進んでいない。

【個体数の現況】

1970 年代ごろまでは平野部の農村の疎林でも普通に生息していたが、1980 年代になると日本各地で個体数が減少した。栃木県では 2011 年に生息調査を実施し 1997 年の調査と比較したところ、23 か所中 10 か所でヨタカの生息が確認できなくなった。当地では山地では安定しているが、標高 300 m 未満の里山で生息地が減少している。

存続を脅かす要因

1970 年代には生息状況の悪化の原因は、里山などの管理放棄や森林の開発などが示唆されている。近年は増加傾向にあるが、1970 年代のような水準の生息数には増えておらず、とくに低標高域での農地、草地、森林の開発や管理放棄による、生息に不適な環境の増加は現在も続いていると考えられる。また、越冬地、中継地での環境改変なども影響していると考えられるが、詳細は不明である。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，草地開発，管理放棄
	（現在）	森林伐採，草地開発，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

夜行性のため調査研究が難しく、基礎的な繁殖生態の知見が不足している。しかし、近年は調査手法の確立で研究が進みつつある。例えば、北海道と東京都では人工林伐採によ

り創出された若齢林面積が大きいほどヨタカの占有率が高いことがわかっている。近年の林業活動の活性化は、ヨタカに適した環境を創出している可能性があり、適切な林業がヨタカの保全に寄与する可能性がある。また、二次草原や亜高山帯の砂礫地でも繁殖が確認されていることから、植林地とともに、草原など開けた環境も重要である。営巣環境や日周活動については、中国地方や関東地方で詳細な知見が集積しつつある。今後さらなる繁殖期における研究の蓄積、全国レベルでの定量的な繁殖分布の評価、渡り経路の解明により、詳細に生息密度や減少・増加要因を明らかにし、今後の分布予測を行う必要がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ヨタカ	*Caprimulgus indicus jotaka*	NT
第４次 2019:	ヨタカ	*Caprimulgus indicus jotaka*	NT
第４次 2018:	ヨタカ	*Caprimulgus indicus jotaka*	NT
第４次 2017:	ヨタカ	*Caprimulgus indicus jotaka*	NT
第４次 2015:	ヨタカ	*Caprimulgus indicus jotaka*	NT
第４次:	ヨタカ	*Caprimulgus indicus jotaka*	NT
第３次:	ヨタカ	*Caprimulgus indicus jotaka*	VU
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt),【青森県】重要希少野生生物(B ランク),【岩手県】準絶滅危惧,【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【秋田県】準絶滅危惧(NT),【山形県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】情報不足①注目種,【栃木県】準絶滅危惧(C ランク),【群馬県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【埼玉県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(繁),【千葉県】消息不明・絶滅生物(X),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（区部）】絶滅(EX),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（西多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【山梨県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長野県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岐阜県】準絶滅危惧,【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁殖),絶滅危惧Ⅱ類(VU)(通過),【三重県】情報不足(DD),【滋賀県】絶滅危機増大種,【京都府】絶滅危惧種,【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【兵庫県】A ランク,【奈良県】絶滅危惧種,【和歌山県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山口県】準絶滅危惧(NT),【徳島県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【香川県】準絶滅危惧(NT),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種,【長崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【熊本県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【大分県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【宮崎県】絶滅危惧ⅠB

類(EN-r),【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- バードリサーチ・日本野鳥の会茨城県，2021．茨城県鳥類繁殖分布調査報告 2016-2021．バードリサーチ.
- バードリサーチ，2021．東京都鳥類繁殖分布調査 2016-2021．東京都鳥類繁殖分布調査会.
- 榎本佳樹，1941．野鳥便覧．日本野鳥の会大阪支部，大阪.
- 藤巻裕蔵，1973．ヨタカの営巣 2 例．鳥，22: 30‐32.
- 平野敏明・野中純・石濱徹・長野大輔・手塚功・石川フク・川田裕美，2012．栃木県におけるヨタカの生息状況（2011）．*Accipiter*，18: A1-A7.
- 樋口広芳（編），1999．夏鳥の減少実態研究報告．東京大学渡り鳥研究グループ，東京.
- Kawamura, K., Y. Yamaura and F. Nakamura, 2023. Early successional habitats created through plantation harvesting benefit the Gray Nightjar (*Caprimulgus jotaka*): An 8-year survey in central Hokkaido, northern Japan, Journal of Forest Research, 28: 4, 289-296.
- 清棲幸保，1952．日本鳥類大図鑑 II．講談杜，東京.
- 静岡県くらし・環境部環境局自然保護課，2019．まもりたい静岡県の野生生物 2019　静岡県レッドデータブック＜動物編＞．p. 97.
- 静岡の鳥編集委員会，2020．静岡県の鳥類第 3 版．p. 75.
- 多田英行．2018．ヨタカバードリサーチ生態図鑑.
- 多田英行．2022．岡山県中部におけるヨタカの営巣環境の特徴．日鳥学誌，71: 137-144.
- 内田博，2011．ヨタカの抱卵行動．日鳥学誌，60: 238-240.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．p. 51．鳥類繁殖分布調査会.
- 山口孝・御手洗望，2018．東京都の伐採地と採石場におけるヨタカの生息状況．Strix，34: 17-26.
- 山梨県森林環境部みどり自然課，2018．2018 山梨県レッドデータブック山梨県の絶滅のおそれのある野生生物．p. 166.
- 八ヶ岳野鳥クラブ，2021．八ヶ岳南麓の野鳥鳥類目録 2021．p.38．八ヶ岳南麓の野鳥編集委員会.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

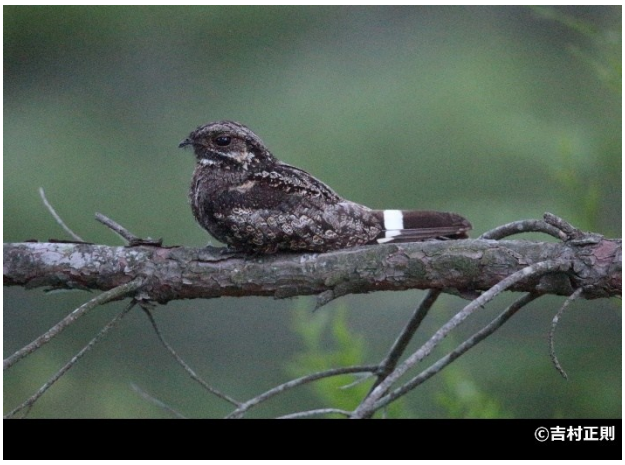
Caprimulgus jotaka jotaka has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Caprimulgus jotaka jotaka* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Bare area, Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland/Marsh/Stream, Sandy area/Wind-eroded area, Cliff/Talus area (e.g. limestone area), River headwater, Upper river basin, Middle river basin, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Bare area, Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Urban green area, Sandy area/Gravelly area, Middle river basin, Lower river basin, Estuary, Reservoir/Pond
Threat types:	Logging and wood harvesting, Grassland development, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	水村春香（山梨県富士山科学研究所）
Author:	Haruka Mizumura

公表年月：2026 年 3 月

アマツバメ目 Apodiformes　アマツバメ科 Apodidae

キタアマツバメ

***Apus pacificus pacificus* (Latham, 1801)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
全国鳥類繁殖分布調査の現地調査において、個体数、確認コース数ともに減少していた。確認コース数においては、30%以上の減少が認められ、今後も減少傾向が継続する懸念がある。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
本州以南に生息する亜種アマツバメは大きく減少しており、飛翔採食性の鳥類が軒並み減少していることを勘案すると、生息条件は悪化していると考えられ、今後もその傾向が続く可能性がある。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

キタアマツバメは北海道以北に分布するアマツバメの一亜種である。日本には夏鳥として渡来し、高山や海岸の崖に営巣する。個体数は減少傾向にあると考えられたが、本州以南に分布する亜種アマツバメと比べると減少傾向は小さかった。

基礎情報

【形態】

本亜種の体サイズはわからないが、亜種アマツバメが全長 17.9-20.5 cm、翼長 170-195 mm、ふ蹠長 10-13 mm、体重 39-56 g であり、それよりもやや大きいと考えられる。

雌雄同色で、全身黒く、腰と喉が白い。尾は長く、深い燕尾だが、閉じていることが多い。翼が鎌形になっているのが特徴である。亜種アマツバメと比べて、腰の白い部分が小さいとされる。

【生活史】

日本には北海道に夏鳥として渡来し、高山や海岸の崖に巣をつくる。国内では人工物への営巣はないが、サハリン等では建築物に営巣することもある。

【生息環境】

高山や海岸の崖に営巣し、広範囲を移動して、空中で飛翔性昆虫を採食する。

生息環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地 低標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等），洞窟・地下浅層・地下水域 【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

北海道以北に分布し、島嶼部にも生息する。崖に営巣するため、海岸や高山に生息し、その周辺で飛びながら採食するのが観察される。

現在の生息状況

【分布域の現況】

全国鳥類繁殖分布調査の結果によると、分布域に変化はなく、逆に広がっている傾向もあるが、現地調査によると、記録されるコース数も記録された個体数も減少していた。ただし、本州以南（亜種アマツバメ）と比べると、その減少度合いは小さかった。

【生息地の現況】

営巣環境については、キタアマツバメが営巣する崖は、海岸の崖や高山の崖などで、人為的な活動の影響を受けたりはしていないと考えられる。また、内陸の土の崖は、植生遷移などで崖を好む鳥にとっての営巣条件が悪くなっているが、キタアマツバメが利用する崖は岩の崖であるため、そのような影響も小さいと考えられる。

採食環境については、全国鳥類繁殖分布調査では、近縁種のハリオアマツバメ、ヒメアマツバメ、そして、同様に飛翔性昆虫を採食するツバメ類の減少が報告されており、原因等詳細は不明だが、採食環境は悪くなっているものと推測される。

【個体数の現況】

全国鳥類繁殖分布調査の現地調査で記録された個体数は 1990 年代の 1176 羽から 2010 年代は 971 羽と減少していた。本調査は、各調査地で 1 回しか調査をしておらず、また、

キタアマツバメは群れで記録される種のため、記録される羽数のばらつきは大きくなる。多地点で調査し、また、確認地点数でみても減少しており、減少していることは確かだが、この個体数の減少率を議論する際には、以上の事情に留意するべきである。

存続を脅かす要因

減少要因は明らかでないが、生息地の現況で述べたように、採食環境の影響が大きいのではないかと考えられる。

要因の区分：	（過去）	その他（食物となる昆虫の減少），不明
	（現在）	その他（食物となる昆虫の減少），不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版，pp. 438．日本鳥学会，東京．

- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Apus pacificus pacificus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Apus pacificus pacificus* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area, Mid-altitude area, Low-altitude area】Cliff/Talus area (e.g. limestone area), Cave/Shallow underground/Subterranean water body 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Other, Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	植田睦之（バードリサーチ）
Author:	Mutsuyuki Ueta

公表年月：2026 年 3 月

ハト目 Columbiformes　ハト科 Columbidae

カラスバト

***Columba janthina janthina* Temminck, 1830**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
釣りブームにより繁殖している沿岸島嶼、および筑前沖ノ島などの避難港では、停泊する漁船から、ノネコやドブネズミ、クマネズミなどの外来捕食者が侵入し、生息数が減少していると考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

種カラスバト（*Columba janthina*）の基亜種で、太平洋側では、伊豆諸島から宮崎にかけて、日本海側では最北端の山形県飛島を除くと、若狭湾より西の地域、九州の沿岸部の島嶼、薩南諸島、中北部琉球諸島、伊豆諸島の島嶼に生息している。本州・九州周辺の付属諸島、伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、沖縄諸島に留鳥として分布すると考えられている。国の天然記念物として保護されている。島嶼部に生息すること、季節移動をしている可能性もあり、正確な生息個体数の増減は不明である。ノネコやドブネズミ、クマネズミなどの外来捕食者が侵入した島嶼では個体数が減少していると考えられる。

基礎情報

【形態】

種カラスバト（*Columba janthina*）の基亜種で、本州・九州周辺の付属諸島、伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、沖縄諸島に留鳥として分布する。国の天然記念物として保護されている。国外では、韓国南部の海岸部とその付属諸島、鬱陵島、済州島にも分布する。

全身黒色で紫や緑色の金属光沢がある。喉は、特に緑色の金属光沢が強く、首から胸・背中にかけて緑色、背面中央は赤紫色の光沢がある。虹彩は褐色、嘴は暗青色で先端は緑色で、脚は赤色である。全長 40 cm で、ドバト（*Columba livia*）より大きい。翼長 213-246 mm、ふしょ長 30-38 mm。幼鳥は、頭部が暗褐色で金属光沢がなく、後頭部、背中、腰の羽縁だけに金属光沢があり、体の下面は褐色で赤錆色の縁がある。

【生活史】

温暖な島嶼部の常緑広葉樹に生息し、果実（液果、堅果）を食べる。本州・九州本土の海岸部でも観察されるが、確実な繁殖記録は少ない。伊豆諸島、薩南諸島、沖縄諸島では冬期に大きな集団ねぐらを作るため比較的よく観察できる。本州・九州の周辺の小島で繁殖しているため、本種の生息数、生息状況および生態については、詳しくわかっていない。照葉樹林の伐採にともない生息環境は急速に減少している。

八丈島から八丈小島へ採餌のために海を越えて往来することも知られている。一夫一妻で繁殖し、常緑樹の（樹上 1.5-7 m）や岩棚に小枝を組み合わせた粗末な皿型の巣を作るが、捕食者のいない島嶼部では地上営巣の記録もある。産卵期は 2 月から 9 月にかけて 1 卵を産卵する。多くの地域では留鳥と考えられるが、沖縄島では冬季に大きな群れを形成することが知られている。日本海側の粟島や飛島では、渡りの時期に通過する個体が観察されていることから、日本海北部の個体群は渡っている可能性もある。

【生息環境】

九州、薩南諸島、北部琉球諸島、伊豆諸島、高知県、西日本の日本海側の常緑広葉樹が分布する島嶼に分布する。伊豆諸島ではツバキ、スダジイ、タブなどの常緑広葉樹が茂る島嶼に生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部 海岸部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

日本海側では、周防灘、隠岐諸島、若狭湾、山形県飛島で繁殖期に記録がある（飛島、冠島、長島大島、鈴島、赤野島、隠岐、牛島）。東シナ海側では、鹿児島県から福岡県にかけて広い範囲の島嶼部に分布している（甑島諸島、天草諸島（桑島、大島、法ケ島）、五島列島、対馬、壱岐、玄界灘（高島、加唐島、松島、馬渡島、筑前沖ノ島、筑前大島、玄界島、姫島、馬島、地島、藍島、白島））。太平洋側では、琉球諸島（沖縄島、粟国島、伊是名島、伊平屋島、久米島、渡嘉敷島、座間味島、屋嘉比島、阿嘉島）、薩南諸島（上三島諸島（黒島）、屋久島、種子島、口永良部島、宇治群島、トカラ列島、奄美諸島）から九州東

岸（深島、無垢島、大分市高島、宮崎大島、枇榔島、小枇榔、宮崎大島）、四国沿岸（愛媛、宿毛沖の島、蒲葵島、宿毛姫島）、東京湾猿島、伊豆諸島（大島、利島、式根島、新島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、八丈小島、青ヶ島）にかけて広く分布している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本海側（飛島、冠島、牛島、隠岐の島）、九州の東シナ海の島嶼（甑島、対馬、五島列島、玄界灘（筑前沖ノ島、筑前大島、地島、藍島、白島））、琉球諸島・薩南諸島から伊豆諸島にかけての太平洋側の島嶼に広く分布する（沖縄諸島（沖縄島、粟国島、伊是名島、伊平屋島、久米島、渡嘉敷島、座間味島、屋嘉比島、阿嘉島）、トカラ列島、奄美群島、屋久島、種子島、口永良部島、宮崎大島、高知県（宿毛沖の島、蒲葵島、宿毛姫島）、伊豆諸島（大島、利島、式根島、新島、神津島、三宅島、八丈島、青ヶ島）。

【生息地の現況】

太平洋側では、伊豆諸島から宮崎にかけて、日本海側では山形県飛島、若狭湾より西の地域、九州の沿岸部の島嶼に生息している。薩南諸島、中北部琉球諸島の島嶼にも生息する。

【個体数の現況】

島嶼部に生息すること、季節移動をしている可能性があり、正確な個体数は不明である。そのため、個体数の増減傾向も不明。

存続を脅かす要因

ノネコやドブネズミ、クマネズミなどの捕食者が侵入した島嶼（筑前沖ノ島など）では個体数が減少していると考えられるが、個体数を推測できる情報はない。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，捕食（外来種による）
	（現在）	海岸開発，捕食（外来種による）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	カラスバト	*Columba janthina janthina*	NT
第４次 2019：	カラスバト	*Columba janthina janthina*	NT
第４次 2018：	カラスバト	*Columba janthina janthina*	NT
第４次 2017：	カラスバト	*Columba janthina janthina*	NT
第４次 2015：	カラスバト	*Columba janthina janthina*	NT

第４次:	カラスバト	*Columba janthina janthina*	NT
第３次:	カラスバト	*Columba janthina janthina*	NT
第２次:	カラスバト	*Columba janthina janthina*	NT
第１次:	カラスバト	*Columba janthina janthina*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【山形県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【千葉県】消息不明・絶滅生物(X)，【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【神奈川県】絶滅(繁殖期)、絶滅(非繁殖期)，【福井県】要注目，【三重県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【京都府】絶滅寸前種，【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【広島県】情報不足(DD)，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【佐賀県】準絶滅危惧種，【長崎県】準絶滅危惧(NT)，【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)，【鹿児島県】準絶滅危惧，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国指定天然記念物，鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【三重県】

参考文献

- 安藤温子・森由香・佐藤望，2017．伊豆諸島八丈島と八丈小島におけるカラスバトの島間移動行動．Bird Research，13: S35-S40．
- 安藤温子・市石博，2023．伊豆諸島八丈小島におけるカラスバトの営巣状況．Bird Research，19: S15-S22．
- 飯島大智・小田谷嘉弥・簗川堅治，2019．山形県飛島におけるカラスバト *Columba janthina* の最北の交尾・求愛行動の観察記録．日本鳥学会誌，68: 73-76．
- 岩崎由美・市石博，1999．伊豆大島・利島におけるカラスバトの塒．Strix，16: 89-98．
- 中村豊・児玉純一，2001．宮崎県の枇榔島と小枇榔におけるカラスバト *Columba janthina janthina* の地上営巣例．日本鳥学会誌，50: 37-41．
- 渡久地豊・金城道男・市田豊子，1996．沖縄北部におけるカラスバト *Columba janthina* の夏期の集団塒．Strix，14: 177-181．
- 山本健次郎，1998．「この鳥を守ろう」の現在 第 34 回 カラスバトその 2；光市牛島のカラスバトを中心に．私たちの自然，437: 6-9．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Columba janthina janthina has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Columba janthina janthina* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest
Threat types:	Coastal development, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Mie】.



執筆者:	永田尚志（新潟大学）
Author:	Hisashi Nagata

公表年月：2026 年 3 月

ツル目 Gruiformes　クイナ科 Rallidae

ヒクイナ

***Zapornia fusca erythrothorax* (Temminck & Schlegel, 1849)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
全国鳥類繁殖分布調査の結果、2010 年代において繁殖が確認されたメッシュ数は 1990 年代よりわずかに増加していたが、1970 年代と比較すると大幅に少なかった。同調査において、日本海側の新潟県や山形県、岩手県、青森県、北海道では 1970 年代の調査で本種の生息が確認されていたものの、2010 年代の調査では生息確認メッシュが得られなかった。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
近年、大分県において、宅地開発、圃場整備、水田の乾田化などにより本種の生息環境が悪化しており、観察頻度が減少している。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

本亜種は、北海道、本州、佐渡、四国、九州で繁殖し、冬鳥あるいは留鳥として生息する。おもにスゲ類やヨシなどの湿地性植物が繁茂する池沼や河川の水深約 10 cm 以下の水辺、イネの生育する水田などに生息する。鳥類繁殖分布調査 1978 では九州から北海道まで広く生息・繁殖が確認されていた。しかし、1990 年代の全国鳥類繁殖分布調査では 50 メッシュで記録されただけであった。さらに、2016-2020 年の全国鳥類繁殖分布調査では関東以南の太平洋側や九州地方での生息状況が回復傾向にあることが分かったが、日本海側や東北地方では生息状況が悪化したままで、北海道では生息地が確認されなかった。一方、越冬期の生息分布は 1970 年代には九州地方の一部に生息が確認されていただけであったが、2010 年代では関東以南の主に太平洋側で著しい分布拡大が認められるとともに、一部の地域では越冬個体数の増加も確認されている。

協力者:　植田睦之（バードリサーチ）

基礎情報

【形態】

全長 22.7 cm（榎本 1941）。後頭部から体上面は暗緑褐色、前頭部から首、胸、腹部上部が赤褐色をしており、脇から下尾筒は暗緑褐色で白色の横縞がある。嘴は黒褐色で脚は赤色をしている。雌雄同色だが、メスのほうが胸から腹部上部の赤色味が少ない。

【生活史】

本亜種は日本では夏鳥（北海道、本州北部）あるいは留鳥（本州中・南西部）として生息・繁殖する（日本鳥学会 2012）。生息環境は、水田や池沼、河川のおもに水深 10 cm 以下のイネやスゲ類などの植物が生育する湿原や水辺に生息する。関東以南および太平洋側の地域では留鳥として生息する。繁殖期（5 月から 8 月）にはつがいで生息し、雄は「クイナの叩き」として知られるキョ、キョ、キョ、キョ、コン、コン、コン、コンと次第にテンポが速くなる鳴き声で日中や夜間に鳴く。秋冬期にはおもに単独で生息する。秋冬期や早春にはコッコッコなどと鳴きながらスゲ類やイネ科植物が茂った草地を歩きながら採食する。近くに別の個体が生息する場合にはカイツブリに似たギュルルルーと聞こえるやや大きな声で鳴く。5 月ごろから 8 月にかけて地上の植物の間やイネの地上 20 cm ほどの高さの株のなかに周りの植物を使って碗状の巣を造り、産卵・抱卵する。ヒナは全身が黒い羽毛で覆われており、孵化した直後から親鳥について歩きながら育雛される。北日本の個体は、冬季には暖地へ渡る。食性は、昆虫類やミミズ、小型の魚類、植物の葉や芽などを食べる。

【生息環境】

おもにスゲ類やヨシなどの湿地性植物が繁茂する池沼や河川の水深約 10 cm 以下の水辺、イネの生育する水田などに生息する。ときには海抜 1500 m 前後の高層湿原にも生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】草地，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，河川中流域，ため池・池沼 【陸域_平地部】田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，小河川，ため池・池沼
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

北海道、本州、佐渡、四国、九州で繁殖し、冬鳥あるいは旅鳥として御蔵島、八丈島、対馬、種子島、屋久島に渡来する（清棲 1978）。鳥類繁殖地図調査 1978 では、九州から北海道まで広く生息が確認されており、関東地方や愛知県のほか石川県や新潟県などの日本海側や岩手県、宮城県、北海道でも繁殖確認メッシュが記録されていた。

現在の生息状況

【分布域の現況】

2021 年に発行された全国鳥類繁殖分布調査報告によると、ヒクイナの 2016-2021 年の繁殖期の生息状況は A（繁殖を確認）が 21 メッシュ、B（繁殖は確認できなかったが繁殖の可能性がある）が 64 メッシュ、C（繁殖の可能性は何ともいえない）が 38 メッシュで、合計 123 メッシュ（沖縄・種子島等を含む）で生息が確認された（植田・植村 2021）。繁殖期の生息確認メッシュ数は、1970 年代の生息確認メッシュ 159 メッシュより少なかったが 1990 年代の生息確認メッシュ数 50 メッシュより大幅に増加していた。しかし、2010 年代では 1970 年代に記録があった本州中部の内陸部や東北地方では記録されたメッシュは極めて少なく、北海道では生息が確認されたメッシュはなかった。一方、2023 年に発行された全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年では、関東以南の主に太平洋側に分布が著しく拡大していた（植田・植村・山﨑 2023）。

【生息地の現況】

農業用溜池や洪水対策の遊水地など水深の浅い湿地環境が維持されている場所ではヒクイナの生息が確認されている一方で、河川では洪水対策用の護岸工事や砂礫地の撤去などによって本種の選好する湿地性の植物が繁茂する環境が減少している。さらに、水田では除草作業や乾田化などによって繁殖の攪乱や餌資源の減少などの阻害要因が継続的に存在する。

【個体数の現況】

主に関東以西の太平洋側では 2010 年代以降になると生息地が増加傾向にあり（植田・植村 2021）、良好な湿地性草原が広がる地域では個体数も増加傾向にあることが報告されている（渡辺・平野 2011）。個体数の増加や生息地の分布拡大は繁殖期ばかりでなく、冬期の個体数増加や分布拡大の傾向がある（たとえば籠島 2022、植田・植村・山﨑 2023）。さらに、栃木県南部の渡良瀬遊水地では 2022 年 1 月に半径約 100 m の範囲内で少なくとも 6 羽の越冬個体を記録した（平野未発表）。一方で、日本海側の福井県などでは繁殖期・冬期を含めて生息数は少ないままであることが報告されている（出口 2017）。

存続を脅かす要因

河川改修による水辺のヨシやスゲ類などの植物の減少による生息環境の悪化、農作業（乾田化、干し上げ）による餌資源の減少。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備

特記事項

地球温暖化の影響で北日本での冬季における分布拡大や個体数が増加する可能性がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ヒクイナ	*Porzana fusca erythrothorax*	NT
第４次 2019:	ヒクイナ	*Porzana fusca erythrothorax*	NT
第４次 2018:	ヒクイナ	*Porzana fusca erythrothorax*	NT
第４次 2017:	ヒクイナ	*Porzana fusca erythrothorax*	NT
第４次 2015:	ヒクイナ	*Porzana fusca erythrothorax*	NT
第４次:	ヒクイナ	*Porzana fusca erythrothorax*	NT
第３次:	ヒクイナ	*Porzana fusca erythrothorax*	VU
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd),【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【宮城県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【秋田県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山形県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【茨城県】絶滅危惧ⅠA 類,【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク),【群馬県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【埼玉県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(繁殖期),【新潟県】絶滅危惧Ⅰ類(EN),【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【山梨県】情報不足(DD),【長野県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【岐阜県】絶滅危惧Ⅱ類,【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(繁殖),準絶滅危惧(NT)(通過),【三重県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【滋賀県】絶滅危機増大種,【京都府】絶滅危惧種,【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【兵庫県】B ランク,【奈良県】絶滅危惧種,【和歌山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山口県】準絶滅危惧(NT),【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【香川県】準絶滅危惧(NT),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】準絶滅危惧(NT),【長崎県】準絶滅危惧(NT),【熊本県】準絶滅危惧(NT),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【宮崎県】準絶滅危惧(NT-g),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 出口翔大，2017．ヒクイナ *Przana fusca* の福井市南西部における生息調査および福井県内の過去の生息記録．福井市自然史博物館研究報告，No.64: 49-54.
- 平野敏明，2006．渡良瀬遊水地における繁殖期のクイナ・ヒクイナの生息状況と生息環境．Bird Research，vol.2: A35-A46.
- 平野敏明，2010．ヒクイナ調査結果報告：日本における 2000 年代後半のヒクイナの生息状況．http://www.bird-research.jp/1_katsudo/hikuina/hikuina2010.pdf
- 籠島恵介，2022．ヒクイナの香川県および徳島県における越冬状況．Bird Research，vol.22: S1-S4.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京.
- 植田睦之・奴賀俊光・山﨑優佑，2023．全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年．pp. 170．特定非営利活動法人 バードリサーチ・公益財団法人 日本野鳥の会，東京.
- 渡辺美郎・平野敏明，2008．神戸市西区および稲美町一帯におけるヒクイナの生息状況．日本鳥学会 2008 年度大会講演要旨集，pp. 41.
- 渡辺美郎・平野敏明，2009．神戸市西区および稲美町一帯におけるヒクイナの越冬期の生息状況．日本鳥学会 2009 年度大会講演要旨集，pp. 110.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Zapornia fusca erythrothorax has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Zapornia fusca erythrothorax* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Middle river basin, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Field preparation
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	平野敏明（バードリサーチ）
Author:	Toshiaki Hirano

公表年月：2026 年 3 月

ツル目 Gruiformes　ツル科 Gruidae

タンチョウ

***Grus japonensis* (Müller, 1776)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　—	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　—

分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。

【判断理由】

タンチョウが繁殖できる湿原は概して減少しており、主要な繁殖地の一つである釧路湿原では、湿原の乾燥化やハンノキ林の拡大が進んでいる。

（補足）

北海道の個体数は、1952 年冬に 33 羽が確認されただけで、見落としを考慮しても、かなり深刻な状況であったが、その後、冬季の給餌などを中心とする保護対策によって、個体数は回復傾向にある。ただし上記のとおり、主要な営巣環境である湿地は、開発や乾燥化、海岸浸食などの影響で面積が減っている。北海道では、保護対策によって個体群が維持されているため、個体群の存続基盤は脆弱で、現時点では絶滅の危険度は小さくなったと考えられるものの、生息条件の変化によっては、「絶滅危惧」として上位カテゴリーに移行する要素があると考えられ、今後も注視が必要である。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

国内では、北海道に約 1,900 羽が、留鳥として生息している。繁殖地は、主に釧路湿原や道東の湿地群を含む根釧原野と十勝地方であるが、近年ではオホーツク地方、宗谷地方、石狩空知地方などにも分布域が拡大している。冬は大半が釧路地方に集まるため、越冬地の分散化が課題であるが、近年では道央圏で越冬する個体が徐々に増えつつある。1982 年以降、国後島と歯舞諸島でも少数の繁殖が確認されている。ユーラシア大陸の東部には、約 1,400 羽の大陸個体群が生息しているが、大陸個体群は近年減少傾向である。

基礎情報

【形態】

目から頸の上部にかけてと、次列、三列風切羽が黒いほかは白色の羽毛である。頭頂は皮膚が赤く裸出している。成鳥の背の高さ（立ったときの頭頂までの高さ）は、約 150 cm、全長（嘴端～尾羽）102～147 cm 程（平均ではオス 136 cm、メス 126 cm）、体重は 4～10.5 kg（平均ではオス 7.8 kg、メス 6.9 kg）である（いずれも成鳥）。

【生活史】

日本の個体群は、繁殖地と越冬地間の移動はあるが、繁殖地も越冬地も北海道内にあり、留鳥である。北海道では 2 月下旬～4 月初旬に繁殖地に戻り、浅い水の中に枯れたヨシを積み重ねて巣を作り産卵する。巣は直径 1.5～2.5 m、高さ 30 cm 程である。一腹産卵数は平均 1.8 卵である。4 月中旬頃から孵化が始まり、雛は通常数日以内に巣を離れる。8 月中旬～9 月に飛べるようになり、10～11 月頃には収穫後のトウモロコシ畑などで採餌する群れが見られる。11 月～3 月末は主に給餌場に集まる。

【生息環境】

繁殖期には低層湿原、中間湿原、沼沢、河川、干潟などにすみ、通常ヨシ群落の中に営巣するが、未利用の放牧地や背の低いササ草原に営巣することもある。繁殖後期から秋期には牧草地や畑で餌を採ることが多い。冬は不凍の河川でねぐらをとり、給餌場のほか湧水地、河川、放牧地などで採餌する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，河川下流域，河口域，潟・湖・ダム湖 【海域（沿岸）_潮間帯】干潟
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

北海道に生息する個体群と、ユーラシア大陸の東部に分布する大陸の個体群に分けられている。北海道の個体群は留鳥であるが、大陸では、アムール川の本・支流沿いのロシア東部や中国北東部などで繁殖し、冬は中国江蘇省沿海部や朝鮮半島などで越冬する、渡りをする個体群である。北海道では、主に東部地域の十勝、釧路、根室地方に生息していたが、近年ではオホーツク地方や宗谷地方のほかに、空知、石狩、胆振地方などの道央圏にも分布域が拡大している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1980 年代までの繁殖地は、北海道東部（十勝、釧路、根室）に限られていた。網走地方では、1982 年に繁殖が確認されたが、その後の繁殖記録はしばらく途絶え、1999 年からまた繁殖が確認されるようになる。宗谷地方では 2004 年から繁殖が確認されるようになり、最近では日高地方、胆振地方、空知地方でも繁殖が確認されるようになっており、繁

殖地域は拡大している。

全国鳥類繁殖分布調査の結果から算出した出現範囲は約 61,630 km²、生息地面積は約 11,656 km²と計算される。

越冬する地域について、北海道庁が実施している第 1 回タンチョウ越冬分布調査（2024 年 12 月 5 日実施）では、総確認数の 976 羽のうち、北海道東部（十勝、釧路、根室）では 899 羽（92%）が確認され、越冬個体は東部に集中しているが、空知地方、石狩地方、胆振地方、日高地方、オホーツク地方でも確認されており、少数であるが越冬地の分散化が進みつつある。

【生息地の現況】

生息地の湿原が大規模に開発されて減少したが、近年繁殖つがい数が増加するにしたがって、河川改修後に残された河跡湖や河川上流部の小湿原での営巣例が多くなってきた。越冬地は、釧路湿原周辺の給餌場が中心であるが、近年は十勝平野西部や、かつて越冬が見られなかった浜中～根室地域でも越冬するつがいが増えているほか、道央圏の空知、石狩、胆振地方でも越冬期の一斉調査で個体が確認されるようになってきている。

【個体数の現況】

1952 年の冬に 33 羽が確認された。冬期の給餌により個体数は増加し、北海道庁が主として進めているタンチョウ越冬分布調査では、2004 年 2 月に 1,000 羽を越えたことが確認され、その後も個体数の増加は続いており、2025 年 1 月下旬の調査では 1,927 羽が確認された。北海道内の繁殖つがい数は、2013 年には 400 つがいを超えた程度であったが、最近では繁殖地全域での航空機調査が実施されていないので、正確な繁殖つがい数はわからない。

1989 年度の 1 月下旬の調査結果では 441 羽であったが、2022 年度には 1,344 羽まで増加しており、この調査結果に基づく年増加率は約 3.3%と計算できる。タンチョウ保護研究グループの結果では、2022 年度の 1,850 羽まで増加しており、1952 年度の 33 羽から計算すると年増加率は約 5.0%と算出でき、北海道（日本）の個体群は、年増加率が 3-5%で増加傾向といえる。

最近の冬季の各調査などから、2022 年の生息数は約 1,800 羽（1,500～1,900 羽）、うち幼鳥（0 歳）の個体数は約 200 羽（157～222 羽）と推定できる。3 年で成鳥になる（正富 2000）。幼鳥（0 歳）と亜成鳥（1～2 歳）が死亡しないと仮定すると、幼鳥と亜成鳥の個体数は 600 羽と計算ができ、これらを差し引いた 1,200 羽が成鳥（成熟個体）の個体数と試算できる。実際には、幼鳥と亜成鳥が少なからず死亡することや、近年さらに増加していることを考慮すると、成熟個体は 1,200 羽より多いと考えられる。しかしながら、生息数が増加する一方で、生息数の相当割合が冬期間に給餌又はこぼれた飼料等の人為的な餌資源に依存しているほか、不安定な環境で営巣する番も増加しており、種の存続の基盤は依然として不安定なままである。

存続を脅かす要因

北海道東部の個体群は、冬季に給餌で維持されていると思われ、個体群は保全対策によって維持されている保全依存種であると考えられる。給餌場では個体が集中するため、感染症発生のリスクがあるほか、電線衝突事故、交通事故（自動車および列車）、牛の屎尿溜めに落ちる事故などのリスクがある。

要因の区分：	（過去）	交通事故，人工構造物への衝突
	（現在）	交通事故，感染症/病原菌，人工構造物への衝突

特記事項

ミトコンドリア DNA を使った研究では、北海道個体群は 3 つの遺伝タイプしか見つかっておらず、かつ存在比率も一つのタイプに大きく偏っており、大陸個体群と比べても、北海道個体群の遺伝的な多様性は極めて低い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	タンチョウ	*Grus japonensis*	VU
第４次 2019：	タンチョウ	*Grus japonensis*	VU
第４次 2018：	タンチョウ	*Grus japonensis*	VU
第４次 2017：	タンチョウ	*Grus japonensis*	VU
第４次 2015：	タンチョウ	*Grus japonensis*	VU
第４次：	タンチョウ	*Grus japonensis*	VU
第３次：	タンチョウ	*Grus japonensis*	VU
第２次：	タンチョウ	*Grus japonensis*	VU
第１次：	タンチョウ	*Grus japonensis*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu)，【青森県】絶滅野生生物(EX)，【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【鳥取県】絶滅(EX)，【山口県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，国指定特別天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 北海道地方環境事務所，2023．生息地分散行動計画（第 2.0 版）．北海道地方環境事務所，札幌．

- Koga, K., 2008. The status review of the Tancho in Hokkaido: current threats. The Current Status and Issues of the Red-crowned Crane. In: K. Koga, D. Hu and K. Momose (eds.), 231pp. Tancho Protection Group, Kushiro, pp. 13-20.
- 正富宏之，2000．タンチョウ．北海道新聞社，札幌．327pp.
- 正富宏之，2000．タンチョウ そのすべて．北海道新聞社，札幌.
- 正富宏之・百瀬邦和・古賀公也・正富欣之・松本文雄，2008．2008 年の北海道におけるタンチョウの繁殖状況．専大北海道地域共同研究センター紀要，3: 33-58.
- 百瀬邦和，2012．2012 年 1 月のカウント総数は 1463(191)（仮）．TKG ニュース No52．タンチョウ保護研究グループ発行.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Grus japonensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Grus japonensis* is listed as NT under criteria ②.

Although the population is recovering, the following notable trends in parts of its distribution, especially the decreasing wetlands that serve as breeding grounds, are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Lower river basin, Estuary, Lagoon/Lake/Dam 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Intertidal mudflat
Threat types:	Vehicle collision, Disease, Collision with man-made structures
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Nationally Designated Special Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	玉田克巳（地方独立行政法人北海道立総合研究機構）
Author:	Katsumi Tamada

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae

キョウジョシギ

***Arenaria interpres interpres* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①

基準 A:　VU 未満	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
分析による個体数変化は、2007 年から 2017 年の平均の結果では 30%以下で VU の基準を満たさないが、秋期のみでは減少率は 30%を上回り、2017 年以降も減少傾向が継続している（環境省自然環境局生物多様性センター 2020）こと、干潟などの埋立は回復の見込みが低く不可逆的であることから、今後絶滅危惧のカテゴリーに移行する可能性が高いと考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

嘴が細長く、脚が長い中型のシギ類。繁殖羽は、頭部から胸部は白色と黒色の模様、上面は赤褐色、黒色、白色のまだら模様になる。アメリカ大陸、ユーラシア大陸の北極圏で繁殖し、赤道付近の各地で越冬する。国内では繁殖せず、全国的に渡り鳥として確認され、本州以南では一部越冬する。沿岸や湿地の利用可能な生息地が減少している。

基礎情報

【形態】

全長約 20 cm。嘴は黒く、太く短い、脚も短く横長体型の小型シギ類。雌雄はほぼ同色。繁殖羽では、頭部から胸部は白色と黒色の模様、上面は赤褐色、黒色、白色のまだら模様になる。腹部は白色。脚は橙赤色。雌の頭部は褐色味がある。非繁殖羽は、全体的に赤色味を失う。幼鳥は非繁殖羽に似るが、より黒色味が強く、淡色の羽縁がある。飛翔時に背中、肩羽、翼帯、尾羽基部の白色が目立つ。「ギョギョギョ」など濁った声で鳴く。特徴的な色彩で他種と混同することは少ない。

【生活史】

国内では繁殖せず、渡り鳥として春期、秋期に全国で観察され、一部越冬する個体もみられる。渡り期の個体数は春期のほうが多い。主に一夫一妻で繁殖を行う。5 月～7 月に北極圏のツンドラ地帯の草地に営巣する。通常 4 個産卵する。非繁殖期は小群で過ごす。水辺を歩きまわり採食し、小石や木片を嘴でひっくり返すなどして、昆虫類、甲殻類、貝類などを餌として利用する。コアジサシの卵を食べた報告もある。

【生息環境】

干潟、河口などの沿岸の水辺や水田などの内陸の湿地にも渡来するが、海岸部の岩礁地やコンクリートの港湾施設などを最もよく利用する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，河口域，潟・湖・ダム湖，砂浜・礫浜，海崖・岩浜・岩礁（磯），汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟 【海域（沿岸）_潮間帯】岩礁（磯），干潟，砂底・礫底
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

国外では、アメリカ大陸、ユーラシア大陸の北極圏、環極地域に繁殖分布し、赤道付近の沿岸地域で越冬する。国内では、全国的に渡り鳥として確認され、本州以南で一部越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現況でも全国的に確認されるが、海岸、水田などの水辺に生息地が限られるため、水辺環境の消失は、国内分布に影響を与えている可能性がある。

【生息地の現況】

干潟や湿原の減少により利用可能な生息地が減少している。

【個体数の現況】

IUCN のレッドリストでは、低危険種（Least Concern）とされている。Waterbirds Populations Portal（Wetland International）では、東アジアのフライウェイでは全体で約 3 万羽、減少傾向と推定されている。

2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、キョウジョシギの春期の推定変化率は、−50.93%（30 年前比：有意）、−9.69%（20 年前比）、−34.53%（10 年前比：有意）、秋期の推定変化率は、−11.22%（30 年前比）、10.08%（20 年前比）、−64.38%（10 年前比：有意）（Amano et al. 2010）であり、春秋期ともに減少を示していた。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 0.75（春期 0.97、秋期 0.53）、2017 年時点で、平均 0.53（春期 0.70、秋期 0.36）。継続して春期・秋期とも減少傾向が見られている。特に秋期は 30%以上の減少を示している。

存続を脅かす要因

干潟・湿地の開発による採餌場所、餌動物の減少。農耕地の乾田化、放棄水田の草地化、農法や農業環境の変化による生息地の減少。越冬地での狩猟・捕獲による個体数減少も懸念されている。長距離の渡りを行う種に関しては、国内のみに減少の要因を求めることが困難な場合もあり、繁殖地、中継地、越冬地それぞれに脅威がある。

要因の区分：	（過去）	河川開発，海岸開発，圃場整備
	（現在）	河川開発，海岸開発，圃場整備

特記事項

日本に渡来するガンカモ類やシギ・チドリ類などの渡り性水鳥類が利用する主要な渡来地については、河川湖沼 84 ヶ所のうち 41.7%が保護区域未指定、干潟・湿地 152 ヶ所のうち 66.7%が保護区域未指定であり、干潟・湿地を利用する鳥が多数訪れる場所については保護指定が遅れている現状が指摘されている（三上ら 2012）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—

第１次:　　—　　—　　—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【秋田県】準絶滅危惧(NT),【福島県】準絶滅危惧(NT),【千葉県】要保護生物(C),【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（区部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（南多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(非繁殖期),【福井県】要注目,【滋賀県】希少種,【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【兵庫県】C ランク,【香川県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】準絶滅危惧(NT),【長崎県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: an example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservation, 143 (9): 2238-2247.
- IUCN 2023. The IUCN Red List of Threatened Species. Version 2022-2. <https://www.iucnredlist.org>
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田市．
- 三上かつら・高木憲太郎・神山和夫・守屋年史・植田睦之，2012．渡り性水鳥類の渡来地の保護区域指定の現状．日本鳥学会誌，61(1): 112-123．
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本野鳥生態図鑑〈水鳥編〉．保育社，大阪．
- Nettleship, D. N. 2020. Ruddy Turnstone (*Arenaria interpres*), version 1. 0. In Birds of the World (S. M. Billerman, Editor). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA. https://doi.org/10.2173/bow.rudtur.01
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from http://wpe.wetlands.org/ on Mon Sep. 252023.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Arenaria interpres interpres has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Arenaria interpres interpres* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Farmland, Estuary, Lagoon/Lake/Dam, Sandy beach/Pebble beach, Sea Cliff/Rocky beach/Reef, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland) 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Reef, Intertidal mudflat, Sandy bottom/Gravelly bottom
Threat types:	River development, Coastal development, Field preparation
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae

トウネン

***Calidris ruficollis* (Pallas, 1776)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①

基準 A:　VU 未満	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
分析による個体数変化は、2007 年から 2017 年の平均の結果では 30%以下で VU の基準を満たさないが、秋期のみでは減少率は 30%を上回り、2017 年以降も減少傾向が継続していること（環境省自然環境局生物多様性センター 2020）、全国的に減少傾向にあるが、特に都市部の東京湾、大阪湾、博多湾などでの減少が大きい。干潟などの埋立は回復の見込みが低く不可逆的であること、水田等も、今後、放棄や転作等により減少が懸念されることから、今後絶滅危惧のカテゴリーに移行する可能性が高いと考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

　足は黒色で短く、黒い嘴は頭長より短い小型のシギ。雌雄同色。繁殖羽は顔から胸部まで赤褐色、背面は赤褐色、黒色、白色のまだら模様で、腹部は白色。非繁殖羽は、頭頂から背面にかけて灰褐色、顔から腹部にかけては白色。国内では繁殖せず、渡り鳥として春期、秋期に全国で観察される。干潟や砂浜、水田などの湿地を採食地として利用する。河口、干潟などの浅海域、水田などの湿地に生息するため、河川や海岸開発、圃場整備による生息環境の減少や変化が個体数減少に影響していると考えられる。

基礎情報

【形態】

全長 15 cm。足は黒色で短く、黒い嘴は頭長より短い小型のシギ。雌雄同色。繁殖羽は顔から胸部まで赤褐色、背面は赤褐色、黒色、白色のまだら模様で、腹部は白色。非繁殖羽は、頭頂から背面にかけて灰褐色、顔から腹部にかけては白色。幼羽は、非繁殖羽に似るが、上面に褐色味がかかる。ヨーロッパトウネンと酷似する。

【生活史】

国内では繁殖せず、渡り鳥として春期、秋期に全国で観察される。繁殖期は、5 月～7 月。亜寒帯のツンドラ地帯で、谷間、丘などの草原に営巣する。一腹卵数は 3～4 個で、通常 4 個産卵する。雌雄交代で抱卵し、育雛は雄が行う。ミミズ、ゴカイ、甲殻類、昆虫、小貝、草の種子などを食べる。干潟表面に発生するバイオフィルムも採食する。非繁殖期には群れで生活する。

【生息環境】

渡り期に、干潟や砂浜、水田などの湿地に渡来する。薄く水に浸かるところや、乾きかけた泥地などで採食する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，湿地・湿原，河口域，砂浜・礫浜，汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯】干潟
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

ユーラシア大陸の北極圏で局地的に繁殖し、東南アジアからオセアニアで越冬する。国内では、春・秋の渡り期に干潟を中心とした各地の湿地で観察される。

日本には旅鳥として各地に多数が現れ、最もふつうにみられる小型のシギと認識されていた。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現況でも全国的に確認されるが、湿地、陸水域、海岸などの水辺に限られるため、水辺環境の消失は国内分布に影響を与えている可能性がある。

【生息地の現況】

干潟や湿原の減少により利用可能な生息地が減少している。1945 年以後の消失干潟の累計は 33,120 ha、1945 年から 2005 年の間の 60 年間の干潟の消滅率は 40%になる（花輪 2006）。

【個体数の現況】

IUCN のレッドリストでは、準絶滅危惧種（Near Threatened）とされている。WaterbirdsPopulations Portal（Wetland International）では、東アジアのフライウェイで、個体

数約 47.5 万、減少傾向とされている。

2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、トウネンの春期の推定変化率は、21.04%（30 年前比）、66.99%（20 年前比）、-15.72%（10 年前比）、秋期の推定変化率は、-58.26%（30 年前比：有意）、23.77%（20 年前比）、-23.47%（10 年前比）（Amano et al. 2010）であり、春期・秋期とも著しい減少を示していた。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 1.09（春期 0.84、秋期 1.34）、2017 年時点で、平均 0.85（春期 0.79、秋期 0.90）。春期・秋期とも減少傾向が見られている。特に秋期は増加傾向が見られたのちに減少している。

存続を脅かす要因

河口、干潟などの浅海域、水田に生息するため、河川や海岸開発、圃場整備による生息環境の減少や変化。

要因の区分：	（過去）	河川開発，海岸開発，湿地開発，圃場整備，捕獲・狩猟/園芸採取，混獲・錯誤捕獲
	（現在）	河川開発，海岸開発，湿地開発，圃場整備，捕獲・狩猟/園芸採取，混獲・錯誤捕獲，気候変動

特記事項

日本に渡来するガンカモ類やシギ・チドリ類などの渡り性水鳥類が利用する主要な渡来地については、河川湖沼 84 ヶ所のうち 41.7%が保護区域未指定、干潟・湿地 152 ヶ所のうち 66.7%が保護区域未指定であり、干潟・湿地を利用する鳥が多数訪れる場所については、保護指定が遅れている現状が指摘されている（三上ら 2012）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—

第１次:　　—　　—　　—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【千葉県】一般保護生物(D),【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（区部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（南多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(非繁殖期),【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(通過),【滋賀県】希少種,【京都府】絶滅危惧種,【大阪府】準絶滅危惧(NT),【岡山県】準絶滅危惧,【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland,　2010. A framework for monitoring the status of populations: an example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservation, 143: 2238-2247.
- 天野一葉，2006．干潟を利用する渡り鳥の現状．地球環境，11 (2): 215-226.
- IUCN 2023. The IUCN Red List of Threatened Species. Version 2022-2. <https://www.iucnredlist.org>
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田市.
- 三上かつら・高木憲太郎・神山和夫・守屋年史・植田睦之，2012．渡り性水鳥類の渡来地の保護区域指定の現状．日本鳥学会誌，61(1): 112-123.
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- Van Gils, J., P. Wiersma, G. M. Kirwan and C. J. Sharpe, 2020. Red-necked Stint (*Calidris ruficollis*), version 1. 0. In Birds of the World (J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie, and E. de Juana, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA. https://doi.org/10.2173/bow.rensti.01
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp. wetlands. org on Tue Sep 262023.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Calidris ruficollis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Calidris ruficollis* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are

likely to continue. ①The number of individuals is decreasing.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Farmland, Wetland, Estuary, Sandy beach/Pebble beach, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】Intertidal mudflat
Threat types:	River development, Coastal development, Wetland development, Field preparation, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Bycatch, Climate change
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae　　日本固有

アマミヤマシギ

***Scolopax mira* Hartert, 1916**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　―	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
生息条件を悪化させる要因として、森林伐採や交通事故、ノネコによる捕食が挙げられる。これらの問題の対策は検討されており、また一部実行にも移されているが、交通事故は増加傾向にあり、また生息地からのノネコの排除も完了していない。今後、より効果的な対策を継続的に実施していく必要がある。その具体案が提示されないうちは生息条件の悪化が否定できない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

奄美大島、加計呂麻島、徳之島などで繁殖する日本固有種。冬期に渡ってくるヤマシギ（*Scolopax rusticola*）は奄美群島で禁猟とされているため、現時点で混獲の危惧はない。森林伐採の減少と外来の哺乳類フイリマングースの根絶にともない、個体群の回復が期待される。小規模に続く森林伐採、自動車による交通事故、ノネコによる捕食などは、本種の生息に負の影響を与えている。

基礎情報

【形態】

翼長約 180-220 mm、ふ蹠長 43-50 mm。体重 380-510 g。羽色は褐色、翼に暗色や灰褐色小斑が混じり、背中に太い縦縞斑、頭頂に黒い横縞が入る。過眼線と頬線は黒く、胸から腹に細い褐色の横縞がある。越冬するヤマシギより本種の方が脚や嘴が長く太めで、立ち姿でかかとが見える。繁殖期には飛翔時ににごった声を発する。歩行時はヤマシギのほうが前傾姿勢に見える。

【生活史】

2 月頃つがいが形成され、3 月頃に求愛行動が見られる。森林の中で地上営巣し、一腹卵数は 2-4 個。早いものでは 3 月半ば、通常は 4-6 月に、林道などで雛や若鳥が観察される。標識調査によると、標識してから再確認されるまでの期間は最長で 7 年強であった。従来夜行性であるといわれてきたが、近年の観察で昼間も林内で採食などの活動をしていることがわかっている。

【生息環境】

森林内に生息し、夜間には林道上でも見られるが、同じ個体が林道上で複数回観察される割合は低い。複数回観察された場合の地点間の距離は平均で 550 m ほどであり、発信器を装着して追跡した個体の行動圏は 0.2 km^2から 1.76 km^2であった。林道に出現する数は月の明るい夜ほど多い傾向がある。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地 【陸域_平地部】森林，草地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

奄美大島、加計呂麻島、徳之島の森林にまとまった繁殖個体群が見られる。より小さな請島、与路島でも繁殖する。さらに小さなハンミャ島でも夏期に観察されたことがある。奄美群島の喜界島、沖永良部島で冬期に観察記録がある。沖縄島には少数が生息するとされ、渡嘉敷島や久米島、伊平屋島、阿嘉島でも観察記録があるが、繁殖は未確認。奄美大島では、1960 年代から 1990 年代に行われた森林伐採によって分布域が縮小したと考えられる。加えて、フイリマングースの個体数と分布域の増加にともなって、特に名瀬市（現奄美市名瀬）近郊の生息密度が 1990 年代に著しく低下していた。

現在の生息状況

【分布域の現況】

奄美大島では、森林伐採の減少とフイリマングース防除事業の進展により分布域は 1990 年代に比べ拡大したと考えられる。奄美大島全域でフイリマングースの低密度化が実現した 2010 年前後には、名瀬近郊の金作原周辺でも少数の個体が観察されるようになった。ただし、回復傾向はゆっくりしている。笠利半島では、近年、繁殖記録が得られている。

【生息地の現況】

1960-80 年代に広葉樹林が多く伐採され、好適な生息地面積の縮小と分断化が著しく進んだ。また、全域で道路の舗装と拡幅が進み、個体群に影響を与えた可能性がある。1990 年代以降、森林伐採量は低下して、森林は回復しており、生息地の環境もよくなっていると思われる。ただし森林伐採は小規模ながら継続して行われている。フイリマングースの根絶もあいまって、生息域は少しずつ広がっていると考えられる。

【個体数の現況】

奄美大島、加計呂麻島及び徳之島でのつがい形成期と育雛期の林道における夜間自動車センサスの結果では、毎年変動しつつ、奄美大島では 2000 年代から緩やかな増加傾向が見られる。奄美大島では、フイリマングースの生息密度が高かった名瀬近郊におけるセンサスでも個体数の増加が確認されている。ノネコによる捕食は依然として懸念され、人間の居住地周辺だけでなく森林内でも被害が確認されている。小規模に続けられている森林伐採の影響も注視が必要である。

存続を脅かす要因

1960-80 年代には広葉樹林の伐採や道路・ゴルフ場建設など。1990 年代は、森林伐採や林道開設にともない森林内に容易に侵入するようになったと考えられるネコ、フイリマングースなどの外来捕食者による捕食が本種に影響を与えていたと推察される。また、林道の増加や幹線道路の整備により生息地における自動車の数が増え、また速度も上がったと推測されることから、交通事故が個体群に大きな影響を与えていたと考えられる。現在でも、世界自然遺産登録後も登録地外で小規模ながら続けられている森林伐採や、ノネコによる捕食、交通事故が脅威となっていると考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，ゴルフ場，交通インフラ建設，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，交通事故，捕食（外来種による）

特記事項

遺伝、分子生物学的な個体群分析は、保全の基礎情報となるかもしれない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アマミヤマシギ	*Scolopax mira*	VU
第４次 2019：	アマミヤマシギ	*Scolopax mira*	VU
第４次 2018：	アマミヤマシギ	*Scolopax mira*	VU
第４次 2017：	アマミヤマシギ	*Scolopax mira*	VU
第４次 2015：	アマミヤマシギ	*Scolopax mira*	VU
第４次：	アマミヤマシギ	*Scolopax mira*	VU

第３次:	アマミヤマシギ	*Scolopax mira*	VU
第２次:	アマミヤマシギ	*Scolopax mira*	EN
第１次:	アマミヤマシギ	*Scolopax mira*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類，【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，鳥獣保護管理法

参考文献

- NPO 法人奄美野鳥の会，2009．奄美の野鳥図鑑．pp. 22-23, 156．文一総合出版，東京．
- Brazil, A. M. and H. Ikenaga, 1987. The Amami woodcock *Scolopax mira*: its identity and identification. Forktail, 3: 3-16.
- 江田真毅・阿部愼太郎・鳥飼久裕・嵩原建二・小高信彦・小池裕子，2005．アマミヤマシギ（*Scolopax mira*）の mtDNA 制御領域による遺伝的構造の解析．日本鳥学会 2005 年度大会口頭発表（講演要旨），A-13．
- 石田健，1992．アマミヤマシギ *Scolopax mira* の生態・分布および形態．平成 3 年度環境庁特殊鳥類調査報告書，pp. 43-85．環境庁，東京．
- 石田健，1996．ヤマシギ，アマミヤマシギ．日本動物大百科 3．鳥類Ⅰ，pp. 91-93, 101-102．平凡社，東京．
- 石田健・高美喜男，1998．アマミヤマシギの相対生息密度の推定．Strix，16: 73-88．
- 石田健・杉村乾・山田文雄，1998．奄美大島の自然とその保全．生物科学，50(1): 55-64．
- 石田健・高美喜男・齋藤武馬・宇佐見依理，2003．アマミヤマシギの相対生息密度の推移．Strix，21: 99-109．
- 環境省，平成 20～令和 3 年度野生生物保護対策検討会奄美希少野生生物保護増殖分科会・検討会資料．
- Mizuta, T., 2014. Moonlight-related mortality: lunar influence on roadkill occurrence in the Amami woodcock *Scolopax mira*. Wilson Journal of Ornithology, 126: 544-552.
- 水田拓，2016．交通事故は月夜に多い ―アマミヤマシギの夜間の行動と交通事故の関係．水田拓（編著），奄美群島の自然史学 亜熱帯島嶼の生物多様性，pp. 230-249．東海大学出版部，平塚．
- 水田拓・鳥飼久裕・石田健，2009．月齢が道路上に出現するアマミヤマシギの個体数に与える影響．日本鳥学会誌，58: 91-97．
- 塩野﨑和美，2016．好物は希少哺乳類 奄美大島のノネコのお話．水田拓 (編著)，奄美群島の自然史学 亜熱帯島嶼の生物多様性，東海大学出版部，平塚．
- 園部浩一郎，1988．ヤマシギとアマミヤマシギの識別．野鳥，(503): 6．

- Sugimura, K., 1988. The role of government subsidies in the population decline of some unique wildlife species on Amami Oshima, Japan. Environmental Conservation, 15: 49-57.
- 鳥飼久裕，2018．アマミヤマシギ ―少しずつわかり始めた鈍感な固有種の形態と生態―．水田拓・高木昌興（編著），島の鳥類学 南西諸島の鳥をめぐる自然史，pp. 343-359．海游舎，東京．
- Torikai, H., H. Kawaguchi and T. Mizuta, 2025. Survival and movement of the endangered Amami Woodcock *Scolopax mira* revealed through banding on Amami-Oshima Island. Ornithological Science, 24(1): 47-53.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Scolopax mira has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Scolopax mira* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Vehicle collision, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	水田拓（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Taku Mizuta

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　シギ科 Scolopacidae

オオジシギ

***Gallinago hardwickii* (Gray, 1831)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　―	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
2018 年と 2024 年に同一の方法で北海道内の 5 地域 36 地点において行われた個体数調査の結果を比較すると、個体数の減少率はサロベツ原野で－78.6%、宗谷岬東部で－46.7%、勇払原野で－16.1%、釧路湿原で－10.0%、根室半島で－20.9%となっている。これらはおもに 2019 年の越冬期にオーストラリア東部で発生した異常気象（異常乾燥）の影響を受けたと考えられている。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
北海道苫小牧市周辺の勇払原野で 2000 年、2001 年と 2017 年に実施された個体数調査と土地利用（荒地、樹林地、草地・農地、人工地）を比較した結果、オオジシギ個体数が減少したメッシュでは草地・農地が有意に減少し、また樹林が増加している場合が多かった。勇払原野では太陽光発電所などの建設や遷移の進行によって草地や農地が減少している。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

全長 23～33 cm。頭部から背にかけて黄褐色で、複雑な模様がある。腹部は白色。嘴は長く、脚はシギ類としては短い。ロシア沿海地方、サハリン南部、千島列島南部、日本では北海道を中心に本州以南でも繁殖するが、標高の高い湿原など繁殖分布は局所的である。オーストラリア東部とタスマニアなどの河川河口部のほか、都市近郊の湿地や緑地などでも越冬する。国内の主な繁殖地である北海道には 4 月に渡来し、草原に生育する樹木の枝先や電柱など目立つところによく止まる。繁殖期には草原上空で盛んに鳴きながら旋回し、その後急降下して尾羽から風切り音を出すディスプレイフライトを行う。国内の繁殖分布域は減少しており、特に本州以南で顕著。北海道内の繁殖地においても、特に乾いた草原などは宅地や工業・商業用地として開発され、生息しなくなった地域もある。

基礎情報

【形態】

全長 23～33 cm。頭部から背にかけて黄褐色で、黒褐色と白色の帯状の複雑な模様がある。背には羽縁の白が並んでできる 4 本の帯が目立つ。腹部は白色。嘴は長く、脚は黄緑色でシギ類としては短い。淡褐色の頭央線、眉斑があり、褐色の過眼線、頬線が目立つ。他のジシギ類とよく似ており、尾羽の枚数や形状が確認できないと野外での識別は難しいが、渡来時期なども参考になる。

【生活史】

国内の主な繁殖地である北海道には 4 月に渡来し、草原に生育する樹木の枝先や電柱など目立つところによく止まる。4 月中旬から 6 月中旬に草原上空で盛んに鳴きながら旋回し、その後急降下して尾羽から風切り音を出すディスプレイフライトを行う。ディスプレイフライトは 5 月上旬がピークで、早朝と夕暮れに多い。

草原に目立たない巣を作り、4 卵を生む。孵化後のヒナはすぐに巣を離れ、メス親とともに草原を歩いて採餌する早成性の種である。

秋の渡りは 7 月初旬に始まり、最初に成鳥、その後幼鳥が渡りを開始する。幼鳥の渡りのピークは 8 月中下旬で、その後秋まで渡りが続く。

2021 年から 2023 年にかけて行なわれた渡り経路の衛星追跡では、北海道（苫小牧市）を飛び立ったオオジシギはオーストラリアまで太平洋上を直接渡った。また、カラーフラッグを用いた調査から、北海道を飛び立った後に関東地方で中継する個体がいることも確認されている。

オーストラリア到着後は住宅地に残された湿地や河川の河口部のほか、都市近郊の緑地などでも越冬する。春の渡りは 3 月ごろに始まり、九州や本州で中継した後、繁殖地である北海道やサハリンまで移動した。

【生息環境】

繁殖地ではヨシやスゲの草原、ササ原や牧場、畑など平野や河川敷の開けた環境に生息する。渡りの時期には湖沼岸や河川敷、水田などの湿地を利用する。越冬地では湿地のほか小河川のある農耕地や住宅街に残された湿った緑地などにも生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原・細流，河川中流域 【陸域_平地部】草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，河口域，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

ロシア沿海地方、サハリン南部、千島列島南部、日本では北海道を中心に本州以南でも繁殖するが、標高の高い湿原など繁殖分布は局所的である。オーストラリア東部とタスマニアなどで越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域は縮小している。特に本州以南では県レベルで繁殖が確認されなくなった場所もある。北海道内の繁殖地においても、特に乾いた草原などは宅地や工業・商業用地として開発され、生息しなくなった地域もあり、分布域は縮小していると考えられる。

【生息地の現況】

繁殖地である原野や湿原の宅地化や工業用地化など土地利用の変化に加え、乾燥化や植生遷移などによって営巣適地が減少しており、特に本州以南では繁殖地の消失や範囲の縮小が懸念されている。

【個体数の現況】

北海道では長期的、短期的に個体数が減少している。

長期的な変化を示す例として、2017 年の繁殖期に苫小牧市勇払原野で行われた調査において、ディスプレイフライトをする個体数が 2000/2001 年と比較して約 30%減少していた。道路の敷設や耕作地化など、土地利用の変化が要因と考えられている。十勝地方で行われた調査でも、1978 年と比較して 2019/2020 年には 58%減少していたことが報告されており、農耕地に隣接する樹林の減少や太陽光発電所の設置などの環境変化の影響を受けている可能性が指摘されている。

短期的な減少では越冬地の異常気象の影響を受けた可能性が指摘されている。2018 年に行なわれた調査から北海道全体で約 35,000 羽が生息していると推定されたが、2019 年冬にオーストラリア東部で発生した異常気象の影響を受けて個体数が減少し、2020 年の繁殖期には 2018 年と比較して約 40%減少したと考えられている。その後のモニタリング調査では 2021 年、2022 年は約 35%減少（2018 年比）しており、回復には時間がかかっている。

日本は繁殖地だけでなく中継地でもあるため、中継地では渡りの時期に、利用に適した水の張られた水田の減少によって渡りの際のエネルギー補給に影響していることも懸念される。繁殖地の分布域の減少とあわせて注意していかなくてはならない。

存続を脅かす要因

営巣環境の土地利用の変化、渡りの中継地の消失や環境変化の影響を受けている。越冬地の宅地開発などの環境変化も影響している可能性がある。

要因の区分：	（過去）	河川開発，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成
	（現在）	河川開発，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，遷移進行・植生変化/自然遷移，発電施設建設

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	オオジシギ	*Gallinago hardwickii*	NT
第４次 2019:	オオジシギ	*Gallinago hardwickii*	NT
第４次 2018:	オオジシギ	*Gallinago hardwickii*	NT
第４次 2017:	オオジシギ	*Gallinago hardwickii*	NT
第４次 2015:	オオジシギ	*Gallinago hardwickii*	NT
第４次:	オオジシギ	*Gallinago hardwickii*	NT
第３次:	オオジシギ	*Gallinago hardwickii*	NT
第２次:	オオジシギ	*Gallinago hardwickii*	NT
第１次:	オオジシギ	*Gallinago hardwickii*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt),【青森県】重要希少野生生物(B ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【秋田県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【茨城県】絶滅危惧ⅠA 類,【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク),【群馬県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【埼玉県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】情報不足(DD),【東京都（区部）】情報不足(DD),【神奈川県】絶滅(繁殖期),【新潟県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【富山県】情報不足(DD),【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【山梨県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長野県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【岐阜県】絶滅危惧Ⅱ類,【静岡県】要注目種(N-Ⅱ分布上注目種等),【愛知県】絶滅(EX)(繁殖),絶滅危惧Ⅱ類(VU)(通過),【三重県】情報不足(DD),【滋賀県】希少種,【京都府】準絶滅危惧種,【大阪府】準絶滅危惧(NT),【兵庫県】B ランク,【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【島根県】情報不足(DD),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【広島県】絶滅(EX),【徳島県】準絶滅危惧(NT),【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】準絶滅危惧(NT),【熊本県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類,【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【大分県】

参考文献

- 室瀬秋広，2020．3.1.2 オオジシギ調査結果報告　2020 年 6 月 6 日他．十勝野鳥だより，204: 9-11．
- 中村浩志，1996．オオジシギ．日本動物大百科第 3 巻　鳥類 I，pp. 92-93．
- 中村登流・中村雅彦，1995．オオジシギ．原色日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞，70pp.
- オオジシギ保護調査プロジェクト，2017．約 3 割の減少を確認 オオジシギの個体数調査．野鳥，817: 36．
- 田尻浩伸・浦達也・葉山政治・手嶋洋子・松本潤慶・大畑孝二・富岡辰先，2022．オオジシギの渡り経路の衛星追跡．日本鳥学会 2022 年度大会講演要旨集，112pp.
- 竹前朝子・田尻浩伸・浦達也・大畑孝二・富岡辰先・中村聡・葉山政治，2018．本州以南におけるオオジシギの繁殖状況．日本鳥学会 2018 年度大会講演要旨集，90pp.
- 浦達也，2007．オオジシギ．Bird Research News，4(10): 4-5．
- 浦達也・西林直哉・田尻浩伸・竹前朝子・中村聡・葉山政治・大畑孝二・富岡辰先，2017．北海道勇払原野におけるオオジシギの繁殖個体数の変化．日本鳥学会 2017 年度大会講演要旨集，142pp.
- 浦達也・竹前朝子・田尻浩伸・中村聡・葉山政治・大畑孝二・富岡辰先，2018．北海道におけるオオジシギの繁殖個体数の推定．日本鳥学会 2018 年度大会講演要旨集，89pp.
- 浦達也・長谷部真・田尻浩伸・中村聡・古南幸弘・原田修・松本潤慶・善浪めぐみ・瀧本宏昭・和歌月里佳・荒哲平・稲葉一将・田島奏一朗・櫻井真弓・田尻浩伸，2021．北海道における 2020 年のオオジシギの繁殖個体数の急激な減少．日本鳥学会 2021 年度大会講演要旨集，72pp.
- 吉安京子・森本元・千田万里子・仲村昇，2020．鳥類標識調査より得られた種別の生存期間一覧（1961-2017 年における上位 2 記録について）．山階鳥類学雑誌，52(1): 21-48．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gallinago hardwickii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gallinago hardwickii* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland/Marsh/Stream, Middle river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Estuary, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	River development, Wetland development, Field preparation, Grassland

	development, Land development, Transportation infrastructure construction, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Power plant construction
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Oita】.





執筆者:	田尻浩伸（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Hironobu Tajiri

公表年月：2026 年 3 月

ミズナギドリ目 Procellariiformes　アホウドリ科 Diomedeidae

クロアシアホウドリ

***Phoebastria nigripes* (Audubon, 1839)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
国内の繁殖個体群は拡大しているが、伊豆諸島鳥島で繁殖する個体群では、漁業による混獲リスクやプラスチックによる海洋汚染に晒されていることが明らかとなった（Thiebot et al. 2018, Nishizawa et al. 2021）。鳥島で繁殖する個体群の利用海域の一部は、延縄漁場と重複しており、延縄に使用する餌を食べようとして釣り針にかかり溺死する恐れがある。過去に本種のハワイ繁殖個体群が、こうした延縄漁業による混獲によって個体数が大幅に減少した（2003 年から 2010 年に IUCN レッドリストで絶滅危惧種（EN）と評価）ことを考慮すると、日本の個体群についても、それらの影響リスクが正当に評価される必要がある。また、本個体群の利用海域では、多数の発泡スチロールやプラスチック片、漁網などの海洋ごみが見つかっており、それらを餌と間違えて摂食する恐れや漁網への絡まりが発生するリスクが存在する。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

クロアシアホウドリは、アホウドリ科に属する大型の海鳥である。北太平洋の広範囲に分布し、繁殖地は日本列島とハワイ諸島にある。国内では、伊豆諸島、小笠原諸島、尖閣諸島で繁殖する。最大の繁殖地は伊豆諸島の鳥島であり、現在約 6000 つがいが繁殖している。繁殖期間は 10 月から 6 月で、地上に営巣し、1 羽の雛を育てる。海面付近でイカ類や魚類、動物プランクトンを捕食し、漁船由来の餌も食べる。国内の個体数は増加しており、繁殖地も拡大している。

基礎情報

【形態】

全長 69-82 cm、翼開長 193-213 cm、体重 2.0-3.5 kg で、オスはメスに比べてやや大きい。全身が黒褐色で、眼の下部と嘴基部周辺、初列風切基部の羽軸は白い。上・下尾筒の色は変異が多いが、成鳥の大半は白色。嘴の色は、黒いものからピンク色味を帯びる個体までいる。幼鳥は眼の下部と嘴基部周辺に白色部を欠く。

【生活史】

繁殖期は 10 月から 6 月。繁殖鳥は 10 月下旬に繁殖地に訪れ、11 月中旬から 12 月下旬に 1 卵産卵し、雛は 1 月下旬に孵化する。抱卵日数は 63-67 日。約 150 日の育雛期間を経て、雛は 6 月に巣立つ。巣立ち後 3-4 年で繁殖地に戻り、5-7 歳で最初の繁殖をおこない、その後毎年繁殖する。海面付近のイカ類、魚類、動物プランクトンを捕食する。漁船からの投棄魚や延縄漁船で使用される餌（イカ類やイワシ類など）も食べる。

【生息環境】

離島で集団繁殖する。営巣地は、海岸線に近い砂浜、砂礫地、裸地、草地、灌木地帯に形成される。繁殖期には繁殖地周辺の海域で採餌し、非繁殖期にはオホーツク海、ベーリング海、北太平洋の外洋域を広く利用する。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】裸地，草地，砂地・礫地 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

繁殖地は、ハワイ諸島、伊豆諸島、小笠原諸島、尖閣諸島である。非繁殖期は、オホーツク海、ベーリング海、北太平洋に広く分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在もハワイ諸島、伊豆諸島、小笠原諸島、尖閣諸島で繁殖している。国内の繁殖地では、個体数の増加および繁殖地の拡大が確認されている。

【生息地の現況】

現在確認されている国内の繁殖地はすべて無人島である。国内最大の繁殖地である伊豆諸島の鳥島は、天然記念物（天然保護区域）（文化庁）および国指定鳥獣保護区（特別保護地区）（環境省）に指定されている。小笠原諸島は、国指定鳥獣保護区（一部は特別保護地区）、国立公園（1972 年）、世界自然遺産（2011 年）に指定されている。尖閣諸島への立ち入りは政府により禁止されている。

【個体数の現況】

アホウドリと同様に、本種も 1890-1900 年代初頭に羽毛採取の目的で捕獲されたが、捕

獲が禁止されて以降、国内の繁殖地では個体数が増加している。国内最大の繁殖地である伊豆諸島の鳥島では、過去 10 年間で雛数が倍になった（2009 年 1431 羽から 2021 年 2913 羽）。小笠原諸島の聟島列島では、食害・踏圧により営巣環境の悪化をもたらすノヤギの排除が 1999-2003 年に完了し、その結果、聟島では 1 雛（2001 年）から 46 雛（2016 年）、媒島では 117 雛（2002 年）から 512 雛（2017 年）、嫁島では 78 雛（2001 年）から 413 雛（2017 年）に増加した。母島列島（姉島南鳥島と妹島鳥島）では、2014 年の調査で約 20 羽の雛が確認された。個体数の増加に伴い、繁殖地も拡大しており、父島列島の孫島では、2010 年に初めて 4 羽の雛が確認された。八丈小島では 2013 年に初めて繁殖が確認され、以降順調に数を増やし、2017 年には 12 つがいが産卵し、7 羽の雛が孵化した。足環から、八丈小島のクロアシアホウドリには、鳥島や小笠原諸島由来の個体が含まれていることが明らかとなった。尖閣諸島（北小島と南小島）では、2002 年に約 50 羽の雛が確認されているが、近年の繁殖状況はわかっていない。

存続を脅かす要因

漁具による混獲、気候変動による採餌環境および営巣地環境の変化、海洋汚染（プラスチック・重金属・残留性有機汚染物質）、火山噴火。

要因の区分：	（過去）	自然災害，水温変化，混獲・錯誤捕獲，気候変動，その他（海洋汚染）
	（現在）	自然災害，水温変化，混獲・錯誤捕獲，気候変動，その他（海洋汚染）

特記事項

本種に亜種は認められていないが、ハワイ諸島で繁殖する個体群と日本で繁殖する個体群間で、遺伝的差異があることがわかっており、日本個体群の増加はハワイ個体群からの移入ではない（Ando et al. 2014）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（伊豆諸島）】準絶滅危惧(NT)，【東京都（小笠原諸島）】留意種

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Ando et al., 2014. Predominance of Unbalanced Gene Flow from Western to Central North Pacific Colonies of the Black-Footed Albatross (*Phoebastria nigripes*). Pacific Science, 68: 309-319.
- Arata et al., 2009. Status assessment of Laysan and Black-footed albatrosses, North Pacific Ocean, 1923-2005. U. S. Geological Survey Scientific Investigation Report 2009-5131, 80pp.
- Chiba et al., 2007. The distribution of seabirds in the Bonin Islands, Southern Japan. Journal of Yamashina Institute for Ornithology, 39: 1-17.
- 福寿ら，2011．父島列島におけるクロアシアホウドリ *Diomedea nigripes* の繁殖記録．小笠原研究年報，34: 75-78.
- 環境省自然環境局，2009．平成 20 年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）海鳥調査業務報告書.
- 環境省自然環境局，2021．2020 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書.
- 環境省自然環境局，2024．2023 年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書.
- 川口ら，2015．母島列島の姉島南鳥島と妹島鳥島における海鳥類の営巣数の年変動．小笠原研究年報，38: 103-107.
- 森ら，2019．伊豆諸島の八丈小島および青ヶ島におけるクロアシアホウドリ *Phoebastria nigripes* の新繁殖地形成．Strix，35: 21-33.
- Nishizawa et al., 2021. Mapping marine debris encountered by albatrosses tracked over oceanic waters. Scientific Reports, 11: 10944.
- 鈴木ら，2019．小笠原諸島聟島列島におけるノヤギ排除後の海鳥営巣数の急激な増加．日本鳥学会誌，68: 273-287.
- Thiebot et al., 2018. Albatross chicks reveal interactions of adults with artisanal longline fisheries within a short range. Journal of Ornithology, 159: 935-944.
- Tickell, 2000. Albatrosses, Yale University Press, 448pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Phoebastria nigripes has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Phoebastria nigripes is listed as NT under criteria ②. The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue. ②Habitat conditions are deteriorating.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Bare area, Grassland, Sandy area/Gravelly area 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Natural disasters, Water temperature change, Bycatch, Climate change, Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	西沢文吾（国立研究開発法人水産研究・教育機構）
Author:	Bungo Nishizawa

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　サギ科 Ardeidae

ミゾゴイ

***Gorsachius goisagi* (Temminck, 1836)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU 未満	基準 E:　－
生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生息条件が悪化している。 【判断理由】 太陽光発電施設の増加や竹林の拡大により、全国的に好適な生息地が減少している。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

ミゾゴイは、基本的に日本の本州、九州、四国および周辺島嶼の温帯域でのみ繁殖する渡り鳥で、非繁殖期にはフィリピンを中心とした東南アジアで越冬する。20 世紀後半に個体数が激減しており、越冬地の森林減少、繁殖地での捕食者の増加や繁殖適地の減少などが原因と考えられている。都市近郊林ではハシブトガラスやオオタカが、伊豆諸島では外来種のイタチなどが捕食者となっていると考えられる。里山を主な繁殖地としているため、人為的撹乱を受けやすい。

基礎情報

【形態】

全長約 50 cm、翼長約 25～30 cm、尾長約 9～12 cm。体の上面は赤褐色で、腹側はクリーム色に黒色の縦斑が入る。若鳥では、体の上面が暗褐色で、全体に黒い小班が入る。他のサギ類に比べて嘴が短い。近縁のズグロミゾゴイでは、成鳥では頭部に黒い冠羽があり、また初列風切羽と小翼羽、大雨覆の先端に明瞭な白斑があるが、ミゾゴイでは冠羽がなく、白斑部が比較的小さく余り目立たない。

【生活史】

渡りが早い個体は 3 月後半から繁殖地で観察されるようになるが、渡りの中継地と考えられる場所では 6 月頃まで散発的に記録されるため、個体により移動時期に差があると考えられる。繁殖地に飛来した個体は、営巣地近辺で数日から 1 週間ほど夜間に鳴き、造巣、産卵を行い、順調なら約 2 ヶ月程度で雛が巣立つ。巣は地上高 5-15 m ほどの枝に作り、3-5 卵を産む。9 月から 11 月頃に越冬地に移動する。繁殖期の夜間によく鳴くため夜行性とされることもあるが、繁殖地での採食や雛への給餌は基本的に日中に行う。ミミズやサワガニ、陸産貝類、地上性昆虫などを主な食物としている。

【生息環境】

標高 1,000 m 以下の平地から低山の広葉樹林および針広混交林を中心に繁殖している。営巣にはケヤキやコナラ、サクラなどの広葉樹を利用することが多く、巣の下に広く空間が維持されている場所を好む。過去には、営巣には針葉樹を好むとされる文献もあったが、最近は針葉樹での営巣例は少ない。住宅地内に残された局所的な森林で営巣したり、開けた農耕地で採食したりすることもある。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，田地・畑地，耕作放棄地 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，耕作放棄地，市街緑地
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(3) 都市地域

【分布域】

本州、九州、四国、伊豆諸島など、基本的に日本の温帯域でのみ繁殖するが、台湾及び済州島でも各 1 例ずつ繁殖記録がある。フィリピンを中心に沖縄や台湾、中国南部などで越冬する。サハリンやパラオ諸島からの記録もある。国内では北海道でも観察記録はあるが、繁殖は確認されていない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域の各地で繁殖しているが、その密度は以前に比べて低下している。山梨県の久那土や伊豆諸島では、1970 年以前には多数が繁殖していたが、最近はほとんど記録されなくなっている。

【生息地の現況】

ミゾゴイは低地の広葉樹林や針広混交林を好み、人工植林地はあまり営巣に利用しない。国内では 20 世紀後半に人工林面積が増加し、天然林面積が減少傾向にあったことから、この時期には繁殖地が減少した可能性がある。21 世紀に入り国内の天然林面積は増加傾向にあるが、太陽光発電施設や竹林の拡大などのためミゾゴイが好む低地林は減少している可能性がある。主な越冬地と考えられるフィリピンの森林割合は 20 世紀後半に激減したが、21 世紀には減少は止まっている。

【個体数の現況】

ミゾゴイは 20 世紀後半に日本各地で観察記録が少なくなっており、全国的に個体数が減っている。保護収容個体数の推移を調べた結果から 1960 年代以後に継続的に減少していると考えられている。近年は急激な減少は落ち着いていると考えられるが、減少傾向が止まった証拠はない。過去には個体数 1,000 羽以下とされることがあったが、これは定量的な調査に基づくものではなく、過小評価されているものと考えられる。愛知県三河地域での繁殖期の 100 km^2を対象とした調査では 23 箇所から鳴き声が見つかっており、以前に考えられていたよりは個体群密度は高い可能性がある。このため、国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストでは近年の成熟個体数を 5,000-9,999 個体と推定している。本種は主に森林内に単独で生活し、繁殖期の限られた期間の日の出前および日没後にのみ鳴くため、野外で検出されづらいことが過小評価の原因となっているものと考えられる。

存続を脅かす要因

ミゾゴイが激減した 20 世紀後半は他の夏鳥が減少した時期と重なっており、越冬地における森林面積の減少が個体数減少の主要因の可能性がある。ミゾゴイの主な越冬地と考えられているフィリピンの森林率は 1950 年頃には約 50%だったが、1990 年頃には約 20%になっている。ミゾゴイが繁殖する低山は開発の影響を受けやすいため、営巣環境の減少も課題の一つとなっている。特に近年は各地での太陽光発電施設の設置や竹林の拡大等により、営巣環境が減少しているものと考えられる。都市近郊ではハシブトガラスやオオタカの捕食により、繁殖成功率の低下や死亡率の上昇が生じている可能性がある。三宅島などの島嶼では外来種のイタチやノネコによる捕食が減少要因の一つと考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による），捕食（在来種による）
	（現在）	森林伐採，捕食（外来種による），捕食（在来種による）

特記事項

基本的に日本国内のみで繁殖する種であり、その生息状況は世界的に注目されている。過去には個体数が 1,000 個体以下とされていたが、最近の IUCN レッドリストでは成熟個体数を 5,000-9,999 個体と見積もっている。ただし、これはあくまでも過去の推定が過小評価だったと考えられているだけで、個体数の増加を意味しているわけではないことに注意が必要である。また全国で 10,000 個体以下というのは極めて低密度な状況と認識すべきで

ある。近年は横浜市繁殖センターにおいて飼育下繁殖に成功している。最近は以前に比べて観察事例が増えてきているが、これは個体数の増加によるものではなく観察者や観察努力が増えたことによると考えられる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ミゾゴイ	*Gorsachius goisagi*	VU
第４次 2019:	ミゾゴイ	*Gorsachius goisagi*	VU
第４次 2018:	ミゾゴイ	*Gorsachius goisagi*	VU
第４次 2017:	ミゾゴイ	*Gorsachius goisagi*	VU
第４次 2015:	ミゾゴイ	*Gorsachius goisagi*	VU
第４次:	ミゾゴイ	*Gorsachius goisagi*	VU
第３次:	ミゾゴイ	*Gorsachius goisagi*	EN
第２次:	ミゾゴイ	*Gorsachius goisagi*	NT
第１次:	ミゾゴイ	*Gorsachius goisagi*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd),【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類,【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【秋田県】情報不足(DD),【山形県】情報不足(DD),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【茨城県】情報不足①注目種,【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク),【群馬県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【埼玉県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(繁殖期),【新潟県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【山梨県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【長野県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【岐阜県】絶滅危惧Ⅱ類,【静岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(繁殖),準絶滅危惧(NT)(通過),【三重県】情報不足(DD),【滋賀県】絶滅危機増大種,【京都府】絶滅寸前種,【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【兵庫県】A ランク,【奈良県】絶滅危惧種,【和歌山県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種,【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【熊本県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【大分県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【宮崎県】絶滅危惧ⅠB 類(EN-r),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類,【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 浜口寛・石川正道・小西恭子・永井敏和・大鹿裕幸・川上和人，2014．愛知県西三河地域におけるミゾゴイ *Gorsachius goisagi* の生息環境モデル．日本鳥学会誌，63(1): 33-41．
- Higashide, D., T. Kuriyama, S. Takagi, H. Numata and M. Yokoyama, 2023. The Behaviour of Japanese Night Heron *Gorsachius goisagi* on Awaji Island, Japan, Recorded by Camera Traps. Ornithological Science, 22: 161-168.
- 日向富士雄，1949．ミゾゴイの観察．野鳥，14(9): 19-22．
- Hongshik, O., K. Youngho and K. Namkyu, 2010. First Breeding Record of Japanese Night Heron *Gorsachius goisagi* in Korea. Ornithological Science, 9: 131-134.
- 石川正道・浜口寛・小西恭子・藤田一作・大鹿裕幸・川上和人，2012．愛知県西三河地域におけるミゾゴイ *Gorsachius goisagi* の営巣樹種と立地環境．日本鳥学会誌，61: 289-295．
- 川口孫治郎，1937．日本鳥類生態学資料．巣林書房，東京．
- Kawakami, K. and H. Higuchi, 2003. Population trend estimation of three threatened bird species in Japanese rural forests: the Japanese Night Heron *Gorsachius goisagi*, Goshawk *Accipiter gentilis* and Grey-faced Buzzard *Butastur indicus*. J. Yamashina Inst. Ornithological Science, 35: 19-29.
- Kawakami, K., H. Uchida and M. Fujita, 2005. Diet of the Japanese Night Heron *Gorsachius goisagi* in Japan. Ornithological Science, 4: 173-177.
- 川上和人，2010．ミゾゴイ．日本野生生物保護学会（編），野生動物保護の辞典，pp. 511-513．朝倉書店，東京．
- 川名国男，2010．ミゾゴイの繁殖期における雛への給餌活動．山階鳥類学雑誌，41: 207-211．
- 川名国男，2012．ミゾゴイ その生態と習性．ジャパンプリント，東京．
- 野村博，2008．辰巳ダムにおけるミゾゴイ営巣調査．ダム技術，(260): 56-63．
- 大谷力・慶野友和・麻生海斗，2024．繁殖期に観察されたミゾゴイ *Gorsachius goisagi* の交尾と求愛行動．日本鳥学会誌，73: 107-112．
- 白井あやか・松原正佳・白石利郎・恒川直樹・金澤朋子，2025．飼育下ミゾゴイ *Gorsachius goisagi* の造巣期から巣内育雛期における繁殖行動．日本鳥学会誌，74: 71-78．
- 白石利郎，2020．ミゾゴイの飼育と繁殖．どうぶつと動物園，72: 72-77．
- 鈴木茂也・天白牧夫，2019．三浦半島におけるミゾゴイの営巣密度からみた繁殖個体数の考察．横須賀市博物館研究報告 自然科学，66: 11-16．
- 高橋雅雄，2015．佐渡島におけるミゾゴイの営巣初記録と生息状況．Strix，31: 209-213.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gorsachius goisagi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Gorsachius goisagi is listed as NT under criteria ②. The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue. ②Habitat conditions are deteriorating.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Farmland, Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Urban green area
Threat types:	Logging and wood harvesting, Predation (by alien species), Predation (by native species)
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	川上和人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Kazuto Kawakami

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　サギ科 Ardeidae

チュウサギ

***Ardea intermedia intermedia* Wagler, 1829**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
1960～70 年代に全国的に減少し、1990 年代は特に関西で少なかったとの報告がある。関東平野（茨城県、千葉県、栃木県）や濃尾平野（愛知県）など、水田が広がる地域では 2000 年代以降も比較的多い個体数が維持されており減少傾向にはないとみられるが、それ以外の地域では個体数の回復を示す報告はない。国内全体での現在の個体数動向に以前ほどの減少傾向はないと考えられるものの、多くはないままと推移していると推測される。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
現在の国内の水田の耕作面積は、1960 年代と比べて全国で約 3 割減った。チュウサギは採食環境を水田に強く依存しており、繁殖期は湛水された水田でドジョウ等の水生小動物を好んで食べるため、水田の畑地化（麦や大豆等への転作）や裏作による湛水時期のずれ等によって、好適な採食場所が減少する影響も今後懸念される。なお、バンなどほかの水田に依存する鳥類で減少傾向が知られることからも、チュウサギでも生息環境の悪化が示唆される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

本州以南に夏鳥として渡来し、複数種から成るサギ類コロニーに加わって繁殖する。主に水田でドジョウ、ザリガニ、カエル、昆虫等の小動物を食べる。1960-70 年代に個体数が減少し、水田の圃場整備による餌生物の減少が一因とされている。個体数が比較的多いのは、関東平野や濃尾平野など水田地帯が広がる地域に限られている。

基礎情報

【形態】

全長 65～72 cm、翼長 17～32 cm、嘴峰長 67～80 mm、ふ蹠長 100～121 mm、体重 430～630 g。雌雄とも全身白色。繁殖期には雌雄とも胸や背にレース状の飾り羽が伸び、求愛ディスプレイではこれを扇状に誇示する。特に背の飾り羽が長く、尾を 10 cm 余超える。頭部に冠羽はない。嘴は繁殖期には黒色、非繁殖期には黄色で先端のみ黒色の場合もある。目先の裸出部は黄色。虹彩は淡黄色で、求愛期には赤色。脚は指まで黒色。ダイサギと比べて頭部の丸みが強く、嘴が短い。

【生活史】

日本では主に夏鳥。渡来時期は本州では 4 月から 5 月頃で、水稲田の湛水から田植えの時期と概ね合致している。集団繁殖性で、複数種で構成されるコロニーで繁殖し、留鳥のサギ類（アオサギ、ダイサギ、コサギ、ゴイサギの全て又はいずれか）が形成したコロニーに後から参入する。一夫一妻で繁殖し、雌雄とも抱卵・育雛する。巣は皿状（直径 30 cm、高さ 5～10 cm）で、小枝を組み合わせ、樹林や竹林では中ほどから樹頂下の高さに、ササ林では頂上にかける。一腹卵数は 3～5 卵で、4 卵のことが多い。卵は淡青緑色で無斑、楕円形（長径 47～49 mm、短径 35～40 mm）。産卵は 1～2 日に 1 個のペースで、初卵から抱卵し、抱卵期間は 20～25 日。ヒナは非同時孵化し、巣上での育雛期間は約 30 日で、巣立ち後もしばらくはコロニー内で親から給餌を受ける。巣立ち率を下げる要因は、巣からのヒナの落下、カラスやヘビによる捕食、餌を巡るヒナ間競争など。繁殖後の分散は 8 月頃から始まり、10 月中旬頃まで各地で集団ねぐらをとって過ごした後、群れで南方へ渡る。日本で標識放鳥され海外で回収された 49 個体のうち 46 個体はフィリピンでの回収で、日本で繁殖したチュウサギの多くがフィリピンで越冬するとみられているが、国内でも暖地を中心に越冬する個体も稀にみられる。

【生息環境】

平野部の水辺。主要な採食環境は水田とその畦畔。ほかに湿地、池沼、草地でも採食するが、海岸や干潟、流れのある河川ではほとんど採食しない。繁殖期は平地の樹林や竹林に他の集団繁殖性サギ類と混合でコロニーを形成して繁殖し、夜間もコロニーでねぐらをとる場合が多い。非繁殖期には河川や湖沼の岸の樹上や杭上、湿地等で集団ねぐらをとる。山間部はほとんど利用しない。主にドジョウ、カエル、ザリガニを食べ、他にヤゴなどの水生昆虫、バッタやコオロギなどの陸生昆虫、トカゲやカナヘビも食べる。ゆっくり歩きながら採餌し、数羽から十数羽の小群でまとまっていることもある。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，市街緑地，河川中流域，河川下流域，ワンド，農業用水路
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域

【分布域】

日本でみられるのは基亜種 *Ardea intermedia intermedia* で、日本の本州以南から朝鮮半島南部、中国南部、東南アジア、インドで繁殖する。越冬期もほぼ同じ範囲でみられるが、

日本や朝鮮半島、中国南部の個体は、東南アジアなどへ渡る。国内では本州の秋田県以南、四国、九州の水田地帯のある平野部を中心に分布している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

国内での分布に大きな変化はない。個体数が多いのは関東平野（茨城県、千葉県、栃木県）や濃尾平野（愛知県）など、水田が広がる地域に偏在しているとみられる。

【生息地の現況】

住宅地付近に形成されたコロニーでの人との軋轢（鳴き声や糞による迷惑被害）や、河川敷に形成されたコロニー周辺での河川改修によって、営巣林が伐採される場合が見受けられる。越冬地での現況は不明である。

【個体数の現況】

かつては各地のコロニーの優占種だったとされるが、1960～70 年代に全国的に減少した。1980 年の全国アンケート調査では、37 県・79 ヶ所のコロニーで確認された集団繁殖性サギ類のうちチュウサギは約 3%（1,300 個体）だった。1991～92 年の全国調査では、チュウサギは 25 県・109 ヶ所のコロニーで計 2,569 羽確認され、全国のサギ類に占める割合は 9.9%で、特に関西で少なかった。その後は全国規模の個体数調査は行われていないため、全国の個体数現況は明らかではない。2000 年代以降に個体数調査が行われている茨城県、栃木県、千葉県、愛知県では、比較的大規模なコロニー（構成種全体で 500～1,000 個体以上）でチュウサギが優占種となっている例が多く確認されている。茨城県での 2002～2012 年の個体数は 4,000～6,000 個体で推移し、ゆるやかな増加傾向にあった。少なくとも関東平野や濃尾平野の水田地帯では、減少傾向にはないと考えられる。

存続を脅かす要因

過去は、宅地開発や減反による採食環境や営巣可能な林の減少、農薬汚染による餌生物の減少などにより、サギ類コロニーは全国的に小規模分散化してきた。サギ類の中でもチュウサギの減少が著しかった要因として、チュウサギは特に水田を主要な採食場とし、水生の小動物を主食とするため、水田の圃場整備による餌生物の減少の影響を受けやすかったことが考えられている。現在は、そうした影響は比較的落ち着いたように見受けられるが、集団繁殖性サギ類に共通の要因として、住宅地近隣に立地したコロニーでの人との軋轢による追払いや営巣林の伐採に伴う繁殖成功の低下の懸念が引き続き残る。また、チュウサギはサギ類の中でも採食環境を水田に強く依存しているため、水田の畑地化（麦や大豆等への転作）や裏作による湛水時期のずれ等によって、好適な採食場所が減少する影響も今後懸念される。

要因の区分：	（過去）	圃場整備，土地造成，農薬汚染/化学物質汚染
	（現在）	その他（人との軋轢（営巣林伐採や追払い）、水田の転作）

特記事項

集団繁殖性サギ類ではアオサギ、及びダイサギの個体数が全国的に増加している。それに伴う大きな変化として、繁殖開始が最も早く単独性が強いアオサギがコロニー形成を先導するようになり、アオサギの好むスギ等の高木のある樹林がコロニー場所として選ばれるケースが増えてきている。チュウサギのコロニー選択は、留鳥の他のサギ類が形成したコロニーに後から参入するかたちであるため、チュウサギの個体数変化には他種も関わっている可能性がある。コロニーの動態とあわせて、サギ類各種の個体数を注意深くモニタリングしていくことが望ましい。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	チュウサギ	*Egretta intermedia intermedia*	NT
第４次 2019:	チュウサギ	*Egretta intermedia intermedia*	NT
第４次 2018:	チュウサギ	*Egretta intermedia intermedia*	NT
第４次 2017:	チュウサギ	*Egretta intermedia intermedia*	NT
第４次 2015:	チュウサギ	*Egretta intermedia intermedia*	NT
第４次:	チュウサギ	*Egretta intermedia intermedia*	NT
第３次:	チュウサギ	*Egretta intermedia intermedia*	NT
第２次:	チュウサギ	*Egretta intermedia intermedia*	NT
第１次:	チュウサギ	*Egretta intermedia intermedia*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】準絶滅危惧,【山形県】準絶滅危惧(NT),【福島県】準絶滅危惧(NT),【栃木県】準絶滅危惧(C ランク),【群馬県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【埼玉県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(繁),【千葉県】重要保護生物(B),【東京都（本土部）】準絶滅危惧(NT),【東京都（区部）】準絶滅危惧(NT),【東京都（北多摩）】準絶滅危惧(NT),【東京都（南多摩）】準絶滅危惧(NT),【東京都（西多摩）】準絶滅危惧(NT),【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【福井県】県域準絶滅危惧,【長野県】準絶滅危惧(NT),【愛知県】準絶滅危惧(NT)(繁殖),準絶滅危惧(NT)(通過),【三重県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【滋賀県】希少種,【京都府】準絶滅危惧種,【兵庫県】C ランク,【奈良県】希少種,【和歌山県】準絶滅危惧(NT),【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】準絶滅危惧(NT),【高知県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】準絶滅危惧(NT),【長崎県】準絶滅危惧(NT),【熊本県】準絶滅危惧(NT),【大分県】準絶滅危惧(NT),【鹿児島県】準絶滅危惧,【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境庁自然保護局・(財）日本野鳥の会，1994．第 4 回自然環境保全基礎調査 動植物調査報告書（鳥類の集団繁殖地及び集団ねぐら)，環境庁，東京.
- 清棲幸保，1978．日本鳥類大図鑑 III．講談社，東京.
- Kushlan, J. A. and J.A. Hancock, 2004. The Herons. Oxford University Press, New York.
- Lane, S. J. and M. Fujioka, 1998. The impact of changes in irrigation practices on the distribution of foraging egrets and herons (Ardeidae) in the rice fields of central Japan. Biological Conservation, 83: 221-230.
- Mashiko, M. and Y. Toquenaga, 2013. Increasing variation in population size and species composition ratio in mixed-species heron colonies in Japan. Forktail, 29: 71-77.
- Mashiko, M. and Y. Toquenaga, 2014. Grey heron (*Ardea cinerea*) expansion promotes the persistence of mixed-species heron colonies. Waterbirds, 37: 362-370.
- 中島拓・江崎保男・中上喜史・大迫義人，2006．水田と河川、コウノトリ野生復帰地での餌場の相対的価値-豊岡盆地に生息するサギ類を指標として-．保全生態学研究，11: 35-42.
- 成末雅恵，1992．埼玉県におけるサギ類の集団繁殖地の変遷．Strix，11: 189-209.
- 日本野鳥の会研究部，1981．アンケート法によるサギ類のコロニーと塒に関する調査．財団法人日本野鳥の会，東京.
- 農林水産省ウェブサイト．2022．令和 4 年耕地面積.
  https://www.maff.go.jp/j/tokei/kekka_gaiyou/sakumotu/menseki/r4/kouti/index.html
- サギと高速道路との共生を考える会，2017．東名阪自動車道弥富 IC・蟹江 IC に飛来・営巣するサギと高速道路との共生に向けた活動 2016 年活動報告．愛知.
- 佐々木凡子，2001．京都府におけるサギ類の集団繁殖地の分布と保護．Strix，19: 149-160.
- 山階鳥類研究所，2002．鳥類アトラス（鳥類回収記録解析報告書)．財団法人山階鳥類研究所，我孫子.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ardea intermedia intermedia has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ardea intermedia intermedia* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Urban green area, Middle river basin, Lower river basin, Inlet, Agricultural ditch
Threat types:	Other
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	益子美由希（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構）
Author:	Miyuki Mashiko

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae

ハイタカ

***Accipiter nisus nisosimilis* (Tickell, 1833)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①

基準 A:　VU 未満	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
栃木県北部の那須野ヶ原では 1980 年代には少なくとも 5 か所で繁殖が確認されていたが、現在では繁殖は確認されていない。また、全国鳥類繁殖分布調査によると、記録メッシュは 1990 年代の 86 メッシュから 2010 年代は 75 メッシュに減少し、1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても、48 地点から 19 地点へと大きく減少していることから、全国的に分布の縮小とともに個体数も減少していると考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

全長はオスでは 30～33 cm、メスでは 37～40 cm でメスの方が雄より大きい。オス成鳥は上面は暗青灰色で、下面は白くオレンジ色の横斑がある。メス成鳥は上面に褐色味があり、下面はバフ白色で胸に暗褐色の三日月型の横斑がある。中央および東シベリアから東はカムチャツカと日本まで、南は中国北部までで繁殖する。留鳥あるいは渡り鳥で、冬はインド、東南アジア、中国南部などに渡って越冬する。日本では留鳥または漂鳥として北海道および本州で繁殖する。低山から山地の森林に広く分布するが、北海道では低地でも繁殖する。冬期には南に渡るものもおり、全国的に見られる。アカマツやカラマツ、スギなどの針葉樹に巣をかけ、4～5 卵の卵を産む。主な餌は、小型鳥類であるが、小型の哺乳類も食べる。森林に強く依存し、山地から平地、連続性のある広大な天然林から農耕地の分断化された孤立林、防風林のような人工林、市街地の大きな公園や墓地にある林など、さまざまな森林環境に生息する。特に、20 年～50 年生の若齢段階の針葉樹林を好む。森林伐採や土地造成によって生息環境が悪化しているところがあるが、個体数に関しては過去も現在もデータがないことから、その動向は不明である。営巣環境として立木密度の高い若齢林を選好することから、若齢林の維持がハイタカの営巣環境の保全につながる。中、長期的には、常にハイタカが利用可能な森林が存在する森林管理を行なうことが重要である。

基礎情報

【形態】

全長はオスでは 30～33 cm、メスでは 37～40 cm でメスの方が雄より大きい。オス成鳥は上面は暗青灰色で、頬にオレンジ色の細い縦斑がある。下面は白くオレンジ色の横斑がある。メス成鳥は上面に褐色味があり、頬に暗灰褐色の細い縦斑がある。下面は白く黒灰色の横斑がある。幼鳥では上面褐色で、下面はバフ白色で胸に暗褐色の三日月型の横斑がある。

【生活史】

中央および東シベリアから東はカムチャツカと日本まで、南は中国北部までで繁殖する。留鳥あるいは渡り鳥で、冬はインド、東南アジア、中国南部などに渡って越冬する。日本では留鳥または漂鳥として北海道および本州で繁殖する。低山から山地の森林に広く分布するが、北海道では低地でも繁殖する。冬期には南に渡るものもおり、全国的に見られる。一夫一妻性で、アカマツやカラマツ、スギなどの針葉樹に巣をかけ、4～5 卵の卵を産む。主な餌は、小型鳥類であるが、小型の哺乳類も食べる。

【生息環境】

森林に強く依存し、山地から平地、連続性のある広大な天然林から農耕地の分断化された孤立林、防風林のような人工林、市街地の大きな公園や墓地にある林など、さまざまな森林環境に生息する。特に、20 年～50 年生の若齢段階の針葉樹林を好む。冬期には、農耕地や河川敷でも見られる。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，市街緑地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

中央および東シベリアから東はカムチャツカと日本まで、南は中国北部までで繁殖する。留鳥あるいは渡り鳥で、冬はインド、東南アジア、中国南部などに渡って越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

全国鳥類繁殖分布調査によると、2010 年代の記録メッシュは 75 メッシュで、1990 年代の 86 メッシュ比較すると減少しており、1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても、48 地点から 19 地点へと大きく減少していた。

【生息地の現況】

森林伐採や土地造成によって生息環境が悪化しているところがある。たとえば、栃木県北部の那須野ヶ原では 1980 年代には少なくとも 5 か所で繁殖が確認されていたが、現在では繁殖は確認されていない。

【個体数の現況】

個体数に関しては、過去も現在もデータがないので、個体数の動向は不明である。

存続を脅かす要因

森林伐採、土地造成。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成
	（現在）	森林伐採，土地造成

特記事項

ハイタカは営巣環境として立木密度の高い若齢林を選好することから、若齢林の維持がハイタカの営巣環境の保全につながる。営巣林を間伐する場合は、全体を間伐するのではなく一部を残す、もしくは近隣に類似した立木密度の森林を残すことによって、ハイタカの営巣を持続させることが可能かもしれない。中、長期的には、常にハイタカが利用可能な森林が存在する森林管理を行なうことが重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ハイタカ	*Accipiter nisus nisosimilis*	NT
第４次 2019：	ハイタカ	*Accipiter nisus nisosimilis*	NT
第４次 2018：	ハイタカ	*Accipiter nisus nisosimilis*	NT
第４次 2017：	ハイタカ	*Accipiter nisus nisosimilis*	NT
第４次 2015：	ハイタカ	*Accipiter nisus nisosimilis*	NT
第４次：	ハイタカ	*Accipiter nisus nisosimilis*	NT
第３次：	ハイタカ	*Accipiter nisus nisosimilis*	NT
第２次：	ハイタカ	*Accipiter nisus nisosimilis*	NT
第１次：	ハイタカ	*Accipiter nisus nisosimilis*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt),【青森県】重要希少野生生物(B ランク),【岩手県】準絶滅危惧,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【秋田県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山形県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】情報不足①注目種,【栃木県】準絶滅危惧(C ランク),【群馬県】準絶滅危惧(NT),【埼玉県】情報不足(DD)(繁)、準絶滅危惧 2 型(NT2)(越),【千葉県】重要保護生物(B),【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（北多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（南多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（西多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【神奈川県】情報不足(繁殖期)、希少種(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】準絶滅危惧

(NT),【福井県】絶滅のおそれのある地域個体群,【山梨県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長野県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岐阜県】準絶滅危惧,【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】準絶滅危惧(NT)(越冬),【三重県】準絶滅危惧(NT),【滋賀県】希少種,【京都府】準絶滅危惧種,【兵庫県】C ランク,【奈良県】希少種,【和歌山県】準絶滅危惧(NT),【鳥取県】準絶滅危惧(NT),【島根県】情報不足(DD),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【広島県】地域個体群(LP),【山口県】準絶滅危惧(NT),【徳島県】準絶滅危惧(NT),【香川県】準絶滅危惧(NT),【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【佐賀県】準絶滅危惧種,【長崎県】準絶滅危惧(NT),【熊本県】準絶滅危惧(NT),【大分県】準絶滅危惧(NT),【宮崎県】準絶滅危惧(NT-r),【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 平井克亥・安部文子・柳川久，2012．ハイタカの研究史とそれに基づく保全への提言：特に営巣環境について．第 11 回「野生生物と交通」研究発表会講演論文集，pp. 19-26.
- 平井克亥・柳川久，2012．北海道十勝平野におけるハイタカの営巣木および営巣林分の特徴．日本鳥学会誌，61(1): 142-147.
- 平井克亥，2013．生態図鑑ハイタカ．バードリサーチニュース，10(6): 4-5.
- 那須塩原市動植物調査研究会，2017．那須塩原市レッドデータブック 2017．pp. 165．那須塩原市生活環境部，那須塩原.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう．2016-2021 年，p. 72．鳥類繁殖分布調査会，府中.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Accipiter nisus nisosimilis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Accipiter nisus nisosimilis* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Urban green area

Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



©池田昇平（湖北野鳥センター）



©上谷川則男

執筆者:	遠藤孝一（日本オオタカネットワーク、NPO 法人オオタカ保護基金）
Author:	Koichi Endo

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae

オオタカ

***Accipiter gentilis fujiyamae* (Swann & Hartert, 1923)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
北海道十勝平野（面積 1000 km²、調査期間 2009 年－2021 年）、山形県庄内平野（85 km²、2001 年－2021 年）、栃木県那須野ヶ原（100 km²、2001 年－2021 年）、埼玉県東松山（100 km²、2005 年－2021 年）、石川県加賀（100 km²、2007 年－2008 年、2018 年－2021 年）、愛知県尾張（45 km²、2015 年－2021 年）において、オオタカの生息つがい数の変化を調査し、これらのデータを統合して TRIM によりつがい数の変動を解析したところ、つがい数には、有意な減少傾向が認められ（P<0.01）、全体は、2.8％ / 年の減少が認められた。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
2023 年の時点で、栃木県内において、オオタカの営巣地周辺において生息環境の悪化が懸念される開発事案が、道路建設で 3 件、大規模太陽光発電建設で 6 件ある。
全国のアンケート調査に基づく繁殖成績も、2016 年から 2021 年にかけて低下傾向にあり、生息条件の悪化がその原因と考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

全長はオスで 45～50 cm、メスで 52～57 cm とメスの方がオスより大きい。成鳥では上面は暗青灰色、顔には太くて白い眉斑がある。下面は白色で、胸から腹に黒色の横斑が密にある。日本およびサハリンに分布する。日本では、留鳥または漂鳥として、九州以北で繁殖する。繁殖期は 2 月～7 月、一腹卵数は通常 3～4 卵、巣立ち雛数は 2～3 羽のことが多い。

巣はアカマツ、スギ、モミ、カラマツなどに架ける。おもに小型から中型の鳥類を捕食するが、小型の哺乳類も捕食する。日本全体の個体数は 2005 年では 1,824～2,240 羽と推定されているが、実際はそれよりもかなり多いのではないかと考えられる。一方、生息個体数は 2000 年代前半までは増加し、その後は減少傾向にあると考えられている。都市開

発や道路、ダム、大規模太陽光発電施設の建設など、森林伐採を伴う各種開発によって生息環境が悪化しているところがある。かつては飼育目的の違法捕獲が多発していた時代もあったが、現在では法律の整備などによって沈静化していると考えられる。2017 年 9 月 21 日に「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づく「国内希少野生動植物種」の指定を解除された。その後の調査から、指定解除によるつがい数の減少や繁殖成績の悪化は認められなかった。しかし、解除から影響が出るまでにはタイムラグがある可能性があること、またつがい数の減少や繁殖成績の低下が続いている可能性があるので、今後も個体数や繁殖成績についてモニタリングしていく必要がある。

基礎情報

【形態】

全長はオスで 45～50 cm、メスで 52～57 cm とメスの方がオスより大きい。成鳥では上面は暗青灰色、顔には太くて白い眉斑がある。下面は白色で、胸から腹に黒色の横斑が密にある。幼鳥では上面は暗褐色、下面は黄褐色で黒褐色の縦斑がある。

【生活史】

日本およびサハリンに分布する。日本では、留鳥または漂鳥として、九州以北で繁殖する。一夫一妻性で、つがい関係は繁殖期間中は維持されるが、非繁殖期には解消ないし希薄になると考えられる。

繁殖期は 2 月～7 月。2～3 月に求愛・造巣し、4 月に産卵、6～7 月に雛が巣立つ。一腹卵数は通常 3～4 卵、巣立ち雛数は 2～3 羽のことが多い。巣はアカマツ、スギ、モミ、カラマツなどの地上 7～20 m ほどの位置に架けられる。

おもにスズメやムクドリなどの小型鳥類から、ハトやカラス、キジといった中型の鳥類を捕食する。また、割合は低いが、ネズミやリス、モグラ、イタチ、ノウサギといった哺乳類も捕食する。

【生息環境】

低地から亜高山帯の森林に広く生息するが、主要な生息地は農耕地や草地など開けた環境と森林が混在する低地から丘陵地である。近年では、都市部の大規模な緑地で繁殖するものもいる。冬期には、河川敷や埋立地など、樹林の少ない環境にも飛来する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，市街緑地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(3) 都市地域

【分布域】

日本およびサハリンに分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

全国鳥類繁殖分布調査では、分布は 1970 年代から 1990 年代にかけて急激に拡大したが、1990 年代から 2010 年代にかけては記録メッシュ数でも、現地調査の地点数でも大きな変化はなかった（植田・植村 2021）。既存調査およびアンケート調査に基づいた繁殖確認あるいは繁殖可能性ありの都道府県は以下の通りである（環境省自然環境局 2005）。北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、山梨、長野、新潟、富山、石川、福井、静岡、愛知、岐阜、三重、滋賀、京都、和歌山、奈良、大阪、兵庫、鳥取、島根、岡山、広島、山口、香川、徳島、愛媛、佐賀、熊本。

【生息地の現況】

都市開発や道路、ダム、大規模太陽光発電施設の建設など、森林伐採を伴う各種開発によって生息環境が悪化しているところがある。

【個体数の現況】

日本全体の個体数は 1996 年では 1,000 羽以上（小板ほか 1996）、2005 年では 1,824～2,240 羽と推定されている（環境省自然保護局 2005）。推定値の違いは、情報収集が進んだためとされるが、個体数の増加を指摘する意見もある。一方、尾崎ほか（2008）は、生息環境モデルを用いて関東地方とその周辺（静岡県・山梨県・長野県）におけるオオタカの営巣数を推定したところ、2,909 か所（95%信頼限界：1699～5196）の値を得た。これを個体数にすると、5,818 羽（95%信頼限界：3398～10392）となり、信頼限界の下端をとっても関東地方とその周辺には約 3,000 羽が生息することになることから、日本全体のオオタカの生息数は、上述の 2005 年の推定値である 1,824～2,240 個体より、かなり多いのではないかと考えられる。一方、生息個体数は 2000 年代前半までは増加し、その後は減少傾向にあると考えられている（植田ほか 2022）。

存続を脅かす要因

都市開発や道路、ダム、大規模太陽光発電施設の建設など、森林伐採を伴う各種開発によって生息環境が悪化しているところがある。かつては飼育目的の違法捕獲が多発していた時代もあったが（遠藤 1989）、現在では行政や保護団体の普及活動や法律の整備などによって沈静化していると考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，ゴルフ場，土地造成，交通インフラ建設，農薬汚染/化学物質汚染，違法採集
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，農薬汚染/化学物質汚染，発電施設建設

特記事項

オオタカは、2017 年 9 月 21 日に「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づく「国内希少野生動植物種」の指定を解除された。その後の生息調査から、指定解除によるつがい数の減少や繁殖成績の悪化は認められなかった。しかし、解除から影響がでるまでにはタイムラグがある可能性があること、またつがい数の減少や繁殖成績の低下が続いている可能性があるので、今後も長期にわたり、オオタカの個体数や繁殖成績についてモニタリングしていく必要がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオタカ	*Accipiter gentilis fujiyamae*	NT
第４次 2019：	オオタカ	*Accipiter gentilis fujiyamae*	NT
第４次 2018：	オオタカ	*Accipiter gentilis fujiyamae*	NT

第４次 2017：	オオタカ	*Accipiter gentilis fujiyamae*	NT
第４次 2015：	オオタカ	*Accipiter gentilis fujiyamae*	NT
第４次：	オオタカ	*Accipiter gentilis fujiyamae*	NT
第３次：	オオタカ	*Accipiter gentilis fujiyamae*	NT
第２次：	オオタカ	*Accipiter gentilis fujiyamae*	VU
第１次：	オオタカ	*Accipiter gentilis fujiyamae*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt),【青森県】重要希少野生生物(B ランク),【岩手県】準絶滅危惧,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【秋田県】準絶滅危惧(NT),【山形県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【福島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【茨城県】準絶滅危惧,【栃木県】準絶滅危惧(C ランク),【群馬県】準絶滅危惧(NT),【埼玉県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(繁・越),【千葉県】要保護生物(C),【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（北多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（南多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（西多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(繁殖期)、希少種(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】準絶滅危惧(NT),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【山梨県】準絶滅危惧(NT),【長野県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岐阜県】準絶滅危惧,【静岡県】準絶滅危惧(NT),【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(繁殖),絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越冬),【三重県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【滋賀県】希少種,【京都府】絶滅危惧種,【大阪府】準絶滅危惧(NT),【兵庫県】B ランク,【奈良県】希少種,【和歌山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【広島県】準絶滅危惧(NT),【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【香川県】準絶滅危惧(NT),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】準絶滅危惧(NT),【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種,【長崎県】準絶滅危惧(NT),【熊本県】準絶滅危惧(NT),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【宮崎県】準絶滅危惧(NT-r),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【京都府】

参考文献

- 遠藤孝一，1989．オオタカ保護の現状と問題点．Strix，8: 233-247.
- 遠藤孝一，2008．生態図鑑 オオタカ．バードリサーチニュース，5(2): 4-5.
- 環境省自然保護局，2005．オオタカ保護指針策定調査報告書．環境省，東京.

- 小板正俊・新井真・遠藤孝一・西野一雄・植田睦之・金井裕，1996．アンケート調査によるオオタカの分布と生態．平成 7 年度希少野生動植物種生息状況調査報告書，pp. 53-74．環境庁，東京．
- Natsukawa, H., T. Ichinose and H. Higuchi, 2017. Factors affecting breeding-site selection of Northern Goshawks at two spatial scales in urbanized areas. J Raptor Res, 51: 417-428.
- 尾崎研一・堀江玲子・山浦悠一・遠藤孝一・野中純・中嶋友彦，2008．生息環境モデルによるオオタカの営巣数の広域的予測関東地方とその周辺．保全生態学研究，13: 37-45．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年，p. 72，鳥類繁殖分布調査会，府中．
- 植田睦之・遠藤孝一・高橋誠・内田博・平井克亥・今森達也・天野弘朗，2022．オオタカの繁殖状況と国内希少野生動植物種からの解除の影響．Bird Research，18: A99-A107．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Accipiter gentilis fujiyamae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Accipiter gentilis fujiyamae* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Urban green area
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Pesticide/Toxic chemical pollution, Power plant construction
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Kyoto】.





執筆者:	遠藤孝一（日本オオタカネットワーク、NPO 法人オオタカ保護基金）
Author:	Koichi Endo

公表年月：2026 年 3 月

キツツキ目 Piciformes　キツツキ科 Picidae

クマゲラ

***Dryocopus martius martius* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
本州北部では生息地がブナ林帯に限られ生息密度が非常に低く希少であり（北東北のクマゲラ出版委員会 2004）、観察地点の減少や既存の営巣地での繁殖が確認できなくなるなど（藤井 2021）、個体数減少の可能性がある。本州北部における繁殖活動については、青森県では 2008 年度に白神山地で、秋田県では 2014 年度に森吉山ノ口川流域で確認されたものが最後である（藤井 2021）。
なお、本亜種の主要な生息域である北海道では、好適な生息地で最も生息密度が高いと推定される東大富良野演習林でも巣間距離の平均距離は約 2 km であり（有沢 1991）、生息条件が悪化した場合は生息密度は減少すると推定される。また、森林の少ない平野部ではほとんど生息せず（藤巻 2013）、高標高域の生息密度は不明な点が多く、潜在的な生息可能範囲はそれほど広くない可能性がある。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

北海道、本州北部の森林に留鳥として生息する大型のキツツキ。大径木の幹に巣穴を掘り、多くは 5 月上旬に産卵し、約 2 週間の抱卵期、1 カ月弱の育雛期を経て、幼鳥は 6 月上旬～7 月上旬に巣立つ。主にアリ類などの昆虫を食べる。生息密度は 1 つがい/250～300 ha から所によっては 1 つがい/1,000 ha 以上である。過去の森林伐採により生息に適した森林が減少した。

基礎情報

【形態】

全長 46 cm。体は黒く、オスの額から後頭部かけては赤く、メスでは後頭部だけが赤い。嘴は黄白色で、脚は黒い。虹彩は淡黄色である。キタタキ（*Dryocopus javensis richardsi*）の腹は白く、オスでは赤い顎線があり、メスでは頭全体が黒く赤い部分はない。それ以外のキツツキ類とは体の大きさや体の模様で識別できる。

【生活史】

留鳥。主に昆虫、特にアリ類を好んで食べる。秋～冬には木の実なども食べる。営巣には、胸高直径がおおむね 40 cm 以上で、幹が通直、かつ下枝の位置が高く、樹皮が滑らかな木が選ばれる。このような木の幹に、地上 2～18 m の高さに巣穴を掘って営巣する（石城ほか 1987、磯・藤巻 1990、有沢 1991）。5 月上旬頃に産卵し、一腹卵数は 3～6 卵（清棲 1965）、抱卵期約 2 週間、育雛期 1 カ月弱、幼鳥は 6 月上旬～7 月上旬に巣立つ。雌雄とも抱卵、育雛を行うが、夜間の抱卵と育雛初期の抱雛はオスが行う。親は巣立後しばらく幼鳥に給餌をし、10 月頃から家族としてのまとまりはなくなる（小西ほか 1993、北東北のクマゲラ出版委員会 2004）。親は繁殖した地域に留まるが、冬にはまれに平野部の孤立林に飛来することがある。

【生息環境】

北海道ではかつて、大径木やアリ類の生息する腐朽木が多く存在する広大な針広混交林や落葉広葉樹林などの天然林に生息していることが多かった。しかし近年では、植栽木の成長にともない、人工林の多い地域にも生息するようになった。トドマツ人工林での繁殖（隅田・有沢 1992）や、カラマツ人工林での繁殖が確認されている（雲野 未発表）。一方で、本州北部ではブナ林に強く依存して生息している。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域

【分布域】

種クマゲラ（*Dryocopus martius*）はスカンディナビアから東はオホーツク海沿岸部、カムチャツカ、サハリンまで、南はアルタイ、朝鮮半島、日本まで分布する。日本では亜種 *Dryocopus martius martius* が北海道全域、及び本州北部の一部に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道では、現在も北海道全域に生息しており分布域の縮小はみられない。本州北部では、観察地点の減少が報告されているため（藤井 2021）、分布域が縮小している可能性がある。

【生息地の現況】

北海道では、天然林における伐採の減少や戦後に植栽した人工林の成熟により人工林内での繁殖事例が確認されるなど、生息地の環境は改善しつつある。本州北部では限られた地域のブナを主体とした落葉広葉樹林のみで生息が確認されているが、周辺地域で伐採が行われた事例があるなど（藤井 2021）、生息環境は大きく改善されていないと推測される。

【個体数の現況】

2016～2021 年に調査が実施された全国鳥類繁殖分布調査（植田・植村 2021）によると、北海道では過去 2 回よりも記録メッシュ数が増えた。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても、36 地点から 60 地点へと増加しており、個体数の増加が推測される。本州北部では、観察地点の減少や既存の営巣地での繁殖が確認できなくなるなど（藤井 2021）、個体数減少の可能性があるが不明な点が多い。北海道と本州北部の個体群はそれぞれ大陸の個体群とは隔離している。現在、北海道と本州北部の個体群間に遺伝的交流があるかは不明である。

存続を脅かす要因

森林伐採による生息適地の減少や悪化、人為的な圧力として繁殖期における営巣木への不用意な接近などが考えられる。テンや外来種のアライグマによる捕食の影響も想定されるが、詳細については不明である。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，その他（繁殖期における営巣木への人間の接近）
	（現在）	森林伐採，その他（繁殖期における営巣木への人間の接近）

特記事項

本州北部の個体群は危機的状況にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第４次 2019：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第４次 2018：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第４次 2017：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第４次 2015：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第４次：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第３次：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第２次：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第１次：	クマゲラ	*Dryocopus martius*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu),【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類,【秋田県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【山形県】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 秋田県環境保健部自然保護課，1978．クマゲラ調査報告書（昭和 52、53 年）．秋田県環境保健部自然保護課，秋田．
- 有沢浩，1974．北国の森の博物誌．河出書房新社，東京．294pp.
- 有沢浩，1991．クマゲラの営巣木密度及び営巣木．東京大学農学部附属演習林北海道演習林報告，84: 21‐37．
- 有沢浩，1993．クマゲラの森から．朝日新聞社，東京．230pp.
- 藤井忠志，2012．総説「日本のクマゲラ」．岩手県立博物館調査研究報告書，29: 1-39．
- 藤井忠志，2021．クマゲラの生態と本州における研究小史．日本鳥学会誌，70: 1-18．
- 藤巻裕蔵，2013．北海道におけるクマゲラの繁殖期の分布．山階鳥類学雑誌，45: 39-45．
- 北海道保健環境部自然保護課，1990．野生動物分布等実態調査報告書　クマゲラ生態等調査報告書．北海道保健環境部自然保護課，札幌．109pp.
- 北海道教育委員会，1977．エゾシマフクロウ・クマゲラ特別調査報告書．北海道教育委員会，札幌．82pp.
- 石城謙吉・楠本義治・市瀬克也・斉藤隆，1987．クマゲラのヒナの外部形態と繁殖生態に関する記載．北海道大学農学部演習林研究報告，44: 225-230．
- 磯清志・藤巻裕蔵，1990．北海道中部におけるクマゲラの営巣環境と営巣木の性質．日本鳥学会誌，38: 157-165．
- 環境庁，1976．クマゲラ．昭和 50 年度特殊鳥類等調査，環境庁，東京．
- 北東北のクマゲラ出版委員会，2004．北東北のクマゲラ．東奥日報社，青森．123pp.
- 清棲幸保，1965．増補新訂版　日本鳥類大図鑑Ⅰ．pp. 410-413．講談社，東京．
- Kojima, K. and H. Arisawa, 1983. Habitat and food habit of the black woodpecker *Dryocopus martius* in Hokkaido. Tori, 32: 109-111.
- 小西弘臣・鈴木利典・玉田克巳・藤巻裕蔵，1993．北海道中央部におけるクマゲラの繁殖生態．山階鳥類研究所研究報告，25: 76-92．
- 小笠原暠・泉祐一，1977．森吉山地域のブナ林及びその周辺におけるクマゲラの生息状況．山階鳥類研究所研究報告，9: 213-243．
- Ogasawara, K., Y. Izumi, and T. Fujii, 1994. The status of black woodpecker in Northern Tohoku District, Japan. 山階鳥類研究所研究報告，26: 87-98.

- 小笠原暠・千羽晋示，1986．白神山地のクマゲラ 本州のクマゲラの保護とその生息地保全の必要性．白神山地のブナ林生態系の保全調査報告書，鳥類．
- 隅田重義・有沢浩，1992．トドマツ人工林におけるクマゲラの繁殖例．日本森林学会北海道支部論文集，40: 12-14．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査．全国鳥類繁殖分布調査報告，日本の鳥の今を描こう．2016-2021 年，p. 83．鳥類繁殖分布調査会，東京．
- 雲野明，2011．鳥類生態図鑑 クマゲラ．Bird Research News，8(12): 1-3．

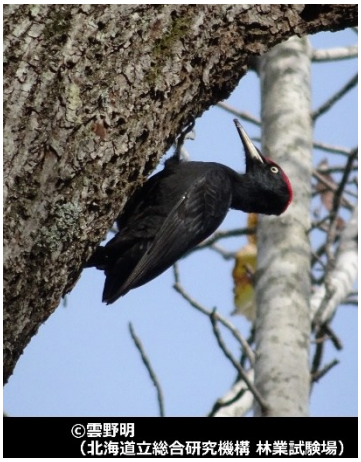
アセスメントサマリー（Assessment summary）

Dryocopus martius martius has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Dryocopus martius martius* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Other
Law designation status for conservation	Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者: Author:	雲野明（地方独立行政法人北海道立総合研究機構）・藤巻裕蔵（公益財団法人山階鳥類研究所） Akira Unno and Yuzo Fujimaki

公表年月：2026 年 3 月

ハヤブサ目 Falconiformes　ハヤブサ科 Falconidae

ハヤブサ

***Falco peregrinus japonensis* Gmelin, 1788**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　―	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
関東地方の一部では、ロッククライミング等のレジャーの影響による営巣放棄と思われる事例が確認されており、その他の地域でも同様の影響が指摘されている。現状これらの多くの行為に規制はなく、今後も影響が継続すると予測される。
また、近年は高病原性鳥インフルエンザの野鳥への感染事例が国内で急増している。ハヤブサは、猛禽類の中では鳥インフルエンザの感染数が最も多い種であることから、鳥インフルエンザによる本種への悪影響が懸念される。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

北海道から九州まで留鳥として生息するほか、ロシア極東、朝鮮半島、中国南東部にかけて分布する。国内では主に海岸や河川流域などの開けた環境にある断崖や岩場で営巣し、中・小型の鳥類を空中で捕食する。1950～70 年代に有機塩素系農薬の影響で激減した可能性があるが、個体数は回復してきていると思われる。営巣地の崖と障害物のない開けた採餌場所の確保や、中・小型鳥類の保全に留意すれば、個体群の安定が図れるであろう。

基礎情報

【形態】

全長はオスが 38～44 cm、メスが 46～51 cm、翼長はオスが 32～33 cm、メスが 36～37 cm で、雌雄のサイズに大きな差が見られる。成鳥は雌雄ともに上面は青灰色、下面は白または生成り色で、黒い横斑がある。一方、幼鳥は上面は褐色、下面は薄茶色で、太い褐色の縦斑が目立つ。目の下の頬にはハヤブサの特徴を示す、所謂「ハヤブサヒゲ」があるが、幼鳥のヒゲは褐色で、成鳥の黒色に近いヒゲほどコントラストは強くない。目の周りの露出部、嘴の付根の蝋膜、足は成鳥は濃い黄色だが、幼鳥は青味がかった灰色である。翼は細長く、先端が尖っているので、飛翔時には、成鳥・幼鳥ともに体色や大きさが似通っているオオタカ（*Accipiter gentilis*）との識別点になる。

【生活史】

一夫一妻制で、生息に適した場所に通年、縄張りを占有し、2 月頃から求愛飛行などの繁殖行動を始める。3～4 月に縄張り内の断崖や岩場のオーバーハングした岩棚や穴に、巣を造らずに直に 3～4 個の卵を産む。抱卵は主にメスが担当し、雛は 5 週間程度で孵化するが、孵化後しばらくの間は体温調節ができないために、2 週間ほどはメスが引続き抱雛する。6 週間前後で巣立ちを迎えるが、巣立った後も、2 ヶ月ほどは親の縄張り内に留まり、独り立ちできるまでは親から給餌を受ける。中・小型の鳥類を高速で飛行して捕食するので、障害物のない開けた採餌空間と、営巣場所として捕食者が近づき難い断崖や岩場が生息に不可欠である。こうした生息条件を満たす環境は極めて限られているので、個体数や生息密度は低い。

【生息環境】

主に海岸や河川流域などの開けた環境にある断崖や岩場に生息するが、冬期には越冬個体などが中・小型の鳥類が集まる河口や河川流域、湖沼付近を狩場として高頻度で利用する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】草地 【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，砂地・礫地，河川中流域，河川下流域，河口域，農業用水路，海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

種ハヤブサ（*Falco peregrinus*）は南極大陸や一部の島嶼（ニュージーランドやアイスランドなど）を除き、全世界に分布する。本亜種は国内は北海道から九州まで留鳥として生息するほか、ロシア極東、朝鮮半島、中国南東部にかけて分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域に大きな変動は見られないが、近年、個体数の回復に伴い、これまで生息が確認

されていなかった地域で、個体の目撃や生息事例が増えている。都市部への進出事例も少数見られる。「自然環境保全基礎調査全国鳥類繁殖分布調査報告 2016-2021 年」では、1974－78 年には繁殖確認メッシュ数 6、繁殖可能性のあるメッシュ数が 10 の合計 16 メッシュであったものが、2016－2021 では繁殖確認メッシュ数 54、繁殖可能性のあるメッシュ数が 39 の合計 93 メッシュと大きく増加している。また、河川水辺の国勢調査のダム湖調査においては、繁殖期に記録があったダム湖が 1 巡目（1990 年度－1995 年度）において 3 か所だったものが 5 巡目（2011 年度－2015 年度）では 17 か所と増えている。ダム湖調査では、繁殖期以外の渡り時期や越冬期を含む生息記録率も、1 巡目調査の約 15%だったものが、5 巡目では 55%と増加している。

【生息地の現況】

本亜種の生息条件を満たす環境はもともと限られているが、道路や漁港建設などに伴う落石防止措置等やレジャー活動（ロッククライミング、ハンググライダー、釣り、野鳥の写真撮影など）により、営巣可能な崖や岩場が利用できなくなっている地域がある。

【個体数の現況】

種ハヤブサは 1950～70 年代に DDT などの有機塩素系農薬により世界的に個体数が激減した。日本では本亜種の農薬汚染や個体数の変動に関する調査が行われていないので、詳細は不明だが、1951 年に水田で死亡していた個体が採集されており（千葉県小岩）、本亜種も減少していた可能性は高い。しかし、2000 年代に入り、これまで生息や繁殖が確認されていなかった地域で、個体の目撃や生息の事例が増えていることから、個体数は回復してきていると思われる。

存続を脅かす要因

河川開発、海岸開発、道路建設、レジャー活動（ロッククライミング、ハンググライダー、釣り、野鳥の写真撮影など）による営巣地の消失や生息・繁殖の妨害、また、湿地開発、草地開発、送電線や風力発電施設の建設による採餌条件の悪化は、本亜種に悪影響を及ぼす。さらに、鳥インフルエンザに感染していた死亡事例が多数報告され、多くの未確認の死亡数が想定されるため感染症の影響も懸念される。

要因の区分：	（過去）	河川開発，海岸開発，湿地開発，草地開発，交通インフラ建設，感染症/病原菌，その他（レジャー活動による営巣地の消失や生息・繁殖の妨害）
	（現在）	河川開発，海岸開発，湿地開発，草地開発，交通インフラ建設，感染症/病原菌，その他（レジャー活動による営巣地の消失や生息・繁殖の妨害）

特記事項

個体数は回復してきていると思われるが、生息条件を満たす環境がもともと限られているので、それほど大きな個体数の増加は期待できない。一方、食物連鎖の頂点に立ち、環

境変化の影響を受けやすい存在なので、長期に渡るモニタリングを行えば、環境の健全さを示す指標としての役割を担える。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ハヤブサ	*Falco peregrinus japonensis*	VU
第４次 2019:	ハヤブサ	*Falco peregrinus japonensis*	VU
第４次 2018:	ハヤブサ	*Falco peregrinus japonensis*	VU
第４次 2017:	ハヤブサ	*Falco peregrinus japonensis*	VU
第４次 2015:	ハヤブサ	*Falco peregrinus japonensis*	VU
第４次:	ハヤブサ	*Falco peregrinus japonensis*	VU
第３次:	ハヤブサ	*Falco peregrinus japonensis*	VU
第２次:	ハヤブサ	*Falco peregrinus japonensis*	VU
第１次:	ハヤブサ	*Falco peregrinus japonensis*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu),【青森県】重要希少野生生物(B ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類,【秋田県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク),【群馬県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【埼玉県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（北多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（南多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(繁殖期)、希少種(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】準絶滅危惧(NT),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【山梨県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長野県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【岐阜県】準絶滅危惧,【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(繁殖),準絶滅危惧(NT)(越冬),【三重県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【滋賀県】希少種,【京都府】絶滅危惧種,【兵庫県】B ランク,【奈良県】希少種,【和歌山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【広島県】準絶滅危惧(NT),【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【香川県】準絶滅危惧(NT),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【佐賀県】絶滅危惧Ⅰ類種,【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【宮崎県】準絶滅危惧(NT-r),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類,【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- Cade, T. J., J. H. Enderson, C. G. Thelander and C. M. White (eds.), 1988. Peregrine Falcon Population. pp. 949. The Peregrine Fund, Inc. Boise, Idaho.
- 泉大津ハヤブサ・サポート倶楽部，2006．泉大津ハヤブサ・レポート 2006．p. 40．泉大津市．
- 河川環境データベース（河川水辺の国勢調査），国土交通省．https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/index.html
- 御手洗望・山口孝，2018．多摩川流域(東京都域)における絶滅危惧種ハヤブサの生態に関する調査研究．東急財団一般研究 No.239．
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男，1995．図鑑日本のワシタカ類．文一総合出版，東京．631pp.
- 日本鳥類目録編集委員会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- 日本野鳥の会，1996．平成 7 年度希少野生動植物種生息状況調査報告書．pp. 89．環境庁，東京．
- Sielicki, J. and T. Mizera (eds.), 2009. Peregrine Falcon Population. pp. 800. Turul Robert Zmuda, Warszawa, Poland.
- 東京都環境局自然環境部，2023．東京都レッドデータブック（本土部）2023．東京都．488pp.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Falco peregrinus japonensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Falco peregrinus japonensis* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Farmland, Sandy area/Gravelly area, Middle river basin, Lower river basin, Estuary, Agricultural ditch, Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	River development, Coastal development, Wetland development, Grassland development, Transportation infrastructure construction, Disease, Other
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	金井裕（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Yutaka Kanai

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　カラス科 Corvidae　　日本固有

オナガ

***Cyanopica cyanus japonica* Parrot, 1905**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①

基準 A:　VU 未満	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
東京都鳥類繁殖分布調査では 32%の減少が示されており、また、全国鳥類繁殖分布調査でも、記録コース数で 49%、個体数で 71%の減少が示されている。また、モニタリングサイト 1000 里地調査でも 2008-2022 年の減少率が-14.1%/年と推定されている。現時点で減少要因は不明であり、今後も減少が継続するおそれがある。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

　オナガは東北地方から中部地方にかけて分布し、林や低木林が散在する開けた環境に分布する種である。住宅地などにも生息する種だが、複数の調査で分布の縮小や個体数の減少が確認されている。

基礎情報

【形態】

全長 319-390 mm、翼長 122-141 mm、尾長 192-240 mm、嘴峰長 24-30 mm、ふ蹠長 32-35 mm、体重 69-96 g。

雌雄同色で、雄はやや大型である。頭部は黒色の帽子状。背は灰色。喉、胸、腹は白色あるいは灰白色。翼と尾は淡青色から青灰色。風切内弁は黒色で外弁は淡青色。初列風切外弁の先半分は白色。中央尾羽先端に長さ約 2 cm の白斑がある。嘴と脚は黒色。虹彩は暗褐色。

【生活史】

日本では留鳥として生息し、非繁殖期も繁殖期も基本的に群れで生活し、周年群れなわばりを持っている。繁殖は基本的に一夫一妻であり、繁殖の手伝いを行う個体（ヘルパー）がいることがあり、造巣、雌やヒナへの給餌、捕食者への攻撃を行なう。

多様な樹木の高さ 1～13 m の枝の又や若枝が密生した場所に造巣する。巣の大きさは外径 30×25 cm、厚さ 13 cm。巣は単独に近いものもあるが、互いに集まって営巣する傾向があり、ルースコロニアルである。ツミの巣の周りに集団営巣することもある。

卵は長径 26.4 mm、短径 19.8 mm で、淡褐色あるいは淡緑灰色の地に暗褐色と灰色の小斑点が鈍端を中心に多数散在する。一腹卵数は 3～8 卵、平均 5.8 卵で 5 月中旬～8 月中旬に産卵し抱卵期間は 15 日、孵化後 17～18 日で巣立つ。卵やヒナの捕食者は、ハシブトガラス、アオダイショウ、ネコなどで、カッコウ類による托卵される地域もある。

雑食性で、動物では昆虫、クモ、両生類。植物では樹木や草本の果実や種子を主に食べる。

【生息環境】

林や低木林が散在する開けた環境や川辺の林に生息し、高原の別荘や農耕地、山地の川沿いの集落など人為的に切り開いた環境にも生息する。また、住宅地や市街地の緑地や公園などでも生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，田地・畑地，河川中流域 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，住宅地，市街緑地，河川中流域
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(3) 都市地域

【分布域】

福井県、岐阜県、愛知県以東、青森県までの東日本に分布する。九州北部では 1960 年代まで生息し、西日本各地でも記録がある。なお、種オナガは、日本、朝鮮半島、中国北東部、アムール川流域の極東アジアとヨーロッパ西端のイベリア半島に隔離分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1960 年代以降、長野県で分布の急激な拡大がみられるなど、1960 年代、1970 年代には、

特に西方向に分布を拡大する傾向があった。しかし、1970 年代、1990 年代、2010 年代に実施された全国鳥類繁殖分布調査では、年々分布が縮小していることが示されており、分布拡大傾向は止まり、逆に縮小している。こうした分布の縮小は、拡大したものが、このように分布が以前に戻っただけではなく、もともと主要な分布域だった関東などでも分布の縮小や個体数の減少が起きている。東京都繁殖分布調査、モニタリングサイト 1000 の里地調査など、別の場所、方法で実施された調査でも減少が示されており、全体的に減少しているものと考えられる。

【生息地の現況】

林や低木林が散在する開けた環境に生息する。都市近郊では農地や雑木林が住宅地や駐車場などに改変され、生息環境が悪化しているが、全体的には大きな悪化はないと思われ、減少の原因は不明である。

【個体数の現況】

全国鳥類繁殖分布調査の現地調査で記録された羽数が 1990 年代の 342 羽から 99 羽、東京都鳥類繁殖分布調査の結果では 448 羽から 303 羽、モニタリングサイト 1000 里地調査では、2008-2022 年に年あたり 14.1%の減少と、異なる調査いずれもで、個体数の減少が示されている。

ただし、都心部のように、これまではわずかしか生息していなかったが、おそらく街路樹等の生長によって新たに生息するようになった場所もある。

存続を脅かす要因

地域によっては、生息地の改変や、ハシブトガラスなどの捕食者による繁殖成績の低下などが考えられるが、減少の原因はよくわかっていない。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—

第３次:	―	―	―
第２次:	―	―	―
第１次:	―	―	―

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【群馬県】準絶滅危惧(NT)，【東京都（本土部）】準絶滅危惧(NT)，【東京都（区部）】準絶滅危惧(NT)，【東京都（北多摩）】準絶滅危惧(NT)，【東京都（南多摩）】準絶滅危惧(NT)，【東京都（西多摩）】準絶滅危惧(NT)，【福井県】要注目，【兵庫県】絶滅，【福岡県】絶滅(EX)，【佐賀県】絶滅種，【熊本県】絶滅(EX)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 原田俊司，2009．生態図鑑 オナガ．バードリサーチニュース，6(6): 2-3．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2024．重要生態系監視地域モニタリング推進事業 (モニタリングサイト 1000) 里地調査 2005-2022 年度とりまとめ報告書．環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田．
- 植田睦之・佐藤望，2021．東京都鳥類繁殖分布調査報告 2016-2021．特定非営利法人 バードリサーチ，府中．177pp.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cyanopica cyanus japonica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cyanopica cyanus japonica* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Farmland, Middle river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Residential area, Urban green area, Middle river basin

Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	植田睦之（バードリサーチ）
Author:	Mutsuyuki Ueta

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ヒヨドリ科 Pycnonotidae　　日本固有

ダイトウヒヨドリ

***Hypsipetes amaurotis borodinonis* (Kuroda, 1923)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②				
基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生息条件が悪化している。 【判断理由】 南大東島では、農業用の土地改良により島内の樹林地が減少している。移入されたイエネコとイタチによる巣内雛の捕食による繁殖失敗も懸念される。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

北大東島、南大東島の樹林地等に留鳥として生息する固有亜種である。亜種ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis amaurotis* に似るが、全体がそれよりも暗色で、喉に暗栗色の明瞭な帯がある。個体数についての詳細な状況は不明であるが、南大東島では島内の樹林地が減少しており、生息環境は悪化傾向にあると考えられる。移入されたイエネコとイタチによる巣内雛の捕食による繁殖失敗も懸念される。

基礎情報

【形態】

嘴峰 21-24.5 mm、翼長雄 127-132 mm、雌 117-123 mm、跗蹠 22-24 mm、尾長雄 119-126 mm、雌 109-112 mm。亜種ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis amaurotis* に似るが、全体がそれよりも暗色で、喉に暗栗色の明瞭な帯がある。

【生活史】

繁殖生態に関する詳細な生態は不明である。

【生息環境】

樹林地等に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

留鳥として大東諸島に生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年において大きな変化はないと考えられる。

【生息地の現況】

生息に適した樹林地が、土地の開発によって減少している。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

農業用の土地改良による、生息地となる樹林地の減少。移入されたイエネコとイタチによる巣内雛の捕食による繁殖失敗も懸念されている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，捕食（外来種による）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 清棲幸保，1978．増補改訂版 日本鳥類大図鑑Ⅰ．講談社，東京．
- 沖縄県環境部自然保護課，2017．改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）．p. 175．沖縄県環境部自然保護課，沖縄．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hypsipetes amaurotis borodinonis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hypsipetes amaurotis borodinonis* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	西海功（国立科学博物館）
Author:	Isao Nishiumi

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ヨシキリ科 Acrocephalidae

コヨシキリ

***Acrocephalus bistrigiceps* Swinhoe, 1860**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
北海道内の一部地域の個体数推定結果に基づくと、少なくとも現時点では、本種は国内に、絶滅の危険性は小さいといえる程度の個体数が生息していると考えられる。しかしながら 1990 年代と 2010 年代の全国鳥類繁殖分布調査において、ほぼ同じコースを調査した地点の比較では、1990 年代では 112 地点で記録されたものの 2010 年代では 65 地点まで 42%減少している。また多数のコヨシキリが生息していると推測される北海道でも、コヨシキリの分布域の縮小が生じており、特に道南地方では過去 20 年間で繁殖地点数が 84%減少している。南日本では、小規模の繁殖地が各地に分散しており、個体数に関する情報は殆どないものの、いずれの地点でも個体群サイズが大きくないと推測され、また既に局所的な絶滅が生じており、更には今後も生じる可能性がある。多くの個体数が生息していると推測される北海道でも分布域の大幅な縮小が確認されたため、本種は「分布域の全域において個体数が減少している」と判断した。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
全国鳥類繁殖分布調査において、ほぼ同じコースを調査した地点の比較では、1990 年代では 112 地点で記録されたものの 2010 年代では 65 地点まで 42%減少している。これらの地点を航空写真で確認したところ、本州以南の消失地点のうち、43%で河川敷および草地の樹林化・乾燥化が生じていた。また 18%の地点では、太陽光発電施設の建設などの草地の開発が生じていた。さらに、河川水辺の国勢調査でも、河川敷におけるコヨシキリの全国的な減少が示唆されている。河川敷・草原の樹林化・乾燥化は全国的な現象であること、また今後も減少の継続が強く予想されるため、本種は「分布域の全域において生息条件が悪化している」と判断した。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

本種は九州以北の湿原や二次草原等で局所的に繁殖する。全国鳥類繁殖分布調査の結果では、本種の繁殖および繁殖可能性のある地点数は、過去 20 年間で 42%減少したことが明らかになっている。特に南日本においては、局所的な絶滅が示唆されている。減少した地点の多くでは、河川敷の樹林化や乾燥化の進行が確認された。北海道には依然として多くの個体が生息し、また繁殖環境も十分にあると推測されるものの、北海道を含む日本全国での分布域縮小が報告されているため、本種を準絶滅危惧種に選定した。

基礎情報

【形態】

全長 13.5-14 cm、嘴峰長 10-12 mm、翼長 50-59 mm、ふ蹠長 20-22 mm、尾長 46-53 mm、体重 7-11 g。小型で縦斑が目立たないヨシキリ科鳥類である。頭部から上面にかけてはくすんだオリーブ褐色であり、淡色の眉班と、眉斑上の黒線および黒色の過眼線が特徴的である。腰から上尾筒にかけてはわずかに赤味のあるオリーブ褐色である。下面は白味を帯び、脇はややバフ色味を帯びた白色である。虹彩は暗褐色である。上嘴は全体的に暗色で、下嘴は黄色あるいは淡褐色である。ふ蹠は黄色あるいは暗褐色である。雌雄ほぼ同色。オオヨシキリは一回り大きく、また眉斑上の黒線はない。スゲヨシキリやセスジコヨシキリ、ヤブヨシキリ、イナダヨシキリ等は酷似するが、背の縦斑の有無、眉斑上の黒線や過眼線の明瞭さ等から識別できる。

【生活史】

渡り鳥であり、南アジアおよび東南アジアで越冬し、ロシア南東部、中国東部および北東部、朝鮮半島、日本で繁殖する。日本の繁殖地には、5 月中旬から 6 月中旬にかけて渡来する。本州中部では、6 月中旬までにつがいを形成する。枯れたヨシの先などの目立つ場所で囀ることが多い。おわん状の巣を地上 60-90 cm の位置のヨシやカヤツリグサ科草本、シロネ、イタドリ、シダなどの茎に、草本の茎や葉などを使ってつくる。一腹産卵数は 3～6 卵、抱卵は殆ど雌により行われるが、給餌は雌雄ともに行う。雌の抱卵中に、雄がつがい外交尾をすることが知られている。13-14 日の抱卵期、14-15 日の育雛期を経て、本州中部では 8 月上旬までに巣立つ。主に昆虫やクモなどの無脊椎動物を食べる。

【生息環境】

湿地を中心とした幅広い植生域に生息し、標高およそ 1,500 m までの、山地および低地の湿原や河川敷、農業用水路沿いのヨシ原、干拓後に成立した湿原植生、二次草原、耕作放棄地、海浜草原などで繁殖する。渡り期には海岸林や水田にも出現する。九州では、野焼きなどによって維持されている草原で主に繁殖する。四国および中国地方以北では、野焼きなどによって維持されている草原、大規模な河川や湖沼、遊水地のヨシ原に局所的に繁殖するほか、茅刈りが行われている湿原にも好んで生息する。東北北部から北海道では、河川敷や湖沼の湿原、耕作放棄地が主要な繁殖地であり、時には農地の周縁のごく小規模のヨシ原や住宅街に囲われた小河川の河川敷でも繁殖している。また、渡り期には各地の河川敷で、少なくない個体数が標識放鳥される。ヨシの稈長が低い湿原（例, 高層湿原）にはあまり出現しない。また、ヨシ原の下層植生（特に双子葉植物）の植生高および密度が高い環境を利用することが知られている。北海道で行われた調査では、草原のパッチ面積が大きいほど個体数密度が大きくなること、また生息地周囲の草原面積率が高いほど生息地内の個体数が多くなることが報告されている。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】草地，耕作放棄地，湿地・湿原・細流，河川中流域 【陸域_平地部 海岸部】草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，河

	川中流域，河川下流域，河口域，農業用水路，小河川，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（3）都市地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

北海道石狩平野にて、人間が自然生態系を農地に転換する前（1880 年）には約 1,000,000 個体が生息していたと推定されたものの、現在では約 81,000 個体まで減少したと推定された。このような、湿原の干拓や農地への転換に起因するコヨシキリの個体数の減少は関東地方でも示唆されている。かつては東京湾周辺でも本種の繁殖が示唆されていたが、現在では繁殖していない。このような経緯を踏まえると、日本国内の平地の少なくない地点では過去に本種が繁殖していたと推察されるものの、湿原の農地への転換や、干拓、市街地化、牧や草原の草地改良によって、その繁殖適地の多くが失われてしまったと考えられる。国内において、九州から四国、本州、および北海道で繁殖記録があり、大幅な分布域の変化は報告されていない。しかしながら、かつて繁殖記録があった各地の草原、海岸部の草地のうち、一部では 2000 年代以降の繁殖の記録が途絶えている（例、愛媛県・神奈川県）。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道、本州、四国、九州で繁殖が確認されており、分布域の大幅な変化は報告されていない。低地の湿原を対象に、2017 年から 2021 年に実施された 2 ha あたりのテリトリーマッピングの結果では、滋賀県琵琶湖では 4 テリトリー、茨城県利根川では 1 テリトリー、新潟県福島潟では 4 テリトリー、宮城県北上川では 20 テリトリー、青森県岩木川では 17 テリトリー、北海道厚沢部川で 10 テリトリー、北海道勇払川では 8 テリトリー、北海道温根沼では 3 テリトリーを記録しており、東北北部から北海道道央地方にかけて個体数密度が高い可能性がある。全国鳥類繁殖分布調査において 1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査した地点の比較では、1990 年代では 112 地点で繁殖および繁殖の可能性が報告されたものの、2010 年代では 65 地点まで 42%減少している。この減少は特に南日本で顕著であり、本州以南の地域では繁殖および繁殖の可能性のある地点数がこの期間に 53%減少し、北海道では 33%減少している。インド北東部から中国南東部にかけて、および台湾からマレー半島にかけて越冬する。

【生息地の現況】

九州では、ごく限られた二次草原に少数が生息している。繁殖地の二次草原は、野焼きや畜産などによって維持されているが、高齢化などによる管理放棄や農業形態の変化、開発、拡大造林などによって、二次草原の面積は長期的に減少傾向であるため、繁殖適地面積の減少が危惧される。四国・中国地方以北では二次草原のほかに、干拓後に成立した湿原植生、大規模な河川や湖沼、遊水地等のヨシ原に局所的に繁殖する。このような環境は、植生遷移（樹林化）や逆に河道掘削、また土地利用改変によって消失することがある。茅刈りが行われている湿原にも好んで生息するが、このような環境も担い手不足により消失が危惧される。東北北部から北海道では、河川敷や湖沼の湿原、耕作放棄地が主要な繁殖

地であり、時には農地の周縁のごく小規模のヨシ原や住宅街に囲われた小河川の河川敷でも繁殖している。北海道では、生息に適した湿原や草原の開発（特に再生可能エネルギー施設への転換）による繁殖地の消失が頻繁に生じている。標識個体が中国南東部や韓国西部で回収されているが、中継地や越冬地の状況はよくわかっていない。全国鳥類繁殖分布調査で、1990 年代から 2010 年代までの 20 年間で個体が確認されなくなった多くの地点では、生息地の樹林化が生じているように見受けられた。河川水辺の国勢調査では、同一地点における比較ではないものの、2001-2005 年に調査された全国 122 河川のうち、46%の河川で本種が確認されたが、2016-2021 年に調査された全国 77 河川では、33%の河川にしか出現していない。

【個体数の現況】

個体数を広域的に推定した研究は多くないため、国内の生息個体数について算出することができない。石狩平野における 2016 年時点の本種の個体数は、81,302 個体と推定されている。また、釧路湿原における本種の平均個体数密度は 10.54 個体/ha と推定されており、単純に釧路湿原の面積（26,860 ha）に乗じると、釧路湿原には 283,104 個体が生息していることになる。青森県の仏沼のほぼ全域を調査した研究では、1998 年には 364 個体が確認されているが、2010 年には 209 個体まで減少している。この減少は、この期間のヨシの稈長の低下に起因するものと考えられている。

存続を脅かす要因

主な要因は繁殖地の土地利用改変であると考えられる。二次草原を主に利用する本州以南の地域では、これら草原の管理放棄や草地改良、あるいは他の土地利用への転換が主要な脅威になっていると推測される。四国・中国地方以北では、河川敷や湖沼、遊水地の湿原植生が主要な繁殖環境であるが、これらの環境は土砂堆積や遷移の進行による乾燥化および樹林化が危惧される一方、河道掘削などの治水事業によっても消失する可能性がある。また、耕作放棄地や残存湿原・草原は北日本において本種の重要な繁殖環境であるものの、再生可能エネルギー導入の候補地として、近年消失が進んでいる。また分布が北日本に偏っていることから、南日本の個体群については、将来的に気候変動による負の影響を受ける可能性がある。同属のセスジコヨシキリは、フィリピンにある、唯一の既知の越冬地が農地に転換され失われており、コヨシキリについても越冬地の環境変化や過剰な捕獲が負の影響を与えている可能性を否定できない。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移，発電施設建設

特記事項

国内における状況の把握と共に、中継地や越冬地の解明は、本種の保全を進める上で重

要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類,【栃木県】準絶滅危惧(C ランク),【群馬県】準絶滅危惧(NT),【埼玉県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁),【千葉県】一般保護生物(D),【東京都（本土部)】情報不足(DD),【東京都（南多摩)】情報不足(DD),【東京都（西多摩)】情報不足(DD),【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】準絶滅危惧(NT),【石川県】準絶滅危惧(NT),【長野県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【愛知県】絶滅(EX)(繁殖),絶滅危惧ⅠA 類(CR)(通過),【滋賀県】希少種,【京都府】絶滅危惧種,【兵庫県】C ランク,【奈良県】絶滅危惧種,【島根県】情報不足(DD),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【熊本県】準絶滅危惧(NT),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Dyrcz, A., 2020. Black-browed Reed Warbler (*Acrocephalus bistrigiceps*), version 1. 0. In Birds of the World (J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie, and E. de Juana, Editors). Cornell Lab of Ornithology, NY.
- 愛媛県，2014．愛媛県レッドデータブック　愛媛県の絶滅のおそれのある野生生物．愛媛県，623pp.

- Guillaumet, A., Y. Gong, H. Wang, 2021. Distribution and habitat use of reed warblers and grass warblers in North-East China. Journal of Asian Ornithology, 37: 34-43.
- Hamao, S., 2003. Reduction of cost of polygyny by nest predation in the Black-browed Reed Warbler. Ornithological Science, 2(2): 113-118.
- Hamao, S., 2005. Predation risk and nest-site characteristics of the Black-browed Reed Warbler (*Acrocephalus bistrigiceps*): the role of plant strength. Ornithological Science, 4(2): 147-153.
- Hamao, S. and D. S. Saito, 2005. Extrapair fertilizations in the Black-browed Reed Warbler (*Acrocephalus bistrigiceps*): effects of mating status and nesting cycle of cuckolded and cuckolder males. Auk, 122(4): 1086-1096.
- Hanioka, M., Y. Yamaura, M. Senzaki, S. Yamanaka, K. Kawamura and F. Nakamura, 2018. Assessing the landscape-dependent restoration potential of abandoned farmland using a hierarchical model of bird communities. Agriculture, Ecosystems and Environment, 265: 217-225.
- Hanioka, M., Y. Yamaura, S. Yamanaka, M. Senzaki, K. Kawamura, A. Terui and F. Nakamura, 2018. How much abandoned farmland is required to harbor comparable species richness and abundance of bird communities in wetlandμm Hierarchical community model suggests the importance of habitat structure and landscape context. Biodiversity and Conservation, 27: 1831-1848.
- 堀田昌伸・尾関雅章，2019．霧ヶ峰における草原性鳥類と火入れによる草原管理．日本生態学会第 66 回全国大会 講演要旨集，pp. 2-459.
- 香川敏明，1989．同所性オオヨシキリとコヨシキリの種間関係．日鳥学誌，37(3): 129-144.
- 神奈川県，2006．神奈川県レッドデータブック 2006 WEB 版．神奈川県.
- 環境省 自然環境局 生物多様性センター，2023．鳥類アトラス WEB 版(鳥類標識調査 回収記録データ)．https://www.biodic.go.jp/birdRinging/index.html
- 川崎慎二・加藤和明・樋口広芳・高田玲子，1997．北海道東部・春国岱の繁殖期の鳥類相の変化．Strix，15: 25-38.
- Kitazawa, M., 2023, Broad-scale and long-term assessment of bird diversity in agricultural landscapes: Focusing on farmland intensification and abandonment. 令和 4 年度北海道大学博士論文.
- Kitazawa, M., Y. Yamaura, M. Senzaki, M. Hanioka, H. Ohashi, M. Oguro, T. Matsui and F. Nakamura, 2022. Quantifying the impacts of 166 years of land cover change on lowland bird communities. Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences, 289: 20220338.
- 国土交通省，2023．令和 3 年度河川水辺の国勢調査結果の概要[河川編](生物調査編)．国土交通省．15pp.
- 熊本県，2019．レッドデータブックくまもと 2019．熊本県環境生物部自然保護課，熊本．632pp.
- 三上修，2012．仏沼干拓地における草原性鳥類 5 種の繁殖期における環境選択の比較．山階鳥学誌，43(2): 169-175.
- 三上修・高橋雅雄，2013．湿性草原の環境変化に対する鳥類の応答：仏沼干拓地における 1998 年と 2010 年の比較．山階鳥学誌，44(2): 67-78.
- 百瀬浩・木部直美・藤原宜夫，2001．都市近郊における湿地の経時変化と鳥類の生息状況．環境システム研究論文集，29: 85-90.

- 髙橋佳孝，2009．種の保存と景観保全―阿蘇草原の維持・再生の取り組み．ランドスケープ研究，72(4): 394-398．
- 東京都環境局，2013．レッドデータブック東京 2013．東京都環境局，655pp.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．鳥類繁殖分布調査会，東京．176pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Acrocephalus bistrigiceps has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Acrocephalus bistrigiceps* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Grassland, Abandoned farmland, Wetland/Marsh/Stream, Middle river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Estuary, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Field preparation, Grassland development, Land development, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Power plant construction
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者: 北沢宗大（北海道大学）

Author:	Munehiro Kitazawa

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　メジロ科 Zosteropidae　　日本固有

ダイトウメジロ

***Zosterops japonicus daitoensis* Kuroda, 1923**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②				
基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生息条件が悪化している。 【判断理由】 南大東島では、農業用の土地改良により島内の樹林地が減少している。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

北大東島、南大東島の樹林地等に留鳥として生息する固有亜種である。体はメジロと同大で、前額の両側の黄色が顕著である。分布地である南大東島では、農業用の土地改良により島内の樹林地が減少している。人為的に移入されたイエネコやイタチによる巣内雛の捕食、ネズミによる卵の捕食も懸念される。

基礎情報

【形態】

嘴峰 11.5-14 mm、翼長 56.5-62 mm、跗蹠 18-19 mm、尾長 41.5-48 mm。体はメジロと同大であるが、前額の両側は黄色で、体の上面は赤さび色を帯びている。体側は汚クリーム色である。

【生活史】

低木や高木、庭木等の様々な樹木に営巣する。 産卵期は 4 月頃である。卵は淡青色で斑紋を欠く。営巣樹の周辺 5～10 m 四方を防衛範囲とし、採餌はその範囲外でも行う。地上性の捕食者が生息していない大東諸島で進化した亜種だが、地上からの捕食を免れるための適応行動を発達させている。繁殖経験を積んだ成鳥は、捕食者のタイプを認識して営巣場所を変化させることや、巣への出入り行動を変化させることができる。

【生息環境】

樹林地等に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

留鳥として大東諸島に生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布地である南大東島では、農業用の土地改良により島内の樹林地が減少している。

【生息地の現況】

農業用の土地改良のため、生息地である樹林地が減少している。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

農業用の土地改良による樹林地の減少。人家付近に営巣することも多く、人為的に移入されたイエネコやイタチによる巣内雛の捕食、ネズミによる卵の捕食も懸念される 。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，捕食（外来種による）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 清棲幸保，1978．増補改訂版 日本鳥類大図鑑Ⅰ．講談社，東京．
- 沖縄県環境部自然保護課，2017．改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）．pp. 175-176．沖縄県環境部自然保護課，沖縄．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Zosterops japonicus daitoensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Zosterops japonicus daitoensis* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest

Threat types:	Logging and wood harvesting, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	西海功（国立科学博物館）
Author:	Isao Nishiumi

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ツグミ科 Turdidae　　日本固有

オオトラツグミ

***Zoothera dauma major* (Ogawa, 1905)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　—	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　—

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
生息条件を悪化させる要因として、森林伐採やノネコによる捕食が挙げられる。これらの問題の対策は検討されており、また一部実行にも移されている。しかし、本種が生息する世界自然遺産登録地外の緩衝地帯において小規模な伐採が続いており、またノネコの排除も完了していない。今後、より効果的な対策を継続的に実施していく必要がある。その具体案が提示されないうちは生息条件の悪化が否定できない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

ユーラシア大陸に分布するミナミトラツグミ *Zoothera dauma* の奄美大島固有亜種。同所的に越冬するトラツグミ（*Zoothera aurea*）とは、羽色や尾羽の枚数、体サイズに違いがあり、またさえずりも明瞭に異なっている。ユーラシア大陸に分布する亜種群との分類学的な検討が望まれる。湿潤な高齢の広葉樹林に生息するが、近年は二次林的な環境にも分布を広げている。森林伐採の減少と外来の哺乳類フイリマングースの根絶にともない、繁殖個体群は増加傾向にある。個体数は 2007 年から 2013 年の間に 2000～5000 個体程度と推定されており、それ以降のセンサスでも減少は確認されていない。本亜種は遺伝的多様性が著しく低く、一つの島にのみ生息していることから、大型台風や外来伝染病などの突発事象により再び絶滅の可能性が高まる可能性は否定できない。また、奄美大島が世界自然遺産に登録され、林業は管理されているものの、本種は遺産登録地外の緩衝地帯にも生息しており、そこで行われる林業の規模によっては生息地の質が悪化するおそれもある。地上で採食する本種はノネコに捕食される可能性もあり、ノネコの管理も奄美大島における重要な課題である。

基礎情報

【形態】

翼長 158.5‐171.0 mm（n=34）、ふしょ長 41.0‐44.7 mm（n=34）、体重 170‐216 g（n=32）。ずんぐりとした体形をしており、脚は長い。上面はくすんだ黄褐色ないしはオリーブ色で、羽軸周辺が白く、先端の黒い羽毛により斑点模様に見える。腹部は白色もしくは淡黄色で、先端が黒い羽毛がありうろこ状の模様となっている。尾羽は茶褐色。尾羽は 12 枚（トラツグミは 14 枚）。上尾筒の羽軸は黒く、トラツグミとの識別点になる。

【生活史】

繁殖期は 3～6 月。木の枝の股、岩棚、着生シダの株の中などに、小枝や苔で椀型の巣を造る。一夫一妻で、メスが抱卵、抱雛を行い、オスが巣内のメスや雛に餌を運ぶ。給餌物の 8～9 割はミミズである。一腹卵数は多くの場合 3 卵。繁殖期には日の出前の約 30 分間を中心に一斉にさえずる。さえずりは「キュルリーン」、「キョロリン」などと聞こえる抑揚のある澄んだ声であり、単調なトラツグミのさえずりとは大きく異なる。

【生息環境】

樹冠がよく閉鎖し、風当りが少なく林床湿度が高い壮齢の広葉樹林に多く生息するほか、2010 年ごろまではマングースの密度の低いところにより多く分布していた。近年は二次林的な環境にも分布を広げている。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

奄美大島のみに分布する。1905 年に新種として記載された際には名瀬（現在の奄美市名瀬）の近郊でも捕獲されており、奄美大島の広い地域に生息していたのではないかと考えられる。しかしその後、おそらく木材の需要が増え、かつ市街地の後背地の森林が耕作地として切り開かれたことにより、昭和の初めごろには市街地周辺での確認は減ったと推測される。1990 年代がもっとも分布域が狭く、中～南部の極めて限られた壮齢の広葉樹林にしか生息していなかった。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北部の笠利半島を除く奄美大島の中～南部に分布する。近年は分布が徐々に広がっており、二次林のような環境でも見られるようになった。かつては分布していなかった奄美市名瀬の周辺でも、近年はさえずりが確認されている。名瀬より北の龍郷町の森林にも生息するが、中～南部に比べ密度は低い。笠利半島や奄美大島のすぐ南にある加計呂麻島では確認されていない。

【生息地の現況】

1950 年代から 1990 年代にかけて大規模に行われた森林伐採により、生息地は大きく損なわれた。それに加えて、1979 年にハブを駆除するために放たれたフイリマングースが急増し捕食圧が高まったため、1990 年代は生息地としての質は劣悪であったと考えられる。その後、伐採の減少とマングース防除事業の進展により好適な生息地が増え、それに伴って分布域も拡大した。

【個体数の現況】

1990 年代は個体数が少なく 2002 年発行の環境省レッドデータブックでは「100 つがい未満程度」とされていた。その後、NPO 法人奄美野鳥の会が主体となって毎年春に実施しているさえずり個体一斉調査やその補足調査、環境省による調査などの結果を用いて個体数推定が行われ、2007 年から 2013 年の間に 2000～5000 個体程度（2013 年に 5024 個体）という推定値が得られている。

存続を脅かす要因

かつて大規模に行われていた森林伐採と、外来の哺乳類フイリマングースによる捕食が個体数減少の主要因であった。マングースは防除事業により根絶が達成されたが、森林伐採は世界自然遺産登録後も登録地外で小規模ながら続けられている。オオトラツグミは分布域が拡大し登録地外にも生息しているため、林業の管理は必須である。マングースと同じく外来の捕食者であるノネコもさまざまな野生動物を捕食しており、地上で採食する本種も被害にあう可能性があるため、適切な管理が必要である。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，ゴルフ場，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，捕食（外来種による）

特記事項

これまで同種の別亜種とされていたトラツグミは、10～4 月に奄美大島でも越冬するためこの時期は同所的に生息することになるが、交雑は確認されておらず生殖隔離は成立していると考えられる。ミナミトラツグミの亜種間の分類学的位置づけについては再検討を要する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオトラツグミ	*Zoothera dauma major*	VU
第４次 2019：	オオトラツグミ	*Zoothera dauma major*	VU
第４次 2018：	オオトラツグミ	*Zoothera dauma major*	VU
第４次 2017：	オオトラツグミ	*Zoothera dauma major*	VU
第４次 2015：	オオトラツグミ	*Zoothera dauma major*	VU
第４次：	オオトラツグミ	*Zoothera dauma major*	VU

第３次:	オオトラツグミ	*Zoothera dauma major*	VU
第２次:	オオトラツグミ	*Zoothera dauma major*	CR
第１次:	オオトラツグミ	*Turdus dauma amami*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 奄美野鳥の会，2009．奄美の野鳥図鑑．pp. 18-19, 244．文一総合出版，東京．
- 石田健・金井裕・金城道男・村井英紀，1990．オオトラツグミ *Zoothera dauma amami* の分布，生態および保護．平成元年度特殊鳥類調査，pp. 41-63．環境庁，東京．
- 石田健・植田睦之・藤田剛，1995．奄美大島におけるオオトラツグミの生息状況．平成 6 年度奄美大島希少鳥類生息状況調査報告書，pp. 41-59．環境庁，東京．
- 石田健・杉村乾・山田文雄，1998．奄美大島の自然とその保全．生物科学，50(1): 55-64．
- 環境省那覇自然環境事務所，2019．平成 30 年度オオトラツグミ調査報告書．21pp. 環境省，那覇市．
- 環境省沖縄奄美自然環境事務所，2020．令和元年度奄美希少野生生物保護増殖事業 生息状況モニタリング調査等業務報告書．45pp. 環境省，那覇市．
- Mizuta, T., 2014. Habitat requirements of the endangered Amami Thrush (*Zoothera dauma major*), endemic to Amami-Oshima Island, southwestern Japan. Wilson Journal of Ornithology, 126: 298-304.
- Mizuta, T., M. Takashi, H. Torikai, T. Watanabe and K. Fukasawa, 2017. Song-count surveys and population estimates reveal the recovery of the endangered Amami Thrush *Zoothera dauma major*, which is endemic to Amami-Oshima Island in south-western Japan. Bird Conservation International, 27: 470-482.
- 水田拓，2018．見えない鳥の数を数える ―希少種オオトラツグミの個体数推定―．水田拓・高木昌興（編），島の鳥類学 ―南西諸島の鳥をめぐる自然史―，pp. 309-325．海游舎，東京．
- 塩野﨑和美，2016．好物は希少哺乳類 奄美大島のノネコのお話．水田拓 (編著)，奄美群島の自然史学 亜熱帯島嶼の生物多様性，pp. 271-289．東海大学出版部，平塚．
- Sugimura, K., 1988. The role of government subsidies in the population decline of some unique wildlife species on Amami Oshima, Japan. Environmental Conservation, 15: 49-57.
- 高美喜男・川口和範・石田健，1999．オオトラツグミ *Zoothera (dauma) major* とトラツグミ *Z. d. aurea* の保護個体の形態およびオオトラツグミの保護対策への付言．Strix，17: 191-196．

- 高美喜男・藤本勝典・川口和範・川口秀美・石田健，2002．オオトラツグミ *Zoothera major* の初めて観察された巣立ちまでの営巣経過 2 例．Strix，20: 71-77.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Zoothera dauma major has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Zoothera dauma major* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	水田拓（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Taku Mizuta

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　セキレイ科 Motacillidae

ビンズイ

***Anthus hodgsoni hodgsoni* Richmond, 1907**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①

基準 A:　VU 未満	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
1990 年代と 2010 年代に実施された全国鳥類繁殖分布調査によれば、個体数が 40%の減少率で減少している。ただし、同調査による確認メッシュ数での比較では 26%の減少率であること、分布の中心域より周辺部で減少していることから、総合的に考えると、現時点では、VU には該当しないと判断した。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

ビンズイは本州、四国以北の寒冷な森林、草原で繁殖し、南東北以南で越冬する。1990 年代以降、繁殖分布が縮小しており、特に標高の低い場所での減少が顕著だった。

基礎情報

【形態】

全長 147-163 mm、翼長 77-87 mm、尾長 26-64 mm、嘴峰長 11-12 mm、ふ蹠長 20-22 mm、体重 16-30 g。

雌雄同色で、上面は緑褐色で、眉斑と耳羽にクリーム色の部分がある。下面はクリーム色で、黒い縦斑がある。

【生活史】

本州、四国以北の寒冷な森林、草原で繁殖し、関東以南では標高の高い場所に多い。冬期は南東北以南で越冬し、海岸のマツ林など低標高の場所にも多い。地上に草の茎などを使って 8-13 cm 程度の巣をつくり、20.5×15.4 mm 程の卵を 3-5 卵産む。抱卵期間は 12-13 日で、孵化後 10 日程度で巣立つ。

【生息環境】

寒冷な森林、草原で繁殖する。林床の開けた明るい林を好む。越冬期は海岸のマツ林など低標高の林床の開けた林に生息する。

生息環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地 低標高地】裸地，森林，草地 【陸域_平地部 海岸部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

繁殖期は四国、本州以北に分布する。関東以西では比較的標高の高い場所に生息することが多い。越冬期は南東北以南に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1970 年代、1990 年代、2010 年代に実施されている全国鳥類繁殖分布調査では、1970 年代と 1990 年代を比較すると、198 メッシュと 202 メッシュでほとんど変わりなかったが、2010 年代には 150 メッシュと大きく減少していた。また、比較可能な現地調査の実施コースで比較しても、1168 コースから 99 コースと大きく減少していた。特に記録されなくなった場所は標高の低い場所で多かった。また、北海道と比べると東北以南で見られなくなったコースの割合が高かった。越冬期の分布については、東北地方や中部地方の内陸部や日本海側の分布がやや広がっており、積雪の減少で分布が拡がっている可能性がある。

【生息地の現況】

近年、森林にはシカの増加で下草がなくなってしまっている場所がある。ビンズイは下草の少ない明るい林を好むため、シカの摂食により、本種にとってはむしろ好適な生息地が創出されたと考えられている事例もある。

【個体数の現況】

全国鳥類繁殖分布調査の現地調査で記録された羽数は 1990 年代の 736 羽から 415 羽に

減少していた。東京都鳥類繁殖分布調査の結果では 7 羽から 11 羽に増加していた。これは生息地の現況でも述べたように、シカの影響で植生が変わった場所で新たに記録されるようになったためだった。また、モニタリングサイト 1000 里地調査では、2008-2022 年に年あたり-6.6%と減少が示されている。

存続を脅かす要因

関東以西では、もともと標高の高い場所に生息する傾向があり、2010 年代の調査では標高の低い生息地あるいは、北海道よりも東北以南で見られなくなった場所が多いように南で生息が確認されなくなった場所が多かった。これは気候変動の影響をうけている可能性が考えられた。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	気候変動，不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【群馬県】準絶滅危惧(NT),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(繁殖期),【愛知県】絶滅(EX)(繁殖),絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越冬),【奈良県】希少種,【鳥取県】準絶滅危惧(NT),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】準絶滅危惧(NT),【熊本県】絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 長谷川新平，1975．繁殖を低める托卵＜ビンズイ＞．羽田健三（監），野鳥の生活，pp. 129-133．築地書館，東京．
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2024．重要生態系監視地域モニタリング推進事業 (モニタリングサイト 1000) 里地調査 2005-2022 年度とりまとめ報告書．153pp. 環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田．
- 清棲幸保，1979．増補改訂版日本鳥類大図鑑Ⅱ．講談社，東京．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Anthus hodgsoni hodgsoni has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Anthus hodgsoni hodgsoni* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area, Mid-altitude area, Low-altitude area】Bare area, Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest
Threat types:	Climate change, Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	植田睦之（バードリサーチ）
Author:	Mutsuyuki Ueta

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ホオジロ科 Emberizidae

ノジコ

***Emberiza sulphurata* Temminck & Schlegel, 1848**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①

基準 A:　—	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　—

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
福井県敦賀市中池見湿地および新潟県長岡市、三条市において秋季の渡りの標識個体数が近年減少している。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

全長 13～14 cm。一夫一妻。繁殖地は世界中で日本のみが知られる渡り鳥で、本州の中部以北の多雪地帯で繁殖する。繁殖期は低標高域の沢筋の林縁や矮性低木林、耕作放棄地から高標高域の湿地に成立するサワラやハンノキ林を選好する。4 月下旬頃に繁殖地に渡来し、雌のみが低木や草本の根元に、枯れた草の葉や茎などを用いて椀形の巣をつくる。一腹卵数は 3–5 個で、抱卵およびヒナへの給餌は鱗翅目幼虫やクモ類を中心に雌雄共同で行ない、抱卵期間は 14 日間で、ヒナは孵化後 7 日ほどで巣立つ。秋の渡りは本州中部で 10 月上・中旬にピークを迎え、秋の渡りの際に中山間地のヨシ原を利用する。越冬地は主に中国南部、台湾、フィリピン北部とされている。主要な繁殖環境である低山帯の沢筋では、かつての水田が耕作放棄され、本種にとって好適な湿性の草地、灌木林となっているところが多い。国内では 1930 年代に平均で 1 年間に約 26,000 羽が捕獲されており、その間に個体数が著しく減少したと考えられる。現在の詳しい個体数は不明。繁殖地は全体的に増加傾向にあるが、近年、秋の渡りの標識個体数は減少している。開発や耕作放棄地の植生遷移の進行による生息環境の減少または消失が懸念される。本種が渡りの中継地として定期的に利用することが基準の一つとなり、福井県敦賀市の中池見湿地がラムサール条約に登録されているほか、生息地の一部地域は国設または県設の鳥獣保護区になっている。

基礎情報

【形態】

全長 13～14 cm、雄は頭部が灰色味のある黄緑色で、目先およびのどは黒色。体上面は淡い黄緑色で黒色の縦斑があり、中雨覆および大雨覆の先端は白っぽい。喉から腹は明るい黄色。雌は雄と比較して全体的に茶色味を帯び、体下面の黄色は淡く、脇腹の縦斑も多い。雌雄ともに眼の周囲には白色のアイリングがあり、下嘴は青灰色で、尾羽の外側 2 枚に白色の斑がある。アオジ *Emberiza personata* に酷似するが、本種には白色のアイリングがあり、下嘴が青灰色という点で識別できる。

【生活史】

一夫一妻。4 月下旬頃に雄の方が先に繁殖地に渡来し、後から到着した雌に求愛し、つがい形成する。つがい形成後になわばり分散を行なう。雄がよく利用するソングポストの近くの低木や草の根元に、枯れた草の葉や茎などを用いて雌が椀形の巣をつくる。一腹卵数は 3–5 個で、抱卵およびヒナへの給餌は鱗翅目幼虫やクモ類を中心に雌雄共同で行ない、抱卵期間は 14 日間で、ヒナは孵化後 7 日ほどで巣立つ。秋の渡りは本州中部で 10 月上・中旬にピークを迎え、渡りの中継地ではミゾソバなどの種子をついばむ。越冬地は中国南部、台湾、フィリピン北部とされている。標識調査から明らかにされている野外での最長生存期間は約 6 年。

【生息環境】

本州の中部以北の多雪地帯で繁殖する。低標高域の沢筋から高標高域の湿地で繁殖し、前者では林縁や灌木林、雪崩、地すべりによる矮性低木林、耕作放棄地に発達するやぶ環境を選好する。後者では湿地の中でもサワラ林やハンノキ林の選好性が強い。富士山北麓ではカラマツ林においても繁殖期の生息が確認されている。

秋の渡りの際は中山間地のヨシ原などを利用する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原・細流
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では主に本州の中部以北（石川県―岐阜県―静岡県以東）の多雪地帯で繁殖分布する（植田・植村 2021）。過去には山陰地方、広島県、兵庫県、愛知県そして北海道においても繁殖またはその可能性を示唆する記録がある。春秋の渡りの時期には北海道を除く、本州、四国、九州の各地で観察される。

越冬地は国外の中国南部、台湾、フィリピン北部とされているが、1980 年代には国内（関東以西）においても複数の越冬期の記録がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

繁殖分布は本州の中部以北の海抜約 0 m～約 1,800 m で、新潟県および東北地方に多い。繁殖メッシュ数は 1970 年代から全体的に増加傾向にある。春秋の渡りの時期には本州南西部や四国、九州も通過する。現在、越冬期はほとんど国内に分布していない。

【生息地の現況】

新潟県や北陸地方の主要な繁殖環境である低山帯の沢筋では、かつての水田が耕作放棄され、本種にとって好適な湿性の草地、灌木林となっているところが多い。一方で、これらの環境はイノシシやニホンジカの採餌場、ヌタ場となっており、巣の破壊も含めた本種への悪影響が懸念される。秋の渡りの重要な中継地である福井県の中池見湿地では隣接して大規模開発が実施されたが、影響の詳細については不明である。

【個体数の現況】

世界の個体数は、これまで成熟個体数でおよそ 2,500～9,999 羽、また別の推定で繁殖つがい数は 100,000 組ともされており、これらは過小評価でさらに多い可能性も指摘されているが、現在の個体数は不明。国内では 1930 年代に平均で 1 年間に約 26,000 羽が捕獲されており、その間に個体数が著しく減少したと考えられる。同一の繁殖地域で異なる年代の 6 月に行われた密度調査では、1970 年代には平均 0.25 羽/ ha であったのが、2010 年代は平均 0.5 羽/ ha と約 40 年間で倍増している。繁殖地は全体的に増加傾向にある。一方で、近年、秋の渡りの標識個体数は減少している。

存続を脅かす要因

1930 年代には国内で 1 年間に 10,000～30,000 羽単位で捕獲されており、国内外におけるかつての捕獲圧が種の存続をおびやかす主要因となっていたと考えられている。現在、国内においては捕獲の脅威はほとんどないものと考えられるが、国外では台湾で捕獲取引が記録されており、引き続き捕獲が本種にとって脅威になっている可能性が少なくない。国内では繁殖地、渡りの中継地における開発や植生遷移の進行による生息環境（湿性環境）の減少または消失が懸念される。また本種は多雪地の雪解け水が豊富な湿性環境で繁殖し、雪崩や地すべり頻発地に形成されたやぶ環境を好むため、気候変動による積雪量減少の悪影響を受ける可能性も考えられる。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，圃場整備，草地開発，ゴルフ場，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	湿地開発，草地開発，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

日本が世界で唯一の繁殖地であり、国内における本種の保全の重要性は非常に高い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ノジコ	*Emberiza sulphurata*	NT

第４次 2019：	ノジコ	*Emberiza sulphurata*	NT
第４次 2018：	ノジコ	*Emberiza sulphurata*	NT
第４次 2017：	ノジコ	*Emberiza sulphurata*	NT
第４次 2015：	ノジコ	*Emberiza sulphurata*	NT
第４次：	ノジコ	*Emberiza sulphurata*	NT
第３次：	ノジコ	*Emberiza sulphurata*	NT
第２次：	ノジコ	*Emberiza sulphurata*	NT
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】希少野生生物(C ランク),【岩手県】留意,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【秋田県】準絶滅危惧(NT),【山形県】準絶滅危惧(NT),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】情報不足①注目種,【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク),【群馬県】準絶滅危惧(NT),【神奈川県】希少種(繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【山梨県】準絶滅危惧(NT),【長野県】準絶滅危惧(NT),【岐阜県】準絶滅危惧,【愛知県】絶滅(EX)(繁殖),絶滅危惧ⅠB 類(EN)(通過),【滋賀県】希少種,【兵庫県】A ランク,【岡山県】準絶滅危惧,【徳島県】準絶滅危惧(NT),【高知県】準絶滅危惧(NT),【福岡県】準絶滅危惧(NT),【長崎県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- BirdLife International. 2022. *Emberiza sulphurata*. *The IUCN Red List of Threatened Species*2022: e.T22720996 A154686501. https://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK. 2022-1.RLTS.T22720996A154686501.en. （2025.4.25 閲覧）
- Deguchi, S., Y. Ishihara and H. Miguchi, 2017. Habitat preferences of breeding Yellow Buntings *Emberiza sulphurata* in hilly rural areas following rice field abandonment in northern Japan. Bird Conservation International, 27:550-559.
- Deguchi, S., Y. Ueda and M. Hisano, 2022. Temperature and snow depth explain the breeding distribution pattern of Yellow Bunting *Emberiza sulphurata*. Ornithological Science, 21(2): 133-143.
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本野鳥生態図鑑＜陸鳥編＞．保育社，大阪．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録　改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．
- 鉄道・運輸機構 北陸新幹線建設局，2024．北陸新幹線，中池見湿地付近モニタリング調査等 フォローアップ委員会（第 10 回）議事概要の公表について．https://www.jrtt.go.jp/project/Nakaikemi10.pdf. （2024.11.29 閲覧）

- The Ramsar Sites Information Service, 2012, Information Sheet on Ramsar Wetlands (RIS) - 2009-2012 version. https://rsis.ramsar.org/RISapp/files/RISrep/JP2057RIS.pdf. （2024.11.12 閲覧）
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．p. 134．鳥類繁殖分布調査会，東京.
- 植田睦之・奴賀俊光・山﨑優佑，2023．全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年．144pp. 特定非営利活動法人 バードリサーチ・公益財団法人 日本野鳥の会，東京.
- 渡辺央・木下徹，2022．長岡市比礼及び加茂市下条の秋季標識調査からみたノジコの渡りについて．にいがたバンダーニュース，No．79: 6-9.
- 吉田一朗，2007．福井県中池見湿地付近におけるノジコ．Ciconia（福井県自然保護センター研究報告），12: 21-23.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Emberiza sulphurata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Emberiza sulphurata* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Wetland development, Grassland development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



©出口翔大（福井市自然史博物館）

執筆者:	出口翔大（福井市自然史博物館）
Author:	Shota Deguchi

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

ツクシガモ

***Tadorna tadorna* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　データ不足	基準 E:　－
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生息地が局限されている。 【判断理由】 ほとんどの越冬個体が佐賀県沿岸の干潟に生息している。生息地環境が変化すると個体群が崩壊する恐れがある。				
評価分科会：　鳥類分科会				

概要

最近 10 年は佐賀県沿岸で個体数がかなり増えている。干潟という変化しやすい環境を採食地にしているため注意が必要だが、現状では絶滅危惧の判定基準に該当しない。

基礎情報

【形態】

全長 61-63 cm。マガモ（*Anas platyrhynchos*）よりも若干大きい程度の白色の鳥。頭部と肩羽は緑色の光沢がある黒色で、嘴は赤色、胸から背にかけて茶色の帯がある。脚は薄いピンク色。オスは繁殖期には嘴の基部がコブのようになる。

【生活史】

日本には冬鳥として渡来し、泥浜干潟や水田で採餌する。泥浜の表面や水底を、嘴を忙しく動かしてさぐり、軟体動物や昆虫、甲殻類などを食べる。

【生息環境】

日本では主に泥干潟で観察される。冬季に水がある水田でも見られることがある。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_表層】海面，干潟
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

日本は冬鳥として全国で記録がある。国外では北西ヨーロッパの沿岸部から地中海、中央アジアから中国北東部にかけて、及び中国南部、そしてイランからアフガニスタンに分布。

現在の生息状況

【分布域の現況】

冬季に西日本に飛来し、瀬戸内海沿岸や有明海沿岸でよく見られる。越冬分布は東日本へと拡大しつつある。2010 年代後半から佐賀県の個体数が増えている。

【生息地の現況】

最大生息地の佐賀県沿岸の干潟には大きな変化はないが、大阪の越冬個体はほぼすべてが開発予定地の夢洲に飛来しているため、生息地の喪失が懸念される。

【個体数の現況】

2010 年代後半以降では、大阪で 100 羽前後、岡山で 100-200 羽、広島・徳島で数十羽が毎年越冬している。佐賀県の越冬数は 2010 年代前半の数百羽だったのが 2010 年代後半から増加を始めて、2021 年 1 月には 5000 羽にもなっている（ガンカモ類の生息調査）。

存続を脅かす要因

最近 10 年は生息数が急増しており、非常に大きな個体数が佐賀県沿岸に集中しているため、この地域の干潟の環境が変わることがあれば大きな影響を受けるだろう。大阪府最大の生息地は埋立地の夢洲だが、ここは開発による生息環境の喪失が懸念される。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，湿地開発

	（現在）	海岸開発，湿地開発

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ツクシガモ	*Tadorna tadorna*	VU
第４次 2019：	ツクシガモ	*Tadorna tadorna*	VU
第４次 2018：	ツクシガモ	*Tadorna tadorna*	VU
第４次 2017：	ツクシガモ	*Tadorna tadorna*	VU
第４次 2015：	ツクシガモ	*Tadorna tadorna*	VU
第４次：	ツクシガモ	*Tadorna tadorna*	VU
第３次：	ツクシガモ	*Tadorna tadorna*	EN
第２次：	ツクシガモ	*Tadorna tadorna*	EN
第１次：	ツクシガモ	*Tadorna tadorna*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd)，【山形県】評価対象外，【福井県】要注目，【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越冬)，【三重県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【兵庫県】要注目種，【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【島根県】準絶滅危惧(NT)，【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【徳島県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福岡県】準絶滅危惧(NT)，【佐賀県】絶滅危惧Ⅰ類種，【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【熊本県】準絶滅危惧(NT)，【大分県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 環境省自然環境局，2010．第 41 回ガンカモ類の生息調査報告書（平成 21 年度）．
- 環境省自然環境局，モニタリングサイト 1000，2023/09/25，https://www.biodic.go.jp/moni1000/index.html
- 環境省自然環境局，ガンカモ類の生息調査，2023/09/25，https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html

- 植田睦之・奴賀俊光・山﨑優佑，2023．全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年，pp. 170．特定非営利活動法人 バードリサーチ・公益財団法人 日本野鳥の会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tadorna tadorna has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tadorna tadorna* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface, Intertidal mudflat
Threat types:	Coastal development, Wetland development
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	神山和夫（バードリサーチ）
Author:	Kazuo Koyama

公表年月：2026 年 3 月

カモ目 Anseriformes　カモ科 Anatidae

トモエガモ

***Sibirionetta formosa* (Georgi, 1775)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②

基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　データ不足	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。
②生息地が局限されている。
【判断理由】
急激に個体数が増えた理由が分からず、また少数の湖沼に数万から十万を超えるような群れが飛来していることから、今後も安定して個体数が維持されるかをモニタリングし続ける必要がある。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

　環境省第 4 次レッドリストでは絶滅危惧 II 類（ＶＵ）に指定されていた種だが、近年は個体数が急増しているため、絶滅危惧種の判定基準に該当しない。

基礎情報

【形態】

全長 39-43 cm。コガモ（*Anas crecca*）と同大。オスは顔が黄色、緑色、黒色、そして白色の巴模様で、肩羽には橙色、黒色と白色の長い飾り羽がある。胸はうっすらと赤みをおびており、黒色の小さな斑が多数ある。脇は灰色で下腹部が黒色、背は褐色である。メスはコガモのメスに似て全身が褐色で地味な羽色であるが、頬の嘴の根本あたりに白斑があり、区別できる。

【生活史】

日本では冬鳥として渡来し、湖、池沼、河川等に飛来するが、夜間は水田や湿地、樹林に移動して採餌する。雑食であるが、イネ科などの種子や植物片、樹林ではドングリなどを採食する。

【生息環境】

日本では主に湖、池沼、河川（中流、下流）に生息する。警戒心が強く、広い水域か、人が近づきにくい水域で休息する。夜間は草地、湿地や樹林で採食する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，田地・畑地，河川上流域，河川中流域，湖・ダム湖 【陸域_平地部 海岸部】森林，田地・畑地，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_表層】海面
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

数十万羽にもなる群れをつくる習性を持つ種で、明治時代には手賀沼で「天を覆い田を埋める」ような大群が飛来したとの記録がある。個体数は 20 世紀後半に減少し、2004 年 1 月の日本・韓国合同 トモエガモカウント調査では、新潟県の朝日池、鳥取県米子水鳥公園、福岡県の今津干潟、和白干潟などで計 2,129 羽が記録されただけだった。

現在の生息状況

【分布域の現況】

西日本の日本海側の県での記録が多い。太平洋側では千葉県の印旛沼や夏目の池に大きな数が飛来する。

【生息地の現況】

平地の湖沼や山間部のダムや河川に飛来する。山間部ではドングリを食べているとの観察事例がある。警戒心が高く、いずれも人が近づかない場所や、大きな湖沼の中央付近を休息場所にしている。

【個体数の現況】

2010 年代から大群で越冬している事例が増えており、2021 年度越冬期には全国で約 16

万羽が記録された。

存続を脅かす要因

2000 年に韓国で鳥コレラによる大量死が起こり、10,000 羽以上が死亡した事例があった。本種は大きな群れを作るため、国内でも感染症による大量死が起きる可能性がある。2023 年現在では越冬個体数が急増して特定の湖沼に数万から数十万羽が集まることから、十分な餌資源があるかということも懸念される。

要因の区分：	（過去）	感染症/病原菌，その他（秋耕で餌の落ち籾がなくなること、休息場所の人為的攪乱）
	（現在）	感染症/病原菌，その他（秋耕で餌の落ち籾がなくなること、休息場所の人為的攪乱）

特記事項

Threatened Birds of Asia で「Vulnerable」に位置づけられている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	トモエガモ	*Anas formosa*	VU
第４次 2019：	トモエガモ	*Anas formosa*	VU
第４次 2018：	トモエガモ	*Anas formosa*	VU
第４次 2017：	トモエガモ	*Anas formosa*	VU
第４次 2015：	トモエガモ	*Anas formosa*	VU
第４次：	トモエガモ	*Anas formosa*	VU
第３次：	トモエガモ	*Anas formosa*	VU
第２次：	トモエガモ	*Anas formosa*	VU
第１次：	トモエガモ	*Anas formosa*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】留意(N),【青森県】希少野生生物(C ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【秋田県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山形県】準絶滅危惧(NT),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【栃木県】準絶滅危惧(C ランク),【埼玉県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越),【千葉県】重要保護生物(B),【東京都（本土部）】情報不足(DD),【東京都（区部）】情報不足(DD),【東京都（北多摩）】情報不足(DD),【神奈川県】希少種(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【山梨県】情報不足(DD),【長野県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越冬),【三重県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【滋賀県】希少種,【京都府】準絶滅危惧種,【兵庫県】C ランク,【奈良県】絶滅危惧種,【和歌山県】絶

滅危惧Ⅱ類(VU)，【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【島根県】準絶滅危惧(NT)，【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【香川県】準絶滅危惧(NT)，【愛媛県】準絶滅危惧(NT)，【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福岡県】準絶滅危惧(NT)，【佐賀県】準絶滅危惧種，【長崎県】準絶滅危惧(NT)，【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- アジア太平洋地域渡り性水鳥保全委員会・ガンカモ類ワーキンググループ，日本・韓国合同 トモエガモカウント調査（2004），2023/09/25，http://www.jawgp.org/anet/anafo602.htm
- バードリサーチ，トモエガモの越冬数が急増している，2023/09/25，https://db3.bird-research.jp/news/202211-no1/
- 環境省自然環境局，モニタリングサイト 1000，2023/09/25，https://www.biodic.go.jp/moni1000/index.html
- 環境省自然環境局，ガンカモ類の生息調査，2023/09/25，https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html
- 森茂晃・星野由美子，2021．宍道湖に大量飛来したトモエガモの飛行行動と採食地．日本鳥学会 2021 年度大会要旨集，p. 102．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

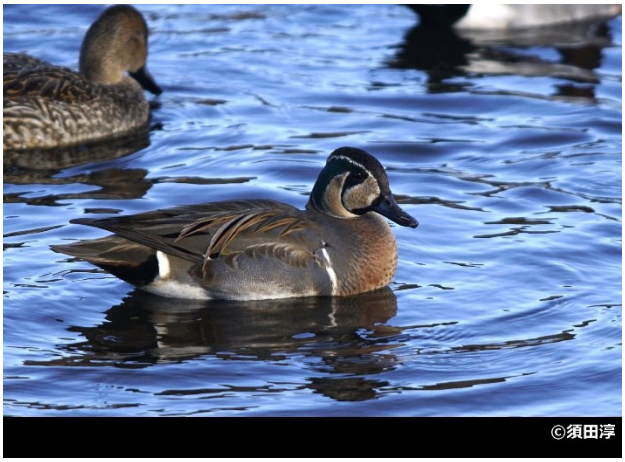
Sibirionetta formosa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sibirionetta formosa* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Farmland, Upper river basin, Middle river basin, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Farmland, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Disease, Other

Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	神山和夫（バードリサーチ）
Author:	Kazuo Koyama

公表年月：2026 年 3 月

ハト目 Columbiformes　ハト科 Columbidae　　日本固有

キンバト

***Chalcophaps indica yamashinai* Hachisuka, 1939**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。
③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。
【判断理由】
先島諸島の固有亜種である。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

先島諸島に分布する金属光沢のある緑色の小型のハトである。森林性が強く、観察が困難なため、生息状況、生態ともに不明の点が多い。宮古島では 6 月から 7 月が繁殖期とされる。他の森林性のハトと同じく樹木の果実を食するほか、穀類も採餌する。森林面積の減少による個体数の減少が危惧されている。

基礎情報

【形態】

全長 25 cm、嘴峰長 17～20 mm、翼長 138～152 mm、ふ蹠長 25～29 mm、尾長 84～91 mm。細く赤い嘴を持った小型のハト。オスの額は白く、後頭部は青灰色、額から眉斑は白い。背と雨覆羽は金属光沢のある緑色、下背、腰、上尾筒は青鉛色で、下背には 2 本の白い横帯がある。下面は紫がかった赤茶色。メスは全体的に淡い色調で、額からの眉斑は暗灰色。下面は、オスより赤みが少なく、灰褐色みが強い。

【生活史】

常緑樹の木の枝別れ部分に枝を編み込んだ浅い皿型の巣を作り、2 卵を生む。宮古島で確認された営巣事例では、5 月から 7 月に産卵・育雛が行われ、初卵は 6 月中旬が多く、抱卵期間は約 2 週間、育雛期間は約 12 日であった（田中ほか 2013）。トウゴマやハゼノキ、穀類などの種子や果実、シロアリなどを地上で採餌し、伐採地や道際にも現れる。西表島と石垣島で報告された建築物への衝突事故の位置から、夜間には林外の草地で採餌していることが示唆されている。

【生息環境】

本亜種の調査研究例はほとんどなく、生態についてはほとんどわかっていない。よく茂った林にすみ、林中の地上に降りて主に植物質の餌をあさる。普通は林から出てきて遠距離を飛ぶことはなく、林の低い所を飛ぶ。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

種キンバト（*Chalcophaps indica*）は、インドから東南アジア、オーストラリアの東海岸にかけて広く分布する。本亜種は、八重山諸島及び宮古諸島に周年生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

八重山諸島に属する石垣島、西表島、鳩間島、竹富島、小浜島、黒島、与那国島と宮古島、多良間島に生息し、森林面積の大きい石垣島と西表島が主要な生息地である。

【生息地の現況】

生息が確認された場所はすべて、常緑広葉樹林であった。

【個体数の現況】

1991 年に行われた声によるラインセンサスでは、1 km あたり西表島で 1.4～1.5 羽、石垣島で 1.6～2.8 羽の記録がある。森林性が強く、林内での観察が困難であるため生息数変動や総個体数を比較できる資料はない。

存続を脅かす要因

森林性の強い鳥類であるので、森林の伐採による森林の分断化、森林面積の減少は個体数の減少に直接つながる。森林面積が減少している石垣島や、他の面積の小さい島では農地開発やレジャー開発による森林伐採が絶滅に直結するおそれが強い。森林に隣接した建築物では、ガラスへの衝突事故が生じている。宮古島ではネコ、イタチ、クマネズミ、ハシブトガラスが捕食者としての可能性が考えられる。（田中ほか 2013）

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による），捕食（在来種による），その他（ガラスへの衝突事故）
	（現在）	森林伐採，捕食（外来種による），捕食（在来種による），その他（ガラスへの衝突事故）

特記事項

伊澤らが 2002 年にイリオモテヤマネコの生態調査のために設置した自動撮影装置に撮影確認が得られている。生息確認および生息密度推定に有効な方法と考えられる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	キンバト	*Chalcophaps indica yamashinai*	EN
第４次 2019：	キンバト	*Chalcophaps indica yamashinai*	EN
第４次 2018：	キンバト	*Chalcophaps indica yamashinai*	EN
第４次 2017：	キンバト	*Chalcophaps indica yamashinai*	EN
第４次 2015：	キンバト	*Chalcophaps indica yamashinai*	EN
第４次：	キンバト	*Chalcophaps indica yamashinai*	EN
第３次：	キンバト	*Chalcophaps indica yamashinai*	EN
第２次：	キンバト	*Chalcophaps indica yamashinai*	EN
第１次：	キンバト	*Chalcophaps indica yamashinai*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 伊澤雅子ほか，2003．イリオモテヤマネコ生息地としての西表島山岳部の評価調査．第 12 期プロ・ナトゥーラ・ファンド助成成果報告書，pp. 11-16．
- 金井裕・丸武志，1992．石垣島と西表島におけるキンバト *Chalcophaps indica* の生息状況．平成 3 年度特殊鳥類調査，pp. 86-102．環境庁，東京．
- 嵩原建二，2004．小浜島における鳥類の記録について．小浜島総合調査報告書，pp. 35-59．沖縄県立博物館．
- 田中健太ほか，2013．沖縄県宮古島大野山林におけるキンバトの繁殖状況．日本鳥学会 2013 年度大会講演要旨集，p. 46．日本鳥学会 2013 年度大会事務局．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Chalcophaps indica yamashinai has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Chalcophaps indica yamashinai* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Predation (by alien species), Predation (by native species), Other
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	金井裕（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Yutaka Kanai

公表年月：2026 年 3 月

ツル目 Gruiformes　クイナ科 Rallidae

ヒメクイナ

***Zapornia pusilla pusilla* (Pallas, 1776)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①②

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生息地においても生息密度が低く希少である。

【判断理由】

現在、本種が繁殖期に確認されているどの生息地でも、生息密度は極めて低い。また、必ずしも毎年確認されているわけではなく、過去の生息状況も明らかでない。そのため、現時点では国内に本種の安定的な繁殖個体群が存在する/したのかどうかを判断するに足る情報がない。ただし、少なくとも過去において国内に本種の安定的な繁殖個体群が存在したとすれば、繁殖に適した環境が既に大きく喪失していることから、その個体数は大きな減少を経験してきた可能性が高い。生息域全域での定量的調査や、遺伝子サンプルからのデモグラフィー推定によって国内の生息個体数やその時間的変遷を調べる必要がある。

②生息地が局限されている。

【判断理由】

国内の繁殖期における既知の生息地は数カ所に過ぎず、それぞれで実際に本種が確認されているエリアも限定されている。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

北海道と本州北中部で夏季に少数が局地的に見られる小型のクイナ。現在確実に繁殖が確認されている都道府県はないが、北海道と青森県では夏季に継続的に観察され、繁殖の可能性がある。個体数は少なく、生息地の数は限られる。本種が生息する湿地は全国で急速に消失しており、生息地の喪失や分断化によって個体数が減少してきた可能性がある。

基礎情報

【形態】

全長約 19 cm。上面は茶褐色で黒色および白色の縦斑が混じり、下面は灰褐色で、脇から下尾筒は白黒の横斑に覆われる。成鳥では顔、脇、胸、腹が灰色で、幼鳥は淡い茶褐色。虹彩は赤色または暗褐色、嘴は青灰色で、脚は肉色または緑褐色。生息環境が類似するシマクイナは小さく、次列風切が白い。

【生活史】

日本では北海道と本州北部に夏季に少数が渡来する。本州中部以南では渡りの時期に少数見られ、南西諸島では稀に越冬する。国内での生活史は未解明な点が多い。国外では、主に冠水した湿地内部で繁殖し、湿性草本群落内に枯れ草等を集めて長径 9-19 cm の皿状の巣を作るとされる。一腹卵数は、4-11 卵で、雌雄が 16-21 日間抱卵する。孵化後 24 時間は巣に滞在し、その後巣立つ。雌雄で子育てをし、35-45 日で独立する。主に水生昆虫を食べる。

【生息環境】

ヨシやスゲ、ガマなどが茂った低地の湿地に生息し、河川、湖沼、水田、耕作放棄地、農業用水路で見られることもある。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，耕作放棄地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，ワンド，農業用水路，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，塩沼地・塩性湿地・河口干潟
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

6 亜種が認められており、種としてはユーラシア大陸、アフリカ東南部、マダガスカル、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーランドに分布する。北方の個体群は冬季に南に渡る。日本に生息する亜種は、ウクライナからバイカル湖、アムール盆地、中国北部、沿海地方、朝鮮半島、日本北部で繁殖し、中国南部、東南アジア、フィリピンで越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道と本州北中部で夏季に少数が局地的に見られる。繁殖記録があるとされるのは秋田県、岩手県、千葉県のみであり、少なくとも秋田県、千葉県では現在は繁殖していないとされる。青森県の仏沼、北海道の勇払平野、石狩平野、釧路湿原では、毎年ではないが夏季に雄の鳴き声が聞かれており、繁殖している可能性がある。このうち 2012～2018 年に勇払平野で行われた調査では、5 か所の湿地で本種の生息が確認された。また、釧路湿原では 2014～2020 年に 1 地点で本種の生息が確認された。

【生息地の現況】

本種が好む湿地は農地や都市開発、河川改修などでかなり消失してきた。北海道石狩平

野では、過去 166 年間で本種の主要生息地である湿地がほぼ 100%消失した。

【個体数の現況】

繁殖期の個体数に関する情報は乏しいが、夏季に生息が確認されている場所は少なく、1 カ所あたり 1～数羽が確認されているのみである。

存続を脅かす要因

本種が生息する湿地は全国で急速に消失しており、生息地の喪失や分断化によって個体数が減少してきた可能性がある。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，土地造成，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，土地造成，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【宮城県】情報不足(DD),【秋田県】情報不足(DD),【千葉県】消息不明・絶滅生物(X),【兵庫県】要調査種,【徳島県】留意(AN),【佐賀県】情報不足種

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Kitazawa, M., Y. Yamaura, M. Senzaki, M. Hanioka, H. Ohashi, M. Oguro, T. Matsui and F. Nakamura, 2022. Quantifying the impacts of 166 years of land cover change on lowland bird communities. Proceedings of the Royal Society B, 289: 20220338.
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．三田．438pp.
- 貞國利夫・黒澤信道・原田修・本藤泰朗・吉野智生，2021．釧路湿原における繁殖期のクイナ類・サギ類の生息状況．釧路市立博物館紀要，39: 29-33．
- Senzaki, M. and Y. Yamaura, 2016. Surrogate species versus landscape metric: does presence of a raptor species explain diversity of multiple taxa more than patch areaμm. Wetlands ecology and management, 24: 427-441.
- Taylor, B., 2010. Rails: a guide to rails, crakes, gallinules and coots of the world. Bloomsbury Publishing, 600pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Zapornia pusilla pusilla has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Zapornia pusilla pusilla* is listed as DD under criteria ①②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Abandoned farmland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Inlet, Agricultural ditch, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland)
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Land development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	先崎理之（北海道大学）
Author:	Masayuki Senzaki

公表年月：2026 年 3 月

カイツブリ目 Podicipediformes　カイツブリ科 Podicipedidae　　日本固有

ダイトウカイツブリ

***Tachybaptus ruficollis kunikyonis* (Kuroda, 1927)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②③

基準 A:　データ不足	基準 B:　—	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。
②生息地が局限されている。
③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。
【判断理由】
北大東島と南大東島の池沼だけに生息する。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

北大東島と南大東島の固有亜種である。両島の大小様々な池沼で、複数の成鳥個体、複数の小さなヒナ、大きく育ったヒナをごく普通に観察することができる。定量的な個体数変動に関する記録は今のところないが、1970 年代から確認されていた全身が白い個体が 2022 年には確認されなくなった。偶発的な白色個体の個体群における定着であったが、白色個体が生息しなくなった要因について検討することは、北大東島と南大東島に隔離分布する固有亜種の個体群動態を追跡する上で重要である。

協力者:　澤田明（早稲田大学人間科学学術院）・金杉尚紀（北海道大学大学院理学院）

基礎情報

【形態】

全長 26 cm、亜種カイツブリと羽色に明確な違いは認められない。本亜種は亜種カイツブリよりも嘴がやや長い傾向があると考えられている。南大東島では、全身が白い個体が複数、1970 年代から現在に至るまで観察され続けていた。経年的に白色個体が維持され続けた。目の色や嘴、脚の色は通常色のカイツブリと同様であるため、白化（アルビノ）ではない。山階鳥類研究所に白色個体の剥製が収蔵されている。

【生活史】

オスとメスの両方が巣作りからヒナの給餌までを行う。巣は浮葉植物の上や抽水植物が繁茂する中に、植物を集めて作られる浮き巣である。本亜種に関する卵や雛、抱卵期間、育雛期間の情報はない。冬季に孵化からの期間が短い小型のヒナと十分に成長したヒナが同時に観察されることがある。このことから秋から冬季にも繁殖する個体がいると推察される。

【生息環境】

湿地および池沼に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部】湿地・湿原，ため池・池沼
国土地域区分：	(4) 河川・湿地地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

北大東島・南大東島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域に大きな変化はない。

【生息地の現況】

池沼域には人為的に移入されたティラピア類が多く、繁殖しているため稚魚も非常に多い。そのため採餌環境は良好と推察される。大東諸島には雛の捕食者となりうるハシブトガラスが生息せず、同様に雛を捕食することがあるオオクチバスも池沼地域に生息していない。そのため繁殖成功を妨げる要因は少ないと思われる。一方で南大東島では、要注意外来生物である水草のホテイアオイ、オオサンショウモを始め、スイレン、ハス、エンサイ、パラグラス、シュロガヤツリが繁茂している区域がある。北大東島ではボタンウキクサ、ホテイアオイ、ヨウサイの繁茂が確認されている。開放水域が著しく減少する可能性もあり、外来水生植物の監視が重要である。また土砂の流入が確認された池沼もある。

【個体数の現況】

定量データがない。しかし南大東島には、少なくとも 1970 年代から全身が白い個体が複数観察されてきた。単なる白化ではなく、目の色や嘴、脚の色は通常色のカイツブリと同様である。この白いカイツブリは少なくとも 2022 年から確認されていない。

存続を脅かす要因

生息場所となる池沼の面積が大きく減じられる現状にはない。特に本亜種が多く生息する大池や月見池など広い開放水面を持つ池の環境には大きな変化は認められない。しかし個体数に関する正確な情報はないことが問題である。島嶼域で亜種に分化したことを考えると、池沼面積は限られており環境収容力は小さく、個体数が増加することはないと思われる。今後は個体数の把握に努める必要がある。

要因の区分：	（過去）	水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，近交弱勢
	（現在）	近交弱勢

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 姉崎悟・嵩原健二・松井晋・高木昌興，2003．大東諸島産鳥類目録．沖縄県立博物館紀要，29: 25-54．
- Llimona, F., J. del Hoyo, D. A. Christie, F. Jutglar, E. F. J. Garcia and G. M. Kirwan, 2020. Little Grebe (*Tachybaptus ruficollis*), version 1. 0. https://doi.org/10.2173/bow.litgre1.01. Birds of the World (J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie, and E. de Juana, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- 沖縄野鳥研究会編，1993．改訂沖縄県の野鳥．沖縄出版，浦添．
- 沖縄野鳥研究会編，2002．沖縄の野鳥．新報出版，那覇．
- 株式会社プレック研究所，2013．平成 24 年度国指定大東諸島鳥獣保護区における保全事業検討調査業務報告書．株式会社プレック研究所，東京．
- 株式会社プレック研究所，2014．平成 24 年度（繰越）国指定大東諸島鳥獣保護区における保全事業検討調査業務報告書．株式会社プレック研究所，東京．
- 山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館，カイツブリ．山階鳥類研究所標本データベース，https://decochan.net/index.php μmp=2&o=ssp&id=61443

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tachybaptus ruficollis kunikyonis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tachybaptus ruficollis kunikyonis* is listed as DD under criteria ②③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Wetland, Reservoir/Pond
Threat types:	Inbreeding depression
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	髙木昌興（北海道大学）
Author:	Masaoki Takagi

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　セイタカシギ科 Recurvirostridae

セイタカシギ

***Himantopus himantopus* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。
②生息地が局限されている。
【判断理由】
国内の繁殖分布は、一時期広がるも、定着した地域は東京湾、伊勢三河湾など局地的で大きく広がってはいない。
また、確認されている繁殖環境は、ハス田、立ち入りが制限された埋立地の調整地など人工環境も多く、繁殖環境が継続的に残されない不安定な状況にある。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

　嘴は細長く、脚も長い。体型、羽衣、嘴、脚の色が特徴的。日本では全国で観察される。千葉県、東京都、愛知県、大阪府など局地的に繁殖記録があり、一部で留鳥化している。繁殖分布は、一時期広がるも、定着は東京湾、伊勢三河湾など限定的で大きく広がってはいない。湖沼、水田、ハス田、干潟、調整池などに生息する。容易に近づけない隔離された場所での巣立ち例が多く、陸上からの天敵を避けることのできる繁殖環境が必要と考えられる。

基礎情報

【形態】

全長 35～40 cm。頭部から腹部まで白色で、背、翼は黒色。個体によって頭部にも黒色があり、黒色の度合いは個体や亜種間で異なる。嘴、脚、目は赤色。嘴は細長く、脚も長い。体型、羽衣、嘴、脚の色が特徴的で、他のシギ・チドリ類と区別できる。

【生活史】

繁殖期は 5～7 月で、植被率の低い乾燥した砂泥地に浅い窪みを作り、小石や植物片などを敷き、3～4 個の卵を産む。雌雄で抱卵し、22～25 日で孵化。孵化した雛は早成性の離巣性であるため、直ぐに巣を離れる。巣外育雛期は 28～32 日で、雛はその後独立する。浅い水辺で昆虫の幼虫や甲殻類、小魚、オタマジャクシなどを捕らえて食べる。

【生息環境】

国内では、湖沼、水田、ハス田、干潟、調整池などに生息する。巣は、水際の草地の中に作り、小石、貝殻片、植物質などを内部に敷く。ハス田、調整池内の小島状の場所に好んで営巣する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，湿地・湿原，河口域，ワンド，農業用水路，小河川，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖，汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】海面，干潟，砂底・礫底，泥底
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域

【分布域】

本種は世界に広く分布し、フランス、イベリア南部、サハラ以南のアフリカ、マダガスカル、東及び中央アジア、中国北部から中央、インド亜大陸、インドシナと台湾に分布している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本では全国的に観察される旅鳥で、1975 年に初めて愛知県で繁殖が確認され（中村・中村 1995）、その後、千葉県、東京都、愛知県、三重県、大阪府、兵庫県、鹿児島県、沖縄県など局地的に繁殖記録があり、一部で留鳥化している。繁殖分布は、一時期広がるも、定着は東京湾、伊勢三河湾など局地的で大きく広がってはいない。

【生息地の現況】

国内では、湖沼、水田、ハス田、干潟、調整池などに生息する。立ち入りが制限された埋立地、池の中央部やフェンスに囲まれた調整池など容易に近づけない隔離された場所での巣立ち例が多く、陸上からの天敵を避けることのできる繁殖環境が必要と考えられる。

繁殖状況を現地調査した全国鳥類繁殖分布調査（2021）では、1990 年代と 2010 年代に調査された同じ調査コースを比較すると、2 地点から 5 地点へと増加している。

【個体数の現況】

現在、IUCN のレッドリストでは、世界的には低危険種（Least Concern）とされている。東アジアのフライウェイでは全体で約 25,000～10 万羽と推定されている。

2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、春期の推定変化率は、3285.5%（30 年前比：有意）、160.9%（20 年前比：有意）、21.31%（10 年前比）、秋期の推定変化率は、1749.0%（30 年前比：有意）、506.6%（20 年前比：有意）、103.2%（10 年前比）（Amano et al. 2010）と、個体数が継続して増加している。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 1.80（春期 0.83、秋期 2.77）、2017 年時点で、平均 2.55（春期 1.36、秋期 3.74）。継続した増加が確認されている。

存続を脅かす要因

主な繁殖地である千葉県、東京都では増加傾向にあるものの、埋立等により生息環境の悪化は常に懸念される。また、全国でシギ・チドリが利用できる干潟や水田は減少傾向にあり、本種の渡り途中や越冬地でのエネルギー補給に影響が出ていると思われる。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，湿地開発，分布・産地局限
	（現在）	海岸開発，湿地開発，圃場整備，分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	セイタカシギ	*Himantopus himantopus himantopus*	VU
第４次 2019：	セイタカシギ	*Himantopus himantopus himantopus*	VU
第４次 2018：	セイタカシギ	*Himantopus himantopus himantopus*	VU
第４次 2017：	セイタカシギ	*Himantopus himantopus himantopus*	VU
第４次 2015：	セイタカシギ	*Himantopus himantopus himantopus*	VU
第４次：	セイタカシギ	*Himantopus himantopus himantopus*	VU
第３次：	セイタカシギ	*Himantopus himantopus himantopus*	VU
第２次：	セイタカシギ	*Himantopus himantopus himantopus*	EN
第１次：	セイタカシギ	*Himantopus himantopus himantopus*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt)，【青森県】重要希少野生生物(B ランク)，【秋田県】情報不足(DD)，【山形県】準絶滅危惧(NT)，【福島県】準絶滅危惧(NT)，【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類，【千葉県】最重要保護生物(A)，【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【新潟県】準絶滅危惧(NT)，【富山県】情報不足(DD)，【福井県】県域準絶滅危惧，【静岡県】準絶滅危惧(NT)，【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(繁殖),準絶滅危惧(NT)(越冬)，【三重県】準絶滅危惧(NT)，【滋賀県】希少種，【京都府】準絶滅危惧種，【兵庫県】B ランク，【島根県】情報不足(DD)，【岡山県】準絶滅危惧，【山口県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【高知県】準絶滅危惧(NT)，【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【宮崎県】準絶滅危惧(NT-r)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: An example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservation, 143: 2238-2247.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020．重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田市．
- 守屋年史・松井淳・三木敏史，2022．生態図鑑－セイタカシギ．バードリサーチニュース，2022 年 6 月: 3．
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本野鳥生態図鑑〈水鳥編〉．保育社，大阪．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- Pierce, R. J. and G. M. Kirwan, 2020. Black-winged Stilt (*Himantopus himantopus*), version 1. 0. In Birds of the World (S. M. Billerman, B. K. Keeney, P. G. Rodewald, and T. S. Schulenberg, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京．
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp.wetlands.org on Mon Feb 202023.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Himantopus himantopus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Himantopus himantopus is listed as DD under criteria ②. The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category. ②Habitats are highly limited.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Farmland, Wetland, Estuary, Inlet, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Sea surface, Intertidal mudflat, Sandy bottom/Gravelly bottom, Muddy bottom
Threat types:	Coastal development, Wetland development, Field preparation, Limited distribution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　チドリ科 Charadriidae

ケリ

***Vanellus cinereus* (Blyth, 1842)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①②

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生息地においても生息密度が低く希少である。

【判断理由】

排他的なわばりを有し、分散して繁殖する傾向があり、生息密度がもともと高くなりにくいことに加え、日本国内の調査である繁殖分布調査、秋期のモニタリング調査で減少傾向にある。

②生息地が局限されている。

【判断理由】

国内では耕地等で全国的に観察されるものの、定住する地域は局地的である。耕地周辺で繁殖するため、今後増加が予測される耕作放棄などの影響を受ける可能性がある。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

黄色く長い足が特徴的な大型のチドリ類。目は赤く、黄色のアイリングがある。頭部が青灰色、背は灰褐色、腹部は白色、胸と腹部の境界に黒色の線がある。飛翔時、背の灰褐色、翼の黒色部と白色部の違いが明瞭で目立つ。嘴は短く先端が黒色で基部は黄色。3～8月に繁殖し、農耕地・河川敷などに営巣する。沖縄を除く本州以南に分布するが、関西、中部地方に多い。西日本に分布を広げ、地域により増減傾向が異なる。繁殖地として農耕地をよく利用するため、耕作方法や耕作時期の変化などが、繁殖成績に影響を与えている可能性がある。

基礎情報

【形態】

全長約 36 cm。黄色く長い足が特徴的なチドリ類。目は赤く、黄色のアイリングがある。繁殖羽は頭部が青灰色、背は灰褐色、腹部は白色、胸と腹部の境界に黒色の線がある。飛翔時、背の灰褐色、翼の黒色部と白色部の違いが明瞭で目立つ。嘴は短く先端が黒色で基部は黄色。足は黄色。非繁殖羽は全体に褐色味がかかる。雌雄同色。幼鳥は、目が暗赤色。背が灰褐色で、羽縁があり、全体的にくすんだ色。

【生活史】

繁殖期は 3～8 月。一夫一妻制。テリトリーをつがいで防衛する。抱卵は雌雄が交替で行う。孵化後ヒナは巣を離れ、両親に先導されてテリトリー内を移動しながら自力で採餌する。両親は養育行為として抱雛、防衛行動を行う。ヒナが飛べるまで成長すると、家族群はテリトリーを解消し移動する。1 繁殖期における繁殖回数は通常 1 回だが、ごく稀に 2 回繁殖を行うこともある。また繁殖失敗したつがいは最大 2 回まで再営巣を試みる。抱卵は約 28 日で、ヒナは孵化後 2 日以内に巣を離れる。7 月下旬以降、繁殖活動が終了したつがいや家族群は 10 羽ほどの小群で生活し換羽を行う。10 月以降、主に積雪地では多くの個体が南下するが、留まり越冬する個体も見られる。南下した個体は 2 月下旬頃に繁殖地へ帰還する。

【生息環境】

主に平野部の農耕地や河川敷に生息し、草丈の低い湿地や草原で採食する。

水田などの湿地環境、またそれらの近くにある畦、畑地、休耕田、河川敷等の背丈の低い草地や裸地に巣を作る。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，田地・畑地，湿地・湿原，河川中流域
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

国外では、中国東北部で繁殖し、中国南部、東南アジア・インド北部地域で越冬する。

国内では、全国的に観察され、九州以北から本州にかけて繁殖するが局地的に定住する。本州北部の個体は夏鳥として渡来する。

地域により増減傾向が異なる。1950 年代には東北地方と関東北部でのみ繁殖が確認されていたが、1970 年代から太平洋側を中心に西日本に繁殖圏を拡大し、中四国・九州北部などには分布を広げている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄を除く、本州以南に分布する。特に、関西、中部地方で多い。

【生息地の現況】

繁殖状況を現地調査した全国鳥類繁殖分布調査（2021）では、1990 年代と 2010 年代に

調査された同じ調査コースを比較すると、57 地点から 48 地点へと減少している。

【個体数の現況】

現在、IUCN のレッドリストでは、世界的には低危険種（Least Concern）とされている。東アジアのフライウェイでは全体で約 25,000～10 万羽と推定され、個体数は安定しているとされている。ただし、日本の個体群は東アジアの個体数評価に含まれておらず不明。

2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、春期の推定変化率は、348.35%（30 年前比：有意）、-12.70%（20 年前比）、-0.35%（10 年前比）、秋期の推定変化率は、-53.78%（30 年前比：有意）、-84.22%（20 年前比：有意）、-63.65%（10 年前比：有意）（Amano et al. 2010）、特に秋期の個体数が減少している。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告（2020）でも、秋期の最大個体数は 2005 年頃から減少している。

存続を脅かす要因

繁殖地として耕作地をよく利用するため、耕作方法や耕作時期の変化などが、繁殖成績に影響を与えている可能性がある。

要因の区分：	（過去）	河川開発，湿地開発，圃場整備，分布・産地局限
	（現在）	河川開発，湿地開発，圃場整備，分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ケリ	*Vanellus cinereus*	DD
第４次 2019：	ケリ	*Vanellus cinereus*	DD
第４次 2018：	ケリ	*Vanellus cinereus*	DD
第４次 2017：	ケリ	*Vanellus cinereus*	DD
第４次 2015：	ケリ	*Vanellus cinereus*	DD
第４次：	ケリ	*Vanellus cinereus*	DD
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】重要希少野生生物(B ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【秋田県】準絶滅危惧(NT),【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【茨城県】準絶滅危惧,【栃木県】準絶滅危惧(C ランク),【群馬県】情報不足(DD),【埼玉県】準絶滅危惧 1 型(NT1)(繁)、絶滅危惧ⅠB 類(EN)(越),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】情報不足(DD),【東京都（西多摩）】情報不足(DD),【神奈川県】希少種(繁殖期)、準絶滅危惧(非繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】準絶滅危惧(NT),【長野県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】準絶滅危惧(NT)(繁殖),絶滅危惧Ⅱ類(VU)(越冬),【大阪府】準絶滅危惧(NT),【山口県】準絶滅危惧(NT),【香川県】準絶滅危惧(NT),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】準絶滅危惧(NT),【佐賀県】絶滅の恐れがある地域個体群,【長崎県】情報不足(DD),【熊本県】要注目種(AN),【大分県】準絶滅危惧(NT),【鹿児島県】情報不足

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: An example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservation, 143: 2238-2247.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2020，重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書．環境省，富士吉田市．
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- 高橋雅雄，2008．生態図鑑 ケリ．Bird Research News 5 (11)，東京都国立市．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京．
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp.wetlands.org on Mon Feb 2020 23.
- Wiersma, P. and G. M. Kirwan, 2020. Gray-headed Lapwing (*Vanellus cinereus*), version 1. 0. In Birds of the World (J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie, and E. de Juana, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Vanellus cinereus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Vanellus cinereus* is listed as DD under criteria ①②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Wetland, Middle river basin
Threat types:	River development, Wetland development, Field preparation, Limited distribution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	守屋年史（バードリサーチ）
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　タマシギ科 Rostratulidae

タマシギ

***Rostratula benghalensis* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生息地においても生息密度が低く希少である。

【判断理由】

本州中部以南の水田や休耕田で確認されているが、いずれの生息地でも個体数は少なく、生息密度が低い。本種を対象とした個体数や分布域の調査結果は限られており、個体数の変化に関する評価を行うことが困難であるため。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

先端が下に曲がっている長い嘴に、横長のずんぐりとした体型をしたシギ類。メスのほうが色彩が鮮明。一妻多夫で繁殖する。中国、東南アジア、インド、アフリカなどに留鳥として生息する。国内では、全国的に記録があるが、主に本州中部以南に留鳥として生息する。ある程度植生のある湿地を好む。湿地の埋立てなどによる開発、乾田化、放棄水田の草地化などにより利用可能な生息地が減少している。水田地帯での減少が報告されている。

基礎情報

【形態】

全長約 25 cm。先端が下に曲がっている長い嘴にずんぐりとした体型をしたシギ類。メスのほうが色彩が鮮明。メスの繁殖羽は、頭部から頸は赤褐色で、目の周囲の白色部はまが玉状に後頭に伸びる。頭頂部には黄土色の線がある。胸部は黒色。腹部から側胸部にかけては白色部があり、背部脇の黄土色の線につながる。背部全面は緑がかった暗褐色。オスの繁殖羽はメスよりも目立たない。頭部と胸部が灰褐色。目の周囲のまが玉模様は黄白色。背部は褐色地に黄色斑がある。腹部は白色。幼羽は雌雄ともにオス成鳥に似る。飛翔時には翼上面に水玉状の模様が見える。

【生活史】

繁殖期は 4 月～10 月。一妻多夫の社会システムで、メスは産卵をすませると、別のオスに求愛する。抱卵・育雛はオスのみが行う。湿地の植生のある部分に草本などを利用して皿状の巣を作る。一腹卵数は 3～6 個で通常 4 個。薄明薄暮性または夜行性で、メスは繁殖期の夕方から夜間に「コーッ、コーッ」と鳴く。水中に嘴を入れ左右に動かしたり、泥中に入れたりして探餌する。貝類、環形動物、甲殻類、昆虫類、種子などを餌として利用する。

【生息環境】

主に湿原、水田、河川、池沼などのある程度植生のある湿地を好むが、ヨシ原などの草丈の高い湿地は好まない。休耕田などでよく観察される。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】草地，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，農業用水路
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

国外では、中国、東南アジア、インド、サハラ以南のアフリカ、マダガスカルなどで留鳥または短距離の渡り鳥として生息する。国内では、東北地方南部以南の本州、四国、九州、種子島、琉球諸島の一部に繁殖分布し、一部の個体群は短距離の渡りを行うと考えられている。北海道や東北地方北部、そのほかの島嶼部ではまれ。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現況でも全国的に確認されるが、水田や休耕田、湿原などの陸水域に限られるため、利用可能な生息環境の消失は国内分布に影響を与えている可能性がある。

【生息地の現況】

開発による自然湿地の消失、圃場整備の普及による湿田の減少、減反政策の見直しによ

る休耕田の減少によって、生息適地の面積は減少していると考えられる。

【個体数の現況】

茨城県霞ヶ浦周辺では 1997 年から 2006～07 年に 83～86%減少、茨城県土浦周辺では 1997 年から 2006～07 年に 71～100%減少（Amano et al. 2010a）。Katayama et al.（2020）では Amano et al.（2010a）と同一の調査地で調査を行い、1997 年と比較して 20%以下に減少していることを推定している。現状、これらの調査地では回復の兆しは見られない。一方で、千葉県北部の調査地では同様の手法で推定したところ、1997 年の霞ケ浦周辺の 63%の個体数が維持されることが推定されているが、過去の個体数データが不足しているため、個体数変化については不明である。

全国的なモニタリング調査の結果を用いた研究では、春期の推定変化率は、326.50%（30 年前比：有意）、75.26%（20 年前比）、−27.75%（10 年前比）、秋期の推定変化率は、174.00%（30 年前比）、86.26%（20 年前比）、−30.14%（10 年前比）（Amano et al. 2010b）。全国鳥類繁殖分布調査による繁殖確認地点の数は、1970 年代から 90 年代にかけて大きく減少したものの、その後は大きな変化がない（植田・植村 2021）。

存続を脅かす要因

個体数減少は、水田における効率的な排水システムの導入、繁殖・越冬地における休耕田の減少、などが原因となっている可能性が指摘されている。湿地の埋立などによる開発、乾田化、放棄水田の草地化などにより利用可能な生息地が減少している。休耕田は本種の生息に適した環境であるが、遷移が進んでヨシやヤナギが優先すると本種の生息には不適な環境となる（Katayama et al. 2020）。千葉県北部の調査地では哺乳類による捕食が確認されており（小田谷 2020）、ネコやアライグマなどの外来哺乳類による巣や成鳥の捕食も個体群の存続に影響を与えている可能性が示唆される。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，圃場整備，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	湿地開発，圃場整備，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	タマシギ	*Rostratula benghalensis benghalensis*	VU
第４次 2019：	タマシギ	*Rostratula benghalensis benghalensis*	VU
第４次 2018：	タマシギ	*Rostratula benghalensis benghalensis*	VU
第４次 2017：	タマシギ	*Rostratula benghalensis benghalensis*	VU

第４次 2015：	タマシギ	*Rostratula benghalensis benghalensis*	VU
第４次：	タマシギ	*Rostratula benghalensis benghalensis*	VU
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【山形県】情報不足(DD)，【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類，【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク)，【群馬県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【埼玉県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁・越)，【千葉県】最重要保護生物(A)，【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(繁殖期)、希少種(非繁殖期)，【新潟県】準絶滅危惧(NT)，【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類，【山梨県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【長野県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【岐阜県】準絶滅危惧，【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁殖),絶滅危惧ⅠB 類(EN)(越冬)，【三重県】情報不足(DD)，【滋賀県】絶滅危機増大種，【京都府】絶滅危惧種，【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【兵庫県】B ランク，【奈良県】希少種，【和歌山県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【鳥取県】情報不足(DD)，【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【岡山県】準絶滅危惧，【広島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【山口県】準絶滅危惧(NT)，【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【香川県】準絶滅危惧(NT)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【佐賀県】情報不足種，【長崎県】準絶滅危惧(NT)，【熊本県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【京都府】

参考文献

- Amano, T., M. Li and H. Yoshia, 2010a. Silent night in Japanese rice fieldsμm A population decline in the Greater Painted Snipe. Ornithological Science, 9: 49-53.
- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010b. A framework for monitoring the status of populations: an example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. Biological Conservatioin, 143 (9): 2238-2247.
- del Hoyo, J., A. Elliott and J. Sargatal (eds.), 1996. Handbook of the Birds of the World. Vol. 3. Hoatzin to Auks. Lynx Edicions, Barcelona. 821pp.
- Hayman, P., J. Marchant and T. Prater, 1986. Shorebirds. Croom Helm, London.

- 環境省自然環境局生物多様性センター，2004．第 6 回自然環境保全基礎調査 種の多様性調査 鳥類繁殖分布調査報告書，環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田．343pp.
- Katayama, N., Y. Odaya, T. Amano and H. Yoshida, 2020. Spatial and temporal associations between fallow fields and Greater Painted Snipe density in Japanese rice paddy landscapes. Agriculture, Ecosystem and Environment, 295: 106892.
- 中村登流・中村雅彦，1995．原色日本野鳥生態図鑑〈水鳥編〉．保育社，大阪．304pp.
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．日本鳥学会，三田．438pp.
- 小田谷嘉弥，2020．バードリサーチ生態図鑑 タマシギ．Bird Research News，17(11): 3-4.
- Sutherland, W. J., J. A. Alves, T. Amano, C. H. Chang, N. C. Davidson, C. M. Finlayson, J. A. Gill, R. E. Gill, P. M. Gonzales, T. G. Gunnarsson, D. Kleijn, C. J. Spray, T. Székely and D. B. A. Thompson, 2012. A horizon scanning assessment of current and potential future threats to migratory shorebirds. Ibis, 154: 663-679. doi: 10.1111/j.1474-919X.2012.01261.x
- 植田睦之・植村慎吾，2021．全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．鳥類繁殖分布調査会，府中．176pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Rostratula benghalensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rostratula benghalensis* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Agricultural ditch
Threat types:	Wetland development, Field preparation, Predation (by alien species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Kyoto】.



執筆者:	小田谷嘉弥（執筆時所属：我孫子市鳥の博物館、現所属：千葉県立中央博物館）
Author:	Yoshiya Odaya

公表年月：2026 年 3 月

チドリ目 Charadriiformes　ウミスズメ科 Alcidae

マダラウミスズメ

***Brachyramphus perdix* (Pallas, 1811)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①②④

基準 A:　—	基準 B:　—	基準 C:　—	基準 D:　データ不足	基準 E:　—

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生息地においても生息密度が低く希少である。

【判断理由】

国内での生息確認地域は限定的であり、確認頻度もごくわずかである。

②生息地が局限されている。

【判断理由】

生息の確認は網走沖や知床半島沖、苫小牧沖などの沿岸海域に限定される。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

ふだん洋上に分布するが、海岸から離れた内陸部の針葉樹の樹上などに単独営巣する特異な生態を持つ。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

かつて、北海道東部の網走湾から知床半島両岸沖で繁殖羽の成鳥や巣立ち後の幼鳥が確認された。また 1910 年代の 8 月初旬に千歳川上流の河畔で採集された幼鳥の標本の存在が判明している。近隣のサハリンや南千島の国後島や択捉島で繁殖が確認されているので、1900 年代初頭には北海道東部から胆振・石狩地方の内陸で営巣していたと推定される。2000 年代にも網走沖や知床半島沖、苫小牧沖などの沿岸海域で繁殖期に求愛行動をするつがいや夏羽の個体が観察されているが、幼鳥は観察されていない。1961 年 6 月 15 日に藻琴山山麓の針広混交林で抱卵中の雌 1 羽が捕獲されたという報告は再検討されている。生息地や生息個体数の現況に関する情報はほとんどない。

基礎情報

【形態】

体重 258～357 g、翼長 13.6～14.7 cm（オス）、13.0～14.5 cm（メス）でオスがメスよりもやや大きい。夏羽では額から頭頂、後頸と上面は褐色で、黒褐色の斑が入る。喉と腹部は白色で、各羽に黒褐色の羽縁が入る。冬羽では上面は暗褐色で、下面は白色となる。ユーラシア東部の海岸と千島列島、アリューシャン列島、北アメリカ北西部で繁殖する。冬期には、繁殖地よりも南へ分布し、北日本沿岸に渡来する。日本での繁殖は、1961 年に北海道小清水町藻琴山山麓で 1 例知られている。1997 年および 98 年の 7、8 月に、知床半島周辺海域で 2 羽の成鳥と幼鳥が観察されているが、繁殖につながる証拠は見つかっていない。海岸から離れた内陸部の針葉樹の樹上などに単独営巣する特異な生態を持つ。

【生活史】

日本における本種の生態は不明である。

【生息環境】

日本における本種の生態は不明である。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部 海岸部】森林 【海域（沿岸）_表層】海面 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（5）沿岸域，（6）海洋域

【分布域】

かつて、北海道東部の網走湾から知床半島両岸沖で繁殖羽の成鳥や巣立ち後の幼鳥が確認された。また 1910 年代の 8 月初旬に千歳川上流の河畔で採集された幼鳥の標本の存在が判明している。近隣のサハリンや南千島の国後島や択捉島で繁殖が確認されているので、1900 年代初頭には北海道東部から胆振・石狩地方の内陸で営巣していたと推定される。

現在の生息状況

【分布域の現況】

2000 年代にも網走沖や知床半島沖、苫小牧沖などの沿岸海域で繁殖期に求愛行動をするつがいや夏羽の個体が観察されているが、幼鳥は観察されていない。1961 年 6 月 15 日に藻琴山山麓の針広混交林で抱卵中の雌 1 羽が捕獲されたという報告は再検討されている。1994 年 6 月末から 7 月初めにかけて（繁殖期にあたる）、知床半島のオホーツク海側で日本ウミスズメ類研究会と Pacific Seabird Group の研究者が共同で陸上での調査を行なったが、繁殖は確認されなかった。

【生息地の現況】

網走沖や知床半島沖、苫小牧沖などの沿岸海域で繁殖期に求愛行動をするつがいや夏羽

の個体が観察されている。

【個体数の現況】

国内における確認頻度はごくわずかである。

存続を脅かす要因

不明である。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	マダラウミスズメ	*Brachyramphus perdix*	DD
第４次 2019：	マダラウミスズメ	*Brachyramphus perdix*	DD
第４次 2018：	マダラウミスズメ	*Brachyramphus perdix*	DD
第４次 2017：	マダラウミスズメ	*Brachyramphus perdix*	DD
第４次 2015：	マダラウミスズメ	*Brachyramphus marmoratus perdix*	DD
第４次：	マダラウミスズメ	*Brachyramphus marmoratus perdix*	DD
第３次：	マダラウミスズメ	*Brachyramphus marmoratus perdix*	DD
第２次：	マダラウミスズメ	*Brachyramphus marmoratus perdix*	DD
第１次：	マダラウミスズメ	*Brachyramphus marmoratus perdix*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd),【山形県】評価対象外,【福島県】情報不足(DD),【千葉県】重要保護生物(B),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】情報不足(DD),【石川県】情報不足(DD),【福井県】要注目,【兵庫県】要調査種,【島根県】情報不足(DD),【熊本県】要注目種(AN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 福田佳弘，2008．マダラウミスズメ．Bird Research News，5(6) : 2-3．http://www.bird-research.jp/1_newsletter/dl/BRNewsVol5No6.pdf
- 川崎康弘，2018．網走沖の海鳥：ウトウとマダラウミスズメについて．北の海鳥，6: 16-19．北海道海鳥保全研究会．https://a9a854f0-bb5f-48d9-a632-b0a427d286b6.filesusr.com/ugd/76f137_f8269ad9170341ffa0206fb9b831cf2d.pdf
- 南波興之，2018．勇払クルーズにおけるマダラウミスズメの観察記録．北の海鳥，7: 6-12．北海道海鳥保全研究会．https://a9a854f0-bb5f-48d9-a632-b0a427d286b6.filesusr.com/ugd/76f137_e4c001463aa04481be603398f698e7f2.pdf
- 日本ウミスズメ類研究会・Pacific Seabird Group，1996．マダラウミスズメの繁殖確認調査について．http://www2.gol.com/users/kojiono/Madara_Project2.html
- Osa, Y. and Y. Watanuki, 2002. Status of seabirds breeding in Hokkaido. J Yamashina Inst. Ornithol., 33: 107-141.
- S. Kim Nelson, 2002. The status and conservation of the long-billed murrelet in Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol., 33: 88-106.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Brachyramphus perdix has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Brachyramphus perdix* is listed as DD under criteria ①②④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

②Habitats are highly limited.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	風間健太郎（早稲田大学）
Author:	Kentaro Kazama

公表年月：2026 年 3 月

ペリカン目 Pelecaniformes　サギ科 Ardeidae

ヨシゴイ

***Ixobrychus sinensis sinensis* (Gmelin, 1789)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　④

基準 A:　—	基準 B:　—	基準 C:　—	基準 D:　データ不足	基準 E:　—

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

繁殖環境は、ヒメガマ、ガマ、フトイ等の限られた種の抽水植物群落である。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

おもに本州、四国、九州の湖沼や河川の抽水植物群落に夏鳥として渡来し繁殖する小形のサギ類。小形の魚のほか、アマガエルやアメリカザリガニなども食べる。東日本では好適な環境においては引き続き生息が観察されるのに対し、西日本の少なくとも一部では近年繁殖の急減が観察されている。ただし個体数の状況についての具体的なデータはない。減少の原因は治水や開発目的のために、生息・営巣環境となる抽水植物群落が失われた、外来魚のオオクチバスによって小型の魚が減少し、餌生物が不足した、越冬地での狩猟などが考えられるが実際の原因は不明である。

協力者:　植田潤（湖北野鳥センター）・鈴木静治（我孫子野鳥を守る会）・廣田純平（日本野鳥の会埼玉）・和田岳（大阪市立自然史博物館）

基礎情報

【形態】

全長約 37 cm。全身淡褐色を基調とする小型のサギ。近縁のオオヨシゴイ（*Ixobrychus eurhythmus*）とリュウキュウヨシゴイ（*Ixobrychus cinnamomeus*）に似るが、本種はチョコレート色味や赤褐色味に乏しい点がことなる。

【生活史】

繁殖期は 6～7 月で、一腹卵数は 4～8 卵である（内田・松田, 1990；佐原, 2013）。繁殖は年 1 回と考えられる。

【生息環境】

営巣環境は湖沼や河川の抽水植物群落である。下に水のある場所で、ヒメガマ、ガマ、フトイ等の途中にその葉をたくしこんで椀状の巣を作る。巣はしばしば複数が数メートルの距離に作られ、ルースコロニーを形成する（内田・松田, 1990；佐原, 2013）。

生息環境区分：	【陸域_平地部】湿地・湿原，河川下流域，ワンド，農業用水路，小河川，ため池・池沼
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域

【分布域】

インドから東南アジア、中国にかけて分布。日本では北海道から九州まで夏鳥として繁殖するとされてきた。琉球列島では従来越冬するとされてきたが（日本鳥学会, 2012）、南大東島では繁殖が確認されており（松井ほか,2006）、琉球列島でも繁殖している可能性が示唆されている（平岡, 2015）。千葉県で標識されたヒナが 1 月にフィリピンのルソン島で回収されたことがある（山階鳥類研究所, 1996）。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本州、四国、九州に繁殖分布するほか、南大東島でも繁殖（松井ほか,2006）。「全国鳥類繁殖分布調査報告」によると、1974～78 年、1997～2002 年、2016～2021 年の調査とも、北海道本土部での繁殖は確認されていない（1997～2002 年には礼文島で繁殖が確認されている）。「全国鳥類繁殖分布調査報告」では、2016～2021 年の調査で、西日本での繁殖の急減が認められており、地元研究者への聞き取りによっても、滋賀県（琵琶湖）、京都府での繁殖個体群は絶滅状態と考えられるという。

【生息地の現況】

一般論として、抽水植物群落は治水や開発などで徐々に減少していると推察できるが、ヨシゴイの生息環境に着目した調査データは存在しないと思われる。

【個体数の現況】

個体数の推定は困難であるが、関東地方では、好適な環境がある場所では観察できる。西日本では繁殖地が減少しており、個体数が急減している可能性がある。

存続を脅かす要因

治水や開発目的のために、抽水植物群落が失われ、生息・営巣環境が失われる。外来魚のオオクチバスによって小型の魚が減少し、餌生物が不足する（佐原, 2013）。越冬地での狩猟。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，捕獲・狩猟/園芸採取，その他（外来種（オオクチバスほか）により、餌生物（小型の魚類等）が減少した。）
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

全国鳥類繁殖分布調査（2016-2021）によると、1997 年～2002 年と、2016 年～2021 年の繁殖分布を比較すると、西日本における繁殖が大幅に減少している。現地の鳥類研究者によると、滋賀県では現在絶滅状態で、県内で年間 2～3 例の観察があるがそのすべてが渡りの時期の通過個体と考えられるものだという。生息環境は従来から減少しているものの、絶滅状態になるほどとは思われず、原因は不明だという。また京都府内も同様であるとのこと。西日本に比較すると東日本についてはそのような大幅な減少は見られてはいない。全国鳥類繁殖分布調査（2016-2021）によっても、たとえば関東地方で記録された繁殖状況は、1997 年～2002 年と、2016 年～2021 年とであまり大きな変化はない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヨシゴイ	*Ixobrychus sinensis sinensis*	NT
第４次 2019：	ヨシゴイ	*Ixobrychus sinensis sinensis*	NT
第４次 2018：	ヨシゴイ	*Ixobrychus sinensis sinensis*	NT
第４次 2017：	ヨシゴイ	*Ixobrychus sinensis sinensis*	NT
第４次 2015：	ヨシゴイ	*Ixobrychus sinensis sinensis*	NT
第４次：	ヨシゴイ	*Ixobrychus sinensis sinensis*	NT
第３次：	ヨシゴイ	*Ixobrychus sinensis sinensis*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】重要希少野生生物(B ランク)，【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類，【宮城県】準絶滅危惧(NT)，【秋田県】準絶滅危惧(NT)，【山形県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類，【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク)，【群馬県】絶滅危惧Ⅰ

B 類(EN),【埼玉県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(繁),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部)】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（区部)】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（北多摩)】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩)】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（西多摩)】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【山梨県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長野県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【岐阜県】絶滅危惧Ⅱ類,【静岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【愛知県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(繁殖),絶滅危惧ⅠA 類(CR)(通過),【三重県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【滋賀県】絶滅危惧種,【京都府】絶滅寸前種,【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【兵庫県】A ランク,【奈良県】絶滅危惧種,【和歌山県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【鳥取県】準絶滅危惧(NT),【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【広島県】情報不足(DD),【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【香川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【佐賀県】絶滅危惧Ⅰ類種,【長崎県】情報不足(DD),【熊本県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【大分県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-r),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類,【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【滋賀県・福岡県】

参考文献

- 平岡考，2015．現状の把握が難しいヨシゴイ、ほぼ姿を消してしまったオオヨシゴイ．Birder，29(7): 66-67．
- 松井晋・高木昌興・上田恵介，2006．南大東島におけるヨシゴイの初営巣記録．日本鳥学会誌，55(1): 29-31．
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録．改訂第 7 版．日本鳥学会，三田．
- 佐原雄二，2013．生態図鑑 ヨシゴイ．Bird Research News，10(1): 4-5．
- 内田博・松田喬，1990．ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* の集団繁殖．日本鳥学会誌，39: 53-61．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京．
- 山階鳥類研究所，1996．平成 7 年度鳥類標識調査報告書平成 7 年度鳥類標識調査報告書．山階鳥類研究所，我孫子．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ixobrychus sinensis sinensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ixobrychus sinensis sinensis* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Wetland, Lower river basin, Inlet, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Shiga・Fukuoka】.



執筆者:	平岡考（公益財団法人山階鳥類研究所）
Author:	Takashi Hiraoka

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae

ハチクマ

***Pernis ptilorhynchus orientalis* Taczanowski, 1891**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。
①どの生息地においても生息密度が低く希少である。
【判断理由】
生息地となっている里山地域では、各地において本亜種の記録があるものの、いずれの地域においても生息密度が低い。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

種ハチクマ（*Pernis ptilorhynchus*）は、全長がオス 57 cm、メス 61 cm の中型猛禽で、アジアおよびヨーロッパに分布する。日本に生息する亜種（*Pernis ptilorhynchus orientalis*）は、夏鳥として日本に渡来し、主に本州中部から北海道に多く繁殖する。ハチを餌とすることに適応しており、形態的な特化が見られる。

基礎情報

【形態】

全長がオス 57 cm、メス 61 cm の中型猛禽類。ハチを餌とすることに適応し、形態的な特化が見られる。

【生活史】

日本には夏鳥として渡来し、主に本州中部から北海道に多く繁殖する。本州中部では標高 100 m から 1,500 m の低山に生息し、アカマツなどに営巣する。ハチを餌とすることに適応し、形態的な特化が見られる。ハチの他、カエル類、鳥類も餌としているが、巣にいる雛に運ばれた餌の 6 割は、ハチの幼虫であった。渡来直後は、養蜂場に依存している。雌雄協力して巣を造り、雌雄交代で抱卵する。抱卵はほぼ 1 日半交代で、巣から 40～50 km 離れた場所まで採食に出かける。本州中部・北部で繁殖した個体は、9 月から渡りを開始し、九州の五島列島などから東シナ海を越えて中国に入り、その後は南下し、インドシナ半島、マレー半島を経由し、スマトラなどで越冬する。春の渡りは、ほぼ逆のコースをたどるが、中国を北上した後、朝鮮半島を経由し、九州に戻ることが衛星追跡で明らかにされた。

【生息環境】

主に里山環境の樹林に生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

主に北海道から本州中部で繁殖する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年の分布域の変化は特に確認されていない。

【生息地の現況】

詳細については不明である。

【個体数の現況】

生息地となっている里山地域では、各地において本亜種の記録があるものの、いずれの地域においても生息密度が低い。

存続を脅かす要因

森林伐採、土地造成、交通インフラ建設、農薬汚染が挙げられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，農薬汚染/化学物質汚染

	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，農薬汚染/化学物質汚染

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ハチクマ	*Pernis ptilorhynchus orientalis*	NT
第４次 2019：	ハチクマ	*Pernis ptilorhynchus orientalis*	NT
第４次 2018：	ハチクマ	*Pernis ptilorhynchus orientalis*	NT
第４次 2017：	ハチクマ	*Pernis ptilorhynchus orientalis*	NT
第４次 2015：	ハチクマ	*Pernis apivorus orientalis*	NT
第４次：	ハチクマ	*Pernis apivorus orientalis*	NT
第３次：	ハチクマ	*Pernis apivorus orientalis*	NT
第２次：	ハチクマ	*Pernis apivorus orientalis*	NT
第１次：	ハチクマ	*Pernis apivorus japonicus*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt),【青森県】希少野生生物(C ランク),【岩手県】準絶滅危惧,【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【秋田県】準絶滅危惧(NT),【山形県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク),【群馬県】準絶滅危惧(NT),【埼玉県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁),【千葉県】重要保護生物(B),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(繁殖期),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】準絶滅危惧(NT),【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類,【山梨県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長野県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【岐阜県】準絶滅危惧,【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(繁殖),【三重県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【滋賀県】絶滅危機増大種,【京都府】絶滅危惧種,【大阪府】絶滅危惧Ⅰ類(CR＋EN),【兵庫県】B ランク,【奈良県】絶滅危惧種,【和歌山県】準絶滅危惧(NT),【鳥取県】準絶滅危惧(NT),【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類,【広島県】準絶滅危惧(NT),【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【徳島県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】準絶滅危惧(NT),【佐賀県】絶滅危惧Ⅱ類種,【長崎県】準絶滅危惧(NT),【熊本県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【大分県】準絶滅危惧(NT),【宮崎県】情報不足(DD-2),【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 樋口広芳（編），2013．日本のタカ学－生態と保全．354pp. 東京大学出版会，東京．
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男，1995．図鑑日本のワシタカ類．631pp. 文一総合出版，東京．
- Sievwright, H. and H. Higuchi, 2011. Morphometric analysis of the unusual feeding morphology of Oriental Honey-Buzzards. Ornithological Science, 10: 131-144.
- 辻淳夫，1988．伊良湖岬の鷹の渡り．野鳥，53(10): 16-19．
- Yamaguchi, N., K. Tokita, A. Uematsu, K. Kuno, M. Saeki, E. Hiraoka, K. Uchida, M. Hotta, F. Nakayama, M. Takahashi, H. Nakamura and H. Higuchi, 2008. The large-scale detoured migration route and the shifting pattern of migration in Oriental honey-buzzards breeding in Japan. Journal of Zoology, 276: 54-62.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pernis ptilorhynchus orientalis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pernis ptilorhynchus orientalis* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Pesticide/Toxic chemical pollution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	中村浩志（一般財団法人中村浩志国際鳥類研究所）
Author:	Hiroshi Nakamura

公表年月：2026 年 3 月

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae　　日本固有

リュウキュウツミ

***Accipiter gularis iwasakii* Mishima, 1962**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②③

基準 A:　—	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　—

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生息地が局限されている。

【判断理由】

本亜種は沖縄島と八重山諸島の 4 島のみに生息する固有亜種である。生息地は、沖縄島と八重山諸島がそれぞれ有する約 450 km²程度の森林およびその周辺の緑地等に限られる。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本亜種は沖縄諸島のうち沖縄島と八重山諸島の 4 島のみに生息する固有亜種である。なお、沖縄島と八重山諸島の間は約 400 km の海洋によって分けられていることから、留鳥である本亜種が、沖縄島と八重山諸島の間で経常的に移動していると考えるのは難しい。繁殖個体群として分断されている場合、面積の小さい八重山諸島の地域個体群は絶滅の恐れがある。判定には移動の状況や遺伝的変異のより詳細な調査・研究が望まれる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

ツミ（*Accipiter gularis*）の亜種。沖縄島と八重山諸島に留鳥として分布する小型の猛禽類である。林内で営巣し、小鳥類を採餌する。本亜種の生息数については、よくわかっていない。

基礎情報

【形態】

全嘴峰長 17.8 mm、翼長 160 mm、ふ蹠長 52 mm、尾長 127.5 mm（山階鳥類研究所標本：幼鳥オス）。亜種ツミ（*Accipiter gularis gularis*）と比較すると翼長が短く、風切羽の長さに相違点が見られる。

【生活史】

マツなどの高い枝に、枯枝で皿型の巣を作り、2〜5 卵を産む。

【生息環境】

本亜種の生態はほとんどわかっていないが、亜種ツミとほとんど変わらないと考えられる。平地から山地の林にすむ。マツなどの高い枝に、枯枝で皿型の巣を作り、2〜5 卵を産む。主に小鳥を捕食するが、昆虫や小型哺乳類も食べる。2000 年代以降、市街地での繁殖記録が増えている。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，田地・畑地 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，住宅地，市街緑地
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（3）都市地域，（7）島嶼地域

【分布域】

種ツミは東北アジアから南中国、フィリピンにかけて分布し、日本では北海道、本州、四国、九州、奄美諸島、沖縄諸島で留鳥として 1 年を通して見られるが、一部は越冬のため移動すると考えられている。本亜種は琉球諸島にのみ分布する固有の亜種で、渡りはしない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本鳥類目録 8 版では、八重山諸島の石垣島、小浜島、西表島、与那国島と沖縄島に留鳥として分布する。日本産鳥類目録第 6 版では、与論島にも繁殖となっているが、日本産鳥類目録第 7 版ではこの記載が削除された。

【生息地の現況】

生息地となる森林は、農地開発やレジャー開発により減少傾向にある。

【個体数の現況】

生息個体数についての資料はなく、個体数変動については不明である。

存続を脅かす要因

農地開発やレジャー開発による森林伐採は、生息地を減少させる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採
	（現在）	森林伐採

特記事項

奄美諸島においてもツミが留鳥として生息するが、これは亜種ツミとされる。市街地での繁殖事例では、食物や行動圏の研究事例があるが、森林内に生息する個体の行動はほとんどわかっていないため、さらなる調査、資料収集が望まれる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	リュウキュウツミ	*Accipiter gularis iwasakii*	EN
第４次 2019:	リュウキュウツミ	*Accipiter gularis iwasakii*	EN
第４次 2018:	リュウキュウツミ	*Accipiter gularis iwasakii*	EN
第４次 2017:	リュウキュウツミ	*Accipiter gularis iwasakii*	EN
第４次 2015:	リュウキュウツミ	*Accipiter gularis iwasakii*	EN
第４次:	リュウキュウツミ	*Accipiter gularis iwasakii*	EN
第３次:	リュウキュウツミ	*Accipiter gularis iwasakii*	EN
第２次:	リュウキュウツミ	*Accipiter gularis iwasakii*	VU
第１次:	リュウキュウツミ	*Accipiter gularis iwasakii*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】情報不足，【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 飯沼慶一，2024．リュウキュウツミ（*Accipiter gularis iwasakii*）の繁殖期の行動―宜野湾市森川公園の調査記録から―．学習院大学 教育学・教育実践論叢，No.11: 105-113．
- 三島冬嗣，1962．南部琉球諸島のツミ（新亜種）とクロアジサシの亜種名について．鳥，17: 220-222．
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男，1995．図鑑日本のワシタカ類．東京．631pp. 文一総合出版，東京．
- 長井和哉・嵩原建二・時田賢一・内田聖，2023．小型 GPS デバイスを用いた育雛期におけるリュウキュウツミ（*Accipiter gularis iwasakii*）の行動圏解析の事例．世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアム紀要，No.46: 1-10．

- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．日本鳥学会，三田．438pp.
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- 日本鳥類目録編集委員会，2000．日本鳥類目録改訂第 6 版．日本鳥学会，帯広．345pp.
- 嵩原健二，2001．沖縄県中南部の市街地で繁殖したツミ *Accipiter gularis* とリュウキュウサンショウクイ *Pericrocotus divaricatus tegimae* の 2 種について．沖縄県立博物館紀要，No.27: 45-50.
- 嵩原健二，2002．沖縄島で留鳥として生息する希少な 3 亜種の繁殖記録について．沖縄県立博物館紀要，No.28: 1-11.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Accipiter gularis iwasakii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Accipiter gularis iwasakii* is listed as DD under criteria ②③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Residential area, Urban green area
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	金井裕（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Yutaka Kanai

フクロウ目 Strigiformes　フクロウ科 Strigidae

キンメフクロウ

***Aegolius funereus sibiricus* (Buturlin, 1910)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①②

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生息地においても生息密度が低く希少である。

【判断理由】

国内で繁殖した確実な記録がある。営巣木が伐採されて雛が保護されるなどの事例が少数あるほか、繁殖期に鳴き声が確認される、あるいは鳥類標識調査中に捕獲されるなどの断片的な記録がある。生息数は多くないと思われるが、生息数、生息密度、個体群の動向などを評価ができるだけの情報がない。

②生息地が局限されている。

【判断理由】

繁殖が確認されているのは、北海道中央部、大雪山系などの針葉樹林である。生息数は多くないと思われるが、生息数、生息密度、個体群の動向などを評価ができるだけの情報がない。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

種キンメフクロウ（*Aegolius funereus*）は、全北区の北方針葉樹林（タイガ）と中緯度の山岳針葉樹林に分布し、国内には本亜種が生息する。これまで北海道中央部の針葉樹林で 4 例の繁殖が確認されているが、2 例は営巣木の伐採によって発見されたものである。

協力者:　仲村昇（山階鳥類研究所）

基礎情報

【形態】

小型のフクロウで、全長がオス 21～25 cm、メス 25～28 cm、 体重がオス 90～115 g、メス 120～195 g と、メスはオスよりわずかに大きい。雌雄の羽色は類似している。アオバズク（*Ninox japonica*）・オオコノハズク（*Otus semitorques*）・コノハズク（*Otus sunia*）など他の小型のフクロウ類より顔盤が大きく、上面に白斑があるなど羽色も異なっており容易に識別される。また“ポポポ・・・”と特徴的な声で鳴き、他のフクロウ類と判別できる。

【生活史】

本亜種の繁殖はこれまで数例が知られるだけで、生活史の詳細は不明である。基亜種（*Aegolius funereus funereus*）の生活史は以下のとおりである。繁殖期は 3 月から 6 月で、クマゲラ（*Dryocopus martius*）が穿った巣穴や樹洞で営巣する（巣箱もよく利用する）。一腹産卵数は普通 5～6 卵であるが、餌となるネズミ類の個体数によって変動する。抱卵期間は約 29 日、育雛期間は 28～36 日である。メスのみ抱卵・抱雛を行う。幼鳥は巣立ち後 3～6 週で独立する。留鳥であるが、餌が不足する年は移動する。トガリネズミ類（*Sorex*）・ヤチネズミ類（*Myodes*）・ハタネズミ類（*Microtus*）・小鳥・甲虫を食物とする。本亜種の 1990 年の営巣例ではクマゲラの古巣を利用して繁殖し、雛は 6 月中旬に巣立った。また巣立ち後、巣の底から採集されたペレットには多数のトガリネズミ類とネズミ類（*Myodes*・*Apodemus*）の骨が含まれていた。

【生息環境】

種キンメフクロウはユーラシア大陸と北米大陸の高緯度と中緯度の針葉樹林・針広混交林に生息する。国内では、本亜種の繁殖が確認された北海道中央部の山岳地帯（大雪山系）のうち、調査が行われた 2 ヶ所の繁殖地はエゾマツ（*Picea jezoensis*）・トドマツ（*Abies sachalinensis*）が優占する針葉樹林で林床にササ類が乏しいという共通性がみられる。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域

【分布域】

種キンメフクロウはユーラシア大陸と北米大陸の北方針葉樹林（タイガ）およびヨーロッパ、コーカサス、中央アジア、北米の温帯の山岳針葉樹林（亜高山帯針葉樹林）に分布する。本亜種（*Aegolius funereus sibiricus*）は、東シベリアからカムチャツカ半島、バイカル湖付近・ウスリー地方・中国東北部に至るユーラシア大陸東部と島嶼のサハリン・北海道・国後島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道中央部、大雪山系の針葉樹林で 1986 年に初めて繁殖が確認され、その後 1990 年に 2 例、1993 年に 1 例の営巣が確認された。その他、北海道・本州での目撃記録などがあ

る。

【生息地の現況】

繁殖が確認されている地域は大雪山国立公園などであり、森林として維持されているが、長期にわたり商業伐採が行われてきた。その結果、成熟した森林が減少するとともに疎林化が進み、林床にササ類が繁茂するなど林相が変化している。

【個体数の現況】

これまで北海道中央部、大雪山系などの針葉樹林で営巣が確認されているが、カメラマンなどが殺到する恐れがあることから、記録はほとんど公開されていない。鳥類標識調査では、1972～2021 年の間に 16 羽の放鳥記録がある。国内での個体数は著しく少ない。1993 年に繁殖した上士幌町の営巣地付近では 1994 年と 1995 年の繁殖期に鳴き声が聞かれたが、営巣は確認されなかった。その後ここでは 2005 年、2011 年、2012 年に鳴き声が聞かれている。本州では、新潟県内で採集された古い剥製があり、鳥類標識調査員が本種であることを確認しているが、剥製所有者が逝去されて以降、剥製の所在が不明になっている。

存続を脅かす要因

繁殖が確認された 4 例のうち 2 例は営巣木の伐採により発見されたものである。伐採が本種の生存の直接的脅威になっている。また長年の森林伐採により、成熟した森林が減少し、疎林化が進んで林床にササ類が繁茂するようになった。このような林相の変化は、針葉樹林の林床で活動するトガリネズミ類やヤチネズミ類を主食としている本種の狩りの妨げとなり、生息に不利に作用していると考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採
	（現在）	森林伐採

特記事項

営巣木の伐採を防ぐためには、伐採前に調査を行うことが有効である。民間ですでに実施しているが、巣箱を設置することも有効であろう。また、林相の著しい改変を防ぐため伐採量を制限することも有効である。サハリンに生息するものは、*Aegolius funereus sibiricus* あるいは *Aegolius funereus pallens* との見解があり、本亜種についてさらなる検討を要する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	キンメフクロウ	*Aegolius funereus magnus*	CR
第４次 2019：	キンメフクロウ	*Aegolius funereus magnus*	CR
第４次 2018：	キンメフクロウ	*Aegolius funereus magnus*	CR
第４次 2017：	キンメフクロウ	*Aegolius funereus magnus*	CR
第４次 2015：	キンメフクロウ	*Aegolius funereus magnus*	CR

第４次:	キンメフクロウ	*Aegolius funereus magnus*	CR
第３次:	キンメフクロウ	*Aegolius funereus magnus*	EN
第２次:	キンメフクロウ	*Aegolius funereus magnus*	EN
第１次:	キンメフクロウ	*Aegolius funereus pallens*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠA類(Cr)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Cramp, S. (ed.), 1985. Handbook of the birds of Europe, the Middle East and North Africa, Vol. IV. Oxford Univ. Press, Oxford. 960pp.
- del Hoyo, J., A. Elliott and J. Sargatal (eds.), 1999. Handbook of the Birds of the World, Vol. 5. Lynx Edicions, Barcelona. 759pp.
- 橋本正雄，1990．釧路市博物館収蔵資料目録(X) 鳥類標本目録(1)．釧路市博物館，釧路．
- Iso, K., 1991. A Breeding Record of Boreal Owl *Aegolius funereus* in the Northern parts of Mt. Daisetsu, Central Hokkaido. Kamikawanosizen, 15: 25-26.
- 川辺百樹，1992．大雪山国立公園におけるキンメフクロウの繁殖．ひがし大雪博物館研究報告，14: 107-110．
- 川辺百樹，2003．大雪山国立公園鳥類目録．ひがし大雪博物館研究報告，25: 1-49．
- 川辺百樹，2009．上士幌町鳥類目録．ひがし大雪博物館研究報告，31: 1-16．
- 川辺百樹，2010．大雪山国立公園鳥類目録補遺．ひがし大雪博物館研究報告，32: 237-241．
- ネチャエフ，V.A.，1991．藤巻裕蔵（訳），1996．サハリンの鳥類 2，極東鳥類研究会．366pp.
- 帯広営林支局，1996．ミユビゲラ・キンメフクロウの生息等に関する調査報告書．帯広営林支局．84pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aegolius funereus sibiricus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aegolius funereus sibiricus* is listed as DD under criteria ①②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies. ②Habitats are highly limited.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	玉田克巳（地方独立行政法人北海道立総合研究機構）
Author:	Katsumi Tamada

公表年月：2026 年 3 月

フクロウ目 Strigiformes　フクロウ科 Strigidae　　日本固有

リュウキュウオオコノハズク

***Otus semitorques pryeri* (Gurney, 1889)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　—

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生息地においても生息密度が低く希少である。

【判断理由】

詳細な個体数調査が実施されていないことで、その個体数は不明である。森林地域においては広く分布しているものと考えられるが、どの生息地でも密度は低い。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

全長約 25 cm。沖縄島とその属島の屋我地島、慶良間諸島の阿嘉島、八重山諸島の西表島や石垣島に生息している。本亜種は、羽色が赤錆色がかる暗褐色の地で、複雑な横斑や縦斑が見られる。また、趾に羽毛が生えていないのが大きな特徴である。繁殖時期は 4～5 月で、山地の森林地域や海岸林などの大径木にできた樹洞を使って繁殖する。しばしば、地表に開口した縦穴やヤシ類の枯死木にできたうろなどを利用することもある。

基礎情報

【形態】

全長約 25 cm。北海道から九州まで分布する亜種オオコノハズク（*Otus semitorques*）に似ているが、本亜種は、羽色が赤錆色がかる暗褐色の地で、複雑な横斑や縦斑が見られることでオオコノハズクと区別できる。また、趾に羽毛が生えていないのが本亜種の大きな特徴である。虹彩は赤みがかり、コノハズクの黄色と明瞭に区別できる。耳羽は長めで、後頸は灰色がかる黄褐色を呈し、首輪状に見える。全長は本亜種のほうがやや大きい。

【生活史】

林道沿いや畜舎周辺などに出てきて、ネズミ類や小鳥類、昆虫類などを餌にしている。最近の食性に関する調査では、同所的に生息するリュウキュウコノハズクとの餌の競合を避けるため、リュウキュウコノハズクが昆虫類（特に直翅目等）を主たる餌資源にしているのに比べ、本亜種は昆虫類の中でも餌とする対象がより広く、またサイズの大きい哺乳類や鳥類なども餌としているとの指摘がある。亜種オオコノハズクと異なり、一年を通して森林内にすむが、海岸林や市街地の残存林などでも繁殖していることから、まとまった森林があれば市街地近くでも生息可能であろう。繁殖時期は 4 月から 5 月頃で、山地の森林地域や海岸林などの大径木にできた樹洞を使って繁殖する。しばしば、地表に開口した縦穴やヤシ類の枯死木にできたうろの他、コンクリート建物の 1 階階段下などを営巣場所として利用した例がある。

【生息環境】

沖縄島北部の国頭地域や本部半島、名護市から恩納村などの森林地域、沖縄島中部の沖縄市や島南部の那覇市などに残存する森林地域に生息する。沖縄島南部では那覇市の都市公園等にある残存林などで繁殖したことが知られている。また、八重山諸島の西表島、石垣島などの常緑広葉樹林の大径木が見られる薄暗い森林に生息する。しかしながら、最近西表島や石垣島からの確認例はない。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林，市街緑地，農業用水路，小河川
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

沖縄島及びその属島の屋我地島、慶良間諸島の阿嘉島、八重山諸島の西表島と石垣島に留鳥として分布する。種オオコノハズクは、中国本土から海南島、ベトナム、タイ、マレー半島、大スンダ列島、ボルネオまで、そして、さらに中国東北部からアムール地方、ウスリー地方、朝鮮半島、サハリン、日本、台湾まで分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄島とその属島の屋我地島、慶良間諸島の阿嘉島、八重山諸島の西表島や石垣島から

の記録がある。なお、宮古島でも記録が見られるが迷鳥とされる。種オオコノハズクは、他に与那国島からも記録があるが、亜種レベルでは特定されていない。

【生息地の現況】

繁殖に適した大径木のある山地域の常緑広葉樹林は、西表島や石垣島ではまだ広域に残存している。沖縄島では 1980 年代に島北部地域でダム開発や森林伐採等が急速に進行し、森林面積の減少傾向が見られたが、最近ではダム開発も一段落し、森林は回復傾向であり、森林伐採の面積も縮小している。沖縄島北部の国頭地域や名護市、宜野座村、恩納村、本部半島などの地域では全体的に森林の林齢がすすみ、さらに森林の回復傾向が認められる。おそらく、この傾向は石垣島や西表島でも同様であろう。

【個体数の現況】

種オオコノハズクは、他のフクロウ類のように規則的に遠くまで通る鳴き声をださないことから、夜間鳴き声だけで個体数を推定することに困難さがあり、個体数等その詳細は不明である。沖縄県内では全島的なプレイバック調査など詳細な生息調査が必要であろう。

存続を脅かす要因

存続を脅かす要因は、生息と繁殖に適した森林の減少である。しかも生きた動物（小型哺乳類、小鳥、昆虫類など）だけを餌としているので、農薬や除草剤などによる餌の減少と汚染も個体群の維持に対して大きな脅威である。さらに、沖縄島北部では育雛期の低い位置での営巣場所により外来種マングースなどの捕食を受けている可能性が指摘されている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通事故，農薬汚染/化学物質汚染，その他（沖縄島では外来種のマングースによる雛の捕食が指摘されている）
	（現在）	森林伐採，交通事故，農薬汚染/化学物質汚染

特記事項

日本産鳥類目録改訂第 6 版及び第 7 版では、オオコノハズクの種の学名には *Otus lempiji* が採用されていたが、第 8 版では *Otus semitorques* が採用された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	リュウキュウオオコノハズク	*Otus lempiji pryeri*	VU
第４次 2019：	リュウキュウオオコノハズク	*Otus lempiji pryeri*	VU
第４次 2018：	リュウキュウオオコノハズク	*Otus lempiji pryeri*	VU
第４次 2017：	リュウキュウオオコノハズク	*Otus lempiji pryeri*	VU
第４次 2015：	リュウキュウオオコノハズク	*Otus lempiji pryeri*	VU

第４次:	リュウキュウオオコノハズク	*Otus lempiji pryeri*	VU
第３次:	リュウキュウオオコノハズク	*Otus lempiji pryeri*	VU
第２次:	リュウキュウオオコノハズク	*Otus lempiji pryeri*	VU
第１次:	リュウキュウオオコノハズク	*Otus bakkamoena pryeri*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Brazil, M., 2009. Birds of East Asia, China, Taiwan, Korea, Japan and Russia. Princeton University Press. Princeton and Oxford. 528pp.
- 環境省自然環境局野生生物課（編），2002．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー 2 鳥類．自然環境研究センター，東京．278pp.
- Mikkola, H., 2012. Owls of the world a photographic guide. Christpher Helm. London.
- 日本鳥類目録編集委員会，2000．日本鳥類目録改訂第 6 版．日本鳥学会，帯広．345pp.
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.
- 沖縄県編，2005．沖縄の絶滅のおそれのある野生生物（改訂版）．沖縄県自然保護課，那覇.
- 沖縄県編，2017．改訂・沖縄の絶滅のおそれのある野生生物第 3 版動物編．レッドデータおきなわ，沖縄県自然保護課，那覇.
- 沖縄県立博物館，2002．改訂沖縄県立博物館収蔵品目録，下巻（1981-2000 年度）．沖縄県立博物館，那覇.
- 沖縄野鳥研究会編，2010．改訂沖縄の野鳥図鑑．新星出版，那覇.
- 嵩原建二，2002．沖縄島で留鳥として生息する希少な 3 亜種の繁殖記録について．沖縄県立博物館紀要，(28): 1-11.
- Toyama, M. and T. Saitoh, 2011. Food niche differences between two syntopic scops owle on Okinawa Island, Japan. Journal of Raptor Research, 45(1): 79-87.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Otus semitorques pryeri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Otus semitorques pryeri* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due

to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category. ①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Urban green area, Agricultural ditch, Small river
Threat types:	Logging and wood harvesting, Vehicle collision, Pesticide/Toxic chemical pollution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者:	嵩原建二（沖縄野鳥研究会）
Author:	Kenji Takehara

公表年月：2026 年 3 月

キツツキ目 Piciformes　キツツキ科 Picidae　　日本固有

ミユビゲラ

***Picoides tridactylus inouyei* Yamashina, 1943**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①②

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。
①どの生息地においても生息密度が低く希少である。
【判断理由】
北海道中央部の大雪山系の針葉樹林において繁殖した確実な記録がある。個体数は極めて少なく、断片的な生息情報があるだけである。生息数は、成熟個体 50 個体未満（絶滅危惧ＩＡ類の基準Ｄ）と推定されるが、生息数、生息密度、個体群の動向など、生息状況を評価ができるだけの情報がない。分類という視点からも情報が不足している。

②生息地が局限されている。
【判断理由】
本種は、ユーラシア大陸の北方針葉樹林（タイガ）とヨーロッパアルプス・天山山脈・崑崙山脈・横断山脈などの山岳針葉樹林に広く分布しているが、国内では北海道中央部の大雪山系の針葉樹林で記録があるだけで、世界的にみて、生息地が局限的である。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

種ミユビゲラ（*Picoides tridactylus*）はユーラシア大陸の北方針葉樹林（タイガ）とヨーロッパアルプス・天山山脈・崑崙山脈・横断山脈などの山岳針葉樹林に分布する。国内では本亜種が北海道中央部、大雪山系の針葉樹林で個体の観察記録があり、繁殖も確認されているが、情報は断片的で、継続的な観察記録はない。

協力者:　加藤克（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園）・西海功（国立科学博物館）

基礎情報

【形態】

基亜種（*Picoides tridactylus tridactylus*）では全長が 20～24 cm、体重がオス 65～74 g、メス 54～66 g。体の背面は黒色で、中央部から腰にかけては白い。腹面は白く、脇に暗色の縞がある。オスの頭頂は黄色い。 趾は第 1 指を欠き 3 本である。種ミユビゲラでは北の個体群に比べ南の個体群は暗色となる。エゾアカゲラ（*Dendrocopos major japonicus*）やエゾオオアカゲラ（*Dendrocopos leucotos subcirris*）は下腹部が赤く、コアカゲラ（*Dendrocopos minor amurensis*）やエゾコゲラ（*Yungipicus kizuki seebohmi*）はより小型で背面の羽色が異なる。

【生活史】

生活史の詳細は不明である。1942 年 9 月に国内ではじめて、十勝三股においてオス 1 羽が観察され、同年 11 月 11 日、12 月 17 日、12 月 19 日に、同地域で銃によって、オス 1 羽、メス 2 羽が採取され、新亜種として記載された。1956 年に、造材現場で伐採されたエゾマツ（*Picea jezoensis*）からヒナ 3 羽が保護され、うち 1 羽が 1957 年 1 月まで飼育されたが、死亡した。この個体は北海道大学農学部博物館（現北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園）に剥製として所蔵されており、営巣木の一部も保存されている。この記録が、本種が繁殖しているとされる唯一の記録である。その後、1962 年 7 月に旭岳天女ケ原で、1988 年 9 月に東大雪のニペソツ登山道などで観察記録があるほか、2006～2009 年の 6～7 月、2010 年 10 月、2011 年 5 月に十勝岳で観察記録がある。観察や捕獲の記録は断片的であるが、繁殖期である 5～7 月、非繁殖期である 9～12 月まで記録があり（12 月の捕獲時期は積雪期であった）、留鳥とされている。1942 年に採集された 3 羽の胃には多くのヤツバキクイムシ（*Ips typographus japonicus*）とシラフヨツボシヒゲナガカミキリ（*Monochamus rosenmuelleri*）が含まれていた。また、川辺（2014）によると、本種が目撃されたいくつかの地点では、目撃の数年前に大規模な風倒があることが分析されており、風倒による昆虫の発生との因果関係がある可能性が示唆されている。

基亜種の生活史は以下のとおりである。枯損あるいは内部が腐朽した木の幹に毎年穴を穿って巣をつくり 5 月上旬に産卵する。一腹産卵数は 3～6 卵、抱卵期間は約 11～14 日、育雛期間は 22～26 日である。雌雄で抱卵・育雛を行う。幼鳥は巣立ち後 1 ヶ月ほどで独立する。留鳥であるが、北のものは冬季に南へ移動し、不定期な渡り（eruptive migration）も知られている。樹皮下にいるキクイムシ類（Scolytidae）やカミキリムシ類（Cerambycidae）などの穿孔性甲虫の幼虫・蛹を主要な食物としている。

【生息環境】

観察や捕獲の記録は断片的であるが、確認地点は大雪山国立公園の区域内で、おもにエゾマツやアカエゾマツ（*Picea glehnii*）などのトウヒ属が優占する森林である。

種ミユビゲラはユーラシア大陸の北方針葉樹林（タイガ）と中緯度の山岳針葉樹林（亜高山帯針葉樹林）に生息し、シベリアではカラマツ林に、他の地域では主にトウヒ属からなる森林にすむ。国内では本亜種が大雪山系のエゾマツ・トドマツ（*Abies sachalinensis*）

が優占する針葉樹林に生息し、特にエゾマツ・アカエゾマツ（*Picea glehnii*）の多い森林を好む。	
生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域

【分布域】

種ミユビゲラは北欧から極東にいたるユーラシア大陸の高緯度地方とヨーロッパアルプス・天山山脈・崑崙山脈・横断山脈など中緯度の山岳地帯に分布し、国内では本亜種が北海道中央部の山岳地帯（大雪山系）に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

観察記録は非常に少なく、かつ断片的であり、現在の生息状況ははっきりしない。

【生息地の現況】

観察記録のある地域は、現在では国立公園の区域内である。

【個体数の現況】

観察記録が少なく、生息密度が非常に低いと考えられる。

存続を脅かす要因

観察記録が少なく、生息状況ははっきりせず、種の存続を脅かす要因などはわからない。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

北海道は、極東における本種の分布南限にあたる。1942 年に 3 羽が採取され、山階芳麿博士によって、形態などから日本固有の亜種とされ、日本鳥類目録第 8 版においても、この分類が採用されている。孤立した個体群と考えると、個体群の規模はかなり小さい。国際鳥学会の IOC World Bird List (v 14.2)では、8 亜種に分類され、*Picoides tridactylus inouyei* は固有亜種として扱われているが、Cramp (1985)では 3 亜種に分類されており、*Picoides tridactylus inouyei* の記述はない。Dement'ev & Gladkov (1951)においても 8 亜種に分類されているが、分布地域として日本（北海道）にかかる記述はなく、*Picoides tridactylus inouyei* の記述もない。エゾミユビゲラの標本は、山階鳥類研究所にタイプ標本を含む 3 羽、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園に 1 羽がある。北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園の標本については、1997 年以降、標本の遺伝子を調べたいという研究者からの照会はない。遺伝子に基づく亜種分類の知見が乏しく、分類という視点からも情報が不足している。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ミユビゲラ	*Picoides tridactylus inouyei*	CR
第４次 2019：	ミユビゲラ	*Picoides tridactylus inouyei*	CR
第４次 2018：	ミユビゲラ	*Picoides tridactylus inouyei*	CR
第４次 2017：	ミユビゲラ	*Picoides tridactylus inouyei*	CR
第４次 2015：	ミユビゲラ	*Picoides tridactylus inouyei*	CR
第４次：	ミユビゲラ	*Picoides tridactylus inouyei*	CR
第３次：	ミユビゲラ	*Picoides tridactylus inouyei*	CR
第２次：	ミユビゲラ	*Picoides tridactylus inouyei*	CR
第１次：	ミユビゲラ	*Picoides tridactylus inouyei*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠA 類(Cr)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法

参考文献

- Cramp, S. (ed.), 1985. Handbook of the birds of Europe, the Middle East and North Africa, Vol. IV. Oxford Univ. Press, Oxford. 960pp.
- del Hoyo, J., A. Elliott and J. Sargatal (eds.), 2002. Handbook of the Birds of the World, Vol. 7. Lynx Edicions, Barcelona. 613pp.
- Dement'ev, G. P. and N.A. Gladkov, 1951. Ptitsy Sovetskogo Soyuza. Sovetskaya Nauka, Moscow. (Birron, A. and Z. S. Cole (Translated from Russian), 1966. Birds of the Soviet Union. Vol.1. Israel Program for Scientific Translations, Jerusalem.)
- Gill, F., D. Donsker and P. Rasmussen (Eds). 2024. IOC World Bird List (v 14.2). Doi 10.14344/IOC.ML.14.2. http://www.worldbirdnames.org/
- 稗田一俊・長谷智恵子・望月達也・東淳樹・荒哲平，2013．北海道におけるミユビゲラ *Picoides tridactylus* の観察記録．日本鳥学会誌，62: 184-188.
- 井上元則，1946．エゾミユビゲラの食性と森林害虫と関係．生物，1: 169-172.
- 井上元則，1948．エゾミユビゲラ発見記．野鳥，13(2): 2-3.
- 井上元則，1972．エゾミユビゲラ（蝦夷三趾啄木鳥）－趾が三本のキツツキ－．北国の自然と野鳥　付・丹頂鶴の興亡史，pp. 38-42.
- 川辺百樹，2009．上士幌町鳥類目録．ひがし大雪博物館研究報告，31: 1-16.

- 川辺百樹，2003．大雪山国立公園鳥類目録．ひがし大雪博物館研究報告，25: 1-49．
- 川辺百樹，2014．エゾミユビゲラの生息と大規模風倒の発生．森林保護，336: 25-30．
- Leonard, D. L. Jr., 2001. Three-toed Woodpecker (*Picoides dorsalis*), The Birds of North America, No. 588, Cornell Laboratory of Ornithology and the Academy of Natural Sciences, 23pp.
- 松岡茂，2004．レッドリストの生き物たち 13 針葉樹林一筋のキツツキ–ミユビゲラ．林業技術，742: 38-39．
- 上田明良，2007．ヤツバキクイムシとカラマツキクイムシの生態．森林保護，306: 14-16．
- Winkler, H., D. A. Christie and D. Nurney, 1995. Woodpeckers, A Guide to the Woodpeckers, Piculets and Wrynecks of the World. Pica Press, Sussex. 406pp.
- Yamashina,Y., 1943. A new subspecies of *Picoides tridactylus* discovered in Hokkaido. Bull Biogeogr Soc Japan 13: 43-45.
- 柳澤紀夫，1964．北の鳥雑記ミユビゲラの観察．野鳥，29: 27-29．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Picoides tridactylus inouyei has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Picoides tridactylus inouyei* is listed as DD under criteria ①②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	玉田克巳（地方独立行政法人北海道立総合研究機構）
Author:	Katsumi Tamada

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ヤイロチョウ科 Pittidae

ヤイロチョウ

***Pitta nympha* Temminck & Schlegel, 1850**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①②

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生息地においても生息密度が低く希少である。

【判断理由】

主要な生息地域のひとつとされる宮崎県では、複数の地域で生息が記録されているが、いずれも単独か 2 個体程度のサエズリのみである。

②生息地が局限されている。

【判断理由】

各地で繁殖期の記録は増加傾向にある。しかし、継続的に生息が確認できている地域は宮崎県、高知県および長野県の一部地域のみだが、宮崎県では生息数が激減し、高知県および長野県では営巣場所が安定していない。最近の繁殖状況の詳しい情報はなく、生息記録の増加も繁殖の失敗したあとの漂流個体が増加している可能性がある。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

ツグミ大の中型の鳥で日本に夏鳥として 5 月中旬に飛来する。生息地域が九州、四国、本州のごく一部に限られており、生息数も少ないと考えられる。大径木の常緑広葉樹林が本来の生息環境と考えられるが、現在は常緑広葉樹林や落葉広葉樹林が混在するスギやヒノキの植林地で記録されることが多い。林床でミミズや昆虫類を採餌し、林の外で観察されることは少ない。

基礎情報

【形態】

全長 18～20 cm。翼長 118～127 mm、嘴峰長 22～25 mm、ふ蹠長 38～42 mm、尾長 35～42 mm。頭部は褐色で中央に黒い線があり、眉斑は黄白色で黒い過眼線がある。喉から胸と脇腹は黄白色で、腹の中央から下尾筒にかけては赤色、背面と肩の羽は緑色で、腰と上尾筒はコバルト色、尾羽は黒色で先端はコバルト色という色彩から八色鳥とか八色つぐみと呼ばれるようになった。初列風切羽の基部には白斑があり、飛ぶとよく目立つ。

【生活史】

繁殖期は 5 月から 7 月で、よく通るポポペン、ポポペンと聞こえる声でオスもメスもさえずる。地上や大木の叉に木の枝などでラグビーボール大の横に出入り口のある巣を作る。卵は、1 巣に 4～6 個産卵し、抱卵から約 4 週間で巣立ちする。食物はミミズ類がもっとも多いが、サワガニや地表性の昆虫類も多く採食する。

【生息環境】

常緑広葉樹林の残る西日本の低山帯を主な生息地としている。森の中の開けた地上で採餌する習性から、草薮、笹原、シダ、灌木が茂った林には生息しない。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

本亜種は、日本、朝鮮半島および中国と台湾にかけて繁殖し、中国南部からインドネシア、ボルネオ島にかけての地域で越冬すると言われているが、日本で繁殖する個体の越冬地は明らかになっていない。中国では、最近の確実な生息記録はほとんどなく、韓国では済州島などの島嶼で営巣記録があるが、生息数は少ない。台湾では全土で分布が確認されたが、生息数は大きく減少しているとされる。越冬地のボルネオでは、1960 年代にサラワクにおいては普通種であったというが、近年ではボルネオ全体でも確実な記録がない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

江戸時代に霧島山系に生息の記述があり、1900 年代以降は栃木県や和歌山県で生息記録があったが、確実な繁殖確認はなかった。1937 年に高知県幡多郡山奈村大物川国有林で初めて繁殖が確認されたが、その後も生息確認は少なく、幻の鳥と呼ばれてきた。日本野鳥の会が 1991 年に実施したアンケート調査では、1976 年以降に石川県中部から北九州までの日本海側海岸線、太平洋側では神奈川県西部から紀伊半島南部、四国南西部、九州南部の 48 地点で生息が報告され、うち 12 地点では繁殖の報告があったが継続して生息が確認されていたのは、高知県を中心とした四国の一部、九州や本州中西部の一部のみであった。自然環境保全基礎調査鳥類繁殖分布調査では、1970 年代後半では 5 地点のみだった繁殖可

能性ありが 2000 年前後の第 2 回調査では九州から東海地域にかけて繁殖確認が 2 地点、繁殖可能性有りが 24 地点、2020 年前後の第 3 回調査では九州から関東南部で繁殖確認が 4 地点、繁殖可能性ありが 62 地点と増加している。河川水辺の国勢調査ダム湖調査でも生息確認ダム湖は増加傾向にある。生息分布は拡大傾向にあるが、継続的に生息が確認できている場所は宮崎県、高知県と長野県の局地的な一部地域に限られる。

【生息地の現況】

1937 年に高知県で繁殖が確認された場所は大径木の天然林であったとされる。近年に生息記録のあった地域は照葉樹林が発達する地域とほぼ一致し、繁殖が確認された森林は、広葉樹とスギ・ヒノキ植林の混生林が多い。薪炭林とされてきた常緑広葉樹林では樹木が成長し、生息に適した環境が増加している場所もある。生息密度が比較的高かった、宮崎県御池野鳥の森周辺は、シカの増加による林床植生の変化と写真撮影などによる人為的かく乱により、近年生息数の減少が著しい。

【個体数の現況】

1991 年の全国調査では、九州地域全体で十数つがい、四国地方で数十つがい、本州全域で数つがい程度の記録があるだけで、推定できる生息数は多くても 100～150 羽程度であった。近年は、生息確認地は増えているが、全国的な生息個体数を推定できる調査はない。継続的に調査や観察が行われている高知県や長野県の生息地では、確認数は増減があるが、生息確認のある谷の位置が変動しており、繁殖の失敗による営巣場所の移動が生じている可能性がある。（生息密度の高かった宮崎県御池野鳥の森は生息数が減少した後、回復していない。）

存続を脅かす要因

熱帯から温帯にかけての森林伐採の影響を受け、生息数が急減していると言われている。姿が美しいことから写真撮影を目的に生息地に入り、繁殖行動が攪乱されるおそれがあるため、営巣地の情報の扱いは注意を要する。シカの増加は、林床植生や土壌環境を変化させ、生息環境に悪影響を与える可能性がある。沢に近い地上に営巣する場合が多いことから、近年西南日本で繁殖期に多発する集中豪雨による影響も考慮する必要がある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，シカ食害，その他（写真撮影など人為的かく乱）
	（現在）	森林伐採，自然災害，シカ食害，その他（写真撮影など人為的かく乱）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヤイロチョウ	*Pitta nympha*	EN
第４次 2019：	ヤイロチョウ	*Pitta nympha*	EN
第４次 2018：	ヤイロチョウ	*Pitta nympha*	EN
第４次 2017：	ヤイロチョウ	*Pitta nympha*	EN
第４次 2015：	ヤイロチョウ	*Pitta brachyura nympha*	EN
第４次：	ヤイロチョウ	*Pitta brachyura nympha*	EN
第３次：	ヤイロチョウ	*Pitta brachyura nympha*	EN
第２次：	ヤイロチョウ	*Pitta brachyura nympha*	EN
第１次：	ヤイロチョウ	*Pitta brachyura nympha*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【山形県】評価対象外，【福島県】情報不足(DD)，【千葉県】消息不明・絶滅生物(X)，【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【神奈川県】情報不足(繁殖期)，【富山県】情報不足(DD)，【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類，【山梨県】情報不足(DD)，【長野県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【静岡県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【愛知県】絶滅危惧ⅠB類(EN)(繁殖),絶滅危惧Ⅱ類(VU)(通過)，【三重県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【滋賀県】希少種，【兵庫県】要注目種，【奈良県】絶滅寸前種，【和歌山県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類，【広島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【山口県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【徳島県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【香川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【福岡県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【佐賀県】絶滅危惧Ⅰ類種，【長崎県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【熊本県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【大分県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【宮崎県】絶滅危惧ⅠB類(EN-r)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【長野県・宮崎県】

参考文献

- 藤田剛・樋口広芳・澤田佳長，1992．日本におけるヤイロチョウ *Pitta brachura* の生態分布．平成 3 年度特殊鳥類調査，pp. 1-8．環境庁，東京．
- 藤田剛・樋口広芳・澤田佳長・磯谷達宏，1992．四国南西部におけるヤイロチョウ *Pitta brachura* の生息状況と環境選択．平成 3 年度 特殊鳥類調査，pp. 9-29．環境庁，東京．
- 林正敏，1982．長野県におけるヤイロチョウの繁殖期録．Strix，1: 123-124．
- 金井裕，1992．九州地方のヤイロチョウ *Pitta brachura* の生息状況．平成 3 年度特殊鳥類調査，pp. 30-42．環境庁，東京．

- 河川環境データベース（河川水辺の国勢調査），国土交通省．https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/
- 九州地方環境事務所，2017．御池野鳥の森におけるヤイロチョウ保護対策の実施について（お知らせ）．https://kyushu.env.go.jp/to_2017/post_94.html
- Lambert, F. and M. Woodcock, 1996. Pittas, Broadbills and Asities. Pica Press, Sussex. 291pp.
- 中村滝男，2010．森林の夏鳥保護管理マニュアル．社団法人生態系トラスト協会報告書，pp. 19-24．
- 澤田佳長，1984．ヤイロチョウの繁殖・習性等の観察．高知県立宿毛高等学校研究紀要，2: 1-10．
- 高野伸二，1970．珍鳥ヤイロチョウを訪ねて．林友，11: 54-60．
- 内田清之助，1937．八色鳥の営巣．野鳥，4(9): 735-744．
- 植松永至，1994．長野県南部におけるヤイロチョウ *Pitta brachura* の生息状況と環境選択．信州大学大学院農学研究科修士論文．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pitta nympha has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pitta nympha* is listed as DD under criteria ①②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Natural disasters, Deer feeding damage, Other
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species 【Nagano・Miyazaki】.



執筆者:	金井裕（公益財団法人日本野鳥の会）
Author:	Yutaka Kanai

公表年月：2026 年 3 月

スズメ目 Passeriformes　ヒタキ科 Muscicapidae　　日本固有

アカヒゲ

***Larvivora komadori* (Temminck, 1835)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③④

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

繁殖地が相互に遺伝子流動の少ない 4 つの集団（男女群島、トカラ列島、奄美大島周辺島嶼、徳之島）に分断されており、それぞれの集団の分布域がごく限られている。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

男女群島から奄美群島の常緑広葉樹林で繁殖するが、越冬地は主に先島諸島で、両地域の間で渡りをするための中継地も必要であり、本種の保全のためには南西諸島全域の一体的な生息地保全が必要である。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

男女群島、トカラ列島、奄美大島とその周辺島嶼、徳之島で繁殖している（関 2012）。本種の一部集団は渡り鳥で、先島諸島で越冬する個体が多い。外来捕食者による影響が懸念されている。

基礎情報

【形態】

ヒタキ科の小鳥で、大きさはスズメ大。背面は橙色、腹部は白色で、オスでは顔から胸にかけて黒く、メスでは腹部の羽毛の縁が灰色で鱗模様に見える。本種は、近縁のホントウアカヒゲ *Larvivora namiyei* にくらべて背面・腹面とも淡色で、オスでは嘴上部の黒色部の幅が広めで脇腹に黒斑がある点が異なる。体重はオス 23.0±1.3 g、メス 24.4±2.4 g、自然翼長はオス 75.5±1.6 mm、メス 72.5±1.6 mm（オス N=433、メス N=364 の平均±SD；関 2012）。

【生活史】

縄張りを形成し、通常は一夫一妻で繁殖する。枯葉、ツル、樹皮などを用いた椀状の巣を、リュウキュウチクや常緑広葉樹の樹上、樹洞や幹の割れ目など多様な場所にかける。巣箱をはじめとする人工構造物も良く利用する。一腹卵数は 1-5 卵で平均 3 卵（関 2012）。

【生息環境】

下層植生の発達した常緑広葉樹林で生息密度が高いが、二次林や集落の緑地、トカラ列島ではリュウキュウチク林の一部にも生息する（関 2012）。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林，農業用水路，小河川
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（7）島嶼地域

【分布域】

男女群島、トカラ列島、奄美大島とその周辺島嶼、徳之島で繁殖している（Seki 2023）。薩南諸島では繁殖期の記録があるが、確実な繁殖記録はない（福留ら 2022、関 2010）。沖縄島には近縁種のホントウアカヒゲが生息するが、ホントウアカヒゲは留鳥であり、本種と繁殖分布域は重ならない。トカラ列島で繁殖する集団は渡り鳥で、冬期にはほぼすべての個体が繁殖地から渡去する。奄美大島と徳之島では留鳥の個体と渡り鳥の個体が混在する。渡り鳥の個体は、宮古島から与那国島にかけての先島諸島地域で越冬している（Seki and Ogura 2007）。先島諸島には過去に本種の亜種ウスアカヒゲ *Larvivora komadori subrufus* が分布したとの見解もあるが、信頼できる根拠はない（関 2005）。日本鳥類目録改訂第 8 版においては亜種のウスアカヒゲ *Larvivora komadori subrufus* は新参異名とされ、本種は単型種とされた（日本鳥学会 2024）。夏から秋にかけては薩南諸島や大隅半島でも観察記録が少なくない（福留ら 2022、関 2008）。

現在の生息状況

【分布域の現況】

トカラ列島南部で 2000 年代に繁殖期の分布が新たに確認された地点があるが（関ほか 2011）、繁殖分布域の大きな変化はない。

【生息地の現況】

琉球列島とその周辺域内での渡り鳥で、周年の生息域が広範囲にわたり、それぞれ利用される季節が異なるため、地域によって状況は異なっている。

【個体数の現況】

トカラ列島では高密度に生息している地域もあるが、その他の地域の生息密度は高くない。1980 年には、さえずり個体密度と生息地面積から個体数推定が試みられた（環境庁 1981）。男女群島で約 1,000 羽、奄美大島で約 21,000‐37,500 羽、徳之島で約 18,800‐21,300 羽と報告されているが、信頼性は必ずしも高くない。それ以降の個体数変化は調べられていないが、2000 年代の生息密度は 1980 年の記録ほど高くない地域が多かった （Sugimura et al. 2003）。外来捕食者のフイリマングースの駆除事業が行われた奄美大島では、フイリマングースの減少後に本種の分布の拡大が報告されているが、個体数への効果は確認されていない（小高ほか 2022）。

存続を脅かす要因

奄美大島では外来種のフイリマングースが本種の捕食者となっていたが（小高 2009）、近年ではフイリマングースの駆除が行われた地域で本種の確認地点の増加が報告されている（小高ほか 2022）。トカラ列島、奄美大島、徳之島に外来捕食者のノネコが生息し、本種へのノネコの影響は十分には調べられていない。トカラ列島では域外から移入されたニホンイタチが広域に生息し、ニホンイタチの捕食によると推測される営巣失敗例が多い（関 2001）。奄美諸島、トカラ列島の一部の森林には野生化したヤギが生息し、ヤギの採食による下層植生の衰退や樹木の更新阻害により本種の生息環境の悪化が懸念される。本種の分布域における常緑広葉樹林の伐採や開発の拡大は、生息地面積の減少につながる可能性がある。古来より飼い鳥として捕獲されてきたが、現在でも違法飼育の影響があるかは不明である。

要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による）
	（現在）	捕食（外来種による），その他動物食害

特記事項

本種とホントウアカヒゲとは分布域の近接した姉妹種ではあるが遺伝的分化の程度が大きく（Seki et al. 2007）、日本鳥類目録改訂第 8 版においてはそれぞれ独立種とされた（日本鳥学会 2024）。部分的な渡り鳥であるため、繁殖地と越冬地、および渡りの途中の中継地において生息地を連続的に保全することが重要である。今回のカテゴリー変更は本種の現状の変化というよりは、評価方法の変更（評価基準の整理と定性評価の廃止）によるところが大きい。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカヒゲ	*Luscinia komadori komadori*	VU
第４次 2019：	アカヒゲ	*Luscinia komadori komadori*	VU
第４次 2018：	アカヒゲ	*Luscinia komadori komadori*	VU
第４次 2017：	アカヒゲ	*Luscinia komadori komadori*	VU
第４次 2015：	アカヒゲ	*Erithacus komadori komadori*	VU
第４次：	アカヒゲ	*Erithacus komadori komadori*	VU
第３次：	アカヒゲ	*Erithacus komadori komadori*	VU
第２次：	アカヒゲ	*Erithacus komadori komadori*	VU
第１次：	アカヒゲ	*Erithacus komadori komadori*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 福留千穂・尾上和久・上田恵介，2022．屋久島でアカヒゲは繁殖しているのかμm―8・9 月期の記録が語るもの―． Strix，38: 115-120.
- 環境庁，1981．昭和 55 年度特殊鳥類調査報告書．環境庁，東京．131pp.
- 小高信彦・久高将和・嵩原建二・佐藤大樹，2009．沖縄島北部やんばる地域における森林性動物の地上利用パターンとジャワマングース *Herpestes javanicus* の侵入に対する脆弱性について．日本鳥学会誌，58: 28-45.
- 小高信彦ほか，2022．奄美大島，徳之島，沖縄島北部における鳥類の繁殖分布と世界自然遺産のゾーニング．九州森林研究，75: 63-70.
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録第改訂第 8 版．日本鳥学会，東京.
- 関伸一，2001．南西諸島北部における希少鳥類の生息状況－トカラ列島中之島の事例－．森林防疫，50: 228-232.
- 関伸一，2005．ウスアカヒゲ．森林技術，756: 32-33.
- 関伸一，2008．繁殖分布の周辺域におけるアカヒゲの生息状況（I）：大隅諸島黒島および大隅半島木場岳・稲尾岳における繁殖期の生息状況．九州森林研究，61: 105-107.
- 関伸一，2010．繁殖分布の周辺域におけるアカヒゲの生息状況（II）：屋久島および種子島における繁殖期の生息状況．九州森林研究，63: 95-96.
- 関伸一・所崎聡・溝口文男・高木慎介・仲村昇・ファーガス クリスタル，2011．トカラ列島の鳥類相．森林総合研究所研究報告，10: 183-229.
- 関伸一，2012．生態図鑑アカヒゲ．バードリサーチニュース，9(1): 4-5.

- Seki, S. I. and T. Ogura, 2007. Breeding origins of migrating Ryukyu Robins *Erithacus komadori* inferred from mitochondrial control region sequences. Ornithological Science, 6: 21-27.
- Seki, S. I., M. Sakanashi, N. Kawaji and N. Kotaka, 2007. Phylogeography of the Ryukyu Robin (*Erithacus komadori*): population subdivision in land-bridge islands in relation to the shift in migratory habit. Molecular Ecology, 16: 101-113.
- Seki, S. I., 2023. Fine-scale nuclear genetic structuring within the Ryukyu Robin, a species complex endemic to the Ryukyu Archipelago. Ornithological Science, 22: 21-27.
- Sugimura, K., F. Yamada and A. Miyamoto, 2003. Population trend, habitat change and conservation of the unique wildlife species on Amami Island, Japan. Global Environmental Research, 7: 79-90.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Larvivora komadori has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Larvivora komadori* is listed as DD under criteria ③④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Agricultural ditch, Small river
Threat types:	Predation (by alien species), Other animal feeding damage
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	関伸一（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）
Author:	Shin-ichi Seki

スズメ目 Passeriformes　アトリ科 Fringillidae

ギンザンマシコ

***Pinicola enucleator sakhalinensis* Buturlin, 1915**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。
②生息地が局限されている。
【判断理由】
繁殖期の生息情報が大雪山、日高山脈、知床半島、利尻島の高山帯に限定されている。生息数は多くないと思われるが、高山帯の調査がほとんど行われていないため、カテゴリーを判定するに足る情報が得られていない。高山帯は気候変動に対してもっとも脆弱であるため、体系的な調査が必要である。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

北海道の高山帯に少数が繁殖している。北海道で繁殖するのは亜種 *Pinicola enucleator sakhalinensis* で、7 月から 8 月に繁殖する。冬季には低地の森林や都市の公園などにも飛来することがある。天売島と新潟では、別亜種コバシギンザンマシコ *Pinicola enucleator kamtscatkensis* の記録がある。

基礎情報

【形態】

全長約 20 cm。嘴が短くて太く少し下に曲がっている。雄の頭部から胸、腹は桃赤色で、喉、胸側、脇、下腹、下尾筒は暗灰色、背と腰は灰色と淡紅色と黒のまだら。雌は雄の赤色部が黄褐色。

【生活史】

留鳥または冬鳥。北海道の高山帯で繁殖するものは、亜種 *Pinicola enucleator sakhalinensis* で、千島列島や、ロシアのサハリンなどにも分布している。大雪山では、1975 年 8 月 8 日に孵化後約 1 週間のヒナ 3 羽がいる巣が確認され、同年 8 月 14 日に巣立直後のヒナが観察されており、利尻岳では 1977 年 7 月に巣があると思われる場所で、メスの出入りやオスの見張り行動が観察されていることから、7 月から 8 月かけて繁殖しているものと考えられる。北海道では、冬季に低地の森林や都市の公園などに飛来し、本州でも記録がある。天売島と新潟では、別亜種コバシギンザンマシコ *Pinicola enucleator kamtscatkensis* の記録がある。

【生息環境】

繁殖期は高山のハイマツ帯、冬季は平地から低山の常緑針葉樹の多い森林に漂行し、ときに都市部の街路樹などでもみられる。

生息環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部】市街緑地
国土地域区分：	（1）奥山自然地域

【分布域】

1975 年に大雪山のハイマツ帯で国内繁殖が初確認された。日高山脈、知床半島、利尻島の高山帯でも繁殖の可能性がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

過去に比べて、分布域が変わったという情報はないが、調査もほとんど行われていないため、生息状況を判定する根拠がない。

【生息地の現況】

夏にはハイマツ林帯に生息するが、冬季には低地の森林や都市の公園などにも飛来する。

【個体数の現況】

分布域内において、生息密度、個体数、増減に関する調査は行われていない。全国鳥類繁殖分布調査の確認地点数は、1974－1978 年が 3 地点、1997－2002 年が 3 地点、2016－2021 年が 4 地点で、確認地点数が少ないので増減はわからない。

存続を脅かす要因

生息数密度や個体数の増減の調査は行われていないため、個体数の動向ははっきりしない。今のところ、存続を脅かす著しい問題は話題となっていないが、繁殖地が高山帯に限定されているため、気候変動の影響が心配される。また気候変動にともない、シカの分布が高山帯に拡大している可能性もあり、生息地である高山植生の改変が心配される。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	シカ食害，気候変動

特記事項

高山帯の調査がほとんど行われていないため、生息数の動向もはっきりせず、具体的な保護対策は行われていない。繁殖期に生息情報のある大雪山、日高山脈、知床半島、利尻島の高山帯は国立公園であるため、人為的な改変はほとんどないと考えられる。高山の生態系は、気候変動に対してもっとも脆弱であるため、影響を調べる必要がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 藤巻裕蔵，2012．北海道鳥類目録改訂 4 版．極東鳥類研究会，美唄．
- 石川信夫，1976．ギンザンマシコの生態－大雪山における営巣確認の記録－本邦初記録．野鳥，41(1): 32-35．
- 河井大輔・川崎康弘・島田明英・諸橋淳，2013．新訂北海道野鳥図鑑 第 2 版．亜璃西社，札幌．
- 高野伸二，2001．フィールドガイド日本の野鳥 増補版第 11 刷．日本野鳥の会，東京．
- 上野善平，1977．利尻岳のギンザンマシコ．野鳥，42(11): 566．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pinicola enucleator sakhalinensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pinicola enucleator sakhalinensis* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area, Mid-altitude area】Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Urban green area
Threat types:	Deer feeding damage, Climate change
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	玉田克巳（地方独立行政法人北海道立総合研究機構）
Author:	Katsumi Tamada

公表年月：2026 年 3 月

第５次レッドリスト（鳥類）においてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった種（亜種を含む）または地域個体群の解説

レッドリスト 2020 掲載名	
カモ目	カモ科
マガン	
Anser albifrons albifrons	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	○
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	

具体的理由

モニタリングサイト 1000 の結果などを分析すると、2015-2020 年の個体数は、各年最大で 110,000～530,000 羽程度で個体数は増加傾向である。個体数は 1,000 羽を大幅に超えており、基準 D の VU の要件を満たしていない。飛来数が毎年 10 万羽を超えており、現時点では直ちに「絶滅危惧」のカテゴリーに移行する可能性も低いので、「RL 不掲載」と評価した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	マガン	*Anser albifrons albifrons*	NT
第４次 2019:	マガン	*Anser albifrons albifrons*	NT
第４次 2018:	マガン	*Anser albifrons albifrons*	NT
第４次 2017:	マガン	*Anser albifrons albifrons*	NT
第４次 2015:	マガン	*Anser albifrons frontalis*	NT
第４次:	マガン	*Anser albifrons frontalis*	NT
第３次:	マガン	*Anser albifrons frontalis*	NT
第２次:	マガン	*Anser albifrons frontalis*	NT
第１次:	マガン	*Anser albifrons frontalis*	R

参考文献

- 環境省自然環境局 生物多様性センター，2017．平成 28 年度 重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）ガンカモ類調査業務 2015/16 年調査報告書．81pp. 環境省自然環境局 生物多様性センター，山梨県.
- 環境省自然環境局 生物多様性センター，2018．平成 29 年度モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査 2016/17 年調査報告書．75pp. 環境省自然環境局 生物多様性センター，山梨県.

- 環境省自然環境局 生物多様性センター，2019．平成 30 年度モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査 2017/18 年調査報告書．74pp. 環境省自然環境局 生物多様性センター，山梨県.
- 環境省自然環境局 生物多様性センター，2019．2019 年度モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査 2018/19 年調査報告書．78pp. 環境省自然環境局 生物多様性センター，山梨県.
- 環境省自然環境局 生物多様性センター，2021．2020 年度モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査 2019/20 年調査報告書．90pp. 環境省自然環境局 生物多様性センター，山梨県.
- Shimada, T., A. Mori and H. Tajiri, 2019. Regional variation in long-term population trends for the Greater White-fronted Goose Anser albifrons in Japan. Wildfowl, 69: 105-117.

執筆者： 嶋田哲郎（公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
カモ目	カモ科
アカツクシガモ	
Tadorna ferruginea	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	○

具体的理由

本種は、日本鳥類目録改訂第 8 版における生息状況が Accidental Visitor および Irregular Visitor となっている。鳥類分科会における基本的事項では、日本鳥類目録改訂第 8 版における生息状況が Accidental Visitor もしくは Irregular Visitor の種は原則として迷鳥として取り扱い、評価対象としないこととなっている。鳥類分科会における議論の結果、本種は評価対象としないこととなった。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	アカツクシガモ	*Tadorna ferruginea*	DD
第４次 2019:	アカツクシガモ	*Tadorna ferruginea*	DD
第４次 2018:	アカツクシガモ	*Tadorna ferruginea*	DD
第４次 2017:	アカツクシガモ	*Tadorna ferruginea*	DD
第４次 2015:	アカツクシガモ	*Tadorna ferruginea*	DD
第４次:	アカツクシガモ	*Tadorna ferruginea*	DD
第３次:	アカツクシガモ	*Tadorna ferruginea*	DD
第２次:	アカツクシガモ	*Tadorna ferruginea*	DD
第１次:	アカツクシガモ	*Tadorna ferruginea*	R

参考文献

- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.

執筆者：　神山和夫（バードリサーチ）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
カモ目	カモ科
オシドリ	
Aix galericulata	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	○
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	

具体的理由

ガンカモ類の生息調査によると、最近 20 年では、個体数が 2.5～3 万羽で安定しており変化がない。山間部の水域にいるため生息地を見つけにくく、実際にはこれ以上の個体数がいると考えられる。

繁殖期についても、分布メッシュ数、比較可能な現地調査コースでの確認コース数ともに、増加していた。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	オシドリ	*Aix galericulata*	DD
第４次 2019:	オシドリ	*Aix galericulata*	DD
第４次 2018:	オシドリ	*Aix galericulata*	DD
第４次 2017:	オシドリ	*Aix galericulata*	DD
第４次 2015:	オシドリ	*Aix galericulata*	DD
第４次:	オシドリ	*Aix galericulata*	DD
第３次:	オシドリ	*Aix galericulata*	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 環境省自然環境局，ガンカモ類の生息調査．2023/09/25，https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京.

執筆者：　神山和夫（バードリサーチ）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ハト目	ハト科
シラコバト	
Streptopelia decaocto decaocto	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	○

具体的理由

シラコバトは江戸時代に日本に導入されたと考えられており、関東北部の集団は移入分布と考えられている。四国や九州等のその他の地域に関しては、日本鳥類目録改訂第 8 版における生息状況が Accidental Visitor および Irregular Visitor となっている。鳥類分科会における基本的事項では、日本鳥類目録改訂第 8 版における生息状況が Accidental Visitor もしくは Irregular Visitor の種は原則として迷鳥として取り扱い、評価対象としないこととなっている。鳥類分科会における議論の結果、本種は評価対象としないこととなった。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	シラコバト	*Streptopelia decaocto decaocto*	EN
第４次 2019:	シラコバト	*Streptopelia decaocto decaocto*	EN
第４次 2018:	シラコバト	*Streptopelia decaocto decaocto*	EN
第４次 2017:	シラコバト	*Streptopelia decaocto decaocto*	EN
第４次 2015:	シラコバト	*Streptopelia decaocto decaocto*	EN
第４次:	シラコバト	*Streptopelia decaocto decaocto*	EN
第３次:	シラコバト	*Streptopelia decaocto decaocto*	VU
第２次:	シラコバト	*Streptopelia decaocto decaocto*	VU
第１次:	シラコバト	*Streptopelia decaocto decaocto*	R

参考文献

- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.

執筆者：　西海功（国立科学博物館）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ツル目	ツル科
クロヅル	
Grus grus lilfordi	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	○

具体的理由

本種は、日本鳥類目録改訂第 8 版における生息状況が Accidental Visitor および Irregular Visitor となっている。鳥類分科会における基本的事項では、日本鳥類目録改訂第 8 版における生息状況が Accidental Visitor もしくは Irregular Visitor の種は原則として迷鳥として取り扱い、評価対象としないこととなっている。鳥類分科会における議論の結果、本種は評価対象としないこととなった。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	クロヅル	*Grus grus lilfordi*	DD
第４次 2019:	クロヅル	*Grus grus lilfordi*	DD
第４次 2018:	クロヅル	*Grus grus lilfordi*	DD
第４次 2017:	クロヅル	*Grus grus lilfordi*	DD
第４次 2015:	クロヅル	*Grus grus lilfordi*	DD
第４次:	クロヅル	*Grus grus lilfordi*	DD
第３次:	クロヅル	*Grus grus lilfordi*	DD
第２次:	クロヅル	*Grus grus lilfordi*	DD
第１次:	クロヅル	*Grus grus lilfordi*	R

参考文献

- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.

執筆者：　尾崎清明（公益財団法人山階鳥類研究所）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
チドリ目	シギ科
チシマシギ	
Calidris ptilocnemis quarta	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	○

具体的理由

鳥類分科会における基本的事項では、日本鳥類目録改訂第 8 版における生息状況が Accidental Visitor もしくは Irregular Visitor の種を迷鳥として取り扱い、評価対象としないこととなっている。鳥類分科会における議論の結果、本種は PV（Passage Visitor）または WV（Winter Visitor）として北海道東部で記録されているものの、散発的、偶発的な渡来が少数観察されているのみであり、日本が主要な繁殖地、中継地、越冬地ではないと考えられるため、第 5 次レッドリストでは評価対象としないこととなった。なお、IUCN による評価も低危険種である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	チシマシギ	*Calidris ptilocnemis quarta*	DD
第４次 2019:	チシマシギ	*Calidris ptilocnemis quarta*	DD
第４次 2018:	チシマシギ	*Calidris ptilocnemis quarta*	DD
第４次 2017:	チシマシギ	*Calidris ptilocnemis quarta*	DD
第４次 2015:	チシマシギ	*Calidris ptilocnemis kurilensis*	DD
第４次:	チシマシギ	*Calidris ptilocnemis kurilensis*	DD
第３次:	チシマシギ	*Calidris ptilocnemis kurilensis*	DD
第２次:	チシマシギ	*Calidris ptilocnemis kurilensis*	EN
第１次:	チシマシギ	*Calidris ptilocnemis*	R

参考文献

- IUCN 2023. The IUCN Red List of Threatened Species. Version 2022-2. <https://www.iucnredlist.org>
- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.

執筆者：　守屋年史（バードリサーチ）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
チドリ目	シギ科
シベリアオオハシシギ	
Limnodromus semipalmatus	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	○

具体的理由

本種は、日本鳥類目録改訂第 8 版における生息状況が Accidental Visitor および Irregular Visitor となっている。鳥類分科会における基本的事項では、日本鳥類目録改訂第 8 版における生息状況が Accidental Visitor もしくは Irregular Visitor の種は原則として迷鳥として取り扱い、評価対象としないこととなっている。鳥類分科会における議論の結果、本種は評価対象としないこととなった。

なお、本種は、日本では春秋の渡りの時期に稀に飛来し、全国の湿地や泥浜干潟、干拓地等で記録があるが、繁殖地と越冬地の位置関係からいずれも迷行した可能性が高く、日本は本種の主要な生息地にはなっていないと考えられる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	シベリアオオハシシギ	*Limnodromus semipalmatus*	DD
第４次 2019:	シベリアオオハシシギ	*Limnodromus semipalmatus*	DD
第４次 2018:	シベリアオオハシシギ	*Limnodromus semipalmatus*	DD
第４次 2017:	シベリアオオハシシギ	*Limnodromus semipalmatus*	DD
第４次 2015:	シベリアオオハシシギ	*Limnodromus semipalmatus*	DD
第４次:	シベリアオオハシシギ	*Limnodromus semipalmatus*	DD
第３次:	シベリアオオハシシギ	*Limnodromus semipalmatus*	DD
第２次:	シベリアオオハシシギ	*Limnodromus semipalmatus*	DD
第１次:	シベリアオオハシシギ	*Limnodromus semipalmatus*	V

参考文献

- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.

執筆者：　守屋年史（バードリサーチ）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ペリカン目	トキ科
クロトキ	
Threskiornis melanocephalus	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	○

具体的理由

本種は、日本鳥類目録改訂第 8 版における生息状況が Accidental Visitor および Irregular Visitor となっている。鳥類分科会における基本的事項では、日本鳥類目録改訂第 8 版における生息状況が Accidental Visitor もしくは Irregular Visitor の種は原則として迷鳥として取り扱い、評価対象としないこととなっている。鳥類分科会における議論の結果、本種は評価対象としないこととなった。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	クロトキ	*Threskiornis melanocephalus*	DD
第４次 2019:	クロトキ	*Threskiornis melanocephalus*	DD
第４次 2018:	クロトキ	*Threskiornis melanocephalus*	DD
第４次 2017:	クロトキ	*Threskiornis melanocephalus*	DD
第４次 2015:	クロトキ	*Threskiornis melanocephalus*	DD
第４次:	クロトキ	*Threskiornis melanocephalus*	DD
第３次:	クロトキ	*Threskiornis melanocephalus*	DD
第２次:	クロトキ	*Threskiornis melanocephalus*	DD
第１次:	クロトキ	*Threskiornis melanocephalus*	R

参考文献

- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.

執筆者：　尾崎清明（公益財団法人山階鳥類研究所）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ペリカン目	サギ科
カラシラサギ	
Egretta eulophotes	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	○

具体的理由

カラシラサギは、国内での繁殖記録は偶発的なものだけで、過去にも繁殖地域であった証拠はなく、大陸の繁殖地から越冬地の渡り経路から外れていて、日本では一部の少数の個体が渡り時に飛来するという程度である。

鳥類分科会における基本的事項では、日本鳥類目録改訂第 8 版における生息状況が Accidental Visitor もしくは Irregular Visitor の種を迷鳥として取り扱い、評価対象としないこととなっている。鳥類分科会における議論の結果、本種は宮城県において Casual Breeder とはなっているものの繁殖は偶発的なものであると考えられるため、第 5 次レッドリストでは評価対象としないこととなった。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	カラシラサギ	*Egretta eulophotes*	NT
第４次 2019:	カラシラサギ	*Egretta eulophotes*	NT
第４次 2018:	カラシラサギ	*Egretta eulophotes*	NT
第４次 2017:	カラシラサギ	*Egretta eulophotes*	NT
第４次 2015:	カラシラサギ	*Egretta eulophotes*	NT
第４次:	カラシラサギ	*Egretta eulophotes*	NT
第３次:	カラシラサギ	*Egretta eulophotes*	NT
第２次:	カラシラサギ	*Egretta eulophotes*	DD
第１次:	カラシラサギ	*Egretta eulophotes*	R

参考文献

- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．日本鳥学会，東京．506pp.

執筆者：　金井裕（公益財団法人日本野鳥の会）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
タカ目	ミサゴ科
ミサゴ	
Pandion haliaetus haliaetus	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	○
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	

具体的理由

繁殖期の分布について、全国鳥類繁殖分布調査および河川水辺の国勢調査において全国的に増加傾向があり、近年は鉄塔など人工構造物への営巣も増えている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ミサゴ	*Pandion haliaetus haliaetus*	NT
第４次 2019:	ミサゴ	*Pandion haliaetus haliaetus*	NT
第４次 2018:	ミサゴ	*Pandion haliaetus haliaetus*	NT
第４次 2017:	ミサゴ	*Pandion haliaetus haliaetus*	NT
第４次 2015:	ミサゴ	*Pandion haliaetus haliaetus*	NT
第４次:	ミサゴ	*Pandion haliaetus haliaetus*	NT
第３次:	ミサゴ	*Pandion haliaetus haliaetus*	NT
第２次:	ミサゴ	*Pandion haliaetus haliaetus*	NT
第１次:	ミサゴ	*Pandion haliaetus haliaetus*	V

参考文献

- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京.

執筆者：　金井裕（公益財団法人日本野鳥の会）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
スズメ目	サンショウクイ科
サンショウクイ	
Pericrocotus divaricatus divaricatus	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	○
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	

具体的理由

全国鳥類繁殖分布調査の結果から、分布は大きく拡大傾向にある。地域的にみても明確に減少している地域はない。ただし、リュウキュウサンショウクイとは分布が重複してきており、今後の両亜種（種）の関係については、注意が必要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	サンショウクイ	*Pericrocotus divaricatus divaricatus*	VU
第４次 2019:	サンショウクイ	*Pericrocotus divaricatus divaricatus*	VU
第４次 2018:	サンショウクイ	*Pericrocotus divaricatus divaricatus*	VU
第４次 2017:	サンショウクイ	*Pericrocotus divaricatus divaricatus*	VU
第４次 2015:	サンショウクイ	*Pericrocotus divaricatus divaricatus*	VU
第４次:	サンショウクイ	*Pericrocotus divaricatus divaricatus*	VU
第３次:	サンショウクイ	*Pericrocotus divaricatus divaricatus*	VU
第２次:	サンショウクイ	*Pericrocotus divaricatus divaricatus*	VU
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．506pp. 日本鳥学会，東京．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．176pp. 鳥類繁殖分布調査会，東京．

執筆者：　植田睦之（バードリサーチ）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
スズメ目	ヒタキ科
ウスアカヒゲ	
Luscinia komadori subrufus	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	○
④ その他	

具体的理由

日本鳥類目録改訂第 8 版では、ウスアカヒゲは種アカヒゲの新参異名とされている。そのため、ウスアカヒゲは独立亜種とすることが妥当ではないと考えられることから、カテゴリー外とする。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ウスアカヒゲ	*Luscinia komadori subrufus*	EX
第４次 2019:	ウスアカヒゲ	*Luscinia komadori subrufus*	EX
第４次 2018:	ウスアカヒゲ	*Luscinia komadori subrufus*	EX
第４次 2017:	ウスアカヒゲ	*Luscinia komadori subrufus*	DD
第４次 2015:	ウスアカヒゲ	*Erithacus komadori subrufus*	DD
第４次:	ウスアカヒゲ	*Erithacus komadori subrufus*	DD
第３次:	ウスアカヒゲ	*Erithacus komadori subrufus*	DD
第２次:	ウスアカヒゲ	*Erithacus komadori subrufus*	CR
第１次:	ウスアカヒゲ	*Erithacus komadori subrufus*	V

参考文献

- 日本鳥学会，2024．日本鳥類目録改訂第 8 版．506pp. 日本鳥学会，東京．

執筆者：　西海功（国立科学博物館）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
カモ目	カモ科
東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群	
Histrionicus histrionicu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	○

具体的理由

本種の東北地方以北の繁殖個体群について、孤立しており、絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断するにあたっての情報が現時点でみられないことから、LP の基準①に該当しない。また、地域個体群としての遺伝的な独立性等が示された学術文献は現時点で存在しないことから、LP の基準②に該当しない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群	*Histrionicus histrionicu*	LP
第４次 2019:	東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群	*Histrionicus histrionicu*	LP
第４次 2018:	東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群	*Histrionicus histrionicu*	LP
第４次 2017:	東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群	*Histrionicus histrionicu*	LP
第４次 2015:	東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群	*Histrionicus histrionicus pacificus*	LP
第４次:	東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群	*Histrionicus histrionicus pacificus*	LP
第３次:	東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群	*Histrionicus histrionicus pacificus*	LP
第２次:	東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群	*Histrionicus histrionicus pacificus*	LP
第１次:	シノリガモ	*Histrionicus histrionicus*	R

参考文献

- 文献なし

執筆者：　鳥類分科会

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　鳥類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
カイツブリ目	カイツブリ科
青森県のカンムリカイツブリ繁殖個体群	
Podiceps cristatus cristatus	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	○

具体的理由

分布が単一の都道府県に収まる地域個体群であるため、LP の基準①に該当しない。また、地域個体群としての遺伝的な独立性等が示された学術文献は現時点で存在しないことから、LP の基準②に該当しない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	青森県のカンムリカイツブリ繁殖個体群	*Podiceps cristatus cristatus*	LP
第４次 2019:	青森県のカンムリカイツブリ繁殖個体群	*Podiceps cristatus cristatus*	LP
第４次 2018:	青森県のカンムリカイツブリ繁殖個体群	*Podiceps cristatus cristatus*	LP
第４次 2017:	青森県のカンムリカイツブリ繁殖個体群	*Podiceps cristatus cristatus*	LP
第４次 2015:	青森県のカンムリカイツブリ繁殖個体群	*Podiceps cristatus cristatus*	LP
第４次:	青森県のカンムリカイツブリ繁殖個体群	*Podiceps cristatus cristatus*	LP
第３次:	青森県のカンムリカイツブリ繁殖個体群	*Podiceps cristatus cristatus*	LP
第２次:	青森県のカンムリカイツブリ繁殖個体群	*Podiceps cristatus cristatus*	LP
第１次:	カンムリカイツブリ	*Podiceps cristatus cristatus*	V

参考文献

- 文献なし

執筆者：　鳥類分科会

公表年月：2026 年 3 月

■学名索引

Accipiter gentilis fujiyamae 741
Accipiter gularis iwasakii 849
Accipiter nisus nisosimilis 736
Acrocephalus bistrigiceps 768
Aegolius funereus sibiricus 854
Aix galericulata 889
Anser albifrons albifrons 886
Anser caerulescens caerulescens 405
Anser cygnoid 60
Anser erythropus 183
Anser fabalis middendorffii 638
Anser fabalis serrirostris 643
Anthus hodgsoni hodgsoni 786
Antigone vipio 433
Apalopteron familiare familiare 43
Apalopteron familiare hahasima 617
Apus pacificus kurodae 424
Apus pacificus pacificus 677
Aquila chrysaetos japonica 291
Ardea intermedia intermedia 730
Arenaria interpres interpres 698
Aythya baeri 64
Aythya ferina 648
Aythya fuligula 410
Aythya marila nearctica 653
Botaurus stellaris stellaris 133
Brachyramphus perdix 835
Branta bernicla nigricans 394
Branta hutchinsii leucopareia 400
Bubo bubo borissowi 154
Bubulcus ibis coromandus 278
Butastur indicus 584
Buteo japonicus oshiroi 23
Buteo japonicus toyoshimai 302
Butorides striata amurensis 560
Calidris alpina 465
Calidris ptilocnemis quarta 893
Calidris pygmaea 80
Calidris ruficollis 703
Caprimulgus jotaka jotaka 670
Carpodacus ferreorostris 56
Cepphus carbo 235
Chalcophaps indica yamashinai 806
Charadrius alexandrinus nihonensis 448
Chloris kittlitzi 171
Cichlopasser terrestris 52
Ciconia boyciana 256
Circus spilonotus 297
Columba janthina janthina 681
Columba janthina nitens 68
Columba janthina stejnegeri 195
Columba jouyi 11
Columba versicolor 6
Coturnicops exquisitus 199
Coturnix japonica 414
Cyanopica cyanus japonica 759
Dendrocopos leucotos owstoni 596
Dendrocopos noguchii 323
Dryocopus javensis richardsi 31
Dryocopus martius martius 748
Egretta eulophotes 898
Egretta garzetta garzetta 565
Emberiza aureola ornata 177
Emberiza rustica latifascia 383
Emberiza sulphurata 791
Emberiza yessoensis yessoensis 388
Eurystomus orientalis cyanocollis 314
Falco peregrinus furuitii 35
Falco peregrinus japonensis 753
Ficedula owstoni 631
Fratercula cirrhata 106
Gallinago hardwickii 713
Gallinula chloropus chloropus 428
Glareola maldivarum 476

Gorsachius goisagi 724
Gorsachius melanolophus melanolophus 549
Grus grus lilfordi 892
Grus japonensis 692
Grus monacha 438
Haliaeetus albicilla albicilla 578
Haliaeetus pelagicus 572
Himantopus himantopus 819
Hirundapus caudacutus caudacutus 419
Histrionicus histrionicus 903
Horornis diphone restrictus 352
Hydrobates castro 111
Hydrobates leucorhous leucorhous 246
Hydrobates matsudairae 524
Hydrobates monorhis 518
Hydrobates tristrami 251
Hypotaenidia okinawae 74
Hypsipetes amaurotis borodinonis 764
Hypsipetes amaurotis magnirostris 603
Ixobrychus eurhythmus 138
Ixobrychus sinensis sinensis 839
Ketupa blakistoni blakistoni 307
Lagopus muta japonica 189
Lanius cristatus superciliosus 159
Lanius tigrinus 331
Larus crassirostris 486
Larus schistisagus 218
Larvivora akahige tanensis 622
Larvivora komadori 875
Larvivora namiyei 626
Limnodromus semipalmatus 895
Limosa lapponica baueri 459
Locustella lanceolata hendersonii 613
Locustella pleskei 608
Locustella pryeri pryeri 367
Luscinia komadori subrufus 902
Megaceryle lugubris lugubris 590
Nipponia nippon 266
Nisaetus nipalensis orientalis 284
Numenius madagascariensis 454
Numenius minutus 208
Nycticorax caledonicus crassirostris 19
Nycticorax nycticorax nycticorax 554
Otus elegans interpositus 148
Otus semitorques pryeri 859
Pandion haliaetus haliaetus 900
Pericrocotus divaricatus divaricatus 901
Pernis ptilorhynchus orientalis 844
Phaethon rubricauda melanorhynchos 507
Phoebastria albatrus 512
Phoebastria immutabilis 241
Phoebastria nigripes 719
Phylloscopus examinandus 362
Phylloscopus ijimae 357
Picoides tridactylus inouyei 864
Pinicola enucleator sakhalinensis 881
Pitta nympha 869
Platalea leucorodia leucorodia 273
Platalea minor 544
Pluvialis fulva 443
Podiceps cristatus cristatus 904
Poliolimnas cinereus brevipes 15
Pterodroma hypoleuca 529
Puffinus bannermani 122
Puffinus bryani 116
Rallina eurizonoides sepiaria 204
Rostratula benghalensis 829
Saundersilarus saundersi 481
Scolopax mira 708
Sibirionetta formosa 801
Sittiparus olivaceus 348
Sittiparus varius namiyei 338
Sittiparus varius orii 39
Sittiparus varius owstoni 343
Spilornis cheela perplexus 143
Sterna dougallii bangsi 491

Sterna sumatrana sumatrana 496
Sternula albifrons sinensis 229
Streptopelia decaocto decaocto 891
Sula dactylatra personata 534
Sula sula rubripes 539
Synthliboramphus antiquus antiquus 100
Synthliboramphus wumizusume 501
Syrmaticus soemmerringii ijimae 666
Syrmaticus soemmerringii soemmerringii 662
Tachybaptus ruficollis kunikyonis 815
Tadorna cristata 2
Tadorna ferruginea 888
Tadorna tadorna 797
Tetrastes bonasia vicinitas 658
Thalasseus bergii cristatus 223
Threskiornis melanocephalus 897
Todiramphus miyakoensis 27
Tringa erythropus 213
Tringa glareola 471
Tringa guttifer 90
Tringa totanus ussuriensis 85
Troglodytes troglodytes mosukei 372
Troglodytes troglodytes orii 48
Turdus celaenops 376
Uria aalge inornata 95
Urile pelagicus pelagicus 261
Urile urile 128
Vanellus cinereus 824
Yungipicus kizuki orii 319
Zapornia fusca erythrothorax 686
Zapornia pusilla pusilla 810
Zoothera dauma iriomotensis 167
Zoothera dauma major 781
Zosterops japonicus daitoensis 777

■和名索引

アオツラカツオドリ 534
アカアシカツオドリ 539
アカアシシギ 85
アカオネッタイチョウ 507
アカガシラカラスバト 68
アカコッコ 376
アカツクシガモ 888
アカハジロ 64
アカヒゲ 875
アカモズ 159
アカヤマドリ 662
アホウドリ 512
アマサギ 278
アマツバメ 424
アマミヤマシギ 708
イイジマムシクイ 357
イヌワシ 291
ウスアカヒゲ 902
ウズラ 414
ウチヤマセンニュウ 608
ウミガラス 95
ウミスズメ 100
ウミネコ 486
エゾライチョウ 658
エトピリカ 106
エリグロアジサシ 496
オオアジサシ 223
オオクイナ 204
オオジシギ 713
オオセグロカモメ 218
オオセッカ 367
オオソリハシシギ 459
オオタカ 741
オオトラツグミ 781
オオヒシクイ 638
オオムシクイ 362
オオヨシゴイ 138
オオワシ 572
オガサワラガビチョウ 52
オガサワラカラスバト 6
オガサワラカワラヒワ 171
オガサワラノスリ 302
オガサワラヒメミズナギドリ 116
オガサワラマシコ 56
オガサワラミズナギドリ 122
オシドリ 889
オジロワシ 578
オナガ 759
オリイコゲラ 319
オリイヤマガラ 348
オーストンウミツバメ 251
オーストンオオアカゲラ 596
オーストンヤマガラ 343
カシラダカ 383
カラシラサギ 898
カラスバト 681
カラフトアオアシシギ 90
カリガネ 183
カンムリウミスズメ 501
青森県のカンムリカイツブリ繁殖個体群 904
カンムリツクシガモ 2
カンムリワシ 143
キタアマツバメ 677
キタタキ 31
キョウジョシギ 698
キンクロハジロ 410
ギンザンマシコ 881
キンバト 806
キンメフクロウ 854
クマゲラ 748
クマタカ 284
クロアシアホウドリ 719
クロウミツバメ 524
クロコシジロウミツバメ 111

クロツラヘラサギ 544
クロヅル 892
クロトキ 897
ケイマフリ 235
ケリ 824
コアジサシ 229
コアホウドリ 241
ゴイサギ 554
コウノトリ 256
コクガン 394
コサギ 565
コシジロウミツバメ 246
コシジロヤマドリ 666
コシャクシギ 208
コジュリン 388
コトラツグミ 167
コヨシキリ 768
サカツラガン 60
ササゴイ 560
サシバ 584
サンカノゴイ 133
サンショウクイ 901
シジュウカラガン 400
東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群 903
シベリアオオハシシギ 895
シマアオジ 177
シマクイナ 199
シマハヤブサ 35
シマフクロウ 307
シラコバト 891
シロチドリ 448
シロハラミズナギドリ 529
ズグロカモメ 481
ズグロミゾゴイ 549
スズガモ 653
セイタカシギ 819
ダイトウウグイス 352
ダイトウカイツブリ 815
ダイトウコノハズク 148
ダイトウノスリ 23
ダイトウヒヨドリ 764
ダイトウミソサザイ 48
ダイトウメジロ 777
ダイトウヤマガラ 39
タカブシギ 471
タネコマドリ 622
タマシギ 829
タンチョウ 692
チゴモズ 331
チシマウガラス 128
チシマシギ 893
チュウサギ 730
チュウヒ 297
ツクシガモ 797
ツバメチドリ 476
ツルシギ 213
トウネン 703
トキ 266
トモエガモ 801
ナベヅル 438
ナミエヤマガラ 338
ノグチゲラ 323
ノジコ 791
ハイタカ 736
ハクガン 405
ハシブトゴイ 19
ハシブトヒヨドリ 603
ハチクマ 844
ハハジマメグロ 617
ハマシギ 465
ハヤブサ 753
ハリオアマツバメ 419
バン 428
ヒクイナ 686
ヒシクイ 643
ヒメウ 261

ヒメクイナ 810
ヒメクロウミツバメ 518
ビンズイ 786
ブッポウソウ 314
ベニアジサシ 491
ヘラサギ 273
ヘラシギ 80
ホウロクシギ 454
ホシハジロ 648
ホントウアカヒゲ 626
マガン 886
マキノセンニュウ 613
マダラウミスズメ 835
マナヅル 433
マミジロクイナ 15
ミサゴ 900
ミゾゴイ 724
ミヤコショウビン 27
ミユビゲラ 864
ムコジマメグロ 43
ムナグロ 443
モスケミソサザイ 372
ヤイロチョウ 869
ヤマセミ 590
ヤンバルクイナ 74
ヨシゴイ 839
ヨタカ 670
ヨナグニカラスバト 195
ライチョウ 189
リュウキュウオオコノハズク 859
リュウキュウカラスバト 11
リュウキュウキビタキ 631
リュウキュウツミ 849
ワシミミズク 154

The 5th Red Databook Birds: Threatened wildlife of Japan

Edited by
Ministry of the Environment, Japan
1-2-2 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo
100-8975, JAPAN

第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　鳥類

2026 年 3 月　初版　発行

編集／環境省
〒100-8975　東京都千代田区霞が関 1-2-2
電話　03-3581-3351（代表）

The 5th Red Databook Birds: Threatened wildlife of Japan